

fate/zero  $x^2$

ビナー語検定五級

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

それは本来ならば決して交錯しない世界線であった

それは本来ならば決して発生しない存在であった

予測不能の事象が起こり合わさった時

0×0∥0の図式は当て嵌まるのだろうか

# 目次

プロローグ：X	1
FACILITY X	15
エージェント	34
名前	57
劇伴	79
深紅	99
平安	129
吝嗇	158
斗争	178
答申	214
玉響	243
交響	267
Tの由来	293
Tの導出	319
波風	352
談合	385
談合：幕間	420
暗影	442
暗影：幕話	466
ハエ・ペインティング	482
カーニバル 前編	504
カーニバル 後編	534
神様の愛で満ち溢れる世界の下で※	556
崩壊の鐘	584

反響の内と外郭  
愛の檻

649 614

## プロローグ：X

プロローグ：X

「――告げる」

それは、一つの奇妙な光景だった。

肌は土気色で、目は落ち窪み。顔の左半身は引き摺っており出来の悪い

リビングデッドのような顔つきの男が輝く魔法陣に手を翳し呪文を唱える。

魔法陣の中心には黒く考古学的にも非常に価値あるものと連想される

剣が置いてある。それに目を注ぎ、男は体から発生する本来常人なら

ば  
気絶しても不思議でない激痛を抑え込むように右手で胸を抑えつ

つ  
途絶える事なく言葉を紡ぎ続ける。心臓部分を抑えるパーカーの  
ポケットが擦れ紙片が潰れるような音が生じた。

「――されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし」

「汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖を手繰る者――」

男の背後には、唇を吊り上げて物見雄山でもしてるかのように

一節ごとに肩を大きく上下する瀕死の彼の所業を眺める老人が居  
る。

周囲の状況も異常であった。いや、空間そのものが。

薄暗く、光源も蠟燭などの頼りないものの中で普通の人間がもし  
この場にいれば（いない事は僥倖であるが）ソレに気づいた時に  
悲鳴をあげたに違いない。闇の中で蠢く、その無数の蟲の群れを  
目にし。

ただの昆虫、と言うわけでない。釈迦の悟りを妨げるために降臨し  
た

天魔を連想する異形の群れ、群れが天井に床。彼と老人を囲むようにして

埃の匂いと様々な人の腐臭や異臭に満ちる地下を占領している。

それでも男と老人は、この異常の中で平静を保っていた。いや、正確に言えば

一人はこの悪夢めいた空間の創造主であり、もう一人はある使命と想いの為に

生と死が隣り合わせながらも、続ける事を余儀なくされていた。

彼の名は間桐 雁夜

老人の名は間桐 臓硯

聖杯戦争 万能の願望機。根源にすら至る万物を集約させた魔法の結晶の一つ。

それを英霊と言われる七つの英雄と呼ばれし存在

——サーヴァントを呼び込む為に、この二人は地下の空間に存在していた。

(必ず……呼び寄せて みせる)

(この戦争にて……桜ちゃんを……救うために)

(葵さんを……しあわせに するために)

(時臣を……臓硯を……)

「ウオオオオツ」

喉元までせり上がる、刻印蟲と呼ばれしサーヴァントを使役する為に僅かにでも

魔力を高める為に命を犠牲とする蟲が動き回る事によって生じる臓器の出血が

気管を覆いそうになるのを歯を食いしばり只の人の気合だけで耐える。

「汝三大の言霊を纏う七天」

「抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

瞬間、魔法陣は淡く発光し地下の空間に光の奔流が産まれた。

凄まじい突風が天井に張り付く蟲の幾つかを地面へと風に舞いさ

せながら

落下させ、壁に付着するものも地面の蟲の山へと同化する。

「がっ……はっ………っ…!!」

瞬間、雁夜は膝をついた。

魂を引き抜かれるような脱力感。心臓に直接触れられてるような  
圧迫 痛みと

引き換えに体の中に培っていた熱とも言える魔力が急速に吸われ  
ていく感覚。

聖杯戦争と言う、つい一年ほどまえは魔術のまの字にも縁のない彼  
には

知る事など出来ないが、狂戦士を喚ぶのと引き換えに自分自身の命  
の灯が

消え落ちる錯覚を体験していた。いや、一歩間違えればその錯覚が  
実現となる。

(たお……れて たまる かつ)

(俺は………こんな所では 終われ ない

約束………したんだ 桜ちゃん を……)

——ヴウン

(——え?)

その時、雁夜は一瞬奇妙な感覚を覚えた。

この丸一年、自分は魔術師の体へと造りかえる為に昼も夜も問わず  
常に拷問めいた(正にその通りだが) 激痛を日々受けていた。

だが、今の一瞬は何だろうか?

彼は気の所為かと思ったが、確かに実感があつたのだ。

全て体から消え去ったとも思えた自分の魔力(生命力)が幾らか  
体の中に舞い戻る……体が楽になるような新鮮な体験をだ。

「……………あ?」

緩慢ながらも体は動かせる。激痛は激痛ながらも修練(拷問)を受  
けた一年

その一年で一歩間違えれば死ぬ状態に比べれば未だ幾らか動ける

状態だ。

他者から見れば大差なく瀕死である事は変わらないが、雁夜にとっては

0と1ほどに大きな差はある状態だった。

(いや、俺の体よりも。サーヴァントは？ 喚ぶ事は出来たのか?)

そう、肝心な事は目前にある。

自分が今まで受けてきたモノの対価は、今まさに目の前の結果といえる。

聖杯戦争、その遊戯盤に乗るのにはサーヴァントは必要不可欠。

膝をつき頭から床に倒れかけていた上体を、渾身の思いで埃と粘膜の付着した

地面に触れている手の平と頭に力を込めて前方に目を向ける。

「――なに」

その光景を目にした瞬間、確かに体と意識は一瞬停止していた。

父……臓硯から召喚にと渡された触媒は中世と思える長剣だった。

それを

使い召喚を行えば、恐らくは一騎当千の兵達すら圧倒すると思える

無骨な

剣士が現れるだろう。そう、予感させるものがあつたのだ。

だが、それならば自分が今 目にしてるものはなんだ???

「じょ……せこ?」

自分が目にしてるものが信じられなかった。それは、半ば倒れ込んでるから

目測にしかならないが、自分よりも身長は低いだろう女性の背だ。

白衣らしきものを着ており、うなじを隠し背中にかかるほどには髪が長い。

そのサーヴァント? は、背を向けて項垂れていたが。今ようやく起動するように

頭を上げると、周囲を見渡し始めた。

「……T-02-43の部屋か?」

いや、似てるが異なる」



何かを呟いてるが、その言葉の内容は理解できない。だが、声を耳にして

異性であると言う認識は一層確信へと至った。自分に気づいてるのか

それとも意識を別のほうに寄ってるのか知れないが何か行動を起こさないと

いけないと思った自分は立ち上がろうとして失敗して膝をついた。カツツ……。

「――」

その物音に無意識に振り向いた顔と雁夜の目はぶつかりあった。

やはり、それは女性だった。黒い髪の毛をポニーテールのようにして括っている。

白衣の下は、どうやら既製品らしいスーツらしきものを身に着けている。

雁夜は自分が目になっているものが何なのか困惑が脳に芽生え始めて来た。

その彼女の姿は、どう見ても中世の騎士などと言われる格好でもないし

戦場で活躍した武人などとは言えない。

何処かの臨床工学技士か、オフィスビルで活動してる研究者と言われたほうが

余程納得ができる姿恰好の人物だ。

既に魔法陣の光は薄れており数秒も経たずに消え失せる事が理解出来る。

そして、これも不思議だが。召喚の触媒として用意した剣は朝露のように

何処にもその痕跡が残っていなかった……これが召喚による魔術の影響なのだろうか？

女性は、しげしげと自分を見下ろす。その瞳は透き通り それでいて

感情の色を見せない。まるで、心の中まで見通されるような気がし

た。

視線を受け止めた未知なる女は、雁夜の異様な状態や変質している顔にも

特に反応した様子なく、使い古した形の革靴を床に反響させ近づいた。

「……0—02—74—1の進行体？」

いや、それにしても様子も異なる……亜種 変異体の可能性も微存」

僅かに、女性は眉毛を片方だけ上げて雁夜がまた理解出来ない発言を行った。

近くで見て、女性の容姿は極めて美しいと表現するのは難しいが醜いという

造形でないことも解った。平均的な女性の美しさを五段階で評価するとすれば

雁夜から見て、この女性は四の真ん中という形だ。朗らかに笑えば更に上がるだろう。

だが、全く表情筋を動かさず冷淡な気配が其の数字を幾らか下げて評価を

僅かに斜め下にもしている。

このように馬鹿げた考えも浮かべないと、多大に疲弊して焼けきれそうな

衰弱しきった精神が途切れそうな現状だ。だが現実から逃避しても状況が良くは

なりはしない事も自分自身が理解出来ている。

明らかに何か気に障るか機嫌を損ねたような反応が見えた為に雁夜は

自分が何か知らない内に彼女に粗相したかと焦りが浮かびつつ口を開く。

「あつ……その、君は……サーヴァント なんだよな？」

「サーバント？ G n u t t e i l l a ?

……いや、セルヴァンの事を指してるのか。

行動や声質的に、錯乱による副次的な4大症例には該当していない。

ふむ、情報が求められるな」

雁夜は混乱した。狂戦士と言うクラスは前もって臓硯から受けた知識により

意思疎通が困難か不可能である事は耳にしていた。

だが、今のところコレに関しては話が通じていないと言うよりも何か

根本的な部分が抜け落ちており、会話がなされてないと思える。一人で

その女性は何かに得心を浮かべ、明後日の方向を向いて呟き続ける。

「カカカツ」

どうこの次に行動するべきか？ そう悩み始めた思考を切り裂くのは

馴染み深く、それでいて嫌悪感が胸の底から滲みでる短い笑い声だ。

麻痺する半身を動かして首を更に横に向け、その人物の名を唱える。

「臓硯……」

「どうやら召喚に失敗したようじゃのう 雁夜……やはり貴様程度の落伍者では

到底望むものも満足に得る事が出来ぬ事は予期出来ていた事じゃわい」

ニヤニヤと笑いつつ自分を乏しめる言葉をつらつらと紡ぐ老人の罵倒を受けつつ

体の中に蠢く蟲たちと異なる沸々とした怒りが全身を駆け巡り、目元に力を込める。

この戦争の諸悪の根源と言えば、一人を除けば間違いなくこいつが原因なのだ！

想い人の娘を蟲蔵へと放り込み、純潔を奪い、延々と肉体を蝕めて  
阿鼻叫喚の

彼女が破滅と崩御に至るのを楽しむ悪魔！

自分自身が、もし指を一つ振れば輝く光で無数の蟲すら焼き尽くす  
力があればと

何度夢想した事だろう！ だが、そんな事が出来ない……この不死  
の化け物の思惑に

踊らされ聖杯を命がけで得る。それしか方法は残されてないのだ  
から。

——ザワツ

(……!?)

瞬間、体から放熱するように浮かんでいた怒りが消沈した。

向けていた視線の怪物による畏怖と恐怖ではない。もっと大きな  
怒りを背後から感じたからだ。

「……バーサー……」

クラス名を唱えようとした口は自然と噤んでしまった。

白衣を纏ったその女性は……先ほどまでと同じく平静を保った表  
情を浮かべており

無表情だ。だが、雁夜には感じ取れた。

肉薄する程の距離から感じとれる気配は、先程まで自分と短いやり  
取りをした時のような

静かな空気は拭い去られており、その体から凍えるような『ナニカ』  
が発せられていた。

透き通るような瞳は、ただ一直線に、立ち竦む彼を追い越してソレ  
を見つめてる。

雁夜は瞬間悟った。この女性は……臓硯の『存在』に対し『激怒』を  
浮かべてる と……。

その気配は数秒ほどで無くなったものの、その感情は消え失せてな  
いと不思議と知れた。

真つすぐ向けられた視線は外されて徐々に下方へと降りてき、平坦  
な声が発せられる。

「……貴方、いや……あー、Mr. ……名前は？」

「あ、お、俺？ ……かりや 雁夜、だ」

「そうか、雁夜」

「一つだけ質問させてくれ」

まだ名も聞けてない女性は、肩に僅かにかかる髪を払いつつ簡潔に告げる。

「——アレは『鎮圧』していい『アブノーマリテイ』だな？」

女性は、そう淀みなく聞いた。透明なガラスのような瞳で雁夜を射貫きながら。

まず、何も自分は理解出来ていない。

鎮圧と言う言葉は何を示しているのかも。アブノーマリテイと言う単語に関しても

全く以て検討はつけなかった。

だけど……。

「ああ」

「ああ……やってくれ！」

自然と、肯定の声は出されていた。

この人に任せていいと、自然と何か信頼感のような感情がついで出ていた。

間桐 臓硯は嘲笑を顔面に貼り付けつつ羽がもげたアリか蠅が必死に地面で這いずり回る

のを楽しむ無邪気な子供のように口元を綻ばせて事態を見守っていた。

間桐 雁夜は贄だ。この聖杯戦争に隠された大きな秘密を握っている老獪にとって

今代の聖杯戦争は負けが決まっている出来レースとも言って良い。

故に、彼は今回の戦争に

関して表から手出しをする気は毛頭なかった。それ故に、雁夜が遠坂の娘を開放する為に

今回の大行事に馳せ参じる旨を聞いた時は、恥知らずなどと言う感情と態度を出しつつも

良い玩具が転がり出て来たと言う愉快さもあつたのが真実であつた。

（愚かな子よのお、雁夜。昔から貴様はそうじゃったわい

禅城の子と引き合わせ、恋慕を芽生えさせても我が間桐の魔術に染める事が忌避だのと

何だのと理屈をつけて遠坂の者にむぎむぎと奪われる小心者よ。

間桐の外法に手を汚させたくない？ ……違うじやろう、雁夜よ。

お主は、ただただ愛しい者が自分の者になりえるかどうかの自信がなかった。

好きとの言葉に対し拒絶される事を恐れた、それが真実よ……。

お主は予想できえる絶望に対し、体よく間桐の魔術を言い訳につかつただけの卑怯者じゃ）

召喚の祝詞を、血反吐を地面に撒きながら宣言する息子の背中を見つつ臓硯は彼の

本性を自論しながらも、どのような英霊が出るかと待ち受けていた。

持ち込んだのは彼の円卓の騎士由来の剣。小枝すらも名剣に遜色なく振るつた逸話

を齧つていれば英霊として使役すれば大きな戦力になる。

例え呼び込める事が適わずも、触媒が作用すれば其の者に縁深い存在が招かれる

期待が出来る。天運あれば最優の王が来るだろうし、例え運が悪くとも円卓の精鋭

のいずれかが現れる。愚息への手向けとしては余りある贈り物だつたが、血縁ある

以上は例え小憎らしくも臓硯は歪んだ好意を持ち合わせていた。

尤も赤子の時から観察した限り、彼がその英霊を最大限に使役出来るとは殆ど

考えてもいない。精々、暴れ馬に振り回される様子を遠くから愉しませて貰うのが

一番の目的でないと言えば嘘になる。

自分自身が攻撃される可能性も考えてないわけでない。何せ100より先は考えるのが

億劫なために止めたが、一年の月日以上には蟲を扱い痛めつけて来た子だ。

魔術では自身に肌一つ傷をつけぬ事は承知だが、サーヴァントをけしかけない保証もない。

故に、保険も万全であった。この肉塊に、既に『心臓』はない……。魔法陣から放たれた眩い発光には、操っている体とは言え構成しているものがモノゆえに

流星に一瞬硬直はする。閉じた瞼である部分を開くと、半身を下げた息子を通して

サーヴァントを見る事が出来た。その姿形を見て更に口は笑う形へと至る。

何とも細小な存在よ、それが貴様の一年の死力の結果か。

(カカツ、流星は悪いほうに期待を裏切ぬ不肖の息子よ。

ろくに触媒を介したサーヴァントを喚び込む事もできなかったようじゃな。

……しかし、奇妙じゃな。

近代の姿成りをしているが、あのような恰好で戦かソレに関連する偉業をなした

人物と言うのは聞いた事がない。もつとも、歪んで呼ばれたのならば、どのような

姿成りであったとしても、可笑しくないわけじゃが)

臍硯は雁夜ほど状況に対して楽観視や、油断もしていなかった。

此処が自身の領域であるとは言え、聖杯から喚ばれたサーヴァント。

華奢で剣や槍などの武具を振るう存在には全く以て見えぬが、奇天烈な術なり宝具を

有する可能性は多大に存在する事は理解している。

故に、白衣のポケットに手を差し込みつつ堂々と近寄る彼女に対しても晒いながら

迎撃の用意だけはとれていた。周囲を這う蟲達も、少しでも何か攻撃を仕掛けるならば

雁夜ごと蟲の餌食にするつもりであった。

「カツカツカツ、バーサーカーのサーヴァントよ。儂に何ぞ含む事があるようじゃな？」

良い、何かあるならば言うてみい。この間桐の当主に対してのお」  
バーサーカーに苦言を申す程の知性があればの話じゃが、と言う擲揄混じりの

冷笑と共に、杖で地面を鳴らす老人の姿をした異形に白衣の女性は何も言わず

じつと見据える。その瞳には怒りも憎悪もなく、ただ在るがままを見つめる瞳だった。

その視線に晒されると臓硯は無いはずの臓腑を触られるような抵抗感が襲った。

「つ……なんじゃ、黙りおつて。言いたい事があるなら」

「——成程、理解した。お前はT—04—50だ

構成する群体に違いはあろうとも、お前がT—04—50の亜種である

存在を否定する事は何人たりとも違える事は出来ない」

「……は？」

淡々と放たれた発言に対し、呆けの声が出る。

バーサーカーは狂化を受ける故に、まともな発言がなされる事はない。

支離滅裂な内容を生じると言う意味であれば、このサーヴァントは正しくバーサーカーなのだろうが……。

「——だが、僥倖だな。」



お前はT—04—50だが、本物のT—04—50が消滅出来ないのに対し……

そちらは、核一体のみ確実に破壊すれば復活は出来なさそうだ」

「なっつ……?!?!」

(見抜いた、と言うのか?!? この僅か十数秒でっ)

慢心していた訳ではない。決して、サーヴァントを過少評価していた

訳でないと言い切れる。

だが、自身のこの偽装は。間桐500年の月日と血肉を注いだ魔術の

結晶体とも言える蟲の構成はサーヴァントに比肩する魔術師であろうとも

一目で看破出来ない自信を兼ね備えていたのだ。

それを このサーヴァントは 瞬く間に……!!

警報が頭と言える蟲が鳴らす。いや、虫の知らせと言って良い凶兆が全体に渡っていく。

臓硯は魔術師としての勘に従い、全ての蟲に対して強襲の命令を発そうとした。

だが、遅かった。遅すぎた。

女性は片腕を水平に掲げると、ただソレが自分の成す事だとばかりに周囲の齒を

打ち鳴らす異形の群れたちの敵意に構う事なく詠唱した。

「First Trumpet (非常事態レベル)」

「F—01—02

Scorched Girl (マッチガール)」

「——恐怖に直面し 未来を造りあげよ」

「——Lobotomy Corporat

ion」



夢を 見ていた。

目を開けて、映し出される群像と周囲の映像を見て夢だと理解出来た。

このような部屋を、俺は知らない。

——おはようございます 管理人 今日良い一日を過ごせるように

私がサポートします。私は■■■の■■■です。

背もたれにかかる馴染みある椅子の背。身じろぎすると同時に重心が体ごと

軽く移動した事から、キャスター付きの椅子に座つてると理解する。

耳を打つ声は、今まで耳にした事のない音声だった。

——貴方の目に映るウサギロボが見えますね？ そうです、その

アブノーマリティの收容ルームへとエージェントを向かわせて下さい。

複数の画面が混在していた。その一つの画面に映る、ウサギなのかダルマなのか

良く分からない物体が佇んでいる。ソレに対して音声の指示するがままに

自分は何時の間にか置いてあった小型マイクに対して命令を下していた。

画面の中で人が動く 食事 清掃 etc……

一瞬、砂嵐らしきものが産みでて、二頭身のサウスポークを思わせる人々が

泡をくって右往左往する最中に、そのウサギロボと呼ばれる存在は收容されている

場所から移動していた。鎮圧の指示を音声の言われるがままに下す。

ロボットは、複数の画面の中の人達に叩かれると立ち位置を崩さず

に姿勢を

真逆へと倒立した。不気味な赤い染みを地面に残しながら。

——よくできましたね 管理人 初めてにしては上出来です。

この調子で、アブノーマリティからエネルギーを収集していきましよう。

大丈夫です。貴方ならきつと出来ますよ

ふと、その音声は機械的なものから何時しか肉声に変わっていると気づいた。

首を横に向ける。

空色 長い髪 白い肌……

黒い髪 透き通る瞳……

……夢を見ていた。

「……■■■■主任 彼を異動させる事を考え直してくれませんか？」

はい、わかっています。心神喪失の症状を無くさない限りは今後の業務に

支障をきたす事は。けど、M s. ■■■■を事故で亡くしたばかりなんですよっ」

「ええ、お願いします。もう少し……もう少しだけ休養とメンタルケアを。」

アレ等から抽出して作られたエンケファリンの効力に対して疑ってはいません。

ですが、副作用が例え無いとしても。人の自然治癒と古典的な治療方法は

歴史学から顧みても、その信頼性は崩されないと考えています」

二人の女性が見えた。一人は、何処か最近良く見た白衣の女性で表情は自然な複雑さを形成している。

もう一人は背中しか見えなかったが、何処か声は必死さを伴っていた。

白衣の背中をじつと見ながら、何処かソレに既視感を自分は憶えていた。

「……う あっ」

「！……っ 管理人に報せて 患者が気づいたと」

ナニカの夢から目覚めた雁夜は、瞼を開けて最初にマスクと施術衣を

身に着けた複数の医者と看護婦らしい人影を見た。一人が慌てた様子で

その場から走り出すのを目の端に捉えつつ未だ覚醒しない頭を動かす。

(此処は……病院、なのか?)

此処ら辺の大きな病院と言えば冬木市では新都にある聖堂病院だ。

何時の間にか普段着ている服は全て取り外され患者衣になっており

普通ならば倒れ込み、そのまま病院で手術を受けたと思うべきだろう。

だが、それにしても違和感もある。

……そうだ。自分は半死半生の体であり何時急患として病院に運ばれて

可笑しくない体だが、それをアノ父が許す筈もない。

何よりも、自分の体が長くない事は理解しており、やるべき事がある。

そうだ……自分はっ!?

「っ！… そうだっ、聖杯戦争はっ！ ぐあっ!?!」

仰向けの体を起こすと同時に背中に痛みが駆け抜ける。

だが、痛みなど慣れたものだ。それよりも一刻も早く今の現状を理解して動かなければならないと、苛立ち混じりに腕に繋がれた点滴管らしきものを強引に引き抜き、地面に体を起こして驚愕した。

「……!?! 体が、軽い?」

そうだ、体の痛みが少ない。

普段いつも感じる刻印蟲の激痛に不快感。魔力を作り出す故の疲弊が消えている。

いや、そもそも体の中にある蟲そのものが……。

「!? 目が……見える」

麻痺していた部位の目頭を触れて、静かな驚愕に浸る。

目が、見えるのだ……魔術回路の生成の為に代償として壊死した筈の目が……。

「……ああ、起きたか。予想に反して随分と回復と覚醒が早い。

ソレも、魔術師と言う存在にある回路の成す賜物なのかな」

カツン、カツンと床を反響させ。自動ドアを開いて現れたのは。

あのバーサーカー、自分が召喚したサーヴァントだ。

最初に見た時と違い、片方の目に眼帯を施しつつ出現した彼女はモルモットを

見るかのように不躡な視線を彼に寄こす。

やはり、自分は聖杯戦争に参加したのだ。と言う現実感には肩に押し掛かり

決して自分が今までして来た事は夢でなかったのだと言う事實は、苦々しさと

同時に安堵と悲しみが混ぜ合わさった奇怪な酸っぱい感覚が生じる。

だが、サーヴァントが普通に病院内に居ると言う事実が頭の中に入ってくる

同時に雁夜は大きく目を見開いた。

「なっ、何で……」

狼狽える彼を尻目に、彼女は冷静そのものの態度を貫いて切り捨てるように

言葉を放つ。二の句を継がせぬ静かながらも圧倒的な口調で。

「Mr. 雁夜、君の考えているであろう疑問に対して回答を投げかけよう。」

まず第一に、此処は病院ではない。 FACILITY X—394  
通称 Lobby my coop

と呼ばれる会社の施設に付属している medical room  
である。

第二に、君の体のなかにある……ああ、刻印蟲と呼ばれる疑似アブ  
ノーマリテイ

に関してだが、可能な限り切除した。管理人として人としての立場  
でもアレを

ツール型アブノーマリテイとして容認する事は出来ない。

第三に、君は此処で約数週間意識を失っていたわけだが……後遺症  
と思しき

体への違和感は存在しないか聞きたいのだが」

ガツンと頭を殴られたような気がした。

第一と第二の内容に関してはほぼ理解が出来なかった。まず何だ  
かの会社と言う

内容やツール型アブノーマリテイと言うのも意味が分からない。

だが三番目の内容だけは、はつきりと聞き取れた。

数週間 自分は意識を失っていた……？

「は……はは、もう 終わりだ」

「Mr. ? Mr. 雁夜？」

「くそっ、数週間気絶していただって!? 俺は終わりだっ。既にそ  
んなに

期間が過ぎてているなら聖杯だっって誰かが獲得する寸前に決まっ  
ている。

葵さんを幸せにする為に、この一年間を耐えて耐え忍んできたっ  
言うの……!」

「Mr. 雁夜っ」

ガンツ。

崩れ込み、地面に拳を叩きつけ張り叫ぶように自身の悲哀を綴る雁  
夜に下されたのは

慰めの言葉でなく、軽くも意識を我に返す脳天への衝撃だった。

軽く涙目になり顔を上げると、表情は変わらずも心なし呆れの目線で自分を見下ろし

手元に何時の間にかウサギを模したハンマーらしきものを彼女は携えていた。

……何故か、とても見覚えがあるハンマーだ。

「落ち着いたかな？」

……何やら時間に対し拘りを見せているようだが、心配はしなくていい。

君が治療として受けた期間は数週間だが、外の世界では数時間だ」

「は……？ 一体なにを」

「ホクマーに会ったら感謝するんだな。尤も、彼が誰とも会いたがるか不明だが……」

ブツブツと呟く彼女に対して、雁夜はやはり意思疎通が出来ない人物だと改めて

思えた。だが、今まで想像していたバーサーカーと言う存在ともイメージは合致しない。

不気味なものを見る視線に移り変わる彼に対し、ふと、彼女は気づいたように

顔と目線を戻すと呟いた。

「そう言えば。君の実兄と義娘の事だが」

「！ そ、そうだった。桜ちゃん！ 桜ちゃんは家にいるんだ！ 戻らないとっ」

バーサーカーの声に彼も我に返った。

絶対に救い出して見せると約束した、幸せにしてみせると願った彼女の娘。

サーヴァントを召喚する其の時刻、彼女は用意された私室に居た筈だ。実兄も

居るが、あの兄が何かしてくれる期待など家を出奔した時から持ち合わせていない。

臓硯は責め苦を受ける身代わり（自分）が居なければ彼女へと再度アノ地獄を



味合わせるのは想像に難くない。何としても……。

「Miss桜は、いま現在この会社の中央本部に置いているroomに居る」

「——は？」

もう「は」を馬鹿見たいに連続で上げるだけに留まっていた。

完全に間の抜けた顔つきを隠そうともせず、顔を上げる雁夜へと彼女は

少し溜息をついてから、周囲にいる看護婦らしき人物に命じた。

「記録ビデオを持って来てくれないか？」

——場面は雁夜が気絶する前に遡る。

バーサーカーである白衣の彼女。その詠唱が終わると同時に地面に現れたのは

円形の中に腸詰のような模様が模られた魔法陣のようなもの、そして出現するは

全身が煤のようなもので形成された少女を模る物体。彼から見ても恐らくは想い人の

愛娘より少々高い程の背丈だった。

だが、それが少女でない事も明らか！ 異様な空気を宿し、胸部を貫くように

火掻き棒のようなサイズのマッチ棒を生やすソレは、立ち尽くしながら

シクシクと全体の黒から僅かに剝り貫いたような白い虚空の目と口から物悲しさを

感じさせる声を発生させていた。

「召喚魔術かつ 小癩な」

間桐臓硯も出鼻を挫かれたとは言え立ち尽くすような小物ではない。い。

彼は息子が呼び出した英霊の能力がどうであれ、その能力よりも早く圧倒的な

物量で雁夜と召喚者であるサーヴァントを再起不能にすれば良いと判断していた。

その意思に従って、牛骨をもパンを噛み切るような肉食の翅刃虫に蟲毒によって

数百年手塩にかけて育んだ優秀な蟲達を飛翔させ一斉に飛びかからせんとする。

成功すれば、瞬く間に彼らを倒せる筈だった。成功すれば……。

Why……(なぜ……)

Why is my Story the Only

Tragedy?

(なぜ私の物語は悲劇しかないの?)

ボ オオオオオオツツ!!!

「が っつ っ  
!!!??!!!!」

「……っそ、そうだ！ この熱っ……憶えてるぞっ。この女の子が突然

泣き叫んだかと思うと、地下全体が一気に温度が急上昇してっ」  
記録ビデオ、と称された。雁夜の知る限り目にした事のない軽量化された

パソコンが運ばれ。その物体に対しても軽く衝撃を覚えつつも  
バーサーカーの

説明に流されるままに、あの日の召喚以降の場面を第三者目線で記録された

映像を指しつつ小さく叫んだ。

「息も出来ないよ、このまま死ぬんじゃないかって感じた時……」

「その時、私が治癒弾とシールド弾を君に発砲した。その衝撃にさえも

君は耐えうる事が出来ない程に体力を消耗していたようだが。

いや、逆に意識を失ってくれて幸いだったかも知れないな……滞る事なく

この会社の中に入れる事が出来たし、手術も容易に進めた」

その言葉に、また新たな記憶が頭の中を駆け巡る。目頭を灼く赤、少女の鳴き声

それと振り返った白衣の彼女が向けた人差し指、それと胸に突如生えた衝撃と暗転……。

幾つか追及したい事が、彼女との出会いから幾度も生まれてる事だが

このまま質問攻めにしても、肝心の桜の行方や大事な現況についての情報を

得る機会を恐れて胸の中に一時その欲求を抑制した。

ビデオの続きが再生される。

「お のれええええ!!」

臓硯は吠えた。熱は 火は間桐の魔術にとって、構成する蟲にとって天敵である。

サーヴァントが召喚した煤で出来合わさった少女の形の出来損ないのようなソレが

いかに自分にとって最悪を思い知った。だが、只では終わる事など出来ない!

「このマ キリを 舐め るナアア!!」

空間を満たす人を、生物を一切蒸し殺す温度を間桐の魔術を最大限に行使して

魔力の膜を作り上げる。その場しのぎの急ごしらえである事は承知の上

だが、数秒だけでも構わない! 数秒あれば十分!!

サーヴァントが、倒れ伏した雁夜へと近づき手を翳すと。その肉体が淡い粒子と共に

消失した異変や、この自分を焼き殺さんとする高温に対してサーヴァントが平然と

している事に対しても気に留める余裕は今の大魔術師に無い。

サーヴァントと煤の少女。どちらを優先的に襲うか1コンマの決断を有したが。

まだ隠し種を抱える危険のあるサーヴァントよりも、いま現在の危機的状況処理

する生存本能が上回る。

おぞましい蟲の大群の全てを、その少女の形をした煤へと群がらせた。

ミツバチがスズメバチを蜂球（ほうきゅう）で仕留めるように。間桐の魔術の

特性は束縛と吸収。サーヴァントとは即ち、魔力の塊なのだ。

受けた一撃は多大な被害を周囲の蟲達に与えたが挽回の目はある！

気づけば周囲を満たす業火に近い熱気は薄れており、蟲達の動きも活性化を

取り戻さんと蝕肢を振るわんとしていた。よしっ、封じ込めた！

（バーサーカーがっ 貴様の宝具もろとも、我が飲み干してくれるわ！）

この何百年程、蟲達の使役のみに魔力を注ぎこみ魔術といった魔術を行使する

事など無かった。だが、自身の領域であり巢が壊滅する危機を覚えている今

間桐臓硯は死に物狂いで、かつての全盛期にありし業の片鱗を發揮しようとしていた。

だがしかし、しかし……だ。再三告げたが、遅すぎた……。

老兵が気づいた時、その彼女は死闘の自身や召喚した使い魔に全く意識を向ける事

なく、散歩に出るような歩調で地下の階段を上がっていた。

いや、一人ではない……バーサーカーの周囲には2、3人の彼女の白衣の中と同じ

スーツ姿らしき恰好の武器らしきものを携えた取り巻きを連れて。

「オ マエ……」

キリキリと火打石のように鋭く歯を鳴らす蟲達から発生する音に意を介さず

地下室の出入り口に辿り着きかけた時、ようやく彼女は口を開いた。

「二つだけ言っておく、亜種T-04-50」

「ソレのカウントは五秒だ」

「ナ」

5 4

「ン」

3 2

「ダ」

1

蟲達の場合は鮮明に間桐臓硯へと伝達される。捕食される餌の悲鳴、暴れまわる儂い抵抗

苦痛に宣う肉体の脈動等に悦を得るために得た魔術の技能の一つ。その蟲達を感じた。一瞬の膨張と、膨れ上がる純粹な暴走の赤い魔

術を。

— 0

ボ オ オ オ      ン ツ ツ

「……恐らく亜種T-04-50には多大なダメージを負わせる事は出来たもの

完全に消滅させる事は出来ていない。

気絶した貴方から亜種T-04-50の疑似ギフトを取り除いた時も、未だ活性化を

有していた事を考えても、まだ生存しているだろう」

少女の形をした煤のサーヴァント？ の自爆。地下室を満たす爆風と最初の熱を

上回る火の暴威に呑み込まれる蟲達。それを最後に途絶えた記録映像を

見収めて半ば茫然自失している雁夜に対し、淡々と説明を彼女は続ける。

「遠坂 桜……いや、今は間桐 桜だったな。彼女の体内に潜伏していたギフトも

可能な限りは摘出を行っているが、致命的な場所に関しては今の所麻酔処置で対応している。

今後、あのアブノーマリティを見つけた際は完全なる処理をした後に改めて手術の続きをする」

「……つまり」

「ん？」

「桜ちゃんの体にあった蟲は……臓硯の一部は、取り除けた。

桜ちゃんは……解放、されたって事だよな？」

「現状、まだ不安定な状態ながらも。概ねそう受け取って貰って構わない」

肯定の頷きを見ながら、まだ夢見心地のように体の感覚が覚束なかった。

出来の良い夢を見てるかのような、いや 何と表現すれば良いのだろうか？

サーヴァントを召喚して体感時間として一時間にも満たない間に、目的の大半か半分が

達成されたのだ。臓硯の悪夢から解放され、桜ちゃんも自由の身になって保護されている。

まだ、この目の前の白衣の女性の力に対して把握出来かねずも。あ

の生まれた時から傍にいた

群体の悪夢を一蹴にした頼もしきは未だ体に染みついている。だが、殆ど喜びの感情は心の中になかった。

「あの映像の中にいた、何時の間にか居た複数の奴等は？」

「我々の会社の所属のエージェントだ。スペシャリー、アレックス。

二人共信頼出来る人物であると私が保証する。他にも仲間達はいるが

紹介は後ほどにする。それで構わないだろうか」

「……さつきから口になっているアブノーマリテイって言うのは？

サーヴァントじゃ……ないのか？」

「現代科学では解明できない未知なる異常存在全般を呼称してアブノーマリテイと

我々は呼んでいる。君の言うサーヴァントも我々から見ればアブノーマリテイと

捉えられる存在だ。あの、君達の便宜上の父か祖父もソレに値する」

「……。コレは、夢なのか？」

「残念ながら、君は現実の中にいるよ雁夜。

FACILITY X—394

世界の翼 その一つの中の初めての部外者としてね」

「つば やっ。」

また新たな謎の言語が飛び出してきた。もうバーサーカーがまとも会話のやりとりを

していると言う奇妙さすら追及するのに精神は疲れ果てていた。

酷く、倦怠感が襲い項垂れる雁夜へと彼女は静かに告げた。

「再度告げるが、君は数週間死の淵を彷徨っていた。切除した部位を移植して適合出来た

とは言え、君がアブノーマリテイから受けたダメージは深刻で、我々の見解から見ても

手術後で半年生きられるかどうかといった体だ。無論、安静にした上でだが」

「半年？……ははっ、十分すぎる位だな。そんなに生きられるようにしてくれて有難い」

拳を揉み解しつつ、乾いた笑いを浮かべる。

一カ月も本来保たなかった体。体の中の魔術回路は間桐の家に戻った時ほどに落ちている。

寿命を犠牲にして得た強化の魔術回路。それを、このサーヴァントは未知なる技術で

全て台無しにした上で、自分の肉体を半年ほど生きられる体にしてくれた。

リターンとリスクでは、リスクが計り知れない。だが、臓硯の悪夢を終わりにしてくれた

功績や桜ちゃんを保護した事（この目で確実に確かめてからだ）も踏まえれば

十二分に、このバーサーカーはたった一夜で魔法のように解決してくれたのだ。

だが、それでも達成感や満足感は得られない。雁夜は、どうしようもない 訳が自分でも

わからない苛立ちが沸き上がるのを自覚していた。可能ならば、目の前の彼女に当たり散らしたい

そんな暗い 暗い欲求が立ち昇るのを。

その欲求を鎮めるように、大きく息を吸って吐くのを眺めた上で彼女は告げた。

「此処の空間は、現実の時間と異なる」

見下ろす視線と口調は侮蔑や嫌悪もないが、好意も無い。

「余りに多くの情報を処理するのは貴方の体調に差し障るだろう。

もう少し、休むと良い。必要なものは巡回する職員に告げてくれば大体のものは用意する」

そう告げて、踵をかえす彼女の背を無言で見届けようとして。今まで見落としていたが

まったく聞いてなかった事を慌てて言葉にした。

「ま、待ってくれ！ そう言えば……君の事を俺は何て呼べば良い



んだ？」

その言葉に一瞬ブレるようにして静止した彼女の背中は、何処か逆鱗に触れたように

無言の圧力が膨れたように見えた。

だが気の所為だったのだろう。振り向く彼女は変わらず淡々と告げる。

「……私の名前か。他の職員たちには通称管理人と呼ばれている。

だが、正式な名称を読み上げるとするなら——」

……。

名前を告げた彼女が立ち去った後も雁夜は揺れる感情の坩堝を制御する事に手間取っていた。

だが、ゆつくりと自分の中で整理をしていき理解出来る事を明確な言葉にする。

「……臓硯の奴から 生まれてからずっと覚めないと思っていた悪夢から。

あの生き地獄であり奴の束縛から、遂に解放された」

「桜ちゃんも、まだこの目で見ないと安心出来ないけれど……ようやくだ。

ようやくあの子の顔に笑顔を取り戻せる、幸せにしてあげる事が出来る。

葵さんと凜ちゃんと、三人でまた一緒にあの公園で……」

俯き、緩慢に上げた顔には笑みが零れ、何処か病的な光を目に帯びながら笑う。

「……ははっ、何だあとは簡単じゃないか！

時臣の奴を、倒す事が出来れば。もう後は何も心配しなくていいんだっ……

俺の……俺が喚んだサーヴァントは未だ良く分からない部分が多いけど……万能で 最強だっ」

「待っていてくれ、葵さん……もうすぐ、夢が叶うから」

はは はははははは……。

『待っていてくれ 葵さん……もうすぐ』

雁夜の病室での様子。それはLobotomy coopのある一室に流れていた。

そこには、つい先ほど去った彼女。それに数名が同席して流れるメッセージを

無関心に近かったり、軽蔑を浮かべるようだったりなどの感情を浮かせて聞いていた。

「……この御仁は随分と屈折した人格形成をなさってるようですね。

管理人、私の意見を言わせて頂けるならば。彼は幼少期からの精神汚染を既に受けてると

思われます。medical roomでの暫くの養生をさせるべきです」

「イエソド。君の意見も理に適う部分はある。だが、事態は非常に複雑且つ困難を有している。

この我々の世界線と異なるが、それとも接続されるか否かの『過去』に招かれた時点で

彼を拘束する方法は適解とは言えないだろう」

ビジネススーツで、紫色に紫の髪と言う全体的に紫を基調とした男性が管理人に意見を述べる。

それに対して彼女は意見を受け取るも自論を述べて反論を検証する。

「エンケファリンを投与すればいい。そうすれば彼の鬱病と思える言動や性格も

幾らか緩和するさ。それより、coopの拡大と新調の中で、いい加減ビール自販機

の設立をしてくれても良いんじゃないかと思うんだ、管理人」

「ネットアク。アブノーマリテイから抽出された生成品を気安く、この世界の人間に投与する

事は出来ない。それと、自販機の設置も却下だ」

次に、やる気のない声で口を挟んだのは。緑の髪の毛を切るのが面倒といった具合で伸び放題

にしたスーツの男性だ。彼に対して彼女は厳しい口調で諫めた。

「まあ、管理人の命令に俺は従うだけさ。どんな指示であろうとも俺はこなすだけだよ。

そのカリヤと言う男を無理にコントロールしたいって言う事であつてもな」

「……ケセド。冗談でもそのような事は言わないでくれ。会社の品位に関わる」

青いクラヴァットを洒落たボタンで留める、20世紀に良く見られるスーツを着こなした青を

基調とする男が気軽な調子で、そう述べた。彼女は静かに、その言葉を宥める調子で返答した。

「あー！でもでもっ、私もケセドと同意見ですっ。

管理人が命じる通りに、何でも行動しますよ！ Miss 桜の世話や、あのカリヤと言う人物の

兄である……ツルノの矯正に対しても精一杯サポートしますっ！」

「……………Miss 桜の相手は、現在ティファレットに任せている。それでも状態に良好の兆しが

見られないようであれば。マルクト、君のサポートに期待するつもりだ」

茶色と黄色の髪の毛のショートカットをした、明るい感じのキャリアアウーマンといった具合の

女性は屈託のない笑顔で管理人に張りきった声でケセドと呼ばれる人物の言葉に同調する。

それに、僅かな沈黙の後に彼女は劳いの声を投げかけた。

はいっ！ とニコニコと微笑む彼女は、光ない黒の瞳を最後に無言でいる隣席に向けた。

「あら？ ホド、どうしたの？ 何時もなら真つ先に管理人に声を掛けるのに」

纏まった長い髪が頭頂部から1本はねている、暗い青の瞳をしたスーツの女性は俯いていた。

この居室にいる全員が全員、このL o b o t o m y c o o pではカーストの上に値するのであろう事が

会話から察せられる。その中で、同席した最後の人物はマルクトと呼ばれる女性の声にも

ただ沈黙を守りぬくだけだ。全員の視線が集中した時、ようやく声があがった。

「……皆は、本当にそう思ってるの？ 違うでしょ」

「ホド」

「違うでしょ。こんな、こんな訳の分からない催しに参加して

口では皆は普段通りに振舞ってるけど本当は嫌なんじゃないの？」

ホドと呼ばれる女性は、他の者達と違って負の感情を前面に押し出す。

「必死に、私たち必死にこの会社でアブノーマリテイを管理してノルマをクリアして。」

何度も、何度も何度も……気が可笑しくなる時間、延々と繰り返して

……ようやく休めるって 私たち皆で ようやく穏やかに眠れるって。

本気で、そう思ったのに……私達なんでこんな事になってるの!？」彼女は切羽詰まった声を一室に響かせる。苦い顔を多くがする中、

管理人と

皆から言われている人物だけは決して声の調子を崩さずにホドへ告げた。

「……根源に接続した以上、時空間の異常跳躍によって何が起きても可笑しくない。

聖杯と呼ばれる、市町村を一つ占める巨大なツール型アブノーマリテイ。

それを解析すれば、きっと我々の問題も解決出来るとも」

「そんな慰めなんていらないつ。管理人っ……ねえ、管理人。」

本当はこの出来事や先行きも全て掌握してるんでしょ？

だって、だって貴方は本当の意味で管理者だもの！　そうですねっよ  
ねっ!!」

「ホド、止めろっ」

イエソド、ネツアク、ケセド。どの三人か言ったのか、それとも同  
時に告げたのか

不明な制止の声も振り切り、彼女は必死に手を組んで管理人と言う  
彼女に懇願する。

「どうか……」

「どうか、お願いです……また、あの頃のように　私たちを……導いて  
ください」

そう、万感の想いを満たした涙声を彼女は発する。ある人の名前  
を。

「——カルメン」

「……私は彼にも告げた通り、Xだ　ホド」

## エージェント

間桐 鶴野（まとう ひやくや）は人生の理不尽さを嘆いていた。何時ものように自室へと引きこもり胡坐をかきつつ、皿につまえたピーナッツ

やら、ジャーキーやら酒のつまみを咀嚼して適当なタイミングで冷やした

グラスから琥珀色の液体を嚙下して喉へと熱いものが通り過ぎる。締め切った障子が何時か開けられる不安に目を背けるように体を、目線が決して

そちらに向かないように反対方向に座って地下蔵で起きているであろう

事を予想しつつも極力考えないようにする。

間桐の家の負の遺産を継承する事を避けるために縁を切った裏切り者の弟。

それが今更ながら出戻りして聖杯戦争へと買って出た事。そんな家族の

情など完全に切れてる彼は、雀の涙ほどの嫌悪やらの感情が弟にあっても

わざわざ関わろうとする気概も関心も持ち合わせていなかった。

あるのは自己保身と恐怖。何かの間違いで、いや弟が召喚の失敗なりで死亡し

自分に対象が向けられる事。そう起き得る未来を恐れていた。

彼は体こそアルコールで心身を弱まらせてるが雁夜ほどに夢想家でもなければ

無謀とも縁の薄い男である。クソ爺い（臓硯）の手中、蜘蛛の巣の中で

生き残る術を彼なりに模索して、寝る虎もとい蟲を刺激しない事だ。

（そうだ、俺には関係ない事なんだ……じつと大人しく、何もしなければ）

今までの人生は碌なものではなかった。これからも、きっとそう  
だ。

表向きは、平凡な人生を送ったように見える。幼少時代は普通に学  
校へと行き

中学、高校と進学する。当たり前障りのない学生生活だったし、家柄  
が特殊なため

金にもものを言わせて自分に取り入ろうとする人間も居たが、煩わし  
かったし

それに何かの手違いで間桐の家と言う蟻地獄に入ってしまう事を  
恐れて人間関係は

極力最低限の付き合いだった。

社会で生きる事において、何よりもアドバンテージになるのは金  
だ。そう言う意味合い

なら自分は生まれながらの勝ち組だが、幸福には一番程遠いと思  
う。

常に、複数のおぞましい視線に晒されて生きて来たのだ。風呂に入  
る時も寝る時も

いや……臍の緒が繋がる赤子の時から、あの怪物に晒されて生まれ  
てきた。

生殺与奪の権利を全て預け、半ば奴隷として生きた日々。反骨精神  
なんてものは

根こそぎ奪われ、彼にとって日々の慰めは手元にある酒のみだ。

だからこそ、召喚の夜に起きた地下蔵から発生したであろう謎の揺  
れに関して

グラスを取りこぼし動揺を示しつつも、決して様子を見に行ったり  
機転を利かして

外に出る真似もしなかった。もし、外に出ればまた違った展開も  
あっただろうに。

——ガラッ。

「っ ……じじ !!? だ、っ誰だっつ お前ら?!」

「ふむ……ようやく情報を確保出来そうな関係者に出逢えたな」

勢いよく開けられた障子に、あの蟲の先祖が何か小用でもあって来たのかと

億劫そうに振り向いて、そして言葉を失った。

目に映るのはスーツに白衣を羽織った無機質な瞳の女。その後ろに、自分を

胡乱気に見るスーツの男性が見た事のない鈍器やら大砲めいた武器を携えている。

鶴野にはソレが現実的に地下蔵で行われているであろうサーヴァント召喚に

よって招かれた英霊である等と考えつかなかった。いや、誰も一般的な感性で

近代的で現実感溢れるスーツ姿の数人の登場に対してサーヴァントを連想するより

外来の魔術師か、それに近い団体である事を予想するのが普通だ。

(ま、魔術師か!? クソ爺いの悪行が遂にバレたのかっ!!?)

お世辞にだって、あの肉親(口にしたくない事実だが)が魔術師として善行を

務めているなんて思っていない。凡そ、自分では考えつかぬ程の多数の間人を

物理的に食い物にしてきただろうし、被害は相当の規模だろう。

ソレ等が何処かしらの裏の団体やら魔術師関係者に関わるものに飛び火した

可能性は無きに非ずだ。最悪の予想を想定する事に関しては、間桐の人間として

育ってきた鶴野には容易な事だった。

「お おい！ 俺は無関係なんだ本当に！ この家の、あのクソ爺いのやった

事に関しては何も関わっちゃいないんだ！」

「……管理人、彼が何を言っているのか解りますか？」

「いや、アレックス。だが観察するに何か後ろめたい事は抱えているんだろう。」



あの私室で精神を死なせていた娘のようにな」

アレックス、と呼ばれた男に。この集団のリーダーなのだろう女性が発した娘と

言う言葉に鶴野は過剰に反応した。

「！ あ、あの娘につ、桜にやれって言ったのはアノ爺いの指示だ！ やらなきや

俺が餌食になってたんだよ!! 俺だって被害者だ!!」

「……ほう」

唾を飛ばしながらの弁明が藪蛇だったと後悔したのは、目を細めて温度が低くなつたと

思えた女の気配を感じ取った時だ。

「君の処遇に関しては……記憶抽出装置に掛けてからだ。まあ、発言とアルコール中毒と

思える現状からして、まともな生涯を送っていたようには見えないが……

少しばかり大人しくして貰うぞ。——アレックス」

短い肯定の返事と共に、アレックスと呼ばれる温和な顔立ちながら勇ましい目つきと

体格に付いてる二の腕が振り下ろした（懺悔と呟いていた気がする）メイスが

脳天に振り下ろされるのを、鶴野がよせと叫んでも其の速度が緩がまる事はなかった。

それが、鶴野にとって最後の間桐邸での記憶だった。

……間桐 鶴野は人生の理不尽さに嘆き、そして居るか知れぬ神へ呪い語を

心中で罵詈雑言の嵐と共に叫んでいた。何で俺がこんな目に。

降りかかった痛みは、二日酔いのように未だこの見慣れぬ施設でも続いている。

まだ現実が受け入れられない中で、緑色の長い髪の男が口の端を吊り上げて

自分を見下ろしているのを、拘束を受けながら歯噛みして睨む精一

杯の抵抗を表す。

華奢な体つきの子だった。光を携えない茶色の目が自分の姿を鏡のように映している。

「そんな怖い顔して見たって何も変わらないさ……お前がどんなに怒ったって

恨み事を告げたって、此処ではな。まあ、ちよつと相談と言うから管理人の指示だから拒否権利は無いんだが、ビヤクヤつて名前なんだろ あんた。

とりあえず、その名前は此処じゃあ縁起が悪くてな。ツルノつて此処の奴等には

名乗ってくれよ、簡単な事だろ？ それさえしてくれりや、俺から管理人に

あんたへ贈呈される筈の抗酒剤への命令を撤回してやってもいい」「それと、今日からツルノ。あんたには自堕落に家で酒を飲む生活を止めて

此処のc o o pでの従業員としての生活をして貰う事になる。

「はは、一気に世界有数の企業の会社員だぜ？ 大出世じゃないか」「……………」

「つと、悪い悪い。口にテープ付けられてちや質問させようにも出来ないよな」

緑色の男の手が伸ばされ、唇と周りを覆ったガムテープが勢いよく剥がされる

小さな痛みと、まともに呼吸が出来る感覚が戻ると共に一気に息を吸って叫んだ。

後ろ手に回され拘束されてるバンドが無ければ殴っていた勢いで。

「ふざけるなつ、この野郎!!! いいから俺をこの訳の分からない場所から

とつとと出せ!!」

怒鳴る鶴野に対して、飄々とした口調を緑を基調とするスーツの男性は崩さない。

何処か羨むような目線で語り掛けるのを止めない。

「元気がいいな。うん、元気がいいのは一番だ。何よりの活力だ。

お前、虫を扱ったり世話するのが得意なんだろう？

T-02-43やT-04-50 O-02-74の専用職員として有望だな。

俺は正直、お前の活躍に期待してるんだよ。魔術師って言うのがどう言う奴等

なのか見当つかないけど、俺達にはないパワーがあるならアブノーマリテイにも

少しは効果があるかも知れないってな」

「……何を言ってるんだ、お前。魔術師じゃ、無いのか？」

「んっ、俺は『セフィラ』さ。此処じゃあネツアクと呼ばれてるが……

そんな事はどうだっていい。ただ、俺が言いたいのは、だ。

あんたの背景に関しては、機械を通して色々と見せて貰ったが俺と違って、あんたはどうしようもない部分はあるけど

挽回できる機会はあるって事さ」

「はっ？ どう言う事だ」

「言葉通りさ。まあ、直ぐにと言うのは酷かも知れないが安心しろよ。時間が有れば慣れる筈さ……こんな事言うのは自分でも笑えるが精々頑張ってくれよな」

そう言う事だけ言って立ち去る男を茫然と見下ろしつつ、数人の彼と同じ

スーツを着こなす奴等が自分の拘束を外すのを尻目に未だ

上手く状況が飲み来なかった。魔術師の団体で無ければ、一体全体此処は何処で、結局俺に何をさせる気なんだ?!

無機質な壁、特に電灯など使ってる様子は見えないのに発光している天井。

床や扉、何処もかしこも人工的で木材なりの自然で出来たものを使ってる

ようには見えない。何の用途に使用するのか得体の知れない機械、壁に連結

された大量のパイプ、窓と思しき場所は緑色の発光した液体が漂っ

ている。

今更ながら気づいたが、自分の周りを往来するスーツ姿の人間達は自分に対し

少し不思議そうに視線を向けるものの声を掛けたり干渉しようとするものは居ない。

通り過ぎる者達は全員、何かしらの役割に尽力してるのが早足で通り過ぎていく。

鶴野も、わざわざ彼らに怒鳴り散らすような真似は避けた。下手に騒いで

袋叩きにされたり、それよりもっと悪い状況になる事を恐れたからである。

それに良く見れば各自 腰元に警棒なり拳銃なりを携行しているのが見て取れた。

余計に、この謎の空間に不吉さを覚えた。

(何だって言うんだ一体全体……訳がわからないぞ)

長い事、同じ体勢をとらされてたからか。少々足取りが覚束ないながらも

此処ではない見慣れた場所を求めて歩き始める。

自分が未知の場所に拉致された事は理解してる。だが、首謀者の意図は不明だが

拘束を解除してるのならば抜け道を探す糸口はある筈だ。

見慣れない部屋以外は、何処までも続きそうな長い通路が築いていてる。

切れ目のような部分に人が一人は入れそうな隙間も見えたが、到底入る気になれない。

とても……終着点が見えないほどに長い長い道に感じた。

鶴野は通路の突き当りまで歩くのを諦め、手近にある扉に視線を遣る。

〇―〇1―73 そう、プレートに刻まれた部屋だ。

ドアノブはなく自動式らしい扉に近づく。開く気配はなく、扉の横に設置している

ボタンらしきものへと触れる……開いた。何かないかと一歩踏み出す。

ガー

……女が居た。

ただの女じゃない。全身に黒と藍色の混じった銀河のような輝きのドレスを身に着けた女。

青色の長髪も輝きを帯びており、その顔の半分は惹き付ける美しきをもった少女の

外観をしている。目元には、黒い涙のような模様が刻まれていた。残る半分は？

……黒い、暗黒だ。両手を組んだ二の腕から首元に顔の半分までが漆黒に染め上げられ

その容貌は闇で構成された鬼のようだった。

白く透き通った絹よりも薄地に思えるマント。そして、腰にはドレスに不釣り合いな

神秘的な力を匂わせる大きな剣らしきものを提げている……剣？

(あの剣……確か、クソ爺いが以前持ち込んできた)

「——ちよつと！ 貴方、何をしてるんですか!? 直ぐに退室してください」

その剣に対する思考を打ち破ったのは聞き慣れぬ一人の若い女性の声だった。

振り向くと、黒髪で丸顔の女性が激しい剣幕で部屋から出ると告げる。

「つお前、行き成り何……」

「いいから早く言う通りにして下さい！ 管理人の指示じゃないんですよ!？」

アブノーマリテイが何かしない内に、早くっ」

「……っ」

ただ直球的に戻れと、見ず知らずの女に命令されるのは癪だった。だけど

この場で一番事情を把握してそうな人物だったし、良く知りもしな

いが

底辺の魔術師である自分でも部屋に居合わせる存在が人外の自分を一瞬で

葬る事ができるだろう威圧感が肌に刺さっていたのも今更ながら、それを

直視して硬直していた体にも伝わってきて素直に部屋から出た。

ドアの開閉音と、女の溜息が同時に聞こえる。

「何事もなく良かった……WAWクラスのアブノーマリテイが上層の部署に来る

事なんて殆ど無い事で、職員達もピリピリしてるって言うのに勝手な事をして。

新人でしよう、貴方？ スーツのネクタイだって、ちゃんと結べてないわ」

女は訳知り顔で指す一本を掲げながら、もうちよつと新人職員としての節度と

規律を重んじて……と説教を与えてくる。

理不尽さに対して再度怒りがぶり返してきた。

「つぎけんな！ 言いたい放題、訳のわからない事をピーチクパーチク

話やがって！ 大体行き成り攫ってきたのはそつちだろうがよ！」

怒りをぶつける、女は目を白黒して鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をする。

止めようとする気にはならない。胸の中にある全ての理不尽さを一挙に

喉へと迫り上げ罵詈雑言の嵐をぶつける。

あらかた叫び終え、喉が枯れて一息つくように呼吸を整える。罵倒された

女は、自分の激昂に対し少しだけ不機嫌さが見える胡乱な目つきに変化する

ものの返された言葉は予想に反して落ち着いていた。

「そう。貴方、此処の社員じゃないのね

と言う事は、管理人の事前説明は本当だったと言う事ね……羨ましいな」

「は？ 何の話だ？」

嫌味の二つや二つは言い返される覚悟だったが、その女性は少し沈んだ

表情に移り変わっていた。何故か申し訳なさのような気持ちが浮かぶも

卑屈な無いに等しいプライドが邪魔して謝罪出来ないでいると勝手に

話は見知らぬ女性から進んでいく。

「私はエージェントのユメカ。

此処はアブノーマリティを收容しエネルギーを生成する会社。

L o b o t o m y c o o p (ロボットミー コーポレーション)よ」

……信じられない話を幾つも聞かされた。

三流にすら劣る魔術師だが、人とは異ならざる怪物については嫌と言う程

知るものが肉親に居るゆえに、そんな怪物を收容するという団体組織が居た

と言う話については、まだ理解出来る範疇だ。

だが、そんな怪物から未知なるエネルギーを取り出す？

空間移動を瞬時に可能とするエレベーターに、人と同じように思考して行動する

ロボットが上司として働いている？ あの緑色の髪の子もそうだと??

馬鹿げている。だが、短時間で目にしてきたものは魔術と異なる人工的な

自分がまず目にした事ない最先端の科学技術に思える事は確かだ。その話の中で、引つ掛かりを覚える部分があり、話を遮るように口を開く。

「ちよつと待て……って事は、その管理人って奴が此処の会社の最高権力者であり

そいつの許可がない限り、この会社から出られないって事だよな？」

「そうなりますね」

「出せるように話を付けてくれっ」

あつさりとした肯定を前に、齧りつくような調子で訴え出る。

専門用語が多く出る会社の実態などより、鶴野にとつて見慣れた町の外に出る事が

先決だ。元の、あの自室に戻って平常な生活に戻れば……。

『私と話しをしたいのか』

うおっ、と短く野太い声と共に仰け反る。目の前のユメカと名乗る女性と異なる

無機質で、気絶する前に冷徹に自分がこうなる要因の指示を下した声が突如

相対する彼女から発せられたのだから。

一方、ユメカは僅かに喜色の声と共に口を開く。

「管理人っ。お疲れ様です……ええ、はい 問題ありません」

上の空といった感じで、微かに頭上を見上げて返事をする。彼女はスーツの

胸ポケットから補聴器のようなものを取り出す。多分、通信機の類だ。

見慣れぬ機器だが、恐らく電話のスピーカーモードと同じだ。そんな

虚仮脅しに近いものに一瞬怯んでしまった羞恥心をガキのように隠そうとするように

半ば奪い取るような手つきでソレを耳に嵌め込み、声を荒げる。

「おいつ、よくも人の事を殴りつけて異常な場所に放り込んでくれたなっ。

俺は言っておくがクソ爺いのやる事と全く関係ないし、聖杯戦争つて奴とも

何の関わりもねえ！ だから、とつとと……！」

『簡潔に述べておく。そちらの呼称するクソ爺い、若しくは亜種T



または間桐臓硯と呼ばれる存在は、こちらが鎮圧した』

……なに？

「……は？ お前が、何をしたって??」

『間桐臓硯と呼ばれるアブノーマリテイは、こちらに收容しているアブノーマリテイと相殺する形で、その構成する群体の大部分は駆除し得た。』

核と思える存在の発見と、こちらの準備が整い次第は完全に処理するつもりだ』

「ちよつ、ちよつと待ってよ!! お前がアノ爺いを倒したって言うのか……っ!?!」

『正確には、私が管理するアブノーマリテイに対し。アレが過剰に攻撃した結果の』

自滅だ。詳細を述べれば……』

そう機械的に説明する声を他所に、頭が酒で酔ったかのような浮遊感が全身を満たす。

あの妖怪からの束縛が、無くなったと言うのか……?」

『……然しながら、君を完全に開放する事は出来ない』

「何でだっ。もう、あの化け物は居なくなつたんだらうが」

そうだ。奴が本当に消え去つたと言うのなら不安の種は無い。

『繰り返して告げる。あのアブノーマリテイの核と思える存在は未発見だ』

更に、貴方はこの聖杯戦争とツール型アブノーマリテイの延長で選ばれた

間桐雁夜の血縁者であり、他の参戦者から狙われる可能性も少ない

当面、アブノーマリテイの現象が終結するまでは此処に居て頂く』

「……っ、あいつの所為かよ」

つぐつぐ泥を被らせてくる弟だと臍を噛む。

自分が長男であると言う事を踏まえ、あの蟲爺いは弟が家を出る事に関して

何ら制裁や制止をする訳でもなく黙認をした。それからと言うものの奴の

玩具となる存在は自分を除いてなかった。その地獄がどれ程のものかっ！

あの化け物が消え去っただろう今でも、俺を苦しめるのかと怨嗟の声を上げるのを

グツと我慢しつつ、耳からの説明へ長年に培った忍耐を注ぎ耳を傾ける。

『……暫く、Mr. 鶴野にはアブノーマリティの管理作業……ああ、それと銀行からの

引き落としなども頼みたい』

「はあっ!? 何で俺がそんな事を……っ」

『働かざるもの食うべからず。聖書の言葉も、たまには良い事を載せる。

まず、成人であり社会的な生活を送るに十分な身体能力を所有して  
る貴方は

我々が安全の保障を約束する代わりに対価を要求したいと言うわけだ。

労働の対価として、我々L o b b o t o m y c o o p 一同は、未だしぶとく貴方の住居下か

その周辺で復活を狙ってる君の血縁者及び、聖杯戦争と言う出来事  
の情報源として

そちらを確保しようとする可能性がある脅威からの安全を取り  
戻す。

それが嫌だと言うのなら、仕方がない。直ぐに破損痕が真新しい自  
宅へと帰そう』

幾らか考えていた反論は、その理路整然とした説得力の溢れ出る脅  
迫めいた説明の前に

口を開く前に泡となって消えた。

あの化け物が、のこのこ巢へと戻って来た自分を許容して黙認する  
とは思えない。

どう言う手段で撃退させたのか知らないが、手痛い仕打ちをされたのなら絶対に報復の

機会を狙っている筈だ。その為なら、どんな手段でも俺に口を割らせる。いや、それだけ

なら未だ可愛いほうだ。傷ついた自分の体を元に戻す為に自分の肉を喰らいかねない。

何時喰われるのかと、昼も夜も決して安穩を浮かべる事が出来ず過ぎず。

ある程度の保証があつた以前よりも更に悪い事を認識する。あの化け物の死骸なり

消えた確証がない限り、未だこの訳の分からぬ場所に軟禁される方がいいのかも。

「此処で働く……って言うのは置いといて。銀行からつてのは」

『Mr. 雁夜に関しては、心身へのダメージが深刻な事と他の協力があつて外出

させるのに暫く時間が掛かる。何より、今回起きてるツールの当事者だ。

表に出て標的にされるリスクが高すぎる故に、暫く安静にして頂く。

我々は、このような会社を運営しているが現代の金銭を産み出すような事は難しいし

貨幣を偽造するような事にc o o pの技術を使用する気もない。食事の提供は出来ない事は

無いが、未知のサプリメントなど摂取したいと言う気持ちが無いのなら暫くの

生活資金と食事の調達として、今までしてきたように口座から貯蓄を削るべきと思うが?』

暫く、その欠点のない理屈に閉口してから鶴野は気になる事を聞いた。

「聞きたいんだが、お前は雁夜のサーヴァントなのか?」

『そうなる。クラスは、バーサーカーと言うらしいな』

(絶対に嘘だろ……)

こんな研究者か学者めいた話し方をするバーサーカーがどの時代から召喚されるんだ。

と言う心の声を口に出すのを堪え、彼は代わりに大きく溜息をついて最後の質問をする。

「……何時ごろ外に出られるんだ？」

『君の財布を借用したので、数日は水と食事に関して不足はないが。カードの使用が制限される懸念も無い事は限らない。明後日には君にこちらから

指定するエージェントと共に新都に出て貰おう』

そうか、と長く喋り乾いた唇を軽く舐めつつ頷く。

不平不満はあるものの、この得体の知れないバーサーカーは自分を取って食うような

真似はしないようだし、制限や監視が付くとは言え護衛となる人物と外出が出来る。

(悪くねえな……ははっ、蟲爺い。わざわざ出戻ってきた雁夜の頼みを了承なんてするから

てめえも俺と同じように割を喰う嵌めになったんだ。ざまあ見ろ) 今頃、物理的な意味合いで草葉の陰なりで必死に生き延びる策を練ってるであろう

まったく同情の念を浮かばない化け物の祖父に対して嘲笑を頭の中で高鳴らせ

明るい展望の兆しが見える未来に少し浮き立ちながらユメカに促されるままに彼は

言われた通りの装飾と、警棒を携えてc o o pの初日を迎える。

……つい昨日の希望を、出鼻で木っ端微塵にしながら。

「——ぎやあああああああ!!!?」

「Mr. 鶴野！ 叫んじやいけませんっ、落ち着いて！ アブノーマリテイが暴走しても

良いんですか!? こらっ! 逃げないでください! オフィサー!  
彼を捕獲して!」

考えが甘かった事を知った。

間桐 鶴野(まとう びやくや)は人生の理不尽さと、疫病神の雁夜に関わった

故の不幸とこの家に産まれたと言う人生全てに対し罵りながら自分の不憫を嘆いていた。

T-02-43……此処で覚醒した時に緑の無気力と怠惰を纏っている此処の上司らしき奴が

口にしてたようなネームの部屋に入った瞬間、事前に指示された事以外で余計な反応を

するなど言われてた事すら忘れ恐怖に満ちた絶叫を通路に響かせた。

目にしたのは蜘蛛、蜘蛛、蜘蛛、蜘蛛。夥しい蜘蛛の群れ、それだけなら未だ地下蔵で

いやいやながら蟲を操っていた時に耐性があつたので我慢は出来た。

だが、天井でロープより太く平均男性より一回り巨大な蜘蛛がいるとなれば話は別だ。

ただの怪物ではない。人智の理外の気配を放つ深淵の場所を徘徊する生き物。あの

蟲で出来合わさった妖怪以上の生物が君臨しているのだ。ほんの少しの対峙でも

解る力強さと言うものがある。瞬時に自分が捕食される対象である事を。

本能のままに逃げようとした彼を、ユメカは無慈悲に他の者へ告げて体を羽交い絞めにする。

乱暴に暴れるのを無造作に彼、彼女等は怪物の居る部屋へ再度引き摺り戻した。

未だ抵抗して逃げ出そうとする彼を抑えつける職員を尻目に、ユメカは呆れ声を隠さず

冷たい地面に額を擦りつける鶴野に言い聞かせる。

「……T—O2—43は、床にいる子蜘蛛達に危害を加えない限りは、あちらも無闇に襲う事は

ないので大丈夫ですよ。守り抜く事としては……清掃作業はしない事、彼女の子供達を

誤って死なせてしまう確率が高いので。それと、彼女の目を凝視したりする事もいけません」

「っお、おいつ。お、俺はアレを直視したぞ!? だったら、もう入らないほうが……」

彼女の言葉に、藁にも縋る思いで弁明して直面する脅威から何としても回避しようと

するが、それを容認するほど現実は寛容ではない。

「天井にある、とされる中心の目に視線が合わなければ大丈夫です。

Mr. 鶴野は目にして

直ぐに一目散に部屋から逃げただけですし、部屋に半歩踏み入れましたけど、蜘蛛達の徘徊

する場所までは到達してなかったので大丈夫ですよ」

「好き勝手ばかり言いやがって……っ」

「言っておきますけど、彼女はアブノーマリテイの中でも危険度は下から数えたほうが

早い部類なんです。特例として全く無害と思えるアブノーマリテイも居ますが、それに

関して作業する意味合いは低い事は事前に説明しましたよね?」

Z A Y I N   T E T H   H E   W A W   A L E P H

左から安全性が高く、殆ど何も世話をしなくても良い部類の未知なる生物や無機物。

そして右にかけて下手をすれば人類すら脅かしかねないものが封じ込まれている。

そんな物を利用してる会社は一体全体どう言う所なんだと再度の文句と溢れ出る

疑問がぶり返すものの、その証明がなされる前に時は経過して答えを

明らかにする

機会は逃した。もう少し自分の態度を顧みれば良かったと言う後悔が襲う。

「畜生……なんだって俺がこんな目に」

何度も、壊れたラジカセのように同じ汚い罵りを口にしつつ鶴野は今にも勝手に

別の場所へ走ろうとする足を制御して部屋に入る。

全身が其のアブノーマリテイの制御室に入るとドアは自動で閉じて一気に視界は

悪くなった。部屋の電灯は意味をなしておらず、空間全体に何かが這いずっている

のが理解出来る。そして天井の中央に佇む巨大な気配も。

(上を見るな……っ 上を見るな)

説明された注意事項を思い返し、そして身に迫る頭上の危険が発する視線に自然と

出しかねない悲鳴を押し殺し、震える手で携帯していたバックのチャックを開く。

——ポトツ ——カサカサ カサカサカサ

「っ!! ……っ!!」

両手でしつかりと抱えたプレートには、コオロギだがイナゴだが知らない見た事がない

あるような無いような虫の死骸と、半ば液状化してる肉ゼリーのようなもの

入っている。それを地面に置こうとした瞬間、肩に当たったモノが首を這いずり回り

腕や背中のように回って小さな点の群れの触感が移動するのを感じた。

(落ち着け……っ、落ち着くんのだ。何時もの……クソ爺いの蟲の世話と同じだ)

まだ自分が間桐の傀儡として閉鎖的な生活を送る前、あの化け物は自分の魔術を

教えるが為に、夥しい群れの蟲を見せつけ手に乗せた。

思い出したくもない記憶。そして、その記憶は変化していき最近に起きた出来事。

我が家へと養子入りをした小さな少女が、阿鼻叫喚の中で蟲に埋め尽くされる光景が

フラッシュバックしていく。少女の悲鳴、縋りつくような瞳

女性の悲鳴……助けを求める声、隣から聞こえる嘲笑。

(……………そうさ、こんな事。慣れたもんじゃねえか)

気づけば、体の震えが止まる。じっと未知なる視線が頭上から注がれてたのも

関心をこちらに無くしたのか、威圧感が無い。

または、自分がそちら側に近い人間なのだど野生の本能で見抜いたのかも。

肩に留まっている子蜘蛛に対しても、わざわざ振り払おうとする意志はない。

地面に気を払い、足元に重々と念を入れて摺り足のように入進して出入口へ戻る。

開いたドアからは、薄暗き蜘蛛の王女の私室と異なる眩しい光が鶴野の目を襲う。

その光に体に付いてる幾つかの小さな存在が背後へと逃げていくのを感じ取り

つつ、念を入れて頭から肩にかけて手を触れて、まだ背中を這っていた蜘蛛が

手の甲へ移ったのを感じると、落ち着いた動作で扉近くの暗い地面に下ろした。

「ほらっ、行けよ……俺なんかに纏わりついてても面白くも何ともねえんだから」

普通の蜘蛛でない故か、その言葉を理解したかのように小蜘蛛は少し観察するように

鶴野の周囲を移動し、そして中央の母の元に戻っていった。

通路に体を移動させる。賑やかな足音と、空調を利かせた空気が肺



の中へ入っていく。

ドアの開閉音を聞いて、ようやく彼は無意識に忘れていた呼吸をす  
ると

大きく深呼吸を行い、壁へとズルズル背を預け、へたり込んだ。

「……こんな事を、もう暫く続けなくちゃいけないって言うのか」  
命が幾つあっても足りない職場だと肌で実感した。

管理者の指示と言うのを守り抜けば、幾らか安全は約束されてると  
は言え

これじゃあくソ爺いの言う通りにしてたほうが未だマシだったよ  
うに思えてならない。

奴の下なら、折檻の一種として蟲のプールに押されるような陰湿且  
つ心を凌辱する

責め苦を与えるかも知れないが、それでも最低限の命の保証はある  
のだから。

「——Mr. 鶴野！」

俯かせていた顔を上げると、黒い髪に黒い瞳が見えた。自分とは  
違って、その瞳には

思わず目を細めてしまいかねない輝きが宿っている。

「管理作業、お疲れ様でした。管理人はモニタールームで観察してい  
たようで

初めてにしては、とても筋が良かったと私に報告してくれました。  
評価される事は荣誉ある事ですよ！ この調子で続けていきま  
しょう」

どうして、こんな異常な状況がまがり通る場所で彼女は生き生きと  
して居られるんだ？

その疑問は自然と口をついで出た。

「何で、そんなに明るくいられるんだ？ 死ぬのが怖くないのかよ。  
あんな化け物と一日中接しなくちゃいけないのに……他にも居る  
んだろ？」

あの銀河のような暗黒を兼ね備えた女に、先程の蜘蛛の女王。他に  
も居るのは

似たような数字が記載されてる部屋や、職員の人数から推察出来る。

鶴野の言葉に、彼女は驚く事に朗らかに告げた。

「怖いですよ、それは。けど、こう言う生き方を選んだのは私自身なんですよ。」

まあ、最初は少し詐欺だと感じた事は正直ありましたけど。管理人は全部

私たちに説明をしてくれました。だから、良いんです」

「……答えになつてねえよ」

「うーん、何て言えば良いんでしょうね。」

……この世界が、どれ程に残酷かつて想像をMr. 鶴野はした事がありますか？

私は、自分の体験談を交えて管理人に告白した事があるんです。

管理人は、何も言わず全て聞いてくれて。そして、私の話した事なんて

殆ど微小だったと思える位の凄惨な話をしてくれました。

どう言う話だったかは、これは管理人のプライベートな事ですので私の口からは言えませんけど……つまり、私が言いたいのは

誰しもが自分が一番不幸だって、境遇が下回っていたら思うけどけど、見方を変えれば皆 同じなんですよ。そう、私は気づいたんです」

「……」

「Mr. 鶴野が何に対して不満や苦しさあるのかは私は知りませんけど。」

もうちよつと気楽な姿勢で過ごしてみれば如何です？

どんなに喜んだり、悲しんだり、怒ったりしても結果が悲観的なら過程でも、せめて楽しんだもの勝ちですよっ」

返された言葉は決して自分を癒したり、新たな啓示となるものではなかった。

言ってる事は、何かしらの新興宗教に囚われてるか洗脳されてるかのように

危ないようにも受け取られる。謂わば、これは一種の狂信だ。それでも……その笑顔は綺麗だと思えてしまった。

「……はっ、悪いが楽しめるような人生なんて送ってないもんでね」「それじゃあ、私が手取り足取り指導しますよ。その為に、管理人から役目も仰せつかつてますしね。大丈夫ですつ、私の指導に従えばきっと、今までと違った生活を送れますつ」

(そりゃあ、こんな場所じゃな)

立ち上がらせる為に差し伸べられた手を、一瞬の躊躇と共に鶴野は手に取った。

犯してしまった過ちは変わる事はない。あの爺いの傀儡となって遠坂の子供に自分がした仕打ちが、こんな所での仕事で贖罪になるとも思えない。

他にも我が身可愛さから逃げ続けて来た許されるべきでない事柄に対しても。

だが、流されるままに生きてきたが……少なくとも、此処でこの場所での仕事を

するかしないかの選択肢で、する事を選んだのは自分自身だ。

一生を、あの怪物の下で終えると思っていた認識が変わりつつある。

なら少しでも、心境が変化する事は許されるのではと思えてしまった。

女性の割には強く引かれる手に誘われるままに立ち上がり、スーツの背中を

軽い口答えも交えつつ廊下を歩く。

「なあ、アルコールはこの会社には貯蔵されてないのか?」

「アルコールですか? メチルアルコールにエタノールでしたら、この先の保管庫に

確かあったと思いますけど。案内しますか?」

「……いや、いいよ」

(明後日まで、辛抱だな……)

自分で買った酒類しか信用しない方がいい。工業用のアルコール

について返答

された事から段々と頭の回転が速くなってきた思考でそう理解した。

……Lobotomycoop内で、そのようなやり取りがなされる最中。

外界では、このような出逢いも齎される。

「君の名前は？」

「私は……コトネ」

## 名前

旧式のフィルムで回される映像機器のように、ところどころ

虫食いのような穴が見え隠れる中で一人の男性と女性の映像が現れる。

男には取り立てて秀でた部分はなく、女は女でその男に対する

一定の友情と信頼を持ち合わせつつも、恋慕の感情を抱く事はなかった。

三つ程の年上の女は、少し年下の男に対して弟のような対応で接してた

事が伺える。だが、男にとって歪な家庭環境にとって心の安らぎとなる

唯一の女性は、容易な依存対象であり自分を受容してくれる母性と博愛の

塊であった。男にとっての心境が、友情から恋愛へ変化するのは長くは

かからなかった……だが、彼にとっての呪縛が其の精神病を告白させる事は

なかったし、彼女もその彼の懊悩に気付く事はなかった。

首を回す。もう一つのスクリーンは真新しい。

そちらにも一人の男性と女性が居た。どちらも、聡明でありすぎた。

科学技術の結晶で築いた遺伝子操作の影響か、世界に飛び交う未知の

因子が作り上げた神童か。彼と彼女の人生を細やかに文章で

纏め上げるならば、百の書作になる事は間違いない、派生や客観を交えた作品も含めれば千になるには違いない。そんな知識と実力

を

兼ね備えた二人だった。どんな時代、どんな場所であっても大成を成す事が可能であり、世界に革命を起こせる二人。

だが、二人が変革させようとする世界は既に寿命を迎えかけてい

た。

オーバーテクノロジー・幻想種の徘徊・二分化されたディストピア社会のカーブは顕著に際立ち、それを正すには余りに文明は進化と

完成されすぎており。更に地球の生命体と異なる異常な生命体が我が物顔で闊歩されており、人類は自分達と言う種を守る為に壁を築き上げる。勿論、その壁の中に入らず息を殺し生きるか、散る者も

中にはいる。そう言った、地獄と天国が物理的に現存する世界だった。

旧約聖書、創造にて記されてる言葉。光あれ 神は云った そうして

世界に光が産まれた。彼も 世界は暗闇でしかないと思っただけだろう。

だから神に成り代わり光を作ろうとした。それが可能だったから。彼の思想に女も感化された。男が創造主であるならば、彼女はイブでは

無いのだろう。ならば、リリスだったのか？

いや、彼女はイブでもなければリリスでもない。何処までも人だった。

愚かしくも、それでも真つすぐに生きた賢いだけの人だったのだろう。

だから、誰もが惹き付けられたし彼もまた彼女と言う存在の虜になつた。

皆に愛された人だった。彼女なくして彼と言う存在も出来上がらなかつた。

……私は、そんな彼女だからこそ、決して好きになる事はなかつた。死ぬ時ですら、彼女に対して私の中に過つた中に許容と言える感情は

無かつた。ただ漠然と砂漠よりも乾ききつた と言う在り方。

「……………」

目を開く。数秒だけ普段とは違う染みが付着してる丸形の蛍光灯が見える

天井を認識して、自分が間桐邸と言う巣窟を脱出してからホテルに宿泊した

事実を処理して起き上がる。首を回すと大きく骨が鳴る音が耳に捉えられた。

便利な体だと感じる。魔力、と言う存在がアブノーマリテイとしてツールか

ギフトに因るのか解明し難いが、人と同じように動く事が可能であり少しの

負傷も自然に修復される事や普通の人間から視認を困難にして薄い障壁も

通り抜ける事が出来るメリットを列挙すれば、自分自身がサーヴァントとして

顕現していると言う多大なるデメリットも一瞬覆される気がする。尤も、気がするだけであってリスクとリターンを測れば、人類にとつて

リスクでしかない。冷徹で冷静に変わらない認識を抱えつつ洗面台に移動して

顔を洗って、部屋に設置している給湯器を押してインスタントの日本茶を濾す。

購買する時コーヒーや紅茶も目に留まったが、どちらも或る二人が連想される為に済し崩しで入手したのはソレだった。

この20世紀終盤時代の外を見て、最初に印象深かったのは星空だ。

我々の時代の空も、輝きは確かにあった。だが、この時代のように瑞々しさを

伴っていないような、自分でも説明出来かねない微小だが大きな違いを感じた。

普段飲み慣れない新鮮な飲料水を嚥下してから浴室へと移動して

シャワーを

浴びて軽く体を拭いてからスーツを着用しクローゼットを開けると男物の

パーカーを羽織る。別に人間ではないので、やろうと思えば一瞬で霊体と言う

未知物質の再構築を行使すれば整容なりの手間を省略して時間を無駄にする

必要は無い。だが、我々の中に残ってる私としての部分が、ただそうしなかった。

洗面台で整容を行いつつ、洗顔後に映る鏡の無機質な顔と向かい合うと

無意識に目を逸らして、そして二度と立つ事はない。

瞼の開閉、上肢と下肢の指から間接にかけての動きを確認する。昨晩は

病院へ侵入しての保存されてる臓器や死体安置所からの道徳的に違反される

救急移植の為の窃盗などを行った為に碌に自分の体について認識してなかったが

問題なく人間同様の動きが可能な事が理解出来る。また、右手の人差し指からも

あの会社での業務のように、複数の効果がある弾丸を発射させる事が出来る事も

召喚時は無意識だった事柄は逐一と細かく認識出来た。右手が弾丸の銃身であり

左手が異なる弾丸を選択する役割を担っている。

パーカーには、今まで嗅いだ事のない染み付いた異性の匂いが付着している。

忌避や生理的嫌悪も無いが、フェロモンのように魅了 好意を抱くものでもない。

それでも着込んでいるのは、必要な顔を覆う際に適してる服である事と



普段の正装である白衣だと、救命確保した三名に提供する為の食料品を

買い込んだ際に、少々懐疑的と言うか物珍しそうに「これから夜勤ですか？

お疲れ様ですね」と店員に労われた所為である。

この時代だと、私の外見や体格はともかく装飾は医療従業者、実験従事者に

分類され、そう見られる。そう言った資格を持ち合わせてはいたし、いざ

命令されれば行使する実力はあるものの何かの間違いでトラブルに巻き込まれ

頼み込まれても差し迫った状況では不具合が発生する。よって、このパーカー

を着る事は利点に繋がり得た。外出する準備が整えられると扉のドアノブを回す。

革靴の音を吸収するマットを歩きつつ、朝早くから清掃する業務者を尻目に

横を通り抜ける。顔を上げた人物は少しだけ不審な顔を見せた事で立ち止まった。

「……何か？」  
「いや……お一人で？」

返された質疑に対して思考を処理する。そして回答に行きついたので

一番納得されるであろう嘘を紡ぎ出した。

「連れは小用が出来たようですので、先に出ました」

その言葉に、従業員は得心を浮かべて短く謝罪を成したのを見届けてから

元の歩調へ彼女は戻るとエレベーターの中に入り、予定されたビル外に出た。

……此処は冬木市に建設された海浜公園に面する近くにあるデパートスロット

として盛んな男女の感情が高まった帰りに良く利用する、そう言った

宿泊施設の一つだ。バーサーカーである彼女も、休息と思考に没頭するに

あたって目に付けたのは良心的な値段である事も一つだが、万が一に

サーヴァントやマスターと呼ばれる存在と遭遇する危険性の低さや、自分

と言う世界の異分子を隠蔽する施設として、このようなホテルが一番利便性

が高かった事だ。ハイアットホテルと呼ばれるような全うな施設も有るが

認知度が高く例え雁夜や鶴野の身分証を偽造するにしても、今まで誰も

聞いた事や目にした事のない存在が人の目に付く場所に記録される事は

極力回避したいリスクに入る。

些細なアクシデントとしては、入り込む為に同伴したアレックスが挙動不審な態度を幾らか見せた事だが、追及するような異常では

無かった為 指摘しない事にした。

(とは言うものの……間桐の資産が、この日本の一般的な経済事情よりは

富豪であつても、長く泊まれば泊まる程に襲撃される危険性は高まるし

広範囲に甚大なる被害が拡散する懸念は無くならない。今日限りで普通の

宿泊施設を利用するのは避けたいが……)

この日本と言う国は、極めて平和な部類に入るが。代わりに人の目に

入りにくい死角と言う場所が少ない。人氣が少ない寂しい土地であれど

誰かしら紛れ込む可能性がある。

（最悪、公園の野宿でもする事にするか。この時代の行政機関に目撃

されると少々面倒な事になるが、霊体化を行えばやり過ぎせるだろう）

彼女、バーサーカーは この聖杯戦争に意欲的な勝利への希望は無い。

だからといって悲観的に自滅の道に焦がれてる訳でもなく、ましてや

戦争の過程に快楽を覚えたり、美学を求めてもいない。

この時代に招かれた事、現界している事。L o b b o t o m y c o o pと  
言う存在を

背負い、その操作が可能な事。直面している事すべてが自分の意思とは

相反する現象であると自負出来る。だからと言って、その召喚の当事者

である雁夜に対し嫌悪や恨みの感情は生じない。

あるとすればアブノーマリティに対する不信感、そして、この感情を

言葉で表現するとすれば、怒り 憎しみ 排除しなくてはいけない使命感。

アブノーマリティ全般に対する破壊的欲求（デストロイド）

それが自分と言う存在の大部分を占めているとバーサーカーは理解している。

それが体の外側に漏れ出ない理由を承知の上で、彼女は機械的に淀みない

歩行を駆使して、冬木市の大体の地理を全身で受容し把握していた。

まず海浜公園へと歩いた。昨日は碌に見なかった朝日に輝く海が見えた。

久しく、あのような大海を見る事はなかった。映像媒体には無い、

リアリティ

に富んだ潮の香りが仄かに鼻腔へ届く。

穢れのない、ただ自然だけを切り取った一枚の動く画は暫し足を止めるのに

十分な一材だった。数分は棒立ちになっていた体を再起動させたのは、朝の

ランニングを行っているだろう初老のジャージ姿の健康を保とうと努力する人の

姿を目にしてだった。あの海の色は、今まで見たどの色とも異なれど

一番似通っていたのは、海の色を僅かに薄めたような空の青だった。

マウント深山と言う場所に移動する。朝から人々の行き交う喧騒が次々と耳に飛び込む。

活気のある、と言う表現がここまで似合う風景もそうそう無い事だろう。

少なくとも、生前にはこのような場面に遭遇した記憶はなかったし、回想の中で動く

群衆の顔つきには、明るさと言うものを感じ得るものは無かったと思う。

自分には似つかわしくない場所だと再三と、この世界に放り込まれてから自覚している

事を改めて認識しながら通りを歩く。冷やかしなどをする気には到底なれない。

明るい世界を瞳の中に写り込ませる度に、疎外感が強くなっていくのを感じるようだ。

これは一種の感傷に近いのだろう。自分には、自分達には無いものを抱く

この世界と言う宝石箱に対して過ぎ去ってしまった我々の中に似通ったものを

探し当てようとする無為な代償行為なのだ。

だが、散りばめられた星屑の中にも濁ったものは存在する。

その濁りに関して我々は敏感だ。近くの売店で携帯食料と共に買った新聞を流し読みする。

「……猟奇殺人並び失踪……か」

この冬木市で起きている暗い影として特筆すべきは、連続で行われているらしい

異様な現場を記した殺人事件だ。

現場には魔法陣のようなものが残されており、加害者の事件を混乱させる

ミスディレクション及び、社会への何らかのメッセージかとマスコミは報道している。

バーサーカーは、その一面記事を見つつ思考する。魔法陣、となると容易に関連性を

疑わせるのは、此度の大型ツールアブノーマリティ（聖杯戦争）だ。然し起きてる凄惨な出来事とソレを関連付けさせるのも時期尚早

ではある。

まだ自分は此処の実態に対して足掛けの先にも掛かってはいない。

雁夜と鶴野の記憶を覗き見たが、彼らの知識にはアブノーマリティに関してや

住んでる土地柄に対する深い理解は無かった。期待してる訳ではなかったが

解析の一因にならざる事実は、時間のロスに繋がる事実と直結している。

バーサーカー自身には、魔力の探知、追跡。魔術師と言う事柄のスキルは無い。

相手の肉体を治癒・保護するガンドめいた力は使えるが、その由来も全て

会社経由の力であり、自分自身が培った力では無い。魔法のような力は発現

出来るが、それは全てL o b o t o m y c o o pと言う人理に外された企業の技術力だ。

強いていえば、バーサーカーと言う呼称に真逆の極めて論理的思考能力。

それが筋力耐久といったものが全て、サーヴァントと言う戦士において欠ける

彼女にとつて唯一の強みであり、それでいて無二の弱点でもある。

(Mr. 雁夜の記憶の中にあつた。遠坂 時臣……遠坂家五代目の継承者

間桐雁夜の幼馴染、禅城葵の婚約者であり間桐 桜の実父。

家族は妻 遠坂 葵。そして娘 遠坂 凛と間桐 桜を含めて四名。

接触する必要がある……然しながらアプローチの仕方によっては問題も生じる)

あらゆる問題が、今まさに直面して牙を向いてはいなくとも少ない時間と共に

手を伸ばせば直ぐに閉じ込められる程度に差し迫っている壁が出来る上がっている。

(Mr. 雁夜は拒否する可能性が高いが、接触しない事には間桐 桜を救う。

その問題解決には遠坂 時臣の人柄や出自 何故あのアブノーマリティへと

養子に出す事にしたのか……収集しなくてはいけない情報がある)

思い出されるのは、護衛のエージェント二人に挟まれつつ屋内からの不意の

亜種アブノーマリティ(間桐臓硯)の襲撃に警戒しつつ薄暗い廊下を歩いた時

小さな気配と物音が、一つの私室から聞こえた事。

最初こそ、エージェントがメイスと銃を構えて突入しようとしたが、それを

撤回したのは不穏な気配が無い事と、子供部屋染みたドアの形を見た。

部屋の中に入って最初に見たのは殺風景な私室だった。学習机や、最低限の服を

掛けている棚らしき物も見受けられたが、遊び道具やそう言った物は殆ど

見受けられない。一応、絵本らしきものは机に並べられてるようだ。

その観察も数秒で視線を一つに留まらせた。膝を抱え、顔を俯かせて座る

とても小さな小さな人影に、彼女は一瞬硬直してから部屋に一步踏み出した。

顔を少女は上げる。その瞳には見覚えがあった。

フィルターを無くして見た職員達の瞳。一体幾つの顔に、その瞳は宿っていた？

アブノーマリテイの生贄として、決して生存が不可能と認識しつつ時間を稼ぐ

役割の為に動く捨て駒として、最早どのようなギフトやツールを使用しても

収容困難な崩御を前にして、奈落の底に底に辿る事を直視する瞳。

この少女に何があった、何が彼女をそうまでさせる瞳にした。

どうして……この事態に至るまで、何もしてやる事が出来なかった。

バーサーカーは感情を表に出す事が至難な事を(後悔/安堵)した。それが行動として成り立つなら、少女を含めて部屋を家屋を、町一体を

崩壊させる程に暴れ回る程の怒りを周囲に撒き散らしかねなかったから。

「……だ、れですか？」

生気のない、虚空で模られた目は心を裂きかねない力で自分を見つめていた。

するべき事は決まっていた。やるべき事が呼吸をするように体は

理解していた。

抱きしめかけた腕と体を寸前で押し止め、膝について手を差し出し言葉を投げかける。

「――貴方を助けて欲しいと頼まれた」

脳裏に描いた昨日の記憶を戻しながら、間桐 桜の容態の現況について考えに耽る。

極度の鬱に自閉症スペクトラム、睡眠障害も見られるし誰が話しかけても反応は乏しい。

表面的な明るさや、友好さを所持してるのは女性セフィラのマルクトな為。一時は

彼女に世話を担当して貰うと思ったが、傍目から空回りが見られた為に役割から外した。

傷ついた表情を彼女は浮かべたが、誰が接しても現状では良好に至らない事を説明

すれば直ぐに元の笑顔に戻っていた。

厳格なイエソドの言葉や悲観的なネツアクの態度、ケセドの諦観さも桜の心を

切り開く鍵に至らない。ならば、温厚と奉仕精神を兼ね備えるホドが適任かと言えれば

そうでもない。本質的に彼女は死を追及する面があり、それに巻き込まれかねない。

……いや、死を追及しているのは誰もがこの会社では大小なり抱えているものか。

私が、我々がセフィラを信頼してるかと言えばそうではない。互いが互いに一物を

抱えており、その蟠りを見ない振りをして接してるだけだ。

人の社会は、通常それでも良い。人の奥底まで理解して相互扶助の関係に至る事など

滅多にない。上辺だけの耳に良い言葉だけ並べれば歯車は回る。だが、L o b o t o m y c o o p の管理者となっている自分はそ



うではいけない事も理解してる。

だが、現状を打開する手立ての提案が乏しい事実は眼前に有る。

マスター（雁夜）の問題。近親者（鶴野・桜）の問題。セフィラ達の問題。

巨大ツール型アブノーマリテイ（聖杯戦争）の問題。自分と言う存在の問題……。

収容しているアブノーマリテイに見られる異変の問題。職員達に関する問題。

山積みの処理しなくてはいけない情報を無感動で認識しつつ平野一面に生やされた雑草の

一本を摘み取るように、最初の一步目の問題に手を掛けるしかない。

（まずは土地勘を実感しなくては）

自分自身での散策。いざ襲われたとして袋小路に誘われた場合にアブノーマリテイを

発現させるには制限が掛かってしまう。エージェント達の力を信頼しない訳でないが

どのような存在が、このツール（戦争）から出現するか測定出来ない。

例え人並みの脚力でも、思わぬ死角が見つければ やり過ぎす事だって出来る筈だ。

そうやって生き残る事が出来た人間だっていたのだから。

深山町で特筆して語るべき場所とすれば、この町一体を土地柄で取り締まる藤村家と

呼ばれる組合。後は双子館と呼ばれる場所だ。

前者に関しては、何か事由がない限り接触する機会は無いだろが。後者は仮の拠点

としては適してると考えられた。

（だが、魔力と言われる架空三元素。それが顕著に感じられる場所でもあるな

既にアブノーマリテイが潜伏しているのか、土地柄のものなのか

……)

彼女にとって、魔術師と言う存在は。自分が排除すべきアブノーマリティとして

扱うかの白か黒で言えばグレーに値する。

常人では決して不可能な能力を扱える、と言うのは既にアブノーマリティに近い。

だが、自分の住まう世界では便利屋、掃除屋 頭と言うようなアブノーマリティに

拮抗出来る一般人を軽く超えた存在が居た事実を比較すると、魔術師と言うのも

謂わば自分達の世界の彼らに近しい存在であると捉えるべきだろう。

双子館には、もう一つの館が存在しており。それは新都と言われる場所に

建てられている。バーサーカーは未遠川にかかる大橋を抜けて、そちらの

調査にも乗り出す。外観の造りは瓜二つで、やはり濃い魔力を感じた。

(川も、竜神を鎮める為などの曰くが付いており、この町は何かと未知の現象を想起するのに深い関りを持っている)

(だが、藪蛇をつつかない限りは。この町の平穏さと均衡を崩す事はない)

駅前中心街にある噴水の縁に腰掛けつつ、軽い昼飯をとりながら交差していく

人の波を見るかぎり特筆して異常はない。

どの人間にも自分達の会社を往来するように極度の不安を抱いてる人間もいない。

その疎外感を再三と自覚しつつ、新都の地理も幾らか理解し図書館などでこの世界の

大体の知識を本で会得して常識を学んでみた後には、すっかりと正午に差し掛かっていた。

(此処の近くにも、公園がそう言えばあったな……)

雁夜の記憶に存在していた公園。遠坂 葵 遠坂 凜 遠坂 桜  
その三名がその  
存在であった頃の象徴の舞台。

双子館を潜伏先として除外すれば、後は野宿が必須と化す。改め  
て、その場所が

宿泊するのに適してるか移動を開始する。

ふと、その公園前へ到着する前に立てられていた自販機に目を留め  
た。

自販機には、良い印象はない。現実逃避に勤しい緑のセフィラは常  
時、ビールが売られる

機械の設置に熱意を上げているし、F—05—52 といった異常  
存在で目立つのもソレだ。

だが、その中で売ってる普遍的ジュースや朝に摂取した茶以外で目  
に付く

自分が居た世界ではまず目にしない飲み物には関心を惹いた。こ  
うなると、知識欲が

刺激されて緊急時でない限りは、その欲求に走りたくなる傾向にあ  
る。

それほど水分を肉体が要求してない事は承知の上で、鶴野からほぼ  
強奪に近い形で

借用している財布から硬貨を取り出して投入口に入れる。

チャリン ……。

「……ん？」

チャリン ……。

「故障、か？」

自販機に100円玉を入れる。反応しない。

釣銭を出す場所から硬貨が落ちたので。それを拾い上げて、もう一  
度今度は強めに

入れて試行してみる。やはり反応しないので、次は慎重に弱めに入  
れて。

「……………」

財布の中身を指で開いて凝視する。

鶴野の財布にはカード以外では由吉の札や、硬貨は朝には未だ幾らかあったのだが

興味深い書物や、セフィラや職員達に対しての支援として幾らか会社に必要な

物品を購入した事で、今は五千円や万札はあるものの自販機に見合う小さな硬貨や

千円札などは無い。そして自販機と言う機械はコストの関係で高価紙幣を受け付けない。

更に100円や500円玉もない。自販機を受け付ける事のない不良品の

硬貨一枚を除いては、だ。

自販機から飲料水を買えない事実を認識すると。僅かに体の動きを停止してから

小さな溜息をついて、釣り銭から無情に吐き出された100円玉を僅かに細い目で

見下すかのように軽く掲げつつ見つめた後に財布の中に仕舞い戻した。

名残惜しそうに、彼女が体を横向きに動かす。その時掛けられた声

が動きを止めた。

「あの……自販機、調子可笑しいですか？」

子供の声。それに振り向く

居たのは茶髪のショートヘアの子供。この制服は確か、穂群原学園にある初等部

だったと雁夜の記憶を照合して判断する。

どう返答すれば良いか、一瞬当てはめる語彙に難儀した。未知の、少し活発性に

欠けてると見受けられる子供に対して自分の立場から返すべき言葉

を。

言葉に窮して、ただ不器用に首を短く上下に動かすのを見た少女

は。

少し考えこむように顔を俯かせたあと、財布を取り出して使い回された感のある

100円硬貨を取り出して、差し出した。

「これ……良かったら 交換……」

「……なるほど、君は遠坂 凜の親友なんだな」

「ううん。凜ちゃんは私なんかより全然しつかりしてるもの。」

今日も私のミスをフォローしてくれて」

済し崩し的に、バーサーカーはコトネと公園で雑談に興じていた。

原因としては、鶴野の硬貨が自販機に不適な事が全ての要因だ。彼が悪いと言う訳

でないが、間桐の家柄はどれ一つとっても欠点が目立つと考えてしまふ。

——お汁粉。

それが、自分の興味を惹いた原因でコトネが介入する切っ掛け。

最初はそのまま通り過ぎようとしてたが、自分が自販機でお汁粉の缶を凝視して

100円を何度も何度も投入口に入れる奇行を目撃して居た堪れなかった

告白に関して、バーサーカーでなければ穴に入りたい心境と頭を抱える動作を

しただろうが、それが出来ない自分の体を恨めしいとも思う。

日本の自販機には、時々ああ言う風に自販機のセンサーを素通りして

認証されず釣り銭口に落下してしまう硬貨が偶にあるようだ。

彼女の名はコトネ。穂群原学園の小学二年生であり、遠坂 凜

遠坂時臣の娘の同級生であると言う事実を獲得した。何時も、消極的な自分を

励まし、クラス内でリーダーシップを執る遠坂 凜を羨望と少々の

劣等感も

ある事を彼女は雑談の中で話してくれた。

コトネの助力もあつてか、その未知の飲料水に対し最初こそ胡乱気な目で観察し

薄い茶色と、異物に見える濃い茶の円状の存在に飲むのを躊躇しかけたが

日常に存在する購買機に異常な物体がある筈ないと言う社員としての声が後押しして

一気に口の中を含み……結果、気づけば缶の中身は意識の空白を経過した後

ほぼ無くなりかけていた。やはり、この飲料水はF—05—52に似た依存性を……？

クスクス、と言う抑えるようなむず痒い笑い声に顔を横に向けた。すると、コトネは

悪戯がばれたかのように申し訳なさそうに手で押さえた口をモゴモゴして返答する。

「ご、御免なさい。けど、とても美味しそうに一気飲みしてたから。

……お汁粉、飲むの初めて？」

自分が、美味しそうに飲み物を口にしていて。

その事実には、有り得るのか。いや、無い筈だと断定する冷静な口ジツクとサーヴァント

と言うマジツクな存在なら有り得ると言う議論が脳内に発生する。

一進一退の議論は放置させてコトネとのコミュニケーションに力を注ぐ。

「そんなに、美味しそうに飲んでたかな。……確かに、ずっと外に居て

この日本と言う国は初めてだが」

「やっぱり、外国人なんだ。何処の国に住んでるの？」

「……地理としては、此処になると、思う」

生前の記憶と言うのは曖昧で、特に自分の時代は曖昧模糊で摩訶不思議な場所だった。

出生ともなると、産まれた惑星は地球である事は間違いないが。地

形はこの世界と相似

してるかも確固たる自信を掲げる事は出来ない。

すぐ切れそうな糸のように、頼りない残滓の中から出生と言うルーツに関わるものを

掘り起こして、この世界の地形と適当な場所を指す。コトネが声を上げた。

「オーストラリアなんだっ！　けど、凄く日本語が上手なんだね」

「まあ……沢山の賢い人が居てくれたお陰で。語学は堪能なんだよ」

無邪気な子供の質疑応答に、たじたじに心中なりつつバーサーカーは受け答える。

好きな趣味や特技、普通なら何て当たり障りのない質問がサーヴァントと言う存在

である以前に、自分と言う存在が答えられない事がとても残念でならない。

「あ、そう言えば。名前を聞いてなかったよね」

その質問は、ある種の自分と言う存在の核心をつく痛い発言。だが、答えられなければ

余計に彼女に不快感と恐怖を与えてしまう。

本当なら、そうやって自分から距離を置かせるほうが良いのだろう。だが、親切に

してくれた彼女に対し、そう言う行動は避けたかった。

「こう、名前を書く」

斜線、それを右に左に交錯させる。

人と言うよりは呼称であり、役割であるもの。記号こそが自分の存在を一纏めに行っている。

黒人の先導者であるマルコム氏と言う例もあり、この名が不自然であると言う訳でもない。

ただ、この記号を目にして彼女が自分をどう受け取るのか不安も過った。

（奇妙な人間、不審だと感じてくれたほうが良い。私は、本来この世界の住人でなくて

居てはいけない存在である事は間違いないのだから)

コトネは、暫くソレを見てから。私に、こう口を開いた。

「——スラー かな」

「なに？」

「え？ 違った、かな。バツ文字って、音読する時にスラーって呼ばれる事があるって

この前に本で見た事あったから」

スラー……そうか、バツ文字に彼女は私が書いたXがそう見えた訳だ。

それは、彼女だけが私の事をそう捉えた……そう言う事になる。

「……いや、私はスラーで問題ないよ」

「あつ、良かった。合ってたんだね」

ホツと安堵の顔を浮かべるコトネの顔は、とても生き生きとしていた。

私たちに無い、その眩しいものに目を細め暫く雑談を再開させていると鋭い矢のような

声が私の耳を通り抜ける。

「コトネ！ 此処に居たのねっ」

「あつ、凜ちゃんだ。そう言えば、此処に来るって伝えてなかった」私とコトネの前に、走ってくる小柄な体躯が小さめの野獣のように躍動感を満たし近寄る。

緊迫した様子でもないし、私が女性である外見な事も幸いしたのか彼女の表情や眼光に

鋭さはなかったものの、記憶や情報の外にある人物に対する警戒は存在していた。

彼女の蒼い、真つ青な空のような色合いを見ると或る人物を思い出しそうになる。

コトネが説明して、自販機の件を告げると僅かに呆れを伴った顔になったが先ほどより

警戒心の数値が減少していくのが見て取れる。

彼女はツール型アブノーマリティに関与する存在ではないが、彼女



の父はソレに加担

している可能性は高い。その事実があれば対処は一つのみだ。

ベンチから立ち上がり口開く。

「お友達が来たようだし、私はそろそろ家路に戻る事にしよう」

「あつ、スラー……また、会えるよね?」

「それは、解らないな。私も仕事が終われば直ぐに海外に戻るからね」

この奇妙な関係は、今日一日の短時間で終了すべきだと結論付けての回答に

遠坂 凜は水を得た魚の様に援護射撃を繰り出す。

「そうよ、コトネっ。今日さつき会った他人なんですよっ

最近は失踪なり物騒な事件だつて起きてるんだから……あ、スラーさんは

良い人かも知れないけどねっ。けど」

「スラーは、私の友達だよっ」

小さいが、力強くどんな圧力にも折れない響きを伴っていた。

凜は硬直する。

私も硬直していたと思う。

コトネは、小さな拳を必死に握りしめ言葉を撤回しない。

「私の……っ 私の事をちゃんと子ども扱いしないで、真剣に話を聞いてくれたもん

スラーは、私の友達だよ。凜っ」

「わ……わかったわよ、コトネ。……何よ、そんなに必死に言い返さなくても」

遠坂 凜は、明らかに気分を損ねているのが見てわかった。

けど、それをフォローする以前に自分は屈んでコトネに尋ねていた。

声は、震えていかなかっただろうが。

「私は、君の友達になっても構わないのかい?」

それに、彼女は力強く肯定の返事をしてくれた事は誰でも想定し得た事。

今度も、この公園で会おうと彼女と絡ませた小指は熱を持って  
いた。

その熱はどんな回想の時でも決して忘れ得ぬ熱だ、マッチガールや  
火の鳥といった

熱よりも忘れられず、心に残る淡い熱量。

私は、コトネと友達になれた。

……いや。

コトネは、私にとって。スラーにとって最初で最後の友人だった。

## 劇伴

遠坂 凜。彼女は小学二年生にして成績優秀 品行方正  
学園では常に先導を切つて歩く穂群原学園の小さき華だ。

だが、その可憐な華は其の可愛い顔を眉を吊り上げ鋭い目つきで  
目玉焼きの乗ったハンバーグを、少々粗くナイフで切り付けてい  
た。

察しの良い者ならば、その少女が不機嫌なのは見て明らかだ。

「どうしたの？ 凜。今日は機嫌が悪いわね」

子供の機敏な心の変化について親は見逃さない。幼い娘へと温和  
な

声を降り注ぐのは、母である遠坂 葵。

むつつりとした少女に暖かい視線を向けて穏やかに告げる。

「何か学校であったのかしら？」

「違います、お母様。ただ、コトネと」

駄々をこねる平俗な子供のように無視したり短く切り上げるよう  
な作法

を学んでない彼女にとって、母親の質疑応答をはぐらかす腹芸は備  
えてない。

思い出し、ぶり返しかけた怒りを切り取った粗挽きの肉と共に呑み  
込んで

よく吟味した上で言葉を紡ぐ。

「コトネとちよつとした事ですけど口論になってしまったんです。

新しい友人が出来たのですけど。少々、風変わりな大人の女性で  
……。

友を得ると言う事は何よりの宝である事は承知の上ですけど、今最  
近の

世間で、良く分からない人と親交を深めるのは危険だと私は言った  
んです。

けど、コトネは私の友達に酷い事を言わないで。って、一点張りです」  
最後の部分では、遠坂の子として行儀が悪いと捉えられても仕方が

ないが

顔を俯かせて、唇をすぼめての竜頭蛇尾な声の調子だった。

凜にとって、コトネはクラスの中で放っておけず。それでいて価値観は少々

異なれども、小学二年の中では高度な教育と体質により少しばかりマせている

彼女の話題に関して、例え自分が言いたい放題でも微笑んで聞いてくれる

友人の態度は、感受性豊かな年齢の彼女にとっては貴重な聞き上手な人間だった。

悪く言えば、体よく自分の悩みや不満を解消する為に利用してる感じではあるが

凜はコトネのフォローや不器用な彼女の手助けをし、コトネは自分の悩みを聞く。

その関係はイーブンであると。彼女はソレで対等なのだと考えてた。

対等である、と考えるのは。無意識の内に相手を見下してる心理にもなる。

そんな友達最初と思える反抗。例え嫌悪はなくとも凜にとっては少なからず

衝撃があり、その揺らつく心を安定する方法は暗中模索だ。

そんな彼女に、優しく母親は慰める。

「そうねえ。確かに凜の告げた事は正しいわ。」

でも、コトネちゃんもコトネちゃんなの言い分があったのよ。新しく出来るお友達って、とっても素敵なもの。

凜も、お父様から新しい事や物を授かったら嬉しいし。それを貶めるような事を誰かが言ったら不愉快でしょう？」

母親の理論は正しい。素直に首を振る花を愛おしく見つめて唇は動き続ける。

「コトネちゃんも、凜が言った事は自分の為だって少し落ち着いたら

わかってくれる筈よ。ね？ 明日の学校で昨日の事は言い過ぎたって

ちゃんと告げれば、あちらも謝罪してくれる筈よ」

「……はいっ、お母様ー」

可愛げのある悩み。それでいて、1を聞けば10を学び、行動する自慢の

才女たる愛娘の晴れた顔つきに遠坂の妻は穏やかに口を綻ばせる。

「ふふっ、良いお返事ね。それで、そのお友達ってどう言う方なの？」

「それが、スラーと言う外国人の方で。オーストラリア出身らしいですが……」

凜は事細やかに、コトネから口伝した内容をそっくり詳細そのまま家族に話す。

遠坂 凜にはスラーこと、あのパーカーを羽織るスーツ姿で黒髪をゴムで

一括りにした、日本かアジア系と外国のハーフらしき顔立ちで少々乾いた

瞳の女性が、まさかサーヴァントであるとは気づく事はなかったし、人物像を

聞いた両親も、それをサーヴァントであると連想するのは至難だった。ましてや

バーサーカーなどと神たる視点であるものが告げぬ限りは有り得ない閃きだ。

彼女は趣味や特技に関しても当たり障りのない答えで濁したし、汁粉の件

に関しても、長く外国に居住している人間なら知らない事も特別不思議でない。

もつとも、バーサーカーはトラブルを恥だと感じたし、凜も彼女にあるだろう

尊厳を保証するため、自販機の件に関しては曖昧に伝えたが。

出生はオーストラリア。職業はフリーのエンジニアとして日本に来所してる。

そのような不備は無い設定を無垢なコトネに凧も信じ切っていた。母親は、食事の手を止めて娘の説明の節々で笑顔を崩さず頷きを繰り返したし

父たる当主も、食事を終えてナプキンで口を拭き終わると優雅に彼女の話を

内容が丁度切り目を迎えた頃に一言を放った。

「凧 先に済ます事があるだろうか？」

未だ全体の4割から5割は残る肉と前菜を暗に告げると、少女も軽く赤面

しつつ背筋を伸ばして謝罪の言葉を口にする。

「っ 申し訳ありません、お父さま……っつい、話しに熱中してしまっています」

「いや、とても有意義な話だったよ。凧の学友は、素敵な知人を得たな」

顎鬚を撫でる遠坂 時臣。この遠坂家の5代目であり、由緒正しき魔術士。

資質は魔術師としては凡庸なれど、その克己と自律さ。常人の何倍もの

修練を経て得た実力は本物であり、冬木市の魔術師から一定の畏敬を抱かれてる。

彼は、穏やかに子の可愛らしい作法の崩れを窺めつつ思考はこれから先に

行われる非常に大きな。人生を賭ける盤上に想い馳せていた。表面の仮面として

家族愛豊かな父の面を被っても、裏には冷徹な魔術師としての顔がある。

(この幸せな日常も、いずれ終わる。私が根源に到達すれば……) 遠坂の悲願として、根源に至る事は魔術師として、自分の使命として最終到達点だ。

根源。実現不可能な「結果」を齎す事象を呼び起こす全能の渦。誰もが決して到達しえた事がない存在であり、ソレの解明も理解も

今まで誰一人

成し遂げたものは居ないだろう。

だが、『行き方』は解る。通路の作り方だけは魔術師たちが産まれて何世紀か

経つたいま現在、その研磨と修練の果てに得た一つの盤石な方法。

聖杯戦争、六つのクラスの英雄の蟲毒。それによって生じたラインが根源までの

道のりを築き上げる。その段階の一步へようやく踏みしめようとしている。

(準備は整えている……監督役の璃正氏との関係に問題はない。弟子の綺礼にも

アサシンを召喚する手筈は整えさせた。後は、私がああの伝説を呼び覚ませば)

遠坂時臣は、伝説にて人類最古の英霊を召喚しようとしている。

全ての人類の基礎、それにて最初の王。神話に出てくるアダムやイブ

その他の神に深くかかわる系列を除き、その実在は確かな事が発掘された

歴史が証明している。その王が自分のサーヴァントとなってくれれば……！

(叙事詩や文献から、どのような相手であれ臣下として対応する節度は覚えた。

あとは、天が微笑んでくれる事を祈るのみ)

サーヴァントと言う存在は未知の霊基で出来合わさった出来の良い現し身だと

時臣は捉えている。謂わば、劣化はすれど其の時代の本人を良く模倣した存在。

彼は魔術師として、聖杯戦争中は自分の矛となり盾である絶対の守護神に礼節を

忘れず、家族を危険に晒す要求以外では如何なる歓迎も行う覚悟だ。

(確か、明日にでも彼はアサシンを召喚する)

アサシン。サーヴァントのクラスの中では最も戦闘能力が劣ると言われる存在。

だが低い力の代わりに隠密性、気配遮断と言う。マスターに感知させる事のない

襲撃を主とするのが役割だ。サーヴァント同士の戦いでなく、マスター殺しの為の。

(……承諾してくれて、とても安堵している。どのような物が召喚されるか)

魔術師として常日頃から影の刺客に対し余念は無いものの、サーヴァントと言う

規格外の存在から狙われる状況が日中夜続く不安に晒される事は無くなったのだから)

彼は何処か空虚さを帯びてるものの敬虔なる信徒であり、教会の代行者だ。

第八秘蹟会の司祭と言う、誉れ高い名誉と地位があり八極拳の達人である言峰氏の息子。

受け付いた技術・人格・経歴ともに問題ない優秀な人物だ。もし彼が願望機そのものに執着する願いがあんなら、自身を裏切りサーヴァントを

扱って聖杯戦争終盤を見計らい自分を謀殺する可能性もある。単身でも2流の魔術師なら

圧倒して蹂躪できる素質を兼ね備えている。実力行使に打って出る危険性を親友の子であれ

疑わなかった訳ではない。実の子でさえ牙を向く 魔術師の世界とは厳しいものだ。

特に冬木と言うハサンが喚ばれる、この戦争で。彼が暗殺のスペシャリストと共に

代行者の実力で責めてくれば、負ける気はなくとも勝つには骨が折れるだろう。

(だが、その心配はないだろう。わざわざ彼から自己強制証明(セルフ



ギアス・スクロール)を

持ちかけてくれた位だ。私は、その彼の真摯な姿勢に心を打たれ結局する事は

なかったものの、あの態度さえ見せてくれれば恐れる事はない……)

彼は胸に手を当ててこう宣言してくれた。

―我が師であり、第二の父でもある貴方に対し決して背信を成す意思も手を掲げる事はなし

―もし、誓いを崩す事があるならば。この心臓を捧げましょう

(あそこまで忠誠を見せてくれた彼に対し不信を向けるような事、遠坂の当主としても

言峰の親友としても有り得ぬ事だ)

旧き家柄なる貴族の一人として、命を懸けてまで身を預けると宣誓をした綺礼を疑う真似は

遠坂時臣と言う今まで培ってきたものを侮辱する事だ。

既に未だ見ぬサーヴァントと共にアサシンを味方に付けている。

二騎の英雄がこちらの

勢力であると言う事実は、途轍もなく心強い。

(残る不安要素は外来より来たれし魔術師……)

外部から参戦する魔術師。いずれにしろ、この60年に一度の大戦に参入する輩は実力含め

自分に並び立つ可能性、それ以上の脅威も有り得るだろう。

遠坂の権力は確かなネームドを備えてる物の、アインツベルンやアトラス院といった

ネームバリューに富んだ組織は世界中にも各地散らばって存在はしている。

(そして、間桐の翁の動向も探らねば)

間桐家……養子と出した桜の事も相まって複雑な関係ではある。最後に間桐の当主と直に

対面したのは一年ほど前になるだろう。何と月日が経つのは早いものかと溜息が出かける。

(そう言えば、あの軟弱者が出戻りしてたとか聞いていたが……ふんっ、今更なんの未練が)

この冬木にあると言うのか)  
桜はきつと大きくなっただろう。今は、どれ程の魔術の教育を受けているか。

雁夜に対し、時臣の感情は淡々としたものだ。自分の妻に対し未だに浮ついた気持ち

隠しても隠し切れず接してる負け犬。吠える事もできない負け犬だ。

嫌な事を思い出したとばかりに頭(かぶり)を軽く振った時には、小さく食器を置く音と

食事を終える礼を告げる小さなレディーが目に残った。

「それでは、お父さま。凜は自室に戻っています」

「うん……ああ、凜。朝にも告げていたが」

「わかってます。お忙しいのでしょうか？ 私は、教えて頂いた事を復習いたしますので」

少し残念そうな瞳に心は僅かに痛みを生じさせる。聡い子であるが故に、余計に気遣いを

覚えさせてしまう。そのような家の長女として産まれた事を誇りと言えども

あのように逃れぬ辛苦や寂しさを覚えさせしめる事に良心は軽く身を振った。

(いや、全ては聖杯に悲願を叶えてこそ。根源の力を得て、帰還が出来た暁には

遠坂と言う名は永遠に世界に名を刻むであろう。さすれば、凜や凜の子 その子孫にまで

黄金色すら超える輝きは残り続ける)

例え、根源から戻る事が叶わずとも。到達と言う事実がある限りはエレベスト頂点への

到達など目ではない。地上で唯一の成功者としての名誉を授かる事になる。

聖杯戦争は開始を向かえないものの、甘い夢に、今この幸せな一時は浸つても罰はない。

葵と凜に、就寝の接吻を交わした後に。軽く魔術礼装たる自分の愛用の武器たる杖の

調子を確かめた後に、外へと出る。向かう先は、言峰教会だ。

その立ち去っていく人影を、遠坂邸の高所にある窓から。大きな蒼い双眼は

通路へと時臣がいなくなるまで見届けてるのを知らずに。

「……お父さま」

遠坂 凜は父親が外套を纏い夜の冬木に赴くの見届けつつ以前フアンシーシヨップで

買った少し間の抜けたライオンめいたぬいぐるみを抱きしめる。

何も言わなくても血縁であり、聡明な凜にとって父親からの魔術の手解きを受けて

その背を見続けてきたからこそ理解出来る事がある。

父は、自分達を置いて遠くへ行こうとしている。多分それは地理的な意味合いでない

どんな魔術を用いても決して到達出来ない頂きへと向かおうとしている。

名門たる遠坂の子として、その目標は崇高なものであるだろう事は解る。けれど、時折

この自室の窓から覗き見て、闇の中に溶けるように消え行く父の姿を見ると

そのままフツと二度と戻らないのではと言う寂寞が襲って来るのだ。

……カタカタツ。

「ううん……お父さまの事だもの、きっと何も心配いらないわ。どんな時であれ優雅であれ

遠坂の家訓ですもの、私がこんな調子では遠坂の名折れと叱られる」

カタカタカタツ

彼女の私室の片隅で、何か一定の硬度はありそうなものが固い箱か何かに仕切りに

当たるとような音が、神秘的で憂いを保つ凜の表情の翳りを徐々に青筋を立てて

鈍く光る月によって出来る影が、儂い少女から悪魔の形に見えさせる。

カタカタカタカタカタカタツ

「うっ　　る　　さ　　い！」

何なのよ、このド変態アホステツキ！」

極力声を抑えた上で、最大限の怒声を上げると言う器用な真似を手習いの魔術と共に

表現させた少女は、その顔にはとても合わない形相で宝箱を開ける。

その中には、一つのステツキが入っている。そのステツキは見かけ、玩具のステツキだ。

プラスチック製に見える白い鳥の羽らしきものが付いた頭は五芒星と言う、いかにも

早朝で少女向けアニメで使用されていそうなステツキ。だが、普通と異なる部分で一つ

目立つ事があると言えば、これが本物の魔法のステツキでいて、しかも自律している

(傍迷惑な) 自我を宿していると言う事だろう。

凜は、以前このカレイドステツキと呼ばれる先祖が残した(信じがたい) 魔術礼装には

散々な屈辱を味あわされた経験がある。あの、思い出すのも身を引き裂かれるような苦痛

でしかない羞恥と人生の汚点とも言える蛮行(変態行為)は、100万回目の前の元凶を

砕いても積年の恨みは晴れはしない。

凜の力では、このステツキをどう頑張っても破壊はおろか破損も出

来なかったが。

だが、どう言うわけか。ここ最近は一事件での口論と死闘染みた喧嘩の上で冷戦状態で

宝箱に封じ込めてたのだが、どう言う訳か昨日から妙に騒がしい。無視するのも限界だった上で、凜はこの二度と直視するのも御免だったステツキへ

話しかけ、もとい怒鳴りつける。

「あんたねえ、ちよつとは静かにしなさいよつ。ただでさえ最近は、母様も父様も

大きな行事が差し掛かっているからピリ」

『私を移してください 早急に』

「……はあ？」

怒鳴るのを一旦停止して、怪訝な声と顔を作った。

何時もなら、この即席変態魔法少女作成機こと魔法の杖は。自分に對して無茶な行動や

屈辱的行為を要求するか、それが出来ないならば唯我独尊といった自分本位な

他者に全く遠慮や配慮をしない調子の無意味な喋りが売りなのだが、今日は何時にも

増して可笑しい。いや、何時も変なのだが今日はまた何処か違っている。

「あんた、何かしこまった口調で」

『お願いします。私を早急にエーデルフェルトでも隣町でも東京でも何でも良いですから

別の場所に輸送してください。でないと……でないとおお……!』  
凜は、今度こそ困惑した。この自称マジカルルビーちゃんことカレ

イドステツキが

このように振動してるのを見るのは初めてだ。いや、絶交して宝箱に投げ込んだ際は

ブリキ製の箱を突き抜けそうなほどに、外へ出ようと暴れたが。恐怖して震える

そんな様子は本当に初めて凜は見た。

だが……因果応報と言うべきか。このステッキと凜の関係は既に修復不可能だった。

「一体全体、今度は何を企んでるって言うわけ？ まあ、ちよつと私が悩むぐらいには

真剣な雰囲気か垣間見えた演技だったわ。でも、残念ね！

あんたの無駄話に、付き合ってる暇はないの！」

『いやっ！ 本当にマスター！ 今度ばかりはルビーちゃんもマジと書いて本気で

身の危険を感じてるんですって！ あの理知と理性で覆っていると見せかけて完全に

キマっちゃってる奴に目を付けられたら、このマジカルルビーちゃんの貞操が……！』

堪忍袋の緒が切れる前に、凜はこの時間を無駄だと判断して宝箱の封を再度行う。

何か言いかけているものの完全無視だ。既にこのステッキに何の情も持ち合わせてない。

ボタンツ!!

カタカタカタカタカタカタガタガタガタガタツツ!!

……シユン。

「ふう……お父さまから習った消音の魔術、もう一流の域まで達せたわよ」

茶番劇の所為で、先程までの真剣な憂鬱も雲散としていたが空気は何とか平常に戻った。

あのステッキに関わると碌な事はないが、今日ばかりは何だか勝った気分になれた。

気持ちよく眠れそうだと、凜は伸びをして浴室に向かう。

遠坂の家には代々として、肝心な時にへマをすると言う呪い染みた現象が付随している。

この時、もう少し以前はパートナーの関係だったカレイドステッキ

の話を聞けば

彼女も未だ幾らか平穏な日常を過ごさせていた筈だった……。

「『靈器盤』に既にサーヴァント召喚の兆しありですと?」

「ええ、招かれたのは『バーサーカー』のサーヴァントであると見て間違いない」

冬木教会こと言峰教会。その今は無人の時間帯である礼拝堂にて礼服を纏う二人と

時臣は杖を軸として木製の椅子に腰かけつつ打診していた。

言峰 璃正 言峰 綺礼。齢いとして既に人生の終盤に差し掛かる璃正の肉体は

二十代中盤の綺礼には負けず劣らずの神父服越しに張りのある筋肉が見え隠れしてる。

それも全て、求道に人生を賭けた上で我欲を去った上での求道の賜物であり

聖職者として、神が遺した奇跡の産物を守り抜く上で得たものだ。

そして、その父の技術を幼少から学び、施された綺礼においても体術は父に未だ

追いつけずとも代行者に至る力を秘めた鋼の筋肉の装甲を担っている。

然しながら、これが人同士の戦いならば100人力なれど聖杯戦争は人の基盤を超えた

謂わば人の形をした戦闘機同士の対決だ。サポートは出来てもサーヴァント同士の

戦闘で単純な人間の武術は猫の手よりも非力だろう。

靈器盤とは、監督役が持つサーヴァント召喚を報せる魔術器具。どのような

クラスが招かれたか、現存する英霊の数を表示する優れもの。

時臣は、親友の璃正から報告した急性とも言える早いサーヴァント召喚に多少の

狼狽がなかった訳ではない。だが、常に優雅たれの家訓を思い起こして短時間で

冷静さも取り戻した。直ぐに詳しい近況の事情に移る体勢へとなる。

「マスターから監督役への挨拶などはあつたのかね？」

「いや、一日過ぎたか何の音沙汰も御座いません。バーサーカーと云う

御し難いクラスに魔術師が手間取っているか、他に事情があるのか」

「ふむ……いや、少し取り乱したが焦る事はあるまい。七つの英霊が

降臨してゆえの聖杯戦争。その始まりなくしてはサーヴァントは只の

野良武者同然。逆にその召喚したマスターが憐れに思う程だよ。

本来の霊格以上の力のものを喚ぶと言う事は、それだけ消耗を

余儀なくされると言う事なのだからね」

聖杯戦争は、七つのクラスが争つて故に願望機が隆起する。それ以前は

強大な霊格を行使する事で悪戯に自身の浪費に繋がるだろう。

もし既にマスター候補の人物に目星を付けており、虐殺するなどの外道さを発揮するならまだしも。そんな効率悪く強硬手段に出れば直ぐに

発露して身内に近しい監督役の厳罰を味わう事になる。

時臣は直ぐに自分の盤台が不動である事を確信した。

予定通り、このまま最強の触媒が届くまでは心安らかに過ごせばいい……。

同士に対し首を向け、本来に話すべき議題へと移らせる。

「予定外の事は起きたが、なに 大事ではない。いま暫く

バーサーカーを呼び出したものについては使い魔で調査をするにしても、それ以上の対策は構わないだろう。

それよりも綺礼。やはりアサシンを紹介するのだね？」



「はい。冬木と言う地の特性上ハサンを喚ぶに越した事はありません。何よりも

隠密と偵察に関して彼らに並ぶものは居ないでしょう。

我が師のサーヴァントが剣と盾なれば、私のサーヴァントは師の目と耳です」

綺礼の言葉に鷹揚に時臣は頷く。第三次の戦争、璃正の保有してる情報や残る記録を

見るにあたって冬木の戦争では山の翁を筆頭とする暗殺集団が召喚される。

無論、その魔術儀式に手を加えて別の古来か近代にあたる暗殺者を召喚する事は

出来なくもない。だが、ソレを行うメリットは特になし過剰余分に戦力だけ

求めて無理な事を試すは愚の骨頂。過去の遠坂の魔術師に倣い、自身も自分の心に

従って正道たる儀式手順を施すだけだ。

「散々口にしてきたが、ゆめゆめ油断する事はないようにな綺礼。

古来よりの暗殺集団。サーヴァントと言う使役する存在であれども十字軍と

敵対してきた存在。君は聖堂教会の代行者であり、アサシンの関係は……」

「確かに、彼らとは教義において私と異なる部分がある事は重々承知しています。

然し、彼らの歴史に刻まれる暗殺の所業は全て神への敬虔さと共に、その神の

教えを歪め利己的に強欲を満たそうとした者達への鉄槌として産まれた事」

聖書を胸に押し当て、目を閉じたまま静かに説法を行うように綺礼は言葉を続ける。

「彼らと私の教えには齟齬がある事は必然、ですがソレもまた神から賜う試練です。」

汝の敵を愛せよ。そう、神の語句に載っています

最初こそ確執はあれども、真摯に私が訴え出れば彼らも私の言葉を理解しましょう」

参った、と言わんばかりに杖から少々手を離して額に手を当て時臣は首を振る。

呆れたとか言うマイナスな感情からでなく、感嘆の意味でのジェスチャー。

「フツ……綺礼、我が弟子よ。男子、三日会わざれば刮目（かつもく）して見よと言うが

昨日よりも増して、君から啓蒙の輝きが強まるのを感じる」

「勿体ない、お言葉です」

「いや、謙遜せずとも良い。だが、これにてはつきりした。

少々迷いもあつたのだが、凜の後継人に君ほど相応しいものは居ない」

「我が師よ、それは」

何時かの時、自分が聖杯戦争にて不慮の死。または大望の根源に至り、その帰還の不可

が決定された時に遠坂の家には未だ幼少の凜が家督を継ぐ。

娘は年齢の割に大人びてはいるが、子供だ。葵だけでは遠坂の家を守り抜くには

余りに、我が家のブランドは寄って来るハイエナ共が多い。自分と言う獅子が消えれば

我が妻と子を巧言令色で財を貪ろうとする者は後絶たないだろう。

親交では、言峰を除き盤石な家は競い合う間桐を除いては遠縁のフィンランドの家門だが

アレはハイエナの中でも優美が付く存在であり、任せられるものではない。

この冬木に集う2流3流の魔術師らよりも、身近な仲間であり弟子の言峰は長い間

交流を続けてきた。少し前まで、空洞めいた気配がどうにも不安を過っていたが

この若き頃の璃正氏を彷彿とさせる清廉さを帯びた佇まいを見れば言う事はない。

それから少し時間をとり、三人での予想しえる不慮の事態での対応、報連相の

確認を取り合って談合を終了した時臣は、しっかりとした足取りで自信に満ちた目で杖を鳴らし、その背中は教会の扉より見えなくなった。

綺礼は、その背を見届けて正面の扉を閉じた後に振り返り少し目を瞠った。

父が、ハンカチを出し目元を拭っていた光景を目にしてた。

「父よ、どうされましたか？」

「いや、なに……これは感涙だ。」

綺礼よ、少し前は執拗に自分自身を痛めつけて何か得ようとしていた

お前を見るのは、とても痛ましかった。

だが今のその瞳には確かとした光がある」

その言葉に、父から光を帯びてると言われた子は硬直しながらも手は目に触れていた。

「……私の苦しみに気が付いてたのですね」

「子の異変に気付かぬ親が何処にいるか。だが、求道者として一人の父として

綺礼、お前が自身の苦しみを晴らすには自身の力で打ち破らねばならんと考えてた。

そして、この予感が正しいのなら。我が子よ、お前は自身に打ち勝ったのだろうか？」

その言葉に、確かな答えはなくとも綺礼はただ口元に笑みを模るに留まった。

だが、璃正にはそれだけで満足だった。

「その答えが何であれ、私には祝福の言葉以外掛ける道理はない。だが、もしこの

戦争が終着する暁には、聞かせて貰っても構わんがな？」

「ええ、父よ。その時は、特上のワインと共に話しましょうとも」  
踝を返す綺礼を、穏やかに璃正は見送る。彼が何処へ向かうかは聞かずとも解る。

丁度日中帯に、外国人墓地での供養の依頼が頼まれた事を聞いていたからだ。

(だが、何もこのような夜更けに頼まずともな……)

何かしらの罫ではないかと疑ったが。綺礼が直に依頼人に会い、日の光に抵抗ある病状

がある事を聞いた為不安はない。何より、大抵の悪鬼程度では代行者の

実力は依然劣らず鋭さを見せる実子の手で葬られる事だろう。

……カツ カツ。

璃正に告げた通り、綺礼は外国人墓地にいた。

周辺一帯に綺麗に整えられた墓石が立てられており、彼は一つの紙袋を携える。

——どうだ 魔笛の序章は

墓地の奥へ奥へ歩き続けると、闇夜に流れる生暖かさを伴う風に  
乗って一つの声が

綺礼の耳を打った。だが、彼はそれに微塵も驚きを示しはしない。

ただ、口の端を吊り上げて呟く。

「ふむ、些か苦勞はしたがね。

最後の場面で、父が感涙したのを目撃した瞬間は喉を鳴らさない事に必死だったよ」

——道化師の役柄は 不満か

「いや……斬新なやり方だと感じたよ。

君の言う通り、自身も巻き込んで予測出来る破綻の前に石を積み  
上げると言うのは

中々に私のこの心に潤いを満たしていく」

——笛吹きは　もう直ぐ整う

「期待してるとも、同好の士よ。

なに、斯様なものを見せてくれた礼として。君が静かに花見をする権利を損ねはしない。

それにしても、師の痛々しい姿は見てられなかった。

目指すべきものが、直ぐ目に届く範囲を見渡せばあると言うのにな……」

ザアアア……。

気付けば長身の男に並ぶように、一人の中性的な顔立ちの人物が無遠慮に、冒瀆的に

余り清掃なされてない墓石を椅子代わりに、ティーポットを携えていた。

「……乾杯しようではないか、綺礼」

「何にかな？　月夜に舞い降りた墮天の御使いよ」

「なに、簡単なものだ。これから産まれるだろう愛しい子等と……昇華される子達に」

「ククツ……　乾杯」

月は無情に照らし、ただ見下ろすのみ。戦士達に休息はなく、また覚醒もなされず。

宵闇は目覚めつつ、そして背負うものとも邂逅した。恐怖は色付き始めている。

英雄の到来はないのか？　いや、必ず来る筈だ。ほら、あれを――覧。

「チツ……この私が何で子守りなんて」

「……」

「おいっ、ガキ。黙ってないで何か言え」

「私はガキじゃない……私の名前は桜」

「そうかよ 私は」

「私は ただのゲブラーだ」

## 深紅

夜の帳 月が曇りに紛れて闇が一層と濃くなる中で  
一人の虚空を帯びる少女は壁に凭れ掛かっている。

(きょうは なにをされるのだろう)

少女の名は桜 かつては遠坂 桜と呼ばれた”モノ”

戸籍上、現在は間桐 桜と呼ばれるが。その存在として動く  
人として生きる故の核とも言える部分を幼い子は欠落していた。

喜びを 怒りを 悲しみを 憎しみを 笑いを 慈しみを

驚愕を 興奮を 緊張を 憧憬を 嫌悪を 優越や劣等感を

ありとあらゆる感情を、少女は一年前に奪われてしまった。

肉体の全身、あらゆる穴と言う穴を這いずり回る蟲の餌食にされ  
彼女の心は長くはない間に壊れ果ててしまった。

何もかも奪われてしまった彼女のの中に残るのは無念や絶望と言う  
人生觀の終わりに浸るものばかり。

既に、間桐の魔道に染まる事に対しても表立って忌避感や表情に  
恐怖や嫌悪感を浮かべる事も無い。いや、出来なくなってしまう  
た。

数か月、いや数週間だったろうか？ 何も感じなくなってきたの  
は。

思い返しても日にちが曖昧だ。だけど、桜にとってはどうでも良  
かった

時間の概念など。蟲が責めてくるか来ないか その時間の区切り  
以外で

特別なにか考える必要なんてない……。

ある時、どこかで会った気がするおじさん。そのおじさんが

御じい様の家に来た。おじさんは いたい事をすすんでおこなう  
変なひと。

御じい様や、その手伝いの男の人に比べれば痛い事はしてこない。  
けど、なにをかんがえてるか 桜にはわからない。

間桐 雁夜は、心身を打ちのめされた子供に対し安易な希望を持た

せる事は

心を壊しかねないと考えて、最低限の労り以外で桜に対して干渉する事なく

文字通りの血の滲むところか、半分は血を吐く修練に身を投じていた。

その、悲しいすれ違いは桜の本質を雁夜が理解するに至らない結末になる。

彼女は心を絶望の殻で覆って守ってる。その言葉は正しくない。

既に限界なのだ。彼女の器は 大地を踏みしめる為に大切な土台は

ガチャ

(ああ またよばれるのかな)

また、あの蟲蔵に呼ばれる。今日は、あのおじさん？ それとも御爺様の傍に

良くいる男の人？ いや、本人が直接かも知れない。

別に誰でも良かった。自分の体が蟲と同化される事に変わりはないのだから。

カサカサと、胸を、股を何度も何度も行き交う歯ブラシのような毛先と硬い

感触が無数に頭から爪の先まで覆うのに慣れてしまった。

それを悲しがる感傷すら浮かべるのに、未だ艶が見られる茶色の髪をしてた子供が

担う精神は頑強ではない。ただ無意識に人が生きようとする

生存本能としてのセーフティが、その凌辱に慣れさせてるだけだ。

戸が開く。革靴を鳴らす音、そして少しだけ消毒液と不思議な臭いだ事のない

匂いが鼻を擦る。

現われたのは想像していた三人のどちらでもなかった。今まで見た事のない女性。

黒いポニーテールをした、クリスタルのような目の女性。

お医者さんみたいだ。よく、お姉ちゃんとテレビを見た時に映って



いたドラマ

とかに出ている、お医者さん。

御じい様に呼ばれてきたのかなと桜はぼんやり思う。けれど、あの便宜上の祖父が

この屋敷に医者を呼ぶ事に対しての違和感も幼心に浮かぶ。

透き通る瞳に自分の顔が映っていた。それを見て、随分と自分の髪の毛は汚れた

色になったしまったと明後日の思考が過ぎる。

ただ無言で自分を見つめる女の人の。黙って動かないばかりだと、ぶたれたりして

蟲蔵に連れていかれるかもしれない。それは嫌だから口を開く。

仕方がない痛い事や辛い事は、じつと時間が過ぎれば無くなるけど。

わざと何かしたりしなければ、もっと痛くなったりする事はない。

賢い桜は知っている。御爺様は、長く痛かったり苦しめたりする事を知ってる。

けど、桜を決して楽にしてくれる事はない事を。

なら、希望(死)がない限り 注がれる絶望(生)は少なくともいい。誰ですか？ という発音を上手くできたか自信はなかった。けど、

聞こえたらしい。

女の人は、しゃがんで自分が顔を上げなくても見える位置になるとこう言った。

——貴方を助けに来た

(助け?)

(助けて、と言う意味なんだろう)

(もっと痛い事をするって言う意味だったっけ……)

その人は、そう言って手を差し出した。

少女は、手を差し出されたら機械的に握るように体は染み込んでいた。

でも、手を握っても外に出る事は終ぞない。暗く 蟲だけしかない地下室だけ。

だから、促されるままに その手を握った。

淡い光が体を包む。その前に見た女の人の顔つきは、何処となく凄く悲しそうに見えた。

(きょうは だれがくるんだろう)

女の人は、自分を遠い場所に連れて行った。御爺様は近くにいない、見知らぬ場所。

何処なのか、どう言った場所なのか。質問する気持ちにはならなかった。

間桐 桜は、自分から何かを聞こうと言う。心が歩く事を忘れてしまっている。

自分と同じぐらいの女の子が、傍に付いている。

その前にも、色んな人を連れて来た人に紹介されて。最後に、この自分と同じ年に

見える少女を紹介して、暫く一緒に過ごして欲しいと言われた。

それが一体なんの為になるか分からないけど、従う以外に桜の最善はない。

「アー サクラ。このロボットって 可愛い顔をしてるでしょ？」

オールアラウンドヘルパーって言うのよ。ヘルパーロボットってわかる？

分からないでしょうね、この時代の化石見たいな……あー、はいはいわかってるわ

管理人。ちゃんと、情操教育に相応しい言葉を使えって言うんでしょ？

ヘルパーロボットって言うのはね……そうっ、この時代の漫画って言うのに

照らし合わせるなら、青い狸型、違うわ ネコ型ロボットと思えばいいわ。

掃除や泥棒侵入の報せ、コーヒーを作ったりと何でもござれなのよ。

けど、これって機嫌が悪くなると パシユーンって体の全身から鋸やナイフや付いた

アームを全身に生やして人をぐちゃ……え？ 何よ管理人

それは楽しい話じゃなくて物騒な話ですって？ もっと和やかな話にしる？

……あのねえ、ティファレットはもう何百年もこの姿形なの！

姿や心は永久に10歳程度かも知れないけど、ティファレットの知識は既にこの世界の

どんなパソコンより上なの！ 子供ってのはブラックジョークを好むもんでしよう!?

はあ!? 何よ、ティファレットを馬鹿にする気っ!!?? この似非塵あつ

め女っ!!

なんで、あんたがその姿なのよ!! 大体……っ」

茶色のケープとスカートの女の子。その女の子は盛んに、上空を見上げては

金切り声をあげて、管理人って言う人を罵る声をあげている。

私に話しかける時に限り、よく見られる光景。

もう一人、同じ格好でショートヘアの男の子が居る。その子は私と同じように無口で

ティファレットと呼ばれた娘の振る舞いを何時も微笑んで見守っている。

あつちで話してるのと違って仲が良さそうだな。

ただそんな事を思い浮かべると、その子は私が何を考えているか頭の中身を読み取ったように、固定された顔のまま私に言う。

「ティファレットは、ああ言う風に管理人とよく口論になるけど。本当は誰よりも

今の管理人のほうに心を開いてるんですよ。だって、今の管理人は余程

私たちティファレットに一番近いですし、一番遠い人ですから。

自分もティファレットだけど……あそこまで今の管理人に気軽に接する事は出来ないな」

私にはよく分からない。この子の言ってる事 ティファレットと言う子の事

管理人と言われている、最初に私の部屋に入って手を差し出してきた人についても。

大きなところ、色んな人が行きかう所。

この場所では様々なスーツの人が下に行ったり上に行ったりするエレベーターに乗っている。

たまに、私に挨拶したり、お菓子を渡したり、頭を撫でて一声かけたり。

色んな人が此処にはいる。けど、私にはそれが何でそうであるのか分からない。

雰囲気が全体的にピリピリしている、私の髪と同じような汚れた色のスーツの人は

鋭い目をしながら、此処がロボトミーって言う名前の会社だと説明した。

翼やら、各支社と別会社の技術を集結させた……とか、桜には難しい用語ばかりを使う。

けど、最後に。その汚れた色合いの髪とネクタイの男の人は告げた。

「貴方の出生と、今までの境遇について聞きました。だからこそ言います

まだ、取り返せませうとね」

この人も、良くわからない言葉を桜に言ってくる。ただ、少しだけ可笑しな言い方だと思うけど、馬鹿にしている。馬鹿にする笑いを浮かべていた。

「私は既に受け入れてしまいました。Ms. は未だ私のように崖の縁に至っていない。

後戻りする場所は幾らでも築けますからね」

緑色の背中までかかる長い髪の男の人。何時も御爺様の隣にいる人にちよつとだけ似てる

その似てる事に、最初に会った時はちよつと後ずさった。男の人は

特にそれに言う事

もなく、額に張り付いた髪の毛を払い簡潔に眩く。

「久しぶりに見たな、子供は」

茶色い、レゴブロック見たいな感触がしそうな目。それが桜を見下ろして声が続く。

「……でも、俺は外の子供って言うのを一度は直接見たかったけど。

お前は、普段見慣れている奴等と一緒に目をしてるぜ。やりきれないよな？

本当はもうちよつと違う刺激がくるのを期待してたんだがなあ」

私の目を、木片みたいな色の瞳が覗き込む。その目は、よく朝に顔を洗って

見る私の目とそっくりだった。時々出逢ってはティファレットと言う子に

叱られる男の人は、よく こう口にする。

「俺みたいになるなよ。いや、俺達のようにには か」

この色合いの目をした人は、此処には結構いる。私とまったく違う姿だけど

ほとんどそっくりな目をした人と、よく出逢う。

「はいっ Miss桜！ わたしマルクトって言います！ よろしくお願いします！

この施設についての機能を教えますよ！ 貴方のサポートをいたしますっ!!」

特に、このマルクトと名乗る女性は。一番深く 空虚さを宿していた。

緑色の人の目よりも、昏いものを。

「このルームは見ました？ 管理人が新しく拡張して作ったリラクゼーションを

目的とした部屋なんです！ このスイッチを押すと、ほら瞬く間にアロマの香りが！

こんな快適な部屋を、職員全体が使えるよう設置してくれたなんて！

管理人は凄く優秀ですよねっ！」

いまの管理人は、とても素晴らしい人なんですよ！ と、この人はよく力説する。

けれど、そう自分に言い聞かせてるように、桜には思えてならない。最初こそ、この何処だかわからない場所に連れていかれた時に色々話しかけて

いたけど。あの白衣の女の人が手引きして最近は何れも余り会わない。

「……………ええつと。Miss桜……………今日の調子はどうですか？

何処か、体が痛かったりしたら直ぐに近くにいる人に教えてくださ  
いね？

管理人が、ちゃんと処置してくれると思いますから……………」

この女の人は、あのおじさんに凄く似ていた。

御爺様に、私と同じ目に遭っているおじさんと。いつも、私に対して傷つけは

しないけど他所他所しかった、おじさんに……………。

この場所は、全く知らないところ けど とても何処かよく知つて  
るように思える所

御爺様はいなくなつたけど、御爺様の家を感じさせる。

私はこれから先、何を此処でするのだろう。

何日も経つた気がした。今日も、私はティファレットと言う子と一緒に座つて

他のスーツの人達が良くわからない凶や、生き物のような 訳の分  
からない物体の

写真なりを見て口々に意見を募っているのを遠巻きに見ている。

ズズツと啜る音、そして豆を挽いている香ばしい一筋の煙が私たちの前を通り過ぎていく。

ティファレットは職員達の様子を観察しつつ、隣で行われてる様子を最初は軽く顔を顰め

数時間経つてからは、げんなりとした表情になるも未だ沈黙を守り。

そして最後には我慢できないとばかりの悲鳴を上げた。

「ケセドっ、あんたソレで何杯目よ!! いい加減、動作を見てるだけで胸焼け

しそうになるわっ! 自分の部署で飲みなさいよっ!!」

女の子が怒鳴り散らして指すのは、一杯の良く使い慣れて愛用されてるらしいコーヒーカップ。

コーヒーを引用する男の人の隣には、山積みになっている豆や紙パック、ソレに連なる

缶や箱が置いてある。周囲には、噎せ返るようなコーヒーの臭いが蔓延し始めていて。

中心地帯を歩く職員は、心なし足早に桜達の前を通り過ぎていた。そんな人達を関知

する事なく、桜の父親を彷彿させるようなどっしりとした物腰で彼は謳う。

「しょうがないだろう。管理人が、今日はここでミーティングを開催するって

決めたんだから。中央本部は、上層や俺達中層が集合するのに一番適してるんだよ」

「それとコーヒーを100杯以上飲む事に何の繋がりがあるのよ!!」

「いやあ……外の、平和な世界のコーヒーって選り取り見取りなんだぜ?

管理人も気が利くねえ。こんなに種類が豊富のコーヒー豆ドリツプパック。

煎れる為の器具も選り取り見取りと来たものだ。

つぐつぐ、俺はこの会社に入社出来て今日ほど良かったと思う日はないよ」

「……あんた、コーヒーさえあれば何処でだって幸せそうに生きれるのね」

もはや、人外の存在を見る目つきでティファレットはケセドより距離をとる。

クラシックスタイルなスーツを着る、青い髪の男の人。ほんの少し、その髪の色や

顔つきは御爺様の助手をした人にソックリなように思えたけど、直ぐ近くで

見れば全然違っている。この人は、虐めてた人みたいに桜を見ても目を反らしたり

怖がっているような目つきはしない。

青い人は、ティファレットも 行きかうスーツの人も 管理人って呼ばれている

私の手を引いた人の事も 全員同じ表情 同じ目で見ていた。

空っぽで、生き物も生きてない物も同じように。

きつと、この人にとって自分も他人もどうでも良いと思っている。

多分、この人は蟲の中に突き落とされても。慌てふためきはしても、自分の体に

蟲が入り込む事より一杯のコーヒーブレイクの時間が無くなる方を焦りそう。

そして、その内蟲風呂の中でもコーヒーが飲む事に気付けるのなら。何て事なく

順応して、のほほんとコーヒーを啜るのだろう。

「驚いた。ケセドが予定より早めの時間に来るなど」

「イエソド。こいつつてば昨日から、ここですつと、あの黒いタールを延々と

飲んでるのよ。何かあんたからも言いなさいよ」

「ああ、成程。道理で」

次に、紫の髪 of 男性。その次に茶色い長い髪 of 不安そうな顔つきと快活な同色の

ショートヘア of 女性が、ほぼ同じタイミングで訪れる。

そして最後に、緑の長髪 of 男性が欠伸をしながら登場する。全員から芳しくない目線を

向けられても動じない様子で彼はビール缶らしきものを懐から取り出し口に含む。

それをホドと呼ばれる女性が少し焦った様子で注意した。



「ちよ、ちよっと。子供の目の前で飲まないで欲しいんだけど」  
「安心しろよ……容器だけさ。管理人は酷い奴だと思わないか？」

もうすっかり、エンケファリンも極度の精神疾患の発症を除いて使用制限を

掛けちゃったし、俺に他の液体を投与する事を禁止させてるんだぜ。

ただの蒸留水なんて、なんの足しにもならない」

「確かに、酷い奴だな。個人の自由を尊重する、この国の法律で言うなら

セフィラの自由にさせても構わない筈だ」

「だろ？ この世界の至るところに缶コーヒの自販機が設置されている。

なのにアルコール類だけ除け者にされるなんて世の中が間違ってるよ……」

青と緑の男性二人の無意味な批評と軽口は、そんなに大きくなくとも

床に反響する独特の革靴の音と、周囲で勤務していた職員達の声が  
あえて静かになっていく事によって中断される事になった。

桜は、モーゼの海のように。多数の職員に道を分かれて歩いてくる  
白衣でスーツの、あの女の人を見る。隣には、見知ったおじさんが  
居た。

いや、良い意味でだけど外見は大きく変わっていた。髪の毛は白  
けど、遠い昔のように若々しい顔になっている。

「——桜ちゃんっ！」

喜色を含んだ声だった。だが、桜には その声にどう反応すれば良  
いのか

喜ぶ事の表現も 怯える事も表に出す事をなくなってしまう壊れ  
た子供は

ただ、光のない眼で彼を迎え入れた。

間桐 桜と雁夜が対面する数時間前に。このような怒声染みた大声と

机を叩く音が、一室に響いていた。

「つどうして 桜ちゃんと会うのに制限時間なんて設けられなくちやいけないんだ！」

生気が充実した顔、両目に力を込めて目の前の無機質な顔の女性を睨むように見つめる。

つい数週間前（正確な現実時間では丸一日程度）は左半身が麻痺していたが

今では顔の表情は大分動かす事が可能になっている。

体の機能は大分戻ってきたが、後遺症として精神的に受けた苦痛で脱色した髪の毛の

色は元に戻らない。もつとも雁夜はそんな細かい事は気にしない。

指示通りに養生を続け、時折に不安を抱えつつ何度も虚偽の疑いの旨を口に出し

脱け出そうとした事もあった。

その都度、説得されて白で統一された部屋で横になり。たまにトレーニングルーム

といった場所でリハビリを行う。食事も固形物は問題ない。

お陰で、体の調子は良い。フリーライターとして危険な場所をカメラで撮影した頃と

同じぐらいの俊敏さとは言えないものの、走る事は出来るしマンホールの蓋だって

力を込めれば取り除くぐらいの筋力は戻って来た。

「彼女の精神が、とても歪な均衡で保たれているからだ。我々は定期的な刺激を

各セフィラと共に患者の彼女へ与えてるものの、成果は得られてない。

だが、現状ではこれ以上の環境の変化が彼女に起きるのは極力避け

なくてはいけない」

「だったら家に帰してやればいいじゃないか！ もう臓硯の支配から解放されたんだ！

葵さんだって、凜ちゃんだって。桜ちゃんが帰ってくる事をずっと心待ちに……！」

女性の小さな吐息の音が、ブリーフィングルームと呼ばれる場所に微かに生じる。

向かい合った机を挟んだ向こう側で、彼女は手を組み替えつつ告げる。

「前に君は言ってたな。遠坂 時臣 間桐 桜の実父が間桐 臓硯なるT-04-50亜種

へと魔術師と言う存在の教育のために養子に出された事を」

「ああつ、時臣は冷酷な奴だ！ 自分の娘を平然と、あの化け物の蟲蔵へ」

「遠坂 時臣氏は、T-04-50亜種の正体を把握していたのかな？」

その言葉に、一瞬頭に空白が出来てから。雁夜は一瞬顎に手を掛けて、厳しい顔は

依然と保ちつつ顎を微かに縦に振る。

このバーサーカーは、バーサーカーらしからぬ非常に理論的な説明を兼ね備えている。

ちよつとの粗さは追及されかねない。

「それは、間違いない筈だ。間桐と遠坂の家は旧くから競つてる間柄だし、あいつは

自分の父親から正体を知っていて可笑しくない」

「それは、先入観に基づいた推論だろうか？ いや、君の意見が正しいと仮定した上で

話を進める事にしよう。

直に肌から身を染みているだろうが、君に施された肉体改造が正しい魔術師の育成

なのかは、さておき。君が桜の実父の立場だったとしよう。

あのT—04—50亜種の元にだ。諸事情があるとすれ自分の娘の次女を養子へ出す

として一体どんな理由が挙げられると思う？」

「俺が知るもんかよっ！　どんな望みが叶うとしたって、桜ちゃんが自分の子供なら

あんな化け物蔵で過ごさせるような真似を見過ごすものか!!」

「——じゃあ、なんで遠坂　時臣氏並び遠坂　葵氏は黙認したんだ？」  
頭に血が上った自分を、言葉の形をした冷たい水が一気にかげられて急速に血の気が引く。

「……あいつは、ともかく。葵さん　が　桜ちゃんを間桐の家に預けた……理由？」

——これは遠坂と間桐の問題よ。魔術師の世界に背を向けたあなたには、関わりのない話

あの公園で、表面上は平気な口振りだったけど。悲しさを瞳に湛えていた自分の幼馴染。

その顔を、もう一度三人で一緒に笑い合ってた頃に戻したかったから……。

そんな彼女が、間桐の魔術の事情を知っていたか？　いや、そんな筈はない

全て悪いのは、知った上で間桐の家へ売り飛ばした時臣ただ一人。あんな地獄だと

知りうえた状態で娘を平然と引き渡せるような人柄では絶対にならない。

「時臣が全て黙ってやった事だ。葵さんは、何も知らなかった  
そうとしか考えられない」

雁夜は全ての責務、過失を時臣一人に決めつけようとする。だが、そんな思考を

目前にいる、決して声を荒げる事のない機械的な口調の女性が阻害する。

「君が葵氏に対して挙げる高評価は色々聞いた。同性として、私の世

界では絶滅危惧種の

大和撫子な女性を見たくはあるね。

私見はさておき、客観的にも一般的な常識でも自分の娘を直ぐに会える距離だと

しても養子に出すと言うのは非常に大きな決断がある所業だ。

私も君も、鶴野氏に関しても魔術の知識といったものに深い造詣を有していない。

T-04-50 亜種へ間桐 桜を手掛ける事になった要因。

それを突き止めない限り、また遠坂 桜はだ。くく桜として別の場所に預けられる

可能性は少ない。君が彼女の立場になって考えて欲しい。

まだ物心が付いてから数年ほどの幼児が、あの壁から地面にかけて夥しい肉食の

節足動物に穴という穴にマーキングを施される。その期間は優に一年。

そして、その一年ほどして。ようやく開放される子供。やった 私は

これからパパやママ、お姉ちゃんと元通り幸せになれるんだ！

……だが、両親は。その何かしらの事情により戻ってきた桜を受け入れない。

まだ別の、信頼は出来る可能性も少なからずあるかも知れない他所の場所に住まわされる。

子供はきつと思うだろう。ああ、やっぱり私は何処にも居場所はないんだ……とな」

一気に喋りきった彼女は、お汁粉の缶を開けると喉を鳴らして豪快に中身を減らしきる。

飲み切った缶を置く力は、かなり強めで。アルミの缶には窪みがない。さされていた。

決して揺らがない瞳は、幾分体を小さくさせた雁夜を覗き込む。

「……君は私のマスターだが。召喚された際に既に瀕死で、メデイカルームに

移送する時に謔言で何度も言ってたな？ 桜ちゃんを助けて……と」

「それを私たちは何物にもおいて全ての優先事項にする。

よって、Miss桜の取り巻く環境ならびに家庭事情その他の問題の解決。

体内の心臓深くに埋没しているT-04-50亜種のギフトらしきものを完全に除去する事。

それ等を全て処理しない限りは、前にも再三話した通りだ。

この会社に君と共に居て貰う。私、我々が巨大ツールアブノーマリテイの影響下から

脱して居なくなるまでの期間はね」

ぐうの音を出さない、その言葉の節々が付け入る隙間がない言葉に雁夜はまたもや

弁論の声を封じこめられた。令呪でサーヴァントに、余計な指図をするなど

命じる事も出来る。だが、この冷静な医者並び学者染みたバーサーカーに対して

あやふやな命令を強制しても、どれ程の効力が及ぼすか不明だし。命の恩人でもある。

無理に関係悪化を招く事は避けたい。雁夜にとつての倫理、それと間桐ならではの

処世術が、逆らったり高圧的に優位に立とうとする事を避けた。

「……ちよつとは、桜ちゃんと話す機会を作ってくれるんだよな？」  
「ああ、何なら今すぐで構わない。ちようど、君を他のセフィラ全員と

紹介するのに

良い機会だ。約一名、いや二名を除いて」

大量の荷物を抱えた、ある程度の戦い慣れてそうなスーツの男たちが荷物を

背負って管理人と呼ばれるサーヴァントの後ろを付いて行く。その隣で

居心地悪い様子を余り隠そうとせず荷物持ち達を盗み見る雁夜。彼は少し迷ったものの、小声で質問をする事にした。

「彼らは？」

「ギムデリ イエティ アレックス。全員、優秀なエンジニアだよ。アレックスは、この施設で働く期間は永い。私が君の傍にいられない時は

出来る限りの応答と護衛として就かせるから宜しく頼むよ」

アレックスと言う名の、茶髪かった長身の男性は少し笑いつつ肩に提げた

大きな荷物をものともせず片手を上げる仕草で挨拶する。

他の二人も似たり寄ったりの恰好だが、その重量を苦にする様子は見られない。

雁夜は、短く首を動かして挨拶に応えて管理人に目線を戻し次の質問をした。

「この大荷物は？」

「大体は、会社に必要な物品を出来うる限り外から買い込んだが。

残りはセフィラへの贈答品だ。日頃の感謝と、初めての世界に遭遇した記念品としてね」

(……何で、この人はバーサーカーなんだ?)

つぐつぐ、バーサーカーと言う呼称が全く合っていないと考えつつも。歩くにつれて

彼女に気付いた様々な制服の男女達が人垣の道となるのを目にして、彼女が

本当にこの不思議な会社の地位の頂上にいる事を認識する。

そして、ようやく未知の環境の中で念願の守りたくて会いたかった馴染み深い

少女を目にする事が出来た。笑顔と共に、名を告げて彼女に一步踏み出す。

——然し。

「……さくら、ちゃん？」

間桐 桜は、雁夜の声掛けに無反応だ。期待してたような、おじさ

んつと言いつつ

あの日の幸せな公園の情景のように無邪気な笑顔を浮かべる彼女は居ない。

人形のような服を来た同年代らしい少女と手を握ったまま、ただ無言で

雁夜を見返す顔には喜び、嬉しき、安堵の色合いは無い。

「桜ちゃん、俺だよ？　雁夜だよ……辛い、思いをしたよねっ。でも、大丈夫だよ

これからはずつと俺が桜ちゃんを守る……だから」

「おじさん、は」

その人の形に切り抜き、空洞めいた存在感を雁夜は忘れていた訳ではない。だが

病室で養生する内に、ただ必死に憎悪を完遂する想いで逃避していた激痛が緩和

されるに従って、幾らか頭を整理して考える一般的思考が戻っていた。

だからこそ、この少女に齎されたモノが。

どれ程壮絶で、どれ程に自分が努力しても取り戻す事ができない事を知ってしまった。

「おじさん、は。元気そうだね」

「……それで、お家に 帰ることを桜に伝えるために 来たの？」

「地下に 呼びに来たんでしょ？　おじさんが私の元に来る時は

それが一番 多いもの」

少女の諦念と絶望が詰まった言葉に、忌まわしい記憶の洪水が襲う。

——桜ちゃん 臓硯が呼んでるよ。……御免ね 俺がきつとこんな事が続くのを

止めてあげるから。もう少しの 辛抱だから

——桜ちゃん また臓硯が……地下蔵に。

——……御免 桜ちゃん。あいつが

——桜ちゃん 今日 も



——桜ちゃん ——桜ちゃん ——桜ちゃん ——桜ちゃん ——  
——桜ちゃん

「あ……………ああああああ……………つつ！」

（俺は 何をやってたんだ？）

（助ける……………あんな風に心を壊してしまった少女を 助けてみせるって？）

（駄目だ、出来ない。聖杯の願望機に頼るのか？ ああなったのは  
臓硯が

全てやった事だ。俺の 俺の責任じゃ）

「——君は間桐 桜の代わりに責め苦を選んだ。だが、本当に彼女  
を

救うべきと考えるなら。本当に彼女の身を第一に考えるのならば。

例え

どれ程に嫌悪を抱えていても、例え想い人に言われたとしても救う  
為ならば

恥も何もかも捨てて出来る最良の方法があつたんじゃないか？」

目の前に広がった、間桐 桜との邂逅によって産まれた闇が雁夜を  
襲う。

その闇より、更に濃い白銀の剣のような言葉が心を裂く。

目を開く。気づけば其処は開けてる大きな空間だった中央部署と  
言う場所でない。

雁夜が管理人に怒鳴り散らした少し薄暗いグリーンフィンダーム  
だ。

「彼女の、間桐 桜が君と邂逅した反応を医学的見地から観察した  
が。

高い確率で、君を恐怖対象として認識していたよ」

透明な瞳が、見通す。雁夜の薄黒く、長年清掃しなかつた排水溝の  
ように黒い

カビずんた心を漂白剤を振りかけるように、透き通る眼光が。

「羊飼いは、こう告げた。”私の前から消え失せろ 無能めが”」

「……………だが、少なくとも君は無力かも知れないが、無能ではない筈

だ。

頼ると言う、当たり前前の事を忘れていた君だけど。傷が治れば大切な事を

思い出せる筈だと、私は考えている」

硬い物が、置かれる。それは、自分がフリーライターとして働いていた頃に

愛用していたカメラだ。

「君が更に数週間、治療に有していた間に。現実で更に一日が経過した。

幸い、まだ特に目立ったツール型アブノーマリティによる異変は各地で見られない」

「間桐邸に戻って見たが、地下蔵も合わせてT-04-50亜種は発見出来なかった。

幾らか、群体の名残らしいF-01-02の自爆による死骸は見つけたがね。

特に衣類や持ち回りの私物らしきものに細工はなされてないと判断したので

返還する事にした。機能も損なわれる事なく、問題なく使える」  
間桐の家から社会的に自由になり、まだ人生を謳歌していた頃の一品。

両手に収まるかどうかと言った大きさのカメラを構えると、少しだけ気分が

持ち直せたように感じた気になれた。我ながら自分勝手だ。

「医師の立場としての見解で言わせて貰えば。彼女の精神の完治に関しては

我々が尽力を施す。それでも不可能なら、このアブノーマリティの騒動が完結

した後適切な病院にでも何なりにでも養生させれば良い。

それから間桐 桜と君の関係を修復しても問題ない。さっきの反応を見れば

痛み入るほどに理解したと思うが。彼女と対峙するのは時期尚早

だ」

「でも。俺は約一か月の……」

「寿命に関しては、手術によって半年は延びた事は伝えたが？ それでも足りない

と言うのであれば。こちらでも可能な限り、そのツール型アブノーマリテイに

副作用や異常性が無いと判断出来れば。本来の健康的に生きた上で寿命が

君に戻るように支援しよう。それで構わないかな？」

構わないかどうか。そんなのは、うんとか言えない内容だ。

バーサーカーの望むままの返事をした上で再度浮上した疑問をぶつける。

これだけは聞かなければいけない。

「……俺が頭を抱えていた間に、何をした？」

「精神沈静の為の弾丸を放ったが？。そして、君が召喚時と同じように気絶

したので、ブリーフィングルームで目覚めるまで安静にさせた。

セフィラ達に正式な挨拶を交わす事が滞ったが。なに、慌てるような事でもない

何時でも機会があるので安心したまえ」

自分が情緒不安定である事は解ってる。その姿を桜ちゃんに見せつけるのも

更に深い傷を負わせる事も重々理解している。

だが、だからと言って有無を言わずに。人を気絶させる弾丸を隣接して

躊躇なく放てるのは、十分可笑しいと思わずにいられない。

その旨を伝えると、少しだけ彼女は口の端を吊り上げたように思うと同時に口開いた。

「私が可笑しいだと？。それは、バーサーカーと言うクラスなら自然なのでは？」

やっぱり。俺のバーサーカーは最高に可笑しい。

「これが、君達への土産だ」

気絶した間桐 雁夜を職員達へと丁寧に運び戻してる合間。管理人のXはセフィラ達に

外界で起きた大まかな報告と、買ってきた物品を渡す。

雁夜の昏倒に対しセフィラ達は眉を上げる事すらしない。人が倒れる事など、この

会社では日常茶飯事だし、雁夜の過去を映像を通して全員把握してるのだ。

マルクトにはカチューシャを。イエソドには厚手のマフラーを。

ネツアクには、酒瓶の入ったキーホルダーを。ケセドには新しいマグカップを。

貰った者達は、三者三様に違った礼を告げ。一人は、どうせなら本物の

酒を貰いたいんだがなあ……と、ぼやきつつ礼を告げる。

「冷たい管理人ねえ。あの子にもプレゼントを渡せばいいのに」

「沈黙しかなさくない人間には、相応しい物を渡せないんだよ。ティファレト」

喋りつつ、投げかけた目線はホドに向けられる。彼女は、曖昧な笑いで誤魔化した。

Xは、少し彼女の顔つきを観察してから少し吐息をつき桜に向き直った屈みこむ。

「……此処の施設には慣れたかな。他の皆は、良くしてくれてるかい?」

その言葉に、ただ無を模った瞳を管理人に向けつつ。少しの間と共に首が上下に揺れた。

「そうか。出来れば、此処の皆と仲良くしてやって欲しい」

顔つきは変わらないが、柔らかい音程で労いをかけると立ち上がり。彼女は淡々と

した口調に戻ると、グルツとセフィラ達へと向き直り尋ねる。

「Hiring（雇用）systemへのアクセスに関して？」

「依然として、成果は芳しくありません。アクセス権利はアレとホクマーが

保持してましたが、どうやってかアレは権限を全て掌握したようです」

「となると、これから先は厳しくなるな。不幸中の幸いは、最下層まで

割り当てられる最低限のエージェントは控えている事と、ほぼE・

G・Oは

揃えているが、失う事を考えるとT-09-97が招来する事は止めるべきか」

「ですがZAYINの中では1、2を争う施設に恩恵と無害なアブノーマリテイです」

「巨大ツール型アブノーマリテイの能力や、その背景が読めない。安全性を

追及している事が本当に正しいか不明なんだ。この世界に喚ばれて瞬時に

膨大な情報量をインプットされかけた。パスは遮断したものの、それだけで

我々の精神に、どう悪影響がなされるか分かったものではない。例え無力でも

戦う刃は少しでも残しておきたい」

管理人とセフィラの、よく分からない大人の話。

桜は自分が蚊帳の外で、この場所でも居場所がないことを自覚する。

……いや、違う。

ずっと、私には居場所がなかった。間桐家に引き渡された、あの日から。

私（間桐 桜）は必要のない人間なんだ。

けど、御爺様だけは。玩具としてだけど、私を……。

少女の暗く、闇の中に誘われようとした思考を止めたのは強烈な気配。

俯いていた顔を、その音のする方へ その巨大な存在感へと向ける。

——人が歩いてきた。いや、アレを人と呼ぶべきなのか。

桜が知ってるどんな刃物でも刃毀れするだろう仮面を被っていて、その

顔を覆わない、地面にまで付きそうな火より赤い髪の毛。

服装は、とても変てこに思える暗褐色のスーツで、その片手に地面まで伸びる

十字架のような、頭部が骸骨の不思議な棍棒を所持している。

傍にいらなくても感じる重圧感が迸る長身の謎の人物は淀みなく歩き近寄る。

対して、それを見留めた管理人はあっけらかんとした口調で声を掛けた。

「お帰り。アレは見つかったか？」

「分かりきっている事を聞くな、唐変木め。もし遭遇したのなら、この片手に

頭の残骸が吊られているに決まってるだろうが」

物騒な返事が仮面からくぐもった物騒な内容の声が唱えられる。桜は、それで

ようやく、この紅い戦士が女性である事を認めた。

「まあ、君の胸が疼かない事から薄々予想はしていたが。他に、下層で異常な出来事か痕跡を見つけたかな？」

「大したものじゃない。少々、果実や玩具と会ったが退屈なものだ。アレらしき影にも何も出くわさなかった。……で」

この小さいのは何だ？ と、不躰に桜をメイスで指しつつ彼女は聞く。

管理人は少し悩む素振りを見せてから、回答を示した

「巨大ツールアブノーマリティに参加する者達の親族。謂わばカテゴ

りとすれば……」

「小難しい内容で言わなくていい。つまり、この会社の外の人間として事だろ？」

「簡潔に言えばな。この会社に来ていただいた、礼儀正しいお客さん第二号だ。」

第一号は、少しパニック症状に襲われて安静にしている」

そうか、と彼女は何に対してか納得の声を上げて顔に張り付いていた仮面を

取り外すと、蒸し暑さから解放した故か長い呼吸を行う。

(……傷だらけの顔)

大きかったり、細かかったり。顔には古傷が夥しく張り付いている。

密着したボディースーツで肌の露出は最低限だが、それでも見える首や顎部分にも

長めの切り傷らしきものが見受けられ、脱いだら全身にきつと色んな

傷があるだろう事が誰でも解る。

その傷だらけの女性は、呼吸を終えると桜におもむろに顔を向けた。

桜も、ぼんやりとその顔を見返す。

数秒が経過する。まだ、傷だらけの女性は彼女を能面のような顔で見

る。桜も同じく、無の面を平常で付けたまま見返す。

更に十数秒、傷だらけの女性の顔は能面から。右目にかけて鋭い切り傷が

あるほうの眉を吊り上げる。心なし青筋が浮き上がっている。

桜は体を動かさない。人形のように視線だけは傷だらけの女性へと。

——ゴン

——シュツ

……瞬間、ホドの悲鳴が。マルクトの慌てる声が、イエソドの深い溜息が

、ネツアクの、せせら笑いとケセドの口笛と言う玉石混淆の音が響いた。

彼女が、桜に対し衝動的に。紫の頭を決して弱くない威力で殴りつけると共に

居合わせた（管理人に強制招集された）エージェント等に羽交い絞めされて

距離を開けさせられたあとに、管理人はインタビューを行う。

「それで、何故。行き成りMiss桜に拳骨を？」

「ありや何だ。老婆（※O—O—1—12）が子供の姿にでもなっちゃまったのか？」

あんなプンプンと虚無と孤独である事を全身から放っていたら苛立たしくて殴りつけるのも仕様がないだろうが」

「二理ある、とは口が裂けても言えない理屈だが。実直な私見は受け取る」

「大体、外の人間を何でまたこんな会社に閉じ込めておくんだ？」

お前は身も心も以前の管理人か、あいつになったとか言うんじゃないだろうな。

もし、少しでもその片鱗があるなら。私は……」

「その時は直ぐに君へ介錯を頼む。絶対だよ、ゲブラー」

ゲブラー。それが、まだ紹介していなかったセフィラ達の一人。

この会社で、唯一にして無二の仲間であり英雄。

管理人の静かながらも鋭利な言葉に、鼻を鳴らしつつもゲブラーは癩癩を収める。

そんな彼女へと、Xは説明する。雁夜と亜種アブノーマリテイの祖父

少女が一年間、地獄と称して相応しい責め苦を受けた事を。

内容に対し、喜怒哀楽のどれも浮かべる事も眉一つ上げる事なくゲ



ブラーは

聞き入れてから、少し舌打ち混じりで感想を述べる。

「ハンツ。私なら、その蟲の幾つか噛みちぎってやるがな」

例え殺されようともな。と平然と驕りや虚勢でなく真剣に呟く彼女を

諫めるようにして理論を展開する。

「この時代の人間は、我々の世界のように極端な貧富に分れるディスプレイア体制に

都市に外郭、路地裏や遺跡に黒い森といった魔窟は存在しない。

環境からして、アブノーマリテイに晒されて異常をきたさない方が可笑しい」

「私から言わせて貰えばな。都市の住民だろうと路地裏だろうと要は心の持ち

ようなんだ。何時だつて口酸っぱくして私は言ってきただろう。

アブノーマリテイに決して気を許すな。奴らを出来るだけ永く痛めつけろと。

その化け物が、私たちの世界のアブノーマリテイと多少外観や能力に差異あれど

アブノーマリテイである事は変わらない。そして、根絶可能なアブノーマリテイ

なら叩き潰すのみだつ。一つ 残らずだつ！」

最後の部分は、殺気染み齒を砕きかねない表情だった。

正反対の、静かな目で彼女の言葉を聞き届けた管理人は、そんな剣呑な顔を

打って変わって鳩が豆鉄砲を食べたような顔にさせる言葉を放つ。

「それはともかく、君には桜の世話係を任せる」

「……はっ!? 何をトチ狂った事を言ってるんだ!」

「的を得た発言だ。私はこのツール型アブノーマリテイでバーサーカーと言う

クラスで顕現している。発言の全てが正しいと受け取らないよう忠告しておく。

それはともかく、これは君が外の人間に暴行を加えた制裁措置でもある」

「茶化すな!! もっともらしい体裁を装っているが何だソレはっ私には懲戒チームとしてアブノーマリテイを」

戦う事以外に能がない自分にベビーシッターを任せるなんて、どう言った

自殺行為だと怒鳴り散らす彼女。

「——このツール型アブノーマリテイの影響が悪く傾けば。君はどうなる」

静かな言葉。ゲブラーを沈黙させる決定打が展開していく。

「私も、この先の事象は全くの未知だ 予測しえない。全てが崩御して

抑制可能であった、あらゆるものが制御不能に陥る……そんな時、君と言う

存在が確固として君臨している事が、どれ程に安心感を覚えるか」「そして、心の抛り所は何よりも。あの娘に必要なものなんだよ

これは命令でなく、私たちからのお願いだ……頼むよ、ゲブラー」その、曇りないガラス窓のような眼差しはオッドアイの瞳を強く睨んで閉じさせる。

「……っあのな。ずるいんだよ……っ 言い方が」

どんな殺し文句だと逞しい赤い髪を傷だらけの手で掻き巻る。それに対しバーサーカーはシニカルに笑みを浮かべるに留まった。

(……ヒリヒリする)

あの、傷だらけで。それでいて、凶暴な人が立ち去ったあと桜は未だに

疼く頭の感触を纏わりつかせて輝く天井を見上げる。

(ああやって 叩かれたのって お姉ちゃんと喧嘩した時ぐらいだったな)

父(時臣)は、厳格で細やかな事にピシヤリと言葉の鞭を振るうが

決して

手を上げるような事はしなかった。

母からは手どころか怒った顔を浮かべた事すら曖昧だ。お姉ちゃん(凜)とは

本当に、思い出せないぐらいの事で口喧嘩して。それで手を上げられて

でも、痛かったかどうかさえ思い出せないぐらいの遠い遠いもつと子供の頃。

御爺様から受けるものは、全て蟲に因るもの。這いずり回ったり、おしっこする

穴よりもつと奥の場所を痛くされたり、それよりもつと奥の体の中まで小さな

細い蟲が這いずり回る痛み。それしか自分は知らない。

マルクトやホドが怪我を案じる中、桜はどうして殴られたのか分からなかったけど

闇一色の心の中に、何かが点っていた。

(……………ヤな人……………)

間桐 臓硯は勿論、鶴野や雁夜でも成せなかった事。

彼女の中で、間桐の一族に対する印象は怖い事 痛い事をする人 逆らえない人

虐める事に加担する人 わざわざ虐められている人 そう言う印象だけだった。

しかしゲブラーに関しては、それが違った。

桜が、彼女ゲブラーに対して受けた第一印象は。今まで見た中で誰よりも

強そうな人だった。そして、そんな人物は桜の脳天に一発

力強い光を瞳に宿らせながら、桜を睨むようにして 恐らく殺し合

いや 大人や子供と言う立場以外で力いっぱい 全力で頭を叩いた。

ただ真つすぐ 桜の絶望や孤独の垣根を易々と飛び越えてゲブラーは殴った。

それが、もはや早速ないものと思えた桜の心を響かせた。

マツチ棒の火よりも小さな小さな、怒りと称すのよりも曖昧な感情。

それでも、桜の中に感情が一時的だが戻ったのだ。

数時間後、スーツにコートを羽織り。仏頂面のゲブラーが桜に対して

挨拶を強いり、桜もまた彼女の横柄な態度に関し心の中で何度も思う。

(とつても、ヤな人)

(何にも知らないのに。何にも怖く無さそうなのに。

なんで、私の事を放っておいてくれないの)

それから、この彼女達は聖杯戦争の終わりまで。ほぼ離れる事なく共に行動する事になる。指摘すれば絶対にどちらも即座に否定するであろうが、その二人の様子はちぐはぐながらも歳が離れていく

姉妹のようであったと、見た者達の感想は共通だった。

種は、植え付けられた。既に死に絶えたと思えた土の中に、根付いた種が。

そして、その種を育めるのは己の力のみだ。

## 平安

間桐 鶴野は咽び泣いていた。膝から崩れ落ち、掲げた両手から鳴る安物の腕時計から聞こえるタイムリミットが天国の鐘と  
感じ得る程に心から安堵の涙を流していた。

「つようやく、約束の明後日になるぞお！」

二日、たった二日を迎えるのに壮絶な体験を経た。

巨大な天井にぶらさがる全ての蜘蛛の女王。

おどろおどろしい半身を担う、鈍い輝きの剣を掲げる銀河の女性。  
やたらと脱走しては、自分の上半身を石見たいに硬い鋭い

小さな嘴で突っつきまわす、少し間の抜けた顔の小鳥。

一番目に関しては、頻回に作業を熟し。全くもって嬉しくないが  
人生の大半に付き合わされた魔術使崩れの身としての経験によつ  
て

何度目かには、内心を隠しつつ落ち着いて給仕が出来るようになって  
た。

二番目のアブノーマリティと言う奴には、最初の事故以外で入る  
事はない。どうやら、あの化け物？ は本当にこの会社の責任者も  
入ってる事が予想外で扱いに難儀していると噂を耳にした。

そんな噂に不安は残るものの、自分にはどうしようもない。

あのバーサーカーの責任なのだから、あいつに任せればいい。

最後の奴に限っては散々だった。やたらと収容してる部屋から抜  
け出しては

ユメカは勿論、ほかの仕事で歩いている一応の同僚達を突っつきま  
わす。

しかも、それを制止したりする事は禁止だと言うのだから尚更に性  
質が悪い。

今後ほかにも別の化け物の作業をする報せは、鶴野の心を小枝のよ  
うに

折れそうになるが、最低限の安全は保障すると言う言葉に縋りつく  
しかない。

労働しなければ、暗にアノ妖怪が報復を狙っているだろう家宅に還される

だであり。ブラック企業真つ青な仕事を完遂させ生き延びるか、それとも

緩やかか不明だが明確な死のビジョンが待つ家で震えながら僅かに生きるかの

どちらか二つに一つ。なら、生き延びるために動くしかない。

頭に幾つも絆創膏と消毒薬を塗りつつ鶴野の補佐は溜息を何度も

吐きながら諸悪の元凶について説明を行う。

「アレは〇―〇2―56。小鳥であり通称罰鳥と呼ばれています」

「罰とりい？ ケツ、あの小さな小さな鳩まがいは命懸けで働いてる

俺に罰を与えてるつもりだつてえのか」

「本人、いえ本体はそう本気で思つての行動です。それより、鶴野

肝に銘じて欲しいんですが〇―〇2―56には決して、どんなに怒りが湧いても

決して反撃しないで下さいね」

「わかつてるよ……たくつ、あんな物見せられたらな」

『これが、昨日よりc o p内に出てきたアブノーマリティだ。

あとでエージェントユメカが詳しく説明してくれると思うが、業務前に

通告出来ないアクシデントが起きる前に告げておく。単純に言つて

。これは反撃する職員に対し、外形の一部を変化させ致命傷を与える。

その形状に物理的法則を無視した変形の巨大な牙で人間を噛みちぎる。

その証拠映像を今から流すので、十分気を付けてくれ』

「こちとら、その所為で朝飯を戻しちまったよ クソツ」

上半身食い千切られされ、投げ出された足先には夥しい血の水たまり

小腸が、消失した上体のあった場所に投げ出されている死体の映像。

あのバーサーカーは一々気に食わない態度や発言は示すものの、生死に

関わる下らない虚偽は告げない事は理解出来る。末路を見た鶴野は

朝に食ったコーンフ레이크やソーセイジエッグやらの残骸を廊下に撒く

前に何とか近くにあつたトイレに戻しつつ、呼吸を整えながら脅威に対して

決して舐めない事に気を引き締める。

とにかく、ようやく一日のノルマは達成したのだ。一日千秋の思いで

待ち望んだ外出に心躍らせつつ、職員達の住居ペースとなる場所に戻ると、少し硬い顔つきをした男性職員と蜂合わさった。

「お？ チャンじゃねえか。どうしたんだよ、そんな難しい顔して」  
普段の鶴野なら、こんな風に馴れ馴れしく異様な場所の職場仲間に声をかけたりしない。だが、非日常の世界に囚われていて其の空間から

限定的とは言え脱出可能な事実が心のタガを少々外した。

チャンと呼ばれる職員は、素行不良な感じのする。いかにもヤクザ崩れの

風貌で、スーツを脱いだら刺青が見えるガタイの良い体格。

昔の鶴野なら、酒を買い出しなど出掛けた際に遭遇しても決して近寄り

はしないタイプの人間だが、この会社で一日目を迎えるにあたってユメカの

厳しい指導に泣きながら動けない時には、面倒だとぼやきつつも率先して

自分の代わりに入って手本などを見せてくれた事があつたのだ。

この会社に居る人間は大体は、彼らの外と呼ばれる世界から来た自

分に

寛容に接してくれている。

「あんたって、ちよつとだけケセド様に似てるけど。

まっ 似てるだけで、余りイケメンじゃないわね。

はっつ ツルノさあ、知り合いにイケメンって居ないわけ？

管理人に内緒で紹介してよ。良いことしてあげちゃうわよ」

ペスカと呼ばれる女とも知り合った。こいつは自他共に認める

イケメン好き。事あるごとに仕事以外ではイケメンと会って結婚

したいと

ぼやいている。コレが本当にサーヴァントの使い魔？ なのかと

話す

たびに疑問が浮かぶが、藪蛇つつきたく無いために打ち消している。

別に自分の為に何かしてくれた事はないものの、馬鹿話をする

自分が異常な空間で命を脅かされている。その事実がほんの少し

だけ

和らぐ気がして、言う事は失礼だが本心から嫌いにはなれない。

……昔 よく知っていた女に似た性格だと思えた。

だが、そんな過去の映像を鶴野は考えない振りをした。

「そ……外に出る機会があるなんて、望外の待遇っ！ あ、ああ……

貴方は元々外の人間で、此処の会社は研修見たいなものだもの。

き、気を付けて戻ってきてね？ お守りはいるかしら」

「ははははははははは!! まさか長年生きて来て、外の世界の

住人とこうして出逢う事が出来るとは!!

これが笑わずにいられようか!! はははははははは!!

さあ友よ！ いっしょに笑おう！ 辛い事も苦しい事も嬉しい事

も！

笑うということは等しく出来る！ 笑うことはいいことだ！」

ピネアと言う、何時も お守りを作っては他の同僚の命を心配して

る女。

Mr. ブラックと皆から呼ばれる、とても濃い存在感のある笑い信



仰の男。

こいつは何時でも俺に会うたびに笑う事を強要してくるから苦手だ。

本当に……この会社には色んな奴がいる。バーサーカーの作る結界の中で

こいつ達が厳密には生きていない存在だつて解つてる筈なのにまるで本当に血の通つた生きている人間のように思つてしまう。

(……いけねえ、いけねえ。何ノスタルジックな感じになつてるんだ) 辛気臭い心情だと軽い自己嫌悪に戻ると、意識をこちらに向けたチャンが腕を解いて鶴野に返答する所だった。

「いや、ちよつと俺が担当しているアブノーマリテイについてな……」

気にしても仕方がない事なんだ、悪いな」

「何だよ。煮え切らない発言だな」

こんな職場だ。ちよつとした異変が命取りになりかねないので少し掘り下げて

追及すると、チャンは口を軽く歪ませて呟く。

「……赤い靴つて言われるアブノーマリテイなんだがな。

ツルノは童話とかに詳しいほうか？」

「え？ いや、そんなには」

赤い靴。確か、以前どつかで聞いたような気がしないでもない。有名な童話な筈だ

「アンデルセンつて奴の話だけだな。確か部署の資料として置いてあつたと思うし

外の世界にも本屋で並べてるだろうが……ソレは、俺が最近じゃあ担当していたんだが

ツルノと出会うちよつと前から何だか調子に変な気がしてな」

「変つてのは？」

「変は、変さ。なんつーか言葉じゃ言い表せないけどよ。お前にも経験がないか？」

普段見慣れてる相手だと、どーも心無し浮足だつてるか塞ぎこんで

るのを表面上

我慢してるのとか薄々見分けつく事があるだろ」

「……あんまり、そう言う経験ないんだよ。俺には昔っから親しい奴ってのが

居なかつたから」

チャンは別に悪気があつて告げた質問ではないが、鶴野は少々気分を害した。

間桐の家で、あの妖怪爺いの庇護下で生活してる中じや何時も不安にビクビクと

臆視の影に怯えて生きる毎日だった。

碌に頼れる相手は居ないし、学友などに親しい者が出来たとしても金にも言わせた舎弟以外では、正義漢に彼を発破するような都合の良い鶴野を

救ってくれる相手はいなかつたし求めもしなかつた。

その回答に、チャンは悪びれた風でない短い謝罪と共に話を続ける。

「管理人に報告すべき事なのか、少し迷っててな。俺の勝手な憶測で

俺達のプレーンに余計な心労を抱かせるわけにいかないからな」

「……俺には理解出来ないんだけどさ。何でお前ら、此処の管理人って奴をそんなに

崇拜してんだよ？ そんなに、いい奴か……？ あいつ」

鶴野には、あのバーサーカーが真つ当な善人とは正直思えなかつた。

こんなイカレた化け物を幾つも保有してたり、それを扱って妖怪爺いを瀕死に

追い込んだ事、バーサーカーと言うクラスには有り得ぬ知性の深さ。

何もかもが、変だ。バーサーカーと言う存在ゆえに狂つてると言う言葉で

納得できる域を超えている。

そんな疑問に、チャンはフツと軽く笑みの形に口を歪めて言い返す。

「まあ、外の人間にはわからねえだろうし無理ねえ。」

……同じ穴の貉だからな、管理人は。あと、俺は別に崇拜なんて大層なもんを

抱いてるわけじゃねえよ。ただ、他の奴等よりは少し信用してるだけだ」

「ああ？ 同じ、貉って……ありやあ、お前らの上司なんだろう？」

いかにもエリートコースを突き進んで、学歴で管理職に就いたって感じじゃねえか。

少なくとも、調教師見たいなのを何年もしたように思えないぞ」

あの華奢な女が、直接蜘蛛の世話やら鳥に頭を刺し傷だらけになりながら耐え忍び

働いている姿は余り想像出来ない。

チャンは、その描いたであろう鶴野の想像と発言に軽く苦笑しつつ言葉をめた。

「外のお前には、余り聞かせるのは酷な話だが。」

アレでも管理人はさ、俺達が想像できないぐらい苦労したし、今もしてるんだよ」

話をはぐらかされた気がした。だが、それを詮索する時間は白衣のスーツの女

この異常な会社の責任者が雁夜達職員の居住ペースに降り立った事で終了する。

異口同音にお疲れ様ですの斉唱を聞きつつ進行する女は、苦虫を噛み潰す顔で

佇んで見つめる鶴野に、淡々と告げた。

「様子はモニターでの様子と職員の報告から知ってるが元気そうだな」

「明日は外出日だ。早朝から夕方までの時間、十分羽を伸ばすがいい。」

同行する職員に対して今から名前を読み上げる……まず一人目は「(一体全体、こいつの何処か良いんだが)」

世界中、いや町中見渡せば。こう言うちよつと良いだけの容姿の女はいるし

性格に関しては、その容姿の長所すら潰すロボット見たいな冷徹な奴だ。

だが、サーヴァントになる程の偉業を成した事は目の前に存在する事が

立証している。見かけで判断出来ない事はわかっているが……。

(まっ、うだうだ考えても仕方がねえ。とりあえず久しぶりの外を  
楽しむだけさ)

気持ちを切り替える。思えば、あの何処から監視しているか不明な  
蟲の視線を気にせず外に出るなんて初めての事かも知れない。

同行者はいるし、一応制限はあるものの。自由を自分の手で掴み  
取った

誇らしさが少々胸痒く感じる。

「——やったっ。初めての外出っ！」

「……げっ」

しかし、同行する相手が。初日で余り良い出会いをせず、今日も  
色々と

注意した口喧しい奴だと理解すると気持ちも冷めた。

「チャン、お前……代わってくれないか。なあ？」

「諦めておけ。俺は、新しく上の部署に来る職員を指導するのに  
忙しいんだよ。またの機会にな」

手助けも得られないと自覚すると、鶴野はせめて、酒を買って一人  
で

飲む機会が幾らか出来る事だけを天に祈った。

「きゃー！ 凄いですごいつ、グングン上がっている。町が一望でき  
る！」

「へへ……ニユークチュールスーツ似合うんじゃないの？ アラン。

て言うか、私のイケイケギャルファッションを見て何か言う事ないの？

あ、脳殺されて声も出ない感じいく??」

「いえ、単純にどうでも良いと思っただけです」

サーヴァントの使い魔だろうと何だろうと、女が買い物に対し活力溢れるのは

どんな時代や世界だろうと関係ないのだと思い知らされる。

大量の洋服を買うペスカや、初めて見る冬木市のちよつとした場所に興味津々で

物心ついた子供か、田舎から上京したての御上りさんのように騒ぐ女性二人の

相手をずっと鶴野と、それに同行するc o o p職員のアランは時計の短針が12を

迎える頃には、グツタリとした様子で椅子に座り込んでいた。

「はぁ ツルノ。ペスカは暫く試着コーナーを動きません。集合時間と場所を

設けますので暫くユメカと他の場所を散策してはどうですか?」

c o o p入社前は優秀な学院で卒業した事が誇りだと口にするアラン。自分が学校を

卒業したての頃に偶にいた学歴厨の同級生を思い起こすが、別にそこまで彼が

鼻にかけてる訳でもない。いや、あそこで働く事に学歴と言うものが意味をなさない

事を彼自身も長く苦しい生活で思い知らされてるのか。

「そうしておくよ。お前も、久しぶりの外なら少しは羽目外していいと思うぜ」

何で、こんな数日一緒に過ごしてるだけの奴を思いやった事を言えるのか。

一昔前の自分では想像出来ない。いや、単純な吊り橋効果って奴だ。同じ命懸けの

場所で同じ立場だからこそ、ちよつとした連帯感があるだけ。

鶴野の労いに、少しだけ驚いた表情を一瞬浮かべた後に。僅かに照れた笑みを向け

手を軽く振って彼はハンカチで額を拭いっつぺスカの意味ない声に相槌を打つ彼。

ある程度、好奇心を満たして職員達のお土産と称す大風呂敷を背中に背負って

周囲の人間に珍妙なものを見る視線を浴びるのにも鶴野は慣れた頃、バービカンを

口にしっつ、子供のように無邪気で小物を見るユメカに声をかける。

「エレベーターであんなにはしゃいでたけどよ。そんなに色めき立つような事か？」

俺からすりや、あの会社のほうが凄いと思うけどな」

「もうっ、ツルノは情緒がないですね！ まあ 所変われば品変わる、ですっけ？」

私たちの会社と違って、此処のエレベーターは上昇して町並みが見渡せますもん。

初めてなんですよ、ああ言うキラキラした海や色んな建物に生い茂る広がった緑に山

全部ぜんぶ生まれて初めて見たものなんですっ！」

「……お前の産まれた時って、そう言うの無かった、の？」

「んー……管理人には、余り外の人に触れ回すような事はしないよと言われてますけど。」

ツルノは仲間ですからねっ！ 特別ですよ？

私は、都市で生まれたんですけど。外の大気は濁っていたし、自由に世界中見て回る

なんて事は実質不可能だったんですよ。だから、いま私こんな風の外を見られて

本当に嬉しいんですっ。ツルノには本当に感謝してますよっ！」

天真爛漫な笑顔と謝礼が、培った濁りきった鶴野の心を打つ。その痛みにまた目を背け

真つすぐな目に、蓋をした心が飛び出さないよう僅かに目を閉じて返答する。

「……へっ、礼を言う相手は管理人なんじゃねえのか？」

「んー、でも鶴野が来てくれなきゃ。銀行の引き落としなりで同行するのに外に

出れなかったかも知れませんし。今の管理人なら、そうじゃなくても許してくれたかも

「知れませんが……」

ピタ、と立ち止まりユメカは一点をワナワナと見開いて凝視する。もしや聖杯戦争のサーヴァントかマスターか、蟲爺いが往来のど真ん中で出たのかと

尋常でない雰囲気にとちらへと急いで首を向け、そして大きな溜息を地面に落とす。

「お前さあ。午前中もクレープなり沢山食ってたじゃねえか」

それはもう見てて胸焼けする程に。

「ちよ、ちよつとちよつと。人が食い意地張ってるような言い方しないでください！」

それにクレープは栄養補給であって、デザートとは違うんですよ！

ああ……!! 期間限定チーズカスタードケーキ!? 期間限定……っ」

何て魅惑な響きなの！ と。衆人環視の中、どよめく人々を風のような速度で

ケーキのメニュー表に釘付けになる彼女を辟易しつつ後を追う。

だが、途中の露天で買った真新しい財布の中身を見て。浮足立った表情の彼女は

至福の表情から一転して絶望に近い顔つきへと瞬く間に移る。その大袈裟な

一挙一動から、他の業務で忙しい職員へのせめての土産によって入店する

金銭が足りない事は一目瞭然だった。

(……仕方がねえか。こいつには、不本意だが色々と助けはして貰っ

てんだし)

管理人と言う奴の指示ではあるが、適切な注意で化け物共の管理をするにあたって

経験によるものと細かいアドバイスは何度もしてくれた自分の上司だ。

「あー……おいっ。俺もちよつとばかし。甘いもん食いたくなってきたわ。

散々動き回ったし、な。日頃のお礼も兼ねて、お礼に奢るってのはどうだ？」

関係に軋轢が生じないように、当たり障りのない提案で。

言い回しは正解だったと、振り返った彼女の顔に花が咲いた事で思い知らされた。

(しっかし、よく食う奴だよ本当こいつは。この体の何処に入っているんだ?)

いや、サーヴァントとかには全ての栄養は魔力に還元されるのか) 言った手前、バイキング形式のデザートから出来る限り小さくて糖分控えめのものを

2、3個口にした後に飲み物だけ胃を休めた鶴野は。目の前で幾つもの皿を積み上げる

暴食(デザート限定)の魔人を見つめつつ疑問に思う。

(となると、俺が疑似的にパスを繋げるとかも出来るのか?)

不意にそんな提案が浮かび上がった。間桐は聖杯戦争提案者の一人であり反則技に

対しても幾つか知識を有しており、妖怪爺いから授けられた余計な雑学もある。

そんな自分が疑似的にサーヴァントを使役する。あのバーサーカー……いや、絶対はない。

相手から望んでも絶対に有り得ない妄想だと身震いを一瞬して、リスのように頬に

ケーキを詰め込んで、もう食べないの? という視線を向ける奴を一瞥する。



パスを繋げる方法を、こいつと行う。こいつは、多分俺が頼んだら規則違反ですよ

目を角のようにするだろうけど真剣に頼んだら嫌と言わない気がする。

(……悪くねえかも。いや、何を考えてんだっ!? 俺は本当に……っ)  
「っ熱!!」

「あつ、何してるんですかツルノってば。おっちよこちよいです  
ねえ……」

お水を持ってきてあげますから、待っててください」  
(誰の所為だ、誰の……っ)

冷ましてない飲料水を自分の判断で飲んだのは鶴野自身であり自己責任だが、そんな

睥睨を無頓着でケーキに意識を向ける彼女に通ずる筈ない。  
(やばくなってるなあ……俺は。段々俺も可笑しくなってるんだ)

バーサーカーに会社に放り込まれて……いや、そもそも召喚したのは雁夜の所為なのだから

元凶は雁夜。いや。そもそも妖怪爺いが、あの遠坂の娘を連れ込まなければ雁夜は

聖杯戦争なんぞに参加はしなかったのか。  
誰が一番悪いと、ヘイトを募らせた所で自分の環境が変わるわけ

もなく。それでいて  
この異常な事態を慣れ親しんで、しかも少しだけ居心地良いと思っ

てしまってる  
自分がいるのが、一番怖い。

独り言ちて自分の世界に閉じ込めようとする。だが、ユメカが向かった先からどよめきが

発生し、また何かあいつが余計な事をしたのかも急いで立ち上がると共に

少しだけ出来上がった人垣に、通してくれと言いつつ傍観してる中心に入る。

「……何やってんだ、おい」

金属同士がぶつかり合う音が木霊する。向かい合うは二人の勇ましい顔をした女性

大切な物を手中に収めるために決闘を行っている、と聞こえの良  
い内容にすれば

そんな感じにも出来るが、あえて言うなら醜い女同士の食べ物  
の奪い合いだ。

「……っ……っ！ このショートケーキは………渡せません……  
よおっつ！」

カチカチ……!! ギリギリギリ……ッ!!

「……っ……っ いえ……これは……私が最初に……目星を付けてま  
したが」

カキンッツ ギチギチギチッツ………!

「け……どっ。別に予約とかしてたわけじゃあ ふんっつ ないで  
……しようにっ！」

「それ……はっ………貴方も……同じなの……ぬう……!! では  
……ないですっ か！」

「あんた達、一旦トング除けろっ。俺も穴に入りたいほど恥ずかし  
いけど

他の客に迷惑かけてんぞ、おいっ」

サラサラの黒髪の美丈夫ならぬ女丈夫。ライダースーツらしきも  
のを中に

着こんでおり、かなりの腕を携えてるように思える人物が無表情で  
相手をしている。

トングを構える手つきに隙はなく、その得物が刃物なら恐怖だ。

然し、そいつとユメカが小皿とトングを構え残り一つの期間限定  
ケーキを奪い合ってる

様からは、女性の殺伐とした感じを恐れろと言うのは鶴野には土台  
無理であった。

説得にもならぬ声掛けが一応通じたのか、息を切らしつつ両者は離  
れ向かい合う。

そして、小皿とトングを一旦置くと互いにポキポキと手の骨を合わせて鳴らした。

「此処は、やはり古今東西 過去未来と納得し合う方法で決めましょうではありませんか」

「宜しいでしょう。願ってもありません」

互いに大の甘党好き同士ゆえに、ぶつかりあつた視線だけで何をすべきか理解し合った。

殴り合う気がつ!? と慌てて二人の間に制止をしようと走りかける鶴野だったか。

『——じゃーんけん ぼんっ!!』

その、互いに納得し合う勝負として火を見るより明らかかな内容に軽く体をつんのめた。

そして、勝敗はと言うと……。

「ううううえええつつ つつるるるるるる……!」

泣き過ぎだろうと思う。そして、そんなのを相手している自分に対しても情けなさが

込み上げるが、現状 自分に助けを差し伸べようとする手はない。

苦笑いして見守る店員や客達は、完全に他人事でちよつとした見世物のように自分達を

見ている。勝者となった、あの女は表情は乏しいもののご満悦と言う感じで勝利の

ケーキを味わってた。時計を見る そろそろ集合時間だ。

「ほらっ、そろそろ戻らなくちゃいけねえ時間だろうか」

「けどお、 けどお……!」

(たくっ……本当、調子狂うぜ)

普段は、歯に衣着せぬ言い方でズバズバ指導する癖に。プライベートな時だと

こんなに普通の女になるのかと、呆れか感心なのかわからない感情が襲って来る。

「わかったよ。帰りに、どっか調べて美味しい店の幾つか買うからよ」  
「えっ!? 本当ですかっつ うわー!! ツルノ 大好きですっつ

!!!

「ぼっ……!!? くくくつ いいから帰るぞ とつとと、こんな所!」  
不意打ちだ。半ば強引に腕に組みついてきたのをひっぺ返し、それでも手は握って

会計を済ませ飛び出すまで、生暖かい視線が体を突き刺さるのが物凄く かゆい。

完全にバカツプルか何かと思われた。本当、俺の人生碌でもない事しか起こらない。

手の中に感じる、決して嫌ではない熱を意識しながら彼の中では先ほどの

ケーキバイキングでユメカと争った女性の事は完全に頭から失念していた。

(あの男。確か間桐の長男 名前は間桐 鶴野)

下らない争い、もとい真剣な勝負と本人は思っている。甘いクリームとスポンジに

舌鼓を打ちながらも、それを三分の一も咀嚼し終えた時には久宇舞弥も既に頭を

切り替えて、目の端で仲裁に入ろうとしていた男の容姿を脳内にインプットしている

データーから読み取っていた。

久宇舞弥。この聖杯戦争に参戦するマスターの一人の助手であり

『殺人機械』の

部品の一つと言う在り方を持つ存在。人生の大半は戦場と言う壮絶な世界で

生まれ育った人間であり、その心模様はどちらかと言えばバーサーカーの部下にあたる

セフィラに近い存在だ。彼女の精神は普通の人間よりは機械に近い。

(確か間桐の長男は魔術回路が乏しく、家督のみ形式の上で受け取って生活していた。

次男の間桐 雁夜は出奔していたが何らかの心境の変化により帰還 聖杯戦争に参加)

つまり、あの男は聖杯戦争参加者の近親者だ。

久宇舞弥にとって、聖杯戦争の勝利を捧げるのは只一人のみ。それ以外の邪魔となる

障壁は全て限りなく抹殺か排除すべき事だと決められている。

既に参戦が確定しているマスターの家族が居るのなら、監視や護衛が手薄の好機を

逃す手はない。食べ進み終わったケーキを嚙下しつつ出口を見る。

(……いや。いま後を追って処理するにしても人の目が多い。何より恋仲か不明だが

同伴者が居た事を考えれば別の場所に移動する。それが魔術師関連なら尾行に

気付かれる可能性や危険も高い。幾ら魔術師として能力が劣化しており価値が低い

と判断されていても間桐の実質的な当主の魔術師が細工をしてない筈がない)

リスクとリターンを考えれば、後々にリターンが産まれるかも知れないが現状では

ハイリスクを請け負う。その天秤を計ると共に久宇舞弥は決断した。

(此処は静観するのがベスト。切嗣であっても、きつとそうする)

そう考えると、彼女は目の前のフォークに刺さったホイップを口に含むと

次の至福の為に、力強い足取りでカップケーキが陳列するほうに歩いた。

『君の判断は正しいよ、舞弥。現在の間桐の当主は利用価値においても低い。

その相手とやらも、間桐の実権を握っている支配者の意向によるものだろう。』

聖杯戦争の実質的な害にはならない以上、放置して構わない』

後に彼女の全てと言って良い相手から、そう評価される事により自分の判断は

間違っていない事を改めて認識する。

だが、その一方で報告を受ける遠方のドイツにいる彼女の主も多少、これから

先の計画について少しだけ考えを改めていた。

(間桐を掌握してるのは、間桐臓硯。既に家督を渡した長男に対し嫁か

何かを当てつける真意は何だ？ 報告では、間桐の男子二人はどちら

優れた魔術師でなく、聖杯戦争に参加するほうに至っては一年の急拵えの付け焼刃。

……間桐 鶴野だけのプライベートの恋愛か、若しくは首謀者の指示で

新たに子供を設ける相手として情報外の人物と交際してる可能性は有り得る。

だが、『違和感』がある。この一年、あの老人は間桐の落伍者をマスタ―に

仕立て上げる為に形だけの当主に意識を割いてる暇はなかった筈。いや……意識がなかったからこそ、個人的な付き合いが出来たと見るべきか)

大した情報価値はないだろうが一応、記憶の片隅には残しておく。

衛宮 切嗣。魔術師殺しの異名を名乗る彼にとって間桐は聖杯を奪い合う戦争において

目障りな障害の一つではあるが脅威とは見なしていない。

だが、想定している事態に無い出来事。滞りなく進行していたプログラムに小さな

バグが発生するように、舞弥の情報には何処か引っかかりを覚えたのは事実だった。

(この世界は活気に満ち溢れているな)

Lobby company cop エージェントの一人アランは。長時間同行する女性の趣味に

付き合った披露を癒すべく、自販機から栄養ドリンクを口にしながら周囲を眺める。

普通の自販機が使用出来ると言う事は何て幸せなのだろう。三頭身のエビが

何を考えているのか分からない視線の中でエンケファリンが主成分なのか不明な

爽快感を感じるか睡眠剤入りの二者択一なウエルチアースを飲まなくていい。

自分がかつて大学院に過ごしていた。都市にある学院、試験をパスすれば

世界有数企業の翼にも入る事が可能な場所。あそこでの生活はどうだったろうか？

この和やかな人混みのように、私は誰かと共に散策したりしてただろうか？

(cop以前の記憶は、もはや殆ど思い出せない)

エージェント全員がそうだが、自分が何処の出身だったとか学院を出たとかの

もつとも個人の中で記憶に残るものは薄っすらと覚えているが、それ以外の

家族に纏わる事や、友人関係など。そう言ったものは全て抜け落ちて

いる。自分達は謂わば死者であり、コピーとしての存在だが。それでも、

疑似的にも血が通っており、食事をすれば味覚は刺激されアブノーマリティと

対峙すれば緊張もするし恐怖も覚える。果たして、生者と死者の違いとは何だろうか？

アランは、自分が学院卒業だと自負するに相応しい知性は秘めており原理主義だ。

自身が何者であったか分からない事は、肉体の一部分が欠けているような。

関節を動かすのに一つの骨が抜け落ちてくるような、そんな幻痛が起きそうになる。

『君は優秀な人材だ。技術革新の追及性を伴っており、主席社員だ。けど、忘れないで欲しい。君の完璧さを求める事は長所にもなり、苦しめる枷

にもなる事を。思い悩み、自己に没頭しかけた時は他の仲間を気にかけて欲しい』

(新しい管理人は、こう言われていたな……)

そのアドバイスに従い、頭を上げる。ああ、やはり管理人は正しかった。

社内でも、ある種一番の好色問題児社員が一人の爽やかそうな茶褐色の男に

馴れ馴れしく声をかけられデレデレしてるの見て確信する。

「へえー、じゃあ冬木は初めてって感じかあ。

じゃあ俺と一緒に案内してあげるよ、色々の良いところを知ってるしさあ」

「ええー本当？ でも、どろしよっかなー」

(目を離れた瞬間に、さっそくだ)

激しい頭痛を感じつつ、目頭まできた鈍痛をグリグリと指で押し返しつつ

怒気が体中に回るのを自覚しながら、あえて革靴を強く鳴らして歩いて行く。

「なにを してるんだ、ペスカ？ もう残り10分で集合時間だが？」

「うへっ……ちよっとお、アラン。ねえ、少しぐらい目を瞑ってくんなあーい？

管理人は優しいしき。私がちよっと夜まで練り遊んだって」



「例えば管理人が許す事があっても、私が許しませんよ。この 私が」  
声の一節一節に強さを込めてナンパされていたペスカへ説教をす  
る。

頭に花咲かせて、規則違反を軽快に超えようとした社員は。弱弱し  
く反論するも

Lobotomy coop社員としての自覚を思い出したか、も  
しくはアランの人を

殺しかねない睨みに屈したのか、済し崩し的に従う様子を見せた。  
「……なあーんだ、コブ付きか。

それじゃー面白い、おねーさあん。また町で会って暇だったら、俺  
と遊んでよ」

「うん！ リューノスケも、またねえ」

(社員としての自覚が本当に足りない)

鶴野がユメカの奔放さに辟易してた時と奇しくも同じタイミング  
で同じ表情を

アランは浮かべ、こんな問題児社員を口説いていた奇特な青年を横  
目で見送った。

豹柄の上着が特徴的、本物を使用してるなら余り良い趣味じゃない  
と思えた。

体を向き直し、ペスカに2、3小言を放ちつつ無意識の内に目を端  
に向ける。

(……何となく、気になる目つきの男だったな)

アランも、未知の超常現象や物質に生物の相手をしてきた日数は長  
い。

男は、自分を見て彼氏と思った(非常に容認しがたい事実)のか直  
ぐに

立ち去ったので人混みに消えてしまった。何処にでもいそうな普  
通より

少しだけルックスは良い樂觀そうな何の変哲もない若者。

なのに 自分は。

何故 あの頃の事を……。

夥しい死体が積み重なるようにして通路に倒れている。  
中心には、威圧と背筋を撫でる殺意を巡らす仲間が嗤っている。

——楽しいぞ… 肉を裂くといい悲鳴が 聞けるんだぜ？ アラン

■ ■ ■ ! 止めろっ!! 今すぐそのE・G・Oを置くんだった

——すぐ終わるから緊張するなって アラン  
肉体という監獄から 解放してやるからよ

…  
■ ■ ■ ! ■ ■ ■ !! 頼む！ 正気に戻ってくれっ

!!  
「…アラン アーランっ!!」

「——はっ?!」  
自分の名前、アランを繰り返し音量を増しての声掛けに目覚める。  
ペスカが、呆れるような心配するような眼差しで自分を見てる事に  
気付く。

「あんた、大丈夫？ 凄い脂汗だけど…何か私がない隙に  
変なものでも食って腹でも下したわけじゃないよねえ？」

「……するわけ ないでしょう。貴方ではないんですから」  
(何故、私は思い出したんだろう。拭い難い、あれ等の出来事を  
……)

ペスカも、アランも幸運だったのか不運だったのか。  
その自分達が幾度か経験した殺戮と破滅の記憶を掘り起こした相  
手。

その後邂逅を果たすのは、もっと更に月と太陽が上がり下がってか  
らだった。

(……あーあー。結構、今日の予定してた儀式に良い感じの娘だっ  
たけど。

まあ、こんな日もあるよなあ)

雨生 龍之介（うりゆう りゆうのすけ）は人混みの中を歩きつつ先程勧誘に失敗した女の事を、あと一步で掬い落した金魚のような名残惜しさを感じつつ思い浮かべ、そして数分して忘れた。

連続失踪殺人。この冬木で行われてる血腥い事件の一つの担い手がこの男

その犯行は、ただ 死 と言うものを真近ながらに観察して理解したい

と言う欲求の為だけに、警察などの機関をこれまで欺き続けて生きて来た人間。

その破綻している人格は、魔術師の思想とも近いようで遠く、それでいて

全く異質な心模様で彼は形成されている。

（どっかにいないもんかなあ……この俺の頭にビビッて来るような

——COOLな出会い）

冬木で数件、家出娘などを手練手管で捕獲し趣味のモチベーションを

再燃する為に実家で見つけたカルト儀式が掲載された古文書を

見様見真似でしたものの何か特別、悪魔が降り立ったとかそう言う日常から

外れた事は起きなかった。それでも普段と違う趣向はある程度面白かった。

女性の臓腑が裂かれ、苦悶と恐怖に濡れた死に顔を晒す事についても普通の

人間には十分非日常だが、龍之介には特に心に何か浮かぶものでもない。

今までの趣味嗜好と、カルト本のやり方で何か一番足りないか自問自答する。

（んー、やっぱり血の量が足りないんだよなあ。血が

どっか適当な人の多い家を探して見るかあ……）

——チクッ!!

「いってえ?!?」

人混みを歩き、何か黒っぽいコートらしきものを着ていた相手と肩をぶつけた其の時

雨生 龍之介の肩に激痛が一瞬走った。鋭い、何か棘のようなものが自分の

体内に入り込んだような……手で服を引っ張り、痛み走った個所へ目を走らす。

「あり??」

いまの痛みの度合いは、軽く痣でも出来そうな感じの熱と衝撃だったと思えたのに

予想に反して刺し傷も何もなかった。でかい注射器でも行き成り刺されたイメージ

が一番近い。すれ違った相手が原因かと首を回すも、人混みの中へと消えたようだ。

「何だったんだ、今の」

変だなと首を傾げるも。打ち所が妙に悪かったのだろうと思い直して今度の

死の探求の為の舞台を探す事に彼の意識は完全に切り替わっていた。

その後ろ姿を、軽く口を微笑の形に歪ませ見つめる中性的な顔つきの人物が

見ているのにも全く気付かずに。

陽だまりで程よく温まったベンチに腰掛けつつ、私はコトネと会話をしている。

他愛のない学校での出来事、最近おきてるニュースについて。好きな本や

趣味に関する話題……どんなに話しても話しても飽きがないように思える。

「それにしても物騒だよね。隣町でも、鶏だったり牛舎が

襲われたりしたんだって。凶暴な野犬でも出たんじやないかって話」

「余りに気にしないほうがいい、とは言えないものだね。

ただ餓えた野犬が、牛を襲ったにしては人が気づくのに随分と時間が掛かっている。人為的な可能性が高いのかも」

スラーとコトネのやりとりは、あの日以降あの時と同じベンチで下校から

彼女が門限の時間までの数時間。

たった数時間のやり取りだけど、自分達の抱く世界と違う友人との語らいは、双方ともに新鮮でどんな反応も楽しいものだ。

「それでね……凜がまた、私が責められてた時に助けてくれて」

「そうか。だがコトネ 助けを望むとき、誰も近くに居ない状況も起こり得る。

その時は、自分で判断して動かなくちゃいけない。

遠坂 凜は、望んで君のサポートをしてるようだけど。コトネ自身が自分の

意思を明確にする事も大切だと覚えておいて」

小柄な、この世界で初めて出来た友達は。話題にする中で上位に来るのが

頼もしい学友についての話。

彼女の心に、その存在は大きく根強いものの。たまに、その存在が重圧に

思えてしまいコンプレックスの一因になりえているのも事実。

バーサーカーこと、スラーは。多くの人員を観察し 止むを得ない判断しか

残らない中で最良の選択を模索してきたからこそ。コトネの劣等感を見抜き

そして、他人にない自分の力で前を向けられるように真摯に手助けをする。

社内でも、エンケファリンを多量摂取しなければ作業出来ない程の疾患を

患う人物にメンタルケアも含め話す事はあったものの、そうなる  
完全に

治療の一環で、変に気遣わなければ全体に影響が出てしまう。

そんな仕事抜きで、この平和を享受する少女の悩みを手助け出来る  
事。

スラーの憧れていた日常の一コマが此処には存在していた。

コトネは、自分より一回り大きく立派な社会人の一人。だけど何処  
か放って

おけない、このお友達が対等に自分を扱ってくれる事が何よりも

嬉しかったし、第三者の意見としても的確で、自分の意見を絶対に  
否定

する事はなく、コトネ自身の願いや気持ちを重点に選択してくれる  
事が

何よりも嬉しかった。親しき仲の凜は、自分のフォローはしてくれ  
ても

こう言う風に二人三脚の意思で向かおうとする事はなかったから。

宝具と言える会社内の中から脱走したセフィラの動向。マスター

こと間桐 雁夜

義娘の間桐 桜の体に残るアブノーマリテイの置き土産への対処。

そして、その

厄介なものを植え付け、まだ何処かの陰で虎視眈々と復讐を狙う亜  
種の異常存在

への対応など、目先には片を付けないといけないものが山積みだ。

認識する背負うには多すぎる問題は逆に自分を押し潰しそうにも  
なる。

しかしコトネと話している間は、その重圧も薄らいでいた。

「ねえ、スラー。仕事って、やっぱり数か月先まで忙しいの？」

日本に居ることって難しいのかな」

コトネにはバーサーカーは短期滞在である説明をしている。無い  
仕事場の居場所を

教える事など出来る筈もなく、そこをせつつかれたら困っていた

が、コトネも

彼女の抱えている微妙な事情を察してか余計な事は聞く事はなかった。

「多分ね。もう少ししたら、元の場所に戻る事になると思う」

「……そっか。けど、もしもこっちでも お正月とかでも居る事が出来る

ようだったたら、一緒に初詣に行こう？ 柳洞寺でね、毎年 お父さ

んとお母さん

と一緒に行くけど。今年はスラーも一緒に行けたらいいなっと思うの」

それは、無理だよ。

冷徹な思考が、そう声に出さず切り替えます。

自分は、異常な魔術儀式と呼ばれる人工的な超常現象によって産まれた存在。

一週間、長くても数週間も過ぎれば。聖杯戦争と言うものが終結すれば

跡形もなく消滅する。ソレに恐怖は無いものの、この目の前の友達との浅瀬が

二度と出来ない事だけは、喉を軽く締め付けられるようだった。

「……そうだね。私も行けたら一緒に行きたいな」

手段がない訳でない。だが、ソレは自身の存在意義に反する事だ。

例え、友達との一生に一度しか起きない大切な約束であっても許容できない意義。

コトネ！

また、鋭く彼女を呼ぶ声が聞こえた。顔を向けると、あのしなやかな体躯の

蒼い目が私たちを見ている。

「……それじゃあ、コトネ。そろそろ私は戻る事にするよ」

「うん、スラー またね」

遠坂 凜の出現を語らいの終わりにすると。凜とコトネが公園から去っていくのを

佇んで見届けた。

風が凧ぐ。パーカーの崩れを直しつつ空が茜色に差し掛かり、雲がゆっくりと

遠ざかっていくのを目を細めつつ眺めていく。

近隣の住宅街から聞こえる、何処かの家族の笑い声。手を繋いで家路に帰る

光景とすれ違いつつ、バーサーカーは一人 願う。

——この平和が 何時までも続けばいいのに

誰もがそう思う日常の情景。

それが、ツール型アブノーマリテイが関与する事で崩御する恐れがある。

その事実が堪らなく許せず、胸の中に蠢くモノは何時飛び出せるかと脈動している。

自分自身の中に確固として存在する、放たれば世界を崩壊しかねない

怨嗟の登音と理性が鬨ぎ合う事で彼女自身もまた認知外の場所からの

視線に気づく事は無かったのだった。

「——アレは サークヴァント……?」

気配や魔力に関してはバーサーカーと同等に、三大騎士らに比べれば

余りに微小、だが濃密な魔力を秘めている。

電柱柱や木の影から、鷹の目のように鋭い視線を少くない人が通る路上を

歩いて行く、長い黒髪の尾を決して近寄りはずソレは見届けた。

暗殺者『アサシン』は、不用心にバーサーカーの拠点を追跡する真似はせず

襲撃をする気も、その日は終ぞなかった。



マスターから仰せつかった凜の護衛と言う立場もあつたし、情報から既に

召喚されてるサーヴァントは自分を除いてバーサーカーである事は認知していた。

だからと言って、平然と少女と話して日常に溶け込む女性がバーサーカーの

本体であると言う判断を下せなかった事に落ち度はない。

（使い魔か……宝具の一種か。もしかすれば、我らと同質なのかも知れんな）

マスターに報告を行いつつ、百貌と称されるハサンは今日見かけたサーヴァントに対して冬木市の地理を学び、マスター並び家宅の護衛

放たれる使い魔の探知を行いつつ考えと対策を自分達のみで練るのであつた。

## 吝嗇

端末の垂直同期実行  
優先順位の決定…  
施設の電圧チェック…  
TT2コンポーネントにアサイン…  
エンケフアリン活性化…  
エネルギー抽出及び精製工程再開…  
クリフォト抑止力を縮小…  
すべての職員を配備…  
同期中…  
同期完了

ありもしない幸福に現を抜かしていたとしか言わざるをえない。  
突如の悲劇が、絶望が降りかかる事がこの場所では突然の  
木枯らしで舞う木の葉が目の前を通り過ぎるように当たり前で  
あったのに。  
私は、また見落としていた。この世界がどれ程無情で希望が無い事  
を。

バーサーカーことスラーは、コトネと今日も何て事のない  
語らい、心の湯に浸かっていた。

「……そうか、学校の鶏小屋に窃盗が」

「うん、可愛がっていたんだけどね。例の家畜荒らしかな？」

「決めつけるのは早計だが、可能性はあるだろうね」

本格的な聖杯戦争、願望機の奪い合いなど彼女にとっては何の興味  
も

関心も抱かない。ただ、この日常での数時間の浅瀬のほうが余程大  
事

だったし、少しでも目の前の小柄な友達が自分が居なくなっても

自力で、自分の手足で抱える問題を解く力を培わせるほうが重要  
だった。

だからこそ、今日も今日とて距離感が存在する遠坂 凜の睨みに対して

曖昧な笑みを浮かべつつ、コトネと凜が去るのを見届ける。

どうも彼女とは、コトネが反抗を現した事が大きな原因だろうが過剰とは言えずとも敵視されてる事は明白だった。

彼女の父親とも、いずれ話を付けなければいけないが。突如  
来訪すれば要らぬ危惧や警戒を抱かせるのは目に見えてる。ましてや

参加者の子たる彼女に仲介を頼んだとしても、どれ程自分の真意が伝わるか計測出来ない。差し障りない程度に雁夜の胸中や

間桐 桜の安否に関しても伝えなければならぬと思ってた時だった。

背筋に感じた感覚に、一瞬だけ思考が空白になったものの。

スラーはバーサーカーとしてやるべき手順を瞬時に行う。

念のために用意していた携帯機器をパーカーから取り出して耳にあてる。

そして、数秒のコールらしきものが鳴ったあとに大き目に告げる。

「マスターか？ わかった、すぐこちらに来ると言うのなら待機しておく。

今後の行程についても、もう一度話し合いたかった所だ」

の  
そうやって、彼女は機器をしまおうと人気が無くなった公園のトイレ

中に姿形を一時晦ました。

(……今の会話は、あのバーサーカーの使い魔らしいマスターが来るとの事か。

これは、チャンスだ)

百貌のハサン、その一人であるザイドは。彼のマスターである言

峰 綺礼

との同盟者である時臣の指示を下されていた。

『言語を解し、凜の学友に接近している事を含め。高確率で迂遠に遠坂を

調略せんとする手段としてバーサーカーのマスターが私の娘に近づく為に

ソレを遣わしたに違いない。中々の知略戦と称したい所だが、私が偵察の

エキスパートたる君らアサシンを抱えている事は思いもよらなかった事だろう。

使い魔如き、アサシンでも処理する事は可能だろうが何か有益な情報

抜きだせるかも知れん。極力生かしたまま捕縛したまえ 方法は任せる』

昨日に遠坂の娘へ秘密裡に護衛の任を下されたハサンの一人からの報告。

時臣は、未だサーヴァント全てが召喚されてない事。そして現存しているのがアサシンを

除いて最初に発現されたバーサーカーのみである事実からコトネと相對しているのが

敵対するマスターの使い魔だと推測した。

その考えはまず正道な魔術師の考えとして間違いない。

どうあっても、狂化しているサーヴァントが一般人と偶然仲を深めて

その一環として聖杯戦争抜きで談話を楽しむ所に、自分の娘が居合わせた等の

考えに発展する事や信じられる筈はないのだから。

遠坂 時臣は、そのマスターの狙いが自分の娘であると踏んだ。

娘の知人と友人になり、そして交流をある程度通して心を許した所を見計らい

マスターの暗示なり何なりで娘を自分の攻撃からの盾に使用とするつもりだったと。

悪辣で卑劣な、と怒りは沸き上がる。しかし、それでも理性を失わ

ずアサシンの質量での

総攻撃へ打って出ないのは現状　そのマスターの背景が見えない事。

娘に将来的に危害を及ぼすつもりであっただろうが、その方法が未遂で終わる事と

魔術師として神秘の秘匿に重みを持っており、貴族の末裔であり多くの魔術師に畏敬の念

を抱かれている自分が、家族の一人に不埒な真似をされかけたからと言って激昂し

直接的に、その使い魔を白昼堂々と己の手で天誅を下す等と言う事は魔術師として

あるまじき事だったからだ。何より群体としてのアサシンのメリットを、相手の使い魔

一体を犠牲にするのと引き換えに晒す等と言うのは情報の対価としては余りに破格すぎる。

他の伝手を考えもしたが、いま動かせる駒となれば同盟を隠蔽している弟子のみ。

直接自分が動けば、家名を傷つけ同盟者は動かせない。ならば、自然と街を索敵していた

サーヴァントが、使い魔を見つけて駆除したと言う流れが最良だ。(サーヴァントに対峙され、相手がどう反応をするか……。アサシン

である事はマスターも  
使い魔越しとはいえ理解せざるを得ない。それで自害すると言う

のならば、アサシンの  
能力を碌に把握せぬまま外観だけで満足する三流。もし、交渉を望

むのであれば  
この遠坂の当主が寛容に手を広げ、娘に成そうとした蛮行を取り直

してあげようではないか)  
まだ遠坂　時臣は、凜の友人であるコトネ。その彼女と交友を広げ

る相手が何の下心も  
無い事や、そしてバーサーカーのサーヴァント本体にあたる事を知

らない。

その未知なる女性は宝具の一部かも知れぬが、使い魔であるならばサーヴァントの中で

最弱にあたるアサシンであろうと容易に打倒出来ると考えていた。互いの価値観の齟齬、そして戦争と言う舞台が起こす 悲しきすれ違い。

バーサーカーは決して遠坂に牙を向ける気はなかった。だが、口火を切ったのも

彼女の何気ない行動が齎した狂いだった。

アサシンのサーヴァント 百貌のハサンであるザイドもまた。少し遠方から観察

しただけであったが、そのステータスが余りに虚弱である事から。幾らか優秀な魔術師が

サーヴァントを模して作り上げた人形だと侮っていた。

(主の同盟者の言葉とおり、やはり使い魔か。厠で待ち合わせか……：貴様のまだ見えぬ

マスターの顔が苦渋に濡れる様を我が手で染まらせてやろう)

空気を切り、人払いをなした公園の中に音もなく着地する。召喚時に全員が携行している

生前愛用していた小剣を構え、公共トイレのほうへジリジリと近寄る。

(他愛なし……簡易的な結界にどう反応するか伺っていたが。この様子だと

気付いてる様子もなさそうだ。ならば、一気に中へ突撃して捕縛する)

最初の狩りとしては、容易い獲物。だが、小さな積み立てが後に自身の力量の真価を

認められ、自分自身が百貌を代表とする一人となるのも夢ではな

い。

これが黄金の鎧で包まれ、星の数ほどの伝説の武具を降り注ぐ英雄との対峙だと

言うならば、死の恐怖に硬直するだけであつたが。相手は何の変哲もない婦女子のソレ。

——バサバサ……

「ぬ……っ？」

トイレ正面の出入り口。そこから飛び出した小さな影に、すぐ中に入ろうと身構えていた

体を一瞬強張らせて再度死角に入ろうとするも、映つたのは羽ばたく小鳥。

(新たな使い魔か。！ このザイードの侵入に気付いたとするならば、援軍を向かわせる

合図と言う事か！ 不味いつ)

シュツ、と小剣を宙を踊る鳥めがけて振る。

小動物、主に鳥獣は一般的な魔術師の使い魔によく見られる存在。特に鳩やそういった生き物

は伝達の使い魔としては常套手段にあたる。

あの20代後半程度の女性の姿形の使い魔が、空間の異常を察知して本来のマスターに

サーヴァント、バーサーカーを向かわせる事が成功したら。

戦闘能力では最弱であり、スキルと言うものも殆どないのが己だ。一瞬とは言わずも

狂化でパラメーターを底上げされた英霊に勝てる等と妄想は抱いてない。

小さな肉を裂く感触が腕に伝わる。やはり 他愛なし

直ぐに体を向き直し、伝令を放ったトイレに引き籠る相手をアサシンの所有する俊敏さで

自害など試みるまえに四肢の腱を切ろうと思つた直後だった。

——グワアッ、

「――は？」

……基底のザイードは、振り向いた瞬間に見た。言峰 綺礼のサーヴァントの一人として

最後に見た情景は、小さな体躯が血の色に変色し その嘴と思えるものが

真っ赤な、この世のどんな肉食動物にも合致しない牙を持つ口に変貌する所。

彼は真意を知った。

あの女、アレこそバーサーカーだ。いや……バーサーカーを制御する存在。

狂乱の檻に囚われしモノ達を その鎖を手繰る者――。

そして、その半身は二日程まえに鶴野が見た死体のように刹那、上半身は一瞬で

この世から、どの世界にも存在しない小鳥の胃袋に収まり 残りは消失した。

――そして、彼は気づけば見知らぬ今まで見た事のない近代的な建造物の

中に取り囲まれた場所に佇んでいた。目の前に先ほどのパーカーを着ていた女

バーサーカーが、白衣に着替え直し自分の前にいた。

周囲には武器を携行しているスーツ姿の男女達が、各自なりの驚愕さを

伴わせていた表情で一斉に視線を自分に ザイードに向けている。

『――は？』

アサシンとバーサーカー。両者は、互いに先ほどまで敵対に至っていた事を一時的に忘れ間の抜けた眩きの合掌をなした。



(――何がどうなっている)

そう思ったのは、鶴野だったか。同行しているチャンだったか、それとも一部始終を

観察していた管理人か。

いや、アブノーマリテイに侵食され。今やその魂は奈落の底か根源へと消えて

しまったであろう、赤い斧を持ち、赤いエナメル靴を履いた女性自身

最後に何時も通り、安全と思えていた収容室に入って常切れる寸前の思いだったか。

「ツルノっ、此処はいい。逃げろ！ 近くにいる女性エージェントにオフィサーへ

避難するよう伝えながらだ！ クソツ、クソツ!! 何でだ。何で04-08が!?!

アレの『以前の能力』は完全に消失した筈じゃなかったのか!?!」

――アハハハハ

綺麗

綺麗

綺麗ナ

私ノ

赤イ靴

ネエ

モット

見テ

私ノ

ワタシノ

靴

間桐 鶴野は、此処が決して安全な場所でない事は認識してたし、色々な化け物と

思われる収容室で、世話もしてたから身に染みていた。

だが、ほんの少しだけ確かな安全も信じていた。今のところ、この数日で

管理人と言う奴は絶対の安全は保障出来ないと、交信する度に注意していたが

目に見える範囲で大怪我や、死ぬような人間は過去に起きた映像と

言う記録以外で

彼は目撃しなかった。人は、時間が過ぎると共に強く意識していた恐怖が

緩慢になったり軟弱になる。ストレスで肉体を壊さない為の措置であり

コントロール不能なものだが、鶴野は今まさに起きてる出来事に対しての

覚悟を失念していた。人が死ぬ様なんて見たいんじゃないかと樂觀を抱いてた。

確か、彼女はユミと言う名前だった気がする。度の合わない眼鏡をかけていて

何でそんなもの掛けるのかと聞くと、視線に晒されてると思うと怖い、と少し

恥ずかしそうに告げる娘だった。ちよつとだけ恐怖症があるだけの

鶴野から見れば、この会社で働いてる一人の仲間だった。

今の彼女は、とても妖艶に嗤っている。眼鏡を捨てて、その目はアノ妖怪爺い

を彷彿とする濁りきった色に染め切っている。足取りはステップを踏んでいて

一步こちらに近寄る度に、まるでダンスをしてるようだった。乾いた銃声が数発、隣で鳴る。目の前で彼女は、斧を片手に携えながら

紅い華を咲き乱れさせ、見惚れるようなターンを決める。

「ユミ、正気に……っ 戻れよ、おいっ!! 中層にいるクソつたれなアブノーマリテイの管轄から外れて、此処で思う存分心機一転して

働くんだって言ってただろうがっ! 何でだよ……何ででめえが……っ!!」

チャンは必死に、戻ってくれ と血の滲む声で叫ぶ。

そんな彼も本能で知っている。もう、彼女が戻らない事を。

鶴野は、彼女が裂けるような笑みを向けながら胸の鮮血を浴びて

一層と、赤く輝く斧と靴を揺らして前進するのを見つめていた。  
振り翳される赤い斧。チャンの絶叫

(……ああ、結局。俺は何もしてやれなかったなあ)

警棒を構えるでも、体を反転して逃げる事もできず。ただ、その斧が目前に

迫るのを鶴野は見て　そして、光が見えた。

眩い粒子、それがユミと呼ばれる赤い靴に侵食された憐れな

アブノーマリテイと化したマリオネットを包み込んでいくのを。

ザッ……

「――新手か。成程、貴様ら群体か？」

「……答える必要はなし」

ザイドが0―02―56こと罰鳥によつて消滅したのを見計らい、その地点へと

歩くバーサーカーは、事態の異様さに内心では内でも外でも起きてる

混乱に対して多大なる処理を必死に行っていた。

(何故0―04―08が、耐性に対して問題は無かった女性職員ユミを魅了する  
り出せた?)

そう、本来。その罰鳥と呼ばれるアブノーマリテイが反撃した相手に対し

致命傷となる攻撃を繰り出すのは社内にいる職員で限定されている。

(何故0―04―08が、耐性に対して問題は無かった女性職員ユミを魅了する

事が出来る? その能力は……以前、消失したのを知っている。

その能力の代わりに、クリフォト抑止エネルギーが一定に低まった

場合に

対してのみ自制数値が一定に低い作業員をチャームする技能が産まれた)

赤い靴と呼ばれるアブノーマリテイが、ユミを魅了した事。それは担当

署に  
していたチャンが、本日は急遽鶴野の補佐であったユメカを別の部

署に  
向かわせる事情があった為に起きたアクシデントだった。

彼の代理として、あのアブノーマリテイの作業を彼女が行った。

チャンは、管理人に対して違和感を告げる事を結局報告しなかった。

善意での行動が、一番最悪な形での地獄の舗装に至った。

(まさか……戻っているのか)

や  
(全てのアブノーマリテイが、かつて会社を。魔法少女達の地獄の宴

している、と  
O—05—65—Hが居た頃、いや、それ以前の能力を全て取り戻

そして、ツール型アブノーマリテイの所為で幾らか力も変質して  
る)

事は  
Xは、いま理解した。自分自身が狂う事が出来ぬままに狂っている

と  
当の昔に把握していた事だが、今の時点になってそれ以外にも最悪

と  
称して良い現実が目の中の直結している事に。  
そして、追いついた最悪の事態に新たな邪魔が二体踊り込んでく

る。  
時臣が、先の尖兵が頼りない事を漏らしていたハサンの忠言に従つ

て  
念のためにと待機させていた二体のアサシン達だ。

い  
時臣の保険は正しく機能した。一瞬の内に、今まで経験した事のな

小鳥の姿をした魔獣が自分達の指一本に値する群れの一人を何て事なく

消失させたのを目にし百貌の二人は、このバーサーカーに対する危険の位置付けを数段階上げていた。こいつが、司令塔だ。

この女が、あの怪物を操作して我々を欠けさせた。

「私は撤退する。足止めは任せるぞっ」

「然り……必ずやマスターの元に全てを届けよ」

藍色に近い長髪が覗く、黒装束の影が一気に後退する。バーサーカーはそれに

対して罰鳥で追わせたり、職員達を召喚して追わせる事はしない。

一気に押し寄せる内なる混乱を制御する事にリソースを傾けていた所為である。

無防備に直立しているパーカーを着る女を、大柄なハサンは決して油断しない。

つい先ほどに仲間が一人呆気なく半身を喰われたばかりだ。

先程の小鳥を模した怪物は、この女の体に触れたか何かした後は姿が見えない。

アレを出されれば一気に自分も消されて良い筈だが……。

(ふむ。どうやら、おいそれと出せるものではないか。何か宝具にカラクリがあるようだな)

「——むうんっ！」

巨漢のアサシンは、二の腕に血管を浮き出させ猪突の勢いでバーサーカーへと

駆けだす。策など無い、自身はもう一人の影が無事に今日にした出来事

その詳細の一部始終をマスターの耳に届ける事。

その為にこの命は捨てる！ 統合果たせぬものの、百貌の一人としての

責務は果たしてくれっ！！

「——っ First Trumpet (非常事態レベル1)」

彼があずかり知らぬ所だが、その攻撃は間違っつてなく限りなく有効

打である。

なにせ、このバーサーカーこと管理人Xは。全く単体攻撃能力はサーヴァントはおろか、この戦争に参戦してる魔術師にすら劣る。狂乱の檻より、鎖を解いて怪物達を暴れ回す事しか出来ない……。

( ユミ 御免ね )

「——O—04—08 Red Shoes

(赤い靴)——!」

そして、迫りくるアサシンに立ちふさがったのは。哄笑を公園に響かせながら

墓場のダンスを披露する、かつては愛嬌のある職員の成れの果て。

アサシンは、出現した新手の人の姿をした狂気に濡れた敵を目視すると心中で

一瞬動揺を浮かべるも、そこは歴戦の戦士の一人。

ただ一つの揺るぎのない剛腕の一撃を、斧を振り回す女の胸部へお見舞いする。

——ドゴオ……ッ      グ      シュツ……!!

(——ッ! こい、つ。心臓を、今の一撃で 間違いなく潰した) なのに……何故 何故何事もないように動ける——!?

アサシンの片腕に伝わったのは、未だ鼓動を放っていた人の核がサーヴァントの

一撃で確かに破壊される音と感触。

だが、女は。赤い靴に使役された操り人形は何一つ感じない。

当たり前だ。この女は既に生きていない、ただ赤い靴が放射する呪いを撒き散らす。

——私を見て      ワタシを

腕に体が縫い付けられたO—04—08の傀儡は、血反吐で喉までつまつた不明瞭な

笑い声を上げ続けながら、大きな的をその斧で切り付ける。

最初アサシンも、残る腕で斧を持つ手を叩き落とそうと奮戦したり掴んで

振りほどく事も試みた。だが、コレの性質か何故か斧が放せない。繋がる腕や手も、溶接されているかのようにアサシン一の剛力でも千切れない。

「ぐう ヲ オオ……」

一撃、一撃が重い。女の形をした何かの邪笑を仮面越しに睨みつけせめて

最後の抵抗とばかりに顔を数発、全力の拳を頭部にお見舞いする。手の甲に相手の返り血が付着し、晒う顔の上には幾多もの陥没が出来る。来る。

それでも止まらない、斧の鋭利で鈍重な感触が肩や頭に伝わるのを尻目に

自分達の一人がマスターの所に辿り着いたのかどうかだけ気がかりだった。

(いや、あのバーサーカーの重苦しい顔が雄弁に語っている。

マスターよ、そして我の一人よ。努め は 果たしたぞ)

言峰 綺礼のサーヴァントの一人。巨漢のハサンもまた、立派に責務を果たした。

そして、彼が最後に見た光景は。斧を遮二無二振り下ろす女の後ろで

涙を流す形相で、剣らしいものを振りかざすスーツの男の姿だった。

——そして、彼もまた何処ぞと知れぬ場所で最初に散った筈のハサンの隣に。

ザイードの隣に出現し 一瞬、彼も思考が停止した後 こう口を開いた。

「……ふむ、此処が地獄と言うものか。まさか座に戻る前には、この

ような

手順を踏まなくてはいけないとは初めて知った」

「いや。お前が勘違いするのは無理もないが。我よ どうやら未だ我らは

一度死んだものの、厳密には脱落できぬようだぞ」

ザイードの言葉に、彼は自身が地獄ではない面倒な場所に誘われた事を知った。

ザシユウ      ゴンツ      ドオン

シユツ      ガシユツ

「ユミ 畜生っ      畜生っっ！」

剣で切り付ける音が      棍棒で叩く音が      大砲を放ち      地響きが木霊する。

チャンは、彼女が現実世界へと召喚されるのを理解すると。茫然と座る

鶴野に一喝すると同時に、直ぐ管理人へと願い出た。

O—O1—73こと絶望の騎士のE. G. O Weapon装備の借用。

つまり、アブノーマリティ達から抽出して作成された、人間でもサーヴァントと互角に戦えるよう開発された武器といって良い。

勿論、これを扱うのに対して幾つか制限もあるし資格もなくてはいけない。

チャンは制限も理解してるし、今のところO—O1—73の武器を振るうのに

相応しい力は備えていた。長く会社で生き延びた、クソツたれな恩恵。

他の厳しい顔をした職員達も加勢する中、ユミと叫ばれる彼女は人の原型が無くなった表情で、血の涙と反吐を撒き散らして折れた腕で



無規則に斧を振り回す。それに傷つく職員達もいるが、手を緩める事なく

彼女を鎮圧する為にのみ武器を振るう。

もつとも、多くの傷を浴びるチャンは。レイピアの形をした武器で何度も何度も彼女の膝部分を狙って切りながら思い出していた。

——中層でのアブノーマリテイがトラウマでね……それ以来誰かと目が

遭うたびに、思い出しちやって。だから管理人が、ピントの合わない

眼鏡をくれた時はさ……こんなので克服できるわけないじゃないって思ったし

段々視力も悪くなるわけで、自分でも結構拗らせてたと思うけどね。こつちに上がらせて貰って、段々と自信も付いてきたし。

今度から、コンタクトにしてさ。新しい自分になろうって思ったたりして！

——チャン、私ね。貴方みたいに自分に自信はないけどさ。それでも

L o b b o t o m y c o o p の社員として……立派に 使命を果たせたら

「畜生っ 畜生っっ!! なにが立派に使命を果たすだよ っっ!!!

てめえは、そんな事思わなくても十分に立派だったろうがっ!!」

斧が目の下へと走る。顔を反らせるが、完全に躲せはせず、目頭から血が走る。

血の涙を流しながら、チャンはユミと死の舞踊を公園で交わす。

鮮血が滴る斧が空を切る 涙を帯びた剣が天へ幾度も向けられる。

懺悔の棍棒が 暗き森の哀歌がなす棍棒が女性の体を叩くス ティックに変わる。

バーサーカーは 管理人は、それをただ鉄のように一切顔色を変える事なく見る。

目を反らす事はなく、ただこの無情で残酷で 一切の光なき光景を

目に焼き付ける。

処刑を執行する弾は翳せない。これを見届ける事が 自身の責務であり罰だ。

そして、終わりはとうとう迎えた。骨と肉が完全に断たれる 木の枝が老朽化して

折れるような、あつさりとした断絶音と共にユミは地面に横たわった。

段々と、深淵の縁に染まっていた顔色は人間の顔へ戻っていく。

慟哭が響く。レイピアを投げ捨てて彼女に震える両腕で哀悼を表す職員へと

管理人も同僚も声をかける事は出来ない。

……そして。

「——スラー……………?。」

完全に油断していた。

ザイドと呼ばれし最初のアサシンが消失し、そして剛腕を持ちしハサンが消えた

事で完全に、此処ら辺りの人払いの結界の効力が消えていた事を。

そして、遠坂 凜と彼女の仲が。最近では自分が原因で少々折り合  
い悪かった事。

彼女の心を占める割合に、スラーの存在が傾いていた事を。

小柄な少女は、何時も通りの黒い髪 そして無機質とも思える透明な瞳を見た後

その普段とは異なる、凄惨と言う言葉で表現できるか分からない  
スーツの死体

それを取り囲む同僚らしき同じ制服の複数人。

そして、とても綺麗で目を離せない 真っ赤な 深紅の靴を凝視した。

「一体……………これって……………」

「コトネ」

理解が追いつかない少女に、スラーは優しく声をかける。

顔を上げる少女は、何故 彼女がとても悲しそうで優しい微笑を向けるのかと

どうして 子供が銃を撃つ真似をするような手つきを自分に向けてるか訝しむ。

スラー そう唱えようと口を動かす。

ごめん そう彼女の唇が紡がれる。

何で、謝るの？ スラー

スラーは、何も悪い事をしてないんでしょう？ いま倒れてた人だって

スラーが何かした訳じゃないんでしょう？ あの綺麗な靴は何処から来たの？

スラー……どうして

謝らないで

私たちは 友達 だ か

鎮静を成す、魔力の弾丸はコトネの額を貫いた。

公園の大地に、その体が預けられる前にスラーは彼女の体を支え抱きかかえる。

「すまない」

「すまない コトネ ユミ」

「私には この方法しか取れなかったんだ この方法しか最良と思えなかった」

「既に0—04—08に支配された君を開放する手段は、物理的な鎮圧を除いて他にない。

他サーヴァントなら、もしかすれば生存か蘇生可能出来たかも知れない。

だが、限りなくその可能性は無に等しく。それ等を模索する間に我々にも職員にも

この世界の住人にも限りなく多大な被害を及ぼす」

「処刑弾を施せば、君を一瞬で楽にしてあげる事が出来た。だが目

の前の

サーヴァントの戦闘能力を分析する為に、私が 我々が意図的にアブノーマリテイに

支配下に置かれた職員がどれ程の力を発揮するか検証させたのは間違いない」

「君に、全ての事情を説明できた筈だ。鎮静弾を放つ前に 私たちの事情を

説明すれば、荒唐無稽など思わず、君は絶対に信じてくれたのに……この日常が

壊れるのを恐れて 私は君を撃つた」

「すまない……すまないコトネ すまないユミ」

彼女の、管理人の哀願を遮ったのは。死者に対し簡素ながら葬儀を済ませ

阿修羅の如き気配を覆うチャンが置いた手だ。

「……これ以上、その娘を抱えているのを他の一般人が見れば軽く騒ぎになる。

ユミの死体は消えましたし、俺達も帰還します その前に一言だけ良いですね」

「——しっかりしろ あんたは管理人だ。あんただけが頼りなんだ」

「過ちを悔いる暇があるなら 最もより多き善の為に進んでくれ……っ」

私は 管理者X

このL o b b o t o m y c o o pの唯一の絶対権限の所有者。

同期中…… 同期完了

「ああ わかっている。わかっているとも」

暗示と言う魔術が、この世界にはある。

それと同じように人の脳にアクセスを行い、短期記憶を消失させる技術も

この会社の中に所有されている。人の脳を弄るこの悪質なシステムに

関しては、もう数度もこの世界でやったが決して慣れる事はない。穏やかな寝顔の彼女の額を指で撫でる。

安らかに眠ってくれ、何もなき日常だけを心の中に。

そう願いつつも、今日の出来事が変わるわけでない。

ユミの死も、アブノーマリティの変質も、遂に遭遇したアサシンのクラスであろう

サーヴァントとの遭遇 敵対も、リセットは出来ないのだ。

一人の職員が、不慮の死を迎えた。その墓標は誰も掘り起こす事できない

地下深くへと眠る。そして、いずれ忘れ去られる。

忘却は、消滅に似通っている。だが、私は例えこの惑星（ほし）が消えようとも

我々は覚えてなくてはいけない。決して、繰り返さない為に。

「——本日の夜 鎮圧を執行する」

「対象は アサシン」

「アレ等が私たちを傷つけるならば……構

わない」

「見せてやろう 傷跡の記憶。を」

## 斗争

館に辿り着いた時、既に日は落ちて闇が天を染め上げようとしていた。

命からがら、屋敷に辿り着きながら胸に過るもの。

百貌の内 取るに足らぬと蔑視を心中浮かべていた基底と

その腕力を群体の中で常に誇っていた無銘。その二人が散った。

元より全体がこの聖杯戦争の上で生き残れる等と夢見事を諳んじてた訳でない。

最良で半数、最悪でも十数 いや数名残れば良い。自分達の数を正確に

数える事できず、戦争の緊張が一瞬抜けたマスターの寝首を搔けば上々。

それまでは雌伏雄飛を貫く気でいたのだ。だが、それも破綻した。

「……狂化がされてない、バーサーカーのサーヴァントだと？」

それに、召喚魔術の使い手」

息を切らし、暗殺者の帰還としては無体とも言える様子を視認した瞬間に時臣は

悪い予感がしていた。そして、それは次に正しかったと知る。

「はい、我等の中では得手もなき一人であったとはいえ代々のハサンの一人。

その一人が、瞬く間に小鳥の姿を模した魔獣によって散りました。

我等の内の剛腕の才持つ者が追撃を阻止すべくサーヴァントへ挑みましたか

戻って来るような兆しがない以上は……既に」

アサシンの統率を司る代表の報せに、彼は深く眉間に皺を寄せ髪を掻き毟らん

ばかりに片手を額で覆った。脇に控えている綺礼やアサシンの目がなければ

唸りたい程に、その心情に乱れは生じていた。

完全に予定が狂った。

本来なら、遠坂 時臣は。触媒の調達が完成すると同時にサーヴァントの召喚

そのコミュニケーションを整えると共に、百貌のハサンの利便性を活かして

報告にあつた、その取るに足らぬ一人を捨て駒としてアサシン脱落の計略を

練っていたのだが、それがサーヴァントのバーサーカーによって破綻した。

既にそのサーヴァントはアサシンが多勢で構成されてる事を把握してしまつた。

アドバンテージが完全にその未知なるバーサーカーに挫かれた。

「何故、バーサーカーが狂化されてないとわかつた？」

「凡そ十数秒のやり取りでしたが、我等を群体と見抜くような眩き。

そして、完全に理性を伴って観察を行っておりました。

召喚される魔獣のほうは、完全に常軌を逸しておりバーサーカーのクラスとして相応しいと思いましたが」

「バーサーカーを使役している、と言うのか。

イレギュラーなものが招かれたものだな……っ」

（いや、イレギュラーなサーヴァントだが。バーサーカーと言うクラスとして

完全に異常と言うわけでもない。要は、冠として狂戦士ではあるが狂戦士『魔獣』を統率する担い手として呼ばれたと言う事）

「……そのサーヴァントの容姿や、特徴的なものは」

「肩ほどもではある黒い髪。容貌はアジアと西欧が混ざつたかのよう  
で……

服装は、スーツにパーカーを」

「服装は、真名の当てにはならんな。……凜の事といい 本日とい  
い

ここまで遠坂をコケにしてくれるとは」

決して穏やかでない音色の笑いが時臣の口から零れ出る。

表面上は優雅さを未だ保持しつつも、彼の内心は常人と同じ激情も

備えてる。

まだ彼が冷静ではあるのは、自身が魔術師であるという矜持があるからだ。

「綺礼、君はサーヴァントの正体が予想できるか？」

内心の波乱を紛らわすように出された問いかけに、沈黙を貫いていた神父は

軽く黙考するように俯いていた頭を上げると、少しの間の後に口を開く。

「浅学の身であります故、私見ですが。そのような魔獣を自由に使役すると言うのであれば、幻獣 伝説の怪物の産みの母では……と」

時臣は、長き修行により得た精神鍛錬を活かし。綺礼の意見を聞き終わる頃には

魔術師として仮面を完全に被り終えていた。

弟子の意見に耳を傾け、鷹揚に頷いて言葉を返す。

「確かに、君の判断は正答に近いかも知れない。だが、伝説の魔獣を使役する

存在となれば古来より多く存在する。鳥の魔獣ともなれば、古今東西の文献にて

幾らでも上げられるし、ましてやバーサーカーと言う歪な招来をするならば

本来の形から捻じ曲がっていても不思議でない」

然しながら、と顎鬚を軽く数回撫つけて時臣は組んだ膝の位置を返しつつ

言葉を続ける。その口調には既に先ほどまで少々存在した荒れは完全に静まっていた。

「ある意味では、これは吉報と考えて良い。アサシンの言葉通りならば魔獣さえ

気を付ければ、そのサーヴァント自体の防御はマスターの魔術援護があつたとしても

お粗末なものだと考えて良い。アサシン、もしもう一度相交える事があれば……」



「アノ魔獣と直接対峙せず、奇襲さえ可能な状況であれば必ず勝機は我等に」

だ、そうだと満足そうに当主はその力強い返答に相槌をうった。アサシンの情報で、重要な部分を晒されたのは痛手ではあるが、致命傷ではない。

何より、そのサーヴァント自身が自分等魔術師と同程度の防御であるのなら

自分が召喚する、まだ目にせぬものの伝説のアーチャー。大部分が未だ機能する

アサシンを扱えば、バーサーカーの打倒は造作もない。

（そうだ。大袈裟に畏れや慌てる事はない。狂暴な魔獣を使役すると言うのは

中々脅威ではあるが、本体そのものはアサシンで倒せる程に非力。元はキャスタークラスなのを、無理に力を上げる為に捻じ込んだと見るべきか。

その代償として本体が脆弱だとするならば辻褃も合う。

私のサーヴァントの召喚が滞りなく執り行った後、まずその魔獣へとぶつけ

その際にアサシン達の奇襲を行えば良い）

最初こそ、自作自演のアサシン脱落を考えてたが。このように潰された今

下手に他の参戦者と同盟を組まれる前にバーサーカーを落とすのが先決。

既に徒党を組んでる可能性だってある。だが、その懸念を抜きにしても

相手のマスターがアサシンの情報を言散すれば、秘匿させておく意味はない。

（一先ずは、私と綺礼の同盟だけは知られないようにしないとな。

なに、例え召喚したアーチャーとバーサーカーをぶつけた隙にアサシンが奇襲を

成したとしても、報復行為 または漁夫の利と思うのが自然だ。

まあ、見抜かれたとすれ。その時はその時……伝説のサーヴァントの本領を

目にして後悔するのは相手側だけだ)

アサシンも、バーサーカーにしてやられた事に臍を噛んでるのは明らか。

打倒する為ならば喜んでこちらの指示に従うだろう。

考えた内容を告げれば、綺礼もアサシンの代表各も一存は無かった。

次の指針を決めて、二人が立ち去ると時臣は一息について安楽椅子に腰を深くする。

(まだ全てのサーヴァントが召喚する前に、こうも計画に罅が入るとは。

いや、大規模な魔術儀式と言え、戦争と言うものを若干軽視していたのは私の過失か)

(だが、怪我の功名と言えるか未だ分からないが。バーサーカーの素性がある程度

掴めた事や、戦術も絞れたのは大きい。召喚魔術にさえ気を付ければ、背後からの

奇襲を防ぐ事は至難の業だろう)

本来ならば、不意打ち 騙し討ちは時臣の流儀に反するが。二度も遠坂を虚仮にされる

所業や、教会へのマスターの来訪が無い事も踏まえてバーサーカー等の勢力に対し

温情をかける余地は無くしていた。いや、未来の計略を潰された事も含めれば実質三度。

極東の諺をもつてしても、時臣の顔に三回も唾をかけられ許せる程温厚でなし。

(一先ず、この件に関しては安牌。あとは、今夜にでも執り行う召喚が滞りなく

行う事のみ集中しよう)

この時、時臣は家伝とも言える呪い(うっかり)が発動してたと言っ

て良い。

アサシンのとの交戦に対し、バーサーカーがソレを許容出来る器がどうなのかを。

そして、キャスタークラスの能力も兼ね備えているのなら。例えば、サーヴァントが

遠くにいても追尾する魔獣が居る可能性を、見落としていた。

全てのアブノーマリティは、このL o b o t o m y c o o pへと招集される。

現実時間としては一日を超えて、いま現在稼働される部門に一体ずつ。我々が生前に

接していた超常の存在が、以前の頃のように呼び戻される。

幾つもの想起が、釣り糸の振動のようにソレ等を収容室に置く度に思い出されていく。

マツチガールによって、全身の皮を焼け爛れた者達。老婆の脳と心を蝕む物語の奏で

赤い靴によって狂わされたオフィサー、女性職員達の凄惨な末路。鳥達の織りなす裁き。他にも怪物達の宴を挙げれば切りがない。

多くの悪夢が、この施設では産まれた。多くの悲劇が、この施設では長く続きすぎている。

果ては未だ見えない。それでも、我々は続けるしかない。

「……一体どんな奴を呼び出すんだ？」

間桐 雁夜は、冷たい外気を少しでも薄れさせようと二の腕を摩りつつ訊く。

此処は人氣が殆どないビルの屋上だ。立ち入りが封鎖されている事も相まって

遠くに新都の輝かしい人工の照明が点滅するのが良く見える。

彼にとっては久しい外である。現実では二日ほどだが、体感時間としては凡そ一月超える程は

病室に閉じ込められていた。その所為で体は回復してるので文句はないが。

チラチラと、目の端で彫像のように待機している白い仮面の影に視線を向けており

この場の居づらい雰囲気居心地の悪さを隠せずにいられない。

(まさか、アサシンを取り込むなんて事が出来るとは)

ほぼ瀕死だった自分の体を小康状態まで戻した事や、数々の怪物を収納する施設に

時間の流れを変えた空間に、何処にでも繋がられるワイプ装置なエレベーター。

驚きの連続で、かつては体の半身に起きてた症状が感覚として現在進行形で雁夜を襲う。

既にこのバーサーカーが突然何をしても、ほぼ動揺する事はないだろうと思う。

「こちらに居る、大型ツールアブノーマリテイからの派生によるアブノーマリテイ……」

アサシンと呼ばれるモノからの情報で、まだ多くの個体が生存している事が分かった。

その全体は気配遮断と呼ばれる、常人が気づかれない程度まで接近する能力は脅威。

元より……アブノーマリテイの存在は何物でも存続は許されない。これより鎮圧を開始する」

「それなんだが……君の、その会社の中にアサシン達を倒せるアブノーマリテイって言うのは

居るのか？ 殆どが、自分勝手に暴れ出す奴ばかりなんだろう？」この管理者と呼ばれる、理路整然とした会話を主体とするサーヴァントにバーサーカーと

言うのは気が何となく引けたし、だからと言って自分から名乗ったXと言う記号か名前か

不明な呼び方をするのも何かが違う気がした。暫定で二人称でばかりか

彼女がよく扱う用語を真似して会話を意識するのが雁夜の気遣いだ。

既に白衣とスーツの姿へと戻った女性は、質問者を一瞥しつつ独り言のように呟く。

「ほぼ全てのアブノーマリティは、人々に対し悪意と危害の意思を秘めている。

それは本能的なものか、何らかの大きいなる意思が気紛れで産み出したのか。

または、ある人曰く 人間の心の現身、本来の人の姿なのかは私には答えが出てこない。

それでも、いま目前にある力を行使する事で少なくとも周囲の損害を減らす結果が

出るならば、それを執行する事に躊躇いはない。

我々の蟲毒が続く限り、この冬木の住人に悪戯に被害が出てくるのは目に見えている。

短期間で、この大型ツールアブノーマリティの稼働は停止しなくてはいけない」

聖杯戦争を終結させる。その意思を固く提示する言葉に誰も反論はしないし出来ない。

彼女は、透き通った目でアサシンに目を遣った。

「幸いとは言えないが、このアサシンが存在する事により 残る他の存在を追う事は出来る。

高い確率で、このアサシン達を殲滅させる傭兵は招来出来るだろう」

「傭兵……そいつは、どんな奴なんだ？」

「F—01—57 私たちは、通称赤ずきんの傭兵と、そのアブノーマリティを呼んでいた。

会社設立時に近い頃から收容されており。その收容されてる中の一体を激しく敵視している。

ソレが消滅すれば、そいつも消えるのではないかと言うのか私の見解だ」

「まだ、今は収容されていない。だが、今日にでも来る……そう予感がするんだ」

雁夜は、遠くに視線を置いている彼女に対し告げるべき言葉が見つからない。

桜には忌避感情を抱かれ、不思議な会社には血の繋がりのある兄がいるが

好悪の感情を通り越して互いに無視し合う関係。あとは赤の他人ばかりの

環境で孤立状態である彼には正体不明のサーヴァントだけが現在の交友関係だ。

アサシンが複数居る事を聞かされて今後の襲撃が予想される今は彼女の支配下に置かれてるアブノーマリティと言うサーヴァント

と同等か、それ以上の力を宿すモノだけが頼りだが。最初の召喚時でも感じたが、その存在を

容易に制御は出来ないし 専門家であつても長期間の抑制は難しいとの答えに不安は尽きない。

(けど、俺自身の力と言え。刻印蟲が取り払われてる今となつては、簡単な魔術。

あとは精々そこらで飛んでる蠅やら蛾を数匹、使役出来るかどうか

が関の山だ。

それでも、彼女は頼りになると言ってくれた。)

臓硯から、蟲を馴染ませるトレーニングと呼ばれる拷問以外で。一応暗示や一般人であれば

意識を短時間失わせる術の手解きは受けた。昼間に、珍しく焦燥に近い様子を見受けられた彼女から。気絶した

少女に対し何事もなく家に帰ろうとして、少々居眠りをベンチでしたと言う風な暗示が出

来ないかと突如頼まれた時は驚いたものの。その子が特に後ろ暗い事のない只の

子供である事や、これまでの

経緯も聞けば、魔術師としての排他的な思考も持っていない彼にNOの選択はなかった。

優しく、コトネと呼ばれる少女をベンチに座らせつつ。彼女は、依然その顔に変化はなかったが

簡潔な感謝の言葉には、真摯な音色を聞き取ったのだ。

それが、雁夜の抱えていたバーサーカーに対する不審を幾らか緩和した。

(よく分からない人だけど。人となりは決して悪くはないんだ)

死にかけていた自分も救ってくれたし、助けたいと思っていた桜ちゃんに対しても必要な保護を

受けている。経歴や、どのような出自か未だに不明だけど。何か良からぬ思惑があったとしても

自分を助ける意味はないだろう。令呪やパスの問題があったとしても、本当に思い通りに

動きたいのなら、彼女が持つ魔法染みた技術力なら自分を傀儡にする事は造作もない筈。

(俺は……出来るだけ手助けになろう。時臣との決着や、間桐の当主を滅ぼす事はしなくちゃ

いけないけど。それ以外は、出来る限り 彼女の助けに)

雁夜の静かな決意を他所に、白衣を高所に吹く風に揺らしながらじっと管理者は動かない。

暫くの時間の経過、パーカーを着こんでも手が熱を無くした頃に。少し曇りかかっていた

空からは月の光が射しこんできた。そこで、ようやく動きが見えた。

女性は、片手を水平に掲げる。そして、静かに唱える。

「Special Work／特別作業 F-01-57

Little Red Riding Hooded Merc

enary (赤ずきんの傭兵)」

「Request (依頼) Contract (契約)」

「target — Hasan hundred face」

円形の中に、長い芋虫が丸まったようなものに筆記体なL字のマーク。そんな凶に見えたと

思った瞬間、雁夜の目には英霊召喚時の時よりは出力が劣るものの強烈な発光が映る。

その光に閉じた目を再び開いた時には、人の形をした何かを立てていた。

「……赤、頭巾？」

赤い頭巾を被っている。それだけを見れば、とても有名な童話の赤ずきんだろうが。

二メートル近い長身、近代的な戦闘服と思える服装。それ等を複合すれば歴戦の長く戦場で

で過ごしている兵士が、赤い頭巾を被っていると云うのが文章としては適切だ。

顔は全体的にギザギザの歯が描かれてる以外は真っ黒なマスクようなもので覆っており

素顔は拝見できないものの、ギョロツと一つだけ覗かせる肉食獣染みた黄色い眼球が

自分を映す事に雁夜は正直生きた心地がしない。

隣に鎮座しているハサン。ザイドに至っては、その殺意は高くなくとも対峙するだけで

圧する暴虐の気配に対し、無意識に傍目では分からない程に後退りしていた。

管理者は、そんな一人と一サーヴァントの様子に気を掛ける事なく淡々と告げる。

「標的は解っているな？ 鎮圧しろ」

「だが、此処はc o o pとは違う。通り過ぎる中で遭遇するかも知れない民間人に対して

絶対に危害を加えるな」

『……』

そのアブノーマリティは、おもむろに腰から一振りの中折れ式の鎌



を掲げる。

数々の生き物を切り裂いてきたであろう、鋭い切れ味を誇る刃物が月灯りに鈍く光る。

雁夜は、その振る舞いに焦って口を開きかけるが。それより先に管理者は冷静に続ける。

「いいか、役割を忘れるな。貴様の滅ぼしたい標的は未だ現れないが私が必ず招来するし、そして其の首を収納室の天井に吊り提げるロープは用意する」

『……………』

アブノーマリテイの剣呑な空気に変化はない。だが、僅かにだけ黄色い目元が細まる。

「依頼する対象は群体。最悪 一体で構わない。」

だが、相手もお前を捕捉すれば必ず必死で抗戦する。いいな？ 容赦はいらん」

鎮圧。そのみをアブノーマリテイに行え

管理者の命令に、それ以上言葉は必要なかった。赤ずきんの傭兵は、背を向けると

何処から取り出した水平式の銃を残る手に構えてビルの屋上を跳んだ。

その狂暴な気配が遠ざかるのと同時に、ようやく安心感を覚えた雁夜は呟く。

「…………アレは、その。望む通りに行動するのかな？」

荒々しい気配と殺気を肌で感じ、人の形であっても厳密には人智の外の外の生き物で

ある事を知った彼の不安の言語化に対し彼女は答える。

「元々はHEクラスだった。だが、会社の形態が少々変わると共にWAWクラスへと

昇格した。私には、その原因の凡そが水と油のように決して交わらない敵対する

存在が鹵車として組み込まれた事も、少なからず関係していると思える」

「F—01—57は、暴走した際は周囲の職員、アブノーマリテイ関係なしに襲撃を行う。」

ある一体のアブノーマリテイが制御不可能の時は、上記と同様の暴走も起きる。

体力も限りなく高く、俊敏さも收容されるアブノーマリテイ達の中では高い。

彼女は、尽きる事のない憎悪を一つの相手に秘めている。その相手以外の対象は

狩りであり、首切り斧を磨く以上の意味合いを持たないだろう」  
制御は暗に難しい事を述べながら、だが……と注釈を入れる。

「少なくとも……あのアブノーマリテイが私の知る限りの存在であるなら。依頼に

関しては絶対に遂行しようとは動くはずだ。命尽きるまで、必ず」  
冷たい風がビルの屋上に吹きすさぶ。空模様は星空が彩っている

が、荒れる  
兆候だけは、この三人が感じ取っていた。

タツ

タツ タツ タツ

タツ タツ タツ タツ タツ タツ タツ タツ——！

「……っ 振り切るのは、困難か」

百貌のアサシンには、幾つもの役割がある。

人を油断させる為に、美貌を持つアサシン、病弱なアサシン、子供の姿もいれば

美丈夫な者も。その姿や形は暗殺を成功する為に様々な『顔』を持つ。

そのスキルを切磋琢磨し、死する時まで鍛え昇華したからこそ。座に至り、今へ

至る事になる。暗殺教団の頭首に成れたのは、偏にこの力の所以なのだから。

統率者としての役割を担うアサシンは。それでも、今だけは自分の在り方が

口惜しかった。何故、己はこのように脆弱な個なのかと自分が憎かった。

——ッ!!

地面を鳴らし、強烈な殺意が背後から迫っている。一度でも立ち止まれば絶対に

消滅すると言う予感が背中を襲う。

(アレ……はっ。バーサーカーだ!)

(小鳥の魔獣でない事は解る。だが、間違いない アレも……奴の刺客だ!!)

赤い頭巾を被る近代な戦士衣装を纏い、鎌のような獲物をもって迫る敵。

アサシンがこうして逃げれたのも、夜目に長けたアサシン、鷹の目に近い広範囲を

見るアサシン達によつて危険を一早く察知する事が出来たからだ。夜風と共に、あの赤い嵐はやって来た。影たる自分達を殲滅する為

に荒れ狂う戦士を

あの女はどう言った術か遣わした。

(何人……何体っ、我等はやられた!? あと何体残っているんだっ) 被害は甚大だ。この逃走劇が起きる前の十数分前に、まだ静寂のあつた状況は急変した。

教会周辺の高台のある場所で、老若男女入り乱れる黒い影は密談を行っていた。

マスター等の目のない日は必ず、いかにしてハサンとしての力を活かし 欺き

この聖杯戦争にて自分達の願いを叶う事が可能なのかを内なる者達で試行錯誤する為に。

『やはり、あのバーサーカーは先に討たねばな……』

『ああ……私怨抜きに、あの小物はともかく。剛力の担い手であつた我等を葬り去る魔獣を

飼っているのは脅威……同盟者が何やら自信を持つサーヴァントと削り合い、あわ良くば

共倒れになれば上々なのだが』

『そう上手く事も運びはすまい。令呪の扱い方にもよるが、正体も乏しい魔獣の使い手と

まだ招来もしておらぬ英霊。何が起きるかも知れぬのに、妄想を述べても絵に描いた餅よ』

『まだ残る五騎も顕現はしておらぬ……静観と、情報収集こそが最良か』

貌の中には軍事や兵法に長けた者達も居た、力こそ強くはないがこの現代での戦術を

練る事にかけて、彼ら以上の存在も居ない。有事があれば、常に議論を展開するが

今回のような突発的な敵対となれば、対策も慎重になる。戦力が不明なバーサーカーを

打ち崩すとなれば、その終着点も長丁場になるのは致し方がない事だった。

議論が決着つくのは、もう少々掛かりそうだと判断した一人は席を立って小道を上げる。

インディゴ色の髪を夜風に靡かせ、少し翳りのある夜空を統率を担うアサシンは見上げる。

どれ程に、時代が移り変わり変わり馴染み深い町の景観は跡形もなくなっても夜空は不変だ。

(あの女の瞳……まるで、我等の全てを見通すかのようだった)

交錯した視線は一瞬だった。それでも、その硝子のような百貌の中にも居ない眼光を持つ

女の目は、全てを織っているようで、それでいて解けているような。見た事のない瞳だった

この空よりも、吸い込まれそうな黒を目の中に秘めている。

(長くは見たくない目だった……星を読む事に長けてる我等の一人は、凶事が今宵起きると

言っていたが、アレとの遭遇を示してたのか)

占星術を扱う貌は、今日に凶兆を見出していたが。サーヴァントとして戦事が常であると

毎日何かしら不幸が起きても可笑しくない。今日 二体の我々が消えたように

同盟者の言葉通り、確かに痛手ではない。だが、内なる自分達が世界から消失する。

その意味は、他者が推し量れない程には悔やみもあるし、怒りだつてあるのだ。

あのバーサーカーと、次に相まみえる時は。必ず、この刃を届かせる。

そう、意思を静かに固め直していた時だった。自分が、我等が百貌がその在り方が

永遠に変わる事になったのは。

『……っ 北の方角！ およそ3km先から恐ろしい速度で何かが来ているぞっ！』

『アレは 使い魔……なのかつ?! いやっ、只の使い魔の纏う気配ではない!!』

鷹の目、夜目が発達している2人。

名は確か黄反と遠見が遠方の偵察の最中の警報が響く。

緊張がハサン全体に走る。だが、アサシンが奇襲を受けようとしているからとって

恐慌状態には陥らない。暗殺者として、常に自分達が捕食される事態も考えてはいる。

敵対するマスターが遣わした存在であると全体は認識すると直ぐに撃退の動きに入る。

『久方振りに、この弓の腕を披露する時が来たか。心の臓を一発で射貫いてくれよう』

『まあ待て我よ。来たるが魔獣ならば、祓うに最上は火計と昔ながらの相場よ』

風弓、業火と呼称されるハサンは。生前に幾多かの敵対する豪族、

異教徒、破門された

無銘な者達に与えた武器や罾を取り出す。

統率者であるハサンは、夜目も鷹の目に値する能力も無い。だが、自分達の手早い

準備が完了間近で、まだ幾らか距離があつたにも関わらず敵影は闇夜を駆け抜けて

その全貌を露わにした。速度は、恐らくは我等と同等か、劣るとしても侮れぬ。

(アレは……バーサーカーの使役する、魔獣だと言うのか)

一つだけ覗かせる黄色い眼球。鋭い針のような刃が描かれた黒いマスク。

黒子のような衣装の自分達と、少し似通った格好ながらも。その全体から発する

隠そうとしない闘気と殺気は、自分達が束になっても並べるか自信は無い。

両手に構えているのは、鎌と片手持ちの水平二連銃。だが、その鋭利と遠距離の

武器よりも恐ろしいのは、そいつが自分だけを　ただ自分のみを一点に捉えている事。

背筋に悪寒が駆け巡り、息が一瞬止まり急速に口内が渴く。鐘の音が遠くから

聞こえ始めるかのような幻聴が一瞬耳を過つた。

アレは……駄目　だ　絶対に、勝てない。

『直線での走行か……容易なのだ』

『他にも着火地点を埋めてたが。これは何とも　無駄になるな』

標的である事を、不思議と自然に理解している統率者を除き。迎撃の姿勢をとるハサンは

一見、無防備に突進してこようとする敵を軽んじる発言と共に行動を開始する。

弓の弦を引き離し、矢が風を切る音。地面から轟音とは行かずも、瞬間に打ち上げ花火

のような多量の火花が発生し、その赤い頭巾の刺客の胸を矢が突き刺さり火が呑み込む。

双方ともに、守備を請け負ったハサンは手応えありの感触を得たし短くそう唱えた。

統率のハサンだけは、髑髏の仮面の中で優れぬ顔色のままに火の中を見守る。

本当に？ アレか、今ので倒れたのか??

不安9割、期待と言う名の願望1割の中で……その燃える火中よりも更に朱を彩る頭巾の

狂戦士は飛び出してきた。胸の矢を抜く事もなく、ただ一直線に肩や腰を未だ

火に舐められながらも、全く動じた様子なく変わらぬ動きのままに走る！

『！……痛みを感じぬのか、怪物がつ！ 心の臓が効かぬなら、頭に！』

『炎上網が効かぬなら、直伝の猛火を味合わせてくれる！』

棒立ちになっている統率のハサンに対して疾走する赤い頭巾の狂戦士に対して更に

数本の矢は頭や足に当たり、上半身全体に対しても可燃性の液体と共に火は浴びせられた。

再度の硬直は一瞬与えられた。だが、鬱陶しいとばかりに火の明かりに不気味に赤く輝く

鎌が一閃、二閃と体を大きく揺らしつつ振られる。体重を乗せた斬撃は、それだけで

体に纏った炎と矢を振り飛ばした。黄色く血走る眼球が、ただ自分を凝視している。

『馬鹿なっ 頭蓋骨を貫いた筈だろうっ?!』

『……いつ……喰らう事に、まるで慣れたかのように』

カチャ

ズドンッ

風弓、業火の活躍は、そこで途絶えた。煩わしいとばかりに傭兵が

掲げた

水平式銃の散弾が骸骨の仮面を貫き、その脳天を砕いた事で。

百貌の、自分達の罾や迎撃の失敗を知るやいなや武闘派の一部が吠えた。

『剣を振れええ！ 密着すれば、銃は意味を成さぬ！ 斬れ！ 斬れええええええ!!』

剣鬼、長刃を初めとした刃物の扱いに優れたハサン達が近接戦闘に移る。二体のハサンが

更に消滅した事で、その赤き鬼神と言つて良い鎌と銃を担う痛みを知らぬ戦士を

倒す事だけに全力を、命を懸けて。

『我等よ！ 散開せよ！ 日が昇るまで、逃げ延びよ!!』

勝機が薄い事も、最初に戦闘派のハサン二人が仕掛けた火力に対して全くソレが戦意や

殺気を薄れさせない事からハサン全体が命の危機を感じていた。

百貌は様々な能力を備えたサーヴァント、あらゆる状況に合わせて適切な顔を備える

事が出来ると言う力だが、全体が暗殺に通じても直接戦闘を得意とはしてない。

頭脳と計略で人を死に至らしめたり、異性を美貌で誘惑した隙に刺す事を拘りとする

者達にとって、異常な耐久と殺傷力を持ち合わせる戦士の相手は出来ない。

武力行使で、一時的だがバーサーカーが膠着状態な隙に高台から多くの黒い影たちは

四方八方に跳んだ。願わくば、どうか自分達のほうにアノ赤い死神が来ない事を願う。

統率のハサンも、それだけを願う他の自分達と同じく遁走する。だが、高台がようやく

目の端で幾らか小さくなったと思えた時。その殺気と闇夜に浮き上がる血の彩が



真つすぐ駆け下るのを目にし。あの時、一瞬だけ白衣のバーサーカーと対峙した時に

例え消滅するにしても、絶対に討たなければいけなかったと今更ながら後悔が襲う。

それが、現在進行形での命懸けの逃走劇に至るまでの過程。いまは必死に、どうやって

背後から迫る獰猛な戦士の刃から掻い潜るか模索する所。

幸か不幸か、全力での俊敏さでは未だこちらが上。

だが、幾らアサシンとしてのスピードが上回るとは言え。耐久力などは元より低く

このまま全力疾走を続けて、日が昇って周囲に人の目が多くなつたとしても。

背後の狂戦士がその状況を理解して撤退する保証など何処にもないのだ。周囲の

人間の阿鼻叫喚すら無視し、巻き込んで自分を消そうとする行動をとる可能性も高い。

(何か……何か方法は——！)

小路や、入り組んだ路地を走りつつ脳天に一閃の光が過る。

そして、胸元に忍ばせていた正方形の機械のボタンを押す。

我が主が、このアサシン達が遠距離では念話も出来ない事を理解した故で日中に

受け渡したものの。バーサーカーとの邂逅で、もしかすれば何か緊急の事態があるかも

知れない為に、念のためと用意された器具。

(先見の采配に敬服するっ)

「マスターっ、マスター！ いまっ、我等はバーサーカーに……！」

声が届くかどうかは正直半信半疑であったサーヴァントとして、マスターには一定の

敬意を形式で払ってはいるが。内心、少々不気味と感ずると思っていた為に。

だが、意外にも短い間と共に返答が走る風切り音の中で届く。

「……ああ、状況については報せにきた他の者から聞いている。追われていると言うなら

都合が良い。そのまま、同盟者である時臣氏の邸宅に向かえ」

(同盟者の家……そうかつ！)

「感謝する……！」

短いやり取りながら、意図は読めた。背後の殺気を避けるかのよう  
に体を捻って跳躍し

目標が決まった方角へと跳躍する。

アクロバットに宙を舞いつつ、唯一の黄色い眼球が自分を捉えてい  
事を再認識しながら

その搦めつく濃厚なる狂気の刃の気を無理強いに無視して一気に  
前進した。

(もう少し もう少しだっ！)

同盟者、遠坂 時臣の邸宅。日中に妻子が出ていくのは確認してお  
り この夜中に

居るとすれば、その当主の彼と……若しくは。

大きな扉へと、そのまま飛び移る。だが、これまでの疲労を無視し  
て動いたのが祟り

僅かに姿勢が崩れ、それが大きな隙となる。サーヴァントと言う特  
殊な体でも

連続した急激な運動は正三騎士クラスでもなければ持続は難しい。

—ザシユツ……！—

「うあつ！」

遂に刃が、掠めた。背中に鋭い鎌の先端が走り、そのまま転げ落ち  
るようにして

邸宅の庭の芝へと着地する。高所から叩きつけられた体は仮初の  
骨と肉に

決して浅はかならぬ衝撃を加えるが、決して意識は途絶えさせな  
い。

(死ねぬ！ 只では死ねぬ！ このまま、むぎむぎと死んでなるも  
のかっ！)

捨て駒として死ぬのならば、現在のマスターを心中呪いつつ消滅するだろう。

悔やみや恨みは混在しつつも、それが戦争の方針ならばと無聊の慰めをするだろう。

だが、これはマスターの策や指示とは関係ない純粋な敵対するもの同士の戦い。

最後の最後に散る結末は変わらずとも、いま 今この時だけは自分が生きる為に！

次に降りかかった殺意の一撃を、背中の激痛を堪えて転がる事で避ける。大地を

農耕の鍬などより鋭い刃先が抉るのを耳にして、所持する短刀を構え体を起こす。

紅き頭巾の戦士は、その秘めたる鮮血を伴う冷気を更に膨張させ一歩前進する。

何時しか、空の曇りは払われ月光が満ちていた。月がその鎌を煌かせていた。

頭上へと多く血を吸った死に鎌が振られる。一撃でも何とか防いで見せると

力んで構えた短刀。その自分の持つ刀がちっぽけな存在に思える。  
——シユパアア!!

「——どうした我等よ 死に華を咲かすのにはまだ早くぞ」

刃は……振り下ろされなかった。予想していた光景と異なる、鋭利なシャムシエール

が赤い傭兵の鎌を受け止める姿。そして、その黒い小柄な体軀には見覚えがある。

「マクール……ッ！」  
「統率よ 我等も居るぞ。よくぞ、ここまで辿り着いたな」

「ゴズール……ッ!!」  
片腕の脇に急激な力を感じると共に、背後から野太くも聞き慣れた力強い声が未だ

長時間晒されていた死と殺意の気に少々麻痺していた体を起こさせた。

赤ずきんの傭兵の一撃を防ぎし影、百貌にて一位と並びし剣の名手、迅速のマクール。

更に、最初のバーサーカーとの遭遇で散った巨漢と同じ。百貌切つての剛腕

怪腕のゴズール。その二人が、満を期して遠坂邸にて紅きバーサーカーの前に立った。

鏢迫り合いとなった刃物同士を、一度同時に飛びのいて構え直し影は眩く。

「貴様を討つのは我等でないとしても」

「我等の多くを屠った罪は消えぬ。欠損の分の痛みは我等で返済せねばな」

残る百貌の武闘派は遠坂邸に集結した。この場を、吊い合戦として。

紅き死神の進撃を終わらせる為に、彼らハサン一同は鋭気を立ち昇らせ各々に構える。

対して、狙っていた獲物への初撃を。狩る事を逃した傭兵は臆する様子は微塵もなく

濁った黄色い眼球で、多くの影達を見回し、最後に空の月を睨みつけた……。

……ただずっと乾いていた。ずっと飢えていた。

あの黒い毛皮野郎が、全てを。ただ私の全ての安寧と幸福を 安らかな終わりを破綻

させた時から、私は私でなくなり赤ずきんの傭兵と化した。

この全身、髪の毛先からの足の爪先まで傷のない部分を探すほうが難しくなる頃には

花を摘み、バスケットにケーキを入れていた時は未だ柔らかだった  
白い手は

もはや痛々しい赤と黒に入り乱れた皮膚に代わり、獣の牙を僅かにでも和らげる為に

倒れ伏した猟師から拝借したグローブで手の肌を隠していた。

無機質な部屋、様々な森の生き物に別の場所に存在する獣たちが檻の中に入れられてる

建物へと、私は何時しか辿り着いていた。いや、明確な目的があったから。

あの、原初の罪を己の手で気の遠くなる時間と回数を費やしてでも消滅させ、その首

を天井に吊り提げる。ただ、それ為のだけに檻へと自ら入った。

管理する奴等や、世話をする奴等に対して特別な感情は持たなかった。

私の目的は、アレのみであり。アレを今度は私が八つ裂きにする番だから。

どんな世界であれ、私がやる事は変わらない。あの獣を、この鎌で切り裂いて銃で

五臓六腑を頭蓋骨を貫く。やるべき事に変わらない。

指示を下す奴が、憶えてる限りの中では初めて狩る相手を指示した事に対しても

喜びや怒りはない。ただ、普段なら穴倉の中で声だけを響かせる奴がノコノコと目の前

にいる事は少々妙であるから、ちよつと威嚇した反応だけ見ようと思つた。

だが、そいつの姿形をはつきりと認識すると。僅かにあつた関心は微塵も消え去つた。

アレは、『私』であり『毛皮野郎』であり、『何も無い』ものだ。

傷を付ける事すら馬鹿馬鹿しい。だから高圧的な命令に対しても何も思わず

その影見たいで、数だけが多い奴等の中の一人。奴が指示を下す前に見せたインディゴ色

の髪の髑髏の仮面の影を切り裂く事ために、私は随分広い世界を跳

んだ。

だが、妙な感じだ。あの影達は毛皮野郎じゃなくも随分と妙な小細工で目標を妨げる。

鋭い矢や、火も。あのビルに居た他の奴等も似通ったのを扱ってた。それは良い。

ただ、胸の奥底にチロチロと彩る火が邪魔してくる多くの影を裂くたびに勢いが

増していくのを感じた。この、庭園と思える開けた場所。そして同じく存在する影。

複数の鋭い視線が貫きながら、庭にある花が目につく。花……花摘み。

空を見上げる……つき 月 紅 と 蒼 それが実体ある月に重なり視える。

——ああ 苛々する。

ボオ

(——!! 何だ、あの燃え上がる炎は……っ)

統率のアサシンは、目の前で起きた変化に対し身震いを静かに起こしていた。

一斉に襲撃し、反撃の余地なく五体をバラバラにさせしめんと動くうと百貌が

足を踏み出そうとした直後の異変。僅かに、棒立ちになっていたバーサーカーの体に

紅く、朱い火と同等のオーラが噴出し始めたからだ。

それ以外で特に際立った外見の変化はないが……直感が告げている、危険な事を。

(同盟者のサーヴァントは、まだ動かせないのかっ?)

使えない仲間(時臣)に心の中で罵りを上げる。今の主君(綺礼)の言葉から

凡その推察は出来る。同盟者のサーヴァント、アーチャーの力を借りてこのバーサーカーを自分達を巻き込んででも倒す。その方程式に対して異論はなかった。

我等が削られる事に対して憤りは存在するも、それよりも目前の敵は我等の命を

投げ捨てても打倒しなくてはいけない事を実感している為。

この計画の要は、同盟者のサーヴァントだ……早く、早くこの場に！

「……シツィー！」

燃え盛るオーラーに対して反応せぬまま、マクールは俊敏さを活かし突進しながら

片手曲剣を振るう。その高速剣は燕返しまでいかぬも、目に留まらぬ剣術。

空気を裂く、肉が分断され宙に舞う血飛沫。バーサーカーは動かない……。

迅速のハサンは、何一つとして動かないその異様さと不気味さに表面上は見せない

畏怖を黙殺して、剣を更に振るう。二撃、三撃 それでも倒れたりする様子はない。

動かぬの事に対し異常さは感じるも好都合。ならば、この勢いに沿って首を刎ねる！

体を捻り、遠心力を利用し棒立ちのバーサーカーの首向かって曲剣が迫る。

その刃が、首に触れるか否かの時 遂に、狂戦士は動いた。

鎌を掲げる腕が、全身がブレた。それ以外の初歩動作はマクールにも感知しえなかった。

気づいた時、振っていた両腕が シャムシエールは宙を舞っていた。

振り上げられた鎌が、月の下で付着した血の雫を落とす。

「これ……」

ガシユウ……ッ！

「ほどの……力と は」

凄まじい戦闘力、ポテンシャルが違い過ぎる驚嘆の眩きを終了する前に下ろされた鎌の

叩きつけによって地面に四肢は埋められて消滅する。

それが、激戦の火蓋だった。体力を浪費した統率のハサンの視界の中で、槍や短刀

棒術、貫手など様々なハサンが立ち向かっていく。

だが、その影たちを赤き火を纏うバーサーカーは。飛んで火に居る夏の虫とでも

言うように、鎌を投げ、水平式の銃を放ち。本体に意識を殺いでいた影達の死角から

戻って来た鎌の餌食に晒され、時間と共に数を減らしていく。

（あの小鳥の魔獣も脅威だったが、この戦士も十分に脅威だ……！  
傷は増えてる筈！

体力だつて無尽蔵では無い！ だが、それが目に見える範囲で無いように思えてくる）

この戦士は、文字通りの狂戦士だ。決して、あます事なく命尽きる果てまで其の武具を

扱い、目前の敵を滅ぼそうとする。

「ぐ……うう」

中庭に残るハサンは、もう残りが十本の指に入る範囲になっていた。その中でも一番の

怪力のゴズールが、オルテガハンマーと称する丸太のような腕を組み合わさり頭上から

振り下ろしたバーサーカーへの一撃は、少し踏鞴を崩すのに成功はしたものの。

受けた戦士は、僅かに首を鳴らし体勢を直しつつ怪腕のゴズールの足の腱を鎌で

切り裂く。地面を静かに揺るがしてハサン最後の巨漢が横に倒れた。



死中に活求めるなんて殊勝でも何でも無い捨て身の攻撃を統率を除く残るハサン達が突撃するものの、それは結局赤ずきんの

鎌の一振りによって呆気なく無意味と化した。蟻と象と例えて良い程に、その狂戦士と自分達には隔絶とした差が生じていた。

全身に血と負傷が見える。それでも、決して殺意を衰えさせない。

何となく、この絶望下でようやく理解が見えて来た。このハサンの狙いは我等の中の

自分だけであり。自分一人が生贄になれば未だこれ程の犠牲を強いられる事は

なかったのではないかと……と。

(いや……そのような後悔をしても、もう遅いか。……例え無駄死にと詰られようとも

ハサンの当主として義務は果たしてくれる)

戦士の一步、一步が遠くから聞こえる審判の鐘の音のようだ。震える手を叱咤し

愛用の子刀を握るも、その唯一の武器が何と頼りない事か。

その鎌と血まみれの腕が、手を伸ばせば顔に届くと言う間合いになった時。

……突如として、轟音と共に自分と赤ずきんを分けるように見た事がない宝剣が地面を塗った。

「——雑種めが」

ハツと、頭上を見上げる。そこには、月明りに映える黄金の姿が頂きに存在していた。

いや、月や星空の輝きすら霞みそうな神々しさが降臨している。赤ずきんと同色の

真紅の双眸が、氷よりも冷たい視線を自分とバーサーカーへと落とすしていた。

その濃密なる魔力と迸る威圧は、先程から受けているバーサーカーの殺気を

中和する程に力強い。

「虫けらと、血に狂う獵犬めが。誰の断りをいれ、我（オレ）の庭先を荒らしている？」

「貴様等に。この我に発言する事は許されぬ。即刻この世から——去ね」

空中に、夥しい剣 槍 矛 戦斧 いずれも、使われた世代や国は異なるが一つ一つが

名を遺すであろう逸材である武具が、散りばめられた星のようにアーチャーの前に出現する。

その圧倒とする様子に対し、ハサン等であれば敗北の境地に動けぬ所を。ただ、紅き傭兵は

依然として自分を見つめている。それ以外に関心ないとばかりに。

バーサーカーの様子を気に入らないのはアーチャーである。先刻呼ばれ、臣下の礼を遠坂の

当主から受けて、同盟者のサーヴァントの軍勢が散る事を報告され。その討伐に応じた事

までは良い。自身は王の中の王であり、正式に聖杯を手中に収めるもの。

虫と同等である、ハサンが地べたに付している事や満身創痍なのは別にどうでも良い。

問題なのは、この我を前にして虫けら如きに執着し意識を向けない狂った狗だ！

この我より……虫けらを優先するだと？

「——消えよ」

振り下ろされる余多の宝具の制裁を最初に味わったのは、赤ずきんの傭兵だった。

数々の剣が、槍が、矛が、雨あらしとばかりに赤い頭巾の戦士を呑み込む。

勝った……っ。ようやく統率である彼女の中に安堵が産まれる。

この次の展開で自分も始末されよう

それは元々の計画の一部にあった事。不満はあるものの、自分達の

勝利に繋がるならばと

納得できる。ただ、このバーサーカーの打倒が出来た事だけは満足である。

その事実だけ持ち帰れるなら、座にも潔く戻れよう。

放出された宝具の威力は、槍一つで近代の小型ミサイルと錯覚するほど。砂煙が一時

バーサーカーの居た場所を隠すが、既に関心ない様子で鼻を軽く鳴らし立ち往生する

ハサンへとアーチャーは視線を寄こす。

「さて、次は」

貴様だ、虫けら。そう最終宣告をなそうとした時だった。

ズドンッ

乾いた炸裂音が、響いた。一瞬、頭に空白が生まれる。このような宝具をアーチャーは

発現していたか？ と聞き慣れてしまった凶悪な銃声を前に現実逃避を浮かべるも

この音は、この硝煙の匂いは。つい、今しがたまで相対していた敵が生じさせたもの！

「バーサーカー……！」

砂煙から、のそりと姿が現れる。体は、もう既に受けた宝具によって幸運にも

当たらなかつた黄色い眼球除いて全てに傷が見える。残忍なマスクは取り払われ

目を背けたくなる、肉が剥がれたような素顔が見えているし、武器の鎌は半分まで

折れていたが奇跡的にも未だ武器としての機能を保っている。

「この……我に…… 傷……を」

向けられていた銃口は、天に対し。正確には、アーチャーのいる方向に。

弾丸は、完全に消滅したと油断していたアーチャーの顔に向かって

飛んだ。だが彼の

王としての素質に、君臨する力は聞こえた銃声と動体視力から。自分に向けられた

悪意を、首を傾げる事で避けたものの。バーサーカーの狂気が成せた業か、皮膚一枚を

水平式銃から生じた鉄の塊は顔面の頬を削った。

その事実が、完全に見下していた小虫と同じ存在が自分に浅くとも傷をつけた事が

許されず、彼は指に触れた血を凝視して憤怒の前に動きを止める。

バーサーカーは、リロードする音と共に銃口をアーチャーの脳天に定めて引き金を

引こうとする。ただ、自分の獲物を 狩りを邪魔するものを消す為だけに無慈悲に。

(やらせは……せんつ)

統率のハサンは、バーサーカーへと走った。黄色い目が少し驚愕したように見えるも

そんな事に気を回す余裕はない。全ての力を込めた小さな刃がバーサーカーの

心臓へと深く、深く刺さる。このバーサーカーを倒せるのは、あのアーチャーなくして

他ならない！ 何としてでも、このバーサーカーの虐殺をここで止めなくてはいけない！

激痛が、更に刃を動かそうと力を手に込めようとした時に胸に走った。奇しくも

自分と同じ心臓に、欠けた鎌をバーサーカーが刺した事を吐血しながら知る。

そこで、ようやくバーサーカーから昇る赤い死神のような気配が徐々に

収まっていくのを感じたが、既に自分の生命が終わり近い事も知っていた。

(いや……これで、良い。まだ……逃げ延びた我等はいる。終わっ

たわけでは、ない)

(務めは……終わった)

消える間際まで、全力で胸に刺さったナイフを固定する。バーサーカーは足を動かし

この場から離脱しようとするが、気配を殺し傭兵の背後へと這いずっていたゴズールの

腕がその足の脛を掴む。もう、どちらにも逃げる事は出来ない。

中庭全体まで届く怒声と、頭上から差し迫る轟音と武具の波を暗に聞きつつ。

ようやく終焉を迎えた事を安堵し、統率のハサンは意識を途切れさせたのだった。

……………。

「……容姿、体格ともに。日中での交戦時のアブノーマリティの個体である確率98%

F-01-57の帰還も確認。よし、鎮圧作業はこれにて完了した。

収容された個体は、全部で43体か。期待値以上の成果ではあったな」

統率のハサンは、暗転した視界と共に次に覚醒した意識の中で見たものに愕然とした。

あの、バーサーカーの本体であろう女が、居る。

そして、自分と同じように状況に追いつけていないと思われるゴズールやマクール。

中庭で散っていった我等を始め、高台で殉死した風弓や業火 剣鬼に長刃といった

ハサン達も密集している。本能的に、主の我等の敵である女を討と

うと行動しよう

するが、何故かそれを実行しようとするのと体の動きが停止してしま

う。  
困惑はあれど、敵意をもって見つめるハサンへと。何やら記録して  
いた女性は

無機質に、あの黄金の姿のアーチャー以上に何の感情もない目を向  
けて告げた。

「……ようこそ、Lobotomy coopへ。君達は、アブノーマ  
リティであるがlevel4と5に

値する職員達と同等の力を持っており。普通の収容と異なる異常  
存在だ」

「まだ混乱しているようだが、疑問点に関しては近くにいるエージェ  
ント及び

セフィラに説明を受けてくれればと思う。注意としては、職員同士  
での暴力行為は

パニック抑制以外では禁止する」

更に、混乱は膨れ上がったが。一つだけ統率のハサンには理解が出  
来た。

自分は、終焉を迎えられると思った。後悔ない、安らかな終わりを。  
だが、それはもう暫く叶わないのだろう、と。

遠坂時臣は、自室にて顔を覆っていた。

余程、あのバーサーカーの一矢の報いが気に入らなかつたのが。不  
機嫌に

冬木の外に散策に出た自身のサーヴァントを止める余力は彼にな  
い。何より

彼自身も一人つきりで、この散々たる状況を纏めたかった。

アーチャーと、マスターとサーヴァントとして一応の交友関係に至  
れたのは良い。

向けられたバーサーカーを、倒せた事に関しても最上だ。あの伝説のアーチャー

ギルガメッシュの力量は、バーサーカーを瞬殺できると言う事は解ったからだ。

だが、ハサンの群体であるアドバンテージは多くの使い魔で遠坂を見張っていた

参加者達によって暴露され、水面下の同盟者である言峰が脱落したと言う状況は

作れなくなつたし。これで、遠坂は大量のハサンを使役しての周囲の諜報活動が

かなり難しくなつたのだ。綺礼からは、残りの個体は約半数程度だと報告受けている。

『アサシンの宝具である妄想幻像(ザバーニーヤ)を使えば……基数を戻す事は

出来るでしょうが。より、ステータスは衰えるでしょう』

ハサンを宝具を使い数を戻すかの検討は、見送っている。ステータスを劣化させても

英霊は英霊。諜報には数いるし、高度な気配遮断は劣らないものの周囲にハサンの

特性が知られた今、その多勢さは逆に危ぶまれる。最悪、またあの戦士と同等の

バーサーカーが襲来してイタチごっこに陥る可能性すらあり得る。

「バーサーカーめっ、一日も経たずして襲撃へと移るとは」

敵対関係に至つてるとは言え、バーサーカーを使役するのは未知のバーサーカー。

七騎が揃うまで、英霊をぶつけるような低い度量の奴は居ないと軽視していたが

完全に見誤っていた。まさか、一日経たずに百貌のハサンの質量に並ぶ戦闘力の

戦士を招来させ、仕掛けてくるとは！

綺礼から心胆寒からしめる内容を受けた時は、肝をつぶしかけた。

まだアーチャーを召喚する前であつたし、本当にハサンを脱落させては堪らない。

それに、瀕死の中でアーチャーへ反撃したバーサーカーの行動に関しても息が

止まりかけた程だ。半神とも言えるアーチャーを、何処ぞと知れぬ銃の魔弾

一発で即死出来るとは思っていないが。あの宝具の嵐にも一撃で耐えられる凄まじい

戦闘継続の執念は空恐ろしいものだった。

だが、これではつきりした。バーサーカーは、魔獣及び狂戦士を飼うという

メイガス（魔術師）だ。だが、小鳥に関しては様々な伝承に触れるもので想定は

幾らでも可能だが、赤い頭巾の戦士となると一体何者なのだ？

「まさかグリム童話などと言う事はないだろうし……バーサーカーの正体は一体」

赤ずきんと言えば、有名なグリム童話を連想するが。赤ずきんが一騎当千の戦士で

あつた等と馬鹿げた話、まだ獲得する事のない聖杯を賭けてでも否定しよう。

「いや、童話と言う概念的なものを具現化させる事が出来る。謂わば語り手

作者といった者を召喚する事は出来るのかも知れん」

時臣は、必死に知性を振り絞り。バーサーカーの真相を解明しようとする。

そして、物語に登場するような存在が暴れ回った事から。そのサーヴァントの正体は

昔話を創作した作者なのではないか？　と言う推測を打ち立てた。

だとすれば、今後も自分の想定外のバーサーカーが召喚されて状況を荒らしかねない。

未知の異物を投入出来る魔術師めいた狂戦士となると、かなり不味



い。

予測を打ち立てると言う、遠坂の常に優雅たれ、備えよと言う姿勢に反する敵だ。

遠坂 時臣のバーサーカーの正体は、実際は真実に外れているが。未知なる存在を多大に

戦争に投入出来ると言う事実は正解だった。

そして、彼には。もう一つの情報と言う札を備えていた

「間桐の結界が、気づけば破れ。当主の翁は行方を晦ませ、桜も……」  
使い魔によって受けられた報せ、その事実は遠坂の思考を更に闇のほうへ導く。

「まさか、あの男 雁夜……………貴様なのか」

安楽椅子の中、昏い火を伴わせ明後日の方向に視線を向ける。

闇の中で、窓辺の外で月は何も言わず天空を輝かせていた。

## 答申

ウェイバー・ベルベツトは現状に対し、齒噛みしながら目の端に映る大男の所作を

憤懣遣る瀬無い目で、無言の抗議を送っていた。

彼は時計塔と言われる魔術師達が集う協会の学生であり、今世代の保守主義的な

魔術世界に一石を投じて大きな波紋を発する……と思える論文を作成できる優秀な

実力者であると自負する魔術師の一人。

師弟関係である、この聖杯戦争の参戦者である一人に吠え面を搔かせ。大規模な

魔術儀礼を通過する事によって、この戦争の勝利者となり大魔術師として名を轟かす

野望の元に、この日本に降り立った。

触媒である元は師の物になる筈だった聖遺物を奪取して外国の地に来た所までは

順調だった。だが、そこまでだったのだ……幸運が続いていたのは。

(くそっ、どうも幸先が悪いぞ)

召喚儀式を執り行う為の、魔法陣を描く為の血を入手しようとして適当な酪農場

から鶏でも数羽失敬しようと思った矢先。この冬木市にある牧場やら飼育場の

動物が惨たらしく捕食に殺害と言う事件が多発しており、ウェイバーは厳重な警備が

なされる牧畜を諦め、慣れない隠密と体力仕事を費やして漸く近くにある学校の

鶏舎から盗み出す事が出来た。お陰で、暗示で家族と誤認させている外国人老夫婦

の家宅へと戻った時は、両手は傷だらけで疲労困憊に陥ったもの

だ。

それで終わるだけなら未だ良かった。努力して得た鳥獣の血で描いた後

行使した念願の召喚儀式。過程こそ覚めやらぬ興奮と躍動感で今まで引き摺っていた

不満も吹き飛んだが、その召喚されたライダーの外観及び少ない時間のやりとりで

彼が生来から培った劣等感と、そして内心のストレスは溢れかえり不貞腐れていた。

「ラ〜イ〜ライダーあ……っ」

「うん？ どうした坊主。そんな子山羊が腹を空かしたような鳴き声を立ておつて。」

ん！ いや、そうであつたなっ。今宵は丑の刻も過ぎ去りた頃。余も戦争の展開に

久方振りに頭を車輪の如く回したお陰で腹も減ったわ。よし、坊主！ この国の

珍味がマケドニアやペルシアの馳走で培った、この舌を唸らすか吟味するか！」

自身の向ける負の感情を、見当違いな答えを発する大男……もといライダー。

燃えるような赤い髪と髭に緋色のマント、青銅鎧を纏うヒグマ染みた体格からは

轟々と、古代の兵等を自然と傳かせる王としての気配を発している。

この人物こそ、彼の『アレキサンダー』こと『征服王イスカンダル』なのだ。

膝を叩き、豪快に笑う大王に対して。つい先程までの騒動……冬木市の中央図書館に

忍び込み、ホメロスの詩集と、小学生でも馴染みのある世界地図という二つの本の

為に夜間に閉鎖されたシャッターを破壊するという愚行を犯し自

身に余計な焦燥と

心労を与えたサーヴァントに対して、既にウェイバーには最初に僅かでも抱いていた

敬意や畏怖による閉口を上回る憤怒のままに荒げた声を発し拳を振り上げる。

「な——にを頓珍漢な事を言ってるんだあ！　いいか!?　既に聖杯戦争は

始まってるとだぞ!!?　聖杯戦争の常連である御三家の庭で、アサシンと

バーサーカーが激突して！　しかもアサシンは多勢で！　それで黄金の人影を

したサーヴァントが乱入してバーサーカーとアサシンを打倒して……っ」

「落ち着け、坊主」

パチンと、擬音だけなら可愛らしいが。受けた当人には多大なる衝撃と後方への

転倒と背中を土で汚すと言う蛮行だ。顔をトマトのように変色させ、声にならない

怒りを表すマスターを、征服王は少々呆れを滲ませつつ告げる。

「そう、支離滅裂に言っても解るものも解らん。その目で使い魔越しに見たもんを

ちやーんと整理をつけて報せんとな。戦場にて一番大切な事は、仔細し損じる事ない

正しく早い情報こそ、金銀よりも勝るものよ」

誰が誰の所為で、まともに話す事が出来ないと思っっているんだ……！　と、マスター

である彼は拳を震わせるが。自分は清廉された魔術師なんだと言いついで聞かせて、来日して

見張りとして置いていた鼠の視界越しに見たものを、渋々とライダーの調子に合わせ話す。

多数の体格に差異ある仮面を付けた、ハサンと思える群体。ライ

ダーとは異なる血の色の

頭巾を纏った、世代としては近代に近い戦闘服を纏った鎌と銃を備えるバーサーカー。

そして最後に、多数の宝具と思しき武具を降らせた黄金のサーヴァント。

御三家の遠坂。その大庭園にて行われた三つ巴の血が花壇を全て朱色に染める戦。

激しいハサンとバーサーカーの激突は、使い魔越しで見ても迫真で壮絶さは極まり。

夢想していた華々しい英霊同士の対決とは少々趣き異なるというか凄惨さが

目立つものの確かな聖杯戦争の戦いであると胸打つ光景だった。

ああ！ あの戦いに混じりたいとは口が裂けても言えないが、それでも身が震える程に

魔術や日常で見るとよりも鮮烈な火を背負って刃を振りかざし、消滅する寸前まで闘志を

折る事は決してなく天頂にて立つサーヴァントにも立ち向かった狂戦士。そして、その

強大な敵に対し、一個人は決して及ばずも戦い抜いたアサシンの姿勢は胸に残るものだった。

……それに比べ召喚したサーヴァントと云えば、ウドの大木のように寝そべり本を見ていて

今しがたまで起きていた激闘に関知せぬと言う態度だ。

イギリスから、この日本に渡るまで描いていた理想像と掛け離れた姿に横暴な振る舞いに

幻滅を浮かべるウェイバーを他所に、赤い髭を少し摘まんだ後にライダーは呟く。

「ふむ……アサシンと、その大量の宝具を所有する奴は組んでるか」

「え？ 何でだよ。そのサーヴァントは、バーサーカーとアサシンも含めて一網打尽に……」

彼の反論に、似合わぬ人差し指を横に振っての否定する仕草を伴っ

て野太い声は降らされる。

「阿呆。坊主が言うトオサカの居城にて、既にその大勢の暗殺者共は其のバーサーカーを

待ち受けておったのだろう？ わざわざ、暗殺者共が敵の城に誘導する意味がどこにある。

何よりも、それほどの量あれば。質量にて1対1の戦いで引き込み。他のアサシンが

マスターを討ち取れば良い事だけだしな。

あわよくばと、同士討ちを試みての行動なら時間稼ぎをするようにバーサーカーへと

消耗戦を行う必要もないし、ましてや多勢で留まる必要もない。

十中八九、そのトオサカのサーヴァントが召喚されるか、宝具の展開の為の時間稼ぎとして

暗殺者達をぶつけたのが真相よ」

鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をマスターの彼は浮かべる。この頭の中まで筋肉で形成

されてそうな大男に、こんな慧眼がある事が意外で。

……いや、思えばこのライダーは彼のギリシアからエジプト、インド西部まで征服した王なのだ。

只の戦闘馬鹿な筈もない事は尤もな話。

「となると、脱落したのはバーサーカーのみか……」

「いや、そう決めつけるのは早計だと思うぞ。坊主」

「はあ？ おいライダー、ぼく……私はこの目ではつきりとバーサーカーが

宝具で形成された武具の嵐に呑み込まれて消えるのを見たんだぞ」  
「確かに目にはしたのであろう。だが、余には否定し得たるものがある」

そう、有無を言わせぬ重々しさを秘めた口振りと眼光を目にして僅かに期待が戻る。

ライダーが今の今まで穀潰しの様にホメロスやら世界地図を読み耽っていたのは擬態で

実は密かに自分の魔術感知すら凌駕する隠されたスキルなりでバーサーカーの秘密を

知りぬいたのか？　と言う期待をいやでも膨らませた。膨らませた、のだが……。

「バーサーカーは、消滅してない　そう……　——余の勘が告げておるのだっ！」

あん？　おい何だ坊主、そんな風に崩れ落ちおつて。腹が減りすぎて動けなくなつたか？

まったく嘆かわしいぞ！　余のマスターを務めるならば、何時いかなる時であろうと

この剛健なる体のように、三日は飲まず食わずであろうと俊敏に動ける体を……」

このライダーに、少しでも期待した僕が馬鹿だった。膝についた土汚れを払って極力

目の前の大馬鹿野郎を見ないで済むようにしていたウェイバーだった……。

その目を離れた事は不用心。

不意に掴まれた引つ張られた襟首と、気管が狭まる事によって召喚時にめた

鶏のような声を上げたのも束の間、ライダーは月夜に映える剣で宙を切ると共に

牛に牽かれる華美な装飾の宙に浮くチャリオッツを繰り出していった。

これぞ、征服王イスカンドルの宝具の一つ神威の車輪（ゴルディアス・ホイール）

「さーあ坊主よ！　序盤の戦には乗り遅れたものの我が覇道は余が目覚めた時より始めたり！」

いざ！　遙か万里の彼方まで共に赴こう！！　まずは美味しい飯屋だ！

「……っ……っ……っ！」

目立つだろ馬鹿！　霊体化しろっ、この私を玩具見たいに引き摺り

回すな！

そう罵詈雑言を浴びせようとするものの、窒息しかねない首への圧力と突然のGの負荷で

殆ど意味をなさない音を出しながら。ライダーとウェイバーは冬の夜空を駆けるのだった。

ライダーとウェイバーのように、アサシン バーサーカー アーチャーの激突を監視していた

残る各勢力の反応も著しいものが生じていた。

「バーサーカー、アサシン。その、どちらも脱落はしてないわ」

極東の日本。そこから現代の飛行機でも数時間は掛かる冬国であるアインツベルンの城にて

雪よりも柔らかな色合いの白の髪を、積雪を齎す木枯らしが揺らして時刻にて空にも染められる

夕焼けのような瞳が、目の前にいる男性の瞳へと強くぶつかり合う。

「サーヴァント1騎の脱落でも、切嗣の言う通りの多くの霊基を保つて動く存在ならば

消失した時点で私にも違和感が解る筈。そして、ソレに勝るバーサーカーにしてもよ」

「そうか。アサシンに関しては、だろうなと思っていたが。バーサーカーのサーヴァントも

一筋縄でいく存在では無さそうだ、アイリ」

アイリ。

アイリスフィール・フォン・アインツベルン。

アインツベルンにより錬成されたホムンクルスにて、聖杯の器として造られた存在。

そして、この聖杯戦争で『セイバー』のマスターたる衛宮 切嗣の妻。

彼女の特性であり呪いとも言える願望機の器として調整されてる事により、どれ程遠くの地

でサーヴァントが偽装死や行方を晦まし生死不明の状態に陥って



も、その真偽を彼女は

体の不調として解る事が出来る。だからこそ、確信を込めて未だ聖杯戦争での英霊の脱落は

無いと宣言する事が出来る。そして、衛宮切嗣自身も長年の戦人としての経験から

早期での要たるサーヴァントが2騎脱落する事への不信感と猜疑が正しい事と裏付けられる

事を妻の証言から得られた。

「けど、不思議だわ。総勢が不明なアサシンに関しては未だ警戒しておく事で何とかなるかも

知れないけれど。バーサーカーは、どうやって窮地を脱け出せたのかしら」

アサシンのサーヴァントが脱落しない理由としては、未だ登場せず裏で潜む群体としての

残りがいるからだと見当付けられる。

だが、宝具の武具を降り注げる黄金色のサーヴァント。それに拮抗まではせず

一撃を耐えて、銃撃で反撃したバーサーカーは霊格としても勝る劣らず、宝具は開帳されてたか

不明ながらも、聞いた情報の限りでは脱落しなかった事が奇妙で仕方がない。

「そのサーヴァントには蘇生か、或いは不死に近い特性を保有しているのかも知れない。

狂戦士として召喚された類だ、何かしら曰くがあつて可笑しくない」

だが、これで二つの有力な情報は確保出来たと。切嗣は妻との会話を安全圏で行いつつ

ひっそりと、心の中ではほくそ笑む。

小聖杯としての機能を担う彼女により、サーヴァント2騎の脱落の虚偽が濃厚になった事は

大きな意義がある。これが正史のハサン一騎の脱落であるなら、未

だその情報を鵜呑みにする

可能性もあったが、バーサーカーとハサンと言う霊格が一気に脱落して特にアイリスフィール

に何の変調の兆しが無いと言う事は不自然極まりない。軽い頭痛や風邪のような症状が出ても

不思議でないのに、久宇舞弥から送られてきた情報を心安らむ娘とのクルミ拾いが終わった

頃合いに受け取った時間。その前の妻の調子を顧みても常日頃と変わらない調子だったし

今しがた最近の肉体の不調を聞いても、不思議そうに否定の声を返された事から解る。

ハサン、バーサーカーはまだ存続している。そして、その牙をひっそりと影で磨いていると。

(だが、計画に変更はない。アイリとセイバーを聖杯戦争の表舞台に立たせ、僕と舞弥で

マスターを抹殺する。……アサシンやバーサーカーのマスター、どちらも使い魔の視覚内に

出現しない所を見ると慎重な奴等だ。特に、バーサーカーのマスターに至っては遠隔で

狂化されているサーヴァントを使役してるのに関わらず、同盟関係の遠坂とアサシンの

マスターの戦力を確実に削りながら、尻尾を殆ど出していない) 衛宮切嗣は、受け取った情報から危険な存在であると感じ取った言

峰綺礼と共に  
バーサーカーのマスターへの脅威を上げた。そして、彼も遠坂とほ

ぼ同じタイミングで  
結界が破れ、もぬけの殻となった間桐家の情報を知る。

(間桐の翁、そして子息の二人ともに消息不明。自分達の領域を手放してまで有利と

なる状況があった。今まで特に大きな行動をしなかった奴等を、そう動かせる何か

あつたとすればサーヴント以外に有り得ない。……群体のハサンも、確かに特性として

優秀ではあるが間桐家の不在を露呈させる程に大きな能力が隠されてたのだろうか？

違う気がする。ならば……バーサーカーか)

(この聖杯戦争……思った通りに事が運ぶのは難しそうだな)

セイバーのマスター、衛宮切嗣も現状の背景の裏を重く受け取っていた。

だが、彼のやるべき指針に大きな変わりはない。根源に至る大聖杯。それを入手し

人類から争いのない平和な世界を齎す。その穢れのない世界の実現の為ならば召喚した

サーヴァントを使い捨て。家族を、愛する者を犠牲にする覚悟は既に決めているのだから。

ライダー、セイバーの陣営も既に行われた戦争の序盤の動きを理解し始めた。

打撃を受けたアーチャーのマスター。遠坂時臣も、最強のアーチャーに臣下としての

礼節を弁え、捻じれに捻じれた計画を変更し改めて自分達に優位となる動きを考える。

その一方、事の発端へと至ったバーサーカー陣営こと。管理者Xは済ました顔で

百貌のハサンを酷使していた。

「F—01—02へ洞察作業 T—04—06、次のハサンこと仮称D—9が愛着作業へ。」

F—01—18に愛着作業、T—06—27に抑圧作業、O—05—30に洞察作業

F—02—44へ抑圧作業。間違える事なく、D—9が次に其の収容室へ向かい本能作業に移れ。

次 O—05—61……O—01—67……」

あらゆる場所に不思議な生き物や無機物らしき存在が写り込んで

いる。一見すれば

破損が著しいテイベイアであったり、ロッキングチェアに腰掛けた老婆だったり

花の咲いた角の生えた茶色の毛で覆われた獣のような虫見たいな怪物だったりする。

管理者の彼女は、淡々とハサン達に対し指示を加えていく。ある者は困惑気に

ある者は直視した怪物の姿を見て声を荒げて非難と拒否の返答を管理者に浴びせるが

彼女は眉一つ動かす事なく告げる。

「君達に拒否権はない。指示通りにしなければ、消滅するだろう。いや、可能性として

君達の言う座の返還以外で。その霊基、魂と言えるモノ全てが目の前のアブノーマリテイ

に摂取されて完全に消滅される事も考えられるがね」

簡潔に告げられる無慈悲な宣告。黙って従え、でなければ死ぬより恐ろしい目に遭うぞ

そんな言葉を投げかけられれば、どうやら一斉蜂起して この謎の建物内で絶対的な権限を

持つてるらしい女に反撃しようにも力が制限されてるハサン達にはどうしようもなかった。

泣く泣く、何かしら手の打ちようがあるまで新たなサーヴァントのマスターに従う他ない。

統率である、バーサーカーと相打ちにまで至ったハサンの彼女の身の上も同じ。

最初こそ、訳の分からない事態に困惑していたが。司令官としての立場でハサンの先頭

にも立ってた手前、冷静の仮面を被っては指示通りに建物内を駆けまわり状況を理解していく。

(つまり、この建物は怪物共を閉じ込めておく檻なのだ。このような出鱈目な宝具があるとは

恐れ入る。固有結界の類ではあろうが)

固有結界。個と世界、空想と現実、内と外を入れ替え、現実世界を心の在り方で塗りつぶす

魔術の結界。魔術師たちにとっては最大級の奥義と言って良い。

(だが、一体どのようにしてこのような世界を創りあげれる？ 古今東西の英雄にして

このような魑魅魍魎の巣窟を目にした者が居るのだろうか)

ハサンは、今のようにはバーサーカーに使役されておりマスターとのパスは遮断されてるが。

聖杯との繋がりは未だ存在している。故に、現界するにあたっての基本的な世界の在り方

そしてその時代においての一般知識や、真名を知つての英雄のかつての所業を織る事を

可能としている。だが、その聖杯の知識を以てしてもバーサーカーの過去を推し量れない。

(……此処で働いている他の職員と言われる者達。外観は降り立った現世の者達の服装に

酷似しているし、顔つきはアジアから北欧、中東と人種も全て異なっている。

駄目だな。何一つとして真名に関わるだろう有益なものが見当たらない)

自分達のように、化け物が収監される部屋に入る者達は中々鍛錬されていてハサンたる

我等と拮抗するのでは？ と言う存在もチラホラ見受けられる。資料を運んだり研究職専門

と思われる単純な力量低い者達に至っては捻じ伏せる事も容易そうであるが、各自近代の

飛び道具である銃器具で武装している。このような魔術結界で動いてる者達だ。

気配遮断も碌に働かない状況で挑んでも、魔力の込めた銃弾を複数人から浴びせられれば

劣勢に陥るし、何よりもこの結界を支配する、あのバーサーカーが黙認する筈もない。

「ひ ひい……くそっ」

「大丈夫ですか？ ツルノ。虫に関連するアブノーマリティですし、貴方と相性は良いと

思っただけで管理人は指示しましたが、何か問題ありましたか？」

「問題もどうもこうもねえよ……！ あっ、あいつの指示通りに簡単な質問しようと

口開いた瞬間、あの蝶頭……お、俺の顔をアノ五つの腕の一つで頬を叩きやがった！」

「どうやれば、この結界から脱出が可能か。そう黙考する統率の目に青色の髪の男性が

T-01-68と書かれた部屋から転げるように飛び出して金切り声染みた声で罵り声を上げた。

アジア系の女が宥めても、効果は芳しくなく頭を抱えて混乱する様子を冷たい目で

アサシンは遠くから見つめる。他人事ではあるが、見つともない奴だ。

何処の世界であろうとも、ああ言う風に現状に馴染めず無体を晒す存在は居る。丁度

基底もそんな存在だったと思ひ起こされる。あの我等は、この建物の何処ら辺にて

どんな怪物に相手してるのか。いや、もしかすればもう運悪く消滅したのかも。

一瞬、脳裏にちらついていた凡夫の凶は瞬く間に消えた。今は、この空間内で確かな

生存を図る。それだけが、この統率の名を冠したハサンの出来る事だから。

機械的な女の音声が耳に発生する。この女の言われるままに動く、それは屈辱ではあるが

忙殺ことあっても、物理的に消滅させる真似は未だこの女は考えて

ない。

恐らく、したくても出来ないのだ。この結界の維持に我等は必要ならば、まだ逆転の目

はあるのだ。付け入る隙は、勝機はがあるとアサシンは意思を折らない。

その一方で、アサシンから存在を脇に追いやられたツルノこと間桐の便宜上の当主は

ユメカに対し恐怖や混乱を滲ませた声を上げていた。

「あいつは一体どう言う化け物なんだっ。い、行き成り殴つて来たが俺は何とも無いのか？」

不気味な奴だった。今まで目にしてきた蜘蛛達の中を君臨する女王蜘蛛や上半身を

ひつきりなしに啄む鳥とも異なる、何処か異質な存在。

黒い棺を背負い、腕は五本存在するタキシードを着こなす顔が大きな蝶で模られた

異形な辛うじて人の姿形の化け物。部屋には数羽の蝶と思えるものが飛び交っていたが

交流してきた蜘蛛達と異なり、あの蝶には今まで蟲の使役をしてきた鶴野には殆ど

意思疎通をなす事は出来ない、目にした蝶男にも飛び交う蝶にも予感を覚えた。

目にしただけでも乗り移られる異常な存在を、この前に直視したばかりだ。彼の不安を

落ち着いた声で、ユメカと周りから呼ばれる女性は返事する。

「T-01-68、死んだ蝶の葬儀と呼称されるアブノーマリティは職員達を解放しようとする存在。

そう、私は聞いています……この会社の人々は、訳は様々ですが生前、この会社から退社

する事が出来なかった人達です。私も含めて」

だから、あのアブノーマリティは彼なりに職員達を解放しようとしてるのでしよう。

そう、静かな目で収容室を見るユメカを。髪を掻き毟りつつ鶴野は乱暴に言い返す。

「解放だって？　はんつ、何が解放だよ……！　罰鳥って言う奴もそうだけだよ。どいつも

こいつも手前勝手な持論が正しいと思って行動しやがって」

「……ツルノは、この会社から何時でも外に戻る事が出来るんですよね？　家族の元に

帰る事が出来るんですよね？」

エージェント達へ、管理者は鶴野の事情をある程度説明している。外の世界の魔術師と

言う存在の低位互換。自分達と違い、管理者Xが許可を出せば何時でも外の世界に帰還

して自由に生活出来る特殊な人間である事を。

「はっ！　家族なんて良いもんじゃねえよ。あの家は、化け物の……妖怪蟲爺いの巣窟だぜ？

居場所なんで、俺には無いんだよつ。

友達はおろか信頼出来る奴なんていやしねえ。……慎二の元に今更行ける筈もねえしな」

「慎二？」

自然と零れ落ちた愚痴。そして出て来たワードに首傾げる仮の上司に失言だったと鶴野は

顔を歪めるも。外に一緒に出てプライベートだと詮索もある程度好きな普通の女子だと

性格は大まかに知っている。観念して、自分の息子だと不承不承に告白していた。

素っ頓狂な声が響き渡る。大きく目が見開かれ、ユメカはその後に叫んだ口を抑えつつも

興奮した口調を隠せず、予想していたリアクションに耳を軽く塞ぐ鶴野に顔を近づける。

「子供が居たんですか!!？」

「つうるせえな！　耳元でギャンギャン喚くなつ。居るよ！　今は



海外に留学させている。

……こんな、あちこちに。あんな髑髏の仮面被った奴等や蟲爺いが蔓延っているだろう町に

居させる訳にはいかねえからな」

アサシン達が職員として配備される事は鶴野も驚きを隠せず狼狽えたが。自分達に差し障った

影響はないと断言する管理者の言葉に対し反論は出来ずに居た。何よりも、藪蛇について

新たなサーヴァントに目を付けられたくもない。これ以上の厄介事は御免だった。

目の前の女は、息子の不在に対して反応は芳しくなく。どう言った容姿で、どう言う性格

なのかとか、そう言う事を興味津々に聞いてくる。

「背丈は、こん位で……顔は、俺の子供の頃にそっくりだよ。こいつは、俺の息子だなんて

一目見れば、はつきりとわかるぜ。写真……ああクソツ あその管理者に私物殆ど預けてたな。

後で要望が通るなら、見せてやるよ」

家族写真ぐらい、許可は直ぐ通るだろ。そう、独り言のように述べる鶴野は未だ世間話で

幾らか精神は落ち着きを取り戻していた。だが、次の言葉は容認出来なかった。

「——でも 何で『慎二』なんです?」

普通は、長男なら慎一ですよ。と、言う呟きは決して大きなものではなかったと思う。

だが、彼女はサーヴァントであるが。決して万能で人として完璧な存在でもない。かつて

この会社の設立者である神のような頭脳を支えた男の片棒のように、器量良しでもない。

彼女の、ユメカの言葉は。抑えつけていた彼の深く深く埋めていた黒い欠片の記憶を

掘り起こす事となった。

——何じゃ コレは？

……やめろ

醜い 濁り子を産むとはな

やめろ

一度目は許してやろう 鶴野。胎盤の女もな だが二度目  
はないぞ

やめろっ

さて これをさつさと……

やめろおおおおおお

……っ

「……ツルノ」

我に返った時、自分の手が目の前の彼女の胸倉を掴んでいた事が理解出来た。

握る手元は、血の気が引いている。きつと、鏡を見なくても解るが顔色もだろう。

ユメカは、行き成りの乱暴な鶴野の行動に対して恐怖は見せなかった。

ただ、その目に悲哀の色を彼は感じ取った。だから、それ以上の暴力を振るう

真似はしなかったのだろう。

「御免 御免なさい……っ。泣かせるつもりはなかったんです、ツルノ……っ」

その言葉に、自分が涙を流していると初めて知った。

未だ自分に涙を流す資格もないのに、この目は流すのかと自己嫌悪にも至った。

彼女に何も言う気力は無かった。ただ力なく手を離し、打ちひしがれた様子で

鶴野は遠ざかる。こんな状態の時に限って、あの女の指令は下らない。

何も感じず、何も思わず仕事に没頭する事が出来れば良いのに。

(そうだ……あの怪物共の檻のどれか一つにでも飛び込めば。簡単に俺は命を

絶つ事が出来る。終わる事が出来る。けど、俺は未だそれをしようとしはないのは

慎二が居るからかもな)

あの蝶の頭をした怪物は、職員を解放する使命を携えて存在していると云っていた。

ならば、帰る場所が未だ残っている俺は。何時でも自分が口にすれば外へと

帰る事が出来る資格が残っている俺は、この会社にとって異物に他ならない。

だから、あの化け物は。貴様は場違いだとも言うかのように自分を叩いたのかも。

そんな訳ねえかと、自嘲の笑みを浮かべて歪んだ口元を浮かべる。一步、一步が

暗い場所の舗装に寄っている。だが、それを押し留めたのも慣れ親しみ始めた声だった。

「——ツルノつ 待って下さい！ ……先ほどの言葉は謝罪します、不躰な発言でした。」

けど、管理人の言葉は厳守しなくちゃいけないんです！

私は……私は貴方の上司で補佐が仕事ですつ。だから、業務時間内はずっと傍に居ます」

「……ちっ」

此処じゃあ、一人きりで黄昏る事すら出来ないのか。いや……初日からそうだったな。

自暴自棄になって、この会社で暴れようにも。目先で纏わりつく、

こいつが居る限り

俺はどう足掻いても家に居る時のように操り人形のように動かし  
かないのだ。

しかし、展望もある。どうせ、そんなに長くもない……この聖杯戦  
争なんて言う馬鹿げた

催しが過ぎ去れば、こいつ等と約束した通りに解放される。そうす  
れば、死ぬにしても

慎二を迎えるにしても、やりたい事はある程度出来るだろう。  
溜息を出す。皺が少し出来た襟元を直しつつ、皮肉気に呟く。

「そうだよな。お前達の社長の命令だもんな？ ぐ愁傷様だな、こ  
んな好きでもない

奴の傍に居てよお」

「私は、ツルノの事 好きですよ」

顔の歪みが引いて、真顔に変わる。ユメカは続けて、緩やかに笑っ  
て告げた。

「色々言った後の反応が面白くて、見てて飽きないですよ。ツルノ  
は」

「……チツ、黙れよ。余計な事言わないで、仕事の事だけ言え」

黒い影に仮面を付けた者達が、様々な想いを抱える中で。青い髪の  
咎人たる男と、それを

支える、夢 を名前に示された女も。この悪夢の中ですべき事をし  
ていく。

それを、無表情でXは観察していた。長い時間を彼女は椅子に座り  
画像に視線を固定する。

無軌道に危険区域、若しくは収容室に無断で入るような新参者のハ  
サンには警告を。

新しく収容されるアブノーマリテイには、この大型ツールアブノー  
マリテイの有難くない

恩恵による変質化が、どのような状態か改めて調査する為に要観  
察、観測を行う。

全ての業務が完了に向かい、数値が規定量に達した事を知ると、一

つのスイッチに手を掛け

席を立つ。それが、業務の終わり。ささやかな生と死の隣り合わせの緊迫した空間が終わり

束の間の平穏が職員達に訪れるのを意味するが。彼女には終わりではない。

「ゲブラー。最下層の様子は？」

「何も起きてない。不気味な程にな」

「警戒は続けておいてくれ。そしてMiss 桜の傍に引き続き居るように」

「チツ、言われなくても解っている。それと、あの黒い奴等で暇なのがいたら

トレーニングルームに寄こしてくれ。お前の言う通りに、幾らか体を動かせば

錆びつきも、ちよつとは取れるかもしれないしな」

「了解。後で鍛錬が必要だと思える者を向かわせる」

通信が終わる。画面は全て黒く塗りつぶされ、無機質なタイルでもコンクリートとも

異なる人工床を革靴が叩く反響音だけが響く。

アブノーマリテイへの作業は、恙なく終了出来ている。ユミの悲劇的な事故以来

目立った職員の死亡はないし、ハサンと呼称される職員として適用出来る人員が

一気に増えた事により。聖杯戦争が終了される期限までに招来されるであろう

異常存在に行き渡る人材を保つ事が出来た。

だが、こんな事が有り得るだろうか？ 下層に存在する、生前の職員を復元する機能を

担う存在が失踪した事により、新たに会社が緊急措置としてサーヴァントを鎮圧した事で

代替の職員として雇用する事を許可したと？

そんな都合の良いシステムが有る筈がない。アブノーマリテイは

アブノーマリテイで

ある事は覆る事はないし、それは職員でもサーヴァントでもそうだろう。

人が人である事を変える事が出来ないように、この会社の変化も有り得ない事なのだ。

(何かの、大きな作為が働いている)

×は思考する。だが、それは未だ思考の段階で行動には移らない。慎重さと、下手に動き

その大きな陰謀の影に察知した事を気取られる事のないようにと。変わる事のない、透き通った目に一人の影が映り込んだ。それに首を微かに角度を曲げ

名前を呼び掛ける。

「やあ雁夜。まだ就寝に移ってなかったのか？ もう体を休めるべきだと思うが」

この建物内では、余り時計は備えられていない。各自で腕時計を携行するか、体内時計が

正確に働いているセフィラに聞くのが常套手段。

告げた忠告に従わないまま、複雑な目と顔つきで彼は聞き返す。

「……何時も疑問に思ってたんだが。君が休んでる姿を見た事はないけど、何時寝てるんだ？」

彼が見る限り、何時も怪物達が不気味に収容室で微動せずも不安を煽る光景の画面の観察・指示

職員達や、セフィラと言われる幹部との相談。それを除いても他の職員以外の従業員に声を掛け

ベットに横たわったり、椅子で転寝するようなシーンは皆無だ。

「私には、就寝や休息と言う機能は備わっていない」  
「えっ……」

「別に特に弊害は無い。健康的不眠症と言う病状も現代医学に存在しているし、何より

体の造りが元々異なっていると思ってくれていい。

それと、仕事以外で他の者達を見回っているのは好きでしている事

だよ。以前は

ああ言う風に、他の同僚と気楽に雑談が出来なかったのですね」

君が気に病んだり、心配する必要は無いと告げる彼女を。雁夜は暫く考えこむように見ているから

口を開いた。その言葉の節々には、覚悟が見え隠れしていた。

「俺を……鍛えてくれ」

その言葉に、僅かに彼女の表情に変化が訪れる。前に会話した時にも出たような

少しだけ眉を片方あげる仕草。最近では、この表情はある程度不機嫌か 若しくは許容

出来ない内容を受け取った時だと雁夜は解っているつもりだ。

「出過ぎた真似かも知れない。多分、君の所有している宝具なら俺の助力なんて殆ど

必要ないのかも知れない。けど、俺は嫌なんだっ」

「無力のまま……このまま指を啜えて事態が動いて行くのを見守っているなんて。

君は、俺にこの会社の人間達の写真でも撮っているか体の養生さえしてくれれば良いって

言うけれど。俺は……力になりたいんだ」

(そうだ。このままじゃ、何も変わらない)

雁夜は、間桐桜が自身に対し何の愛着はおろか、自身の想いが伝わってなかった事を段々と

解りたくなくても分かりきってしまった。彼女の言う通り、今のあの娘に必要なのは本当の

家族の愛。または、全く彼女の事情を知らずとも頼れる大人なのだろう。

自分は、彼女の事情を理解しても。厳密には親でないし、保護者にもなれなかった。

あの地獄の責め苦から解放してやれなかった自分は、間桐臓硯と立場は同じと言って良い。

(俺に残されたモノは、少ない。けど……時臣との因縁に決着はつけ

なくちやいけない。

そして臓硯を野放しにする事は許されない)

彼は、未だ自分が恋慕していた女性。そして、ソレを奪ったとも言える男との確執が

心の中に残っている。歪んだ復讐と、結果としては正しい殲滅の意思。相反するとも

取れる黒と白の感情を備えて、彼は女性の目に自分の意思を備えた視線を向ける。

透き通るような瞳が、数秒じつと自分を覗き込んでいた。心の中がざわめくも

この心に嘘偽りはない。だが、目を反らしたくなかった事実はある。僅かに、一度閉じた瞳に深い吐息を漏らす音が聞こえた気がした。管理者と呼称される

彼女は、そんな仕草をさせた様子を欠片も見せず無機質な顔と声で返す。

「君の体は、アノ亜種アブノーマリテイの弊害で既に肉体は表面上は幾らか回復

してるように見えても。内部が深刻な事は承知の上での発言だね？」

「長くない命なのは承知さ。それでも、この聖杯戦争の顛末を見届けるまで生きられる

のならば、十分だ」

決意は変わらない。その想いと重みを知ってか知らずか、今度こそ少々憂い気に

彼方を見るような表情を浮かべてから、管理者は返答した。

「……見えない所で、無理なトレーニングをされても困る。それに、君には令呪と言う

大型ツールが齎している亜種ギフトも存在している事を踏まえる

と。  
そうだね、各セフィラに時間が空いた時にでも講義と特訓を君に割り当てる。



私自身は、君に教える時間は少ないし出来る事は限られている」  
それでも構わないか。と言う確認に拒否の意思は無い。

その告知の為に立ち去る彼女の背を見つめ。密かに雁夜は拳を握った。

彼女の力を借りれば、俺は……聖杯を手に入れられる。葵さんを幸せに出来る。

彼は、ある程度健全な体を取り戻した。それによって幾らか正常な思考に戻り物事を

柔軟に対応する発想も得たが、聖杯戦争に参加するに至った心までは一般人の頃のように

穏やかさは取り戻せてない。何より、その未だ平和な頃にあった情緒は一年の蟲の責め苦

そして、それに耐えうる狂氣的な黒い決意が拭い去っていたから。

——ミヤ——

ふと、耳元に声があった。……猫だ、黒い猫が緑色の瞳で自分を見上げている

「野良猫か……？」

この異常な、バーサーカーらしきモノが蠢く建物内に普通の動物が飼われているのは

初耳だ。いや、もしかすれば自分が知らないだけで働いている職員のペットか、又は

異常な空間内で精神を摩耗しない為のアニマルセラピーとして居るのかもと思

雁夜は屈むと手を伸ばして、おいでと声を掛ける。

猫は、雁夜を少し観察するように見つめ。再度一声鳴くと、何処とも知れぬ割れ目の中へ

俊敏な動きで潜り込んでしまった。慌てる雁夜だが、人が入れぬサイズでサーヴァントの

彼女から、建物に形成された罅割れの中に入ろう等と絶対に考えるなど告げられている。

(後で、報せておかないと)

少し陰鬱な感情を浮かべつつ通路を歩きだす。  
その背中を双玉のエメラルドグリーンの瞳が見送る事も知らず。

「少々、困った事態となったな……綺礼」

聖堂教会ごと、言峰の名が掲げられる教会にて二人の神父服を纏った老人と男性は向き合う。

「はい、残っているハサン達ですが」

『我等の総数、約50弱……そして、殆どが戦闘に不得手な者達ばかりで御座います』

教会の内部に音もなく出現する大量のハサン達。そのハサン達は仮面を被り顔色こそ

伺えないにも関わらず、全体から意気消沈の気配が漂っている。

無理もない。彼らの内の過半数の戦闘に技巧を偏っていた者達が突如襲い掛かってきた

バーサーカーの前に敗れ去ったのだ。謀略、策謀、姦計、術数と言った力なくとも

陥れる力に秀でた者達は残っているし、宝具の力を使えば総数を取り戻す事は出来る

だが、ハサンの宝具である妄想幻像（ザバーニーヤ）は決して使い勝手の良いものでない。

分裂すれば、その分力は分散されて気配遮断などを除きパラメーターは低くなる。

何より、多重人格達の中にはマスターに叛旗を向ける人格が出て不思議ではない。

同盟者、遠坂時臣のサーヴァントは依然として強力無比ではあるし。彼らの陣営では

バーサーカーの刺客の一角であろう魔物を倒せた事は大きいものの。群体ハサンのメリット

遠坂とハサン等サーヴァントが結託してるであろう事を知られた事は痛すぎる事実だ。

『交戦中に、確認出来た使い魔は四体……』

「むう……：召喚されていたサーヴァント達を見るに。三騎士のセイバー、ライダー、ランサー

そして元凶たるバーサーカーの陣営には知れ渡ったであろう」

重苦しい溜息が璃正神父の口から漏れる。元々、大規模な魔術儀礼ゆえに想定外な事態が

起きる懸念もあつた。だが、全てのサーヴァントが召喚される以前に他の敵サーヴァントが

自分達の陣営を襲撃してくる等と誰が予想出来るだろう？

「日中、そのバーサーカーであろう子女に手出しするのは悪手だったか……」

「父よ、全ては過ぎた事です。何より、我が師も私も、そしてこの場にいるハサン達も

含めて誰がこのような事態を予期出来たでしょうか？

そして、こうも考えられませんか？」

状況が余り思わしくもないにも関わらず、暖かさすら含む福音にも似た発言が綺礼から零れる。

「古来より、聖杯の探求の旅とは。彼のアーサー王伝説を含め、苦難の連続……：試練で

あつたと言われています。ならば、この度の出来事も神が我々を試す試練であると。

正しき思想と願いを、父よ。私達は携えている、その私達を誰が否定しますか？」

「おお……：っ」

綺礼の穏やかな微笑みを前に、真理を得たとばかりに感嘆の声を出す。

この子……：息子はっ。聖職者としての矜持を何一つ損なう事なく、このような不運を前に

しても決して憂鬱になる事なく、光を伴っている！

ハサン達も、目から鱗が落ちる思いだった。このような劣勢の事態を引き起こした自分達に

叱責の言葉を投げかけるでもなく。神の愛を説き、鼓舞を暗に振るう様は……っ

まるで、かつて幻視した山の翁のようであると。

「彼の英雄王ギルガメッシュも、我が師と交誼を深めております。ハサン達も、今回の

悲劇を前に、改めて戦意を燃やしています。何も心配はありません、父よ

信ずる者を、我等の父が見捨てる事などあろう筈がありません」

慈しむ笑みに、枯れかけた芽に新鮮な雨が降り注がれるように僅かに枯れて

猫背となっていた璃正の背を力強く正していく。

「良く言った綺礼よ……!」

やはり、聖杯がお前を選んだ事は何一つとして間違いなかった!

第三次に、聖遺物たる彼の杯が手元から零れた際。奇跡の成就を見る事はもはや叶わずと

失意に溺れ、そして今一度この老骨の手元に振り返りかけた光が一瞬曇った事に目が一瞬

眩みかけたが。綺麗、お前の力強い声に今一度血が熱く震えたぞっ

「はい、父よ。ですので、一つばかり、許可を頂けませぬかな?

この教会は不可侵の地帯を築き上げてますが。七騎士揃わずとも貪ろうとする獣すら

出て来た今、それを容易に無視する者達が居ないとは言い切れません。

神聖なる神の家に、魔道の細工を幾つか設ける事は痛み入りますが……」

「許す。お前の成したいようにするがいい」

「……感謝します」

深く、頭を下げる。その恭しい姿勢に再度熱いものが璃正の目元に

込み上げ

僅かにだが天井を向けなければ、また感涙に地面を汚しかねなかった。

そして、目の前で深く頭を下げる彼に至っては。

この茶番劇であり、今も腹の中で飼う闇と、そして目の甘美なる破滅であろう対象が

全くの無防備である事を嗤わない事に必死であった。

父が就寝に至る事を確認し、全てのハサンを散開させて不審に思われぬように教会の

近くに置いた一体のみを残して地下にある霊安室にあたる部屋を開く。

そこには、不釣り合いなものが存在していた。棺に関しては特に可笑しくはない

だが、横には真新しい埃を被っていない机と……二脚の木椅子と、ティーセット。

無人の筈にも関わらず、綺礼は当然かのように木椅子に座り。持ち込んだ品物を

机の上に並べると、その玩具を並べ始める。

「……新しい遊戯盤を持ってきたのだが、どうだ 一局」

眩くと、その丸椅子が僅かに軋む音と共に。一人の中性的な顔立ちの人物は現れる。

「チエスカ 腕前の程は」

「心の洞を満たせるかを試すにあたって、何でも究めようとしたものだ。

五分ルールでどうかね」

「何とも、気が長い提案だと思うがな」

「違うない」

愉快気な笑みすら幻聴で聞こえそうな表情と共に、盤は作られていく。

八極拳仕込みの、素早い手が盤の上の黒のポーンを、ナイトを動かしていく。

それに対し、涼し気に女も高速で白の王とルークを同時に動かして更にクイーンを動かす。

一秒足らずで、数個の駒が瞬く間に別の場所に移動して布陣を形成していく。

「オープニング イタリアンゲームだが」

チェス用語を述べる綺礼に、女は軽く黒い孔雀羽のような着物の襟元を撫でつけ答える。

「その筋も悪くはない　しかし、このままでは在り来たりではある。不確定要素を加えてこそ　より濃厚な黒蜜が出来上がる。ミツバチばかりよりも

天敵を加えてこそその蜂蜜酒だと思うが」

「ほお？　ならば、君は」

——キキイ……

チェス盤の下で、蟲が鳴く音がした。黒い墮天使と、神父の密会なされる大奥で。

「ああ……なに、折角の宴なのだ。招待してあげようとも

待ち焦がれ　恋焦がれたカボチャの馬車もな

……」

## 玉響

レム睡眠の中で、彼女は闇の中と異なる場所の中を佇んでいる。「よく来たのお 桜よ。慣れぬ所ではあると思うが

暫く寛ぐと良い。今日から、お前は儂らの家族なのじゃからな」ある日の記憶。最初だけ、御爺様は好々爺とした振る舞いを見せていた。

本当に、見せていただけ。

空は雲ひとつない程に青く澄み渡っていて。天気だけは私が新しい日常を

迎える事を皮肉交じりに祝っているようだった。

少し、こちらに来て欲しいと言われ。お父様 お母様から聞かされたけど

未だ、その意味を完全に解ってない私は。ただ良い子にしていれば、また元の

幸せな生活に戻れる夢を抱えていた。その僅かな幻想の為に、御爺様の背に

従って、暗い底に繋がる階段を恐怖を殺しつつ下る。

「こつちじゃ」

土蔵の深く、深く。きつと、そこまで深い場所じゃないけど地獄の口に

繋がっているように感じられた。冷たい石畳を裸足で歩き、視線は何か

潜んでいる明かりが殆どない天井や、壁と思える場所へ何度も向かう。

これから何をやるの？

そう言った疑問を投げかけようとする前に、私の前にアレが現れていた。

御爺様がついた木杖が軽く叩かれると同時に、ガサガサガサガサ這いずる音が

耳朵へと大きく鳴っていた。

私の耳の穴、鼻、口、おしっこする所や、お尻の穴。何処もかしこも

知りぬいているアレが影を濃くして集まっていく。

御爺様は微笑んで……晒っている。

「今、どんな気分じゃ？」

お父さまと連れ添い、最初に顔を合わせた時にあつた柔らかい目元は既になく

不気味な眼光だけが桜を捉える。

桜は、無力だ。桜は、何も出来ない。

桜は、お父さまにも、お母さまにも、お姉ちゃんにも見捨てられた要らない子。

だから　　私は　　私は　　私は

「——最悪以外　何もねえよ　変態蟲野郎」

「え……」

私の口から飛び出たのは、自分とは異なる力強く荒々しさを秘めた罵倒。

桜の視点が移り変わる、黒から赤に　薄暗い土蔵から広々とした通路のような場所に。

視界の中に、既に御爺様は居なくなっている。

代わりに、不思議な生き物たちが満ち溢れていた。

御爺様のアレとは違う、大きな大きな赤い瞳の蜘蛛に、指揮者見たいなマネキン。

黄色い目玉が一杯生えた樹木、黒い球見たいな大きな口を生やして笑っている

仮面が付いた怪物。大きな黄金色の卵形の中に入った綺麗な女人。

沢山の人の手足や内臓で出来合わさった大きなワンちゃん見たいな生き物。

天秤を持った背の高い人見たいに歩く鳥、その背後にもっと大きな何かが居る。



どれ一つ相手にしても、決して敵いはしない絶望的な存在。

「――化け物(アブノーマリティ)共は、全て消し去ってやる」

「何度目の前に立ち阻もうと、同じ事だ」

あの人、立っている。十字架見たいな模様の棍棒を構え、ソレ等に対峙している。

体には幾つもの疵が出来ている。足元に赤い泉が出来上がり片腕だつて失くしてボロボロだ。

一つ相手にするだけでも大変だろうに関わらず、その全てに本気で彼女は倒すつもりで

対峙している。その瞳には、決して私には無い光が爛々と燃え上がっている。

何で？ どうして??

絶対に、勝てる筈がない。それなのに、何でそんな無駄な事を……。

「決して忘れられないこともある……」

「どれだけ時間が経とうと冷めないものもある」

「私は――」

何かの言葉を紡ぎ終わると、彼女は屍が転がる地面を蹴り怪物達へ立ち向かう。

指揮者の形をしたマネキンがオーケストラを奏で始める。死体で寄せ集められた

怪物の咆哮が空気を震わす、黄金卵が光を放ち怪魚のような大きな生き物が産まれる。

赤い瞳の巨大蜘蛛を守るように、夥しい蜘蛛達が洪水のように迫る。

多くの圧倒的な絶望を、たった一人で……。

「い……おいつ、起きろ。ガキ」

瞼が開かれる。

目の中に、息が掛かる程の距離で睨みつけるように見下ろすゲブラーが映る。

普段通りの保護スーツに赤いジャケット。腕も切断はされていない

い。

「飯だ。さっさと顔を洗え」

灰色と褐色のオッドアイの目は、機嫌悪そうな鋭さを今日も衰えさせない。

それに、少女はちよつとの間を開けた後に了承の声を短く唱えて言う通り寝台を降りると、洗面台に無言で移動し紅葉のような手で洗顔を始める。

その様子を眺める彼女の顔つきは、気に入らないと言わんばかりだった。

L o b o t o m y c o o p 内で、ゲブラーが間桐 桜の護衛もとい世話係に任命された。

現実時間と比べ、時間の流れが緩やかな空間の施設内では幾らか日数が経つ。

劇的な変化と言ったものはない。何の力もない子供を、アブノーマリテイの

収納してる施設の中心部に案内するような自殺行為など管理人が許す筈ないし

セフィラのゲブラーもする気はない。副次的に供えられたトレーニングルームで

職員達の戦闘訓練の教官を務めるのを、桜は眺めたり。たまに時間が出て

話しかけてくるセフィラ達とゲブラーが話す横で置物のように座るのが日課だった。

誰かが作ったスクランブルエッグや、トーストなどを静寂が満ちる部屋で咀嚼する

音が一つだけ響く。桜は、光ない瞳で機械的にパンを食べ牛乳を嚙下する。

ブスツとした様子で、行儀悪く机に肘立てて顎に手をかけゲブラーはそれを見つめる。

セフィラ全体は、その正体は会社の支柱たるロボットに近い存在にあたり食事をする

必要は殆どない。ケセドのように常時コーヒーを摂取するのは嗜好や生前のトレースだ。

ゲブラーには、生前に愛好していた品と言うものは聞かれても特にないとされた言いようがない。

強いて挙げるなら、煙草の一本ぐらい一人つきりで黄昏たい時にも吸いたくなるかも

知れないが。桜と居る限り、そんな下らない自己主張を繰り返す気も無い。

桜は桜で、なんでこの人は何時も怒っている顔をしてるのだろうと。時々明後日の方向を

鋭い目線で見える横顔を盗み見しつつ思う。四六時中、ずっと彼女は大小なりの怒りを備えてる。

「もう良いのか？　なら、行くぞ」

食べ終わるのを見届けると、食器を片付ける事もなく通路へと大股で出る。それに小走り気味で

付いて行く小さな紫色の頭を一瞬一瞥して見下ろしつつ目線を戻し前進する。

関係は、凄く良好とは言い難いものの。多少は収まりついたものと至っていた。

ギンツ　　ガギンツ

金属が打つ音が一室に響く、激しくも一定に鳴らされるメトロノーム染みた奏では暫し桜が

眺めてる空間を流れてから、黒装束が地面に濡れ雑巾が叩きつけられるような音と共に

唐突に終了した。涼しい顔のゲブラーと、息の荒い10人程のアサシン達が対峙している。

「どうした？　まだまだ動けるだろうがっ」

長い棒状の武器を肩に提げつつ血のような真っ赤な髪を振りつつ、彼女は一気に突進する。

アサシン達は、一瞬虚を突かれ硬直したものの。迫るゲブラーに一人は防御をとり

残るは空間の幾つかの場所へと飛び退いて反撃の機会を狙う。

「馬鹿共がっ！ その動きは見切っているって言っただろうっ」

捨て身で動きを膠着状態に陥らせようとしたハサンを、小石でも蹴るかの様に簡単に壁へ

叩きつける彼女は、天井と東西南北の5方向から迫る黒い巨大な飛来物を旋回するように

武器を振り回して撃墜する。残る四体は同時に　されどタイミングを僅かにずらしての

連撃を突進しつつ転じるものの、ゲブラーはその先端を僅かに自分の持つている武器で

弾いたかと思うと、蹴りを先頭のアサシンに叩きつけた後に残る三人に長物を投げつけ

一人を昏倒させた後に、残る二人の腹を殴りつけ吐瀉物を撒き散らせつつ伸ばした。

「ちっ……速いだけが取り柄かっ。おらっ、立て　休んでる暇はないぞ」

無茶苦茶だと、最初に戦闘不能になって覚醒が早かったアサシン達から文句を

心の中で垂らす。この女　百戦錬磨の生粋の武闘家だ。最初はアノ管理者と言う女から

この保護スーツの女と多人数で組んで戦えと言われて何を馬鹿な事をと失笑を仮面裏で

浮かべていたが、甘かった。

剣術、槍術、杖術……斧や鎖鎌といった変則的な武器であろうと一流に精通している。

我等とてサーヴァント、刃引きがしてる武器とは言え生前と同じ物を使用してるし

動きも殆ど最初のマスターの配下の時と変わらない動きだった。なのに関わらず

どんな攻撃も、いなされるか力押しで弾かれ。その直後に鋭く重い一撃が意識を絶つ。

体術においても、徒手空拳での確にハサン達の顎や水月といった急所を打ち抜く。

男性のハサンであれば躊躇なく金的を行おうとするし、遠慮といったものは一切ない。

一番異常なのは、そのタフネスだ。ハサン達とて今はこのcoopの職員と言う冠位に

収まっているが、サーヴァントであり英霊にまで登り詰めた存在。並みの人間や

キヤスタークラスであれ、直接戦闘なら分がある筈なのに関わらず。この女は

体感時間で既に数時間は猛攻を繰り返しながら、殆ど汗すら掻いてない。

いや、気の所為でなければ。戦う毎に、その闘気が高まっていないか……？

戦慄を隠せないままに、何とか気丈を保ち武器を構えるハサン達を。称賛や感心と言う

好意を一切なく、殺気すら込めかねない様子で長物を振り下ろす体勢に移るゲブラー。

一触即発の彼女達を止めたのは、一つのアラーム音だ。それを聞くと、舌打ちをして

ゲブラーは時間終了の旨を告げる。心底の安堵を吐く彼らに対して、彼女は無慈悲に告げる。

「てめえら軟弱過ぎだ。これからも定期的に時間あれば扱いてやるからな」

そう言うやいなや、さっさと彼女は小さな子供を引き連れてトレーニングルームへ出る。

噎せ返るような、濃い汗と鼻につく嘔吐物の匂いに囲まれたハサン達は扉が閉まる音と

同時に糸が切れるように倒れるのだった。

「たくっ、弱すぎる。あれならlevel5の職員達のほうが余程齒応えある」

苛立ちを全く解消せぬまま前進するゲブラーの背中を、黙々と桜は追う。

その時、少しだけ馴染み深い呻き声のようなものを聞き取り立ち止まった。

一つの扉に無言で顔を向ける桜をに対して女性も、その扉の前に近づいて気づいた顔を

すると口を開いた。

「ああ、此処も謂わばトレーニングルームか。確か、お前の以前の保護者的な立場

だった、カリヤ、だったか？ そいつが、いま使ってるよ」

入って様子でも見てやるか？ と聞くゲブラーに。ゆっくりと桜は顔を横に振る。

どうせ、見た所で何も変わりはない。あの、おじさんは場所が変わっても

痛い事をきつと自分から進んでやっている。桜がどうだろうと、勝手に。

そんな彼女に、ゲブラーは僅かに眉を顰めつつも そうかよとぶつきらぼうに言い捨てて

通路へと進むのを戻る。

「心配するな、怪我させるような真似はしてねえよ」

少しの間の後に、僅かながら何時もより怒りが和らいでいる口調の声が掛けられる。

顔を俯いて歩いていた桜は、少し顔を上げたものの。そのゲブラーが、どのような顔で

その言葉を投げかけたのが、終ぞ分からなかった。

雁夜の要望は管理人に通った。彼女は、その翌日には彼にトレーニングを課した。

刻印蟲の拷問にも一年血反吐を文字通り吐いて、死と隣り合わせた自分だ。似たような

修練を科せられても耐える意気込みを持っている。葵さんを幸せにすると言う目的の為なら

どんな地獄にでも付き合う気だった。あのアブノーマリティと呼ばれる存在と闘う事に

なったとしても構いはしない。

「こんにちは、私の名前はイエソドです。情報チームのセフィラです」  
「こうして、お話するのは初めてですね」

広々とした一室に案内された彼を出迎えたのは、自分が救おうとしていた少女より濃い

紫の髪をした男性だった。出会いがしらに厳しい洗礼を受ける覚悟もしていた雁夜は

穏やかな交流に少し困惑しつつも自己紹介を終え、その彼を管理人と似た無機質な目で

観察するイエソドは。一通りのプロフィールを交換した後に説明する。

「さて、今から貴方にして頂く事ですが『シモニデスの記憶術』です」  
「かつて存在していたと言われる詩人、ギリシアの詩人シモニデスから発祥した

超記憶力を身に着けるトレーニングを貴方にはして頂きます」

記憶力の向上？ そんな代物が、魔術の力を上げる利益に繋がるのかと反論する。

イエソドは、その質問に管理人を連想させる口調で言い聞かせた。

「貴方の……最近の診察結果や、魔術回路と言う循環器官を拝見させて頂きました」

これ以上、心身に極度の負荷をかける事や異常存在に関与して無理な力の上昇を試みる

のは文字通りに自殺行為です。何より、我々Lobotomy  
Corpは貴方の想像しうる範囲の

魔術、と言う代物は専門外です」

「けど、トレーニングをしてくれるって……少しでも戦える力を身につけないと」

「ならば、E・G・Oにでも手を出して見ますか？ 私は勿論、他のセフィラや管理人の

許可が下りる事はないでしょう。アレ等の代物は多かれ少なかれ人の心に影響を及ぼす。

推定でもALEPHクラスが残り5体を一人で倒せると己惚れているのなら、病室での

再度の療養をお勧めしますよ。貴方は一般人でありゲブラーではない。

それに、管理人が出動して解析中の現在のツールアブノーマリティは聖杯戦争と呼称

されるのですよね？ 戦争には、各々の役割があります。戦略・調略・進駐・外交……

貴方は我々の管理者のマスターである事は理解しています。その立場が重要である事を

自覚なさっているのなら、無為に自傷行為に繋がる鍛錬は止めて頂きたい」

この彼も、齒に衣着せぬ正論ばかりかと頭痛が起きそうになる。だけれども、彼が科す

鍛錬が何の利益に繋がるのかと敗北が予め決められた反論はする。「この戦争にあたって、サーヴァントと呼称されるアブノーマリティ

同士の衝突は不可避です。我々の収容するアブノーマリティの解放も止む無く生じてしま

ました。大型ツールの干渉でアブノーマリティも我々の保有するデータと異なる行動も見られ

ている。正常な作業が出来ずパニックやlevel3の非常事態が起こり得る可能性が高い。

管理人が鎮圧出来ない可能性さえも。そのような時、管理者を招来させた貴方しか代わって作業する事は

出来ません。然しながら貴方は私の目から見てもlevel1の職員か、それ以前の管理者

としての適性しか所有してないと



見受けられる。ですので、我々セフィラが短い時間ながらも精一杯、貴方には付け焼刃でも

管理者としての行動を振舞えるように教育するつもりです」

自分の展望とは、かなり予想の外れた展開だ。本当なら、未だ体からほぼ取り外されたものの

操作可能な蟲の操作や使役、または魔術師としての魔道の修練を行うとばかり思っていたが

これは……これは全く違う。危険性は皆無だが、どうにも自分が望んでいたものと違う。

その思考や感情を、目前の紫の男にぶつけてみるも反応は冷淡だ。

「未だ理解してないのですか？ 最初に收容違反を起こしたF-01

—02が無差別に瀕死の

貴方にも致死量の火傷を与えた事をまさか忘れた訳ではありませんよね。

アレ等アブノーマリテイを貴方の言う魔術と言うものでコントロールしよう等と間違っても

思わない事です。仮に可能だとして、どれ程のメリットがありデメリットを引き起こすか。

管理人は、あくまで生前の経験からアレ等を効率良く衝突し合い人為的に收容可能な状態まで

移行させる事は慣れてますが、ゆめゆめ貴方も出来る等と楽観視しない事だ。

貴方にいま必要な事は、管理者としての如何なる状況でも冷静に判断しうる力を培う事。

その為には、瞬間的に今まで見て来た視覚情報の材料を補填する事ですよ」

またしても、論戦には完全敗北を喫した。軽く歯ぎしりしつつ、彼から配られたトランプやら

何かしら幼児教育にでも使用しそうな絵札を見て、それ等の数字と絵札を総合しての記憶力テスト

と言うものを何度も実施する。こんな修行が、本当にいずれ実を結

ぶのか？

無力な自分が恨めしい、だけど、度外視した実力を身に着けようとするれば自壊する。

忌み嫌っていた魔道を身に着ける事は颯感だ。だからと言って、この一般人でも可能な

修練が、自分の為になるかと言われて、はいそうですと素直に心から賛同出来ない。

適切な処置である事は理解している。けれど、流されるままである事に納得が出来ない。

雁夜の、ジレンマを知ってか知らずが。彼は不気味な紫の光を宿して告げる。

「先の見えない暗闇は、言葉では言い表せないほど寂しいです」

「私の言葉ではありませんが。何が起きるなんて予想できませんよね？」

だからこそ必要なんです、その時こそ『分別できる理性』が」

それからと言う物の、行うトレーニングは雁夜の感覚からして恒常としたものだった。

記憶トレーニング、パッションテスト、マインドマップ、瞑想、数独、絵本の朗読

または小学生か幼稚園児が行う簡単な計算問題を手書きで行う。

どれもこれも、魔術師としてのトレーニングとかけ離れたものだ。危険や大きな刺激が

全くない訓練に業を煮やし、たまに腹を据えかねて雁夜は怒鳴った時もあった。

だが、その度に。このトレーニングに参加するセフィラ達は告げる。る。

「今感じてるその絶望的な無力感。しっかりと感じてください

いずれ貴方も沢山経験して、こう思う筈です。私は十分に出来るんですよ……って。

けど、挫折した時には全て手遅れなんです。だから、今はその役割に忠実に

大丈夫！ きつと出来ますよ！」

赤いヘアバンドの女性。マルクトからは、そう激励を貰った。

「一番大事なのは仕事を早く終わらせる事さ。その方がより確実に余裕のある仕事出来る。」

その仕事の為の準備として、このトレーニングに無駄はない。

お前はいいよな、簡単に無駄口が叩けるからな。

俺達は何時も後始末に追われている。今の管理人になってからは多少後処理が減ったんだ

だから、お前もせめて俺たちの後始末が少しでも減る能力を身に付けてくれよな」

決別して、今や接する事すら無くなった血縁に多少似た容姿の男からは謂れのない罵倒を。

ケセド、と名乗る男性は。半ば無関心そうに、けれど的確な助言はくれた。

だが、事ある毎に鼻が麻痺しそうになる程に目の前でコーヒーを飲む事は遠慮して欲しい。

「怒ってます？ そんな、ダメですよ！ 私は良いセフィラなんですから！」

私はここで、私が出来る範囲で全力で貴方を助けていきたいんです。

私の手伝いが助けになるなら幸いです……」

何処か、よく見知っているような女性からも助力を申し出た。物憂げな茶色い長髪の女性。

けれど、何処で自分は。この女性に良く知っている相手と出会った事があっただろうか？

葵さんで無い事だけは解る。……駄目だ、わからない。

「何でティファレットが、あんた見たいな奴のトレーニングに付き合わなくちゃいけないのか

理解に苦しむわ。いえ、わかっているのよ それもこれも 全部管理人面してる あいつの

所為だつて事わね！ 私たちだつて暇じゃないんだから、あんたが

一端の管理人の補佐

だつて言うのなら、さつさとマスターしちゃいなさいよ！」

桜ちゃんと同じ年ぐらいの見た目の子にも、激励なのか罵倒なのか良くわからない言葉を

投げかけられる。前向きに捉えれば応援だと思いたい。

彼らセフィラ、と言える。このサーヴァントの宝具なのか、それとももつと別の未知なる

空間で働いている彼、彼女達は好意的に見れば協力してくれる仲間なのかも知れないが

何処となく疎外感も雁夜は感じている。

それを一番顕著に感じられたのはホド、と自己紹介してくれた女性と同じぐらいの

草色の長髪の男性だった。彼は見るからに投げやりである事を隠さない調子で、怠惰な

目つきで俺に対してクロスワードパズルか、瞬間記憶のトレーニンゲームなどを

渡すと、後は素知らぬ様子でビール缶を嚙下する。

その非協力的な対応には、流石に我慢できず指摘するもの。ネツアクと言う名前の

彼は、自分を嫌な目つきで見つつ半笑いで謝辞を述べる事なく返答する。

「俺はこんな地位に就く事なんて望んちゃ居なかつたのさ」

「ただ、一縷りの希望の為に全て投げ捨てたつもりだったが……結局の所、何もかも

全て無意味だつたつて理解しちまつたんだ。あんたは、何となくだけどツルノよりも

俺に近い感じもするな。いや……何もかも投げ捨てる前だったのか、それ以降か」

美しい青々とした芝生か、または毒々しいのか判別出来ぬ緑の髪の一房を彼は

僅かに弄つた後、鼻で笑い再度握っている缶に口付ける。

「まあ、どうだって良いんだがな。所詮、俺には関係ない事だから」  
それを最後に、彼は雁夜との会話を途絶えた。雁夜も、彼と会話する意思を自分の兄と

同様に続ける意思をなくした。

彼らと幾らかの親交を深める事に、一体どう言う意味があるのだろうか。

「人恋しさを覚える頃だと思つての、私からの配慮であつたが」

要らぬ世話だったかな。と、久しぶりに見る透き通つた瞳と無表情な顔に幾らかの安堵と

フラストレーションを混ぜ合わさつた苦々しい半眼で彼は口開く。

「……君の好意を無碍にする訳じゃないけど俺は、自らの成果を得たいんだよ。」

こんな閉鎖した空間で、ずっと頭のトレーニングをしてるだけなんて気が可笑しくなる。

いま、外ではどう言つた状況なんだ？」

彼女は、何も 一言だけ述べる。その簡素な反応に深く眉間に皺を作る自分へと

手を軽く振つて言葉が続けられる。

「本当に、何も起きてないのだから それしか言えない。あの百貌のハサンと呼称される

アブノーマリティ達の収集を終えてから、現実空間では特に目立つた動きはない。

この大型ツールの起動以前から発生してる、性悪な殺人事件に関しては別だが」

「殺人事件って……」

「深山町の、魔術師やアブノーマリティとも全く無関係な一般家庭で発生したものだ。」

登校、出勤時間になつても姿を見せない家族達を不審に思つて連絡したものの音信不通

である事から警察が出動されて異変に気付いた。

家宅のリビングには夥しい血痕及び、夜間の犯行によって犯人が

行っただと思われる

人の血液による魔法陣が描かれていた」

住居している父母、その子供である長女と長男の遺体は未だ発見されてない為

今のところは失踪と言う事になっているが。と、管理者は区切りを付ける。

手渡された新聞でマークされた部分だけ読み上げ、様々な感情を込め雁夜は呟く。

「こんなの、どう考えてもサーヴァントを召喚する為にやった事じゃないか……」

「だろうな。何者かが大型ツールの干渉に手を出した……まず、この四人に関して生存は

絶望的と考えて良い。霊体化して観察した限り出血量は成人男性二人分に値する。

父親、そして妻と長女は間違いなく魔法陣を描く素材として使用されたのだろう。

だが、ここからが肝心だ。リビングから玄関に続く廊下までに足跡らしき反応も見えた」

「……どう言う事だ？」

雲行きが怪しくなってきた。この空間は、天井こそ何かしらの細工で電灯がなくても

辺り全体が発光して明るいのだが。その明るさを曇らすような空気が形成されていく。

「この会社は高性能な科学で構成されている。その技術の一端で、私が目にした

犯行現場を、今 目の前に創造してみせよう」

僅かに、キーボードを滑らすような音が聞こえた気がした。それと同時に僅かな振動を

体で感じ取ると共に広い空間の中に立体的だが透過された部屋の一面が出来上がった。

「ホログラムっ」

雁夜が息を呑んで眩く通り、それはホログラムだった。だが息を呑みこんだのは高度な

立体映像への感心ばかりでなく、死体こそなくもショッキングな血まみれの部屋を

目にした事もあつてだ。彼の挙動を他所に、革靴を鳴らし彼女は説明を始める。

「ルミノール反応と言うものについて、一応簡単に説明させて貰えれば。血液に対し

紫青に発光するアルカリ性の物質だ。今から、それを散布させた後の図を展開させる」

管理者が指を鳴らす音と共に、部屋の照明が一段弱まる。薄暗い中に、青紫色の発光が

生まれ始め、そして雁夜にもホログラムの中にある違和感が気づけた。

「これは 足跡 か？ ……子供の、足跡だ」

僅かにだが、青紫色で少々不明瞭ではあるが子供が裸足で踏んだと見受けられる痕が

リビングから廊下まで続いていた。だが、途中でその足跡は切れている。

廊下を抜けて直ぐに、まるで鳥がそこから飛び立ったように不自然に足跡は途切れてる。

「これは、私の推測だが」

言葉は、冷静そのもので何時も通り感情はなかった。だが、まるで地獄の底よりも

冷え冷えとした、背筋を凍らすような気配が見え隠れするように雁夜だけは思えた。

「この犯行現場を作り出した存在は召喚されると同時に、恐らく未だ生き延びていた

児童を面白半分に逃がす真似をしたのだろう。それが、どう言う思惑かは分からない。

だが、どうあつても善意からではない。この拘束されていたであろう

う児童は

家族の遺体から流れてる血を踏みつけ、それでも尚 生きる希望を捨てず出口へと。

その軌跡を完膚なきまで消失させた存在は、平然とこの街中に存在してる。

……この子はきつと、怖かった筈だ、恐怖の中に居た筈だ。家族を殺した殺人犯と

そんなものが召喚したアブノーマリテイに挟まれて」

「だけど、この子は生きようと選択したんだよ雁夜。先が絶望でも、この子は……」

ホログラムの青白い足跡を、屈んだ手は悲し気に撫でる。屈んだ背中  
中は小さく

今にも触れただけで壊れそうな儂さを秘めている。

「――必ず鎮圧させる。このアブノーマリテイに関しては、雁夜

君が何と拒否しようと私は存在を許容はしない」

「俺も、君の意見を否定する気は一切ないよ。……構わない、好きにしてくれ」

雁夜は、このような異常な魔術師達の抗争が無い世界であれば平凡な幸福を尊ぶ市井の

一人であった。彼とて、このような邪悪と表現する以外にない所業に対して慈悲をかける

程に聖人ではない。パートナーの彼女の望むままに支援するつもりだ。

薄暗かった部屋の光明が元通りとなり、ホログラムが途絶えた時。彼女の雰囲気はまた

落ち着いたものへと移り変わる。それに安堵しつつ彼は言葉を続ける。

「何か出来る事があったら、何時でも遠慮なく言ってよ」

「なら、トレーニングを継続して欲しい。それと、気が向いたらで良いから彼らの

写真を撮影して欲しいんだ。思い出は、胸と頭の中で残すのも良い



が形で残る事も望ましい」

返答に対し、強い頷きを返す。元より、仕事としても趣味としても撮影には慣れている。

この建物で、出来る限り自分の趣味が。彼女や、その彼女を支える従業員達の助けに

なるのなら、少しは自分が役立てたと考える。

携行している、愛用のカメラの絞りを調節し始めようとする。だが、その行為を中断

するように彼女の、それと…… と言う続けられた声に顔を上げる。

「——これから先 猫に遭遇した時は直ぐに私に連絡してくれ」

その目は、つい先程のアブノーマリテイの鎮圧宣言と同等か それ以上の真剣味を感じた。

日が高い中、新都のヴェルデと呼称されるショッピングモールに。スーツに暗色のパーカーを

身に着けた女性は人通り多い中で機械的に歩行する。

すれ違う通行人達からも特に彼女に関心惹く事はない。神話のような絶世の美貌でもないし

いまの彼女の表情は抜け落ちており、喜怒哀楽ない無は人を引き寄せる事はない。

(この辺り一帯は多くの人間が行き交う故に、大型ツールから派生したアブノーマリテイと

遭遇する可能性が高いと考えていたが、そう都合良くはいかないか)

深山町の一家を殺害したと思われるアブノーマリテイの痕跡は現場となった家宅を除いて

周辺には切り取られたように手掛かりとなるものは存在しなかつ

た。

それでも、今の段階で判明出来る事も幾つかある。

(黄金の鎧及び 多量の武具を発現可能なアブノーマリテイ。百貌のハサンと呼称される物

そして、コトネが話題の中で告げてた鶏小屋の窃盗犯。

遠坂時臣。ハサンのマスター、言峰綺礼。鶏の窃盗犯である、マスターと思われる存在。

これ等に関しては容疑者から除外は出来るだろう)

住宅街を恐怖に陥れた存在は、サーヴァント召喚の為に犯行を及んだと仮定するのならば。

召喚以前に存在が視認出来たアブノーマリテイ二体と、そのマスターは外れる。

学び舎に侵入した未知の人物に関しても、愛玩動物を無断に殺生する事は倫理的に幾らか

問題あるものの、未だ人としての常識が通用しえる相手だと管理者は判断する。

人の手や人智を超えた生物に病やミームに現象によつて数々の死を見せつけられた自身の

経験から、あの現場での出来事は人としての感性から大きく外れた存在の凶行だ。

(早期に鎮圧しなくては、甚大な被害の発生は限りなく高い。

……あのアブノーマリテイ達を町の監視網として外に出す事は、出来ない。未だ、私達のした

行為に対し納得はしてないし、理解もしていないだろう)

『管理人』

耳元に告げられる力が込められた声に、ゲブラーの名を唱えて何か起きたか尋ねる。

『大した事じゃないが……あのガキが、もう幾つかの部屋は飽きたようだからな。』

映像投影した所で、閉所空間な事には変わらないからな』  
その言葉を受け、少々瞼を閉じて理論的に思考する。

間桐 桜の体調は、蟲の残滓が心臓内部の器官に残る影響の懸念さえ除けば身体的には健康。

この冬木市には、未だあのT-04-50亜種が潜伏している可能性が高い。そのギフトが未だ

機能している事を考えれば、余り長く外界で過ごさせる事は危険ではある。

(……いや、Lobotomy coop内に居る事も。同じ事か)

自身が管理している施設内のセーフティルームに長居させる事だつて、完全に安全とは

言えない。何かの弾みでWAW ALEPHが放出される事になれば施設は容易に破壊される。

外から招いた雁夜、鶴野、そして件の少女がその際に無事にこちらの空間に出せる

保障はない。令呪と言う存在の有効性も、自分が管理者である以上試す訳にいかない。

間桐 桜の外出の許可を出す。ゲブラーは謝罪も感謝の反応もなく、代わりに

何度も交わしたやりとりを管理人に放つ。

『言っておくが、外でアレを見かけたら直ぐに私に告げろ。お前の権限が通用するような

甘い奴じゃない。いま一番危険なのは奴だからな』

何度目かの、肯定の返事を行いつつ。懸念事項の上位に昇り詰める彼女の行方を考える。

セフィラの一人であり、抽出チームを取り締まる存在としてE・G・Oに深く関与してる立場。

Lobotomy coopの下層にて墓守としての役割を努める彼女は、生前 壊れつつある世界に

最低限の秩序を取り計る機関の総軍、謂わば国の剣であった。

戦闘と言う意味合いでサーヴァントと優劣を計るにして、どれ程脅威があるか不明だ。

遺された数少ない記録で推定するには、彼女は底知れない部分が多

い。

潜むのであれば、どのような場所なのだろう？ 紅茶は嗜んでいたからと言う理由で

この町の小洒落た喫茶店などに居座っている筈もあるまい。

巢、外郭や遺跡、黒い森に裏路地など幻想種が蔓延り超人が彷徨う世界に対抗出来ていた

人物だ。どの環境にも直ぐに適應する事は可能だろう。

会社の菌車であった一つが抜ければ、その全体も正常に回る事はなくなる。

これから先、大型ツールの干渉を受けながら運営はどうなっていくのか。

(もう、コトネとこれから先。あの団欒を楽しむ事は出来なくなる)

あの時の、ハサンとの交戦。ユミの変異に関する衝撃的な光景は一夜と自身が施した

暗示と記憶処理により、影ながら見た限り彼女に変調きたした様子はない。

それでも、彼女を危険な状況に巻き込んだ事は拭い去れる事はない。だからこそ

気が重いながらも、ベンチに座り彼女が笑顔で小走りに近づくのを待ち受けつつ

何時もと同じ、他愛ない会話を楽しんだ後に告げる。

「え……いま、何て？」

「そろそろ、此処での仕事の区切りが付いたのでね。多分、明日には元の場所に

帰る事になると思う。だから」

「そんなつ、もう暫くは居るって言ったのに」

目元に浮かぶ悲しみの彩りは、抑えている筈の感情の泉に確かな揺らぎを齎す。

「御免ね。でも、上からの指示には逆らえないんだよ私も。お仕事だから……」

数日の、数時間会話するだけの関係であったのに関わらず。随分と

彼女には日常の

象徴として、平穩を 暖かなものを沢山貰った。

公園に来る前に立ち寄ったファンシーショップなどで買った、子供が好きそうな

ぬいぐるみに、雁夜からのアドバイスで買った露天のアクセサリ等は彼女の悲哀を

少しでも薄らせるのに効果はない。

暫く、どちらとも何も言えずに居た。このまま、立ち去る事も考えた矢先

コトネの顔には以外にも明るさが見え隠れする色合いが出て来た。

「じゃ、じゃあ！ 私っ、スラーが外国に戻っても。手紙を沢山書くよ！

それに、色んな所に。お仕事に行ってるのなら、また日本に 此処へ戻ってくる事

だってありえるでしょっ？」

その言葉に、沈黙を作り出さない事は困難だった。

文通など、出来る筈がない。このまま姿を消した後、彼女の前に再び姿を現す事など。

この大型ツールアブノーマリテイの現象を解析し、制御及び破壊が完了すれば自身と

ソレに連なるアブノーマリテイ達の存続は止まる。

コトネの望む通り、予め彼女の期待に沿った手紙を作成して雁夜か鶴野へ保存して

架空の返信をさせる事だって、やろうと思えば出来る。

この大型ツールの願望機とやらの機能を使用すれば、彼女が大人になり自身が人と

異なる存在である事を理解し、別れに納得する時まで存在する事も可能なのだろう。

だが、ソレを許す事は出来ない。私は、管理者なのだ L o b o t o m y c o o p最後の。

出来ない、と言葉を出そうとする。だが、その前に自分自身の理性

の意思に反し

何処からか来る熱と、言い知れぬ力が言葉を封じる。

その間にも、コトネは。気の所為でなければ泣きそうな笑顔で告げた。

「もし、直ぐにまた戻って来る事が出来るなら……。日本では年越しがあつてね。

大晦日に冬木では柳洞寺に行つて、お参りにも行くんだよ。

ねえっ、スラー。もし、お仕事が空いたら一緒に初詣に行こうっ

「……………そう だなコトネ」

「——時が許すのなら、一緒に、その時には行こう」

差し出された小指に、否定の素振りと言を成す事は叶わず、小指を絡ませた。

世界は残酷だ。こんなにも、清らかで無垢な子の願いすら、叶う余地を与えない。

いや、叶う芽があると知りながら、目を潰してるのは自分なのか。

だが、胸の中に

あるエゴは、目前で微笑む少女に今までの自分と邂逅した点なる奇縁から

今までの線を全て記憶処理と言う無情の空白で埋める事を許しはしなかった。

それ所か、心の機微は荒唐無稽だと知りつつも。大型ツールが比較的安全な代物なら

彼女との初詣、もしくは中学に上がるまでは存続する事も良いかも知れないと言う

馬鹿げた願望を抱いている。自身の使命と義務に反する浅はかで賤しい想いを。

（——どうか この子の未来に）

（沢山の幸福が あらん事を……）

## 交響

肉体的な痛みは無い。だが、度重なる脳の酷使によって心地よさが多少ある多大な

疲労感と共に、リラクゼーションに富んだ寝台に横になる。それを凡そ手足の指以上の

回数越したものの。それでも未だ外の、サーヴァント達やマスターが織りなす冬木では

一日経ったかどうかの時間と言うのだから可笑しな話し。

自分が浦島太郎染みた錯覚を覚える。もつとも、亀を助けるような出来事もないし

玉手箱を開くような、開けてはいけないものを貰った覚えもない。

繰り返す眠りの中で、度々 海の色とも晴れた空の色とも異なる造られた青の髪の毛

そして褪せた金の光を瞳に帯びる女性が自分を見つめる。

「貴方は変わりませぬね」

……何の事だ。

「私は忠告した筈です。その試みは予期せぬ結果を引き起こすと」

……何の話だ。

「試行演算での成功確率が100でない限り、実行は中止するべきでした。」

例え99,9パーセンテージが成功であったとしても残る0,1で何か起きるか分からない。

何百もの結果が正しい事が証明されても、一つのバグが致命的な欠陥となってしまう。

私がそうであったように、絶対など無いのですよ？ ……どうして」

何故 君はそんな悲しそうな……。

「こんな形になっても、まだ貴方は私の事を見ないのですね」  
意識が遠ざかっていく、もつと深い場所に。

幾つもの、人の顔 顔 顔 顔 顔。

泣いたり、怒ったり、達観していたり、冗談を吹かす変顔だったり、勇ましかったり

涙を流しながら笑っていたり、そんな 多くの老若男女の顔。

『約束だ』 『約束よ』 『誓うよ』 『誓う』 『信じてるよ』 『絶対だ』

切り替わっていく映像の中、背丈や人種 年齢 性別も異なる人々に共通するのは

信頼しあっている事だろう。状況も、今にも死にかけていたり 医務室だったり

研究室らしき場所での仕事中だったりと異なるものの、彼らは何かを互いに

願っているようだった。眩しさを伴う 美しい情景。

切り取られた輝き。それが見続ける中で黒い火が突如浮かび上がり呑み込んでいく。

燃えていく映像、焦げ付き炎上してゆき輝く燐が闇の中に舞っていく。

彼女の声が木霊する。

「約束するよ (規制済み)」

「(規制済み) は お前の為に……」

(規制済み) (規制済み) (規制済み) (規制済み)

(規制済み) (規制済み) (規制済み) (規制済み) (規制済み) (規制済み)

(規制済み)

思いがけない事態とは、常に日常の中で起こり得る。

探索に探索を己の足のみで行い。脱走者の痕跡や、平和を愛する一家を



恐怖と絶望で塗りつぶした凶徒を自分の足だけで手掛かりを探したが

特に成果が得られず丸一日が経過した。市内で起きた異変で他に挙げれば

図書館の入口に被害が生まれ一時休業に至った事だ。

アブノーマリティの収容数は増加していく。雁夜のトレーニングも地道に

根本の疾患は改善見られぬものの判断力や知覚の鋭さが見え隠れし始めた。

仮称として、雇用アブノーマリティとなる百貌のハサンの成長性も特に

問題は見られない。反抗心はあるが、表立って他の職員達に手を出す気は無い

様子だが、外での同伴は未だ様子を見るべきだろう。

往來を何時も通り歩行しつつ、周囲の特異なものを見る視線が傍らに集中

しているのが感じ取れる。

「やはり、君の外見は目立つな」

「はんっ、ファンデーションか何かで傷を隠せてるか？」

それか、髪の毛でも黒く染めろって言うのかよ」

「そう助言しようとも思ったが。雰囲気からして君は否応に常人と違おうし

化粧やお洒落と言うものは苦手だろう？」

「例えば、管理者命令でも御免だな」

横を歩くのはセフィラのゲブラー。グレーのトレンチコートを身に着け、下に

動きやすい黒い軍服のような着衣をして前進する彼女の眼光は鋭い。

腰まである血のような赤い髪も目立つが、顔に走る細かい傷や肉食獣めいた気配は

自然と人に距離を置かせる。彼女と隣接して歩こうとする度胸あ

るものは

彼女の上司である管理者Xを除けば、手を繋ぎ死んだ表情で歩く桜のみだ。

「それで、町並みを見て どうだろうか」

「ある程度探ってはいるが……蟲らしい気配はない。ただ、センタービルって建物が

並んでる方角。あっちに一体 アブノーマリテイが居るな」

瞳孔のない、灰色と褐色のオッドアイに無機質な目を向ける。大きな長い傷がある

右目に掛かった髪の毛を払いつつ声が続く。

「隠す気のない、馬鹿正直な闘気って言えば良いのか？ 全身からは此処だ

何時でも挑戦を受けるぞって挑戦的に威圧を発してやがる。

私が、少しでも殺気を此処からぶつけたとしても。そいつは気づいて向かってくるな」

「大型ツール その中の未確認四体の内の一人……か」

雁夜からの情報だけでは不足部分が大きかった、この聖杯戦争と言うものの全貌は

ハサン達をハントした事により大幅にザイドの口から有益な内容が放出された。

教会への届け出、御三家の成り立ち、魔術師と言う在り方など。聖杯からの情報を

遮断している管理者Xにとって、初耳な事が幾つも得られた。

(重要な情報の一つ。ハサンのマスター、教会と遠坂家の同盟関係……本来の聖杯戦争では

脱落したマスターの保護を担う場所は、今回に限っては無いと言う事)

まだ多勢のハサンを保有する言峰 綺礼と言われる参戦者。そして、横で寡黙に周囲の

風景を光なき瞳で映す少女の実父である遠坂時臣。

(最初に、ハサンを発見時。アブノーマリテイをけしかけた事が大き

な失策だった。

無謀な試みであり、その時点では情報不足で抗戦以外選択肢なかったものの。

その事によって、私がバーサーカーと言う存在で彼らの敵対者である事が決めつけられた。

間桐桜を、遠坂邸に連れて行って返還を試みても。何かしらの裏を勘くくられて

「正常な交渉や談合も出来ないだろう……駄目元で、手紙でも送ってみるか」

「どうする？ 呼び寄せてみるか」

勝気な台詞に対して、返す声色に変化はない。

「勝てる確率は幾らだ」

「さあな。闘れば解る事さ……わかってるよ、言ってみただけだ」

無茶はしないさ。と、皮肉気な笑みを向けるゲブラーを静かに見つめ、その目を

斜め下に向けて静かに語り掛ける。

「久しぶりの町は、どうだい？」

「……あの人達のいる場所へ 行くの？」

桜の言う、『あの人達』と言うワードに管理者は、ほんの一瞬だけ誰を指すのか

理解が滞った。だが、雁夜の記憶の一端が解答に行きつかせる。

「会いに行きたいかい？」

その言葉に、桜は管理者の透明な瞳へと顔を上げた。

多分、この人はYESと告げれば連れて行ってくれる。自分は 桜は『あの人達』の

所へ戻りたいのだろうか？

………わからない。

心を自ら投げ捨てた少女には答えが見つからなかった。その胸の内を正直に一言帰す。

桜にとって、管理者は怖い人ではない。だからと言って優しい人かと聞かれれば首傾げる。

御爺様の居ない場所へ連れて行ってくれた人。桜の中にいる蟲を取り払ってくれた

美味しいんだろ言う料理を毎日出してくれるし、綺麗な服も取り揃えている。

遊び相手として、ティファレットと言う名前の少女を引き合わせた  
り、色んな大人の

女の人や男の人を紹介して世話を焼いてくれる。不自由する事はない。

だが、どんな種類の優しさや暖かい言葉に振る舞いも桜の心を元通りにするに至らない。

黒昼のように、光を寄せ付けぬ暗闇が桜の取り巻く世界だ。

間桐臓硯や鶴野は『虐める人』 間桐雁夜は『虐められる人』

セフィラ達 職員は『虐める人や虐められる人の輪の外で歩いている人』

なら、この私を見下ろす人は何だろうか？

虐める人や、虐められる人では無い。だからと言って、その輪の外側かと言われると

答えに窮する。何を、どう言葉にしても間違ってるようで 正解な  
よう。

管理者は、桜の分らないと言う言葉に。同じように一言、そうかと  
答える。

「じゃあ、今日は。一日中、君の遊びたい場所で遊んで、行きたい場所に行こう」

「……遊ぶのは、あそこでも出来るから」

L o b b o t o m y c o o pには、桜の為に用意されたかのよう  
に。児童書を始めたし書物は

多く並べられていたし、彼女にとって未知のゲーム機やら映像機器  
も沢山置いていた。

マルクトを初めとした、お節介な者達は色々と実演まじえて桜の相  
手となったが。

どれ一つとっても、桜は疲労を感じるものの浮き立つような感覚が

返り咲く事はなかった。

「でも、出来るなら……海に行きたいかな」

だが、少なからず収穫はあった。様々な立体映像機器の中で、一つだけ心に残ったのは

大海原の情景。鳥籠の鳥として、一年と言う月日で開放的な外を知らないで過ごしていた

彼女にとって、海と言うものは懐かしくもあり生物の原点として惹き付けるものがあった。

桜が自分の願いを口にした。今の光景を知れば健常の体に戻る前後であれ雁夜なら

狂喜乱舞しそうな変わりようだ。管理者は、その言葉に少しだけ目を細めるものの、直ぐ

表情を普段通り打ち消して言葉を口にする。

「なら、海浜公園か……ゲブラー」

「わかってる。ガキ 行くぞ」

ぶつきらぼうな言葉と共に、赤い髪が翻り体の向きを変える。彼女と手を絡み合い繋がる

少女は引き寄せられるままに体の向きを変えるが、ハサンを吹き飛ばす臂力を持つのに

関わらず地面に引き摺られるような事はない。握る手は力強いが、桜の手に痛みを

与えないように極力注意が払われている。

冷たい外気から守るように前進して揺れる赤い髪を暫し見惚れながら、少女は歩行音が

一つ減ってる事に気付き首を回す。管理者が静かに見送るのを見て眩く。

「……あの人は一緒に来ないの？」

「お前を守るのに、自分があると少々邪魔になるんだとき。別に、私は管理者が付属

していいようが、いまいが気にしないんだがな。命令だから仕方がない」

少女の視線を受けて、管理者は軽く手を掲げる。同じように手を掲げて、口を開き

バイバイと告げようかと思った。けど、それを口にすると二度と会えない気もした。

それを感じとつてか、人混みに彼女が見えなくなる間際に前を進む戦士は淡々と告げた。

「心配する事ねえよ。柔い体してるが、存外 あいつは思う以上にしぶとい」

間桐 桜を守護するにあたり、危険視されるのは亜種アブノーマリテイこと間桐臓硯

第二は、彼女を連行する事により激情にかられて強引に奪取する方法を選ぶ可能性ある

実父の遠坂時臣。第三は、雁夜と桜 自分が守護しなくてはいけないダーニングポイント

に気付いて標的にしかねないセフィラの彼女だ。

ハサンや雁夜の情報を纏めあげ、聖杯戦争のみならず魔術師と言う存在は外界に自分の

存在を頑なに守秘する傾向である事から人の多い通りに、あえて自分は溶け込んでいる。

繁華街にいる限り、魔術師の類やサーヴァントと言われるアブノーマリテイ達の

襲撃が低い、セフィラの彼女に限ってはそうではない。平然と人混みで大量殺戮

しかねない危うさも含まれている。

(ゲブラーの実力は確かだ。もし、急襲が桜とゲブラー側にあっても直ぐに連絡さえ入れれば

職員達の援護及び迎撃に移れる。複数に敵対する人物がいる現状では、共に桜を居させる事は

身の危険を高めるリスクが大きい。それなら、自身が信頼する相手と出来る限り自由行動を

とらせりスクを分散させるほうが良い。戦闘に長けているのは、彼女以外ならない)

二人の後ろ姿が無くなってから、今後の方針を反復してトレースを行う。

深山町一家の殺人犯の索敵。

マスター及びアブノーマリテイ(サーヴァント)の確認。

ビル方面のアブノーマリテイの偵察も行いたい、言峰 綺礼と言うマスターと間桐 桜の

実父に訪問する準備も執り行いたい。

(いっその事、鶴野を外させ他のマスターと言われる魔術師達と面識を持たせたほうが

良いかも知れない。知識だけで、魔術師の常識が今一つ欠ける自身より。当主としての

立場を据えている彼のほうが建前上、交渉に長け……)

……ピタ。

状況を統合させ、最良の行動を整えようとした時。その異常は人混みの中で発見された。

一瞬、自身の目にバグが発生したかと思えたが、ソレは自然と周囲の人間に何の

違和感も持たせず歩いていた。

黒い髪、毛先は金色に染まる短髪。六角形の大きな記号が描かれた外套

左の耳元に、骸骨か鍵のようなイヤリング。

——ビナー

凡そ、十数メートルの距離を人の波に流されて彼女が進んでいる。

誰も傷つけてないのに関わらず、冬の時節の外気が一層と、自分の空間が彼女を視認した

瞬間に更に冷え込むように感じられた。

(ゲブラーへの 報告……いや、通信をジャミングされない保障がない。)

一般人が多すぎる。下手な動きは被害を)

一瞬の迷いの後、彼女は追跡する事を選んだ。単身で勝てるとは思っていないが

彼女と対峙して敗北しない程度の戦力は数日間でも何とか集まるに至った。

今この瞬間に目の前に現れた事が、何かしらの罠であれ。慢心している訳ではないが

直接戦闘を仕掛けてこようと回避する手段は備えていた。

段々と、彼女は人のいる通りから裏通り 路地裏 そして人氣が完全に消え失せる。

空から降る雪よりも音が生じず歩く後ろ姿に少しでも起きるかも知れない違和感を

注意深く観察して、その歩行が止まったのは奇しくも遂さつき別れた少女が見たいと

言っただ海が隣接する港の倉庫街だった。

立ち止まった黒い外套は、海から漂う潮風を受け軽くはためくものの人影は

そのまま身じろぎ一つする事はない。

鋭くガラスのような瞳で、片手を指鉄砲の形に掲げ死角から観察続けていた管理者は

意を決して彼の最凶のセフィラの前に全身を露わにした。

「ビナー。どのような真意があつて姿を生じさせたのか不明だが……目の前に現れたのだ。

大人しく、下層の管理下に戻って頂きたい」

管理者Xは、出来る限り柔らかい言い方で後ろ姿に語り掛ける。

ソレが、大人しく自身の運営する建物の中に戻るとは露とも思っていないが。管理者として

例え、相手が現状一番の敵対者であっても一定の礼儀を怠るわけにはいかない。

相手は不気味な程に反応がない。短いようで永遠に等しい間の後にも、もう一度声を掛ける。

「この大型ツールアブノーマリテイに、君も願いがあるかかも知れな



い。だが、coopで

多くの理不尽な状況に相対した貴方なら解る筈だ。アブノーマリ  
ティに願う事の無意味さを」

「――航海の時」

風に乗って漂う調べ。決して大きくもなく強い感情が乗せられた  
訳でもないのに

人を沈黙させる力が込められた唱えが発せられる。

「ポツペアの戴冠曰く、私は『かつては女王であったのに、今や食い扶  
持と衣を乞う卑しき身』

だが、こうも告げよう。

其方は『寺院を持たぬ宇宙の創造主、帰依する者も、祭司もない女  
神なのだ。』とな……」

振り返る目には、光なき……いや。

光すら吸い込みそうな黒を両眼に宿し彼女は何かを抱えている。

細い手に抱かれたソレを、管理者は鋭い目線を注ぎこむ。

泥で形成された胎児 地獄と言うものを赤子の形に模った呪印  
煮詰まった陰の集約物。

xは、ガラス玉のような目を俄かに険しくさせ声の調子も同等に鋭  
くさせる。

「何を抱いている お前は 釣瓶から何を引き揚げた」

「何を？ アーネンエルベで見かけたティーポットだよ」

確かに、ソレは人から見て正しく年代物の陶器だ。だが、管理者に  
は別の存在に見えた。

「根源か」

「オリユンポスへの舵取りを成す時が来たのだよ。

そして、こう告げておこう 殉教者よ。

『徳を追う者は、富も名誉も得る望みはない、そう、この運命に恵まれ  
ないならば。』

管理者は、そのティーポットに狙いを定めて指を掲げる。対し、ビ  
ナーと呼ばれる女性は

何一つ表情変えず、春の陽だまりのような気配を発し静の状態のま

ま。

シールド・回復・遅延・処刑。様々効能のガンドと言える弾丸で。母親が大事に抱きかかえるような物体を破壊する事が出来るか模索する。然し、頭の中で

繰り広げる試行演算は何百、何千の方法を検討するも。いま収容するアブノーマリテイ

職員やハサンの投入を成しても、その試みが成功する可能性を見いだせない。

「なんの思惑で、ハサンと言われる者達を贈った。いや、それはもう良い」

「この都市に　この世界に手を出さないで貰いたい」

「アリオダンテに載せて、告げよう。」

『地上の万物が自らの言葉で愛を語る。流れる瀬音、草原、そしてブナの林まで、

愛に心を奪われたこの私に。』

この『ガリオン』が、宣言しようとも。

『喜ばしき天国に運命の歌声は響く、このうえなき幸せの日が来た。』……な」

その言葉に、一瞬だけ向けた人差し指を管理者は照準をブレた。

そして、心なし乾いた声で呟く。

「何を取り戻した……殻の中に育くみ実らしたものは。まさか」

『最後に　アティスで我が幕を締めくくろう　そして　助言を。』

『偽ってはならない。私はお前の秘密を知っている。だが恐れるな、口外はしたりはせぬ。』

寂しく、暗い森で、ある日、凡人のアティスは一人ぼっちであることに気づいたのだ。

繁った葉かげでまどろむ私は、愛についての呟きを聴いたのだから。』

『——急ぎ来たれ、シベルが降臨する。』

瞬間、視界を遮ったのは黒い塵雲だった。手を翳し、シールドを反

射的に張ろうとするが

その前に、その塵は只の毒性も何もない塵である事を知る。

ほんの少しの視界の閉ざしは、目前に居た彷徨い人の行方を途絶えさせるのに十分過ぎる

程だった。既に彼女は消えて、空は太陽を隠し闇に……闇に？

「しまった……」

腕に嵌めた時計を見る。時刻が……既に悠に半日を過ぎてている。

(ビナーと私の空間だけ……時間を明らかに遅められたっ)

だが、何を狙って自分達を世界の時から取り残させた？

狙いは？ その真意と目的は一体何処にあると言うのだ。

ザッ……。

クルツと物音のほうに振り向く。そして、僅かに瞠目して 夕焼けのように短い間ながらに

姿を消したアレが何を引き起こしたかったか、その一端を理解した。

雪のような、妖精のような顔つきをした女性。

スーツを纏う金髪碧眼の少女……。

——暴走アラ——

ト 発生

時は数刻ほど前に戻り、場面は冬木市の街中へと遡る。

管理者やゲブラーに桜が進む場所と異なる通りを歩む白と金の異なる美貌を兼ね備えた

異国の麗人に、通り過ぎる人々は自然と足を止めて暫し見惚れてしまふ。

特に白銀の髪を靡かせる美女に関しては浮世離れが特に見られ、その彼女の周りを自然と

人々が気づかぬ程度に何時でも不意の悪意の手から防ぐ事が出来る足取りを成す金色の

童顔の少女は、見るもの全てに新鮮さと関心と歓心を両目の光に宿している姫君を

微笑ましく思いつつ、戦争の渦中となる場所を油断なく意識を配っている。

警戒を全方向に向ける彼女を、癩癩おこした子供を困ったように笑う母のような顔で

ステップを踏むように回りつつ、透き通る声が小さく響く。

「セイバー、そんなに怖い顔で歩かないで。折角の可愛い顔が台無しだわ」

「アイリスフィール……私は騎士です。可愛い顔と言われても嬉しくありません」

「もう、またそんな風に固い調子でっ。貴方も、もう少し初めての外を楽しましよ」

そんな調子のやりとりを幾つ二人の間で交わしただろうか？

決して雪が解けぬアインツベルンの城で、衛宮 切嗣とセイバーの間で召喚と共に

起きてしまった回避出来ぬ関係の罅の後に、セイバーとアイリスフィールが仮初の表舞台に

おける偽りのマスターにサーヴァントの関係を繕ってから丸一日は経過していた。

今まで雪降る森と、降り積もった雪の城。美術品の絵画などの情景以外な一つ目に

しなかつた彼女にとって。冬木の、それこと生まれ育った人々にとっては平凡な町並みも

初めて子供が遊園地に来たのと同じはしやぎようだった。いや、それこそ特殊な出生を

宿す彼女にとっては、子供当然であったのだけれど。

短い観光の中で、存分に刺激を貰い機嫌良く鼻歌を鳴らしそうな顔も。創造主の手で

芸術品と言って良い造形の彼女は緩んだ顔でさえ絵になる。

それに僅かながら口元を綻ばせ見守っていたセイバーであったが。

不意に感じた

サーヴァントとしての直感がなす警報、その方角から感じる厭な予感に顔を引き締める。

人外の存在たる彼女の急激な空気の変化を感じ取り、遠くを眺めてたアイリスフィールも

真顔になって振り向く。既に日は落ちて、闇が街を包み込み始めている。

聖杯戦争の時間だ。

「どうしたの？ セイバー」

「サーヴァントです。アイリスフィール」

「っ、っそう、現れたのね」

澄んだ声に反して険しくなる目と口元。覚悟して訪れたとは言え、これから死と隣り合わせ

の戦いが訪れるとなれば自然と気は張り詰める。

ええ、と返事をしながら。セイバーは強い木枯らしと共に運ばれる闘気、それとは異なる

何かを感じ取っていた。前者はとても強い戦士の宣戦布告。

(もう一つ……これは、何だ？ 今まで幾多もの人から外れた存在と対峙したが……)

後者に関して紐解けなかった。ただ、その懸念を告げてもどうにもならない事は知ってる為

セイバーは、それ以上語る事ない。騎士として、更にほんの砂粒ほどの悪意にも敏感に気を

引き締め直し港のほう冬の姫君を引き連れて進む。

「結界が、あるわ」

幾らか進んだ時に、魔術の才高き子女の声に倣って肯定の頷きを無言で示す。

隠蔽・人払いの属性を含めた高度な結界、他にも幾つか副次を備えている。然し魔術師に

作用する程に強烈なものでもない。対魔術に特化した自身ならば先頭に立って破れる。

人気のない倉庫街に足を踏み入れた途端、強い突風が吹きすさんだ。思わずアイリが小さくも

声を上げて帽子を押さえ、セイバーが眼前に手を翳すほどの黒い風。

それは一瞬にして止んだが二人の不安を高めども低くなる事は無い。結界を破った故に齎された

迎撃の魔術とも違うらしいが、こちらに対して決して良い方向に作用するものではないだろう。

多くの倉庫が立ち並ぶ通りの真ん中に、一つだけ人影が見える。

自然とアイリスフィールを後方に移動させ、何時でも宝具であり自身の存在を示したる剣を

産み出す準備をしつつ前に進み出る。

人影が振り向く、曇りかかっていた月光が空の隙間から人影の全貌を明るみにする。

黒い髪の毛、東洋人だ。パーカーらしきものを羽織っているが。その上着を脱いで腕で

巻くと同時に簡易的な魔術の一種か消失する。

(……女性。マスター？ いや……全てのステータスが軒並み常人に近いが、これは間違いなく)

「キャスターと御見受けする。我々を呼び寄せたのは、貴公だな？」

セイバーは推定のクラスを呼びつつ油断なく構える。

聖杯戦争にて、アイリスフィールの口から告げられた三体。

バーサーカー、アサシン、そして黄金色の武具を多く所持するサーヴァントの人となりは

目前にいる白衣を羽織るスーツの、何処にでもこの世界に居そうな恰好をした女性は情報と

照らし合わさらない。ならば、残るはアーチャー、ライダーと言う

正騎士の冠位の戦士だが

女性の力量は、百戦錬磨のセイバーからして一片たりとも猛者の片鱗を感じ取れない。

魔術師と最優と呼ばれし剣の騎士。単純な相性ならば自分が優位

だが。この倉庫街に

誘いこんだのが、アレであると言うならば既に此処は魔術師の領域。

どのような奇想天外の魔術、外法が突然に降りかかっても可笑しくない。だからこそ

獅子と猫ほどの圧倒的な差 有利であれどセイバーは警戒を崩さずに居た。

スツ……と、ゆつくり子供でも理解出来る速度で両手を白衣のサーヴァントは上に掲げる。

セイバーは姫君を直ぐにでも守れるように姿勢を低め、攻撃あれば一瞬で肉薄し斬る気概

に移っていたが、次の発言に張り詰めた空気が揺らいだ。

「――非戦の嘆願を願う。また、交渉 及び 同盟の提案をマスターに申請したい」

その言葉に見えざる剣を持つ手の握りが一瞬甘くなりかけたが。セイバーは鋭い目で

ホールドアップのポーズを取り続けるサーヴァントに声を荒げる。

「戯言を！ 彼方から我々に対し向けた威圧。ソレを挑戦でないなどと言いつつ沈黙を維持する。」

女性は、ホールドアップを崩さぬままに僅かに眉をハの字と逆に向けつつ沈黙を維持する。

その不遜とも言える態度に怒りを覚えないと言えば嘘であるが見せかけか魔術師特有の

絡め手の一種だとしても、ああも解りやすい降伏のジエスチャーだけとっている敵を

問答無用で斬り捨てる事は、正しき騎士として生きて来たセイバーには出来ない。

未知なるサーヴァントとの邂逅が、行き成りの戦闘でなく和解を提示してきた事に

アイリスフィールは正直、困惑が浮かんだものの。手を上げたままの恰好を崩さぬ女性の

言葉を吟味し理解すると、僅かに笑みを浮かべて告げる。

「それでは、キャスター。貴方には交戦の意思はなく、我々の陣営に協力したいとの事ね？」

冬姫の言葉に、ドイツの寒空を思い起こすような温度を感じさせぬガラスの瞳と

スピネルのような瞳が交錯する。

アイリスフィールは、その色を持たない瞳に自分が覗かれた瞬間。衣服を取り払い

一糸まとわぬ自分の体肢を見られたかのような。けど、嫌悪感が殆ど無いと言う

不思議な感覚を得た。魔術による心操とも違う、妙な親近感を感じる。

対し、管理者は眉間の皺を一瞬濃くする。そして、軽く吐息を出して一定の調子で告げる。

「そちらの目的が、こちらの目的と抵触しないのであれば同盟関係を願いたい」

「それは……聖杯を獲得する手前までは味方でいてくれると思っていいわけ？」

相手が、キャスターがどういった事情を抱えてるか不明だしマスタートの動きも読めない。

それでも一人でも切嗣を、セイバーを支援してくれる人が増える事は素直に有難い。

「我々は聖杯と言う大型ツールに対し干渉するつもりはない。貴方がた、魔術師の総称する

願望機に対して願いはない」

口調は淡々としており、協力しあおうとする友好的な声色は皆無だが内容はアイリスフィール

そして遠方から脆弱な管理者のパラメータから、遠距離狙撃も思考していた衛宮 切嗣含む

セイバー陣営に多大な衝撃を及ぼした。

(魔術師の奸計か、この場を凌ぐ詭弁……いや、然し今の発言が事実な



ら思わぬ好機だ。

願いが何であれ、キャスターのサーヴァントが聖杯にかけない願  
いがあると言うのであれば

盤石な陣地を築けるし、他陣営の牽制となる。サーヴァントの相性  
からしても、魔術戦を

仕掛ける前にセイバーなら切り伏せる事が出来る……だが、これが  
完全にペテンなら

アイリの体に内包された聖杯に相手が気づく可能性だって有るだ  
ろう)

戦場を優位とする駒として利用しない手はない。だが、内に抱え込  
むには危険が未知数

であり発言を鵜呑みにするのは危険だ。マスターを出すなり何な  
りすれば未だその言葉に

信憑性が増すものの、セイバーに念話で指示をする前に信の通った  
声が響いた。

「空言を申すなキャスター！ ならば貴殿は如何なる願いを携え、  
この戦場に現れたっ」

セイバーの両手には傍目なものも見えぬものの、濃い密度の魔素が集  
まっている。

このまま行けば、無益な諍いなく貴重な味方が一人増えるかもと。  
生来から平和を愛す思考

に基づいている仮のマスターを演じる女性は。セイバー？ と怪  
訝な声を出す。

理想の王として、国を背負い、民を守って生きた英雄たる彼女には  
願いがあつた。誰にも

否定する事なき、夢が 願いが。  
英霊とは、サーヴァントと言う存在はそう言う者なのだ。生前の悔

いや禍根を少しでも  
晴らす目的のために参戦している。

聖杯に願いなしと断言するキャスターの妄言を素直に受け入れる  
訳にはいかない。

願いなく、空虚のまま呼ばれたと言う事が真実だと言うのなら。聖杯は、そのような幽鬼を

招来する事を許したと言うのか。願望を捨てた存在を。

答えよ、と強い詰問を滲ませた眼光に対して返されるのは冷たい闇夜の風の音のみだ。

管理者は彼女の言葉を、眼光を。目の前に彼女が存在しないかのようになんて無視している。

その態度は召喚さながらに自分へと失望した切嗣を彷彿とさせるものだ。思わず頭に

血が昇り、怒鳴りつけかけるが。それを止めたのは新たな熱もつ突風だった。

「——ほお 清澄なる気を感じてみれば 何やら可笑しき構図となつている」

コンテナの一角から降り立った人影、二本の長短の違いがある獲物を提げて現れた男性。

右目の下に泣き黒子が目立つ美丈夫。関心含んだ微笑を繕った口と共に管理者の背となる

方角から現われたのだった。武器は槍……ランサーのサーヴァント。

「ふむ……姿形は異なれど、こうも美しき三輪の内 二輪とも戦場に参じる身とは」

此度の戦場はヴァルキュリアの司る下で行われてるのか。と、苦言か腰重い様子で槍の内の

長いほうを肩に提げつつ嘯く。  
気障な科白に、三者三葉でサーヴァントでない唯一はどう反応して

いいか分からない曖昧な  
笑みで濁し、対し二人は仏頂面と変わらぬ鉄仮面と言う凍えた空気を保ち続けている。

三人をずらりと一瞥する、その視線の違和感に反応したのはアイリスフィールが最初。

「魅了（チャーム）の魔術……？ 出会いがしらに、随分と不躰ね」

「済まぬな、御令嬢。こればかりは持つて生まれた呪いのようなもの。恨むならば全員

女として生まれた自分を恨んで……ん」

「結構な面構えだが、そのようなもので私の腕がにぶ……？」

本来ならば有り得ぬ異物（X）それが回る舞台の歯車の滑りを悪くするかのように

二人は口の応酬をしようとした矢先、板挟みに佇んでいたサーヴァントの様子に眉顰める。

管理者の顔色は……僅かに蒼褪めている。ランサーに対し一瞥した直後からか

表情こそ特に変化はないが、解るものには解るほどに吐息も荒くなり始めている。

そう言えば、とセイバーはここで気づいた。このキャスター 自分と対峙してから

額に僅かに汗のようなものが出来ていたと。

結界を強引に破壊した乱入者たる自身の力が予想以上であったか、その前に何か

アクシデントがあったかと余りに気にしてなかったのだが。

「何だキャスター？ まさか、我が魔貌に毒されたと言うまいな……」

そうなれば興冷めだぞ、と続けようとした声を出そうとした時に。その華奢な体躯と情報外から

推測に呼びつけた存在はコンテナの壁に背中が軽めに当たる音するまで後退する。

そのまま、気分悪そうに頭を押さえる手は痙攣しており。顎からは疲弊か体調の悪さで出る

冷や汗の雫がポタポタと落ち始めていた。

これが平常の日常での出来事なら介抱する選択だが、此処は戦場。実力未知数の敵が変調

きたしたからと言って、情けをかける道理はない。

だが、この場に据える二人の騎士は奇しくも正道を愛する者達だ。

両者同時に顔を見合わせ

然らばと自滅寸前のサーヴァントに対し軽く意識を払うものの実  
力高い直線の相手に構える。

キャスターの身に何が起きたか知れぬが。生前から抱えている病  
か何らかの呪いのスキル

若しくはマスターの細工かも知れぬが、弱り切った婦女子を剣や槍  
の錆にするのは騎士の恥。

これが油断させる擬態ならば愚の骨頂。正騎士二人に対し詐称働  
きかけると言うならば

この自身の実力 神話から現代にかけて我等の刃を味合わせるの  
み。

対し遠くから傍観するマスター達は、両者ともにキャスターの突然  
の変調に異なる

見解を出していた。

（ふむ、あのサーヴァント 我がランサーの黒子に毒されたか。

何たる無様な姿、あのキャスターを招来したマスターの器量が伺い  
知れる）

（苦しみ始めたのは、セイバーと対峙した頃からか？ 何らかの生前  
から抱えてる病か呪い？）

楽観と深くの考察が交錯する中、セイバーとランサーは倉庫に身を  
預け呼吸を整え回復

務めようとする管理者を他所に激突し始める。

剣戟が響き、巧みなるランサーの槍術とセイバーの剣技が光る中  
で。衝突して震える空気は

コンテナを背にした彼女にも伝わっていく。

——暴走アラート 発生

——暴走アラート 発生

(クリフォト暴走)

Q l i p h o t h M e l t d o w n

(クリフォト暴走)

Q l i p h o t h M e l t d o w n

(クリフォト暴走)

Q l i p h o t h M e l t d o w n

フォト暴走レベル) 1

M e l t d o w n L e v e l (クリ

フォト暴走レベル) 2

M e l t d o w n L e v e l (クリ

フォト暴走レベル) 3

M e l t d o w n L e v e l (クリ

「……くそ」

a L a L a L a i e !!

| A A A A A A L a L

空は僅かに曇れども雨は降らず、けれども一本の巨大な稲光は赤い巨漢の男が、その身の丈を

引き連れるのに相応しい装飾の荷車に乗って豪快に叫び登場する。管理者の小さな罵倒も掻き消して。

真名 征服王イスカンダルを唱え。小脇で空飛ぶ車に昏迷しかけ酔ってた青年は、その

破天荒な挙動に我に返って馬鹿チンと絶叫する。

そこから先は、ライダーの独壇場とも言える彼の世界制覇にかけての英雄の勧誘が行われる。

そんな混沌の空間が繰り広げる中でも、未だ管理者は何とか抑制していた。限界まで、

何としても抑制を、被害を極力出ないように必死に内なる戦いを続けていた。

「……ん？ おおっ、そんな壁に凭れ掛かっているのはキャスターか？

よし！ 其方も余の配下になり我が覇道を見届けてみないか？  
どうだ!？」

「お おいおいおいおいっ、何で機嫌悪そうな奴をわざわざ煽るんだよおっつ。」

しかもっ キャスターって事は魔術戦のエキスパートで騙し合いの達人って事だろお!？」

そんな腹に一物も二物も抱えてる奴っ 危なっかしくて一緒に行動なへブツ!!」

ウェイバーや征服王イスカンドルの漫才染みたやりとりすら、今の管理者には反応する

余裕はない。額をさすり、涙目で起き上がる青年も このサーヴァントが大集結している混沌の

場で、彼女の容態の異様さには思わず冷徹な魔術師を演じるのを一時忘れる。

「あ……あのサーヴァント大丈夫なのか？ 顔 土気色だぞ」

頭の中で暴走アラートが発生する。既に、限界値に特定の複数の収容室のカウンターが減少してる。

F—05—32 危険値!

O—02—40 危険値!

F—02—44 減少中!

T—04—50 減少中!

O—02—56 危険値!

T—01—68 危険値!

O—01—73 危険値!

管理者の目の中に三体のサーヴァントとは異なる光景が繰り広げ

られている。

けたたましく危険信号が鳴り響く通路を、切羽詰まった表情で職員達が走り回っている。

必死に、まだ暴走に至ってない多くのアブノーマリテイに冷静を保ち正しい作業手順を行って

会社を一時的に安全状態に移行する為の措置を取り続けている。

(そうだ……維持するんだ。安全を)

適切な指示を下し、他にも収容違反しかけるアブノーマリテイ達に注意を払う。

大丈夫だ。今まで通りに危機を乗り越える事は、可能な……

「——我(オレ)を差し置いて王を称する不埒ものが二人も現れるとはな」

——M e l t d o w n L e v e l (クリフオート  
暴走レベル)

10

「……ああ 畜生」

その嘆きは、小さくも緊迫し睨みあう王たちと戦士の視線の交錯の中で良く響いていた。

一斉に、英雄王ギルガメツシュ 征服王イスカンダル 理想王アルトリア

フィオナ騎士団先鋭ディムルツトの視線が。今まで壁に凭れ掛かり崩れ落ちそうだった

置物と化していたサーヴァントに注視する。

遠方から、術や優れた視力を利用し観察するアサシンやキャスターも同じく。

「何だ？ あまりに気配が極微すぎて今までいた事を忘れてたぞ 病

者

だが羅患であつても我は…」

「——これから起きる事は 予め告げておくが、これはお前達の責務だ」

唐突に告げられる、静かな言葉には今までアイリスフィールと会話してた時や雁夜との

会話とも異なる 確かな強い感情が乗せられていた。ギルガメツシユの声を遮る程。

怪訝な顔に変わるアーチャーを他所に、彼女は首を回しアイリスフィールを ウエイバーを

交互に視線をやってから、既に汗が引き能面のような顔に移りつつ眩く。

「そちらの人達には告げておく 生き延びてくれ」

「恐怖に直面しながらも 未来へと生きてくれ」

水平に掲げられた片腕と共に、唱えられた発音は。

非常事態レベル2 (Second Trumpe

t)

その場に居る者達に意図を掴めずも。

次に起きる光景にて黙示録のラツパを告げる祝詞である事を理解した。



## Tの由来

彼らは同時に目にした。それは灰色の細長い袋を丸めた中に斜線上の棒を

突き刺したような独特のマークが管理者の周辺に浮かび上がると共に、その光から

現われた異様な怪物達の姿を。

バーサーカーこと彼女の行動を制止する機会があった。だが、セイバーとランサーは

互いにどちらも明らかに弱体化しているであろう存在をマスター命令など除き

手を下すのは騎士道に反していたし、そのマスター達も切嗣においては同盟を望まれ

攻撃の意思が停滞となり、ランサーのマスターことケイネスに至っても目前で相対

しているセイバーを無視してキャスターと思える存在を攻撃すれば、その隙を突かれ

目前の濃密な魔力を持つ存在の攻撃を受ける危険視を覚えてた。

見た限り、ランサーの魔貌こと魅了の黒子に毒されてるような三下を率先して

攻撃する事はない、このような複数戦ならば特に。一番優先して排除すべきは

力量確かなセイバーだ。

ライダーの突発的な介入は、自身の覇道と培った栄光と誇りから成す行動によるもの。

明らかな敵意ある襲撃を除いて、その場で目にしたサーヴァント達に攻撃する意思は

存在しなかったし、ウェイバーも錚々たる英霊達に気後れしていた。

最後に、アーチャーギルガメッシュであるが。

彼は召喚された後に、バーサーカーの真なる正体が一般的な外見の

女性であると

時臣から説明されていた。だからこそライダーの呼びかけで登場した時に一見無防備な

バーサーカーの彼女を攻撃する機会は幾らでもあったのだ。

だが、彼はそうしなかった。彼自身の未来を見通しすら可能である慧眼が、そして

神々と人の血を受け継いだ躰は感じ取っていた。

——アレに下手な刺激を与えれば、更に悪い傾きが起こる　と。

遠巻きに管理者の紅い傷痕の狩人の手から逃れたハサン達。そして未だ姿を見せぬ

本来のキャスター達も注視する中、ソレは起きた。

『(コレ等は!?)』

銀河のような髪の毛をした、スラリとした体形の長躯の少女の面影を残すものの

半身が影鬼のようなもので覆われ、また目立つ帯剣をした存在。

蝶の全体が、首をすげ替えて生えている。五本の腕を生やした異形ながら洒落た

燕尾服で包みこんで棺桶を背負う、何処となく紳士的な気配を宿す人型の存在。

その体躯は、この場にいるサーヴァントの中で一番の巨漢であるライダーを凌ぐ。

アーチャーが踏み台とする街灯にさえ手を伸ばせば届くサイズだ。

胸元は正方形上に焼却炉のような形に蓋が開け放たれ中から酷い血肉の異臭と共に

赤々と脈打つ心臓が一つ目立った上で鎮座している。その怪物の鎧の頭部へと、

小さな少し間の抜けた顔つきの小鳥が宿りつつ囁って何の感情も感じさせない目で、ズラツとサーヴァント達を眺めている。

最後に現れたモノは、それまで未だある程度人の想像で賄え受容出来る姿形を

管理者が呼び出せてたが、ソレはそのキャパシティを超えていた。

黒い球体に、鳥を思わせる二本脚と人のような手。それは未だ良い。

だが、その眼球は異常の極みだ。軽く40はあるであろう黄色い眼球。見てるだけで

気が変になりそうな複数の生えた目はギョロギョロとあらゆる方向を目にしている。

「これは……っ まさか、これが全部サーヴァントだと言うの!？」

突然の急展開。アーチャーと複数のサーヴァント達の睨みあいが出す構図から一転。

キヤスターと思われた、白衣の女性は瞬く間に数だけなら参戦している全員と

拮抗できる戦力を一瞬で招来したのだ。これが、今まで倒れそうだった彼女が？

講和から倒れ伏しそうだった事まで全部演技だったと言うのであれば、それは神話か

伝説レベルのペテンだと思えそうな行動だ。

アイリスフィールは、各参加者等の心を代弁する叫びを終えると共に管理者を見遣る。

さぞ形勢逆転させた事に満足であろうと思ったが。その想像に反し、彼女の顔は

固く険しいままだ。眉を顰め、軽く拳を震わせてるように見える。

この状況は、まさか彼女の意に反しての行動だと言うのか……？

そう考えている合間にも、状況は動いて行く。管理者が招来したサーヴァントらしき

怪物達は動き出す。その動きは、控えめに見ても友好的な仕草と言う気配はない。

スッ

最初に動いたのは、蝶の頭をしたタキシードの異形。その背中と同等の物体は

両方のポケットに差しこんだ腕とは異なる腕で抱えており、その腕が器用に棺を



に二槍の魔槍を駆使し

難なくと迫る蝶を払っていく。魔を払う槍に触れた瞬間から水に浸かった紙片のように

瞬く間に雲散して地面に落ちていく白き陽炎。

アーチャーに至っては、迫る蝶達に対し鼻を鳴らし無造作に指を鳴らして背後に浮かぶ

金の門から数本の武器を射出するだけで事足りる。

「羽虫が。どう言うつもりだ？」

これが本気で攻撃してる訳ではあるまい　との言葉を省略しての  
眩き。

十数秒して残る全員も気づき始めた。

(何だ……？　異常な程の量あるに関わらず、まるで本物の蝶の如く脆弱だ)

(最初こそ、圧倒的な弾幕に危機を抱いたが。これであれば、量を無視すれば

腕を振るだけで消し飛べるぞ)

蝶達の動きは、最初こそ周囲にいる者達だけに飛来していたが。残る蝶達は無規則に

飛んでいく。倉庫街の上空を舞って……遠くへ。

(？　——っ不味いっ！)

「舞弥。ランサーのマスターへの狙撃は中止だ……今すぐ逃走に移るぞ」

蝶達は、何もサーヴァント達が密集している場所で留まっているわけではなく。まるで

彼らサーヴァントとマスターのパス。見えない線を誘蛾灯のように正確に遠方に潜む

ランサーのマスターであるケイネス。そしてセイバーの真のマスター衛宮　切嗣の元へ

飛翔していく。そのスピードは、普通の蝶の速度であれど……速い！

一方、切嗣とそう遠くない場所からランサーの動きを見守るケイネ

スにも

蝶達の魔の手は差し掛かっていた。

(っキャスターめ、ランサーの魅了に冒されてたかと思えば。小癩なっ)

圧倒的な物量の無差別の範囲攻撃。成程、確かに共闘する存在なしマスターが近くに

ない状況であれば最適解だ。敵マスターをも追尾する攻撃も理に長けている。

だが、所詮 それだけだ。聖杯戦争と言う大規模な魔術儀礼において、盤上を

一体のサーヴァントの宝具で一気に形成を逆転しようなどと、ケイネスに言わせれば

非理論的な全く以て美しくも無い博打な手段だ。

他のサーヴァント達が、この一戦で生き残れば。全ての陣営が敵として対立する。

ソレすら分らぬか？ キャスターよ。

「このケイネス・エルメロイ・アーツボルトが、ロード（君主）と言われるまでの力

先見の目のないキャスターが飼う魔物等に披露するのは、惜しいものだが」

迫って来た十数匹の白い蝶に対して、ケイネスは微塵も顔色を変えずる事なく落ち着き払い

試験瓶を取り出すと共に、その容量から想像出来ぬ質量の水銀が出現する。

人差し指より少し長い程の細長い瓶から、人が数人呑み込めそうな銀の液体が高名なる

魔術師の傍らに迸りつつ鎮座する。

「Fervor, mei Sanguis」(沸き立て、我が血潮)  
「Automatoportum defensio: Autom  
atoportum quare: Dilectus inc  
risio」

(自律防御：自動索敵：指定攻撃)

銀の液体は、瞬時に彼の魔術師の命に沿って鞭状に形を変えていく。

これぞケイネスの魔術礼装において、最強。 ヴォールメン・ハイドログラム 月 靈 髓 液

「Scalp」(斬)

——シユパアアツ!

ダイヤすら豆腐のように容易に切断せしめたる水銀鞭の一撃は、白い蝶たちを呆気なく

二つに分離させる。肩透かしを覚える程だ キヤスターの編み出した魔物と言う位なら

何かしら仕込んでいるのも一瞬期待していたのに。

そんな風に、軽い気の緩みが芽生えかけた時だ。柔らかく空気が揺れる音、それと同時に

ケイネスの頭に一瞬だけ過去の情景の数多が浮かび上がった。

時計塔、学生時代の学問での極めて稀有だった成績不振。その後、判明した学友と考えていた

者達によつての工作であるとの判明。父や母の喪に服する場面

ソラウと過ごしての彼女の様々な軽蔑の仕草や静かな怒りの表情。自分でない者に対し

情欲と色欲の入り混じった熱望の視線を向ける横顔……。

「——っ!? Scalp (斬) っ!!」

情景が浮き出て、沈むと共に眼前の下で自身の靴に留まる蝶を見留めると反射的に

月霊髓液の一撃にて蝶を切断する。

軽い冷や汗を拭い、今しがた靴に留まった蝶のいた靴の上を汚らわしい汚物か獣でも

触れたような目つきで魔術の水を扱い清める。

迂闊 月霊髓液の自動追尾攻撃は正確なもの、距離が開くと其の動作に一定の単調さが

生まれてしまう。あのキャスターの怪物が使役する蝶の中の一匹、

されど一匹とて

見落としたのは腹立たしい。

(精神感応の類 か)

やはりキャスターだ、何の変哲もない蝶の使い魔な筈もない。魔術  
防衛施す衣類越しでも

精神に悪影響を施す精神汚染の魔術を編んだ蝶。いま一瞬の過去  
に起きた負の軌跡は

不愉快と感ずるものの、それ以外で不調は体にきたさない。

(だが、キャスタークラスともなれば長期的な呪いの魔術も扱うかも  
知れんな。

詳しく解析し治療をするにしても、あの蝶が第3波を繰り出さない  
保障もない。

ふんっ、癩ではあるが 今宵の戦場の退き時と言う所か)

ケイネスの過去において、挫折 と人が称する程の重たい過去はな  
い。

本来自身が召喚する筈だったライダーの聖遺物を、小憎らしい形式  
の弟子たる

ウェイバーが奪取した事や、ランサーの魅了により変調見られる許  
婚であり今の妻の

ソラウが見せる様子など腹に据えかねる事は起きてるものの、彼自  
身にとっての自信や

信念と言うものが絶対的に破綻したり崩御した事は今と過去に  
とって無いのだ。

ランサーのマスターである彼が、キャスターの攻勢によって少ない  
ものの痛手を負った

事で退陣を考えていた頃、もう一人の遠方から伺っていた彼はピン  
チに陥っていた。

棺から開け放たれた魔力によって造られた蝶。物理的な銃では迎  
撃しようにも相性が悪い。

魔術によって強化したナイフ、ブランクがあるものの未だ戦場での  
動きのキレは幾分



残っている体術と共に蝶達を切り落とす。

パートナーである舞弥と現状の報告を短く行い、第二波が迫る事も考えて撤退の方針

に移ろうとした時にだ。眼前に出現した存在に、二人して動きを止めた。

「つキャスターの魔物……」

蝶の頭をした、喪服を着た異形の存在。それが、待ち受けていた。

見た限りでは肌を刺すような殺気、肉食獣が獲物を狩るような威圧感もない。

悪感情は見当たらないが好意もない、冷え冷えとした不気味さだけが佇んでいる。

(令呪にてセイバーを……いや、アイリと共にこの場を脱出したとしてキャスターの宝具の

性質が解明されてない現状。奴が僕達を追跡しない保障はないっ

此処にセイバーとアイリを戻しても。あのキャスターが退路が狭まる場所に対して

みすみす逃走経路を用意しようとする可能性も低い)

令呪はそう簡単には使えない。疑似的な不可能を可能にする代物は、これから聖杯に

願うにあたって必ず相反するだろうセイバーへの強制命令。その為の一つ消費するのは

確定だとして、使用可能なのは最低二つ。いま此処でその一つを使用する訳にはいかない。

(だが。舞弥の銃 僕の携行している武器と固有時制御 (Time Alter) で……いま目前で

相対しているキャスターの怪物に通用するのか?)

いや、通用するのかわからない。通用させねばならない。衛宮切嗣の秘蔵であり切り札である『起源弾』は、魔術回路を備える人間が最大限に回路の

出力を高めてる状態でなければ一撃必殺たりえず、魔力の結晶で動くサーヴァントには

通用しえない。他の魔術礼装たりえる物品も対サーヴァントを想定しえてない。

「Time alter —— double accel (固有時制御 二倍速)！」

切嗣の魔術、「固有時制御」。抑止力の干渉を限界まで抑え、自身の体内の時間の速度を操る。

補佐パーツの目には、気づけば彼が銃を構え射撃の音が響いていた。それ程の速さで早撃ち

が成されるが、神秘で形成された異形は海水の飛沫が掛かった程度に不動に立ち尽くしたままだ。

切嗣のサポートでありパーツの一つ、久宇舞弥も武装しているキャリコM950を遅ればせながら

火を吹かせるが。神秘の結晶体には、やはり焼石に水 落ちる水滴が1から2に変わったただけだ。

蝶の頭はスツ……つと棺を担うのと、真ん中に付属した腕でない背広の衣嚢に差し込んでいた

両腕を外に吐き出させ、その手を子供が遊びで良くするような銃の形へ変える。

(ガンドかつ?! くつ……固有時制御を最大限にしても後が続かないっ)

構えてる銃、いや両腕を犠牲にしても回避はしたほうがいい。例え重傷を負っても

セイバーの宝具エクスカリバーの鞘と言う、隠し札がある以上 死ぬ以外は戦闘続行可能だ。

パアンと、乾いた音が響いた気がした。それと同時に、二つのマシンガンの音の内一つが途絶え

地面に人が一人倒れ込む物音が直ぐ近くから、未だ激しく銃声が満ちてるのに良く耳に通った。

「舞 弥？」

横たわった人影と、瞳孔を開いた様子が見られると共に。殺戮機械

としての仮面を被っている

彼の心に罅が生じる。引き金を引く指の力が弱まると同時に、彼は新たな破裂音と意識が暗転した。

——ケリイ!

ほらっ　こっち!　此処がベストスポットなのよ!

今日はカナリナウスモルフオがいつぱい飛んでるわっ!

……眩しい　陽射し　小麦色の繋がる手　琥珀の瞳

走る　疾風のように　白い蝶のカーテン

「——シャー　レイ」

「つぐ……切嗣っ」

かつて、幼少期に愛され　暖かい思い出が詰まったアリマゴ島に居た一人の少女。

年齢に相応しくない英知に富んでいた。僕にとって、初恋の人……。

常夏の陽射しに照らされた眩しい笑顔と、そして彼女に手を引き連れたままに見た

白い蝶達が飛び交う情景。それを打ち破る……険しい、舞弥の声。

舞　弥?

その瞬間、意識は微温湯のような夢から冷え冷えとした冬空に裸で放り込まれたように

一気に覚醒した。そうだ?　僕は何をやっている。いま自分は死闘の渦中にいる。

意識が戻ると共に、頬の片方に強い熱と微かな痛みを覚えた。舞弥が気づけの為に平手を

施したのだろうと冷静な思考の傍ら、視界に起きる出来事を呆然としつつ声で表す。

「……何故、アサシン達がアノ化け物と交戦しているんだ？」  
「解りません。私が意識を戻したのも、つい先程なんです切嗣」

今しがた見た、過去の淡い宝石のような記憶が脳裏にチラつく中。  
何とか思考をクリア

にして目に行っている現実を整理する。

あの蝶頭の怪物。いや、怪物なのか過去に実際に存在していた英霊  
の擬態なのかは定かでないもの、その敵が四方八方に銃の形をした指でガンドを放つて

いる。  
そして、それを縦横無尽に黒い影……全滅したように見せかけ、表

舞台と異なる場所で  
マスター達の暗殺の隙を伺っていたであろう多勢のハサン達。そ

の数体が見た事のない  
ボウガンや、大砲などで蝶頭と戦闘している事には疑問符しか出せ

ない。  
(何故、このハサン達は僕たちに構わず。あのキャスターの刺客と

戦っている？  
こいつらの専門分野はマスター殺しだろっ)

理解が追いつかない中、ハサン達も無言で蝶頭に交戦……鎮圧作業  
に没頭している。  
彼等も心中では不平と不満が募っていた。何故に、恰好の獲物をみ

すみす見逃して  
このアブノーマリテイと言う存在を倒すのに身を費やなければな

らぬのか？  
管理者は、アブノーマリテイT-01-68が蝶の弾幕を放った

後。そこから弾幕の蝶達と  
共に遠方に存在する衛宮 切嗣のほうに向かうのをサーヴァント

達がアブノーマリテイの  
攻撃に晒される中で冷静に見届けていた。

Xにとって、聖杯戦争は大型のツールアブノーマリテイ。超常現象  
を人為的に織りなす

傍迷惑な超技術の産物だ。ソレを解析及び破壊する事が優先事項であり、人に有害たる

アブノーマリテイが、この世界の人類を捕食する事に寛容ではない。例えそれが敵対者

としても、人類である限りは庇護対象だ。

(職員達を、この世界に招来させT―01―68を追尾しようにも。彼等には内部の收容する

アブノーマリテイの作業と言う大切な役目がある。

F―01―57の依頼は、あのアーチャーと呼ばれるアブノーマリテイが以前交戦した時の

様子を顧みれば、状況の悪化が危ぶまれる。容認するのは酷だが、現在の雇用する

ハサン達を外界に出させ、鎮圧指示をするしか手立てが無い……) 数体の戦闘分野に手心を持つハサン達を、蝶の弾幕が未だ残り管理者に気を回す余裕が

ない中で招来させる。それによってT―01―68が舞弥と切嗣に止めを刺す前にハサン達が

鎮圧作業を行使するのに間に合ったと言うわけだ。

(我等が、あの管理人とかの狩り主の言いように使われるのは小癩。だが、中々

このE・G・Oと呼ばれる武器は使い勝手が良い……初めて目にするものだが馴染む)

業火と称されるハサンは、F―01―02より抽出された武器。四本目のマツチの火と

言われる大砲の火を吹かせ。

風弓と称されるハサンは、F―01―18より超出された髪の毛が多く絡み合った

クロスボウと思える武器。通称、悲鳴と呼ばれる武器の矢が女性の金切り声を

伴って飛来して、蝶男の肩に突き刺さり。

O―03―88と呼ばれる、透明なアブノーマリテイから取り出さ

れた武器は。一見すれば

只の棒だが透明なハンマーだ。それを無彩と呼称されるハサンが振るい蝶男を打つ。

アブノーマリティT-01-68 死んだ蝶の葬儀は、その鎮圧作業に苛立ちを覚える仕草と

共に両腕で銃撃を繰り出すが、ハサン達は俊敏性と数の利を活かし立ち向かっていく。

大砲と、クロスボウそして透明なハンマーの攻撃を味わいながらも狼狽するような

様子はなく（頭が蝶な為、表情を読み取る事が前提として不可能なのだが）指鉄砲を

三体の影を追って放つものの成果は出ない。

やがてT-01-68は最後に三体のどれかの攻撃によつて動きを唐突に止めると。その

両腕の棺を横たえ、一旦仰向けに宙に浮かぶと共に棺の中に自分から収まり……消失した。

「……終わったか」

「ああ、後は……」

チラツと首を向けて、銃床を支えとして立つ男女を軽く見遣る三つの視線。それに

僅かに体を揺らすも、未だ戦意を失わぬ目でこちらを観察する男の眼光は鋭い。

（このまま、あの女の命令を無視し。このサーヴァントのマスターであらう男を

殺害するのは、我等の数とこの武器さえあれば造作もないが……）

——タツ！

三人の影は一気に跳んだ。衛宮 切嗣とは真逆の方角へ、三者僅かにルートは

異なれど切嗣達と十分に離れれば管理人の元に戻る道に駆けた。

（令呪によりサーヴァントを呼び戻せる事。それに聖杯戦争で他のサーヴァント達の

交戦が未だ我等がバーサーカーと闘った時以外では、これが初。故に、我等の行動が彼の女の指示で動いている等と知る由は誰にもない)

(バーサーカーの女。まだ背景は謎であり実力や素性は未知数ではあるが

我等に他マスターの救助を任せる事を考えると、人情家が余程の善性もあると見る。

ならば、此処は恩を素直に売って我等の価値を高めようぞ)

(かつてのマスター、言峰氏には悪いが……ハサンともなれば鞍替えも常套手段。

元より騎士道や正道から外されし我等。この戦争で勝つ為ならば如何なる恥辱にも

耐えようとも……例え、100の内1を残し死しても、その1が最後に残れば勝利)

百貌は、管理人にハントされてから多くの怪物達の世話をなしつつも下克上の時を

狙い、それと共に最善の道も模索していた。

幾つもの蟻の巣のような道を忙しなく働き、すれ違いながらもハサン達は独自の

サインを扱い今の現状で出来うる事を必死に編み出し、それを決行している。

今暫く、このバーサーカー(管理人X)の手足となり動く。そして、奴の監視網が

手薄になった時、我等の宝具 妄想幻像 (ザバーニーヤ) が輝く時。

寝首を搔く機会はずある。だが、今は未だその時ではなし。

バーサーカーの宝具、使役する怪物達の能力。アレ等は脅威的だあの最初に遣わされた赤い頭巾の死に鎌にすら齒が立たなかった

我等にとって

狙うべくは一人、アノ管理者と呼ばれる者のみ。

(彼奴めに良いように扱わされるは確かに我等ハサンにとって屈

辱。

然し、奴が飼うアレ等の魔性。そして、コレ等の武器は我等にとつても好都合)

(あの蝶男も、単純な力であれば正騎士に勝らずとも劣らず。神話に名を遺す

英霊に太刀打ち出来ずとも食い下がる力量はあるだろう。ソレ等に対し斯様な

固有結界で生まれし武具を持つだけで数の利で勝る事が出来る)

(——ゆくゆくは 彼のバーサーカーが他のサーヴァントを落とし。そして

彼のアーチャー『英雄王』と相打ちまで持ち込めれば……)

百貌達は、持ちうる情報を正しく統合させて数少ない勝機への道へ走る。

管理者Xの指示通りに動き、そして遠坂が招来した古代の文明の創造なした

最強とも言つて過言でないサーヴァントを倒す。アレに勝ちうるには全ての

サーヴァントが協力し合うか、何かしらの手段でマスターに令呪で自害を

命ずる以外の第三の手段があるとすれば……あの自分達が直接目にした邪悪な

存在が犇(ひしめ)き合う怪物達 全勢力をぶつけるしかない。

(そして、あの管理者と言う輩は。サーヴァントに対して嫌忌を抱いている

無論、我等もその対象ではある。だが、それだからこそ有効価値が未だ

ある限り、処理される事はない。怪物達への人材に過剰が起き得ない限り)

(——遂げて見せる。未だ背信する事なき別けた我等よ

彼の神の信徒に仕える事で、お前達にも勝利の機会がある事を祈らう)



彼等は体感時間で数日。管理者のアブノーマリティと接する事でその脅威的な力を肌で感じ取り、叛逆の芽は少し異なる華を咲かせ始めた。

例えば汚辱に濡れても、その手に光を勝ち取る。かつて教団として生き

自己を見定める事すら出来なくなった者達は、多芸を得る代わりに英雄と

しての強大さを衰弱させた。だからこそ、外道は外道なりの礎となるのだ。

「……何だったんだ。何故、アサシン達が」

「切嗣。思考するのは後です、私達も早く」

何もする事もなく、ただ闇の中へと一挙に消え去ったハサン達と棺も何もかも

消え去り、残るは多くの薬莢と煙硝の匂い。そして多大な疲労感と幻痛。

いや、これは幻痛と言うべきか？ この戦争に飛び込み、いやソレ以前から

アイリと愛を育み、聖杯を得る過程で封じ込めていた淡い陽だまりの記憶。

無理やりこじ開けられた太陽の光は、ほぼ闇に同化しかけようとしていた自身の

心身には死徒のように辛く耐えがたい悲しみが罅の入った蓋から漏れ出る。

「なあ、舞弥」

「何ですか？ 話し合う事があれば、後で」

「君はあの倒れた時、何を見たんだ？」

「――」

軽く肩を支えられつつ、無意識に告げた問答。自分が見たのは初恋の記憶。

あの白い蝶の。死の匂いが濃い異形の手に掛けられ 彼女は何を

虚空に見たのか。

返答を一瞬窮しつつも、自身を鋼鉄の機械。切嗣の一部として動いている

存在と認識する彼女に、質問の答えをはぐらかす選択はない。

「赤ん坊」

「私が、産んだ赤ん坊。意識が定まらない中で、泣いている……それと

切嗣。貴方に手を差し伸べられた時の記憶　ソレを思い出しました」

「……そう　か」

彼女　久宇　舞弥は。幼少期から少年兵として戦場の駒として扱われ

女として産まれた事により、子や性行為が成せる頃には慰み者として生きて来た。

中東などの戦争では、余り珍しくもない出来事。だが、彼女のような境遇の

人間が居なくなる事が一番だ。だからこそ、聖杯を得るために　僕は。

あの蝶の異形の怪物。アレが何を伴って、何の理由があつて僕たちの記憶を

掘り返したのかは解らない。　解らない……が。

「もし、今度あの異形に相まみえるのであれば　——　僕たちの手で倒す」

「——はい　切嗣」

あのキヤスターは未だ生存している。なら、またアノ怪物が目の前に

立ち塞がらない保障などない。

在りし時の陽だまりを不躰に何の予兆もなく見せつけられた彼の目には。

冷徹なる機械としての目でなく、人としての怒りの火が瞳に点っていた。

一方、戦場の中心でも変化が着実に見られていた。

T-01-68の蝶の弾幕を掻い潜った彼等は、その後に主犯が飛び立った蝶達と共に

消失するのを視認すると共に、未だ他にも残るアブノーマリティ達が動き始めていた。

ブウウ——ン

銀河のような長い髪を靡かせた、少女の顔をした魔性の化身の周りには宙を漂う

レイピアのような長剣が幾つも浮かんでいる。

「あ、あいつもアーチャーと同じく大量の剣を所持してるのかよっ！」

上空で、戦場を観察するウェイバーは小さな呻きと共に見た物を言葉にする。

彼の審査眼が正しければ、あの剣の一つ一つも宝具に劣らぬ力を秘めている。

手を組み黒い眼孔から涙を流し続ける少女は、何の予兆もなく数本の剣を

両の横い位置する英霊達、槍と剣の騎士に対し空気を切り裂き飛来させる。

気合一閃と共に、セイバーは見えざる剣と風を叩きつけ。ランサーも魔槍で防ぐ。

蝶達とは異なる重い感触、ソレが武具越しに伝わり並みの相手でない事を同時に知る。

(風王結界を纏うエクスカリバーで受けても 重い！)

この者 只の怪物では……っ!?)

「ランサーっ！」

「っむん——!!」

ズドンッ

怪異の女の先にて、同じく剣を受け止め僅かに地面を後退したラン

サーの背後に迫る

巨大な鎧、掲げられた斧。セイバーの警報と目線、そして戦士としての直感により

彼は旋回すると共に大きく横に飛びのくと同時に、彼が居た場所に重い鉄塊の刃が

振り落とされたアスファルト軽く抉る。

「不意の一撃としては中々だったな、斧使い！　だが、このデイルットの首

そう易々と獲れはせんぞ！」

巨漢のブリキの鎧の戦士。人程の大きさの斧は槍で受けるなり直撃するのも危うい。

だが、ランサーとて生前の戦で多くの戦士と相對した。その中には、このような大柄な

戦士との死闘も幾度も行つた。故に、このような手練れとの闘い方も熟知している。

伐採斧を持ち上げる動作。その僅かな隙をフィオナ騎士団の精銳が見逃す筈なし。

フツ―！　と呼気を強めると共に体を反転させつつ破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）が

鎧を薙ぎ打つ。と、同時に魔槍が鉄鎧に弾く音が小さく耳に届いた。

（ゲイ・ジャルグが弾かれるとなれば。この鎧、真の鉄塊か！）

彼が所持する二振りの魔槍。一本は魔を払いし破魔の紅薔薇残る一本は妖精王から授かれし、如何なる癒しの術すら弾き傷つけ

られた者は

その槍の傷に侵され死する黄の短槍必滅の黄薔薇

魔力を帯びた鎧であれば、セイバーに傷を負わせた時同様に。サーヴァントであるなら

幻想防具を無視してダメージを与えられる。だが、普通の鉄なら効果は薄い。

（只の鉄……なればっ！）

「その心臓 貫い受けるっ！」

どう考えても、このゴーレムと見受けられる鉄塊の斧使いが急所は胸部に晒された心臓。

明らかに畏臭くもあるが、自身の魔槍であれば如何なる魔術の罨であらうと宝具の能力を

無視する力でない限りは打ち破る事が出来る。

致死近い斧の一撃を掻い潜り、もう一つの空いた手も逃れ胸部へと腕を突き出し槍を飛ばす。

限界までリーチを活かし、黄槍は心臓の中心に肉が突き刺して何かの膜が破れ水が噴き出す

音が激戦の中で小さいながらも際立って響いた。 よし………これ  
でまずは一体！

ズウン—— ……

鉄の足が前進する音が止まる。体の動きも心臓を刺すと共に動きが少し緩慢になり

自分の元に一歩二歩距離を詰める、と言う所で動きを停止する。

他のほうに視線を遣れば、セイバーはあの剣を幾つも浮かべる少女と睨みあっており。

ライダーは蝶の残る弾幕を雷撃で処理してる所であり、アーチャーはこちらから見る限り

小さな影が周りで飛び回っているのを、あの背後にある歪から武器を飛び出させ打ち落とそうと

しているのが見える。少し気になるのは、手が空いているランタンを持った奇異な鳥と

そして魔術でこれ以上攪乱や追撃するでもなく沈黙を貫き観察に徹するキャスターだ。

今ここで止めを刺すのは容易いかも知れない。だが、先程の疲弊すら大規模な魔術を

隠す擬態であったのなら、今ここで肉薄しても又なにかしない保障はない。

マスターからの指示は今のところない。この膠着状態に思慮深き

主が何か思惑あつての沈黙

ならば自身の思うがままに行動して良いと言う事だろう。

(さて、助太刀するのはセイバーからにするっ!?)

瞬間っ　ゾグツと今までにない程に背筋に悪寒が走った。

目前にあつた只の置物が、一瞬にして自分を喰らおうとする猪に変貌したような危機感。

あのブリキの木こりが、動いた。目覚ましくも先ほどまでの何処か鈍さが見えた時と異なり

まるで油が挿し終えたばかりの人形のように滑らかに斧を振り上げる。

あの心臓は——破壊すれば、この怪物の真の力を取り戻す制御装置だつたと言うのか!?

鍛え上げた肉体の信頼のなすがままに、振り上げた斧が見上げつつも手は勝手に腰に据える

ようにして魔槍二つを脇腹の一つを守るように構える。

疑問視を掲げる前には、その槍を置いた地点に強烈な衝撃と痛み。自分が宙へと舞いつつ

地上と空が逆転しているのが見える。気づいた時には斧で横腹を叩きつけられた訳だ。

「ぐ　あ………」

小さく呻くと共に平衡器官が一時乱れるが、彼の戦士はクー・フリーンの鮭飛びの術にも

比肩するほどに敵の城壁や夥しい敵の軍勢を跳び越す名技を担う。しなやかな体格を、高所から落ちて反転して見事に着陸する猫のように華麗に体を捻り

地面へと着陸する。打ち付けられた脇が、着陸の衝撃を伝播し引き攣るような痛みが

伝わるものの、未だこの肉体は痛みを押し殺して戦える。

(幾らか猶予は残るもの　まさか　これ程とはな……!)

地面を振動させ、先程よりも一段と早く斧を振り上げて襲い掛かる戦士を見据えつつ構える。

キャスターが召喚した戦士。本来サーヴァントと言う性質上、本来の時代で生きてきた時より

どうしても写し身は劣化し、当時に冴えた術や技だって基本落ちるもの。

なのに、この斧使いはどうだろう？ ゴーレムか、または異界の存在かは判別つかぬものの

このディアルムド・ウア・ドウヴネ エリンの戦士と互角に張り合う実力！

正規でのサーヴァントでない、キャスターが呼び出したものがここまでの力を発揮するとは。

体が震える 恐怖からではあるまい。デイルツトの口は静かに歓喜の笑みを繕っていたから。

今代の主よ 感謝する。セイバーに続き、こうまでの好敵手と相対出来るとは戦士としての冥利！

(だが、些か贅沢を口にする事が許されるなら。

この斧使いに戦士としての名乗りが出来れば良いのだがな)

質の良いゴーレムか、巨人族の亜種なのかも知れぬ生き物には無理からぬ事かと自分の中で

考えを纏め上げ、ランサーは斧使いへと更に闘志の炎を両目に掲げ躍り出る。

それに対し、不気味な程に何も発さぬまま。木こりは血と錆で覆われた斧を高々と振り上げた。

(鳥めがっ)

ランサーとブリキの木こりが激闘を繰り広げる最中にも、アーチャーは苛立ちを高めていた。

飛来してきたのは小鳥。時臣からも聞いていたが、ハサンを何の躊躇もなく一撃で喰らう

事が出来ると言う、見かけは間抜けな顔つきをしているが油断ならぬ生物である。

「だが、この我<sup>オレ</sup>からすれば、蠅も当然よ」

ギルガメッシュの宝具、王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）から射出される武具ならば

間抜けなハサンのような、豹変した魔獣の一撃を喰らって傷を負うなどと言う愚行を

犯す事はない。次々と射出される、魔に関して天敵とも言える剣や槍に矢など射出していく。

小鳥は、その轟音と共に迫って来る武具を偶に回避するものの殆どは着弾する。

だが、簡単には消滅しない。フラフラと飛行は一定でないものの不規則な軌道で奇跡的に

アーチャーの宝具を多段に命中する事なく段々と距離を詰めよっていく。

（チツ……エアを使うか？ いや、このような鳥一匹に我の秘宝を晒すなど一笑に附す）

彼にとつて、このようなもの余興にもならない。今この自分の眼前で悪戦苦闘を続ける

サーヴァント達どれ一つとて対等なものはない。キャスターと殆どが誤認する

バーサーカーとて、少しの嫌な予感が容易に攻撃する事は制止しているが完全に脅威とは

見なしてはいない。最強は己のみと自負している。そして、彼の関心は目の前で宝具に撃ち落されるが時の問題である

小鳥よりも怪物と英霊が混戦する中心で何をするでもなく佇んでいるバーサーカーの女性に映っていた。

一見すれば、ただ無表情で生氣なく全てのサーヴァントや招来した怪物達を見つめてるだけだ。

だが、注意深く観察すればその一挙一動を見逃してない事もわかる。

クリスタルで出来たかのような透明な視線がこちらに向けられる。

全世界を統べる王を自負する彼からすれば、対等でありもしない生



き物が自分を見る。

それだけでも磔刑百回に飽き足らぬ罪だが、それよりも気になる点があった。

千里の先すら見通す、魂の色すら理解せしめん彼の目には管理者の真実の一端が見えていた。

(あの女…… 混ざってるな)

本来なら、彼にとって『混ざり物』。例えばアイリスファイルのような雄と雌が

番う事によって産まれるでもなく、人工的に造り合わさった生物と言うのを好まない。

いや、彼の王にとって価値なしと断じた物は全て誅滅すべしと言う姿勢だが。

目を細めアレキサンドライト色の目が彼女の全体を映す。そして、彼はこう思った。

(——不思議だ。途轍もなく不潔 悪徳 汚物と感じる一方で……アレから

アレの姿から我はエルキドゥを彷彿させている)

セイバーの人となりで正史で彼は、その在り方から生涯の友の面影を見出し求婚に至るまでの

執着を見せた。

だが、今のアーチャーはどうであろう？ バーサーカーの何を以て朋友の存在を見出したのか？

「キリヤ」 —……Ar……thur……

英雄王は、剣でなく言葉での問かけをなすと言う。彼を知る者からすれば極めて稀な行動を

出しかける前に、異変は起きた。セイバーと対峙する、銀河の髪の毛の乙女から異変が。

それが彼と彼女が互いの理解を遅める切っ掛けとなる。

全ての歯車は回っていく 恐怖へと あの直ぐ傍にある地獄の火に連なる道へと。

それをL o b o t o m y c o o pで内と外を見守る者はぽつり

と呟く。

「……雁夜。君は召喚時、何を触媒にしたんだ」

セイバーは、飛来してくる剣を防ぎつつも。その攻防により相手の戦術を理解し

反撃の方法をようやく編み出しかけた時に起きた変化に目を見開いた。

手を組みつつ、黒い涙を流していた乙女は急に痙攣し体をくの字に反らす。かと思えば

背筋を針金のように真っすぐすると共に、その半身の染め上がる黒は全体を覆い……。

——A r r r r r t h u r r r r r r

r r !

それが……傷だらけの黒いプレートの騎士と成り代わったのだから。

## Tの導出

「うーん、何とも混沌とした戦場となった物だのう」

飛蹄雷牛（ゴッド・ブル）達が気性荒く、宙で足踏みする度に稲妻が軽く走り

宙へと舞い上がりライダー等を覆わんとする蝶の弾幕は焼け切り、やがて鎮火する。

その間に立て続けに巨漢の斧使いとランサーがぶつかりあい、銀河の髪を靡かせる

半身少女で半身漆黒の鬼と言える形のもがセイバーと対峙し、珍妙な鳥が命知らずに

アーチャーに躍りかかっている。

（キヤスターの宝具による大判振る舞いによって、どのサーヴァントも一進一退と

言うところか。あのセイバーとランサーと対峙する者達、単純な力量で言えば

正騎士の二人が優れておるが、相性によって拮抗しておる。あのアーチャーは

未だこの戦局を大いに崩せる隠し種がありそうだが、それを使うのを惜しんでいる

ようだ。ふむ、となれば手が空いているのは余と彼のキヤスターのみか）

「面白いつ 面白いぞお！」

ライダーは心底この場を楽しんでいた。ブリテン王のアルトリア、フォオナ騎士団の

彼の悲劇の騎士デイルツト、そして未だ正体は看破せずとも大量の宝具の担い手で

王の中の王と呼称するアーチャー。そして最後には前者二人を圧倒させる程の大規模な

召喚魔術を披露せしめた謎のキヤスターが形成させた戦場の形。

それ等すべての新鮮さをイスカンダルは満喫してた。

「なにを呑気に傍観してるんですかあ!? さ、さつさと逃走するなり  
どのサーヴァントを攻撃するとかさあ……!」

傍らで控える、彼からすればとても小さいマスターの額に人差し指  
一発の制裁で

騒ぐのを黙らせて腹の底より宣言を成す。

「ド阿呆! この征服王イスカンダルっ 古今東西の一騎当千の王  
や騎士が

集いで力と力をぶつける場において、不意打ちなどと言う王にある  
まじき事を

するまいで! それに、このような宝具を所持するキャスター。

——ますます余は欲しくなったぞお!」

爛々と目を輝かせ、彼は焦がれた瞳でキャスターと思い込む管理者  
を見下ろす。

彼にとつての正道は略奪とも言って過言でなし。一体どのような  
英霊かは知れぬが

四体のサーヴァントに怯みもせず大襲撃を繰り出したサーヴァ  
ントに対して怒りなど

覚えることはなく、むしろ感嘆と称賛が胸中に浮かんでいる。

(他にも、どうやら秘策を隠し持つてるようだしな。そのどのよう  
な色も持たぬ

瞳の奥に何を抱いてるのやら)

身を乗り出し、彼は戦場に手を出す事なく半分ほど物見雄山気分で  
英霊観察を

行っている中で。激流と言ってよい方向が幾つも変化する戦場の  
中に引き続き未だ

流れが変わる目が浮かんでいた。

「おおう!」

ライダーがどよめきの声を発する中、その光景はゴッド・ブルの稲  
光の下で行われる。

「これは……っ!」

セイバーに対しレイピアのような鋭い剣を飛来させていた乙女の

ような鬼のようなものが

合わさった存在。その黒い半身であった部分が全身を覆ったと思えた瞬間に全てが黒い霧

で覆われたかのような屈強な黒鉄鎧の戦士へと姿を変えたのだ。

気の所為だと思いが自分の名に良く似た唸り声を発しながら、その乙女の姿形であった者は

最初の対峙よりも剣呑な空気を身に纏い、未だ宙に漂っている数本の剣を無造作に両方の手に

一つずつ鷲掴みにする。剣に一瞬光が走ったかと思う束の間、その戦士の姿がブレると共に

セイバーの上空に感じる殺意。顔を上げ、急降下する黒い殺意へと剣を横に掲げる。

——ガ ギイインツ!!!

「くう……うっ！」

強い！ 繰り出した剣の重みは、全身の力を振り絞れねば脳天をかち割れそうな威力だ。

何よりもセイバーはランサーと対峙した時の攻防により、左腕の腱を切られ満足に片手の

指も動かせない状態。その状態での近接戦は言うまでもなく不利な事は伺える。

(何 よりも……い この者から感じる並みならぬ剣圧っ。受け返す、いなして斬ろうにも)

双剣がそれを許そうとしない)

「——Arrrrrthurrrrrrr!!!」

赤い神経のようなものと黒い靄が生えたレイピアが一闪 二閃 咆哮と共に振られる

予測された軌道に前以て剣を構え防ぐ事は出来ている。だが、その剛剣と息をつかせぬ

猛攻は、先のランサーとの対戦でも幾らかの消耗を負っているセイバーを着実に先にある

敗北へと近づかせている。常に自身に最適な展開をとらず直感も、このように幾つも

不利な条件が立ち並べば、立ち塞がる敗北を打ち崩すのは容易ではない。

(エクスカリバーを、放とうにも片腕が満足に使えぬ事には……!)

本来ならば。管理者という異物のない世界軸であれば、このバーサーカーは彼女に所縁深い

存在であり、それ一つであり。十数分前に敵対していたランサーの助力も得られた。

だが、今の空間では其のランサーも心臓を欲する斧使いの怪物と猛攻を繰り広げている。

目の前の戦士よりは格は下がるかも知れぬが、底を見せぬ動きで執拗にランサーへ出鱈目に

斧を振り回し、ランサーはソレを飛び業師のように掻い潜り立地を活かし街灯を盾にしたり

などして回避するものの、斧使いは枝でも折るかのように障害物を幾多もの生物を屠った

残酷な鉄塊にて、ランサーを両断せんと躍起になっている。

アーチャーに至っても、小鳥と戯れており積極的にセイバーを助ける意思は低い。

その小鳥も、数回は弱いサーヴァントなら一撃で伏す威力の宝具の武具を受けながらも

少々ふらつく程度で、未だ飛行出来る事は異常な事なのだ。傍目では少々間が抜けてるが

アレも気が抜けば恐ろしい本性が内部に秘めているのが読み取れる。だから黄金の弓兵は

他のサーヴァントを狙うでもなく、小鳥一匹に集中しているのだ。黒い戦士は、尚も自分を呼ぶように絶叫しながら遮二無二とあらん

限りの力で長剣二本の

斬撃の嵐を繰り広げる。全力で、片腕だけでも犠牲にすれば勝てる望みはある。だが、重傷

を負えば、未だ暴れ狂う怪物たちを使役するキャスターはどうするか？

(騎士として 恥ずべき事は承知の上 だが。この身を犠牲にしても、キャスターに！)

正しき騎士は、守るべき姫君の為にも。この場を切り抜ける為に、自身の正道を汚してでも

目前の戦士の手厳しい連撃に負傷を代償にしてもキャスターの中核である存在を倒す方向に

思考が寄っていた、その時だった。

パァン——！

瞬間、一つの破裂音が剣戟に混じり聞こえた。目の前の剣士の動きが、遅くなっていく。

刹那、音の聞こえたほうに目を走らせてセイバーは驚愕を禁じ得なかった。

あのキャスターが……ガンドを、この黒い剣士へと放ったかのような恰好をしていたから。

「！ はああああ あああっつ!!」

理の外の行動であるも、大きな隙を逃すほど彼女も愚鈍ではない。その隙だらけの胴体へと力強く宝剣で切り付ける。鈍い破損音

鉄が罅割れる鈍重音。

握りしめた双剣が宙に放り投げられながら、戦士は大きく吹き飛び一つのコンテナに着弾すると

共に土煙が立ち込める。手応えは、十分……だが、安心する暇はない。今しがた起きた

キャスターの狂乱とも言える行動は解決してないのだから。

「率直に、いま居る三名のサーヴァントを使役する方達に聞きたいのだが」

ガンドを動かす手は、ランサーのほうにも向けられる。だが、そちらもランサー相手でなく

自分が招来した斧使いへと魔力を込めてるであろうガンドが放たれた。

彼もまた、少し驚きを表情に浮かべるも。直ぐに真顔に戻り斧使いの胴体へとゲイ・ジャルク

ゲイ・ボウの魔槍の刺突の嵐を見舞って、無銘の斧の担い手の戦士を別方向に吹き飛ばす。

ここまでくると、過ちで自分でなく戦士に動きを阻害する呪いを帯びた弾丸を放った訳でない

と理解できる。この女は 私を助ける為にガンドを行使した事を。

セイバーの軽い呆然を意に介さず、彼女は無表情に未だ動かない黒い鳥が忙しなく多数の

複数の黄色い眼球をギョロギョロと動かしているのを横目に鋭く見遣りつつ。

困惑顔のアイリスフィール。頭上で軽く狼狽えた様子で観戦していた

ウェイバーに視線を向け淡々といった口調で質問を投げかけた。

「二昨日の事だ、深山町の住宅街で起きた一家四人殺人事件。

これに関与してるかどうかだけ聞かせて貰いたい」

穏やかでない内容だ。セイバーは、剣の切っ先を土煙のほうから管理者へ変えて告げる。

「愚問だ、キャスター。我がマスター及び、このセイバーも 異邦の下々の民に

悪戯な殺生を施す真似、一片の欠片とて意思も行為もない」

その胸を張つての宣言に対しても、管理者もとい彼女は何一つとして反応しない。ただ

アイリスフィールに目線が向けられている事から、セイバーは自ずと彼女が自分に対しての

回答を全く耳に貸す気はない事を遅まきに知る。それに怒りを覚えるより先に、残るこの場の

マスターからの返答が生まれる。

「いえ、キャスター。その事件に、私達は関係ないわ……私もセイバーも、一昨日は遠い外国で

過ごしていたもの。この日本に到着したのも今日、いえ昨日の深夜



になるわ」

その言葉に、彼女が微かに納得するように顔を上下に揺らす仕草を見て取って。やはり、この

サーヴァントが他のサーヴァントの言葉を聞く様子がない事が解る。

『……キャスター。きみが何故そのような出来事に対し、この場の参戦者たちを挑発してまで

問うのかは理解しかねるが。その質問に対してはNOと、このランサーのマスターは

答えさせて貰うとも。私も、この極東の地に降り立ったのはつい近日なものでね。魂喰いなどと

いった美しくもない行動をするほど、困窮の身ではない』

「わっ 私だって同じだ！」

魔術のよる遠隔の声の発信。ロード・エルメロイの声に、彼に苦手意識が根強いウェイバーも

負けない調子で白衣の女に返答する。憎らしい学問の師に少しでも弱味は見せぬとばかりに。

そうか、と小さく呟く管理者はそれより先の動きを見せず召喚した未だ残る怪物達を戻したり

する気配を見せない。それにアイリスフィールは未だ何とか穏便な口調で告げる。

「あの 納得して貰えたのなら、アレ等を戻してくれれば嬉しいのだが」

その言葉に、彼女は静かながらはつきりとした口調で告げる。

「不可能だ。アレ等アブノーマリティは收容から解き放たれてしまえば、活動不可能な程の

ダメージを与えない限りは自身の意思で戻る事はない。

……一応、全体を戻す術はある。だが、そちらのサーヴァントと言える者達の干渉でこちらも

余儀しない負荷が生まれた。よって全体を收容するにしても、約十分ほどの時間は掛かる」

その言葉に、マスター サーヴァント含め、驚きや顔の顰め 不適な笑み恐怖などの

散りばめた多くの表情が彩られる。

その中で一早く復帰したセイバーは強く声を荒げて言い返す。

「負荷、だと?! 勝手な! 我々が何をしたと!」

『ふむ。宜しければ我々に通ずる釈明を願いたい事だね? キャスターよ』

セイバーの言葉に、一切の無言を貫く様子を遠方より観察するロード・エルメロイは

この管理者の性格、と言うよりもサーヴァントに対して冷徹である事を察して積極的に

質疑応答を投げかける。それに対する回答は早かった。

「理由は多々あるが、強いて言うならば。そちらの使役する存在の精神汚染だが」

『成程な……だ、そうだが? ランサー。誉れ高き騎士と言う割には、随分と』

この私に労力をかけさせる真似をしてくれたものだな』

「……っ返す言葉も御座いません」

思い当たる節がない訳でなく、生前も呪いと言える黒子で散々な辛苦を味わってきた故に

眉を軽く震わせ、デイルムットは今代の仕える主へと謝罪の意を唱える。それに対して

溜飲が下がるまではいかぬものの、ケイネスはこの管理者の素性が幾らか推察出来ていた。

(女性。そして召喚魔術に長け、多くの魔獣や魔道に堕ちている剣士と言えるものも存在する。

今まで目にした所、ソレ等は全てが負の指向性を依つてる所を見ると……成程。

——見抜いたぞ キャスターの真名を)

時計塔の一級講師の人物が、何かの得心をもった頃合い。そこで、大きな破碎音と爆発が

近くより起こり、居合わせるマスターとサーヴァント達の視線がそちらに向けられる。

「——ちっ、よもや我が<sup>オレ</sup>ここまで雑種共がいいように虚仮にされるとはな」

輝く黄金。逆立った同色の髪の下に怒りで形成された眉間の皺と燃え滾るような光が眼孔に

覗かせている。黄金色の籠手が指を鳴らすと共に、その光の門から幾多もの武具が覗く。

その彼が留まる鉄柱の下では、ピクピクと痙攣する小さな鳥が目に付いていた。罰鳥は

彼に喰らいつこうと肉薄する距離まで飛行は成功したが、如何せん地力が違い過ぎた。

全てを統べる王として、頂きの上にいる自分が場を制する事なく名も不明な貧弱な女に

戦局がとって変わられた事。その女の使役する鳥が目の前を邪魔立てする事、どれ含めても

未だ自身の友の面影、いや残滓とも言えるものが何故かその煩わしさの元凶から漂う異質さ

含めてギルガメッシュは怒りを覚えていた。  
正しき世界軸との異なりは流れを大きく変えていく。本当なら、この

流れでアーチャーの  
マスターである時臣は令呪に願い、彼の怒りを収めさせ撤退する筈

だった。自身の  
サーヴァントが宝具を開帳し、そのアドバンテージを失う事を恐れ

るが故の魔術師として  
リスクマネジメントを考えた故の行動だった。だが、いま居合わせ

るキャスターと皆から  
思われるバーサーカー、管理者Xの存在が彼の方針を変えさせてい

た。  
（あの赤い頭巾の狂戦士以外に、蝶を模した異形……半身乙女半身怪

物で変化可能の戦士

ハサンの一人を瞬殺する事ができる魔鳥と正体不明な夥しい眼球を宿す鳥。

心臓破壊を発動として活発に戦闘可能なゴーレムと共通性が全くない怪物ばかり)

(更に凜になそうとした調略行為……これに、間桐の翁が絡んでるとするならば危険だ)

(あのバーサーカーの宝具は底知れない。もしかすれば、彼の英雄王と言えど敗北を喫する

可能性が出て来た以上ここで終焉を確定させる!)

遠坂邸にて戦場を見守る時臣は、バーサーカーに対する危険視を十分に分かっていた。

例え、この場で未だ姿を見せぬキャスターと対峙すると。アサシン陣営と自分が

同盟しているのを半ば暴いた存在を許容する事は出来ない。アレは危険すぎる芽だ

早々に摘みとらなければ、盤石と思えた自身の勝利が危ぶまれる！  
遠坂時臣は、アーチャーの行動を黙認したのだった。

「ま 不味い不味い不味いつ！ ライダーっ アレっ」  
「ふむっ……ありやー心底怒ってるようだぞ？ キャスターよ」

ギルガメッシュの宝具 ゲイト・オブ・バビロン 王の財宝。

バビロニアの宝具、原典を取り揃えた彼の財は底を知れぬ。その圧倒的な質量を本気で

射出すれば、どのようなサーヴァントとで五体満足で戦闘続行する事は困難だ。

セイバー・ライダー・ランサーが結集しても、このずば抜けて他のサーヴァントを凌駕

する無数の宝具を雨あられと降らすアーチャーに劣勢の目が見えていた。

(状況は芳しくないのお。セイバーは負傷し、あのアーチャーにはフィオナ騎士団随一と

言われるランサーにしても、あの宝具の弾雨を凌ぎきって対峙する

のは中々骨が折れるだろう。

余の宝具を開帳するのも決してなくはない手だが)

聖杯戦争、見聞きするに二戦目にして未だ他のサーヴァントの全身全霊の力を目にする事の

ないままに、ライダーは彼自身の切り札と言うものを見せるのが乗り気でなかった。

(とは言え、ヴァイア・エクस्पugnateイオ遙かなる蹂躞制覇は何度も連発できるもんでも

ないし、小僧の事を考えれば。あの何かを秘めているアーチャーに同乗させて攻め込むのは

如何なものだしな……はてさて、この局面で打つべき手は)

(どうする? ストライク・エア風王鉄槌は一度だけ放つ事が出来るのみ。同じく

エクススカーバ約束された勝利の剣も、ランサーによって傷を生じた今では

令呪の援護でもない限り放つ事は出来ない)

いま此処で逃走を選択して無事に逃げ切れる可能性があるとするれば、音速にすら到達が

可能で遠征できるゴッド・ブルを持つライダーのみ。

セイバーは左手の腱を切られた事により、宝具の真髓たるエクスカリバーを解放出来ず

遠距離戦として適用出来る技は一度のみでありアーチャーの限りない宝具の射出を

止めるには余りにも役不足。

近接戦以外では遠距離の戦闘に長けるアーチャーと相性悪いランサーは言うに及ばず

この目に映るものが自身のサーヴァント以外は敵陣営と言う場面で、彼のマスターが虎の子の

令呪を使用してまでアーチャーの撃破に熱意を注ぐ事はない。

船頭多くして船山に登ると言うものではないが、この怒れしアーチャーが次の瞬間には数多の

宝具に物言わせての蹂躞戦を繰り出そうとするのを止める手段を持つサーヴァントが状況や

背景の事情も相まって乏しかった。緊迫下の中、一人の溜息が非常

によく響く。

「ビナー確保の為に、余り使用する気はなかったのだがな」  
スツ——

「Special Work／特別作業 F01—69

Der Freischütz（魔弾の射手）」

動いたのは、Xだ。彼女は水平に片手を掲げると同時に円形の独特の魔法陣が彼女の隣に

生えて、普通のサーヴァント招来よりは控えめな光の奔流と共に新たな人外が出現する。

他サーヴァント達の警戒や興味の色々の監視の中、出てきたのは管理者よりも長身な

青い大きなクロークを纏う、軍服らしきもの以外の露出してる体の部位は銀河の髪をした

外見の少女の半身と同じく全てが黒い影らしきもので構成されていた。一番目立つのは

その腕に掲げた平均男性ほどのサイズはありそうな禍々しいマスケット銃だ。

「——Request（依頼） Freikugel（魔弾）」

ヴウン——

「むっ!？」

全体が黒い影の射手が両腕を動かし、マスケット銃を立ち撃ちの姿勢で構える。

すると、艶やかな色の魔法陣が銃口の先端から小・大・中・小と言うサイズで産まれる。

それだけならアーチャーも警戒はしても意識を揺するほどの衝撃はない。彼が目には

したのは自分自身の直ぐ目前にも出現した同様の蒼い魔法陣を見た。

出現させた女の言葉の内容。魔弾の射手、魔弾 銃口に連なる魔法陣……となれば!

「ちいっ!」

——ズガアアアアアア——ン!!

おのれ! と睨みだけで人を殺せそうな視線に罵りを乗せつつアーチャーは跳ぶ。

刹那 その彼が乗っていた鉄柱の先端へ轟音と共に青きポータルとなる魔法陣から管理者の側で構えた魔弾の射手のライフルの弾丸が藍色の光の奔流と共に空間跳躍

しながら発射され、まるで点火し終えた後のマッチ棒のように鉄筋は其の頂上部分を

蟻細工のように半ば溶け、そして倉庫街のテナントの幾つかが円形一直線の穴を

一瞬にして作り出したのであった。

超高度な魔術、空間転移による障壁などを無視した貫通力に長けた射撃。

「貴様あ……!」

大地に降り立ち、わなわなと眉と唇の端を震わせつつもアーチャーは彼の持ちたる

黄金の門からの宝具の無慈悲なる連弾を行わない。

単なる直線状の破壊力ある遠距離射撃であるならば問答無用でギルガメツシュは

舐めた威嚇射撃を放ったXを、他サーヴァント諸共宝具で虐殺する事も出来た。

だが、彼女が放ったのは『タイムラグがほぼ無い空間転移での魔法射撃』だ。

何処からでも、やろうと思えば自身の脳天に照準を合わせるようにポータルを生んで

狙撃出来ると言う事は、鎧や宝具の盾を展開する意味がなくなる。

ゲート・オブ・バビロン

王の財宝に集中すれば、再度あの距離を無視した霊基の大部分を

破損せしめる魔弾が襲う。やろうと思えば宝具を展開するフェイントで魔弾を誤射させ





土煙が晴れ、そこから黒鉄のソールレットが近代のアスファルトと打ち鳴らされる

ガシヤンガシヤンと言う音が段々と音量を増幅していく。誰かが、それに声を上げた。

「まだ動けるのか！」

黒いフルアーマーの文字通り狂戦士を体現した存在が固まるサーヴァント達のほうへ

近づいて行く。セイバーが全身全霊で剣で叩き飛ばした時の影響で持っていた双剣こそ

消えていたものの、その体から立ち昇る常軌を軽く逸脱させた異常な執着とも称せる

気配は微塵も薄らいではない。その姿を認識してウェイバーが震え声で呟く。

「あの、さ……さつき見たいにガンドで動きを遅くさせて、ここにいるサーヴァント

全員で袋叩きにして倒すって言うのは」

「移動減速弾に関しては残弾は保有している。然し」

Xはウェイバーの独り言染みた提案に対して返答しつつ、再びガンドの姿勢に移り

ダメージは未だ幾らかあるのか突進こそしないものの余力ある前進をする黒い霧で

覆われた戦士めがけ発砲する……が。

「A r r r r r r r r r r r t h u r r r r r r r r r r r r r r r ツツ  
!!!」

黒き鎧の戦士は、その兜から僅かに覗かせた赤い光を強めると共に。近くにあった

ランサーと斧を結び合った最中に切り払い転がっていた街灯の柱。重機でもなければ普通は上げる事も出来ない鉄柱をサッカーボールでも蹴るかのよう

蹴り上げて掴むと同時に、Xが指先から放った小さな光の弾丸はシャボン玉でも払うかのように一瞬にして戦士が握ると同時に魔

力の籠った武具と化した

鉄棒の裂帛の気合一閃の掛け声と一振りで掻き消されたのだった。

「やはり、O—O1—73のA S w o r d S h a r p e n e d  
b y T e a r s の変化を見るに、変質した

アレは幻想・物理限らず手元に持った道具をE・G・O W e a p  
o n として扱えるらしいな」

「おっ おっ 落ち着いて感想を述べてる場合ですかあ!?

どうするんだよっ。お前、いやっ そちらが召喚したサーヴァント  
だろお！」

白衣の研究者の、無機質に述べる感想にウェイバーは激しい口調で  
責める。

彼の恐怖や困惑は尤もなものだ。死を身近に感じさせる絶対的な  
貫禄を宿す

アーチャーだけでも未恐ろしさを感じてたのを我慢出来たのは、横  
に同等の存在感と

風格を担うライダーがいたからだ。だが、今や状況は二転三転と  
なつてキヤスター

らしき女が呼び出した魑魅魍魎の数々が気が抜けば襲い掛かりか  
ねない状況。

それに、あの得体の知れない無骨な黒靄の戦士が突撃してくればど  
うなる？

これ幸いとばかりに、今度こそ彼のアーチャーは満を持して溜め込  
んだ憤懣と共に

その数々の伝説の武具を降らしてくるだろう！

セイバー、ランサー。居合わせるマスターも近づいてくる脅威に覚  
悟を決める。

対して、ソレよりも別のものに対し観察者は余念なく目を光らせて  
いた。

——そして、遂に『時』が来たのだ。

彼らに、招来してから全く関知する事なく。動きを見せる事のな  
かった影で繕ろわれた

ような色合いの球体で出来た鳥……大鳥は。

ギョロ                      ギョロ                      ギョロ

ギョロ                      ギョロ                      ギョロ                      ギョロ

ギョロ

ギョロギョロギョロギョロギョロギョロギョロギョロギョロギョロギョロ  
ギョロ

ギョロギョロ                      ギョロギョロ                      ギョロギョロギョロギョロ

ロギョロギョロ

ギョロギョロギョロギョロギョロギョロギョロギョロギョロギョロ

……

——ギョロ

「永久の平和のために」

” For the Perpetual Peace ”

瞬間、その港に面するマスターとサーヴァント以外は無人の倉庫街の一角は。

全て 闇に染まった。

「っ——!?!? この闇は……っ」

全てを埋め尽くす光なき一色の暗闇。何の前触れも危険を感じさせる直感にも

引つかからなかった。保有するスキルによる視覚妨害の遮断の効果も活きない。

(これも、キャスターの仕業か? いや、考えるよりも先に)

「アイリスフィール、直ぐにこの戦場から。……!?!? アイリスフィールっ!」

(居ない!? 何処へ……っ)

セイバーは守るべき姫の居所を見失っていた。先ほどまで、直ぐ背後へ控えさせていた

白き乙女は、大鳥の眼球が全て一か所に定まったと同時にその中心から広がった暗黒に

よつてアルトリアと引き離されたのだった。

幾ら叫べども、闇の中は静寂である。セイバーは一瞬の迷いの後に風の鞘といえる結界

を解除し、エクスカリバーの本身を晒す。

(我が聖剣であればっ)

闇と対成す光の剣。アーサー王を語る上で欠かせぬ象徴、幻想の最強格。

予想した通り、その聖剣から零れる発光は一片の光なき闇を薄めてセイバーの周囲にある

視界を大きくクリアにしていく。

(よしっ。これならば直ぐに、貴殿を見つけ出し脱出も可能)

この混沌と化す戦場にて、明確なる勝利の花を咲かすのは相応に代償強い。

何より、守ると誓った仮なれど大切な姫君を。この異質な怪物達が蔓延る空間内で立ち往生

させる等、幾つ命があっても足りないものだ。決して小さくない傷は負ってしまったが

この五体は未だ十分に戦場で武技を繰り広げられる。そう、生きてさえいれば……!

……………Ar……………thur……………

ゾク と、背筋に走る悪寒。

振り向いて見えるは、この倉庫街で何度もつい先程まで耳にしたノイズ、そして不気味な朱光。

迂闊だった。彼女の宝具は、闇の中で一点に輝く太陽に等しくそれだけで、この戦士にとっては

とても良く慣れ親しみ、そして幾度も目にし 背けたいと思ってい

た輝き。

聖剣の輝きの中、浮かぶ闇と同化した騎士が魔力で形成された血管のようなものを生やす鉄棒を

構えて近寄るのを、僅かに目を伏せ小さく声を紡ぐ。

「つ申し訳ありません、アイリスフィール」

少し、貴方の元へ馳せ参じるのが遅くなりそうです。

心の中で謝罪を述べながら、唇を噛み締めつつ。セイバーは、何度目かの激闘に身を投げた。

「セイバー……セイバーっ！」

怖い 怖い。まるで、この世界から全ての人が居なくなり、独りぼっちになってしまったようだ。

真冬の凍てつく風を凌ぐ防護服も、ある程度の害意が秘めた魔術の遮断も。この音も光も

何もかも吸い込んでしまったかのような闇の前では力を失せてしまふ。

(寒い まるで……切嗣と会う前の頃のように)

アイリスフィールは肩を抱きしめながら、その一点の光なき空間で脳裏に過らせたのは

アインツベルンの城にて産み落とされた頃。まだ心と言うものは出来上がらず

ユーブスタクハイトの手足となり動いていた時節。あの時の自分は、この闇のように手を伸ばしても虚空しか掴めない寒々とした空間を往來していた。

(駄目 思考を停止しちゃ。とにかく この闇から脱け出さない)

このまま自分が何も出来ず倒れば、自ずとセイバーのマスターでない事が暴かれる。そうなれば

切嗣の身に新たな危険が降りかかる。キャスターの助力が得られかけた機会もあつただのだ

あのサーヴァントはライダーにランサーのマスター、そして自分の言葉にも耳を貸す態度は

とってくれていた。なら、手を結ぶ事も出来るかも知れない。

彼女は、ただ切嗣の為に。愛する夫の少しでも助力になる為にと重い足を動かす。

だが、行けども行けども闇の迷宮ともいえる空間の出口が見当たらない。

どうして？ この倉庫街はこんなにも広い空間だったのだろうか？

（――あ ひかり）

段々と気力が薄れ視界が完全に0に近づいて行く中で、ふと遠方に小さな灯が見えた。

普通なら有り得ない。こんな光を、希望を、生きようとする輝きを呑み込もうとする

ブラックホールのような暗黒空間内に一つとして明りが点くなど。どう考えても

誘蛾灯のような罠であるに関わらず、自然とアイリスフィールはそちらへ近づいて行く。

（良かった、これで この闇から脱却できる。

待ってて 切嗣、イリヤ すぐに 私 帰るから……）

ガシッ。

その時、力強く自分の手首を握る感触が唐突に走った。

ひっ、と短く悲鳴をあげつつ反射的に振り解こうとするが。アイリスフィールを握る手は

決して緩める事なく、その闇の中に一つ揺れ動いている光と反対方向に引っ張っていく。

「いやっ 止めて！ セイバー！ 切嗣っ！ 誰かあ!!」

——大丈夫だ

え……っ、と白銀の姫君は拒否の悲鳴を上げると左右に激しく動かしていた手を動かすのを

途絶える。その声は いや 聞き間違える筈は。

「切嗣？」

「……」

ただ、暗闇の中で。アスファルトに反響する靴音だけが響いた。けど その握る手の感触、僅かに見える後ろ姿も。彼女には今まで慣れ親しんだ最も

愛する人の後ろ姿に見えた。そして、掛けられた短い言葉も。

何故？ 貴方は別行動をとって、敵マスターを殺害する為に遠くに居る筈。

予定を変更したのか。この急展開する戦場に危惧を抱き、方針を変えて戦場に乗り込む

事に決めたのかも知れない。細やかな疑問が浮かんでは消えるものの、直ぐに大切な

人の手の感触に安堵して、ようやく心の中に熱いものを浮かばせる事が出来た。

温度のない極寒の中で裸でいるように、凍えかけていて血流が春の暖かな到来で

雪解けるように手足に再び熱が蘇ってくる。

決して手放しで喜んではいけない事は解っている。けど、助けに来てくれた。

感謝と、愛情の言葉を心の中で唱えながら。体の中に再び活力が戻るのを実感しつつ

暗闇が突如晴れたのを感じた。

未だ夜でありながらも、まるで何十年も外気に晒されなかつたかのように夜空でさえ

眩しく感じ、瞼を細める。

手の中に、未だ自分を守る感触が続いているのを実感し。その方向へと顔を向け

アイリスファイルは笑顔を浮かべ口を開く。

「ありがとう、助けに来てくれて。きり……」

——違う。彼女は、微笑みを形成しようとした顔を硬直させ、次に当惑へ移り変わった。

「……キヤス ター？」

闇は晴れた。そして、ようやく自分を光なき空間から引き摺り上げた人物が誰なのか知った。

黒い肩まで一房で括った髪。僅かに消毒臭がする白衣、糊が利いたスーツ。

クリスタルのような透明な瞳。決して喜怒哀楽の表情が出ない顔つき。

自分を助けたのが、思わぬ人物であり。そして、何故自分が彼女を最愛の人物と誤認したのか。

その矛盾と不気味さに戸惑う中、あの闇夜のように全く温度を感じさせぬ瞳は自分だけに

焦点を向けている。握っていた手は離されて、代わりに開かれた口が言葉を咲かす。

「君は」

「……私と同じか」

——ビュウウウイイ……ッ。

「え……」

それがどう言う意図で、どのような意味を込めての言葉なのか理解出来ず返答しようする間際

アイリスフィール！ と切羽つまった様子で今しがたまで囚われていた闇を払って、肩を上下し

疲弊の色を隠せぬ様子のセイバーが彼女の元に辿り着いた。

「お怪我はありあせんか!? つ……キヤスターっ、貴公は何を」

聖剣を握り直す翡翠の瞳は力強く敵意に満ちている。今にも剣の切っ先を棒立ちの彼女に

当たりにかねないのを慌てて割って入る。

「待って、セイバー！ 彼女は……命の恩人よ。あの中から私を助けてくれたわ」

招来して、あの空間の形成の原因の根元となるのは管理者だが。それでも、あの闇の中に唯一

浮かぶランタンめいた光。アレは、確かあの多くの黄色い複眼の鳥



が宿していたのと酷似している。

もし、接近していたら自分はどうなっていたかと言うのは余りイメージしたくない。

その発言に怪訝な顔つきを浮かべるも、彼女は闇の中で起きた闘争の決着が未だ完全に付いてない

のを思い出すと、気を取り直して口を開く。

「色々述べたい事は多々ありますが。急ぎ、此処から離れましょう  
この暗黒が内包された一種の結界の中に、まだあの襲い掛かろうとした

戦士やアーチャーもいます。長居は無用です」

大鳥が形成した闇の中。その内部で発生する音源や光も外側からは認識出来ないが、あの黄金鎧の

サーヴァントや、荒れ狂いし黒い霧の戦士の性質を考えれば中どれ程の暴走が繰り広げてるかは

想像に難くない。この黒の結界が完全に解除される前に逃げる事が先決だ。

数メートル、その黒いドームから離れたと同時に。

——ズウンッ——！

「……不本意だが。キャスター その命、頂戴仕る！」

飛び出した一陣の影、そして二槍の美丈夫は。ほぼ無防備な管理者Xへと躍り出ていた。

その光景に至る、長針が時計の十度程を通過する前に大鳥は闇夜を形成させた。

怪物達から仲間を守る為に、その仲間達が無くなれば襲われる事がないと言う矛盾なる防衛

鳥の狂気ともいえる意思が織りあわさった黒い森の一角を産む結界陣。

今にも宝具の射出の危険があるアーチャーと、どのような道具も自身の武器に変えてしまう

黒い戦士に誰もが警戒を怠らない中で、ランサーだけは念話でマス

ターから指示を受けていた。

『ランサーよ、幾らか。セイバー及びキャスターから距離をとれ』

(? ……畏まりました、我が主)

その内容に対して何故と言う疑問は生まれるものの、召喚後から折り合いが余り宜しくない

マスターが寄りこしてくれた言葉。再び現世に降り立った彼の夢である騎士として真つ当な

生き様を果たす為にも、特に拒否するものでない彼の言葉に従った。

その後、起きたのが闇の結界だった。然しながら、その前にケイネスが寄りこした命令が

完全に闇に体が囚われる前に、その場から逃れる事がデイルットには出来たのだ。

これは何も偶然ではない。遠方からランサーとの視点のリンク以外で使い魔でも戦況を

観察している彼には。その大鳥の一貫として彫像のように動かぬ異質さに警戒していたし

蝶の異形の存在の魔術を肌で実感した事で、キャスターと思っっている管理者の招来した存在

全ての中の一つである鳥に、何もないと言う事などある筈ないと決めつけていたからだ。

黒のドームが完全に形成される前に、脱け出した彼はマスターの明敏な洞察に賞賛の

声を上げるも束の間、次の指示には言葉を失くした。

『では、ランサー。そのまま、お前はこの結界から出てくるであろうキャスターを仕留めよ』

(つ　ですが、あるじ)

『何だね？　ランサー。騎士の誇りと召喚時から言葉にしているが貴様の言う誇りとは。こうまでキャスターが呼び出した魔物の猛攻を防いだうえで尚

一対一で挑む事だとも言うつもりではなからうな?』

キャスター相手に、そのような大義を負おうなど笑止千万なのだと  
と言外に告げる

ロードの言葉に、ランサーは唇を噛み締め眉を僅かに震わすも反論  
はない。

現状、我がマスターの言葉は大いに正しい。あの斧使いの戦闘や、  
アーチャーが対軍に

比うる宝具を発射せんときも擁護して貰った故に、あの子女は自分  
等サーヴァントに

決して好意的でないものの、根っからの悪性とは思えない。

だとしても、自分の騎士道を主張したところで。相手はキャス  
ター、正々堂々と

掲げる武具を互いに主張して尋常に勝負といえないのは確かだ。

マスターの言葉は全て理に叶っている。だが……だが！

「し……しかし、あの者は私やセイバーにも助力を」

『自身に有利な状況の為に、セイバーや貴様を一時的に手駒として使  
う策略に過ぎない。』

これ以上なにか言うのであれば、令呪に命じても良いのだが？』

この今の状況は、ケイネスにとって中々悪くない状況だ。キャス  
ターが大いに

働いてくれた故に、ランサー自体の消耗も殆どないし、最優のセイ  
バーのダメージも

蓄積されている。そして、一番の働き手は今まで目にしたサーヴァ  
ント中での最弱。

セイバーとの交戦で、彼女相手に好敵手としての一種仲間意識を  
もった彼の事を

マスターのケイネスから見れば、道具が何を勝手に絆されてるのか  
と言う感想以外ない。

然しキャスターの兵相手に、幾らか連携をとったセイバーを討てと  
告げても

大いに反抗しそうな予感のあるサーヴァントだ。なら、敵対する魔  
女を討てと告げれば

否が応にも承知するだろうと、魔術師としての怜悯な理論からの命令だった。

数巡の黙考のあと、結局ランサーはその言葉を呑んだ。

これよりも仕えし忠義を向ける相手に、令呪でまで自分の心身を操られ敵を刺すぐらいなら

自分の意思で、いずれは戦争で討たないといけないキャスターに今ここで引導を渡そうと。

(完全なる 隙。どのような魔術の防護あっても、我が破魔の紅薔薇の前では)

pi pi pi pi pi pi

無意味。と唱えつつ長槍は鮮やかに紅の穂先を輝かせて、こちらに振り向く横顔に迫っていく。

pi pi pi pi pi pi pi pi pi pi

セイバーも、アイリスフィールも距離的に彼女の間合いに一瞬で割り込む事は出来ない。

アレが抱える魔物達の殆どはドームの中。魔弾の射手の招来する時間もなからう。

終わりだ。せめて痛みなく一瞬に……っ。

pi pi pi pi pi pi pi pi pi pi pi pi pi pi pi pi

——キイイイ……ン

F—02—44 カウン

ター0

驚愕を短くランサーは唱え、突進する体を止めた。彼と彼女を挟むように突如あの不思議な

形状の魔法陣が突然形成されると共に、そこから魔物と思える存在が出て来たから。

(無詠唱の召喚か?! かなりの高度な魔術を最初の召喚時から施行するとは思っていたが)

いや、注目すべきはそこではない。この目の前にいる魔物は何だ……。

赤い 赤いダリアの花。ねじれた角、腹側部に赤い大きな傷跡があり後ろ足はまるで黒い

大きなカマキリのような昆虫の節足で出来ている。

『なにをしているっ ランサー！ そのような怪物、貴様の宝具でっ』

「……駄目 です。主 私は 私はこれを討つ事が出来ません」

「これを……仕留めた瞬間に。私は生前と同じく憂き目の佇みの中で死を迎えるでしょう」

何を言っているのだと、叱りつけ令呪で無理やりにもキャスターを排除しようと試みる様は

その前に、黒いドームから上空へと飛来し a l a l a l a !! と蛮声響くと共に、最初の正騎士二人が

挑みあったのに水差した時と同じライダーの登場によって済し崩しに失敗した。

舌打ちと共に、ランサーに撤退を念話で指示するマスターに。謝罪を返しながら心中では安堵し

目線で、次回は尋常なる決闘をセイバーに願う。そして複雑な感情込めた視線をキャスターに

一瞬向け、彼は霊体化した。

「ふむっ、今宵は中々楽しかったぞ。セイバー、そしてキャスターよ また巡り合った時には、この征服王イスカンドルの配下となる事

いま一度よく考えてくれよ」

多くの出来事に魂と意識を半ば抜け落ちたウェイバーに、呆れる仕事草を交えてライダーも

立ち去る。そうして、セイバーとアイリスフィールはようやくこの戦場から拠点に戻る為にと

近くに駐車させていた場所に戻ろうとする。

だが、付かず離れず歩行音が一つ減らない事に。無言で二人は振り向き、その二つの瞳は

クリスタルで帯びた視線に対し、沈黙で何故同行しようとするのかを問いかけた。

「……申し訳ないが。宜しければ市内まで帰還する交通手段を持っているのなら

私も送迎して頂きたい」

「送って欲しい……って。貴方、キャスターでしょ？」

魔術で、幾らでも此処から遠くに行くのなんて可能じゃないと言わんばかりのアイリスフィールは

この湾岸区の港に面する場所で、多くのサーヴァントを目にし数々の衝撃を受けては

死の危険にも晒されて、これ以上動じるような事はないだろうと思えたのを

また見事にその目の前のキャスターと……いや、その内容が出るまで

キャスターと思っていた者の言葉に彼女ら二人は取り乱すのだった。

小さな溜息と共に、白衣の女性は夜風で頬に張り付く髪を払いつつ告げる。

「ずっと、訂正しようしようと思いつつも、言う機会が出る前に急変が起こり続けていたので

ここまで指摘する暇がなかったが、ようやく言えるな」

「——私はバーサーカーと言うクラスで顕現している」

……冬木市 ハイアットホテル。

外国人旅行者や、地方の旅行者なども冬木を訪れる際に宿泊施設として利用する一般及び

富豪層にも利便性が高く、サービスにおいても現代の中では充実している。

その高層ビルの最上階近くにて、ほぼ全ての家具が外国のブランド品等で構成されるか

普通の人には一目では分からぬ高度な魔術にて施された代物が点在する室内にて一人の貴人。

生まれながらの貴族と言う出で立ち、そして魔術師の最高峰に位置するロンドン塔の麒麟児。

人呼んでロード・エルメロイ。その彼は容易に不機嫌と言う表情で、傳くランサーを侮蔑を

込めた目で見下ろしながら告げた。

「良くも、まあ。この私に恥をかかせてくれたな？　ランサー。」

……して、だ。貴様がああもキャスターを消すのに　これ以上ないと

言う程の好条件の最中（さなか）で、だ。

あのような零基も取るに足らぬであろう魔物一匹に躊躇して尻尾をまいて逃げたのを

どう説明するつもりなのかな？」

幾らか柔らかい言い方ではあるが、アーチボルト家の後継者は至極まっとうに

怒りを抱いていた。もっと彼の性質が荒ければ鞭か月霊髓液にてランサーの

体に罰を与えていたであろうと言うぐらいに心中は穏やかでない。

聖杯戦争と言う魔術儀礼において、自身の許婚を勾引（かどわ）したばかりか　碌に命令に

実直に動きもせず、さらにはサーヴァント中もっとも最弱なキャスターは倒せぬと言う軟弱振り。

下手な言い訳をするならば、令呪を二画使用してでも自分の言う事以外何も消えぬ操り人形に

してやろうかと暗い思考に因る中、返された言葉は想定してたものと外れていた。

「主は、私の伝説については何処まで詳細を織っていられましたでしょうか」

「なに？　……言うに事かいて痴れ事を。この私が、召喚する英霊の歩んだ歴史に関し無知のまま

呼び出すような蠢行をするとでも言いたいのかね」

「いえ、申し訳ありません　失言でした。ならば、この名も耳にした

事がおありでしょう

——サンタリア・デ・ベン・ブルベンの名を」

その言葉に、少しでも体から発散させていた怒気を消し。側頭部を人指し指でノックして

考えてから、ソレが何を意味するか理解して 彼は顔を大きく顰めた。

ランサーに対する怒りからでなく、彼の出した問いによる真の解答を知ったが故に。

「まさか あの時、キャスターが呼び寄せたのは」

「ええ 間違いなく —— 魔猪です」

……デイルムツド・オディナ

ダウンの息子。若さの神、妖精王オエングス、海神マナナン・マクルルを育ての親に持つ

ファイアナ騎士団の悲劇の騎士。

彼の顛末と言える最後の末路は魔猪と相打ちになった事が死因の直接の原因である。

そして、何より彼らケルトの戦士には『ゲツシュ』と言われる誓約があり。これを死するまで

遵守する事で神々の祝福が得られ、破れば多くの禍が自身に降り注ぐ。

デイルムツトの数々の英雄譚と言える中で、一番大きく挙げられるだろう誓約。

その一つは『婦人の頼みを断らない』そして、もう一つは『猪を狩らない』だ。

デイルムツトは、キャスターが呼び出した？ のが魔猪だと認識した。例え、完全に姿が

猪でなくとも、当の槍騎士がその存在を魔の猪だと体と心が理解したのだ。

彼の状態に、頭痛をおさえる姿勢で歯茎を出して唸りかねない顔つきでケイネスは悩む。

(キャスターめ……まさか、ランサーのゲツシュに完全に起因する魔



物を飼つてるとはな)

こうなると、完全にキャスターは鬼札だ。宝具だけなら、サーヴァント中での実力派な

アーチャーに互角の引き合いを見せ、セイバーも劣勢に強いる戦士も保有している。

そして、今度はランサーの完全なメタと来た。どうあつてもケイネスとしては早期に

キャスターには脱落、願わくば他サーヴァントも道連れにして貰いたいのが実情だ。

「……ケイネス。今の状況になった事に関して、ランサーには何の咎もないわ。

そう責めるのは可哀そうじゃなくて？」

彼にとつて、ランサー召喚時から頭を一番に悩ますものが側に立ち。それを顔に出せず

悶々としたものを抱えつつ、横目で自分のフィアンセを見遣る。

「ああ、わかつているとも。然しながら、ランサーのゲツシユを幾らでも取引材料として

優位にキャスターが立てる今。あの時に、セイバーやライダーが阻害するリスク抜きに

魔猪を無視しても倒せなかったのはな……」

「けれど、そうしなかったからこそ。今ここでランサーは健全と舞い戻る事ができたのよ。

戦局を冷静に見据えて動いてるのは、彼よ」

(ソラウ……君は解ってないんだよ)

一体どこで歯車が狂ったのか。あの小憎らしい弟子から聖遺物を奪われた事もそうだが

セイバークラスが既に埋められていた事、そして、よりもよつて召喚したのが乙女を

魅了する呪いの黒子を宿す、このランサーだった事だ。

全てが順風満帆だったと言える時計塔での生活から、この大規模な聖杯を勝ち得る為の儀式

へと赴き、アーチボルト家9代に大きな華を自身が添えようとした  
行いの何処に暗礁へ

乗り出す所があったのか？ 魔術師が功績を築き上げる為に、自身  
がしてきた今までの

行動には何の不備もなかった筈。そう……私の行動に過ちなど無  
いのだつ。

(そうだ、ああそうだと。此度の聖杯戦争と言う大掛かりな魔術  
儀礼とて、この

ケイネス・エルメロイ・アーチボルトからすれば茶番も当然。全て  
のマスターに我が

ロードの洗練されし魔術の妙技を見せ付け、屈服させ。最後に我が  
サーヴァントが抱いてる

であろう凡性な欲を解消させてやり、消せばチャームの力も消え  
る。

そうすればソラウの変調も無くなり、所詮これまでの蟠りは胡蝶の  
夢であつたと知れるとも)

彼は誇り高い。だが、誇り高きは傲慢と等しい。彼女に向ける確か  
な愛も、その自身が培った

驕りとも言える自信が邪魔し、真摯に向き合わなくてはいけない人  
物と向き合えずにいる。

本当なら、その夜にでも放火を報せる電話が鳴り響いた。そして、  
この時空でも電話は鳴る。

「ええ……ああ、私がアーチボルトだが。……………なに？」

……………宜しい。勿論こちらのサーヴァントは引き連れていくか、  
それは構わんかね。……………ああ」

カチヤン……………

「どうしたの？」

電話での会話をするにつれ、段々と普段の面白味もない静かな昂然  
を帯びた夫の様子が

何やらきな臭さと調子が崩れるのを目にし、ソラウは尋ねる。

それに、受話器を置いたケイネスは珍しく齒に衣着せぬ様子で。

ゆっくりと自分自身にも

整理を付ける様子で呟く。

「……バーサーカー陣営が同盟の打診に我々の元に訪れたと言おう」

……正史は崩れていく。不純物（X）が、段々と世界にその存在を肥大化させて

本来の流れを、もっと別の もっと異なるうねりの中に。  
そして……。

「ガキ 側を離れるなよ……っ」

「キハツ キハハハハッ！ 想定外！ 想定外

!!

面白い 最ツツ高に面白いわよ 貴方！ 狂ってる

狂ってるのに

狂いきって180度廻ってとっても正しい人類の味方さん！

もっと もっともっと楽しませてよ！ このフラン

チエスカを!!」

世界は狂っていく。本来起こり得ない筈の異物は、更なる異物を呼び寄せていく。

## 波風

管理者たちの激突、それより遡る事数時間前。人々が大通りを行きかう中で発見した

ビナーを管理者が追跡していた頃。

海浜公園では、陽射しで反射する海を無表情で見つめる桜と仏頂面のゲブラーと言う

対比した顔の二人が仲良くベンチで相席していた。

出来ればビーチのような砂浜のある場所に向かえれば良かったかも知れない。だが

冬木は温暖な気候とは言え、2月も経てばクリスマス近い時期に泳ぐような無謀な

事は出来ないし、平穏な水面下で戦争が行われてる中で人気のない海を屯するのは

命知らずでしかない。少しばかり異色な組み合わせを、物珍しそうに見る人々を無視

しながらゲブラーは途中で買い込んだ握り飯などを無然と頬張っている。

「お前、何時までじーつと海を見続けてる気だ？ ……チツ」

たまに、彼女は少し痺れを切らした感じで。横にちよこんと座る少女に質問するものの

言葉は返されず、それに苛立ちを募らせた破裂音が生じる。

少女は 桜は海の水面を見つめ続けながら。これまでの事を思い返していた。

お父さん、お母さん 凜お姉ちゃんと私で四人で暮らしてた頃、幸せだった頃。

ある時、お父さん……お父さまに言われて間桐の家にお世話になるようにと言われて。

自分が別の所の子供になると言う事を聞いて、ただ悲しみが込み上げて お姉ちゃんと

抱き合って涙を流して。でも、本当に自分が別の家の子供になると

言う事に実感湧いてたか

と言えば、嘘になる。多分、また何かの拍子で戻れると言う幻想があった。

それが崩れていく楔となった出来事は、やっぱりだけど　あの蟲蔵に入った時。

痛かった　苦しかった　辛かった　怖かった　助けてほしかった

沢山の痛み　苦しみ　どうして自分がこうなるのか分からない何で？　と言う沢山の

わからないって言う理解不能の嵐が、体中にアレが這いまわっている時に感じた。

胸の奥底から、段々と何かが削られていく。私の中から何かが消えていくのを感じながら

思い出せる頃には鏡の中の私は今のように紫色の髪をして、こんな目になっていた。

突然、私は幸せだった頃から地獄の中に突き落とされ。また、突然その地獄から

引き揚げられた。いや、そこは天国なのか？　別の地獄なのかも知れないけど。

沢山の怪物が閉じ込められてる場所。みんながみんな、その怪物が外に飛び出さないように

餌をあげたり、あやしつけている。私は、そんな場所の偉い人の側に世話されている。

ずっと、私は流されるままに生きている。何もよく解っていないままに、流されて。

これから先もずっとそうなのだろうか？　桜は、成り行きのまま自分には抗う事の

出来ない力に押されて、そのままお人形さん見たいに偶に乱暴に扱われたり、大事にされたり

するのを延々と繰り返すのだろうか？

「——な訳ねえだろうが、ガキ」  
顔を上げる。

私が初めて出会った、多分 とつても強い人。何があっても決して諦めず、強い火のような

光を目に携えている人は、私の心の声を聞けたように返事していた。

私は自分の考えを口にしてただろうか……？ 桜が疑問に思う束の間、彼女は苛々とした

口調を隠さぬままに、見下した視線で言葉を続ける。

「なに考えてんのか知らないが、顔に出てんだよ。このまま自分はずーっと無力で

振り回されっ放しなんだろうなーって思ってたのがよ」

顔が近づかれる。灰色と褐色のオツドアイが自分を見透かすように覗き込んでいる。

「お前が無力なのはな、ガキ。お前自身が根っこから何も自分を出来ないって諦めてるからだ。

する前の初っぱなから諦めてりや、そりゃ無力だろうよ。

他の奴からすりや、可愛らしい人形と変わらなくて手間暇かからなくて気に入られるだろうが

私はお前みたいなのが大嫌いだ。

本当に挫折するのは、お前が立ち向かって立ち向かって、何度も失敗して失敗して

失敗の原因を探って改善して、最善だと思える場所まで突き詰めても無理だって感じた時だ。

けど、それもしない内から お前は自分に対して諦めちまつてる」  
「ご苦労な事だぜ、と彼女は侮蔑を隠す事もないまま食事を続ける。

「ねえ」

「あん？」

「じゃあ何で。貴方は諦めないの？」

「何で？ 逆に聞くがよ。諦めない事に理由が必要なのか？」

その言葉に、桜は少しだけ考え頭を横に振る。そうだと、彼女はペットボトルの飲料水に口つけ

終えてから答えを返す。

「簡単に言うとするりゃあ、私は諦めるのが大嫌いだったからだ。生まれながら負けず嫌いだった。くたばるまでずっとな。

何の落ち度もこっちに無いのに、自分が負けるって感じる事は特にだ。

事情があれば譲歩もするが、それでも理不尽なら怒りが沸く。昔っから他の奴には、お前は

怒りっぽい奴だって揶揄われてたよ。それは、大人になっても変わりはしなかった。

ただ許せない。それが、私が今ここにいるまでの理由さ」

何て事のない それだけのなど、立ち上がり飲み干したものをゴミ箱に捨てるために

立ち上がった彼女を一瞥しつつ。海を再度眺める。

私が悪いの？

私が諦めたから？ お父さま お母さまと離れ離れになった事

お姉ちゃんに会えない事

毎日毎日まいにちまいにち、蟲たちに体の内側や外側もいじめられたことも全部？

私が癩癩を起こして、お父さまやお母さまに必死に離れたくないと我がままをずっと言い続ければ

変わったのだろうか。おじい様にも、私が強く抵抗し続ければ変わったのだろうか。

お父さまからは、別れる前に。どんな時でも優雅たれ 感情を乱すのは遠坂の子女として

恥ずべき事だと以前教わった時もあったけど、それを破ればどうにかなってたのか。

(何が正しかったのだろうか。何が間違ってたのだろうか)

「アハハハ 悩んでるわね？ お嬢さん」

ふと、桜の直ぐ横。ゲブラーが座ってたのとは逆の場所からソプラノ声の哄笑とも言える音色を

含んだ声が唐突に上がった。勿論、今まで誰も座ってなかった筈。

首を横に向ける。そこには、時節に相応しくない露出度が高いゴスロリちつくな衣装を纏い

足先まで伸びている白い長髪をした少女とも言える外観の姿の誰かが、桜から見て意地悪そうとも

思える、何処となく彼女の御じい様を彷彿する目でこちらを見ている。

「ねえ、卵の卵のお嬢さん。そんなーにちっちゃな頭の中で大きな悩みをいっぱい詰め込むなんて

疲れちゃうわよ？ 人生って言うのは意味があるようであつたくもつての無意味！

ああ何でもない日に乾杯！ 何でもない日に駒鳥の御葬式！

キヤハハハハ！」

何が可笑しいのか、日傘を回しながら足を激しく動かして子供か大人なのか知れない娘は

笑い転げている。桜は相も変わらず、怯えも何も見せず光なき瞳を向ける。

「なんで私が卵なの？」

「アハハッ！ 決まってるじゃないの！！ ハンプティ・ダンプティ

ハンプティ・ダンプティが塀に座った ハンプティ・ダンプティが落っこちた

王様の馬と家来の全部がかかっても ハンプティを元に戻せなかった」

チエシヤ猫のように、裂けるように口は笑みを模り。定まらない眼球の焦点は桜を写す。

磯の香りと共に、白い髪は揺れて。その裏側から骸骨模様が見え隠れしている。

「お嬢さんはハンプティ・ダンプティ。塀から転がり落ちて卵の殻も黄身もグチャグチャの

ハンプティ・ダンプティ！ ああ！ 誰がハンプティ・ダンプティを殺したの？

それは私よ キエフは言った。ああ、この文体は虫と言うべきかし



ら」

キヤハハハと童女のように無邪気に晒う。嗤う。そして、行き成り真顔になって桜を見つめ

蛇かトカゲのような目で桜を見定めるように観察して告げる。

「ああ 貴方、やっぱり良いわね。あれ等は熟すまで放っておけると言っているけれど

いま此処で、ちよつと味見しても」

——ヴウンツツ——ツツ！

言葉と共に手が伸ばされかけ、じつと動く事も、その気も意思もなく固まる桜の頭上に

一陣の突風を感じた。それと共に視界の中にいた女性は、少々愉快気に数メートル離れた

土の上で、私より上に視点を向けて唇を歪ませている。

「アハハハッ！ 良いわねガーディアンさあん。今の一撃 本気で私を殺そうとしてたでしょ！」

「ガキ ——立て」

ゲブラーは既に戦闘体勢に移っていた。纏っていたコートは何故か半分ほど裂かれ、小脇に抱え

もう一方の手に、桜のいまの居住する社内で良く目にする骸骨模様の棍棒を握っている。

赤い髪は鬨気か気迫によって重力に逆らい上昇し、普段は桜が訓練室でしか目にしない威圧が

今まで以上に膨らみ公園の常緑樹を揺らしている。

対し、少女は荒れ狂う風と赤い殺意を前にしても臆した様子は微塵もなく面白可笑しく嘲笑する。

「不思議ねえ？ シャドウトも異なるし贗作つて言う呼称が似合ってる気もするけど。

ああ、でも正式な名称を付けるなら『アルターエゴ』ね 貴方」

「ピーチクパーチク、何を喚いてやがる。

路地裏の廃棄物投棄場で飛び回っている蠅みたいな腐乱臭がするぞ、貴様」

互いに挑発しあいつつも、ゲブラーは直球に相手に懺悔のメイスを振りかざし突進はしない。

背後には守護を任された桜がいる。そして、未だ潜んでいる気配は死んでいない。

(南に4 東に3 北に4 西に5か……)

「ガキ 側を離れるなよ」

コクンと頷き、命じられた通りに硬直する桜を一瞥すると共に。その行為に軽く頷くと

メイスを普通の剣を構える上段よりも高く、頭の上に水平に構え呼吸を深く吸う。

「アハハハ！ 賢い賢い！ けど、ちゃんとして守り抜けるかしら？

それじゃーいくよお！

トロワ トウ サン ニー ドゥ イーチ ア ゼロ！」ーパチンツ！

謎の白いゴスロリの少女が指を鳴らすと共に、ゴミ箱 木々 ガーデニングされた草木の影

より、ロープ姿で顔は覆面で隠す者達が飛び出して鋭い刃物を光らせ突進する。

「――鈍い あの黒装束の白仮面達に比べりゃ欠伸が出るぜ」

ほぼ距離を開けずに、詰めながら鈍器や長物の刃物を全方位から振ったに関わらず。

彼女は一步も動かないままに、迫る剣にメイスの十字部分の先端を当てて逸らすと同時に

相手の頭部へと重い一撃を続けざまに打ち込む。工事現場で聞くような、コンクリートを

平らにするプレス機染みた音と共に、頭は碎けて少女の刺客は吹き飛び倒れる。

第二波、三波と方角や軌道 武器を変えて相手も襲撃に変化を付けるが、その変化へ

柔軟に彼女の振りぬくメイスの軌道は対応し、髪の毛一つ相手の手を触れさせない。

普通の人間なら血の飛沫が公園を惨状に染め上げるが、動かなく

なつた者達は僅かに

カクカクと痙攣した後に、手足から頭部全体へ土と砂に化す。

泥人形か、とソレを見つつ眩きながらメイスを軽く振って付着した汚れを払い落とし

まだやるのか？　と言う無言の視線を投げかける。

最初に離れた際も、気配を遮断して背後から襲ってきた相手がこいつ等だ。

一瞬行動が遅れてコートは駄目にされたが、不意をつかれた所で百戦錬磨の彼女から

すれば、どれ程多勢で来られても雑兵と言うのすら烏滸がましい雑魚だ。

「アハハハハ！　けっこー頑張って作ったんだけど、やっぱり欠片でもサーヴァントは

サーヴァントだものねえ。——じゃあ　これはどうかしら？」

少女が大きく広げた日傘を背後へと掲げる、すると何も無い筈の間だった場所に

人型の何かが戻した日傘の空間に降り立つ。それを見て、ゲブラーは軽く目を瞬かせ

本当に僅かながら驚くように、近寄る存在の名前を呼んだ。

「掃除屋だど？」

ガスマスクを被り、背中にタンクらしきものを背負った。海中探査でもするかのような

恰好をした、両手の部分が鋭利なフックで形成された異形。

鈍い呼吸音を発しながら、前傾姿勢で鈍い赤光りはゲブラーより背後の小さな存在へ

目を留まらせると、暗褐色の蛍光が強まる。

それは、対峙する彼女の記憶に馴染み深い。かつて生きていた世界で、人が変質し

外郭などで必死に生き延びようとする人類を喰い漁っていた。子供  
の肉を好む

酷く性質が捻じ曲がった人の成れの果てだ。

重量感のある大きな正方形サイズの潜水兵士はカエルのように斜め上に、その見た目に

合わぬ軽やかな跳躍と共にゲブラーに両腕をクワガタのように開き、襲い掛かる。

(後ろにガキがいる以上、回避は出来ない。迎え撃つっ！)

目前に段々と迫る、屍肉と童子の肉を好む死徒めいた同郷の敵へと懺悔の棍棒を振るう。

ガスマスクの脳天にメイスは突き刺さる。ゲブラーの渾身の力とE G Oの力を最大限まで

発揮させた一撃。地面へと墜落し長靴を履いた片足が方向違いの場所に折れ曲がりながら

彼女の胴体に鋭い赤錆で出来上がったフックが走る。

「私も忘れちゃ駄目よお？」

頭部をほぼ陥没させても尚、対峙する彼女に危害を加える意欲を薄れない怪物の背後で

何かしらの詠唱と共に少女の手は翳される。

一瞬だけ、ゲブラーには自分の体を内側から揺らすような波が生じた。そして視界が

ほんの少しだけブレて目の前の光景が次の瞬きの後に変わる。

清涼感がある長閑な空間が形成された公園内が、死臭と死肉に溢れ返る地獄に変わる。

自分の踏みしめている地面に、何処かで見た人々の歪んだ顔が立ち並び 呻きつつ

手を伸ばして 全員がか細い声で叫んでいる。助けて、と。

目前に手を伸ばしているのは、L o b o t o m y c o o pの制服を着る人物。胸のタグに

クリストファーと記載された人物が、涙を流しながら手を伸ばす。その過去に在りし接した者の姿に対し。顔色一つ変える事ないまま躊躇なく彼女は

構えたメイスを斜め下に振りぬく。信じられないと絶望に満ちた顔つきで、顔が

砕けたトマトのように弾けるのを目にしつつ、腰より下に視線を送る。

桜のいるであろう場所に、小さな煤の形をした異形が成り代わっている。その後ろから

今現在、目にする機会が多い管理人の姿。黒いポニーテールの活発な赤い瞳をした

女性が朗らかな笑顔で片手を掲げ近寄るのを目にするると共に……。

「——フツ!!」 ——ズガンツ!!

ゲブラーは、一切の容赦なく。その管理人姿の幻影を一刀両断にすると共に、煤の形をした

少女を抱きしめて前に跳ぶ。

着地すると共に、メイスの切っ先に額を思いっきり振り下ろす。辺り一面に響く鉄を

響かせたような音と同時に、視界は亡者でひしめきあう世界から本来の公園に戻り

自分が抱きしめたアブノーマリテイが桜へと変わり、そして二体の倒れ伏す掃除屋が

振り返る視界の中に見えた。それより少し先で、幻術を放った少女は口惜しさの色を

少しも出さず、むしろ本当に愉快な顔でパチパチと拍手する!

「アハハハハ!! 凄い凄いつ! アレにも耐えられちゃうんだ! でも おかしーねえ?? 霊基が低いサーヴァントでも 普通耐えるのが難しいのに」

「下らない手品ばかり披露してないで。サシで来いよ 蠅野郎」

「アハハッ! 私、野郎じゃーありません事よ? それじゃあー、もつと凄い

マジック (手品) でないイリュージョン (幻想) を見せてあげるわ!

まだ続ける気かと、鋭い傷痕が走る片方の眉間に険が深まるもの。この場から

緊急離脱は自分一人なら容易だが、腰元に佇む小さな存在を守らな

ければいけない。

抱えて逃走するにしても、この白い魔女は狡猾さと邪智深さを備えている。直接

虚を突いて形振り構わず攻撃しても、その隙に桜に何かされない保障はない。

ただ単純に逃げれば、どのような魔術と言われる この世界の科学とはまた異なる力

による追撃が来るか解らない。ならば、手段は一つのみだ。

（長期戦になろうとも、この女の手の札を全て曝け出し。種が尽いたと同時に

潰すのみだ。管理者にもどう言う訳か通信が出来ないしな）

交信遮断されてる理由は、この目の前に居る女の策略か、若しくは予想だにしない

出来事によってあちら側から応答不可能になったか、どちらかであろう。

考えるのは後で良い、どのような時もゲブラー『自分』がすべき事など変わりはしない。

アブノーマリテイ『化け物』は全て駆逐する。それが、私の生き様だ……！

茨を被る骸骨から突き出る十字架の棍棒を、何度も繰り返した動きと共に水平に掲げ構え

彼女は愚直なまでに、ただ荒れ狂う胸の火を更に猛らせながら呟く。

（助けなど期待出来ない 何時も通りだ ただ一人のみ 誰も頼らずとも活路を作る）

「来やがれ」

暴走アラート暴走アラート暴走アラート暴走アラート

様々な色の配管が天井を伝い、未来的な合金で出来た壁や床を多くの靴音が走り抜けて

いくのが周期的な緊急時を報せるブザー音に混じって廊下を反響する。

「急げ！ 情報チームの通路に芋虫が発生している！ 何？ くそっ  
安全チームの廊下にもだ!! 槍もったロボも居るぞっ」

「琥珀、それと緑青の黎明か！ つたく、厄介な時に発生したもんだな！」

「コントロールチームに配置されてるF-01-02のカウンターに減少発生！」

「エージェントを急がせてくれ！ もたもたしてたら、またアレの爆発だっ」

「T-04-50の減少値が危険ラインだ！ 上位level  
エージェントを

急がせてくれ！ 胞子をあの巢から吐き出させるなよ！」

(何だってんだ何だってんだ何だってんだっつ)

「何だってんだよっ おいっ！」

「ツルノ！ 毒づいたって事態は良くなんてなりませんよっ」

本当に唐突だった。今日も、何時もと同じように自分の事を母親か何かのように

少し上から目線で作業を命令する小言多くなってる女に付き合つて女王蜘蛛の収納室に

給仕して戻る。素直に喜びたくないが慣れた一連の作業を終えた頃に、今まで聞いた

事のないアラート音が施設全体に耳を劈くようにして鳴り響いたのだ。

泡を喰って、今まで聞いた事のない緊急警報に足をこまねいている間に、よく見知った

同僚達が、顔つきを強張らせつつも冷静に全力疾走して他の場所に向かうのが見られる。

そんな中、自分も彼女と共に手を引き連れられて走る事となっていた。良くこの

状況を知っているであろう、背を向けてる彼女に息を切らせつつ怒

鳴るように聞く。

この会社にいる職員の数割は、時々スーツ以外の妙な服や似合わないアクセサリーを

身に着けているが、今日のこいつもそうだ。鋭い嘴めいたネックレスをかけている。

あの罰鳥と言われる、見た目は間抜けな化け物を連想する悪趣味な首飾りだ。

「だからっ 何がっ 起きたって言うんだよ!？」

「暴走アラートの発生ですっ。簡単に言うと、外部か内部で異常が起きて全ての

収容室のシステムに不具合が起きてるんです!」

穏やかでない、絶対に結論は碌な物でない事を知りつつも聞いてしまふ。

「システムに異常が起きてっ ダウンとかしたらどうなるんだ!？」

「……良くて、全体の作業員の半数がアブノーマリテイに蹂躪されて死亡。」

最悪、此処も壊滅します。となると、全部の異常存在は冬木市に散らばるでしょうね。

いま収納してるのだけでも、この日本を数日で滅ぼせる力は持ってます。

いやでも、この世界には魔術師と言う方々が居るようですし。何とかなる可能性も?」

淡々とした口調が、余計に鶴野の不安と絶望感を増す。そんな事、起こさせて堪るか!

確かに冬木には遠坂家に従順する魔術師も多くいるだろうが、それでもこの施設に多く

蠢く化け物達を抑えつけられる訳ではない。目にした数は少なくとも、まだ多勢に

閉じ込めてるアレ等が日本全土に放たれるなんて想像もしたくない。

その時は、きつと世界の終わりだ。



到着したのは、とある廊下だ。この建物には、幾つか修復されていない、人は通れる程で

ない裂け目があるが、その穴から茶色い甲殻で覆われた節足の生き物が這い出て来てる。

（何が悲しくて、こんな外でも。こんな化け物虫の相手しなくちゃいけないんだよ！）

成人男性程のサイズはある、茶褐色のダンゴムシ見たいな怪物を見て硬直する鶴野の

背中をピシヤリと叩き、側の彼女は右手で指しつつ説明を開始する。

「こいつ等は、迂闊に接近すると集団で囲んで相手を捕食しようとしています。」

ツルノ、武器は……警棒しか持ってないじゃないですかっ！」

「あの管理者に、ソレしか渡されなかったんだよっ」

「……考えれば当然か。それじゃあ、私のを渡します。」

オフィサーの頃の、お古ですけど。ちゃんと使えますし」

細い手が、有無を居合わせず自分の両耳に少し強めに掴む。声を上げる前に、耳の穴に

何か嵌められた。何しやがると言う目線に、口の動きだけで耳栓と告げ終わると共に

手には鉄の感触と、鈍く銃口が光り少し手垢らしきものも目を凝らせば見える

ユメカの拳銃が手の平に置かれた。引き金を引くだけで、人一人簡単に殺せる道具。

周囲の騒がしい音が一段階低くなる中で、良く通る声の説明が耳に伝わる。

「冷静に照準を定めて撃ってください！ 大丈夫！ 大雑把でも大量に湧きますから」

何発かは当たるし、他のエージェントも直ぐ駆けつけます！」

気休めにもならない助言が横から成されながら、こんなどうしようもないパニック映画

さながらの状況に対して心中文句を上げつつも誰に訴えかけたところで結局は解決しない。

苛立ちをバネに両手を持ち上げて、その廊下を縦横無尽に這いまわる芋虫を生涯かけて

自分の心に傷を負わせてきた妖怪爺いをイメージして、引き金を引く。

予想外に銃の反動が腕に来る、耳栓も付けてなければ発砲音に鼓膜が傷ついたかも知れない。

目の前では、僅かに小さな円状の焦げ目をつけて少しだけこちらに体躯を向けた芋虫が

近づこうとしている……殆ど効いてないじゃねえか！

視線だけの抗議に、ユメカは大声で返答する。

「アブノーマリテイが、たかが拳銃一丁で鎮圧出来るのなら。とつくの昔に世界は平和

になってますよ！ 幾らかは損傷させる事は可能です！ 撃って撃って撃って

撃ちまくって、他E. G. O Weaponで鎮圧するまで撃ちまくるんです！」

側にいる彼女の激励？ を聞き流しつつ、齒噛みしながら腕に一定に伝わる振動を

押し殺しつつトリガーを引き絞り続ける。数秒経たずにオートマチックの拳銃の弾は

尽いて、隣の彼女はそれを見ると餅をつく間に伸ばされる手のように代わりの弾倉を

手渡される。それを何回か繰り返せば、腕の筋肉は攣りかけて握る銃身も焼けそうに

熱を持ち始めていた。それでも、目前の徘徊する無数の化け物の動きに乱れはない。

「くそっ！ 何とかならねえのかよ、こいつ等あああ！ 来るんじゃないじゃねえ!!」

一匹の虫は、鶴野の悲鳴を意に介さず。その体躯に全く見合わない

天井に届きかねない

跳躍と共に彼の元へ向かう。恐怖に満ちた魚が死んだような目の中で、その虫の凶悪に

ピラニアのような並んだ鋭利な歯が大きく口を開いて迫ってくるのが映る。

「——フウツ!!」　　ザシユツ

「ひいつ　ひつ……え?」

「他愛なし……おい、青海藻頭。ぼーつとしてないで援護をし続けろ。」

「その女。お前も腕が立つなら、手を貸せ」

殺される、と感じて発砲を止めて腕を交差するも予想していた痛みや衝撃は来ない。

恐る恐る開いた目の中で、全体が黒装束で董色の長いポニーテールの人物が匕首の

ような武器を構えて眼前で背を向けているのが見える……アサシン?

(え　こいつが、こいつ等が助けてくれたのか?)

又聞きで、この黒い奴等が得体の知れない管理者と呼ばれてるバーサーカーらしからぬ

バーサーカーの使役する怪物にハントされて、ここで鞍替えして自分と同じ奴隷の立場

になってるのは聞いてたが……何故、俺を?

そんな目線が強烈だったのか、少しだけ向けられたルビー色の横目は疎ましそうに

彼を見つめつつ、短く呟く。

「早くしろ。もたもたするな、私もこんな場所で無駄死には御免だ」  
その言葉に、彼も我に返った。そうだ、こいつも俺も　この訳は分からないが化け物を

世話する飼育場に居る身。これ等が外に解き放たれる時は、俺たちが全滅した時だ。

まだ目にはしてないが(決して今も未来もそんな機会は起きて欲し

くないが) 暴走に

よって施設から脱走するだけで、此処の施設半数を全滅出来る力の化け物だつていると

聞いている。それを防げるのも、俺達だけなのだ。

「っ ああ、分かったよ。やるよ やるしかねえんだろ！」

このサーヴァントも、決して彼の絶対の味方と言う訳ではない。だが、今の時点では

廊下を埋め尽くす忌まわしい記憶の中の半分を覆う存在を連想する妖怪を彷彿とする

存在を一掃する心強い仲間ではある。何度交換したか分からないマガジンを差し込んで

ハサンの統率係が切り払って転倒させたが、まだまだ動き立ち直そうとする芋虫へと

未だ殺されかけた恐怖で震える両の手に力を込めて引き金を引き絞る。

硝煙の匂いが辺りに満ちる、手の平は軽い火傷による水ぶくれが生じるものの

気を抜けば頭を齧られそうな切羽詰まった状況が痛みを感じさせる暇もない。

百貌の統率の彼女も、態度は英霊に昇り詰めるほどに至った戦歴もあるからして

気丈に振舞ってはいるが、内心では突然起きたモンスターパニックには軽い焦りは

覚えていた。話には聞いてたが、こうまで激しいアクシデントが起きるとは。

(いや、すれ違った職員達は慣れた様子ではあった。普段から、このような異常事態に

慣れ親しんでいると言う事か。そっちの新米らしい奴はともかく、側にいる女は特に

恐慌した様子はなく受け入れている様子だ)

飛びかかって来る芋虫を慌てる事なく、冷静に回避行動をとりつつ

近接も行える暗器で

適度に、囲まれて襲い掛かれるような状況に陥る事のない安全策をとりつつ攻撃を

続けていく。援護の射撃に関し威力は殆ど期待できないが喧しい声が幾らか蠢く虫達の

気を引いているのか、それと同時に白い色柄で真ん中に赤い模様のある拳銃の射線は

芋虫状の怪物の急所を的確に捕えており、時間は掛かるものの数は減らしていける。

他の場所でも似たような光景が繰り広げられていた。

「……っあ!？」

異なる三色の柄のスーツを纏う女性が、背後から迫って来る3mサイズはある赤い目

をした、体は貧相な布切れ以外は保護されていない。その布の隙間から合金と歯車が

見え隠れして、腕の代わりに槍が接続してる。貧相ながらも通常の人であれば簡単に

屠殺可能な殺戮機械から逃げていた。その機械に人を守る三原則などは身に付いてない。

あるのは、この社内にいる知能を持つ生命体。即ち人を殺す事だけがプログラミング

されている。そして、そのプログラムから逃れる鬼ごっこも終わりを告げようとしてた。

通路に誰かが、この緊急事態に泡をくって逃げる際に落としたのだろう。転がっていた

ペンに足をとられて一人が勢いよく無情に冷たい床へと体を投げだす。

残る全力疾走していた二人の女性も、その転んだ同僚の名を叫びつつ数メートルの

時点で立ち止まり、無意味な行動だと知り得た上で手を伸ばす。

「■■■■——っっ!!」

「いいいのっ……二人とも、逃げて」

転倒した彼女は、もう自分の運命は終わりだと悟っていた。自分にはエージェント

のように鍛え抜かれた力も無ければ、E・G・Oの武器も防具もギフトの恩恵もない。

所詮、自分達は会社の備品のようなものだど何故か理解出来ているのが物哀しい。

オフィサーの彼女は理解してる。自分達の産まれた世界に、救ってくれる神など居ない

と言う事を、フィクションに出てくるような都合の良いヒーローなど……。

既に頭上に聞こえる、死を感じさせる機械音を聞きつつ。絶望で暗くなつていく目先

の中で、一陣の影が見えた。走馬燈と言うのは、このような感じだったろうか？

——キントツ

目をギョツと閉じた中で、よく澄んだ鋼の反響音が聞こえた。何時まで経っても

背中に来るであろう痛みがなく、恐る恐る目を開くと。そこに黒装束の人物が長い

刃物で、緑青から出ずる鉄の魔物が振り下ろそうとした槍を受け止めてるのが見えた。

「……動けるか？ ならば、直ぐに離れよ」

本来ならば、この社内の人間達に対し義理立てして助ける理由などない。逆に

この混乱に乗じて、この施設を支える人材達を同じく暴れる怪物達に交えて殺しても

不思議でない立場なのが自分達だ。だが……。

(今は 我等は、このバーサーカーに使役される身だからな)

決して、逃げてと気丈に恐怖を必死に押し殺し。笑いかけて他を逃がそうとする女の顔に

情が沸いた訳でない。少し前に、勝手が解らず社内の規則と言うものに手をこまねいてた

時に、我等の異様さに気が引けつつも助言した者の姿に似てたから、助けた訳ではない。

(そうだ。ただ、我等が聖杯を得るが為の懐柔　その術の為よ)

「さあ、行け！」

立ち上がりながら、つつかえつつ礼を口にする女に対し鋭く告げて刃を構え直す。

刈られた百貌の草達は、今まさに誰にも語られず決して善意でないと主張しつつも

歴史に残らぬ無銘を守りし一振りの刃となっていた。

幾つものモニターに L o b b o t o m y c o o p の奥底より這い上がってくる、邪悪の

蒸気が固体と化した怪物達に果敢へ立ち向かうエージェントと百貌のハサンの光景を

冷静と緊迫と言う対比の図を顔に浮かべて管理人と雁夜は管理室で見守る。

「あの、ビナーと言う。君の管理下から脱け出した危険な奴が他のサーヴァントと

引き合わせた事で、この混乱が起きて一時はどうなるかと思っただけ

「これなら何とかかなりそうだよな？」と呟く彼を一瞥しつつ。Xは一つの画面から

段々と収容するエネルギーが減っていく数値を見つめ、こう零す。「いや　これからが本番だよ」

時計の長針が一周、三周する頃には全ての芋虫の7割が死屍累々と化し。残る数割も

ズブズブと地面が底なし沼と化すように、その中へ消えて行く。「はあ　はあっ　ぜえ……ぜ、全部死んだ、のか？」

動く姿が全部見えなくなつて、ようやく鶴野は正常に呼吸が出来た。吹き出る冷や汗

を拭いっつと、それに覆いかぶさるような残酷な事実が返される。

「いえ、地面に消えて行ったのは恐らく他チームの廊下へワープしただけです」

「ま、まだ全滅してねえのかよ!?!」

「ふう……だが、あれだけ数を叩いたんだ。もう残る数もそんなに多くは……」

「沈黙交響曲第19番」

” Silent Symphony No.

19”

ないだろう、と言い終えかけた髑髏フェイスから覗く口の動きが止まる。

ハサンの統率も、流石に疲弊を禁じ得ない吐息を出しつつ希望的観測を述べようと

しかけた矢先、不意にこの恐慌状態に似つかわしくない音を聞いた。

それは 伴奏。

遙か彼方の太古より齎されたような、肉体の奥底 血潮を奮わすような、背筋に甘い痺れを

引き起こす原始的な旋律が遠くから聞こえてくる。

雁夜も、百貌の統率も。その音の出所と意味を把握しかねた怪訝な表情を同時に浮かべるも

ソレの正体を知るエージェントの彼女だけは、今起きてる最大の危険を認知し顔を蒼褪める。

「T—O1—31 静かなオーケストラ」

何だ、ソレは? と、二人が同時に疑問に思い尋ねようとする合間に。呟いた彼女は反転し

凄まじい脚力で進んでいた通路を逆走していく。

一瞬呆気にとられつつも、見失わぬほうが良いと直ぐに判断した二人も後に続く。



スペックからして元々サーヴァントと一般人に毛が生えた魔術師  
と言う格差故に、ハサンの

彼女が数秒して猛スピードで駆ける彼女に追いつく。

「おいっ、何が起きたと言うのだ！」

顔を険しくし、鶴野へ蜘蛛の女王の世話を实演したり、他收容室の  
説明を軽くしてる時の

少々気が抜けてるような目は鋭く、普段の彼女から想像出来ない低  
い声が絞り出される。

「ALEPHクラスの收容違反です」

「なに？ それは……確か」

「例え一体だけでも、この施設を壊滅に陥らせる力を持ち合わせる強  
大な力を秘めた

——本物の化け物ですよ」

ユメカの横顔は、誇張や普段の柔らかさを投げ捨て去っていた。走  
り続けていく内に

他の彼女と同じスーツ姿で腕章を身に着けた同僚も、彼女と同じ固  
い表情で集り駆ける

のが見て取れた。鶴野は、その中で良く知る人物を見つけると声を  
かける。

「あ！ お、おいチャンっ。こりゃあ、一体……」

「ツルノっ、質問は後だ！ 今はとにかく走れ！ 携行武器は、その  
持つてる銃と警棒か。」

構わん、お前に管理者から抽出武器を渡す許可は出てないしな」

豆鉄砲でも無いよりやマシだ。と吐き捨てるように告げる彼も確  
かな解答をくれない。

百貌の統率も、気づけば自分達が集合して並走してる事に気付い  
た。だが、目線で疑問を

問いかけても、そちらも力なく首を振り状況を不確かに認識してな  
い事が読み取れる。

一体何が待ち受けているのか……？ 大きな不安を抱え、辿り着いた  
場所を目撃し絶句した。

「なんだ ありゃあ」

音符が幾つか描かれた、人よりも大きな模型？ いや、魔術で動く人形なのだろうか。

それが指揮棒を振ると共に、その中心から音楽が流れてくる。指揮者の周囲には、普段

見慣れた幾つかの顔ぶれの研究員達が、狂犬病のように横に倒れ舌を出し痙攣していたり

その音楽に酔いしれてるかのような顔をして、普段ケアしていたのだらう鋭いネイルで

首を掻き毟っていたりなど、様々な正気を逸脱した者達が並んでいた。

未だ 未だ耳栓をつけているのに、その音色だけ次元が異なるように頭の中へと流れていく。

次第に、その音色は次々と鶴野の塞いでいる暗い記憶を呼び覚ましていく。

——才能なき

——使えない 愚図が

——種馬にもならんとは

——間桐きつてのゴミ

「ぐう……あ……あ」

「気をしっかりと持ち持つツルノつ。つて……そんな発破で精神が保てるよ  
うな生易しいもんなら

俺達も、もつと楽に過ごせてたんだがなあ」

頭をしきりに掻き毟り、白目を剥く彼を。付き添う同僚が肩を揺さぶり声かけるが

直ぐに達観した顔と口調で、備えてた武器を構え直し怒鳴る。

「——いくぞエージエント！ 第四楽章が始まるまでに鎮圧を遂げるんだ！」

応っ!!! と男女入り混じった強い異口同音と共に、幾つもの明色と暗色が成すスーツの

人物達は、様々な形の槍、ハンマー、恐ろしい気配を放つ剣にボウ

ガン、拳銃を構え

突撃する。指揮者は、その軍団に対して超然と動きを一糸乱す事のない見惚れる仕草で

指揮棒を振り続ける。地中より出てくる天使か悪魔のようなオブジェが浮かんでいくのを

尻目に、職員達は少しでも破滅に連なる旋律を掻き消そうとするように叫びつつ武器を振るう。

隔離された場所で、彼 彼女等を見守る男女の内の一人は翳り隠せない顔で口開く。

「……あの指揮者の化け物が、演奏を終えたら どうなる？」

「この施設の怪物達を戻す方法は大まかに二つ。一つは収容違反した個体を長時間かけ

虱潰しに再起不能にして強引に戻す。もう一つは、この会社に付属する機能によつて

チャージしたエネルギーを使用し全てを一斉に鎮静させ元の収容場所へ強制送還する。

その後者を使用するには、一日の始めからアブノーマリテイ達から少しづつ生成される

エネルギーを貯蔵したものを利用するが、あのT-01-31と言うアブノーマリテイがALEPH

たらしめる所以はな、雁夜。アレは第四楽章まで演奏すると根こそぎ会社のエネルギーを

消してしまう。いや……演奏終了時の能力の為に、我々のエネルギーを逆に利用して

奪取してると考えるのが自然かも知れないがな」

「鎮静のエネルギーを、逆に利用？」

どう言う風に？ 不安しかない無言の問いに。管理者は静かに答えた。

「あの演奏は、葬送行進曲だ。もつとも、魂まで破損させ強制的に会社の手でも永遠に

再生出来ない場所に無理強いに送り届けるものだがな」

世の中には、結末を見ないほうが良いものもある。そう、万感の思いが込められてる

ような気がする台詞をXが述べる中で、指揮者の調べは進んでいく。

既に問題の第四楽章前、第三楽章へと演奏は突入していた。

「おおおおおおお!!!」

何度剣を振ったか解らない。何度槍を槌を振ったか、何発の銃弾を矢を放ったのか。

百貌も、疲弊は頂点の域に達していた。職員達からは、ただあの指揮者を破壊する事だけ

に集中しろと言いついてられ、後は遮二無二と演奏し続ける元凶へと狂ったかのように武具を

振り翳され他の答えは貰えずも、アレが決して善の存在である筈もなく また、それが

野放しに奏でを完遂すれば何か起きるかは、音楽と言って良いのか分からない空気を伝って

体に届く穏やかでない振動が恐ろしい前触れが 決して乗りこなす事は出来ぬだろう

大波が来る前兆を感じ取っていた。だから百貌達も、持ち合わせた武具を振るっていたが

その良く見れば少し滑稽とも思える背高のつぼのマネキンに、どれ程の痛手を与えたのか

まったく伺い知れない。普通、これがサーヴァントであれば傷の一つだって出来て当然

なのだが、この指揮者の形をしたナニカの素材は サーヴァントの暗器は確かに直撃してる

に関わらず罅も、音が途絶える兆候も起きない。

三つのオブジェ、天使か悪魔か知れぬ彫刻達が讚美歌を響かせている。

居合わせる百貌達は、かつて生前に誰しもが聞き覚えのある到来の鐘の音を耳にした。

「……まで、なのか……」

誰もなしに、そう呟くのがオーケストラの中で全員に聞こえた。いや、そう全員が

無意識に自分の口で同時に呟いてたのかも知れない。

普段の鎮圧作業なら、既に形を崩壊して可笑しくないのに依然力強い演奏は止まない。

特殊な力を与える武具の恩恵や、肉体を凌駕する精神力だけの猛攻にも限界はある。

一呼吸を入れる為にも体の力が一瞬抜ける、その瞬間を狙うかのように頭に直接針で

掻き穿るかのような鋭い耳鳴りが職員達を襲う。不味いつ 攻撃の手を止めたら……！

第四のオブジェが、産み出される。第四楽章が……はじま。

——パンツ

乾いた破裂音。それと同時に、滑らかに今まで流れていた調べが不意に止まった。

オーケストラが終わった？ ならば、能力が作動する？ いや、でも完全に舞台は出来てない。

第四のオブジェが完全に姿を見せてない事が、その何よりの証明だから。

「……ゆ、ユメカ。お前がやったのか？」

「い、いえ。私は撃ってません。鼓膜が破れないよう両手は塞がってましたし」

会話の最中で地響きが、起きた。オーケストラが、崩壊を始めていく。それで

ようやく、本当に鎮圧が成功したのだと全員に理解が追いついた。

「やった……やったぞ」

「ああ 鎮圧……出来た」

だが、何かあの忌々しい破滅の奏者を止める終止符になったのだろうか？ 最後の決め手は

拳銃に良く似た発砲音だった。銃を装備してるエージェントを見

るも、彼らの銃はライフル

などの小銃で異なり、一丁所持する彼女も否定した。……となれば。

指揮者のオブジェを囲んでた職員達は後ろを振り向く。そこには、少し唾然とした

顔を貼り付けた、新米の 何時も死ぬ 殺されると情けない姿ばかりを目にする機会が多い

外来の魔術師と言うカテゴリーにも入る人物が拳銃を構えていた。

「ツルノ？」

「え ……あ お、俺。

さつきまで、あの妖怪爺いの姿が頭の中をグルグル回ってたが。何とか具合良くなったんで

そんで、俺も少し手伝おうと拳銃 撃って……」

職員達は、顔を見合わず。狼狽えた鶴野は、不意に静かになった彼らに心臓悪くドキマギ

しつつ何か言おうと口開きかけ、その前にプツと噴き出す音を聞いて、口をまた閉じた。

プツ ハハハハハハ——!!! ツルノがALEPHを鎮圧

したぞおおお!!!!

喝采が起きた。職員達が全員で鶴野をもみくちやにした後、胴上げする。

自分がどれ程の偉業を成したか殆ど理解しえてない当の本人は、訳が分からず止めると

叫びつつも、全員が彼を天井に高く投げるのを止めない。

それと同時に、混乱から回復したオフィサー達、そして黎明から生き延びた者達も

このパニックが収束するのを理解すると歓喜の涙と共に生還の産声をあげた。

各々が、自分を助けてくれた百貌達に群がり、感極まりながら礼を口にする。

ありがとうございます……つ 有難うございます。

助けてくれて、本当に！ 貴方たちが居なければ死んでました。面を食らったのは、言われた彼らだ。今ほど仮面を被ってる事に感謝した事はない。

このような時、どう言う表情を浮かべて良いか皆目見当つかない。生前でさえも、このように

誰かに心から感謝の言葉を向けられた事は無かったのではなからうか……？

『——全員、御苦労だった。ハサンの何名かは、外界での任務を命ずるため集合するように』

そう、管理者の伝達が来たのは彼らにとっても有難かった。それ以上の賛辞は、この会社の

者達を懐柔し、あわよくば自分達の肉壁に使おうと考えてる胸に痛かったから。

「なあ 我等よ。……誰かに、感謝されると言う事は 嬉しいものだな」

管理者へ向かう道中、百貌の誰かがそう静かながらも感想述べた。それに対して、特にその言葉を否定しようとする者達も居なかった。

日は沈む、土砂と僅かな生体組織の名残が散らばる傀儡が夥しく地面に散らばっている。

少しだけ呼吸を早めつつも、まだ気力と戦闘する力を残す赤い髪の戦士は髑髏のメイスで

空気を切りつけ、視界に浮かび上がる幻影と実体をもつ戦闘人形の内 実体をもつ物だけを

正確に倒しつつ、側で動く事のない少女の背後に迫る魔術による攻撃を逸らす。

そんな行動を延々と何時間も続けていた。観察する少女は腹の底から嘲笑を撒き散らす。

「アハハハハハッ！ すっごい、すっごい!! 貴方には見えてる筈なのにねえ！

自分を愛してくれた人 支えてくれた人 仲間だって思ってくれ

た人の虚像がねー！

なのに、そんなに簡単にあつさり躊躇なく破壊出来るんだもんつ。やっぱり貴方つて

狂ってるんだ。狂って狂って半周して、まともに動けてる貴方つて、本当にイカレてるっ！」

「だから 無駄口ばかりピーチクパーチク囁つてないで。直接掛かってこいよ 腰抜け」

「嫌よ。だって、私非力ですもの」

チツ、と露骨に嫌そうに舌を打つ。語彙の不足した挑発を何度か行うが、舌先三寸だと

相手が上だ。何より、向かっていけば少女一人をがら空きにしてしまう。

(一か八か やるしかねえか)

こんなにも長い時間の闘争をした上で、人避けの結界を施してるのも含めても誰の

侵入も許さず、管理者の援護がない事を考えれば、予め最悪の想定をしていた

アクシデントが彼女にも及んでいると考えて良い。自分が未だ存在してる以上は

消滅などはしてないだろう。それでも、危機的状况に代わりなく、打破する事が最上だ。

彼女は、空いた片手で小さな体軀に回していた腕を外す。そして、その手の平に赤白い

粒子が集まると共に、T—02—43 母なる蜘蛛と呼ばれるものと酷似した色合いの棍棒を

発現する。周囲に蔓延る隠れた悪意が自分に集中してるのを実感しつつ前傾姿勢に移る。

「アハッツ！ 破れ被れ？」

「赤目」

「懺悔」

薄暗い赤と黄色の光を宿す棍を水平より下に掲げ、彼女は多数の魔



術が自分に迫るのを

全て無視し、日傘を回しながら人間達を働きアリでも見るかのよう  
に愉しむ女の

間合いまで辿り着くと、彼女にとって魔力でも人の持つ気力でもな  
い力。

即ち、E・G・Oが担う 心によって産まれる力を最大限まで高  
め、二つの武器の相反する

指向性、噛み砕いて言えば光と闇の如きモノを混ぜ力いっぱい叩  
きつける。

「――弾ける!!」

効果は絶大だ。

混ざりあつた真逆の力は、更なる大きなうねりとなりゲブラーを中  
心に全てを打ち払う

単純な破壊の暴走となって周囲のものを傷つける。

様々な幻影を、魔術で編み出した攻撃を、戦闘人形を、掃除屋を。そ  
して仕掛けた首謀者

の短い悲鳴を光は呑み込み……辺り一面に大きなクレータを作り  
上げ、敵が消え去った。

何とかなったか……。

額に僅かに浮かんだ汗を拭う。流石に、長時間の戦闘と今の状態で  
ギリギリ使用が可能な

大技は彼女であっても幾らか堪えた。

まだ、今の謎の聖杯戦争に関わりある魔術師を倒して終わりではな  
い。管理者の安否を

見定めない事には。

「ガキ、さっさとこの場所からおさらば……」

振り返り、目を瞠る。桜の背後に映る存在

黒いドレスにも見える衣装、金に輝く幾何学模様 吸い込まれるよ  
うな虚無の瞳の。

それを見た瞬間、喜怒哀楽や護る使命感も全て凍てついた。代わり  
に胸から生じるのは

暗く 昏く 人はこれ程に誰かを憎めるのかと言う黒い火が血液全体を通っていく。

「ガリオ」

「アハツ☒ 聞いてはいたけど、この姿が本当に効果抜群なのねえ」  
叫びかけた声を途絶えさせるのも、その姿に似合わぬ口調。そして、その姿を

借り受けているものが、つい先程倒したと思っていた人物だと知る。

だが、ゲブラーはその姿を謎の魔術に長けた愉悦犯が借りてる事によって、怨敵が

目の前の存在と組んでる事も理解した。そして少しの疑問も。奴が誰かと組む？

「まあ、今日は結構楽しめたわ。けど、最後に一番守らなくちやいけないものを

手放したのは減点ねー。それじゃあ」

ブンツ！

「!! つガキー！」

チャオ、と告げてビナーの虚像が消え去ると同時に桜は彼女の手で宙に放り出され

冬木の海の中へと投げ入れられる。

この町は温暖の気候とは言え、冬近い海の中に子供が厚着で入れれば自殺行為だ。

ただでさえ大人でも服を着たまま海の中を泳ぐのは難しい。更に、魔術によってか

小さな渦潮が深く小さな体を底へ底へと誘っていく。

息が段々と苦しくなりながら、最後に彼女は真つ暗な揺ら揺らと動く空間の奥から

赤い髪を揺らし、手を伸ばし顔を近づける守護騎士の姿を見て取った後に意識は途絶えた。

人の祝杯の波が引き、へ口へ口になった彼は崩れたスーツを正しつ

つ溜息を吐いて立つ。

サッカー試合で、最後に逆転シュートを決めた選手のように、背中に強い張り手の感触や

誰か知らない勝利の接吻の痕が頬に付き、複数の香水の匂いが染み付いている。

顔を拭きたいなあとぼんやり考える彼の思考を盗み見たように、横脇から濡れタオルが

差し出された。

「一躍ヒーローですね」

「……うつせ、つうか見てないで助ける」

「いえいえ。ツルノが他の同僚と仲が良くなるのは良い事ですし。良かったじゃないですか

他のチームにも、今回の鎮圧でバツチり好印象が残りましたよ」

舌打ちをして、根暗な目つきだけで抗議の視線で無言の返事を返す。その邪気ない笑顔を

向ける時の建前上の先輩には何を悪態ついても効果ないのは、体感時間で一週間はこの

悪夢のカーニバルが日夜開催してる場所で同衾しているからこそ対処だ。

けど、あの人のトラウマを無理に掘り起こす歪んだ伴奏を作るオブリエを壊した時の

興奮と熱は、まだ体に残っている。

あのように、全体で何かを成し遂げたと言う達成感を味わったのは何時以来だろう？

いや、今まで感じた事のないものだった気もする。

鶴野は、この狂気が蔓延する世界に段々と自分が順応し、昔の自分自身の在り方が変化

していく事が不思議と拒否感ない事に恐ろしさを感じた。

これは、この環境は不味い。蟲達に囲まれて心を段々と麻痺させ削られていくのでなく

仲間意識と、絆と言う。自分が持ちようのない暖かさと癒しが自身

を変えていく。

『……Mr. 鶴野、君に重大な仕事を命じなくてはいけなくなつた』  
火照つた顔を、程よい冷たさが鎮めた頃合いで。この魔境に自分を  
引き摺り込んだ元凶の

声が降つてかかった。

危険な怪物に、下手すれば殺されかけてた事実を責めようとする気  
もない。そんな事

初日に散々味わつて喉が枯れるまで喚いた。もう、どうにでもして  
くれ。

『——君に、聖杯戦争のランサー陣営との交渉に赴いて欲しい。勿  
論、サポートは付ける』

そして、早まつた選択だったかと後悔するのは。何時もの事なのだ  
から。

秘密裡に、表舞台の裏で暗き同盟と 鈍く照り輝く絆が紡いでい  
く。

そして、少しずつ表面上に闇が描き出されようとしていた。

「聖処女よ お迎えに参りました」

「何故、お前がT—09—90を保有し  
てる」

光の騎士と、堕ちた従者の交わりに 混沌の渦に落ちた船を含めて

## 談合

冬木市にあるハイアットホテルは、富豪層及び日本を旅行する外国人にも通用する

サービスを充実させている。

内装は、クラシカルに海外が好むモダンな造りに、付属する服飾コーナや食事の

品揃えも大衆の大部分が高評価な潤沢したものだ。

とは言え、それも時計塔での最高位である色位を冠するケイネスからすれば

歴史と伝統に基づいた祖国の贋作が立ち並んでるようなものだ。別に真似る事そのもの

が悪しき事ではない。魔術においてもルーン文字の並びから学ぶ卵であれば、師の

背中を見つめ、その仕草を見様見真似で倣うものだろう。ただ、そこに『美しさ』

あるかどうかが重要だ。さも、こうすれば歴史あるローマ発祥より続いてきた国に

酷似してるだろうと鼻にかかった部分がいけ好かないのだ。

いま、自分が口に含む紅茶一つとてそうだ。ブランド物と銘打ったホテルで売りに

出されてるものだが、英国の紅茶がこうであると極東の此処の島国の人間は緩んだ

脳味噌で無学に相応しい考えにしか囚われていない。本物の紅茶と言うのは相応しい

食器 それを置く調度品 時間 取り巻く空気や音などの環境が至高のハーモニーとなり

最高の味を引き立てるのだと言いたい。

そう、僅かに紅茶談義にケイネスは現実を逃避していた。逃避する理由は

目の前で居心地悪そうに明後日によく視線を彷徨わせる、ケイネス

個人は面と向かい

相對する事はまずないだろう下等市民と言える人間。そして、魔術の解析を用いた

目を向ければ、決して高くはないものの魔力で出来合わさってるであらう近代、いや

現代にも普通にこのホテルで泊まりこんでいても不思議でない恰好の女が同席してる。

「……あー、それで　だ。再確認ではあるが、君たち二人　いや　一人と一体は

バーサーカー陣営より遣わされた交渉役　と言う事で宜しいのだね」

その言葉に、コクンと無言で男のほうは顎を上下に揺らす。高性能な使い魔と思しき

女のほうは、問いかけに意識せず興味深そうに周囲を見回す。

その仕草に目尻が上がるのを抑えきれない。野蛮人、いや野蛮な使い魔だ。

此処がサーヴァントのマスター同士が彼のソクラテスが古き偉人達と言葉の刃で

ぶつけあったように神聖なる対話の場である事が解らぬのか？

側頭骨をノックする指の速度が速まる。何時からか自身の思考をクリアにする為の

トレーニングの一つとした指の運動だったか、今日に限っては随分と冷静になる

為の一儀式として、この動作を随分と強いられる。

電話を受けて、ロード・ケイネスはランサーを引き連れて会合の場を設けた。

罨である可能性は大いにありえる。されど、偉大なる時計塔の麒麟児　エルメロイ家

切つての鬼才が臆して退けると言う事などあつてはならない。何よりも、このホテルは

我が領域であり工房となっている。断れば魔術師として有利な場

所でさえ尻ごむ

臆病者だと遠まわしに告げるようなものだ。

使い魔越しに見た、多勢のハサンを蹂躪した狂戦士を使役するマスター。

それが直接姿を現すと聞いて彼自身も心中では色々と考えは浮かんでいた。

あの時、あのサーヴァントは脱落してなかったのか？　そして脱落してるならば教会に

助けを求めず自分に会合願ったのか。不可解な部分は挙げれば切りがない。

対峙しあった時もそうだ。男に碌な魔術礼装は見受けられず、挙動も素人のソレで

ケイネスはその気になれば数秒で華麗なる自身の魔技により数回は命を

刈れるだろうと見受ける。令呪があるとすれ使わす暇など与えん。

女のほうも女のほうで。こちらのランサーが幾多の女をも陥落させる魔性の黒子を

持たせてる情報を事前に宿してなかったのか？　と思える程に無警戒に、密室になって

霊体化を解除したランサーを一目見て、か　カツコイイ……と　しなを作った声を上げた

のには、ランサー及び男の方と同様だが思わず顔を顰めてしまったのは不可抗力だろう。

まず魔力の密度からしてサーヴァントの一端である事は確かなのだが。それにしあって

このような英霊と呼称するのも烏滸がましい存在、ランサーに会って直ぐに陥落する存在

を引率してきた目の前の男の思惑を大いにケイネスは知りたい所存だった。

……もつとも、件の男も。ケイネスの問いただしたい事を直に言われた所で、許されるならば

俺だつて聞きたいわと怒鳴り返したであろうが。

(畜生。やつぱり、あの何考えてるか知れねえ奴の言葉に従うんじやなかった)

外に出され目にしたのは、海浜公園界隈のラブホテル。

一体何の冗談だと言う目線を向けるも、全く感情が読めない目つきで開かれる声色も同じ

ぐらいに淡々としている。

「時間がないので手短かに告げる。これから、私はセイバー陣営に暫し同行して同盟関係

最悪でも一時的な非戦の交渉に赴く事になる。

その間に、Mr. 鶴野。貴方にはランサー陣営に赴き、願わくば数日間の不戦の取り決め

が成り立つようにして頂きたい。それと、此処ホテル一室に仲間が控えていた筈だが

込み入った事情で今は不在だ。後で連絡は来ると思うが、万が一の為にこちらに私の

伝言を置いて欲しい。そちらが戻る時には私も戻っていると思うが不測の事態もある。

同行するユメカが途中で消えるような事があれば、直ぐに国外へ逃亡してくれ」

「何で俺なんだよ……雁夜、他にも部下でそう言うの得意な奴がいるだろうが」

ぶつきらぼうな物言いにも、この鉄仮面のサーヴァントが顔や声付きを変化する事は無い。

「ランサー陣営だが、つい先がたに起きた戦争での行動を見受けるにサーヴァントとマスター

において、マスターが主導権を握っている。魔術師と言うのは、その多くが自身の利己性に

基づいて動いているのが一般的な見解らしい」

Lobotomy cooper内でも、魔術師と手を組むだなんてと苦渋の色を浮かべる雁夜に



同じように管理者の声が続き説明なされていた。

「此処からは消去法だが、以前にF-01-57と先程に交戦したアーチャー陣営に関しては

軌轢が生じてる故に歩み寄るのは時期尚早ゆえに却下。ライダー陣営は主導権がサーヴァント

に立ち位置を多く占められている。そうなると、この大型ツールアブノーマリテイの一端と

思えるものを制御してるマスターと交誼を深める事はとても重要な仕事なんだ」

「けど、鶴野は……あいつは、そう言う交渉事には向いてないと思うんだがな」

Xのマスターである彼のぼやきに、幾つかの画面に視線を向けていた彼女は向き直る。

『人間』である事は重要だよ、雁夜。そして、彼と言う人となりであるからこそ

思いの外、こう行つた分野に成功する事もある」

ハイアットホテルの一室を貸し切りにし、隅には何時でも不慮の攻撃に対処できるよう

ランサーを待機させている。盤石なる布陣を形成し知性を携えた視線にて、仮想敵に

成り得る相手の一挙一動を油断なく見つつつ口開く。

「さて、と……私の記憶が正しければ、バーサーカーは遠坂邸の陣地においてアサシンと

共にアーチャーの宝具で殲滅されてた筈だが」

「あ、あのバーサーカーだが。ありやあ、港倉庫であんたも目にした。あいつの

宝具で呼び出したものだ。アレがバーサーカーの正体だ。

んで、アサシンも未だ生存してるぜ。俺がこの目ではつきり見てるからな」

敬語も冷静さも崩れた口調に、僅かに眉が吊り上がれどもケイネスは予想していた中で

悪い部類なものが当たったと溜息も密かにつく。

怜悯なランサーのマスターたるケイネスとて、三竦みで死闘を交えた遠坂邸でのハサン

狂戦士と弓兵の結末は、軍配が弓兵にあつたと言え過程での戦闘が全て狂戦士と暗殺者が

占めている事には疑問も覚えたのだ。アーチャーに関しては宝具の発射に参戦が

遅れたか偶然の域かと考えも半ば捨ててたが、この相對する交渉役の言葉を信ずるなら

バーサーカーは勿論の事、アサシンも複数の特性活かし未だ残数勢力が存命してる。

更にキャスターのクラスは未だ秘密裡に、その特性を最大限に発揮し陣地を形成してる。

忌々しい事実もさりながら、彼は未だ保有する疑問を矢の如く言い放つ。

「ふむ……貴重な情報を渡してくれた事に感謝はするがね。だが、何故この局面にて

私を同盟関係に願ったのかね？ そちらのサーヴァントに執拗に勧誘を迫っていた

ライダー、私より縁が深い遠坂など幾らでも選択肢はあつただろう。何より君達は

このホテルに既に私が居た事を把握してたようだが……何故だ？」その疑問に、鶴野は予め管理者から容易された台詞を告げる。

「あ、あんたがサーヴァントを最も制御出来ているからだ。そして、魔力を打ち消す

宝具は、いざとなればこっちの宝具が暴走した際に抑制するに適してる。

遠坂は、随分前から競争相手として関係は冷戦下に陥っていて正直仲は悪い。

それに、アーチボルトの名は極東にまで名を馳せている。あんたが時計塔での

成功者であり、ゆくゆくは冠位（グラント）を得る実力者だろうってな。

日中帯に、このホテル近辺でランサーを動かしてたのは既に使い魔で確認してたから

後は、有名なあんたの名前を帳簿で確認すれば簡単な事だ」

前者に関してはXが分析した故での正直な感想。後者の答えに関してはザイードなどが

遠坂に仕えてた時点での諜報で保有してたのを受け売りして、相手を持ち上げる

材料を幾つか付加した上での科白だった。

「ほう、良くそちらのマスター。間桐はこのケイネス・エルメロイ・アーチボルト

の実力を正しく見ているようだね」

褒められて悪い気はしない。何より、東洋の願望機を創造する御三家の一人が、もう

一人の実力高いと思える遠坂よりも時計塔の自身の実力を買ったと言う事実は大きい。

鷹揚に領きを返しつつ、そこでランサーのマスターは交渉役に対し自身が見抜いた

サーヴァントの事実を更に投げかけて優位を保とうとする。

「贈り物としては値千金とは言うまいが、彼のサーヴァントを卸している事に

こちらも賞賛の言葉を贈ろうとも。そう —— パンドーラを招来した間桐にもね」

「へ っくあ っ!？」

「どうかしたかね？」

「……いや、結構なご明察 だ」

ケイネスは、彼のバーサーカーの真名を『パンドラ』と思い違っていた。幾多もの

共通性が無いもののサーヴァントに比肩しうる怪物や戦士を呼び出せる。そして姿形が

女性となり、世間一般の認知度が高く英霊に成り得るとすれば神話に名高いパンドラと。

尤も、正体など考えた事もないし考える事もしたくない鶴野からすればランサーの

マスターの回答は寝耳に水だが、不審な声を上げる前に相席していたユメカに女性

らしかなる強い踏み付けと念話により強制的に痛みで却下された。

尚、彼の予想は時臣やウェイバーもバーサーカーの宝具を観察した上で推察した答えの

一つでもある。後で、ユメカが体験した情報を持ち帰り管理者も的外れではあるものの

『そう思ってしまうのも仕方がないし。何より、宝具も酷似しているものだからな』

とケイネスの答えを否定する事は無かった。

「なに、あれ程に悪性へ偏ったものばかりを召喚し且つバーサーカーと言うクラスにて

魔力切れを起こさず出せる宝具となれば答えとて容易になる。

そちらの側近として同席する使い魔も、私の考えが正しければ……パンドラの箱より招来

させたサキユバス(夢魔)の一体と言う所か。護衛にするとしても、この私が男だから

そんな下等淫魔に翻弄されると生易しい発想を考えてるのなら屈辱だがね」

「ぶっ つぐあつ!？」

鶴野は、自分のサポートを担う色々と鼻につく女性が行き成り性を絞る悪魔と断言された

事に噴出しかねたが、それも表面上は微笑を保っているが整えた髪の毛の下に青筋を

浮かべたユメカの施す水面下の制裁で再度その行動を中断される。

怪訝な顔を覗かせるランサーのマスターに彼は早口でこう受け答えた。

「で、ですんで。間桐としても、まとも会話するにあたって出せる存在が不足してて

家督の俺が出てるんだ。少しでも手伝ってくれる人材が欲しい状況で……」

その言葉に、顎に指をかけ成程とケイネスは呟きの声を上げ暫し黙考する。

バーサーカーのサーヴァントがパンドラ。一説では人類初の女性と言えるもの

この世のありとあらゆる災厄を詰めた箱を所有してるからこそ、予想できない魔物を

幾つも出せるし、狂化に関しても著しく低いのだろう。代わりに、宝具である災厄の箱が

容易に開ける状態にもなっているらしい事は交戦の際で明らか。

バーサーカーのマスターは、目の前にいる間桐の家督である男の弟らしい。ほぼ無いと

思える魔力回路しか宿していない、この交渉役が間桐を率いる存在であると言うのは

不可解だが、それはさて置いて聞いておかねばならない大事な事がある。

「して、間桐は聖杯に何を願う気なのかな？ そちらが招来したパンドラの願いにしてもだ」

聖杯創造の御三家が何を願うのか？ またサーヴァントの願いに関しても重要だ。

魔術師の大半の願いは根源への到達だが、御三家の末裔がそうだとは限らない。パンドラ

に関して、神話では人類に災いを贈るために神々が作ったと言われる。一見正常に

見えてたが、それを使命と捉えて願望機に願うなら魔術師以前に人として誅罰の対象となる。

「弟の願いは、衰退しきっている間桐が今後も繁栄しうる力を持つ事。えっと、そして

サーヴァントは……宝具を捨てる事、だ」

用意してた答えに対してケイネスは短く相槌を打つと共に頭の中で素早く脳を回転させる。

（相手のバーサーカーが、魔力切れをほぼ無視してパンドラの箱と言う制御は困難ながらも

量に制限ない怪物を放出可能な宝具を所有するサーヴァントなのは実に良い。

指向性さえ持たせれば、如何なるサーヴァントも蹂躪出来る。この男は暗に告げなかった

のかも知れんが、魔弾と言う制御出来る宝具も備えてるようだし、アレの威力は

どのサーヴァントにも通じる。利用しない手は無いだろう。願いの内容も差し当たって

マスター、サーヴァント共々虚偽でない限りは問題ない内容だ。

こちらとしても、聖杯に対し特に願いはない。魔術師として目指す根源も、我が器量と

エルメロイ家の力を以てすれば、やがて辿り着ける道。生き急いで願望機に頼るものでなし。

勝利の暁には、聖杯の器だけ持ち帰るにして十分他の派閥を押し黙らせる実績になる。

この聖杯とやらを生成した御三家の間桐も、聞けばマスターは召喚する時点で半死半生で

家督の彼が対話に出なければいけない程。歴代の家とは言え、こうも衰退してるとはな)

明日は我が身とは決して言わぬが、こうなりたくない見本だと侮蔑の視線を密かに送る。

だが、次第に高揚感が自分の中に巡って来るのもケイネスは感じた。聖杯に掲げる

目的、パートナーとしての相性も悪くはない。相手のマスターが直接談話に出ない事は

少し減点ではあるが、そこまで心身が不調であるのが真実なら警戒

すべきはバーサーカーの

挙動のみ。それも、後に保有するセルフ・ギアススクロールなどでサーヴァントがこちらを

害しようとするのならば、即刻自害するよう誓約を立てれば良い。完璧だ。

（悪くない。あのバーサーカーが招来する魔猪は、こちらのランサーの天敵なのだから。

それが牙を向かず、あまつさえ他サーヴァントを圧倒させた怪物達が援軍となる。

フツ この私に憂いなど無い。今まで起きた不運と言えるものや忌まわしき全ては

この僥倖の前触れと言うものだ。天はやはり私に味方しているのだ！）

ロード・ケイネスは静かに勝利への道を確認した。考えてみれば、この数日間が

可笑しかったのだ。高名であり、榮譽ある道を築いてきた自分が聖遺物を落第生と言える

弟子に奪われ、召喚したサーヴァントの呪いにより妻の心が傾いていると言う事実。

そして待ちに待った戦争に対しても芳しくない戦績と言う全ては、いま正にこうして

情けなく助力を願っているバーサーカー陣営との同盟と言う出来事への布石だったのだ！

彼は僅かにぐらついていた不動の自信を取り戻した。そうになると、つい先程までであった

ランサーへの確執も隅において機嫌も持ち直す。「良からう。このケイネス・エルメロイ・アーチボルト 間桐の家との同盟を認めよう。

貴公の弟であり、バーサーカーのマスターにも、今後の最良を願うと告げたまえ」

「え、あ……有難う御座います」

テーブルに額をこすりつけんばかりの行儀なつてない礼の仕草も、  
今ばかりは心地良い。

管理者の観察眼は正しく機能した。

間桐の家で、実子であり正しく人間である二人。兄弟の鶴野及び雁  
夜の共通点は

生まれつきとも言える劣等感が染み付いている事だ。アブノーマ  
リテイ（臓硯）の

支配下に置かれてたと言う不可避な事情はあるとは言え、彼等は他  
の人に比べ自分を

低く見るか、見られる傾向が強い。他者の嗜虐を無意識に煽る部分  
が強いとも言える。

ソレを管理者は利用した。権威や血統を重んじり、貴族階級意識が  
強いケイネスから

すれば、衰退した間桐の末裔が首を垂れて、そして見た目みつとも  
なさが露呈される

鶴野の哀願は自然と人を小気味よくさせる。後に、管理者は彼と直  
接相対して

ケイネス・エルメロイ・アーチボルトをこう評価した。『ケセドをよ  
り鼻にかけた人物』

『Lobotomy coop内で軽んじた行動をとり早死にする傾  
向が高い職員及びオフィサー』

言うなれば、優秀だが驕り高い おべっかを使えば調子よく乗せら  
れ利用しやすい。

そして、ソレはいみじくも的を得ていた。

「……ねえケイネス。少し安請け合いだったんじゃないの？ 貴方の  
判断を疑うわけ

じゃないけど、罠の可能性だってあるじゃない」

彼等が退室した後、控えの部屋で全て傍聴していた新妻は余り芳し  
くない口調で

警告を述べた。ソラウからすれば、戦場でランサーの武勇伝を阻害  
したとも言える



バーサーカーと、信用がいまいち宜しくない様子な鶴野の挙動も含めて同盟の方針に

諸手を上げて賛同する事は出来なかった。口にはせずとも、彼等のサーヴァントも

今の件については強く反対はないものの賛成も出来ないと言うのが正味。

普段は頭が上がらず、弁も立ちにくいものだが調子を取り戻したケイネスは

そんな彼女の少し毒を含む発言を歯牙にかけぬ様子で指を立て余裕の笑みを見せる。

「はは、無用な心配だソラウ。あのバーサーカー　パンドラが宝具を除いては

精々2流魔術師程度の力量しか無いのは既にランサーが確認済み。少々ガンドが使えるがサーヴァントを直接害するものは使えぬようだし

同盟を望んでるからには、幾らでもこちらで誓約は作る事は出来る。後あと

セルフギアスを使用してサーヴァントの軽はずみな行動に自害を申しつけければ

万事問題ないとも。そうすれば、強力な魔術師をほぼノーコストで転がせる。

「精々残りの五騎を脱落するのに労力を支払って貰おう」

「……ケイネス。パンドラはガンドが使えるものだったかしら？」

顎に指をかけ、時に聡い様子が発揮されるのは流石のソフィア家と言った所だ。

最愛のパートナーの言葉に、彼も強気な笑みを引つ込め硬い顔つきに変化する。

「確かに、そこは私も幾分か疑問には思っていた。北欧系列の魔術であり

南ヨーロッパのギリシャは含まれてる、神代の英霊ならば扱えるのも不思議では無い。

……然しながら伝承では、アテナ アプロディーテ ヘルメスから  
絶世の美貌

家事に関する万能の業 獣心とも言えるものを宿したと言われる  
が……あのサーヴァント

を使い魔越して観察してみたものの。あの並んでたサーヴァント  
達に比べ気配と言うか

雰囲気が一際弱い気もしたがね」

降霊科の講師も務める故に、彼の正しい眼力でアーチャー・ライ  
ダー・セイバーも

目にした時の神々しい気配には、流石は魔力の結晶体と感想を敷い  
たが。それに

比べてバーサーカーのパンドラは、神々が最初に作った人類と呼称  
されるに関わらず

その神秘さや、放つ気配が余りに低かったのは少々気がかりだっ  
た。

然し間桐は聖杯創造の御三家の一人。召喚時に何らかの細工がア  
クシデントを

起こしたのだろうと結論付け、夫婦議論を彼は止めたのだった。

「安心したまえソラウ。万事恙ない」

ケイネスが同盟に関し気分を盛り上げてる頃、冬木の山にアインツ  
ベルンが築いた城へ

通ずる山道を一台の黒塗りのドイツ製造の高級車だ。

一般の人間なら、その0の桁の多さに運転はおろか触れる事も尻込  
みする車は

制限速度を超えた速度で爆走している。その車を運転するのは  
レーサーでも何でもない

深窓の令嬢と呼称して不思議でない女性なのだから、世界とは奇妙  
さに満ちている。

本来なら、その助手席には金髪碧眼の美貌を持つ女性が乗ってい  
た。だが、今は

異物が世界に投入されたが故に監視も相まって鋭い目つきを後部

座席で隣に向けてる。

常人なら辟易して音を上げそうなものの、鉄仮面とも称すべき無表情で彼女は荒々しい

ドリフトを姫君が行うたびに車窓部分に頭を軽くぶつける。

「……Mrs. 運転して頂いてる手前こう言うのも何だが。もう少し安全速度を

心掛けて頂きたい。若しくは、私が運転するが」

「バーサーカーっ アイリスファイル嬢の運転に不服を申し立てるな！

口先三寸で運転を交代した瞬間、サーヴァントである事を良い事に崖下に

車を突き落とそうと、あわよくば考えてるのだろうか？」

「セイバー そう、喧嘩腰にならないであげて？ あの時色々怪物が飛び出た

事も不慮の事故だったと説明してくれてるのだし。……貴方も、出来ればセイバーに

返事ぐらいしてあげて？ ずっと無視するのは流石に可哀そうよ」

「……考慮はしておく」  
平坦な声は、化かし合いが不得手なアイリスファイルでさえ切嗣と同じで戦争が

終盤になっても態度を変えない事が丸解りで溜息を思わずついでしてしまう。

思いのままに、この自動車と言う玩具を誰にも迷惑かけぬ場所を走り抜けるのは

自分自身が風になったようで気分は盛り上がったものの、賓客として同席する者の

存在と背後のギスギスとした空気が有頂天にするのを邪魔する。  
硬い雰囲気の研究めいた白衣とスーツを取り外して城にある予

備の服を脳内で

着せ替えてみれば中々どうして。アインツベルンの侍女と詐称しても通用する

外見の女性だ。それが冬木で招来したサーヴァントの一角で、思いのままに猛り

狂い全てを破壊すべし戦士たるバーサーカーなのだと言うのは、俄かに今でも

半信半疑でいる。セイバーすら、悪質なデマでこちらを混乱させるかと最初は

憤っていたが、彼女は彼女で他サーヴァントに取り合わないから余計にセイバーは

彼女に敵意を増長させる始末だ。

海浜公園近くに寄り道を頼まれつつ、彼女達が向かうはアインツベルンが用意した

冬木の奥深くの森の結界と称すべき天然要塞の中にある城。

真のマスターである切嗣とは交信が途絶えてた故に、少し迷いはあったものの

同盟関係を願うバーサーカーは、アクシデントで開帳した宝具の騒動の後は

セイバーに対し冷淡な事以外では特段危害を及ぼそうとせず大人しい。

マスターの元に帰還しなくて良いのか確認したが、既に意向を同意しての行動と

嘘はない様子で告げられれば断る事は出来なかった。日を改めて落ち着いた時に……

とも言えないだろう。戦争下、他の陣営の干渉が何時起きるか解らない以上

関係性を明らかにし、妥協点を探り明確な繋がりが出来る事が一番良いのだから。

「そう言えば、貴方って運転出来るの？ 服装も随分と現代に近い感じだし」

「知識としては、自動車の取り扱いは知ってる。……ふむ、だが実際に私が車を

動かした事は一度もないか。いや失礼した そのまま続けて貰っ

て構わない」

妙な発言だ。更にこのサーヴァントに対する謎が深まる。

最初に自分や切嗣が共に招来したセイバー。その清廉された、周りの空気まで浄化

されそうな澄みきった気配には圧倒されたし、港倉庫で交戦したラ  
ンサー

轟音と雄叫びを高々と上げて降り立ったライダーに、様々な武具を  
射出するアーチャー。

どれも近づくだけで恐れ多い存在だが、このバーサーカーに至って  
は、はつきり言っ

て招来される怪物は恐ろしいものの、使役する本人に至っては力が希  
薄すぎる。

全力で魔術戦を自分が繰り広げるとして、攻撃的な術が不得手なア  
インツベルンの

自身でも辛勝出来そうな弱さは、逆に不気味さを際立てる。

神秘が低いとなると、かなり近代になるが。あのような暗黒面に  
どっぷり漬かった

幻想種が凡そ数百年程の時代で自由に召喚出来る英霊など居ただ  
ろうか？

「こう言う詮索はどうかと思うけど。以前はどんな仕事してたの  
か聞いても良い？」

「管理人だ。貴方にも見せたが、あのような存在が外界に出ていくの  
を防ぐ。

ずっとソレを繰り返してきたのが募り積もって、こんな存在になっ  
た。

英霊などと言う者になってる事は、とても皮肉だと感じるがね」

少し勇気を出して、けんもほろろに即座に質問を切り捨てられる覚  
悟の質問は思いの外

あっさりとは回答された。後部座席に座る見張りの翠の瞳も丸く  
なっている。

あの怪物達が流出するのを防ぐ？ 思い当たるとすれば、アトラス

院や彷徨海など魔術協会。

ランサーのマスターが所属する時計塔の地下深くに幽閉される迷宮等、そう言った今の現代にも

残る神秘の漏洩を防ぐ魔術師達だが……いや、これ以上を根掘り葉掘りと個人的な過去を聞くのは

余りに礼儀に反している。だから少しだけ話題を変えた。

「それじゃあ、貴方の事をバーサーカーって呼ぶの变えても良い？  
だって、話して見ても

バーサーカーって感じじゃないもの」

「……好きにして頂いて構わない」

「そうねえ、管理者だからマネージャァ？ ライトウンガー……  
うーん、語感が微妙ね

ウオッチャーとか、ゲートキーパーは？ でも、少し固い呼称に聞こえるかしら」

そう、言葉遊びに集中していた手前が彼女は前方に対する注意を遅れた。暗闇が前に広がる

とは言え、照らされるライトは直線道路に何も無い事を示唆してた為 油断もあった。

「——アイリスフィールツ！ 前に!!」

鋭い矢のような言葉にハッと前に焦点を定めると。長身の細い体軀がライトに照らされ速度を

緩めない車のフロントガラスにぐんぐん迫ってくる。

反射的に、短い悲鳴を上げつつブレーキペダルを踏みこむ。然し慣性の勢いのままに

何時の間にか現れた人影は目と鼻の先まで自動車のボンネットに差し掛かるのを見た。

——ぶつかる！

ぎゅっと目を瞑る。人を轢いてしまう鉄塊が軽重物に直撃する嫌な音が次の瞬間には響くと

思われたが、アスファルトを強く摩擦するタイヤの音は耳を捉えたが、それだけ。

恐々と目をゆつくりと開き、前のめりになった頭を上げる。誰もいない山沿いの道路と

ガードレールが見えるだけだ。

「幻覚……？」

「いや／いえ」 「違うな／違います」

異口同音に、後部座席から声が唱え同時に両側の扉が開くのを耳にして振り返る。

「アブノーマリテイ／サーヴァント だ／です」

アイリスフィールが雑談を投げかけ、僅かに形成しかけていた和んだ空気は既がない。冬空に

曇天が差し掛かり、冷たい風が吹きつけながら長身瘦躯のロープのような者を身に纏う男が

急ブレーキで僅かに斜め向く車へと近づいてくる。

少し遅れて車から降り立ち、セイバーの側へ寄るアイリスフィール。彼女達三人が何時でも

動ける状態に移った時には相手の様子が肉眼ではつきり認識出来た。

異様な男だ。紺と赤のコントラストで出来た黒魔術に沿った衣服を身に着け、その顔は

魚類のように大きい眼球が、眼孔から飛び出そうにして三者を映す。

—— お迎えに上がりました 聖処女よ……。

敵対するでもなく、逆に感極まるかのような声には敬愛が込められ。そして騎士が主人に

忠誠を示す傅きを披露する。

雪色の姫は小さく、貴方の知り合いかとセイバーに囁くが横に振られた首を見て、次に

もしやと思つて同行する白衣の彼女に首を向ける。

問いかけるまでも無かった。眉を片方掲げ、片方の腕をガンドの構えに移行している時点で

有無を言わさず排除しようとするのが見て取れる。これには慌て

て口を挟んで射撃姿勢の

直線上に立つ。短い付き合いではあるが、彼女がサーヴァント以外には手心を加える事は

理解が出来ていたからの勇氣ある行動だった。

「ま、待ってっ。行き成り攻撃しようなんて」

「Mrs. どいてくれないか？ 私は様々なアブノーマリテイを見て続けてきた。

その観察眼から基づきソレは野放しにすれば時間に比例して被害を拡大する類だと思うが」

「アイリスフィールの言う通りにしろ、バーサーカー！」

貴公も英霊の端くれであるならば、野獣のように無闇やたらに手を掛けよう等と言う事は……」

悉く無視する対応に、最初の心象が最悪である事もさるながら真のマスターと同じか、

それ以上に冷徹な態度のバーサーカーに対しての反抗心もあつて正論と同時に

彼女の行動を妨げるのが反射的に出来上がっているアルトリアではあつたが

これから先に戦争の終結まで皮肉にも長く、それでいてこちらに辛酸を味合わせる

キャスターの未来を知る事が今の時点で出来れば、また違った結果もあつただろう。

「嗚呼！ ジャンヌ！ 聖処女よっ。僭越ながら、どうか私の話を聞いて頂きたいっ」

今の時点で挙動と錯乱に満ちた言葉に閉口しつつ。そして耳傾けるにつれ理解を

深めてしまう言葉の裏に隠れた人々を混沌貶める邪悪を知る内に彼女の言う通り

有無を言わさず斬るべきだったとも思ってしまうのだった。

口論も続かぬ間に、キャスターの独壇場とも言えるべき語り部が寒々とした空の下で始まる。



彼の名はジル・ド・レ。かつて百年戦争期のフランス元帥 ジャンヌ・ダルク 聖処女に

仕えた忠騎士。だが、オルレアンの乙女が国に裏切られた事から彼の破滅への道が始まった。

言葉の節々に、ジャンヌへの敬想と同時に入り乱れる狂信に対しセイバーは圧倒される。

この男は、私を見てはいない。ただ、ジャンヌ・ダルクと言う理想、偶像の復活を頭の

中で勝手に作り上げてるに過ぎない。思慕は本物ではあろうものの、向ける対象が現実

に存在しない事で完全に暴走を極めている。

(会話が出来ているようにできて全く成立していない。これでは、このキャスターであろう)

男が余程バーサーカー足りえている)

両手を掲げて胸に飛び込んで来いと言わんばかりの動作に、着込んでいた現世に溶け込む

服から正装の鎧に切り替えて風の盾を纏う聖剣の一打を浴びせようかと考えるものの

ランサーの癒えぬ傷が、ここで交戦する事に迷いを生じさせる。

今まさに目にしてるのは、直接目にしてないアサシンを除けば最後のサーヴァント

であるキャスター、魔術師。そしてジル・ド・レは聖杯から流れ込んでくる知識から

数々の子供らを黒魔術の糧とした残虐な一面を強調させた存在である事を証明してる。

アイリスフィールを守り通し且つ、左腕が満足に動かせぬ状態で勝てるか。彼女の

直感では五分五分と言う勝機は薄い見込み。

——だが、そんなセイバーの迷いなど一切関知しない。アイアンメイデン (鉄の処女)

より硬き信念の基に動く存在は淀みなく前進する。

「なあMrs. そちらに頼まれた故に留まっていたが、もう良いだろう？」

これ等WOWクラスに値するアブノーマリテイに温情をかける余地は無いのだから」

「……はて 何者なのですか、貴方は。我がジャンヌダルクと悠久の果てを経た上で

念願の再会を、もしか邪魔するおつもりで？」

「一番近いカテゴリーのアブノーマリテイだと、0—01—04（憎しみの女王）か。

もつとも、あちらは鎮静剤の投与をすれば多少収容を長引かせる事が可能な事を言えば

「あちらの方が可愛げがあるかも知れないがな」

セイバーとアイリスフィールは、二人の調子を聞いた上で理解した事実互いに表情は少し

異なれど頬の筋肉が収縮する。

キヤスターに至っては、魔道に墮落した没落後の姿故に単純な言葉では説得不可能な

精神汚染が身についているが。バーサーカーに至っては、淡々とした何時もの調子で

目前にいる者に対し意識した上でやってるのか、或いは本当に狂化を極めた故か会話が

成立しない。互いに、大き目の独り言を放ってるようなものだ。

聖杯の知識から解る事だが、精神汚染された存在は同等の精神が壊れた者同士としか

意思伝達が成り立たない。バーサーカーが正気でマスターと会話してた事がずっと不思議

だった。言葉の節々に人を惑わす毒を伴うキヤスターに対し涼し気に他のサーヴァント

同様に聞く耳を持たないバーサーカーの姿を視認してセイバーは思う。

このバーサーカー、対サーヴァントに対し精神を凌駕してる。サー

ヴァントであると言う

理由だけで、平然と女子供の形とついても問答無用で抹殺する気概を感じる。

管理者Xにとって、全てアブノーマリテイは排除対象だ。大型ツールの願望機始め

このサーヴァントと言う存在、人智の外にある存在が蔓延っている事は唾棄すべき実態だ。

それでも未だ、平和を謳歌する人々の目を盗みアブノーマリテイ同士で衝突するだけなら

多少は容認も出来た。だが、この消去法で深町の家族達の惨殺に關与して居るであろう存在

に關しては駄目だ。犯行がマスターである人間だとしても、それに黙認してるからこそ今も

現界しているのだから、まともな性質な筈もない。

ガンドでサーヴァントに有効なのは、移動遅延の弾のみ。管理者が行使出来る権能で唯一の

アブノーマリテイへの攻撃手段。他の翼（機関）ならもっと物理的な損傷を可能とする兵器

の使用も出来るのかも知れないが。生前に所属してたのはLobotomy cooperだけだ。

（一先ず、遅延弾丸で行動を制御し。あとは職員、待機させているハサンの物量で……）

——キイイン

いま現在のLobotomy cooperのアブノーマリテイ達は休止状態だ。コンビニエンスストアじゃ

あるまいし24時間、延々と人材をただでさえ浪費する場所で昼夜問わず生成などとてもじゃ

ないか出来ない。機械の体でさえ限界はあるのだから、クールダウンの時間は必要不可欠。

今は魔弾の射手や赤ずきんの傭兵と言った、Lobotomy cooperで例外除き普段行使出来る

安全な攻撃手段は使用出来ない。運用出来るのはハントしたハサン達と何時でも頼つてくれと

信頼できるエージェント達のみ。十分だ。

キャスターへと移動遅延弾を発射しようと力を込めた瞬間であった。異常が発生する。

休眠状態のアブノーマリティの一体が活性化する。目を見開き、抑制しようとして内側で

操作をする前にソレは外に飛び出す。横に出現した異常物体を視点だけ動かし眩く。

「T-09-90（皮膚の予言）？」

後方に控えていた二人も、その異様な書物を見て。それが何で出来ているのかを理解して

眉を顰める。バーサーカーの彼女が招来したのは、血と肉の繊維で構成された一本のT地で

で作られた本台。そして、その書物も目を凝らせば人の血肉で作られている。

突然、制御不能となり出て来た本に怪訝そうに眩く彼女と違い。キャスターは彼女の仕草

先程までの発言にも余り関心を示さずも、その本には露骨に表情を驚きに模った。

「おおっ？ 貴方 貴方が何故ソレを持つてるのです？ 我が宝具を！

………もしや、貴方はフランソワなのですか?？」

ギョロギョロと魚眼と言えるキャッチボールサイズの目玉を動かしながらキャスターは

そのロープの内側から一冊の書物を取り出し掲げた。

「えっ……!？」

「宝具が、二つ だと?」

アイリスファイルとセイバーも、キャスターが取り出した書物を見て冷静さを崩した。

バーサーカーの書物は開いてる状態なままなので全て同じものか

不確かであるものの

キャスターが懐から取り出した書物は、バーサーカーの取り出した宝具と同様の不気味な

気配を放つものだ。キャスターの言葉が確かなら、彼女とキャスターには何かしらの繋がりが

がある事になるが、ジル・ド・レと彼女は同じ年代を生きてたのか？

彼女達の疑問を他所に、キャスターは僅かに喜色を交えた言葉の羅列を紡ぐ。

「おおっ……いー！ フランソワっ、よもや貴方とも再会出来るとは思いませんでした。

然し 然し残念ながら、今は久方の巡り会いを祝し語り合う事は出来ません。

聖処女も、どうやら心を大きく閉ざしている様子。全ての準備がなされた後に、また

貴方とは、かつてのように魔道の深き理論について語り合いましたよ  
うとも」

「おい、ま」

待て、と告げる前にキャスターは霊体化を行う。舌打ちして、バーサーカーは今その場所

に居たキャスターの空間へと移動遅延弾を試みるが手応えはない。既に去った後だ。

取り逃がした。大きすぎる失態 アブノーマリテイの突然の出現を無視してでも職員かハサン

を招来して攻撃するべきだったが……。

(いや、T-09-90の反応が未知数な以上。他の職員達を呼び出すのも危険だったか)

妖気と言える禍々しい気配が、キャスターが去った後も人体の中身に素材であろう細い台に

鎮座された同じ材料の本から放たれている。

この本は、見る者に対し真理と言えるものを発露させる効果はあ

る。それ以外の副作用と

言えば深淵の昏き場所にしか生息しないだろう怪物の触手が人を喰らい、そのまま何処へと

知らぬ場所へと喰らった肉片を連れて行く事だろう。

キャスターが書物を取り出した瞬間、それに共鳴するようにT―O9―90こと皮膚の予言から

発される禍々しく、おぞましい空気が増すのを感じた。近距離にいたのは自身とキャスター

少し離れた場所で見守るのが、魔力に大きな対抗力あるセイバーがアイリスフィールを

守護してたから特に変化は起きなかったものの。もし、防御も何も持たないかlevel5に

値しない精神に不安ある職員やハサンなら瞬時に引きずり込まれた可能性は高い。

「……あの、あのキャスターと面識はあるの？」

「それはジョークの一種と受け取れば良いのかなMrs.。それなら最悪のジョークだ」

恐々と言った調子の問いかけに、Xはぼつさりと軽口混じりで斬り捨てる。その対応に

守護騎士は怒りの色を何度目か数え切れぬままに浮かべるも、当のマスターからすれば

表情こそ殆ど読めないものの、あの異常なキャスターと繋がりはないと平然とした調子で

返してくれた事には安心感を覚える事が出来た。薄い表情の中で、理知的な光が漂う

目線がアイリスフィールの紅い瞳を貫く。

「あのアブノーマリテイ……つまり、キャスターだが。ジル・ド・レと言う名だったな」

「ええ。あのキャスターが真実を話してたなら、そうだけど……どうかした？」

Xは、暫し考え込む姿勢に移った。Lobotomy coop内

で聖杯の知識を受信するハサンに

対して英霊の真名を告げる。そして、その説明を聞いた後に外界に居る彼女は顔を上げる。

(幼い童子たちの虐殺の経歴……あのキャスターの性質、ハサン達から告げられるアレ等

が魔力を捕獲する方法の一つとしての魂喰いと言う行動)

(……コトネ 桜が危険だ)

冷たい北風が山々の間を駆け抜け、三人の髪を靡かせる。天使が通り過ぎる幾分の間が

出来上がったあとに、白衣の女性は告げた。

「……済まない、そちらへの同盟交渉に関して、一時保留を出来れば願いたい。

直ぐに冬木市内に戻らないといけない用事が出来た」

「キャスターを追うつもりなのね」

彼女達も、周囲に流されるままに思考を停止しているような 弱い存在では無い。

目の前の華奢な体格の、一見すれば同年代か、それより幼くも見える顔に決意の色を

読み取って呟く。そして、当たり前の浮かび上がる疑問を投げかける。

「此処から町まで戻るにしても、距離はかなりあるわ。戻る為の伝手や宝具はあるの？」

どう見ても、貴方は身の一つで戻れるような感じに見えないけど」「ヒッチハイクなり、徒歩なり幾らでも方法はある」

今まで爆走してきた道路と逆方向に、有言実行とばかりに歩き出す彼女に呆れ声が

背中に振つてかかる、そして小さな手が肩に置かれた。

「無茶よ。一度、私達の拠点近くまで行って車を貸し出すわ」

「いや、そこまで好意には」

「私達の助けになってくれるのですよ？ なら、これは好意じゃなくて前払い。」

あのキャスターは……私から見ても危険に思えたわ。貴方の言う通り野放しにして良い

ものじゃない。けど、決して油断はしないでね」

Xは、じつとアイリスフィールを見つめる。そのクリスタル色にどのような想いを

宿したか、余り受けた彼女には読めずも。僅かに恥ずかしそうに思える様子で会釈し

済まないと短く謝礼の態度を受ければ、その回答で満足出来た。

——夢を見る。

あの紫色の人がいた。わたしと似た髪の毛の色の人、いつも厳しい雰囲気で身を包んでいる人。

普段のスーツじゃなく、あの人みたいな白衣で身を包んで誰かと話している。

『ルート……』

『ルート ルートか……んー んっ!? おい おいつガ■エ■ さつきもルートって

言った筈だぜ! win! ははっ! 何だお前でもこんなドジをするんだな!』

『ジエー■ route (経路) じゃない、root (根本) だ。私が言ったのは』

『はあ!? おいおいおいつ そりゃズルってもんじゃないかー? お前そりゃ』

『最初のルールを思い返してみても、これは不正ではない』

『それじゃあ、ついさつき俺が負けた taller (背が高い) もセーフでいいじゃないか』

『馬鹿 形容詞を含める事は出来ないと言っただろう』

何かの話題で互いに言い合いをしている。仕切りに人を罵倒する語句を使ってるものの

あの紫の髪の毛の人は、何処となく楽しそうな顔だった。



場面が暗転した。

『……痒い くそ 痒い 痒い痒い痒い痒い痒い痒い……感染？

……はは？ 私が？

……違う そんな筈はない。けど、とにかく痒い ああ…… ■ ■ ■

■ ■ ■

周囲は薄暗い、あの紫の人だけが首の周りや腰の部分に仕切りに手を伸ばしている。

服越しに何度も何度も指で掻き篦り、掻き出そうと爪を肌に食い込ませようとして

衣服が無ければ、その肌には掻き痕が青か黒い痣になつてゐる事が予想される。

ああ 私とおんなじだ。

「おにいさんも、虫にたかられているの？」

『……ああ、そうだ。体の中で小さな虫が這いずり回っている。どんなに手で掻いても

まったく収まらないし出てこないんだ』

声に反応して振り返る橙色の瞳に浮かぶ光は濁っており、弱弱しく彼は呟く。

『汚染レベルが数パーセント、ほんの数パーセント許容数値を超えてただけ。

それを甘く見て、 ■ ■ ■ エーム ■ ■ ■ は死んだ。酷い死に様だった。

■ ■ ■ ヤの死因だつてそうさ。会社のずさんな備品管理さえ無ければ、彼女が

あんな風になる事は無かつたんだ。あんな……クソツ あんな変わり果てた姿に。

だからこそ、私はこれ以上新たな二人が生まれないように、規律を更に重んじて動いた

もう二度と起きないように 無駄な試みだった』

『あいつ以外で、私と気さくに話してくれる相手はこの会社には存在しなかった。

考えが足りず、何時も規律を軽んじて お調子者で。よく翼の会社

に入社出来たと

常々不思議な男だった。何時か、その性格が災いするぞと忠言してたのにな……。

エ■ヤの死もそうだ。何故あんな軽率な行動をとった。それも全て規則を遵守

しないからだ、なのに誰も私の言う事をちゃんと聞いてくれない。そして、最も尊敬する彼女も逝ってしまった。私を支えていた大事な柱は全て折れた。

その後、この胸の深い部分に溜め込んでいた卵のようなものが孵化した。ソレはカマキリ

の卵のように、夥しい数の小さな幼虫が全身を動きまわっていた『君には見えるだろうか？ 私の体の中を這いまわる虫達が』

小さな紫色の、肩ほどまでの長さの髪の毛の少女に。背の高い紫色の頭髮が見下ろして

問いかける。彼女は、見上げて 何も特筆して異常のない白衣の男性の全体像を見て告げる。

「うん 這いずり回っている。桜は 見えるよ」

『……そうだ。だが、私はそれを曝け出す事は出来なかった。そして彼は変調の私を拘束し

会社に害がないが体の中を隅々まで調べ上げた。止めてくれと何度懇願しても徹底的に。

普通なら、痛みは無い採血やX線での診断も痛みは微々たるものだ。

結果は、異常なしだった。彼は、検査を実施させるような異常行動を極力控えろと忠告し

私を解放した。処置としては、妥当だったのでしよう。けど、私の胸の奥底にある

とても きつと……とても大事だった筈の部分は 限界だったんだ』

『大事だった【何か】は、やがて土気色になって泥沼のような色合いの団子状の大きな塊で

その中の様々な穴から蚯蚓のような大きさから丸太ほどのサイズの蛇へ変わっていった。

「はははは……蛇、蛇だよ。なんてびったりなんだろう」

彼は少女と同じ色の頭髪を軽く振って、そして哀しむような自身を嘲笑うように呟く。

『君の未来はどうだろう？ 立場も、境遇も性別も異なる物の君と私はとても似ている。』

幻と現実の垣根など殆どあつて無いようなものさ。ずっと、ずっと苦しみ続けている……

その伽藍洞の裸の穴は、巢へと変わる可能性はあると思わないか』桜は、それを聞いて暫く押し黙った。

私はこの人と同じ存在になるのだろうか？ 今の私は何を食べたり、何を見ても

誰と出会うつても特に何か変わる事は無いけれど。

沈黙に対して自分より高い背丈の人は、残酷なまでに優しく告げた。

『答えは、まだ出さなくても良い。君もやがて私のように失くした時に答えを得る。』

——さあ、もう起きなさい』

その人、イエソドと今は言われている人の言葉で私はもつともつと上のほうに

引っ張り上げられるのを感じた。

全ての景色がぼやけ、濁った水のように攪拌された後。瞬きの後に見上げた天井は

明るい和風の造りで今まで目にしたものがない映像だった。

「ん おお、起きたかあ？」

又ウ と出て来たのは。今まで知り合った人達とは違う。

お爺様と同じぐらいの年代の人。だけど、御爺様とは違い角刈り頭で蔽つさが前面に

出ている。桜には恐怖と言う感情は死んでるが、大半の子供達なら見た瞬間に泣き叫び

そんな強面だ。出て来た本人も自覚してるのか、ほぼ黒目の瞳孔が無いに等しい白目

が大部分を占める両目を少し見開いて眩く。

「おつでれえた。普通のボンなら儂を見た瞬間に泣くんだが……」

いや、んな事言ってる場合じゃなかったな。嬢ちゃん 覚えてつか？ 嬢ちゃんは

溺れて意識失ってたんだぜ。医者からは安静にすりやあ問題ねえって言われたがな」

何か起きたか覚えてるか？ と告げられ、桜は夢で出会った彼との前を思い出した。

白い髪 鬮髑 日傘 魔女。赤い髪の疵の人 掃除屋

——それじゃあね、桜ちゃん フランチェスカが貴方たちに宜しくって言ってたと伝えて

そうだ。彼女は最後にそう言い終わると共に海へと投げ飛ばしたんだ。

「公園の場所で 溺れた……」

「おう。嬢ちゃんの世話してる外人さんよ。ゲバプだが、ゲなんとかって人が直ぐに

人工呼吸やら応急処置はやったが、この時期の水に浸かんののは危ねえからよ。出先から戻る

道中で、嬢ちゃん背負って水浸しで走ってるのを見かけたんで訊聞いて儂ん所へ上げたんさ」

桜は見渡して見る。掛け軸の下には日本刀らしきものが鎮座しており 虎の彫刻の置物やら

今まで彼女が目にした事のないものも幾つがある。間桐邸にも多少似通った部屋はあるもの

全く違う部屋だ。少しだけ 空気も暖かさが満ちてるように思える。

目線を下に落とす、冬着は脱がされて女の子用の寝間着に変えられている。それを、少し

だけ唇を歪め、辛うじて笑顔と言える表情で初対面の老人は感想述

べる。

「ははっ 孫の古着さ慌てて引つ張り出したが中々似合ってるぜ。嬢ちゃん、もつと飯

食って背え伸びればええ別嬢さんになるな。まあ、うちの大河にや負けるかも知れねえが」

まあ育つ花の美しさはそれぞれってな！ と豪快に笑うのを、何がそんなに楽しいかは桜には

わからない。キョトンとした顔は、次に大きく開く襖の音で向きを変えた。

大小の疵が張り付いた顔には、心配の色が一瞬濃く映し出されるも。本人の性分からか

それも直ぐ打ち消し仏頂面になり、気が付いたかと短く桜を見て唱える。

「おう、外人さんよお。見た所は問題ねえが、無理に起こさず横にしたほうがいいぜえ

おりやあ台所へ行つて、粥でも出すよう頼んでくるからよお」  
気を利かせての事だろう。この藤村邸の大親分 冬木市に昔から

根付き他の暴力団やら町の風土  
を荒そうとする獣達を守つて来た極道である藤村雷画。

永く色んな人間を見て来たからこそ解る事がある。この董のような色合いの髪の子女の光ない

目は多くの過酷な事を背負い続けて来た者の目だ。最初ソレを見て表面には出さずも、壮絶な虐待

やら外道を受けており、その手引きをしてるのか先程の外人かと疑った程だ。

(だが、勘ではあるが。あの赤い髪の子は黒じやねえなあ……一応軽く事情を聞いたが、本来

住んでる家でいざこざあつて、そんで嬢ちゃんの両親の知人の縁の者で世話してらつて聞いたが

ソレ等が関わってそうだなあ)

実の息子が、こんな修羅場の世界に身を置いてる自分と違う場所で

出会った女とこさえた

目に入れても痛くない子をずっと愛してきたのだ、例え縁もゆかりも殆どないとは言え子供は

可愛い。普段は外を出歩いて見ず知らずの子供に突然出くわせば泣かれるが、それでもだ。

出来る事なら自分が手を出す。それとなく口にしても、あの幾分血の匂いが染み付いている

どれ程の鉄火場を体験すれば、あの若い身空であのような瞳になるかと言う女は表情こそ

自分には負けるが外面良くないものの、情は籠った声で気持ちは有難いが身内でこれ等は

処理しなくてはいけないと告げられれば、それ以上こちらからは口挟むものでないと感じた。

(妙なもんを拾い上げたなあ、我ながらよお。ヘッ まあ長く生きてりやあ、こう言う事も

あるつてもんよ。なあに、助けを請われれば何時でも この正義の味方藤村雷画が出るってなあ)

柄にもねえ事呟いてるぜ、と一人何が楽しいのか笑う雷画爺が離れていくのを感じつつ

ゲブラーと桜は互いに数秒見つめ合ってから、しびれを切らしゲブラーは彼女の前に近寄り

跪いて視線を合わせた。その顔には何時もの怒りが伴っているが、それ以外の感情も含んでる。

「……悪かった、な。目を少しでも離すべきじゃ無かったんだがあの時は奴を倒すのに入れ込んだ」

気にしていないと小首を横に振る。僅かにあけ眉間の皺が一瞬和らいだ気がしたのも束の間

何かに気付いたかのように更に皺が濃くなった。「だが、な。ああ言う奴が側に現れたら、直ぐ声を出せ。何も言わないでいたら

助けようにも、助ける事だって出来ないからな いいな？」

私は管理人へと今までの経緯を伝えに行く。と、立ち去る彼女を見つめつつ桜は小窓へ首を向ける。

真つ暗闇の中に、星が散りばめられている。

君もやがて答えを得る。

本当だろうか？ 私のこの空っぽの中が、満たされる時があるのだろうか。

独りぼっちの寝室の中で、桜は夢の中で誰かが呼び掛けていた声を眩いた。

「……ジエームズ エリヤ ——カルメン」

## 談合：幕間

緊張から解放された彼はハイアットホテルの窓から見える、遠方の繁華街の光

自動車や街灯など動いたり動かない小さな明かりを何も考えず眺めていた。

全く生きた心地はしなかった。何だあの魔術師は？ 妖怪爺いは生まれつき既に

化け物だった為に、そう言う存在だと括られてるから納得出来るが。偉ぶった

あのケイネスと言う人物は、ほぼパーパー魔術師の鶴野でも見ただけで全身から

発される魔力の濃さは最高峰だと感じられた。隅に控えてるランサーに至っても

L o b b o t o m y c o o p 内で見たハサンと違い圧倒的な凜凜しさと凄味がある。

あれが爺いが口にしていた、戦争の正騎士の三騎の内の一人と言う奴かと

心底身震いがする。よくもまあ、あの愚弟はあんなもの達と闘う事を決めたものだ。

尊敬と言う気持ちは全く芽生えずとも、無謀だと言う呆れの感情は泉のように湧く。

(いや、それより驚くのは……そんな奴等を目にしても余り取り乱さない自分自身か)

いま働いてる会社内で直接命懸けで給仕したり 話しかけたり掃除したりする存在は

聖杯戦争の英霊と同等の力を備える怪物ばかり。最初は泣き叫び、床やら配管に

齧りついてでも作業を拒否してたが。いま目の前でケーキを貪り食う上司と、その

同僚等によって泣く泣く自分もエージェントと言う者達と同じ行



動をとる内に

段々と度胸が付いてきている。いや、恐怖や生存本能麻痺しちまつてるんだ。

あの何考えてるかさっぱりな女の所為だと何度目かの軽い怨嗟の声を心中に浮かべ

あの魑魅魍魎の巣窟に引きずり込まれる前なら時計塔の魔術師やサーヴァントを

前にしても震え上がるだけで喋る事も出来なかっただろう。

だが、気づけば同盟関係も取り付ける事は出来たし、そいつ等が上層にいる中で

呑気に茶と甘菓子を口にする余裕さえある。

いや……ケーキに関しては目の前の菓子魔人が秒内で消費してるのでアウトだ。

これ以上見れば、胸やけどどころか以前治療した筈の虫歯部分が痛みかねない。

「お前 もうそろそろいい加減止めとけよっ！」

「ひゆるほはひーへふほっ！ ふわっへほふひひはへひふ ひゃへふはへへしょ!？」

ふぁはひ ひふはほわはひへふほっ!？ ひ ふ はー！」

「全部食ってから喋れやー！」

「ゴクンツ!!」

ツルノはいいーですよっ！ すわって用意した台詞 喋ればいいでしょ!？」

わたし 淫魔呼ばわりですよ!?! い ん まー！」

生前でも死んだ後でも、今まで言われた事のない人生初めての屈辱ですよ！ とポンポン

目の前の彼のc o o p内上司 ユメカは怒りのケーキの自棄食いに没頭する。

交渉が終わった後、使い魔などの監視圏内から外れるやいなや滝のような涙を

流したのはギョツとしたものだ。そして理由を聞けば、それが自分

に対する侮辱の発言

によるものだと言うのだから始末に負えない。ついさつきまで保っていた緊張感は

バイキングコーナーに入る頃にはすっかり消え失せていた。

積んだバベルの塔染みた皿の山と、そして今も置いてあるケーキを見て。

周囲からの畏れる視線に羞恥心は爆発寸前だ。

と言うか、こいつの胃袋は本当にどうなっているんだ。主に内臓器官全ては

今のご時世の女は、甘い物は別腹とかテレビで見た気がするが。これは別腹と言うか

ブラックホールとか、そう言ったものじゃないのか？ いや、魔力で出来てるのなら

腹の中に入れた瞬間、全てがエネルギーに還元されるのか。便利だな、サーヴァントは

もういつその事サーヴァントをケーキに変える魔術でも編み出して、こいつに

全部食って貰えば戦争だって集結するだろう。

下らない思考を少し脇に追いやって、もう少し建設的な話でもしようと思う。

「つーかよ、戻らなくて良いのか？ 俺達、こんな場所でのんびりしてる余裕ないだろ？」

管理者と言われる、あいつには仕事が終わったら帰還しろと言われてた。明確な時間を指定

されてた訳じゃないが、早めに戻るに越した事はない。

「あー、ツルノには伝えてませんでしたね、まだ。

管理人から、このケーキバイキングに入る少し前ぐらいに連絡が来ていて

貴方にとっては義理の姪っ子さんになるMiss桜と同行していたゲブラー様との通信は

回復して居場所は把握出来ましたので。管理人が市内に戻るまで

は衆人のいる中で

待機して下さいとの事です。迎いの車は来るらしいですよー」

何でも、人を襲うような危険なアブノーマリティ……サーヴァントが確認されたんですって。

と、他人事のようにケーキを頬張るのを見て青筋が回答を受け取った彼に浮き上がる。

「おまつ……い。 そう言う事は早く言えよ！ んなヤバイ奴が居るんなら早く戻るほうが」

「もーツルノ、落ち着いてくださいってばあ。この戦争のルールって神秘の守秘が重要項目

なんででしょう？ だから、人がいっぱいいるホテルにいればノコノコその建物に襲ってくる

ようなのは居ませんよ……多分」

「なんで断定じゃねえ語尾なんだよ!？」

例え一般人が沢山いるような、全国に情報拡散されそうな場所であろうと平然と虐殺を

愉しみそうなセフィラが一人心当たりあるユメカとしては、この甘い一時がそんな

悪魔より恐ろしい存在が介入して来ない事を祈るばかりだ。あれは遭遇すれば回避不可避

な悪夢と言うか何と言うか、筆舌し難い彷徨う天災なのだから。

ツツコミつつ、目の前にある茶を飲んで平静さを僅かに立て直して質問をする。

「ゲブラー様ってのは?。」

「セフィラです。と言っても、詳しく鶴野にセフィラの内容を話した事って多分ないですよね。

謂わば会社の大きな歯車の一つです。ネツアク様は、一番最初に見た事があるでしょ?。」

私達の会社は、上層・中層・下層の三つに分かれてまして。全部で十人の大きな権限を有す

方達で仕切っているんです。管理人も、セフィラの一人ですが序列

で一位と言う事ですね」

ゲブラー様は、セフィラ切つての唯一の武闘派なんです。と、補足説明しつつユメカは

新たなケーキを目の前に置く。もはやソレに何も言わず頬杖をつきつつ鶴野は呟く。

「そんな強いのか」

「強いなんてもんじゃないですよー。アブノーマリテイの数体位じゃ、あの方を押し留める

事は出来ませんからね。今は力をセーブしてますけど、完全に開放したらエージェント全員で

綿密に作戦を練って波状攻撃なり何なりしても太刀打ち出来るかどうかかってレベルですし」

「……なあ、そいつ人間なのか？」

「生前は間違いなく人間だったと思いますよ。今はセフィラですけど」

いや、だからセフィラって結局何なんだ？ あの花け物共と互角か、数体でも蹂躪する事が

出来るって、ソレのほうがもう花け物じゃないか。もう、そいつに聖杯戦争に出て貰えよ。

と言うか、それを部下に出来るアノ管理者もどう言う奴なんだよ？

質問するだけ、疑問が次々と出てくるのに頭が痛くなってくる。更に踏み込むと寝ている獅子

を起こすような縁でもない事になりそうな予感がビシビシとしている。故に、彼は追及の

代わりに長い溜息だけを吐くに止めた。

「もー ツルノ。幸せが逃げちゃいますよ、そんなに溜息ばかりついちゃ」

「うるせつ。……あのサーヴァントを見て、目をハートマークにした癖によっ」

普段から発破をかける為の工夫なのか、それとも鬱憤晴らす為に自分を利用してるのかと

思うぐらい口の悪さが出る時も目立つ女だ。だからこそ軽い意趣返しと言う感じで皮肉を飛ばす。

だが、相手は水をかけられた蛙と言う感じで涼しい顔でケーキを食べ進めている。

「あー、あれですかあ？ 演技ですから」

「……は？ いや、お前 あれはどう見たってよ」

「あはは ツルノ、本当にアレは猫被ってただけです。精神汚染……チャーム魔術って言うもの

なら L o b o t o m y c o o p でも数体は発するアブノーマリテイはいますし。私これでもエージェント歴

は結構長いんですよ？ 見た瞬間に意識喪失させるような代物でない限り平気です」

あのアブノーマリテイは確かに顔立ちは中々整ってましたけど、とショートケーキの上ののった

苺を頬張りつつの感想だ。

嘘や虚勢と言うわけでなさそうだ。誑かされてるのなら、少しはあのランサーとか言う奴を

擁護するか、味方としての発言もして良さそうなものだが、こいつは何時を通りだと解る。

その様子に、何故か自分が安堵や喜ぶような複雑なものが胸の中を渦巻いてるのを無理に

誤魔化すように、少しだけ残ってた茶を一気に飲みつつ喉を潤す。吐息をつきつつ会話を続ける。

「まあ……お前が平気だつて言うんなら、別にそれで良いけどよ」  
「心配してくれて有難う御座います。管理人から軽く説明を受け

て、少し心配はしてましたし  
最初は顔を見たら、背筋が熱くなって意識がふわっと浮き上がるよ

うな感じがしたんですけど。  
普段のアブノーマリテイの世話だ、気を抜いたら終わりだつて思っ

たら一気に冷めましたよ」  
「そりゃ、そうなるよな」

黒子の呪いだか何だか知らないが、普段から超常の存在に毎日死ぬか生きるかの綱渡りな生活

してるのだ。チャーム自体は女性特化で、レジストは一定レベルなら可能だと言うハードル低い

事を抜きにしても、ユメカ以外の女性エージェントでも魅了される奴は殆どいないだろう。

ちよつとお手洗いに行つてきますね、と席を立つのを見つつ。ようやく一人静かになれたと

ほつと一息ついて、今度はゆつくりと茶を入れて口に含む。

(酒……そういや、もう最近ほとんど口にしてねえ気がする)

強制的に禁酒して数日……いや、一週間経ったか？ どうにも体感時間が曖昧だ。正確には未だ

三日か四日ぐらいしか、あの会社に拉致されて経つてない筈だが。あの会社内で過ごしてると

どうにも竜宮城の浦島ではないが、長い時間過ごしてる錯覚に陥つてしまう。

アルコール中毒の末期だった自分だが、毎日が死と恐怖の隣り合わせの衝撃の連続で酒を

欲しようとする前に、生きる事に精一杯で。この前、冬木のセンチメント方面で帰りがけに

買った数本を寝酒に一口ぐらいしか口にした記憶がない。

だとしても、成人してから三十路手前まで年がら年中ずっと晩酌を続けてきた自分が

この魔術師達の常軌を逸した戦争が終わった後で、生まれ変わったと心を入れ替えて禁酒し

真人間になると言う事はないだろう。例え、妖怪爺いがこの世から消え去つても。

犯した罪が消える訳じゃない、染み付いた恐怖や自己嫌悪が無くなる筈はない。

慎二が帰ってくれば、あの爺いから解放された吉報こそ伝え……伝えした後、俺はどうする？

妖怪爺いに命じられたからと言って、痛めつけた娘は恐らく遠坂の元に還される。

あの弟も、全てが終わったなら。また根無し草となり世界中を転々して、時々冬木に顔を

見せる事もあるかも知れないが、それでもあの家に戻る事はないだろう。

俺はどうする？ 慎二を成人まで育て上げるのはまず間違いない。間違いないが……。

（——そうか。俺には、俺自身の展望つてのが全くないんだ）  
考えてみれば当たり前だ。ただ目の前の暗い現実に直面し絶望して、素質が無いと言う

魔術師の世界では落第生なれど、外道の魔術師にどっぷり染まる事を忌避していた

自身から見れば願っても無い幸運と受け取り、間桐と言う大樹の割れ目から出る蜜の

おこぼれを吸って生きてきたのが俺だ。

ずっと、ずっと。妖怪爺いの影で、慎二が誰かと子を宿し、それが魔術師の素質あれば

新たな傀儡となるのだろう。それをただ憐れみつつ、そうならなかった自分を安堵して

ひっそり墓の下に入る。つい数日前まで、その未来は当たり前だと考えていた。

だが、世界は変わった。あの弟が呼び込んだ鬼札は、まさしく自分達間桐を狂わす者

であり長く続いた家系を終わらす者だ。例え、この戦争で聖杯を獲得する勝利者か

敗北するなれど。絶対にあいつは人から外れたアレが世に蔓延るのは許容しないと

断言していた。なら、それは遂げるのだろうかと思信めいた予感がする。

間桐臓硯が滅びる。それは俺にとっての解放、慎二も魔術師の道な

どでなく自由な未来を

掴む事が出来ると言う事だ。

アレが消えたら自分はどうすればいい？ 何か趣味でも持つとか

？ いや、そんな

老成するまで仕事一筋で生きて来た殊勝な人間染みた考えが出来る奴か俺は。

犯した罪を償わず、慎二の成長を見守りつつノウノウと生き続けるのか。

少し前までなら、それでも構わないと思っていた。少し前までなら「ちっ……あいつ何時までかかっているんだ」

御手洗いから戻らない彼女に対し意識をやって、懊悩を打ち切る。まだ先に対する

答えを出すのに、気持ちの整理は出来ないでいた。

「……Fポイントへの設置 完了」

黒髪のショートヘア、全体的に引き締まった筋肉による曲線美が西洋の美しさとも異なる

和と言う名の美しさが際正せている。久宇舞弥は、各ビルの支柱へとプラスチック爆弾の

設置を丁度終えた所であった。後は、安全圏に避難してビルを爆破すればランサー陣営の

工房を完全に破壊出来る。その前に民間人の避難や、ランサーのマスターが居残る為の

暗示などの前準備も残っている。魔術の手解きは切嗣より受けたが、そう言った暗示の

魔術は破壊工作などに比べ不慣れである事は自覚している。だからと言って、不得手で

ある事を理由に拒否しようなどと考えは欠片も浮かばない。全ては切嗣の勝利の為に。

人が出入りする事は殆どない建築の中心部分を抜けて地下駐車場



のあたりへ出る。

僅かな体に付き纏う疲労を紛らわせるように首を回す。

あのキャスターであろうサーヴァントが召喚した魔物の所為で、予定してた計画にも

遅延が生じた。主に切嗣は精神的な負荷が大きい、今は近くの安ホテルで横になっているが

まともに体を動かせのは早朝まで掛かるだろう。自分一人でやるしかない。

駐車場近辺に、人気は殆どない。幸運だ、なるべく人の目に触れずに完了出来れば。

……？ いや、違和感がある。今の時刻は深夜に差し掛かるが、それでも全く駐車場辺りから

人が居ないのは不自然ではないか。

戦場で鍛えられた勘に従うままに、携帯しているグロッグを引き抜く。

「……あちゃー、気づきましたか。なるべく穏便に気絶なりして終わりがかったんですけどね」

間延びした、緊迫感と無縁そうな女の声が柱影から生じる。私はこの声を知っている。

グロッグ17の引き金に指をかける、既に人払いの結界がなされた駐車場に銃声が轟く。

「のわっ!? ちよっ 普通前口上ぐらい言う暇与えるでしょ!」

空気読めない人だなー もうっ」

柱の影に隠れた。前傾姿勢に移り、駐車してる自動車の死角に移動して射撃地点を変更する。

「ねー、そう行き成り喧嘩腰にならないで、ちよつと話しませんか? 私の上司も、そちらの陣営さんとは仲良くしようって姿勢なんですよ。まあ部下には部下

なりの方針の違いとか、報連相の食い違いがあるって言うのは承知ですけどね。

そんな銃をぶっ放してたら、後でホテル駐車場で起きた事件として

持ち上げられて

此処のホテルも暫く立ち入り禁止になっちゃいますよ。そうなる  
と、二度と私が此処で

ケーキバイキングに参加できなくなっちゃうんで止めて欲しいの  
が切実なんですけどー」

その内容が内容だけに、隠れ甘党な舞弥は一瞬体の動きを止める  
も。直ぐに乗り物の影から

飛び出して連射射撃を試みる。少しだけ間が抜けた悲鳴と共に、ま  
たアノ女が遮蔽物へ隠れた。

肩には一発着弾したのが視認出来た。

「いったー!? その弾、間違いないで魔力籠ってますよね! めっちゃ  
痛かったです

本当滅茶苦茶痛かったですよ!」

ふざけた発言だ。遠距離の攻撃手段は持ち合わせてないのだろう  
か? いや、油断はしない。

あの蝶の姿をしたサーヴァントとの交戦による完全な敗北を受け、  
切嗣に自分も対策を

打ち立てなかった訳ではない。用意していた銃弾には、出来る限  
りの強化や対英霊にも

通ずるように加工されたものに変更した。それでも本物のサーヴァ  
ントに対して豆鉄砲ほど

の威力にしかならないだろうが無いよりはマシだし使い魔程度な  
ら殺傷可能だ。

(通用するなら予期していたがサーヴァントが召喚した使い魔か)

記憶の中では、間桐の現当主と同行してた光景の1シーンが脳裏に  
過る。

あの時から既にサーヴァントを間桐家は召喚していたと言う事だ  
ろう。

中々の策士かも知れないが、この銃弾が通用するなら話は早い。迅  
速に処理して

計画を遂行しよう。

「あーもう、話し通じない人だなー……ハア 穩便に終わらせたかったんだけどなあ」

声は幾分陽気さが含んでたが、それが消えた。そして隠れる柱から僅かに魔力と思える

密度が濃くなつていく……宝具かつ。

（此処で爆破させれば、この使い魔も質量の圧力に太刀打ちする事は流石に出来ない筈。

……いや、そんなテロリスト染みた方法は取れないか。

相手の宝具も自分すら巻き込む強火力の宝具では無いだろう、なら精神操作系？）

自分は切嗣の補佐パーツだ。例え自分が死んでも切嗣なら聖杯を獲得出来ると信じている。

聖杯戦争の序盤で、こうもあっさり退場する事になるのは不本意だが。それでも構わない

無線で切嗣のほうに傍受はされている、残った記録が敵のアドバンテージを奪う。

どのような宝具か、しっかり見極めてやろうと腹を決めて姿を現した相手を睨む。

そう、睨むのだが……相手の異様な姿に、一瞬だけ本当に素のままに眩いてしまった。

「……は？ コアラ？」

「熊ですよ、ティディベア!! 誰がコアラですかっ!!」

何なんだろう、この女は？ まともな行動をとろうとする意志を持ち合わせてないのか。

あのスーツを着ていた女は、その普段の恰好にプラスして僅かに耳が齧られたクマの耳

灰色と茶色が混ざった防弾らしき全身を保護する衣服。そして両手には、綿らしきものが

はみ出した着ぐるみのグローブラしきもを装着し、それでボスツボスツと気が抜ける

擬音と共に両方の拳を打ち鳴らしていた。ふっふっふつと、今のご

時世アニメでしか

お目につかない悪役笑いと顔も浮かべるか凄味がない。

一瞬、どう対処するか選択肢が幾つも浮かんでは沈んだ。逃げるその馬鹿げた恰好に

コメントする。穏便に病院へ行く事を促すなど e t c e t c ……。

だが結局は防護箇所が一番無い脳天へと改造したグロツグ17を射撃した。

パキユン！ キンツツ

「あー、本当に。まったくこちらと会話する気ないですね。何処となく貴方

セフィラに似てますよ」

(……魔術礼装)

銃弾を防ぐ反射速度。そして綿で合成されてるとは思えない強化された弾丸を防ぐ防御力。

馬鹿げた恰好をしてるが、実用的な機能は持ち合わせているようだ。

地面を相手が蹴る、前進する速度は速い……っ。持ち合わせた銃で応戦するのは分が悪いと

舞弥は即座に決断し、一発だけ動きを少しでも止める意味合いを込めた発砲を行うと共に

地面へと取り落として腰に備え付けたナイフを引き抜き様に、斜めに切り上げる。

おっとお、と相手はまたもや気の抜ける声を出すものの。その柔らかい素材で出来てる筈の

クマのぬいぐるみのグローブは、ただの物理的な素材を豆腐のように切り裂ける自信の刃を

表面だけに滑らせるに止める。

「ちよーっただけ、大人しくしてください よっ！」

空気を切る音、頭部目がけ振られた手を屈みつつ回避しながら相手の胸部にナイフの

先端を当てる。鉄に鉄がぶつかる音を耳にして、僅かに眉間の皺が強まりながら

苛立ちの力を蹴りに凝縮し、その勢いそのまま間合いを開ける。

恰好は変てことしか言いようがないが、生半可な火力で倒れない装甲を備えている。

幸いなのは、動きだけは鈍そうと思える所か。

片手にナイフを逆手に構えつつ、予め安全装置を外しておいた予備の拳銃を乱射する。

両腕に交差させたグローブと胸部に何発か命中するも大した痛手にはなっていない。

だが、視覚を一時的に塞ぐ要因となりえた。器用な手つきでピンを引き抜き自分と

サーヴァントが遣わした特殊な使い魔の中間へ放り投げつつ、素早く遮蔽物へ隠れる。

一瞬遅れて、塞いだ耳に耳鳴りする轟音と背を向けていても瞼の中に一瞬だけ暖色を

感じさせる程の光量を感じた。音が途絶えると、目を開き影から相手の出方を伺う。

……横に突っ伏している。動きは見えない、沈黙したか。

警戒は緩めない。どんな奇天烈な恰好や動向をしてるとは言え英霊の一角か

その類なら突飛な襲撃を擬態しつつ行って可笑しくない。

露出していると思える、攻撃が通じそうな頭部に照準を合わせながら、にじり寄る。

加工したとは言え、一番威力のある射程内で撃たなければ効果はない。

一步 二歩 三歩……この距離なら。

歩みを止め、引き金を引き絞ろうと指を掛けた瞬間……その背後に気配を感じた。

反射的に振り返り銃を気配のするほうに構える、その目に白い骸骨のマスクと

華奢と思える細いしなやかな体つき、そして青藍を見た。

「良い反応だ 時代が異なれば我等と競い合えたと思う程に」

(アサシン……!)

港倉庫方面でも見たアサシンのサーヴァント。バーサーカーと戦った軍勢等の生き残り

この聖杯戦争で暗躍する、どの程度あるか不明な多勢で動く影の刺客。

「つ か ま え た」

「……っ  
?!?!」

撃とうとした、だがその前に柔らかい体毛が胴体に滑るのと同時に背中から抱きすくめ

られると言う、状況に不似合いな感触が動きを阻止する。

さつき一時戦闘不能にしたと思ってた、女。スタングレネードをどう言う方法か防いだ？

いや、考えてる暇はない。背後の間桐のサーヴァントの尖兵と思える者、いま忍び寄った

アサシン 挟み撃ち 拘束 迎撃手段 は。

そこまで考え、久宇舞弥は背骨と肋骨に急激な負荷を加わり意識を手放した。

統率のハサンは、両腕を掴まれぐったりと倒れる刃物のように鋭い霧囲気を担っていた

女を見下ろす。気配遮断は普段通り行っていたのだが、この女はそれでも自分が後僅かで

仕留められる距離に寄る前に振り返った。サーヴァントに比肩する程の危険予知は

賞賛しえる。先程の言葉は彼女自身の素直な誉め言葉だった。

実際、指示された通りこちらへの意識を向ける事以外で傷つける意思は無かったものの

戦闘力はともかく、この先に立ち塞がる存在として脅威になり得るとは思えた。

(まあ、我等には生殺与奪の権限は今の所無いがな)

「どーも、有難う御座いますね。もー、この人つてば全く話を聞かず撃ち殺そうと

するんですもん。酷いと思いませんか？」

朗らかな虫も殺せない調子で言ってるが、手練れな戦士を熊式鱗折りで意識をつい

さつき奪ったのを見ると、その柔和さも不気味だ。

日夜、通りすぎるたびに捕食しようと感じる目線が扉越しに感じるストレスが

鰻登りな社内で、その捕食者達ともある程度我等と同じく対抗する力を持つ者達は

通称エージェントと呼ばれ、この女もそうだ。

こいつ等は、確かE・G・Oと呼ばれる武器や防護服、それに身体能力を上げる効力を持つ

魔術礼装を使用して怪物達と立ち合いを演じているが、サーヴァントと言う仕組みを

理解してれば、それがどれ程に可笑しいか解る。ハサン達の何人かは、我等にも

都合が良い便利な代物ではないか、と嘯く馬鹿はいるが私は違う。

あの怪物達は、神代か本当の煉獄に住まうであろう人々の信仰によって形成された

英霊と反する、謂わば反英雄だ。收容する魔術様式でさえ、どれ程の仕組みがあれば

常に大人しく出来るか不明なのに、それが暴れ出しても只の幽体とも言える存在が

数の暴力で防ぐ事が出来る。これは正しく異常である。あのブリテンの騎士王や

フォオナ騎士団の槍、征服王の戦車のような武具も多くの歴史を紡ぐに至った偉業

あるからこそ強い輝きとなり宝具となる。しかし、怪物達の爪や牙を僅かに切り取り

それを武器にしたからと言って、ただの農民が怪物の爪を槍代わりにしたからと言って

直ぐに英霊に比肩する騎士に成り得る筈がない。にも拘わらず、それが通じてしまう

あの会社の異常さは、今の説明で理解出来るだろう。

とりあえず、厄介な人が目覚める前に爆弾回収しないと。と呟き、のんびりとした

伸びをする女はサーヴァントに匹敵するような様子の片鱗は無い。社内の他の

者達もそうだが、大抵は魔力で出来てると言う点を除いては一般の人間と違いは

無いのだ。なのに、何故あのように怪物達の檻を守る番人の妖精として正常に動ける？

「……何故、お前達は。あの女の下で甘んじて動いてる？」

どれ程の対価があれば、あの異常な中で平常さをもって当たり前のように生きれるのだ」

統率は、割り当てられた仕事をこなしつつユメカに問いかけた。

質問された本人は、少しだけ立ち止まりハサンの代表者を見つめ、僅かに考える

仕草をしてから、こう答えた。

「——そう生きるしか、選択肢が無いからですよ」

その目を見て、僅かにだが背筋に悪寒が駆け巡った。

顔は微笑んでいる、然し瞳の奥にはおぞましい程の憎悪……いやコレは憎悪なのか？

異なる人格と言うものを駆使し暗殺の生を送って来た身ゆえにバラバラな記憶だが

それでも生きて来たと言える経歴の中で人と接したと言える映像がある。

性や年齢は様々なれど、殺した瞬間や騙されたと気づいた瞬間。手に掛けた者達は

誰しも我等に対し、自身と同じか、それ以上の苦しい死を辿れと



願った目をしていた。

この女の目は、それ等のどの目とも違う。深く、深く昏い目を兼ね備えている。

馬鹿な……只の女が身に着けられるモノじゃない。私はここまで深く絶望を認知して

背負ったものは見た事がない。

そんな統率の戦慄を知ってか知らずか、次にさっさと任務を終わらせて管理人と合流

しないと、と呟き。仕事の終わりを催促する時には、その瞳は顔と同じくおっとりとした

感じへと戻っていた。

自然と溶け込み、鉄筋コンクリートの森の中で英霊としての最先端の科学の捜査網を

潜り抜け、ただ立っているだけで誰の知覚にも残らぬ幻影とも言える気配を殺す力を

行使する中、廁に入っている時間が長すぎるとぼやく男の足を抗議を込めた軽い蹴りで

応酬している、先程まで相対していた闇を瞳に負う女を遠巻きにアサシンは見守る。

(今は、ただ影として黙しておこう)

(あのバーサーカーが、何故あれ程まで理知的に動いているのかは使役する魔獣が狂気で

動いており、それを統率する頭脳だからと考えたが、それは大きく間違ってたかも知れん。

我等の考えが正しければ……)

——場所??

柱に括りつけられた少女達が居る、いや括り付けるではない。縫い付けられている。

鉋 いや、もつと鋭い錐のようなハサンが使う武器に近い道具。

それで直接手の平の中央を

その凶器で肉と骨を貫通して、柱に打ち込まれている。謂わばキリストの磔刑だ。

「……あ、う。」

常人なら瀕死でハヤニエかソレに似た虫の標本のように人間がさ  
れてるのを見て悲鳴を上げる

若しくは直ぐ助け出そうとするだろうが、その場にいる只一人健常  
な出で立ちの夜の繁華街

とかなら女性に一夜の甘い一時と誘えば好感触を得そうな幾らか  
二枚目な男が一人。

その男は、普通の人の反応と異なる満足気な顔つきで発声も碌に出  
来ない少女を見終えてから

適当な場所に腰掛けつつ、ある物を触れた。

おぞましい悲鳴とも呻きとも区別つかない低音が生じる。最初こ  
そ、その反応に幾らか

納得してだが、次第に変わるそのくぐもった歪む声に対して頭を搔  
いて彼は眩く。

「あー……そうか。同じ部分の腸を刺激したからといって音階が一  
定では無いんだな。

まいったなー これも失敗かあ」

男が弄繰り回しているものを、一般大衆の何人か一目でそれが何か  
を脳が認識出来るだろう？

ほぼ衣服を取り払われた、元は第二性徴を達したかソレ以下の女  
性のハラワタは飛び出て

何本もの大腸 小腸と言える内臓器官がバラバラに並べられてい  
る。鍵盤に見立てて。

その悪魔のような所業を平然と行う者 雨生 龍之介はキャス  
ターことジル ドレと出会って

からは、彼特有の感性に基づいて度々連呼されるc o o iな刺激は  
未だ出会ってから一日過ぎたか

その程度ながらも、何度もc o o iを味わう事が出来ていた。

深山での児童がキャスターの召喚した魔物によって、外に出る希望を一瞬与えてからの

蹂躪しての捕食。生きた人間を使つての弦楽器や芸術品の作成。

それ以前に行つていた連続殺人ともまた異なる気色の新たな道徳と掛け離れた意味合いで

兼ね備えられた真理の一端を掴み取れたように本人は思つていた。キャスターの魔術で、既に死んでも可笑しくない状態なのが辛うじて息ある変わり果てた

少女の姿に軽い落胆の溜息をついてから、ふと昇つた気配に振り向き声をあげる。

「ああ。お帰り 旦那」

彼が殺人の師として仰ぐサーヴァント。雨生 龍之介は自身が聖杯戦争と言う大規模な

魔術儀礼に参加している自覚は無い。実家の古文書から儀式と言う死の探求のアレンジの

果てに棚ぼた式に呼ばれた悪霊に近しき英霊。青髭の旦那 その彼は挨拶に対し無反応で

カツカツと人間オルガンと呼称する物体に近づき……渾身の英霊ならでは腕力で潰す。

龍之介の、必死に夏休みに作った工作の課題が台無しにされたかのような声を他所にジルドレは

その目に並みならぬ感情を込めつつ謳う。

ジャンヌと彼の歪んだ憧憬が魂の似た輝きから惚れ込んだセイバーの拒絶。聖杯の獲得を行い

聖処女と邂逅すると言う目的は無くなり、あとは彼女と時許すまで共生だけ望めればと

思つた独り善がりな祈りが踏み滲まれた事は彼の余り容量ない許容を超えていた。

フランソワと誤解する旧友の思いがけぬ再会も、腹の底から昇る衝動を抑え込むに至らない。

その常軌を逸した精神から発する演説に対し、龍之介は心からの理

解はしてない。神の悪戯か

彼等は齟齬が一致しておらずも、心の器が何処か決定的に欠けてるものが割れ鍋に綴じ蓋と

いった具合で偶然今は噛み合ってるが故にとんとん拍子で話は進んでいる。

高尚な理念の基に、聖処女が大衆に裏切られ最後に魔女と呼ばれ摩耗しきって失った心を

自身を取り戻すと明後日の方向に錯乱の中で決意するキャスターと、女絡みの厄介事で

旦那が昔惚れ込んだ女との諍いかと、軽い受け取りしかしてないマスターの彼の心境には

大きな隔たりが存在している。どちらも互いの根元を真摯に見てない事は幸運なのだろう。

「龍之介 まずは今捕獲している子供達を全て贄とし更なる数を浚いますよ」

「OKだ、旦那……あいてて」

「どうされましたか？」

「いやっ、ちよいと肩がね。まいったねー、どうも この年で四十肩とか洒落じゃないな」

意気投合するマスターの彼は、肩に覚えた軽い痛みを苦笑しつつ回して答える。

キャスターを召喚する前、センタービル近辺で儀式に良さそうな女を誘うのが空振りに終わり

再度人並みを行きかけた時に、見知らぬ誰かとすれ違い様にぶつかった箇所なのを本人は

既に頭の中から抜け落ちてはいるものの、痛みは時々彼の中で蠢いていた。

聖処女と邂逅させてくれたマスターの彼に対し、ジルドレも感謝を持ってしている。無理を

なさらないでくださいと労いつつ、軽い魔術で痛みを和らげると共に懐から腕輪を取り出す。

「龍之介 これを御使いなさい。未熟に相応の意志しかない子羊達であれば手を握るだけで

貴方に従うままとなるでしょう」

「おっ！ ありがとうー旦那っ

それじゃもーつと、この町にc o o oを広めようぜ！」

彼等の運命は、正しき定めでは騎士王達の鉄槌により戦争中盤にて脱落する事になる。

無邪気にはしゃぐ龍之介に、子を見守るような笑みを浮かべるキヤスターは真顔に戻り

その出目金のような魚眼を暗闇の虚空がある横に向ける。

「ん？ 旦那 どうかしたかい」

「……………いえ、何でもありませんよ」

(何処からかの視線……………私の結界に悟られる事なく?)

気の所為かとは思いますが海魔の守りを強めておきますか)

産まれながらにして、人としての大事な部分を欠落しつつも人の中に潜み生きる彼と

焼け付く程の眩しさを失い、人の心を捨てた魔導士達の因果も徐々に狂おうとしていた……………。

## 暗影

ウェイバー・ベルベットは朝陽の零れる下の中で激しい問答をサーヴァントと

交わしていた。彼の激しい詰問に対し、古代の王 イスカンダルは眉を吊り上げ

自然と人が平伏したくなる気配を発散しつつ野太い声を家の一角に響かせる。

「——成程、あいわかった!! つまり余が敵の首級をとればズボンを履かすっ!

そう誓うわけだな?」

「……お前、そんなに外を現代の恰好で出歩きたいのかよ」

こいつは一体何なのだ。通信販売を使ってシャツを買ったりなど、人の目を盗んで

やりたい放題だ。何度も実体化は控えろと言っても聞く耳持ちやしない。

図書館の不法侵入とすら言い難い夜間強盗から始め、自分の資金を濫用しては

現代の娯楽品を買い漁りて間借りしている老夫婦の一室でウドの大木のように

ゲームに勤しんでいる。これでは英霊と言うより魑魅魍魎を引き連れる東洋の

大妖怪のぬらりひよんなどの呼称が似合う。

「キャスターの居所も探さないといけないって言うのにさ……あの時のあいつが

そうでないって事は未だ気がかりだけど」

そうなのだ。今日の日付になる前日、ライダーの宝具で平衡感覚が未だ不安定な頃

突如教会より上がった狼煙。使い魔を飛ばして見ると教会の監督役より通達あった。

——キャスターのサーヴァント、戦争に対する不義理働かしたり。

神秘の秘匿を怠り冬木の町にて市民を失踪・殺人を繰り返している。よって

討伐を各陣営に命ずる。報酬は、かつての戦争より貯蔵されし令呪である。

驚きは一入にある。テレビでも報道されていた穏やかでない事件にサーヴァントが

関与した事もそうだが、今までキャスターと思い込んでいた者への対処を

考えあぐねていた時に、思いもよらぬ場所から真のキャスターが露見したのだから。

あの港倉庫で大規模な召喚魔術を使役して全体に混乱せしめた存在。アーチャーに

対しても強力な魔術砲撃で牽制を入れた、ウェイバーには敵であるものの一応の恩も

あると言えはある、何ともこの戦争に参じるには少々異様な存在だ。

(つまり、あのサーヴァントは消去法でバーサーカーって事になるよな？ 理性を

保ってるなんて反則じゃないか……いや、それは一旦置いて。あいつは深山の殺人事件に

対して僕達マスターに追及していた。どういった理由かはともかく、事前に情報を

入手していたって事か)

憎らしいランサー陣営。セイバー、アーチャーの陣営も報せは届いてる筈。アサシンも

ライダーの考察が正しいのなら、遠坂と同盟関係のアサシンのマスターが情報収集に

乗り出している筈。自分達がぶつかり合う前から調査に乗り出しているバーサーカーは

言わずもがなだ。全陣営がキャスターを打倒しようとしてるの今、このウェイバーが

一足早くキャスターの出所を割り出して功績を挙げれば、あの鼻も  
ちならない師匠を

ギャフンと言わしめたる一因にもなる。令呪の報酬も魅力だし参  
加しない理由は無い。

「遊んでる場合じゃないんだよ。もたもたしてたら、あのパンドラ  
が先にキャスターを

倒してしまうかも知れないんだから」

「それだかな坊主。余の審美眼が正しければ、あ奴はパンドラでは無  
い」

「何でそう思うんだよ？ あんなに大量の怪物に、黒い霧がかかっ  
ている見てくれから

して邪悪な騎士。出てくるもの全て暗黒面に堕ちてるんだぞ」

短髪の、櫛で梳いても次の日には荒海のような髪を掻きつつライ  
ダーは自身の見解を唱える。

「まず神秘の名残が少なすぎる。お主も知つての通り、英霊とは聖杯  
に呼ばれる最は当時の

全盛期の姿で現れておる。故に、余もこのように瑞々しく頑強なる  
体を兼ね備えておるしな」

軽いマツスルポーズで自慢をする彼に、皮肉交じりに話の続きを小  
さなマスターは先を促す。

それに気分を害する様子は無く、更に別のポーズを取りながら話は  
続く。

「余のように古き生まれならば、風土ごと違えど親近感を感じる筈だ。  
仮にアーチャーが

パンドラと同じ神代の存在と告げれば納得もするが、あのバーサー  
カーからはまーったく以て

神々しさが感じられん。どちらかと言うと、アレのほうに近い気  
配を感じたぞ」

「？ アレって何だよ」

ウェイバーの疑問に、ライダーは無言で二階のある箇所を指し示  
す。そこは、確か自分が



マツケンジー夫妻と以前ともに過ごしてた息子の為にと空けてた部屋で今は利用してる自室。

思い返す、余り思い出したくない回想。煎餅齧って寝っ転がり黙々とゲームしたり雑誌

読んだり、クリントンの事を批評したり……駄目だ、下らない怒り湧く出来事しかない。

「アレって何だよっ」

「あー ったく、解らんか？」

ならば、これも余のマスターと認められる為の宿題としておく！」  
しっかりと励めよ、と自然に頭に置かれた厚みある手の平を感じ。頬に熱を浮かばせつつ

払いのける。なにが宿題だっ 子供扱いしやがって。

「っ馬鹿にしやがって」

どうせ、こいつの事だ。適当な事をさも真実のように思わせてるだけで、隠してる事は実際

殆ど大した事のない内容に違いない。

水汲みに行くぞっ。と肩をいがらして外に飛び出すマスターを。こりゃ、採点の結果を期待

するのは望み薄であろうなど。残念な目つきで後ろから征服王が見つめてたのを彼は知らない。

本来なら既に全壊していたハイアットホテル。それは未だに健在で通常通り不穏な風が過る

冬木市の気配を感じさせぬ様子で観光客ならびホテル施設のレストランを利用する為に

今日も賑わいを見せている。その上階を貸し切りにした人気が殆どない広げた一室で高級品と

一目でわかる礼服で身を包む貴人が膝を汲んで対面する男性を眺めていた。

(これが、間桐家の当主の弟にて聖杯戦争の参加者。

バーサーカー パンドラのマスターか)

昨日に面談した間桐 鶴野の兄弟と言われて観察すれば、成程と感ずる程度には面影がある。

重病患っについて直接の談判に難が生じていると言う話は、何らかの罫を工作する為かと疑いを

持っていたのだが、本人が直接来ると報せを受けた今の時でそれが現実と化して疑念は晴れた。

——まさしく、半死半生の病人だ。恐らくは余命も一年あるかどうかの。

白い毛は染色などでなく肉体を限界以上まで痛めつけた故の副作用であり、肉体の所々も軽く

麻痺と思える箇所が幾多も見受けられる。片目も、自分の解析魔術の結果から高性能の義眼

らしいと判断出来た。もし自分がこのような体であれば憤死しかねない状態だ。

「……昨日は。俺の代わりに間桐の嫡男を向かわせた事についての失礼は謝罪する」

「いや、構わない。貴殿も体を御自愛する事だ」  
口を開きつつ肩が震えるのは疾患から来る体の痛みを堪えてだらうか？

同情は浮かばないが、ケイネスからすれば鶴野から告げられた情報が正しい事を理解し

表情には出さないものの同盟に渡って、このマスターを利用するのに想定していた障害や

懸念は無い事に安堵していた。  
生きながら死に体同然のこの状態であれば、歯向かって来ようとも

パンドラの魔猪さえ  
封じ込めさえすれば魔力で編んだ蝶よりも卸しやすい。マスター  
同士での力量は比べる

までもない事は一目瞭然。遅滞する可能性もあつた協定も予想より早く済みそうだ。

……その肩の震えは間桐の大魔術師の積年の恨みが魔術師全般を大いに嫌悪する怒りであり。

会話する前から彼自身のサーヴァントから、今は利用する事が最善だと説き伏せられた事により

我慢はしてるものの、それでも抑え切れず出てくる嫌悪が肩の振動として発現してるだけだが。

その震えを抑えるように、ソッと乗せられた手は僅かに冷たく。雁夜には自分の怒りを

汲み取って貰えたかと錯覚する程度にフォローの利いた動作だったが故に僅かだが

胸の中で火花を立てていた黒い炎は僅かに勢いを弱まらせる。

「このように、マスターの体調も芳しくない。余り行儀良くない事は承知で私が代理に

そちらとの交渉を引き受ける形がある事も問題は無いでしょうか？」

「応じよう。もつとも、事を荒立てるようであれば直ぐに控えてるランサーの槍が

君に降りかかる事を念頭に入れたまえ。……あー、ランサーの黒子の魅了に対し対策は？」

当たり前だが自身の工房を、あの夥しい災厄の化身達に暴れては堪らない。

どんなに大人しそうな外見でも相手はバーサーカーだ。なにより自身のサーヴァントの

起こした不手際だが、その魅了を切っ掛けに暴れた前科はつい先日の事だ。

ケイネスの不安を読み取り、声色は変わる事なく一定の調子で返答はなされる。

「既に出来ている。先日は不意の事により暴走してしまい申し訳なかった」

試しにケイネスは念話で霊体化を一時解除を指示する。それに応じて姿を現す槍の騎士を

先日のように彼女は一瞥するが特に反応はしない。

ならば良いと、工房が無闇に破壊される恐れが減った事に胸中一息をついているのを

悟られないように強気な調子を崩さずにロードは再度口を開いた。「いや、不手際は双方ともだ。共にこれから配慮を設けていこうとも」

ホテルに来る前に起きた出来事を軽く情報交換し終えて、本題となる話が始まる。

隣席で、何時もの白衣とスーツを身に纏うバーサーカー。白衣こそ同席してる場所でしか

身に着けてないものの、それ以外は偽装も霊体化することなく白昼堂々と彼のマスターと共に

ホテルの中に入っていた。こう言う時には彼女の現代に全く違和感ない服装は、他の英霊には

無い強みだと再三して彼は実感する。

魔術師と同盟する。この方針に関しては雁夜も大いに渋りは見せたのだ。体が小康状態の

今でこれなのだから、精神と肉体を蟲に這いずり回られた当時なら論外の選択肢。

『君が魔術師と言うカテゴリーに敵愾心を持つのに共感するよ。私も、アブノーマリテイに

好意なんて持てないし持ちたくない。それでも利用しなくちゃいけない局面は存在する。

F―01―57やF―01―69、他のツール型アブノーマリテイのようにで非常時の場合は致し方なく』

静かな何色でもない瞳が自分を見ている。

『忌避と直面すべき時は。これは必要な事だ、こいつ等を最後に恥かかせる為にはと

優位に立つ意識を持つ事だ。相手がどんなに我慢ならない事を言っても、最後に敗北すると

理解があれば、不思議と相手の言葉や態度も許容出来るものだよ』

(そうだ、俺のサーヴァントの言う通り……こいつ等を俺は利用してるんだ)

信じると決めた矢先だ。結果論だが、背景に謎と言う言葉が濃色な彼女に従って悪い事になった

事は今の所ない。遠坂を彷彿とさせる傲慢さにも、彼女の言葉をリフレインさせ落ち着く。

胸の中で犇ぎ合う理性と感情を知らぬままに、時計塔の魔術師は用意していた巻物と羽ペンを

テーブルへ滑らせる。二つの視線が注がれるのを見届けて抑揚をつけ会議は開始された。

「間桐の家の者ならば説明するまでもない事だが、相方はそうでもない事を踏まえて

こちらの魔術道具を紹介しよう。——『セルフギアス・スクロール自己強制証明』

この証明書に、こちらのマスターであるMr. 雁夜。貴殿にサーヴァントがこちらに対しての

不可侵の約定を署名して頂こう」

「なに……」

「不満かね？ 同盟するにあたって互いに連携を口上では唱えようとも、我々魔術師は

悲しきがな直系の刻印を継ぐもの以外には排他的なのが一般的だ」

その台詞に、大いに心当たりを覚える雁夜は思わず手の平に爪が食い込む程に拳を作り

心の堰を崩しぶつける相手は別であるが怒鳴りたくなったものの、その前に肩を軽く

指でノックする感触が行動を起こす事を防いだ。話は拗れる事なく続いて行く。

「そちら、間桐の願いは今後の子孫等の魔術師としての血脈が始祖同様の力を取り戻すとは

既に聞いているが。見た通り貴殿は聖杯を得ようとする為に文字通りの命を賭して

挑んでいると見込んでるのでね。無いとは願うが、戦争終結までに

裏切り行為や背を向けた

時に矢を放たれるような事は露ほども望んでない」

冷静に会談に臨んで貰いたいとは言われたものの、洗面が僅かに顔に出てしまった。

ロード・エルメロイの言葉も当然ではある。相手のサーヴァント、バーサーカーは

パンドラ（正確には違う）であり、その災厄が引き詰まった箱が開かれれば思いもよらぬ

怪物達が相手の底が読めぬ魔力が途絶えぬ限り半永続的に活動される。魂喰い行為も相手が

辞さなければ脅威。他の手札でも魔弾と言うアーチャーに多大な負傷を可能せしめた宝具も

備えてるし、ランサーには手出し出来ない魔猪と言う鬼札を抱えている。

「無論、そちらにも利益は提供する。私ことケイネス・エルメロイ・アーチボルトが

聖杯戦争に馳せ参ずる動機は、時計塔を躍進する為の実績。それ以外は必要としない」

「……は？ それじゃあ、聖杯に願うものは無いってあんたは言うのか」

「如何にも。よって願望機の使用権利は譲るが、この魔術戦争の勝者の栄誉は

エルメロイ家が貰い受ける」

おもわず碎けた雁夜の口調に、無礼と感じつつも病人であり連携する相手である事を踏まえ

僅かな無礼は視線の温度を下げつつも黙認する。

雁夜の頭には間を置いて老朽化した壁の穴から次々と出てくる蟻のように猜疑心が湧く。

聖杯に何の願いもないだと？ 嘘をつく魔法師め。こちらが間

桐の廃退した子孫だから

適当な言い訳が通ずると思ってるのかと。

暗い疑念ばかり出てくる。それを切り取るように、冷静な声が隣から発された。

「――受けよう。私はMr. ケイネス及び、そちらが使役するサーヴァントに対し

この戦争が終焉すると確信されるまで危害とする全行動を禁止する」

「良く宣言してくれた。では」

「ただし」

さっそく署名をと切り出そうとした彼の整えられた眉は、滞りなく契約完了間近なのを

崩された事で吊り上がる。当の本人は反応する様子は見せず言い放つ。

「そちらも確認した通り、私の宝具と言えるべき機能は制御困難であり。暴走した際は

標的を任意選択は出来ない。ソレ等も契約の不可侵に違反するとなれば、私のマスターを

悪戯に戦争の激化の渦中に無防備で晒す事になる。それ等も項目の中に追記して貰いたい」

「ふむ、当然の事ではある。貴君の要望通りにしよう」  
予期していた回答でもある故に、ケイネスは即答し承諾する。目の

前の理知的な応対を崩さぬ狂戦士の冠を授けられた彼女の宝具が制御困難なのは確認

済み。不慮の事故で  
こちらに宝具が飛び火した事による自滅などは誰だっけしたくない。

「第二に、不可侵の定義だが……私の宝具の中には自律して独自に

行動するサーヴァント  
が存在しており、ソレは私達にとっても不穏分子であり脅威を孕ん

でいる」

「なに？ ならば、今の冬木を騒がせている事件は……」

「連続失踪に関しては、キャスターのサーヴァントだが。そのサー

ヴァントと私の

宝具の中より脱走した一人が協力してる可能性はある。この場合、ソレがキヤスターと

結託して貴方がたに危害を加えた場合は、こちらの過失となり誓約は発動するだろうか」

その言葉に、顎に手をかけ数秒だけ頭を回転させる。

このバーサーカーの宝具から脱け出した魔物と言う新たな情報。キヤスターの神秘秘匿

魔術師の暗黙のルールを平然と踏み越える悪徳の者等。パンドラの箱と言う性質を

考えれば、本体に逆らう程の自立した呪いが作動しても可笑しくは無いかと。

今回の主要となる同盟に関して交渉する前に、軽い雑談として教会からの報せによる

キヤスター討伐については把握している。ケイネスとしても、令呪の報酬は勿論の事

魔術師としての本分に沿う依頼を断る気も理由も無い。本来の時系列なら自身の工房を

爆破された事により、セイバー陣営を打倒する事に意識を割くのにキヤスターへの意識は

無くなってたが。今この場で無傷であるホテルに陣取る彼はセイバー陣営を倒す意欲と

キヤスターを討伐する意気込みは半々と言った程度に心の中を占領していた。

「バーサーカー。宝具ならば、その脱走したものを呼び戻す事も可能なのでは？」

この前の三つ巴ならぬ四つ巴の交戦で仄めかしていた発言を忘れた訳ではない。

ロードの鋭い質疑に静かな応答が一室に響く。

「恥ずかしながら、現界し保有している宝具だが大まかに制御出来るものと出来ない



物に大きく隔たりが存在している。昨日に同行させた彼女のよう  
に、一般的な使い魔と

同じく素直にこちらの指示を聞く者もいるが、サーヴァントと同等  
の力を備えつつ

こちらの方針と真逆の行動と思想を抱えているものが実情だ」

もつとも、脱走した者については私達の中でも限りなく特殊な事例  
ですが。と付け加え

バーサーカーは一枚の肖像が描かれた画像をケイネスの元に差し  
出す。

黒い羽をあしらった独特のコートのようなものを身に着ける、聖遺  
物を盗んだ忌々しい

弟子にも少し似た容姿。写真ではあるのだが、どうも独特の気配が  
感じる女の肖像。

「これが、貴君の言う危険分子か……」

「ビナーと言う名が通称だ。そして、こちらが先日セイバー陣営  
の拠点に向かう際に

邂逅したキャスターのサーヴァントの姿形。真名はジルドレだと  
対象が告白していた」

新たな情報提供に感謝の意を短く唱えつつも、常に整えてる柳眉を  
歪めて彼は告げる。

「そうだ、君達はセイバー陣営に対しても和睦を望んだと聞き及んだ  
が……何故そこまで

執拗に停戦を四方八方に宣伝している？ 昨日の行動との矛盾を  
私は知りたい」

バーサーカーの行動は不可解だ。自分達陣営を除く三体と遭遇し  
た時は、マスターに対し

配慮と捉えられる発言はあったものの、本当に非戦を望むなら撤退  
なり霊体化なりの

消極的方法で戦闘回避する事も出来たのに関わらず宝具を結局発  
動させた。

その行動だけで敵対を認定されて可笑しくないに関わらず、複数戦

に最適な能力を

最大限に発揮しようと考えず徒労と言える多陣営の非戦に努める事は奇妙だ。

聖杯に対し願いがあんなら、他者を踏み台にしてでも勝利に固執するならケイネスとて

疑われないが、その逆ともなれば不気味と呼べるのが今の彼女。真意は何処にある？

誰もが知りたい疑問を、冷たくも感じる瞳は虚偽を纏った様子は見せない。

「最初にセイバー陣営にも告げましたが。私には何でも叶う万能の願望機と言うものに

自身以外の代償を支払う気は無いのですよ」

「貴君の願いは、その宝具を捨て去る事。謂わば呪いの解除では無かったのかね？」

昨日の様子からして戦争に勝利しようとする欲は本物であっただろうし、他の英霊を

蹴落とす事はルールに違反する事では無い。なら何故行動と真逆の言葉を放つ？」

「私も誰かの代償行為の犠牲の糧にはなりたくない。自衛行為は行おうし、マスターが

狙われても同じ行動をとるでしょう。

然しながら、己の欲に従い倫理を破壊し殺戮を続けるのは人でなく獣や畜生の道理です。

——人として生き、人としての死を願う。その当たり前の行動を、例え幽鬼のような存在

だとしても行いたいと言う欲求は可笑しいでしょうか？」

短くケイネスは唸りを口の中で展開させた。

これが、もしランサーの告げる騎士道精神と言う。御身への忠誠を果たす事が願い等と

言うものであれば理知の外であり嫌疑も容易で見限るに値したが、バーサーカーの発言は

気狂いが言うような物でないし、願いを叶う姿勢としてが他陣営への停戦行為と言えは

納得は出来なくもない。魔術師の感性としては合わぬ理想ではあるが、人として基づく

一般的な考え方としては未だ理解できないものではない。

（英霊でありながら『人として生きたい』……か。ふんっ これまた随分と滑稽と言うか

歪な思想ではあるが、バーサーカーの承認欲求がそう言ったものと此処で解つたのは

収穫としては中々高値ではある。

要は、この英霊にとってみだらやたらに他者を殺傷・魂喰い行為は忌避、嫌悪の対象で

人道的なものを好むものなのだ。それならそう言った体で活用は大いに出来る。

キャスター陣営の蛮行は、このバーサーカーが最も嫌う行動。あの征服王のライダーに

敵対関係の遠坂のサーヴァントのアーチャー。どちらも好戦的な故、数日もすれば私が

手を下さずともバーサーカーと衝突するのは目に見える予想図。残るアシン陣営と

セイバー陣営は我が魔道を駆使しつつランサーが打倒すれば良い）完璧だ、完璧なプランだ。キャスター陣営は積極的に目の前の英霊

が宝具を浪費しても

打ち倒そうとするのは会話の節々から相手への嫌悪を知ってるが故に確実。

教会の公布もあつた以上、他の陣営とも協力取り付ける事が可能な以上は彼のフランスの

軍師が敗北は決まったようなものだ。運があれば私が打倒し令呪を貰い請けよう。

それ以降はアーチャー、ライダーを彼女が倒し。その間に自分は宝具で負傷している

セイバーを倒し、雌伏を搔いているアサシンを倒せば聖杯は獲得。「良かろう、貴君の思想は大いに私も感銘を受けた。証明の内容に立ち戻り、貴君の

姿勢も踏まえて条約は簡潔に纏めるのであれば……だ。

汝の意志においてアーチボルト及び配偶者とサーヴァントへの危害の禁止。尚

こちらが履行を破棄し、署名者へ攻撃が認められた場合この条約は破棄される事になり

バーサーカーの意志関係なき宝具の暴走及び関連者の利己的な攻撃に対しても除く。

この制約が破られれば、即座に条件下として令呪を行使し貴殿の英霊の自害の命令すべし」

「待つて欲しい。こちらマスターの令呪が全て消費されてる場合は？」

基本的な抜けを指摘すれば、ケイネスも羞恥の色は浮かべずも失態を覚えたのが誤魔化す風に

軽く咳払いしつつ回答する。

「令呪が全て消耗されてる場合であっても、現界を宝具等を使用し自決するべし。

それが出来なければ、悪戯に貴君が存在を継続すればだ。Mr. 雁夜にセルフギアスの呪いが

発動し、残り少ないであろう命が削られる事になる。人道を志すなればだ」

条約を遵守すべきは当然であろうと言葉を静かに耳を傾けてから、Xは肯定の頷きを示した。

「問題ない。私の存在が消滅すれば、例外ない限り動いてる不穏分子も現界する力を

失くす筈だからな。

……然しながら注意は払って頂きたい。入手した情報では外来の魔術師並び間桐の血を傀儡と

化していた存在も未だ闇夜に蔓延っている」

夜道を走り冬木市に到着した彼女は、キャスターの搜索をエージェントと行う傍らに。早朝

桜も藤村邸より迎えに行った後に彼女の口から第三の介入者の名を聞いた。

何かあれば、これも縁だし何時でも頼ってこいと言う気風の良さを感ずる藤村の首領に

礼を告げつつも、新たな刺客への対策をバーサーカー陣営も練っている最中である。

「フランチェスカとか言う魔術師だったな？ 時計塔では認知せぬ者ゆえ私からは警戒を強める

としか言えないね。それと、そちらが提供してくれた間桐の旧くより根付く臓硯とか言う者。

どうやら私の出生前より、市井の者々へと神秘の秘匿は守れどすえ随分とそちらの血縁者は

外法に手を染めてたそうではないか？ いや、貴殿を責めるつもりでは無いがね。

だが聖杯戦争初日にでも、魔術師の定義を重んじるならばだ。

聖杯敷設の協力者の手を仰いでても誅滅しようと試みるべきだったのではと苦言を呈するよ」

雁夜には出来ないやり方。肉体を苛まれ精神を歪める後でも前でもしなかった方法をXは

実施した。ずばり、御三家以外の聖杯戦争参加者に彼の亜種T—04—50を討伐を依頼する事だ。

桜を養子へと差し出した遠坂に、恥を捨てて頼むと言う事を雁夜は意地でも望まない以上は

他の魔術師に、彼の間桐悲願である彼の怪物を滅ぼすのに協力を要請するべきとXは彼の心身を

治療する期間でも口酸っぱく説き伏せてはいたのだ。

『君の願いの一つでもある、あの亜種T—04—50を消滅させるのには私以外の

別の協力者が必要だと考えられる』

『誰に？ まさか、桜ちゃんを臓硯の前に無防備に差し出した、あいつの元とか言うんじゃない？』

『それが無知ゆえの推定無罪なら、その方法も考えるが。相手の思想は解らない以上は私も』

軽率に頼らないよ。この聖杯戦争と言うものは、システムの君や遠坂の当主以外では

アインツベルン。それ以外で四人は選ばなければ大型ツールは機能しないのだろうか？

つまり最低でも四人の君が認知しない部外者であり、幾らかの報酬を差し出せばサーヴァント

を行使してでも抹殺対象 間桐臓硯を鎮圧し消滅させるのを手伝ってくれるだろう』

『けど……そいつ等は魔術師で。君の宝具なら』

『私にも出来る事と出来ない事がある。蟲で構成された怪物を、町全体を囲い込んで駆除する』

程に高性能なものではない。一応火力ある兵器を兼ね備えているが、周囲への被害を抑える

事が出来るものとなると怪しくなる。君とて、他の人間を犠牲にする程に冷酷で無いだろうか？』

ずるい言い方だとは感じた。そんな風に言われて自分は冷酷な人間だと言い切れる者は少数だ。

彼女の理論は正しいものだとわかる。それでも、嗚呼なぜこんなにも胸の中を巣食っている

悪辣な部分は、そんなものは偽善だと自分を助けてくれようとする相手を詰っている。

——お前は■■■■ではないのに お前は

■でないのに

——なのに 何故そうまでして『人』に従っ

ている？

「……っ」

頭に浮かぶ奇妙な囁きと、壊死したと思いきや治療された部分の目

頭の奥に鈍痛が走った。

反射的に顔を歪ませて其の部分を手で圧迫させると。丁度私見を言い終えたケイネスと

隣からの強い視線を感じ、自分が注目されてる事を認識して恥が込み上げて来た。

「大丈夫か、雁夜？ ……すみませんが、誓約についても少し掘り下げたい部分もありますし

一旦別室で休んでから再開して頂いても構いませんか？」

「そうだね。思えば随分と熱心に話し込んでいたものだ……良ければ昼餉もこちらで

済ませれば良い。此処のルームサービスは今一つだが、我が妻の料理は絶品だからね」

本来ならしない好待遇だが、魔術戦争を勝ち残るにあたってバーサーカーの宝具はこの先で

価値強まると考えてるが故の対応でもあった。二人が一旦他の部屋に移動するのを見遣り

ケイネスはビル下の有象無象の光景を眼前に映しながら未来を案ずる。

（間桐のマスターはともかく、あのパンドラは幾らか話術に長けており智略も嗜んでるようだ。

とは言うものの、時計塔の権力闘争を勝ち抜いてきた私からすれば造作もないがな。

一先ず、これでバーサーカーにライダー・アーチャーの相手は決まったも当然。アサシンも

あの英霊の口振りを信ずるなら対処はあちらで出来るとの事だし、お手並み拝見といこう。

残る問題とすれば、まずはバーサーカーが追跡しても痕跡以外の行方知れずのキャスター。

後は、ランサーが討ち損じたセイバーをどう処理するか、だな）

超然と在ろうとする背中を、控えていた従者と妻は感情異なる視線を向ける。

一人は、本当にこのまま敷かれた道を進むべきかの憂いを含ませ。もう一人は、愛を誓えた後も揺るぐ事なく良し悪し抜きに何も感ずる事の無かった彼の背を。

バーサーカー等とランサー陣営が綿密に誓約を築こうとしていた頃、エージェントとの交戦に

破れ意識を刈り取り、その後は近くの公園へと適当に放置されていた殺戮装置の一部である

彼女と、そのパーツの主である切嗣は今後の方針を編み出している最中だった。

(ホテルへの爆弾は全て回収された……舞弥を相手が殺さなかったのはキャスター陣営の犯行で

冬木界限に広がる悪感情が自分達に向けられる可能性を危惧したからか、はたまた挑発行為か。

なんにしろ短時間で復帰出来た事は僥倖だな)

一晩の睡眠の中で、久方にあの陸の孤島の陽射しと永遠に喪失した彼女の面影が未だ蝶の呪いの

残滓が残ったからか鮮明に映っていたが、心の中に浮かぶ過去の痛みを除けば体調の影響は

殆ど残っていない。直ぐにでも戦場へ舞い戻れる。

だが、慎重さは無くしてはいけない。横目を向ければ一糸纏っておらず、鍛えられた筋肉が

程よく細い躰を艶やかさと異なる美しさを見せる女体が見える。

解析を試みれば、特に彼女の回路に以前と異なる様子は無い。深層下での暗示など埋め込まれた

可能性はあるからして油断は出来ないが、探知機能などは埋め込まれた様子は無いようだ。

重大な情報を再統合する意味で、新しい衣服に着替える彼女に対し口開く。

「舞弥。バーサーカーの配下と思しき存在はハサンと協力関係であつ



た。

……間違いないんだな？」

「背後からの突如の急襲。意識暗転するまでに戦闘する気配が皆無だった事を考えれば」

久宇舞弥の破壊工作が失敗に終わった事。彼女の体に付けてた盗聴機能の記録など纏め上げて

戦闘してた間桐の当主の相方とハサンが戦闘してた可能性が薄い事からも、協力関係に近い立場

である事は解る。バーサーカーのマスターは間桐雁夜、なら消去法で残るは危険視している

アサシンの背後に控えているは言峰綺礼である事は当然の事実として帰結する。

(だが……奴は表に出ている様子は未だにない。最初の交戦から、住まいとしている教会に

籠っているか、食料の為に外に出ていた以外で間桐と接触する気配は調査の下で一度も。

群体であるアサシンを使って密かに交渉していた可能性は十分ある。然しプロファイリングの

中での言峰綺礼の動きと、今回の聖杯戦争でほぼ動きを見せずバーサーカーの背後での手引き。

(この合致のしなさは何なんだ?)

「今は、バーサーカー陣営は、ランサー陣営の拠点に居るか」

「間桐からの参加者も同じくホテルの中へ入室したのは確認済みです。ですが、潜入には

かなりのリスクがいます」

「分かっているさ。君の顔は割れているし、蝶と人が合成されたような魔物と遭遇した時も

僕達は一時戦闘不能になり、その時に他のハサンを通じて僕がセイバーのマスターである事を

バーサーカー、ランサーの陣営が入手してる可能性は高い」

戦況は着実に不利に傾き始めている。当初の予定であった妻のア

イリとセイバーを主従関係と

誤認させて背後からマスターを仕留める事は、自分の正体が割れないからこそ出来た事だ。

それが群体ハサン、中世に遡る程の暗殺の始祖の英霊の手で隠密は台無しにされた。

セイバーも負傷を帯びてるし、見えない致命傷は確かに自分達陣営に刻まれている。

(微かな望みに掛けるなら、アサシン陣営とバーサーカーの陣営の内密な共謀であるからして

暴露されるのは情報戦として痛手になる事。それと同盟を築こうとしてる今の状態……)

「舞弥 動くぞ」

「はい 切嗣」

(間桐。そちらが何を願う聖杯を求めているかは知らないが……聖杯は僕が使う。

人類の恒久的な平和の為に……これ以上、世界に悲しみが降り注がない為なら幾らでも僕は)

悪魔にでもなつて見せると、新たに決意し直した魔術師殺しは外に飛び出した。

「……と、言う訳で本日は午前中で授業は終了です。皆さん、ご両親に連絡をして下校してね」

冬木の初等部の子達が通う学校の一室で、教壇に立つ初々しさも新任として残る教師の声に

まばらに生徒たちから肯定合唱がなされる。

その学校では、初等部の中ではと言う注釈つきで遠坂に生まれついで英才教育を施される

遠坂 凜は教師の一部からも頼られるリーダーシップだ。そんな彼女は、空席がある程度

目立って普段は元気に授業に参加する見慣れた知り合いが居ないのを視認する。

(インフルエンザね……)

この時期には、珍しいと言えば珍しくあり。でも可笑しくないと思えば可笑しくない流行病。

凜も、授業が予定外に早く終わる事を嬉しく思っていない訳ではない。事件性を匂わせる形で

学園のクラスメイトが登校する途中で失踪されたとか言う形でも無い。

(でも、何だか不安だわ)

今では学校に登校する以外では母親と別邸で過ごす毎日。勿論、通行手段は幾らでもあるし

少しの期間だけの父が人生きつての大事業を成功するまで邪魔しない為。それが終われば

直ぐに見慣れた邸宅に戻るのだけど、それでも子供故の冴えた直感が暫し警告を発してる。

最近身近で起きた事と言えば、全員で世話していた鶏が悪質な部外者の誰かに取られた事。

他で言えば、ニユースで度々放送される失踪と殺人。周囲の畜産場所で牛やら豚やらが

何かの獣に襲われたと言うのも多発している。

もしかして、お父さまもこの事件に何かしらの関与をしてるんじゃないかしら？ と言う

暗い考えも時々浮かんでしまう、けどそんなのはきつと妄想だ。

それを振り払うように、凜は何時もの笑顔を浮かべ休憩時間になると思いがけぬ事で

子供には苦痛な時間が半分で終わる事に喜びの声を上げる子供達を抜けて親友の元に近づく。

「良かったわねコトネ。学校が思ったより半分で終わって」

「うん、凜ちゃん」

少し前に、彼女が公園で気づけば眠ってた話を聞いた時は少し穏や

かでない気分にも

陥ったが、見た限り何時もの彼女。最近知り合ったアノ大人の友人も元の場所に帰った

からが多少元気がない時も見えるものの、それ以外は至って普通だ。何故だか今日は

彼女と会えないような体の芯が冷える感覚があったものの、やはり気の所為だ。

そのまま軽い談笑に進むと胸のうちにある不安も段々と蒸発していく。何気ない日常の

何時ものやりとりは、自分と外で起きてる凄惨な出来事は別々の世界で切り分けていると

実感出来るからだ。雑談の中で、彼女は登校中に思い出した事を呟いた。

「そう言えば、コトネ」

「うん？」

「——外靴、替えたでしょ？ 赤いのに。あれ、とっても

素敵じゃない！」

その言葉を受け、無垢で引っ込み思案な何時もの彼女は照れた様子で口数少なく感謝を唱え微笑んだ。

……赤い靴　　履いてた　　女の子



## 暗影：幕話

「準備は整ったな？」

『承知』

「ならばよし、これよりキャスター陣営の捜索に入る。

草淋のチームは西 説諭は南へ 計測は北を任す。

無理はするな。危険と感じれば直ぐに帰還しろ。では —— 散開

！」

統率の称号を持つ自身の号令の元、10体程で幾らかのスキルを平均良く

纏めた者達で冬木の町へ広がり情報を収集する。

魔術としては初歩的な変装で、あの会社内にいる職員等の恰好に化ける

用意も出来ている。例えサーヴァントの接近があっても衆人環視の場で

あれば瞬時にスーツ姿で営業中の一般人として溶け込める。人気ない

場所で襲われたとしても、十人のアサシンの徒党であれば幾ら最優の

英霊であろうと完全な敗北を喫する事は無いだろう。

管理者と言う輩からは、決してビナーと言われるモノと遭遇しても交戦を選ぶより最良な撤退を前提に行動しろと言われているが……

あの宝具に

収監されてる存在より危険視するとは、どれ程の怪物なのか。

今回我々に、あの悪感情はあるものの時間が経つにつれ酷使はすれども

あらゆる性能の面からすれば、第二のマスターとしては器量は認めなくもない

バーサーカーの指令を受けて諜報を行う事になる。

以前は遠坂と同盟していた本当のマスターである綺礼氏の時も同様に

やっていた事で、今更反抗する事でもないが今回はソレに少し注文が加えられてる。

1にライダー陣営の拠点及び対象の発見。ただし個人の判断での危害を禁止する。

最初のマスターにも支持されていた事で、あのライダーの宝具により追尾は

困難であるが、これに関しては重要度も低くキャスターの居所に力を注ぐなら

片手間で構わないと言われてる為、運が傾く事を祈ろう。

もう一つの懸念と言えば、彼の黄金色の弓兵。あ奴も運悪ければ街中を散策

しているかも知れん。我等の半数は未だ元のマスターに仕えてるが、あの弓兵に

とって敵か同盟者に仕えてるの違いなしに下等な雑種と我等を見定めている。

極力、気配を察知したら直ぐに身を引いて人影の中で息を殺すとしてしよう。

2に一定の児童の住居周辺の警戒。コトネと言う、どうやらバーサーカー自体の

個人的な友好関係らしい相手の住まい周辺に対しては、そのレベルを高めるように

解るものには解る程の語気強めた言い方だった。

あの人形めいた雰囲気強い女にも、人としての情が厚い部分があるのだなど

少々珍しいものを見た気分になるが、そう易々と絆されはしない。元より自分達に

狂戦士を差し向け半数を虐殺させた張本人だ。どれ程に聖人君子な部分を見せ付け

られようとも、奴の根本は我等に血の涙もない存在だと知ってる。

「はてさて久々の外か。また三流の仕事をするとはな……」

この前の、あの魔窟内での怪物退治は血沸き踊ったものだが。そう

ぼやく一人の我等

に対し忍ばせた短剣をピツと抜き振り、愚かな発言に対し制裁する。

「貴様、この日中から酩酊しているのか？ 我等の志を忘れたか」

我等が百貌、目指すは分裂されし100を1へと戻す事。それなのに、今この我等は

何とほざいた？ 真の主から引き裂かれ、その謝意の気持ちすら失くし魔女と遜色ない

狂いし幻想の館で度々起こる崩壊呼びし化け物が首をもたげるのを抑える。それを英雄譚と

称し再度起これば良いなどと寝言を唱える。それでもアサシンかっ！

少し力を込めれば、喉笛から赤い飛沫を吹かせて粒子となり消え去るのが目に見える。

にも関わらず、僅かな嘲笑が仮面の中から聞こえた。

「統率よ、そう言うがな。お前とて知ってるだろう？ 我等が主命を向けた者は

遠坂と言う家の臣従されし身。最古の神秘を兼ね備える弓兵と共に勝利を手にする彼等へ

自ずとこの身等は、その栄光の道を敷く為の舗装でしかない。

令呪に縛られていたあの時と。管理者と皆が称する女将の元で働き怪物共を

眠らす為に日夜動く我等……今も前も何が違うと言うのだ？」

言葉の中に自分統率を揶揄したり等の悪感情は無し、故に刃の柄を握る力が緩む。

黒き影、もう一人の異なる鏡像と言うべき存在は独り言ちるように告げる。

「それにな……我等よ。我等は いや……おれは 俺はあの時、鉄細工で織られた

肉裂きの魔性や悪食食人の芋虫等を成敗した時に、あ奴等の仕えていた者の一人だ。



制服で包んだ怪物討伐の専門家共でない、あの鉄の塔で魑魅魍魎を封ずる為の末端。

力も知恵も低く、俺達よりも儂い者達の一人だ。助けたのはただ偶然に過ぎなかった。

涙を流し、抱き着かれ 感謝されたよ。酷い顔をしてたが、背に回された手は力強い。

——生まれて初めて、このような人でなしを真に恐れず心から礼を言われたのだ。

他のサーヴァント共なら、生前何度とて受けた些事だろうさ。だが、俺は違う。

あの時初めて、自分が英雄なんだと実感出来た。『鉄縄』を扱い、機械仕掛け共を崩し

巨大虫を弾き飛ばし。そして、あの格は他と一線画す指揮者の彫像を皆で鎮めてだ。

……賛辞の嵐の中に佇んだ時、お前だって思ったんじゃないか？

この胸に芽生えたものを咲かせるなら……この煉獄の渦中として悪くない、と」

「お 前は」

愕然と言う感情とは、いま確かに立っている筈の地面が急速に現実感なくなり

自分がいま何処に立っているのか分からなくなる事を言うのだと統率は今知れた。

こいつは……我等の一人は。

本来は分裂した多重人格の一部。どんなに性格や口調、兼ね備えている力量や優れた

分野は異なれど根本は同じ。在るがままの、以前は一人の人間としての頃に戻る事を

目指す同一人物の筈だ、そうでなければいけないのだ。

なのに、思ってしまった。こいつはまるで唯一人の個人となす存在なのでは？ と。

そんな事はあつてはいけない。我々は、百貌 異なる一面を備えど

も1000で1

1にして1000の存在でなければいけないのだ。

何故、他にも居合わせる我等は何も言わない？ 何故、反論しない？

統率とて、周囲の雰囲気を読む事は統率の名に恥じぬまま秀でていく。だからこそ

無言で鉄縄に同調する気配を知ってるからこそ、胸の中の焦燥は膨れ上がる。

激化しかけた統率と鉄縄の場を諫めたのも、一人の我等ことアサン。

「御止めな。統率 鉄縄、お前達二人共々あのいけ好かない女王氣どりに酷使されて

知らない内に気が立ってるんだ。他の口挟まぬ我等にも、これは言える事だぞ？

今は任を忠実に遂げるのみ。この戦争とて未だ7騎全てが脱落の様子見せず

そんな中で狂戦士が宿す悪鬼共の巢から解き放つ是非を問答するなど片腹痛し。

今は英霊魔術師を見つけ、あわよくば我等で首級を獲るべし。叶わずとも我等の

力なれば居所を知る事など他愛なき事よ」

「……ああ、そうだな。済まぬ」  
下手すれば、同じ身でありながらの醜い骨肉相食が起きるところだった。謝辞を告げ

頭をふって熱を引きつつ刃を引く。  
暗に、この話はここで閉じよう。そう無言での圧力を施した筈だが

鉄縄は悪びれず  
その装具となる束ねた縄の位置を軽く直しつつ呟く。

「俺を切り捨てたくば何時でも切り捨てて構わぬさ。お前達の願いを無碍にしようとは

思っていない。俺とて聖杯には基の一人に成りたい想いはある。

それでも、それでも俺は光照らされる中で一人の騎士として。例えばお前達には他の

正騎士の真似事と詰られようとも生きたいと思った。この想いは誰にも否定は「

「もう良い、喋るな」

それ以上言えば、我等とは違う。この身の中にある心が暴走しても制御する自信ないと

ばかりに統率は遮り任に向かい前進する。

荒れるな……と、その様子を見つつハサンの誰かは天の様子も眺めながら案じた。

桜は微睡む。浮遊感の中で、一人の女性がクリップボードを抱えつつ

軽く息を切らしながら走ってる。スーツ姿で白衣の恰好は何時も見慣れた管理人と

同じだが、髪型などはどちらかと言えば一年前の自分に酷似している。

その人の名を桜は知っている。今の名前も、昔の名前も。

——私が 成果を上げるんだ。 ■■■の事は十分勉強したんだもの だから大丈夫。

■に認めて貰わなければ、私の居場所は無くなってしまいうから。規則違反な事は分かってる。けど、大丈夫よ

成功さえすれば、■だって絶対に見直してくれる筈なんだから！何時も陰で

私が才能ないって言ってる皆だって！

——あの人に追いつくんだ。何時までも助手のままなんて嫌私は■の隣に並ぶんだ！ 世界を変える■と、同じ場所に。

世界は暗転する。

皮膚が溶ける 歯が抜け落ちる 目から流れるのは涙腺から生じ

るものでなく脳髓が

沸騰し、切れた血管から入り混じった赤い雫だ。

ああ 失敗した。

失敗した 失敗した失敗した失敗した失敗した失敗した失敗した

内臓が震える 口から吐き出されるものが二酸化炭素以外の有毒  
気体へと変わっていく

骨が熱を帯びて溶ける 髪の毛が秒単位で頭皮から剥がれていく  
のが解る。

私が私と言う存在が 魂が 全てぐちゃぐちゃになって無くなっ  
ていく

■ 殺して

私を 殺して

何で 何も言ってくれないの？

何故 まるで石ころ見たいに私を見つめてるの？

私は貴方にとって 所詮 実験体や死んでいく職員達と同じだっ  
たと言う事ですか？

そうなんです。貴方にとって他の者は全て等しく 無価値だっ  
たんですよね。

ああ、ようやく理解しました。死ぬ瞬間になって ようやく貴方の  
内面が。

信じてた。野の白鳥 大好きな物語のように決して弱音を吐かず  
いら草を編んだ

御姫様は最後に兄の王子達の呪いを解いて幸せに結婚するように。  
私も諦めないで

努力をし続ければ、きっと貴方と同じか それ以上の輝かしい未来  
を掴めると。

「私は必要とされてなかった」

桜に対し、体が服が 全てゲル状と化すように溶けかけた女性が声  
を紡ぐ。

「あの人は、とても凄い人だった。アブノーマリテイの機嫌を直す為

の餌や

彼等が壊した壁の修繕なんて言う大工仕事見たいな、誰でも出来るか用済みになる人

がする事以外の天才と言う一握りの方が出来る素晴らしい事を産み出せる力を持っていた」

「少しでも力になりたい気持ちは本当だったけど……でも、役に立てなかった。

私の命を懸けた必死なチャレンジも、あの方にとっては余計なトラブルの一つでした」

桜はその独白にじっと顔色変えぬまま聞き続ける。

壊れたように、彼女も変わらぬ笑みを保ちつつ演説を続ける。

「私には才能が無かった……私には実力が伴っていなかった！ 適正も！ 資格も！

全部ぜんぶ中途半端だったんですよ！ ふふふ フフフフ

■が雑用だけ注文し作業へ戻る度に、無力感と焦燥に苛まれていました。

私達の気持ちなんて何一つ理解してくれなかった ■ それでも

私は必死に

変わり果てても 今度こそ この形で立派に仕事を遂行出来る存在になりたかった」

その任務も、結局は完全に遣り遂げなかったんですけどね！ と、

彼女は自傷の

嘲笑を暗闇の中で響かせていく。体を回転させながら謳う調子は止まらない。

「ああ■！ 何故一言で良いから告げてくれなかったんです？

お前はゴミだ！ 役立たずだ！ 目障りだ！ そう切り捨てる一言 罵倒すれば

私だって諦めがついたんです！ 惨めな死に方だってする事も無かった！

必要だ！ お前の努力を認めている！ 例え嘘でもそう言うてくだされば

あの瓶を盗み出そうなんて考えませんでした！

たった一言 慰めの言葉でもっ 侮蔑でもっ 私に対する言葉が欲しかったっ!!

それさえあれば、私は気を急いだ自分を殺す勇気を持てたのにつ

——でも 貴方は 決して一度として

——貴方は 私の事を まともに見ようとはしな

かった

——これ程に 貴方を ずっと傍で見てもしたのに

「……桜 Miss桜」

「貴方のおじさん Mr. 雁夜 ご存知ですよ？」

あの人も似てますよね。貴方に対して優しい言葉を投げかけた事はありましたか？

苦しんでる時に、少しでも共感するか望みのあるものを持たせてくれませんか？」

「嗚呼 貴方も私も 見捨てられた者同士。

違うのはたった一つ。目と手の届く範囲に毒の小瓶があったか無いかの違い」

「滑稽ですね、私達どちらも」

桜は考えた この人と私は同じなのかどうかを。

彼女は自分と年や環境も違うし、流されるままに生きてる自分とは逆に目指してた

場所を獲得する機会があった。だけど、本当に望む言葉が無い故に魂まで原型を

留める事が出来なくなった事は、確かに自分と似てるのかも知れない。

心と言うガラスを地面に叩きつけられ壊された者同士。ならば、彼女の末路は

私の結末なのだろうか？ 私もいずれ彼女のように壊れ切った自

我を虚栄の

明るさを纏いながら終わりの時まで虚しく円舞曲に沿って踊るの

か？

……桜には答えが出せなかった。

「いいんです いいんですよ それで」

沈黙に彼女は微笑みを保って告げる。

「答えなんて何時でも出せます もっとも、永い時間だからと思考は停止しないで。」

無限に見える程でも実際は有限なんです 気づけば終わりが近いなんて珍しくも無い」

「ただし 約束してください。——逃げないで

答えを得た時、それと向き合って下さい。決して拾い上げたものを知り得たものを

投げ捨てたり忘れたりしないで。貴方は桜なんです ■では無いのだから……」

視界が、意識が遠ざかっていく。また私はあそこへ戻っていくのが解る。

二種類の声が聞こえた。最近になって聞き慣れた人と、知らない人の二つの声。

約束して 桜

約束して ■

忘れないで 私の言葉を

忘れないで 私の意志を

「管理人」

L o b b o t o m y c o o p 内で、管理人Xは本日も業務に就いている。

百貌と言われる、会社内のシステムとしては雇用職員として位置付けられてる者達の

殆どが『諜報』と言う特殊コマンドのマークを画面内に記している。

上層・中層・下層ともに配置してるアブノーマリティに今の所は普段の作業内で

見られる機微の機嫌の良し悪しで現れるエネルギーの増減を除き

不自然さは無い。

「もう少しで全体のエネルギーは規定値に達する。

ティファレット 急を要するのか？」

「いえ、終わってからで良いわよ」

そうかと呟き、数分が経過した後椅子から立ち上がる。

これからは彼等 彼女等の時間だ。そう設けるようにしたのは、全てが終焉となる

頃であつた事を昨日の青々と輝く海の記憶のように真新しい。

入口には、白を基調としたシャツに何時もの服装である茶色のケー  
プとスカートを

身に纏つた金髪の少女が緑色の目に不安気な色を帯びさせ佇んで  
いる。

緊急事態なら会社内全体に警報が発せられるからして、内輪なトラ  
ブルなのだろう。

何が起きたか尋ねると、無言で背を向けて幾つかの通路へ導かれる  
まま一つの

一室へ辿り着く。桜の為に用意した遊戯室だ。

体調に重度の変調が起きた等では、静かな扉の開放からして違うよ  
うだが未だに

中央本部のセフィラは自身の口から真相語り得ない。

開いた扉の奥では、紫色の髪の少女がクレヨンで用意された画用紙  
に絵を描いてる

のが見て取れる。世話人として、今は何時もの赤髪の戦士でなくホ  
ドが傍らに居た。

「これを……桜が描いたわ」

金の人工毛髪を揺らし、少女が出した画用紙を受け取る。Xはその  
内容から

事態が深刻な部類に当てはまり。彼女が自分に報告した懸念も理  
解した。

紫の髪が目立つ研究者。心臓部分にテントウ虫のように穴が描か  
れ、そこから



蛇みたいなものが何本も生えてる絵。ほぼ同じ服装をした研究員、異なるのは

茶髪の女性でドロドロに溶けており傍らには黒い鳥のような怪物も居る。

他にも未熟だが特徴を把握すれば、それに関わる者達なら直ぐに全貌を察せられる

絵がクレヨンで紡がれている。

二人らしき人影が、巨大な塔とも呼べる建物の中にいる様子。それを崩壊させる

人影を描いたものもあるし、様々な管理者には見覚えが強いシーンが。

全てを流し読みし終え、数秒だけ間を置き口を開く。

「桜に誰かがこれを教えた可能性は。

……いや、答えなくて良い。この会社内で動いてる存在で教唆した者は居ない事は解る」

この室内、外にいるセフィラ。働いているエージェントでさえ、この過去を描いた

作品を事細やかに教える事は出来ない。

なら誰が 何が桜にコレを描かせた。

夢中でクレヨンを動かす桜は、普段通り生気が薄い以外は見た所は異常ない。

だが突如として作り上げた品は見るものには解る常軌逸した物だ。強硬手段で会社内の

精密器具で、こう言った起因を調べる事もやろうと思えば出来る。管理者は直ぐ考えを改める。もし、それで何も原因が判明しないよ

うなら第二の

イエソドを産み出す事になる。今は何物かの陰謀を傍観する以外に方法は無い。

心当たりはあると言えは有る。だが、突き止めるのも時期尚早だ。

「あと、会社に戻ってから大分眠たそうな様子も見せてるわ。今もよ」  
ティファレットの言葉通り、クレヨンを置いて目を擦る少女の背中を

見つめる。

藤村邸から迎える時も、軽く目頭を擦っていた。フランチエスカと呼ばれる魔術師と

長時間ゲブラーが戦闘してる中、身じろぎ一つせず待機してたのは子供には大きな

負担だった事と、海に落とされた体力の消耗が尾を引いているからだと考えてたが

この分だと、ナルコレプシーは単なる今までの精神的苦痛による併発では無い。

ホドが優しく声をかけ仮眠室に誘導していくのを見届けてから描き終える途中だった

地面に野晒しの画用紙を取り上げた……紙には絵でなく文字が見える。

どうやら、物語のようだ。

むかし むかし せかいは このせかいと ことなる おおきなうみとつながりました

たくさんのたべもの たくさんのあたらしいもの たくさんのかみさま つながった

ばしよから たくさんの よいもの わるいものが おくられてきました

せかいはとてもゆたかになりました

かわりに せかいのひとたちのごころは まずしくなりました  
まずしくなったひとたちを こらしめ まとめる あたまができ

ました

あたまにいじめられないため そらに たくさんのつばさも つくられました

けれど せかいじゅうのひとびとは かなしくて つらいままで  
す

あるとき それをなおせるほうほうをひらめいた おとこのこが  
いました

おとこのこは まずしいせかいを かなしいとも おもしろいともおもわないけど

まずしくかなしいせかいに だいすきなおんなのこをみつけた

おんなのこはいいました せかいを なおそう！

だいすきなおんなのこのため おとこのこは せかいをなおすほうほうを

かんがえて かんがえて そしておもいつきました

おおきなおおきなたてものをつくり そこから せかいじゅうに とどく

ひかりをまこうと ふたりでけいかくしました

けれど それをせいこうするのに おおきなとおりみちがひつようです

おおきなとおりみちをつくるのに せかいじゅうのひとびとのだれかを

かぎ にするしか ほうほうがみつかりませんでした

だいすきなおんなのこは かぎになることにしました

おとこのこは かぎになったおんなのこのために けいかくをすすめます

それでも まだまだ ひかりが たりません

かぎになったおんなのこは だれからもすかれてました

だから かぎになったことを すきだったみんなは なげきかなしみ

ひとり またひとり おとこのこのめのまえから いろんなかたちで

とおい とおい とおいところへ つぎつぎといってしまうす

かなしいことはつづき せかいをまとめる あたまは かくれんぼしてた

たてものをみつめました なんとか みえないばしょに

また みをかくせましたけど もう おとこのこのじかんはみじ

かいです

おんなのこのたつていないばしよにみれんはなく

おとこのこは そらたかいばしよをめぎすのでなく もぐらのようになりませう

おんなのこのにんぎようをつくり おとこのこは おんなのことおとこのこの

ともだちだったにんぎようをつくり ひかりをたくわえていきませう

おおきなおおきなたても ひきのばしたじかん たくわえられる ひかり

やがて おとこのこは だいすきなおんなのこのめぎしたものを つくりました

ひかりが せかいにふりかかります ところが ゆたかになつて いきます

でも おおきなたてもものなかで ひかりをふりかける にんぎようだけは

おとこのこが つくつたひかりを おとこのこにもらうことはできません

かがやかしいせかいのなか ひかりのないにんぎようは

「……アンジェラ」

途切れたクレヨンで書かれた文章を見て、Xは胸に手を当て目を強く握り呟いた後

地面に対し視線を送った。

「——カルメン 何故わたしに この姿を贈った？

それが……貴方なりの祝福だったと 呪いであつたとも言うのですか」

管理者の言葉に、答えを返してくれる者は誰もいない。

「いや 貴方たちが恨む理由は たった一つ この事実だけで十分だ」

が テイファアレットもホドも、誰も居なくなった無人の部屋で静かな呟きがこだまする。

「……わたしが Aを殺したから」

## ハエ・ペインティング

遠坂 凜と同級生である子達。彼 彼女等は登校の最中に魚眼の異様な風貌の

男が突如として現れて忽然と街から居なくなつたと言うわけでもなく、現在は

普通に上気して赤らんだ額を両親に拭いて貰い、大人しく休んでいた。

「んー36度8分。大分下がってきたけど、今日一日は安静にしないと駄目よ」

はーい、と素直に返事しつつも子供は退屈だった。昨日の学校帰りから少しだけ

頭痛と喉の痛みを感じ、その後だいぶ熱も上がった。両親の話だとクラスの

他の皆も大体同じらしい。ちよつと時期外れのインフルエンザかしらねえと

学校が臨時休校になる報せを電話で受けつつ母親がぼやいていたのが子供の

印象には残っていた。父親は既に仕事に向かつてるし、今は自分と母だけだ。

「それじゃあ、お母さん買い物に行くから。  
熱が下がったからって無理に動いちゃ駄目よ」

母に行つてらっしゃーいと挨拶したが、そう素直に寝ている程に体は疲れてない。

退屈だから、テレビかゲームでもしようとする。学校が休校になつたのも

ラッキーだ。暫くは休みが続けば良いなと考えてると玄関のチャイムが鳴った。

誰だろう？ お母さんもお父さんも出て行つた。一人で外には余り出ないように

言い含まれてるけど……そう悩んでると声がする。

「すいませーん。宅配便です」

若い男の人の声だ。なんだ宅配便か、けど何時もお母さんが出てくるからなと

考えるが。暇な分、子供も何時もお母さんが出来る事を幼稚園児じやないんだし

宅配の荷物を受け取るぐらい出来るのとドアを開けた。

「あーどうも。……おつ 君一人で留守番かい？ 偉いね〜」

ドアを開けると、いつも良く町で見る宅配の制服を着たオレンジ色の若いお兄さん

が自分を見て朗らかな笑みを浮かべて褒めてくれた。少しだけ愛想笑いを浮かべて

宅配のお兄さんが持ってきた荷物を一瞥する。すごく大きな段ボール箱だ

お母さんかお父さん用の荷物かな？ それとも親戚が何か届けてくれたのかも知れない。

「わあ大きな箱。何処から届いたの？」

無邪気な質問に、お兄さんは陽気な笑顔で見ているかい？ と包装してるテープを切る。

あれ？ 勝手に解いて怒られないのかなと思いつつも、何が入ってるのかワクワクして

お兄さんが傾けてくれた段ボールを覗き込んだ。

——何も入ってない。

「えっ？」

「ははっ。俺は届けに来たんじやないんだよ君、引き取りに来たの」  
……ガチャン  
ブロロロロオ

ドアを閉じる。宅配トラックの後ろに段ボール箱が積まれ、発進する。

こうして、この子供の命運はありふれた日常の中で突如一瞬に尽きた。

「これで……人目、と。いやあ 好調だよ」

ねっ？ 旦那と無線のほうに声をかける。少ししてノイズと共に

声が返って来る。

『……ええ龍之介……彼の旧友と邂逅せしめた天の采配……聖処女の現界と共に我々の

願いが紡ぐ道は開けてますよ』

「確かに、あの旦那好きの姉さんの活かした計らいで芸術品の素材集めも

滞りないよね。こりゃー とつてもc o o rなもんを今夜中にも完成出来そうだ!」

キヤスター陣営のジルドレエ及びマスター雨生 龍之介はアジトの港から通ずる

地下空間から冬木市の夜の散策して新たな贄(子供)を集めようと行動開始。

その直前に邪魔が入った、いや新たな彼等の味方と言える駒の投入だが。

「ム……其処におられるのは何方(どなた)です」

海魔を繰り出す準備をしつつ、闇夜に目を凝らすジルドレ。側にいる龍之介も

遅れて誰かが潜んでるらしいと、殺人に師である旦那の振る舞いを見て目を移すと

日傘を開いて歩いてくるゴスロリのような少女を目に映した。

普通なら若く中々容姿も優れた女性は、龍之介の殺人アートの標的となるのだが

その女性からは不思議と食指が動かない。彼のある種の審美眼と言えるものが

ソレを普通の女性でないと無意識に見抜いたからだろうか、彼自身は理解してない。

優雅に微笑む女は、指を軽く鳴らす仕草をする。すると周囲の景色が移り変わる。

地面はおぞましい人の屍で埋め尽くす絨毯となり、近くにある草木も人間の屍で

織り合わさったものへ変わる。龍之介は、その景色を純粋に美しい



と感嘆の声を上げ

ジルドレエは、そのとても懐かしい魔術で出来た光景に沈黙し。それが解除されると

少女へと出目金の眼光を一層強め、肩を震わせた。

「おお……おお！　今の魔術はっ、忘れる事は未だなし！　おおお！」

フランソワ！　そう叫ぶように名を唱えて魔術師は駆ける。普通なら常人から逸れてる

爬虫類染みた風貌が凄まじく迫るのを見れば、大半の女性が悲鳴を上げて逃げるが

名を告げられた女性は、にこやかに彼が広げた両手の中へ無抵抗に受け止められ

情熱的な接吻を彼に施す。その何年も別離を交わした恋人同士の再会のような光景には

流星に彼の人間性の大事な一部分が欠落してるマスターも、頭を掻いて数時間ぐらい

どつか他所で素材集めなりアートの新たな構築を練って邪魔しないほうが良いかな？

と気遣いを浮かべる程には熱烈なワンシーンだった。それでも、彼は目的である

素材集め（子供狩り）を放置するのはちよつと不味いよねと感じてる為、通常運転で

口挟むのには少々勇気いる二人の空気へと声をかける。

「えと……旦那の恋人すか？」

濃厚な唇同士の接触は一筋の唾液を蜘蛛の糸のように引いて離され、妖艶な眼は

龍之介に向けられる。普通の人間なら魅了される風貌だが、向けられた本人は

やっぱりアートの材料にするには微妙な感じだなと評価を変えない。

「アハハハハッ！　私が？　ジルの恋人？　まーっ　昔はそんな時もあつたよねー

ねっ？ ジル」

気さくに少女は旦那へ話しかける。感涙と思える雫を流しつつ未だ声を発する事が

出来ぬ程の歓喜に震えてるらしい魔術師は肯定の首振りだけに収まっていたが

暫くして感激が収まると、不思議そうにフランソワと言う少女へと声をかけた。

「……然し、不思議ですフランソワ。貴方とはつい少し前に聖処女と共に傍へ居た

時は随分とつれない態度だったと思いますが」

この、かつての正体が今一つ謎に包まれた幾多の姿を持つ相方ならば昨日の深夜の

姿とて仮初の一つと納得出来るものの、その時の対応と今の彼女の和やかな雰囲気

敵を騙す策であったとしても、今一つ結びつかない。

「あーもうっ、ジルってば」

何時まで経っても、思い込むと一直線な部分は変わらないねーと本当に可笑しそうに

ジルドレの頬を艶めかしい手つきで撫でつつ説明を開始する。

雨生 龍之介に関しては、その内容は殆どチンプンカンブンだったが。彼の頭で

よく噛み砕いた感じでは、旦那が思慕してる女性の側にいたセフレの知り合いの

女は、この目の前の本物のセフレと良く似た美術品を持つてるようだが。それは

自分達よりもっと未来の収集家だったからで、これからその人物は俺達の芸術作成を

邪魔しようとして躍起になって町をしらみ潰しに探索するとの事。

前者に関しては、余り考えてもさっぱりだったが。後半はとりあえず旦那と俺の

大事な作品作りを潰そうとする奴がいると言う危機が迫ってる事

だけは解った。

「なんとつ、未来の英霊と……ふむ、俄かに信じ難い話ではありますが。それならば

貴方が譲り渡した、この宝具を持っている事は説明つきますねえ」  
「でしょ？　ねージル、昔みたいに楽しくやろうよ。……それとも、やっぱり

大事な大事な聖処女様の心を取り戻すのが一番優先？」

蠢惑な目が魚類を思わせる視線と絡む。間としては数秒足らずで答えは反つて来た。

「無論そうですね。貴方がこうして私に会いに来てくれたのは感無量ではありませんが

それでも、私はジャンヌの心呼び戻さなければいけません。そうこの手で！」

狂わしい程に情熱の高まった声と共に掲げられた手を、うんうんと感心した同調の

態度を少女は向ける。然し、勘が変な部分で冴える龍之介は少女が対応とは真逆に

旦那に対して何処か見限ったような冷淡さを覚えた。  
(……まっ、旦那が嬉しそうなら別にいいか)

そうマスターである彼が、喜んでやる気が充填されてる自分の師に水差す事も

ないだろうと遠巻きに見守ってるのを傍ら、予感が的中してるフランソワこと

フランチェスカは、聖処女狂いのジルに情愛を向けた目の奥で冷めた感情も向けてた。

(やっぱり、この時期のジルって麗しき聖処女様に傾倒しきっていて

魔術の話は弾むんだけど、やっぱ英霊として発現された所為なんだろうなー

ちよつと反りが合わない部分があるんだよね)

フランソワ　今は名を変えてフランチェスカ　プレラーティ。彼・

彼女は本来の

時空では蟲使いの末裔（間桐臓硯）に妨害され第四次では姿を現す事は終ぞ無かった。

この聖杯戦争では、その妨害者が召喚と同時にXの並みならぬ殺意と共に与えた宝具

のダメージから外部に対する警戒が取り除かれた事。

そしてこの盤上が掻き乱される事を望む邪悪の意志を携えたセフィラの工作により

目出度く数百年の時を経て旧友との邂逅を果たした訳だが、歪んだ英霊として現界する

彼との短いやりとりから自身と血肉の通った頃に無辜の民を面白おかしく

虐殺してた頃の記憶は併せもものの、自分の直接接していたジルドレとは大きく

一線を画す部分がある事実を、肌を重ねた事もある程には深い関係であるからこそ

フランチェスカは理解した。

生きてる頃のジル ドレ。聖処女が尊厳を踏みにじられ、民衆に辱められ全てに

見放され、それを助けようとする試みも叶わず、神に必死に救ってくれと祈るも

願いは終ぞ届く事なく火刑になったジャンヌ・ダルク。そして、その事実

に信仰する神を呪い、神など居ない事を世界に証明しようとして共に大量殺人

に手を染めた。あの頃の神へ反抗せんと漆黒に輝いていた彼はとても輝いてた。

元より少児性愛を併せ持っていた彼と共に、黒魔術の為に騎士見習いと理由を

付けて多くの子供を浚い、あらゆる方法で拷問死を観賞・実行したのは今でも美しい

思い出として残ってるが、英霊と言うのは当時の頃の状態を強く映し出していても

当時付き合っていた頃の細やかな癖や特徴までは持ち合わせてない。

当たり前の話だが、何百年も前の英雄と知人だった者が聖杯戦争に参加して当時の

英霊と接する等と言う前代未聞な想定を聖杯のシステム及び作成者が知る筈はなく

そしてその実例を今ここで生まれさせた少女の体をした悪魔の感想と言えばだ。

(んー……もういいかな正直。こうして懐かしい頃のジルと会えたのは

中々新鮮だけど、やっぱ出来の良い写し身っぽいのが抜けないんだよねー。

昔のジルなら、ちよつとは私の揶揄に躊躇い見せたり少しドン引いて人間臭い

可愛げのある部分もチラツツと見せてくれたけど)

このジルは、そう言う所がないもんねとプレーヤーティは心中で彼の評価を斜め下だ。

別に失望してる訳でない。元々、聖杯戦争と言う魔法を作り上げようとする産物に

羨望より蔑視の感情が彼女には大きい。あの、胡散臭い黒孔雀服もどきの代行者に似た

女の話に一枚噛んでるものの、全ての説明を受け入れる程に純粹ではない。

いや、信用どころか虎視眈々とフランソワも頃合いを見て逃走するか勝機があると

踏めば裏切る気にいる。既に、アレは同じ穴の貉であり性質は自分と同等には悪と

少しだけの付き合いであるものの長年生きて来た勘から見抜いていた。

あらゆる事情で奇縁ながら今は仲間として同席するキエフの末裔の蟲使いも

あの女の腹の底に関して薄々感じ取っているだろう。同種であり、隙あらば蹴落として

自分以外の全てが破滅に陥る様を望む、そういう存在である事は間違いない。

(まっ それはそれで偶には違った趣向って事で面白くはあるけれど)

このサーヴァントであるジルはジルで、自分が好みだった存在とは別物に近いが

一応自分の相棒だった頃の記憶は根強い。聖処女への妄執が強く、時間を積み重ねた

事で幾らか自分と言う存在があ頃より少し変わった事で今の魔術師と

あ頃の墮落騎士となった微妙な違いに抵抗感があると言う感傷がないと言えば

嘘だと思える自覚もある。だか、それはそれ これはこれだ。昔の誼で応援や、ある程度の援助はするが全身全霊を懸けてサポートする気はない。

ある程度、円滑に魂喰いが捗るようにと手近なジルが好みそうな児童のいる施設は

魔術によって流行病を撒いておいたし、それでもハマをするような潔く見捨てよう。

永く多くの戦争を傍観してきた身としては、この戦争以降でも彼と出会える可能性は

幾らでも有り得るのだ。彼等の行動が魔術戦争の秘匿を破ってる事から脱落の兆しも

目と鼻の先にあるし、その関門を乗り越えないようであれば陰で見送るのみ。

フランチェスカの当面の目的は、聖杯獲得による大迷宮の攻略だ

が。アレ等今回の戦争の

黒幕を担おうとしてる輩の話だと、今回の願望機は外れの中でも大外れのようなのだ。

(けど、面白い札が揃ってるわよね。最優の騎士王から始まり、マケドニアのフアラオ

フィオナ騎士団を崩御に至らしめた黒子の騎士 貌を見失いし群体のハサン

更にはメソポタミア最古の王ギルガメッシュ そして未来で人類を終わらせた者)

自分が提案した計画にのり、近くの宅配業者へと移動するキャスターとマスターより

少し遅い歩調で背を見つめつつ、口を笑みの形に歪ませる。

面白い、この聖杯戦争はとても面白い。キエフの未裔や、あの未来で死徒等を駆除する

機関の使者を名乗る女だけに、この街で起きる禍殃の甘美なる催しを独り占めさせて

なるものか。フランチェスカ・プレラーティは正義の味方等とは口が裂けても言えないが

誰かが描いた筋書きを素直に演じる舞台役者でも無いのだ。

(けど、真正面からじゃ。アレと相對するの 分が悪いのよね)

単純な魔術戦による化かし合いや、生存戦略と言う意味合いで外法なり何なり制限なく

手段を選ばなければ勝機はあるだろうが。あの女の所持している『――』が盤上を軽く

引つ繰り返せるが故にアプローチも手狭となっている。

まあ、それはそれで楽しいゲームが出来そうだと、やる気は十二分にある。

手札はブタばかりではない。精々キャスター陣営に取り入れつつ美味しい部分を浚い

ジョーカーと交換出来るようにポーカーを行う事にしよう。

表面上は大いなる時間を超えた上での再会を果たした高度な魔術師同士の結託と言う

麗しき情景であったが、その背景は只人の視線からは淀んだ色が渦巻いていた。

バーサーカー陣営。管理者Xと雁夜がハイアットホテルに在留した時間は太陽が真上より

少し傾きを見せるまで過ぎていた。ここまで長くランサー陣営と話し込むのは予定外だが

サーヴァントである彼女やマスターである彼自身、単体でしらみ潰しに冬木市内を網羅し

魔術の隠蔽に長けたキャスター等を把握する術は持っていない。雁夜は自分にとって唯一

あの怪物の手解き、御下がりである業とは言え蟲を使役する力があれば少しは探索に

助力出来たのにと口惜しい態度を見せる事もあったが、今の所はハサン達の諜報を無視

してまで勝手に動こうと無謀な真似は見せる意図は無かった。ランサー陣営のフィアンセの紹介、ロード・ケイネスのコレクション

ンのお披露目など  
ちよつとした出来事はあったものの、ホテルを揺るがす程の事件は

未だ発生してない。  
何もする事なく静観以外の術がない事に、椅子に座る白髪の彼は

少々貧乏ゆすりが目立つ。  
「まだ手掛かりは見つからないのかな？」

「そう呟くのは6回目だな、雁夜。幾らあの群体アブノーマリテイ達

が探索に有能でも  
冬木市内は広い。何より数種類の危険性を孕む存在が潜伏しているから、どうしても

慎重にならざるを得ない。少なくともアレ等は冬木にある聖杯と  
言う大型ツールに手が届く



圏内に点在しうる目的があるし、捕捉するのは時間の問題だよ」

「捕捉出来たら、またアサン達の時のようにアレを差し向けるのかい?」

F―01―57の依頼によって、百貌のハサンの半数を殲滅した時の事を示唆する彼。Xの回答は

彼の10段階評価で4か5程度の冷淡な内容だ。

「あの時とは状況が異なる。直接私が接したものでなければF―01―57の依頼は機能しない。

キャスターと言われる存在に対しては行使出来るだろう。だが、あのアブノーマリティは

T―09―90を宝具として携帯していた事を踏まえて、F―01―57が接触する前に絡め手で

直接戦闘が開始される前に鎮圧される可能性が高い」

「じゃあ、キャスターと再度接触した時はどうするんだ?」

「あらゆる耐性の高いlevel5エージェント達に一時任せ、戦術を把握した後に有効な

アブノーマリティを発動させる。若しくは、彼等の気配遮断と言うスキルを駆使して

不意打ちをするべきだろうな。あの手の存在が、こちらのフィールドで戦ってくれると

楽観視は期待しないほうがいい」

その言葉に、力ない溜息と共に肩を落とす姿が透き通った瞳に映る。今の発言に彼を

落胆させる部分があったか小首を少し傾げる白衣の彼女に、少し癖みの色を帯びた

目が向けられ、そして色んな感情が混ぜ合わさった声上がる。

「俺は自分の無力が恨めしいよ。こう言う時、君に任せて何も出来ない……臍硯なら

直ぐにでもキャスターの居るところなんて割り出せただろうにな」

「それは、あのアブノーマリティが私のマスターであると言う事を想定した上での

発言と捉えていいのかな？ それは、とても私にとっては好ましくない言葉だが」

眉を顰めて、普段無表情が基本であるXには珍しい気分を害した顔に慌てた声が挟まれる。

「いや違うっ、俺がもつと力があればって話なんだ。」

……ランサーのマスターを見ただろ？ 俺なんて凡才だと改めて感じさせる。

君だって、出来るならもつと力のある魔術師とパートナーになるべきなんだ」

その提案とも言えない提案に、賛同も否定の声もXははじき出さない。ただ、少しだけ

目線を斜め上に向け直ぐに戻し、顔は何時も通りの無となり声も淡々としつつ答えた。

「ランサーのマスターは、確かに力量は秀でている。またファイアンセと共に並列で

魔力を循環させ消耗を最小限に抑えると言う方法も私には新鮮なものだ」

解ってた事だが、評価は高いんだな。そう落ち込みが強まりそうになるが、言葉は続く。

「だが功績と名声、権力の躍進の為に戦争へ参加すると言う方針には賛同出来ない。

そのような事で召喚されれば、私は直ぐに彼とこの大型ツールの参戦を拒絶してただろう。

そうであれば、令呪の強制で使役されるだろう。そして、私の能力は君も知ってるの通り

宝具と言えるアブノーマリテイの氾濫は制御不可能なものだ」

遅かれ早かれ致命的な決壊が生じてたよ。と彼女はケイネスと自分には溝が出来るため

相性の良いパートナーとは言えないと告げる。それに瞬きをしつつ雁夜は呟く。

「なら、俺なら相性は良いのかい？」

「参加目的が、何の咎も責もない少女の救済。そして彼のアブノーマリテイの鎮圧。」

その内容なら私も不承不承で宝具の使用を躊躇はしないよ。それに君に負担をかける

代物では幸いないから、マスターの魔術回路の優劣など元々気にしてない」

Xとしては彼の暗澹な心を少しでも照らすための言葉だったが。効果は芳しくないように

考え込む顔つきに変化する。それにどうしたものかと考えると更に質問がぶつけられた。

「……ランサーのマスターはパンドラって君の事を言ってたけど、そうじゃないだろ？」

君の力は、確かに言われればそう思えるような力だけど。違う事もう何日も

過ぎしてたから解る。……君は、一体何者なんだい？」  
ずっと疑問ではあったのだ。

今まで見聞きした事のない幾多の怪物と奇怪な代物を封じ込める建物。

それを世話したり、脱走するのを防ぐ人種も異なる近代の人々にセフィラと呼ばれる不可思議な存在。

奇跡かソレに準ずるものでない限り除去するのも至難だった刻印蟲の除去に高度な

臓器移植。パンドラと言うサーヴァントに出逢った事は無いが、激痛で思考が低下しない

正常な頭なら、こんな出鱈目な事を古代の存在が出来ない事は一目瞭然だ。

Xは、その質問に沈黙を生む。地雷を踏んでしまったか？ 雁夜は心の中で召喚時に初めて

会話した時と同様に焦りが生じたが、遅れて耳に抑揚ない声が打った。

「……研究者、と言えば良いのかな。正直、私は自分の事をどう説明

すべきなのか

君に話して、それを理解して貰えるかどうか答えに窮している」

その態度は、今まで雁夜が目にした中で初めての様子の變化だった。アブノーマリテイの

暴走と言う、画面越しに人間が命の危機に瀕してる時でも常に狼狽の欠片も見せず機械

のように冷静に指示と対処を下す普段の姿からは見られない初めての弱さを見た。

暫く通る天使の間は長い。雁夜が無理に答えなくても良いと告げようとした最中、その

曇りのない瞳に何やら光が伴い、口は開かれた。

「そうだな、雁夜——私は」

ジー ジー ジー ジー

告白を遮るように、通信を報せるブザー音が鳴り響く。僅かに顔を歪めて遮られた主は

耳に指を当てて受信される幾多の内容を正確に知ろうと集中する為に目を閉じ

そして次の瞬間には強い目力を宿し立ち上がった。

「見つけたのか？」

「いや、不味い事が起きた」

表情は崩れてないが、口調には僅かに苦々しい色合いが見え隠れしてる。不安を

携えた視線で先を促すと、Xは静かに悪報を述べた。

「——『あちら側』のハサンが、こちら側と衝突した」

冬木の一目につかぬ斜影の世界にて、黒い影法師の姿形に髑髏の面を被った者同士が

跳ぶと共に交差しあう。すれ違う度に金属が鋭くぶつかりあう反響音が空気を震わす。

「くっ……！ 我等よ、聞け！ 志しを決して忘れた訳では無いのだ

ぞっ」

「笑止、既に袂を別れているのは火を見るより明らか。何故に伸うと貴様等は

我等を半壊させた魔女の影として甘んじている？ 何故に真の主  
に心を捧げるならば

命を捨てても叛旗を記そうとせん？ 機を見ている等と言う日  
和見を宣う気ならば

即刻この場で魔女について知る限り吐き終えてから、その手に持つ  
刃で自害せよ」

「先の戦を観賞していたのなら、解らぬのか!? 安易な反乱が通ずる  
ような容易な

「相手でないのは百も承知ではないか！」

「もう囀るな。既に、あの朧月の下で紅い死の狩人の手から落ち延  
びた我等は

夜に紛れ忍ぶ短剣で非ず。ただ我等の主の願いが頂きへ届く為の  
幾つもの段差と

なる事も是非にもなし——いくぞー！」

言峰綺礼の残数兵力であるハサン達は覚悟を決めていた。

バーサーカーの宝具である紅の狂戦士が起こした殺戮によって激  
減した兵力では

諜報活動も目覚ましい活躍は出来ない。それでも、自分達のマス  
ターは宝具で

無理強いに分散させる事はなく、お前達は有りの俣に自由に動いて  
良いと言葉を

投げかけてくれた。それだけで既に死に体当然の身と心も軽くな  
る思いだった。

願望機であわよくば聖杯をとと思うが、自身のマスターに危害を加  
えようと言う

微かにあった邪心も消え失せていた。自分達の願いを叶えると共  
に、出来るなら

彼が仕える遠坂よりも、マスター自身の心にあるだろう願いや祈り

がせめて届く

ようにと尽力する気概を残る真のアサシン陣営は心を鬼と徹する事に至った。

例え元々は同種でも、この前に多数のサーヴァントの乱戦でアサシンを使役してた

バーサーカーをみすみす見逃す程に我等は情け深くない。既に取り込まれた以上は

あの悪鬼共々滅する事が条理であるとバーサーカーの宝具下から逃れた刺客達。

アサシン達の総意は、敵陣営に対する能動的な排除だった。

「他のアサシン……いっ……えっと、確かマスターの名前は、言峰 綺礼 冬木教会の人間、時臣の隠れた同盟者かつ」

今の今まで仇敵に固執してた雁夜ではあるが、サーヴァントである彼女の言葉に

奴が子飼にしてる伏兵が不味い時に動いたと言うのを知った。

どうするのか？ と彼女を見遣る。それに、彼女も同じ位に挑戦を向けた視線を

彼へ送る。当惑を顔に浮かばせる前に、声が降る。

「君なら、こう言う場合どう行動しようとする？」

「おっ、俺が？ ……ハサン同士のぶつかり。実力は元々拮抗してるなら、短期戦で

相手を倒すのはかなり困難だ。泥沼になるのは間違いないから、何か新手を繰り出す

なり別のアクセシビリティを引き起こさない限りキャスターを見つけないのは無理だ」

「そうだな。……その新手はどう産む？ F-01-57は、言うておくが限定的に一体を

標的にしか出来ない。この前半数を壊滅したのは、相手がどう言う代物か理解

出来てなかった幸運が合わさったからだ。他に被害を周囲に与えず展開出来るものは

無いと考えてくれ。エージエントの出動も出来ない事も踏まえてだ」

彼は必死に少ない知恵を振り絞る。そして気のりしない様子でランサー陣営に助力を

頼み込むと言う回答を告げると、彼女も鷹揚に頷いた。

ハサン達の戦闘にランサー陣営を介入させる。こちらがハサンと言う戦力を保有してた

事を今まで話さなかったのを不義理と詰られ印象を悪化させてしまふデメリットは生ずる。

だが、遅かれ早かれ情報が晒されるのなら良い機会として、今の内に同盟を乱す膿と

なるものは吐き出すほうが良いと言う見解をXは持っている。

ならばとばかりに腰を上げようとした時、扉が短いノックと共に遠慮なく開かれる。

そこには、少しだけ不潔そうな機嫌が芳しくないケイネスが顔を覗かせた。

二人同時に、嫌な予感が走った。そして次の発言によって覚えた感覚は正しい事を知る。

「不躰に失礼するよ。然し、急な案件なもので君達にも報告しなくてはいけなくてね。

どうやら、セイバー陣営が我々に挑戦状を繰り出してきた。場所はここから少し先の

廃病院との事だ、これから行こうと思う」

「な……未だ日中なのにか？」

「それは私も思った。戦争の流儀と言うのをアインツベルンは何だと思ってるのか……」

内容としても断れば陣地となるホテルに外から宝具による攻撃の意思もあると言う

とても穏やかでないものでね。なので、行かざるを得まい」

これは、本当に偶然が合わさった不幸なのかと雁夜は訝しむ。言峰綺礼と言う

自分が余り把握しない陣営と、こちらが保有するハサンの交戦。それに対処しようと

助力を願おうとした矢先のランサー陣営に宣戦布告したセイバー陣営。

まるで天の意志か何かが、自分達に好機を与えないようにしてるかのようだ。

「君達は どうする？ 我々に同行するか否か」

一瞬間を二人は見合わせ、そしてバーサーカーが引き継ぐ。

「申し訳ありませんが、こちらがキャスターを見つけようとする為に指令していた

使い魔から、残る軍勢のアサシンに攻撃されてるとの報せがありました」

ランサー陣営がセイバー陣営と対峙する以上、こちらはアサシン陣営と交戦する

こちらのハサンの現場を收拾するのが最優先。

後に決闘の現場に向かう事を約束しつつ、短い荷物を纏める彼等に対しケイネスは

少ししてから提示された場所に向かうと言う事で見送る。

「ほお？ それは一大事だね。まあ、それならばそれで残るアサシンを殲滅する好機

ではあるだろう。君達の活躍を期待する」

僅かだが、発破をかえる声色が冷たさを持つ事に雁夜は違和感を覚えた。だが、何時

こちらの抱えるアサシン達が倒されるか解らない瀬戸際に、自分の不安を彼女に

伝えて要らぬ心配をさせるわけにもいかない。

急ぎ足で、ホテルを出る彼等を。窓から侮蔑を伴った目で見送るケイネスを知らず

バーサーカーとマスターである彼は出て行った。

「ケイネス。この報せ、セイバー陣営の情報は本当に正しいのかしらね？」



ソラウは、セイバー陣営から受け取った真の正しい情報

『バーサーカー陣営は秘密裡にアサシン陣営と同盟または共謀を画しており

複数のアサシンを自分達の隠された兵力として、ランサー陣営に隠蔽を敷いている』

と言う内容の真偽を伺っていた。宣戦布告に関しても上記と一緒に同封してたが、今肝心

なのは、ついさつき同盟が結成したと思われる相手の隠れた危害を加える意思だ。

鼻を鳴らしつつ、顎に軽く手をかけてロード・ケイネスは自分の考察を語る。

「セルフギアススクロールは、相手の魔術刻印を感知して自動で発動される。

例え、どんな高度な魔術の隠蔽でも契約すれば不可避の呪術に値する。

アサシンを保有してるとしても、今の所はこちらを暗殺しようとする意志は無い。

それを踏まえれば、セイバー陣営の情報はバーサーカー陣営との関係に亀裂を与え

足並みを揃えまいと言う攪乱の意図は見えるものの、あちらの情報にあつた配下が

こちらへ偵察した時にバーサーカーの使い魔とアサシンの一体によつて危害を与えられた

事実に関して虚偽は無い。となればだ、バーサーカー陣営が我々の陣営に情報隠蔽してた

と言うのも、もまた動かしがたい真実なのだろうな」

セイバー陣営、正しくは衛宮 切嗣が与えた情報。あえて、工作活動をしてた事を

白状して、ランサー陣営とバーサーカーの陣営の同盟関係に罅を入れる。  
キヤスターに対し共同で征伐に行かせず、まずは魔術師殺しとして

確実に潰せる存在である

ケイネス・エルメロイ・アーチボルトを討つための切嗣の策略だった。

結果は、完全な同盟の決裂までは行かずも。ランサーのマスターには幾らかの効果を齎した。

「バーサーカーは、やはり中々悪知恵が働くようだな。真名パンドラ、伝説の逸話には

神々の伝令であるヘルメス神から犬のように恥知らずで狡猾な心を贈られたと言うが

ソレに相応しいモノを備えてるではないか。自身の宝具を建前とし、第三者の諜報に

関してはギアスが発動しないように、こちらを良いように騙して取り付けたのだから」

「ならば主……バーサーカーを討つので？」

アサンを保有してた事を、不義理と受け取った上で戦うのか？と遠慮しつつ聞く

サーヴァントに、野良犬をあしらうように手を振りつつケイネスは話を続ける。

「今は未だ早い。あのパンドラが狡猾で会話してた大半が虚偽と思える事が解ったが

それでもギアスに縛られている事実には揺るぎはない。元より、話しの全てを鵜呑みにしてた

だけで無かったのだし、セイバー陣営の情報でソレが濃厚になっただけでも良しでしょう」

そう。ランサーも、バーサーカーについても聖杯戦争を勝ち得る道具としてとしか

彼は捉えてない。彼等の話を心から信じる事は典型的な魔術師である彼に、競争相手である

マスターの使役する存在に信頼を寄せる事など元々ないのだから。

バーサーカーと間桐 雁夜は自分の意志で我等には攻撃出来ない。保有してるハサンも

ギアスの関連者に含まれるからして、こちらに危害を加える事は出来ない。正し、こちらを

死角からランサーの宝具の展開や心身の状態、秘密裡に他のマスターとの情報戦を占有しようと

武力戦以外で優位に立とうとする腹黒さは見えた。

宝具の性能から考えても、途中で箱の怪物がこちらへ飛来して脱落したとしても

別に構わないのだろうし、もしかすればその飛び火による不運ゆえの死が元々狙いかも知れん。

やはり自分以外信用出来るものでないなど、戦争の非情さを再認識しつつセイバー陣営の

待ち構える舞台の場へ踊りだす。虎穴の場所であれど、この私に恐れはなし。

見ておけ、バーサーカーにセイバーの陣営。お前達が如何に秘密裏に策を弄しようと

ロード・ケイネスの実力は、それを遙かに凌ぐと言う事を。

各自が共に隠していた想いが、祈りがすれ違い、善として動こうとするもの達の

願いが段々と奈落の穴へ、見えざる蟻の巣へと近づいて行くのが見える。

——キャハハハハホホホツツ!!

「……………O—O—17—H Clown Smiling a  
t me (僕を笑うピエロ)だと……………」

——カーニバルが開演される。

## カーニバル 前編

間桐鶴野は無作法に壁に連結された何かを流している丸太程度のパイプへ

腰掛けつつ脱力した姿勢で無機質な天井を見上げる。

ホテルから帰った後は、また口煩わしく構って来る上司に尻を叩かれつつ

怪物達への作業だ。でかい蜘蛛への給仕、破損が著しいぬいぐるみの部屋掃除。

蠅の目玉を少し大きくしたら、こんな気持ち悪い目なんだろうなと言おう

夥しい複眼の蟲か獣をミックスした化け物をいやいやブラッシング。グ。

蒼褪めた肌の全裸のケツ突き出して壁に手をついて背を向けてる、何時ぞやの

弟と似た皮膚をした背の高い人間。恐らく女だろう奴に今日の天気やら何やら

他愛ない雑談をする作業もあるが、どうも鼻屑目に見ても人の姿をしたって

化け物は化け物だから嬉しくも何ともない。話しかけても調子の悪い

テレビ見たいな不明瞭な音しか返ってこないし、喋り続けるだけで気が滅入る。

「それでも、お前のしてる作業は楽なほうだぜ。安全性の確立がほぼ出来る」

チャンはそう言って羨むようなポーズをとるものの、俺は元々部外者で

魔術などの異端に関わる事自体が生まれながらの不幸なのだ。どれ程に

命の危険が少なからうが人外の存在と好きで付き合いたくない。

だからと言って悲鳴を上げ、泣き喚いても何も変わらないのは初日

で大体

理解したし、嬉しくもないが慣れは出来始めた。今日も今日で幾らか何時もの

仕事を半分ほど熟した後の小休止。エージェント連中から、お前の女房に

ドヤされる前に早く業務へ戻れよと軽口叩かれつつ、忙しなく動く他の

連中が時折こちらを見てくる人の流れを感情を死なせながら眺める。

今日はいいつ等……黒い影、アサシン達はいない。インディゴ色の髪の毛をして

共闘した奴も、マネキン指揮者の化け物を制圧する時にいた奴等も含めて。

大体全員似た背格好で同一の服装だから、誰が誰だが判別なんて出来ないがなと

一人勝手に自嘲しつつ持ち込んだ缶ジュースの蓋を開ける。

炭酸が口の中に広がり、喉を弾ける液体が嚙下していくのを噛み締め

目を背けたい現実を一時逃避しようとするが、真正面からの声が障害した。

「ねえ、貴方って外から来たって本当？」

目を開く。複数の男女が立っていた。知り合いのエージェントで無いのは声掛け

でわかったし、服装も異なっている。確かオフィサーと言う輩だ。

別に、この建物の中に居る奴は極一部を除いて悪感情を今は持ち合わせてないが

囲まれば自然と委縮してしまう性（さが）だから、自然と肯定の返答も小声。

彼等は消極的な返答を気にする様子もなく切羽詰まった様子で鶴野に頼み込む。

「それが本当なら……っ、管理人に頼んでよ。私達を外に出してく

れって」

何であんた一人が優遇されてるのよ。と、言外に夥しい妬みや怒りを感じ取り

困惑しながらも返事に窮してると、哀願は続く。

「聞いたわよ、エージェント達もあんたと同行して外出する許可を得たって。

私達……私達もう数え切れない日数此処に閉じ込められてるのよ」  
「私達の要望は管理人に届かない。ねえ、そっちから私達を出してくれる

ように言つてよ。ねえ」

こいつ等は、閉じ込められてるのか？ 自分達の意志と無関係に？  
鶴野は愕然とした面持ちで、この異常な会社で働いている下級職員達を見渡す。

……いや、最初の異常さもサーヴァントの宝具なのだろうし何でもありだと

常識から外れたものを、魔術だからと言う理由で納得してた。だが魔術だから、の一言だけでは処理出来ないものも多いのは確かだ。  
人智を超越した存在達、あの強大な存在を幾つも収納してエネルギーとか

言つたものを抽出する事や、妙に人間臭い職員達も普通の魔術師が扱う使い魔

なのかと問われれば、素直に納得するのに若干無理がある。

この会社は、本当にあのバーサーカーとして召喚された奴の宝具なのだろうか？

俺が接してる者達は、本当に魔術で出来合わさった使い魔の一種なのだろうか？

どうか私達を助けてくれと、間合いを詰められ身動き出来ないのは一人の

介入によって救われる事になった。

「何をやってるんですか、オフィサーの皆さん？ ……管理人にも、ツルノの

迷惑にもなりますので、業務に戻って下さい」

顔馴染みになってきた上司は、穏やかな声質ながら反論できない静かな圧力と

共にオフィサーへ告げる。エージェント達に、彼女等は抵抗出来ないうで

顔は苦虫を噛み潰したように変わりつつも、何も言わず立ち退いた。

困ったものですねと見送りながらぼやくユメカへと質問する。

「なあ あいつ等はこの会社に閉じ込められてるって言ったが、本当なのか？」

返事をしないかも知れないと言う懸念を持ちつつ、勇気を振り絞つての質問は

あつさりど、そうですよ？　と言う、何を当たり前の事と言う顔で返される。

「なに固まってるんです、ツルノ。私達、エージェントもオフィサーも既に

死んでる身なんですよ。そして、この会社で働く身なんですし気軽に無許可で

外に自由に出入り出来たら、アブノーマリテイの管理は誰がするんですか」

「いや、そう言う意味合いじゃねえよ……お前等ってさ、なんつーか、つまり

いやいや、あの管理人って奴の下で働かされてんのかなって」

その言葉には短く彼女は笑い声を上げた。睨みつけても、笑顔を崩さずに

軽く肩を叩かれつつ返事がされる。

「私は特に不満はないですよ。全部説明された上で納得して此処にいます。

……ただ、オフィサーや他のエージェントの中には蟠りを抱えてる人も

少なくないでしょうね。これは、結構デリケートな話題ですから余

りツルノは

私以外の人に、この事について質問しないほうがいいですよ」  
地雷を踏みたくなければね、との言葉に短く納得の意を示したものの正直

解らない事が氷解した訳ではない。漠然とした霧のような不安は晴れない。

(俺は結局のところ部外者だから、不都合な事はだんまりってか?)

別に藪蛇つついても碌な事にならねえのは解るから良いけどよ

……

あの女も、妖怪爺いの今どう動いてるかも掴んでねえ見たいだし。  
現状は今の所問題ないって言ってたが本当に大丈夫なのかよ)

こんな馬鹿げた技術力があるのだ。蟲爺いの一人見つけるぐらい  
数日で終わると

楽観視していたが、戦争を片手間に行えば流石に厳しいのか。

数百年人の肉を被り生きて来た存在だ。あの女に手酷い制裁を喰  
らった手前

このまま大人しくしてるとは思えないのに関わらず、あの管理者の  
警戒網に

一度も引つかからないのは一体どう言う訳なのだろう? 実は全  
て知ってるが

最初の宣言も嘘っぱちで、聖杯目当てに聞こえの良い事だけ並べて  
るだけではと

考えれば考える程に暗い方向に向いて行く。

少ない知恵を捻っても優良な答えは出てこない。今まで蛆虫見た  
いに、目立たず

墮落に身を落としてたツケが来ると自己嫌悪が沸き上がる。無  
い頭で考えても

何も出てこないのは当たり前。0は0で、もっと踏み越えればマイ  
ナスだ。

「ちっ、酒で縮んだ頭で幾ら考えても無駄だな」

自傷の言葉を呟きつつエレベーターと呼ばれる、定位置に立つと直



ぐに別の区画

へ移動するSFチックな装置のある場所へ向かう。今日は余り赴く事のない中層と

呼ばれる場所で仕事をするのが午後の予定だ。気乗りなんぞ何時までもしないが

前以て、この化け物園に引きずり込んだ疫病神から受けた説明を思い出して

溜息を長く吐く。ぽつりと眩きつつ歩き出す、今日のアブノーマリテイは

見た目は人と同じ感じで随分と傍目は可愛らしく愛嬌のある姿だが随分危険性も

高いと聞いているので憂鬱が増す。段々危険の高い作業に割り当てられてる気が

するが、これは抗議して問題ないのだろうか？

その時、再度呼び慣れた感じでツルノと後ろから声を掛けられた。振り返ると

ついさつき別れたばかりの奴が笑顔で駆け寄って来る。

「何だよ、なんか伝え忘れたのか？」

「えへへ、まあ ちよっと」

何が機嫌良いのか、ニコニコと吐息が掛かる距離まで近寄る。思いがけぬ接近に

反射的に後ずさった、そして違和感も覚える。

……こいつ、プライベートはともかく。社内でこんなに無防備にしてた事あるか？

『外では多少息抜きは良いですけど、社内では節度を保って下さいね。私も』

此処では常に緊張感を忘れませんか』

脳裏に過る注意の中の彼女と、今の彼女の僅かな違和感が更に後ろに足を進ませる。

「——なんで逃げるんです ツルノ？」

「いいや。別に逃げてる訳じゃねえよ ただ……用件があるんなら

直ぐ言えよ」

俺も直ぐ作業があるから、と付け加えると少し動きが固まると共に含み笑いが見えた。

「用件 ああ 用件 ですね 用事 そう用事があつたんですよ」  
語彙に説明し難い不気味さが見え隠れしている。また一步後ずさる。

「用事 用事用事用事用事用事用事 用事 用事は……キヤハ」

あいつが笑う。いや 晒つた

キヤハハハハホホホツツ!!!

なるべく人通りのある場所を練り歩くようにして進んでいく。その間にも傍受  
しているアサシン達の焦り声に退却ルートを教えるのを欠かさない。

最初はアインツベルンの彼女から借用してる車で向かおうと思つたが、不幸は  
連続して続くもので、道路の多くに渋滞が発生している。

何事かと噂をしている人々の声に耳を傾ければ、大型の獣が突然道路に出没し

それを避けようと衝突事故が幾つかで発生してるとの事だった。  
こうなると車道を利用するより徒歩の方が公園に向かうより早い。  
駅まで人気の

少なく危険が多いルートより安全面を重視した表通りを走る。  
走るが、それでも遅延している。何やら近くでイベントでも開催しているのか

何か所かに人混みが多く集まっている。人の山を掻い潜りつつ公園を目指す。

キャスター陣営の仕業かと考えたが、それにしても規模が小さく恐慌状態と言える

程の騒ぎではない。人為的な要素が含まれてるモノの、それが戦争参加者を妨害

する意図を含めるアクションには結びつかず、真相に悩み二人で慣れない運動を

駆使して聖徳太子以上の通信の対応をするサーヴァントに雁夜は軽く息切らし尋ねる。

「被害は？」

「未だ幸いにもハサンに脱落者は出てないよ。一部はライダー陣営を捕捉したので

その周辺に誘導する事にする。上手くいけば敵対ハサンも気づく」「わかった。貴重な戦力だしな、出来るかぎり時臣の手の奴に舐められる真似……」

尻切れ蜻蛉になった呟きと駆け足が一つ減ったのを認識して立ち止まり振り返る。

雁夜は立ち止まり明後日のあらぬ方向に顔を向けている。唇が動き、小声だが

葵さん と呟いてるが辛うじて聞こえた。彼の思慕の相手がこの冬木の駅近くの

通りを偶然徘徊していた？ 居ても確かにそれ程可笑しくはないが、情報では

遠坂時臣の妻子は隣町に避難してた筈だ。娘は此処近隣の学園に通園してるから

その関係かも知れないが。

「雁夜？」

意識を惹き戻させようと足を前に出す。すると、耳に人混みの雑音以外に鋭い

スナツプの音が届いた。反射的にそちらへ顔を向ける。

——コトネが居た。何時もの少し儂さそうな微笑みと、陽に少し反射された薄い

茶色の髪の毛を揺らし控えめに手を振る、公園で見慣れた彼女が。

いや、居る筈がない。彼女は今は登校時間の筈だ。そう冷静な判断と根付き

咲き始めていた不確定な脈動が喜びや驚きと言ったものを混ぜ合

わせ鼓動する。

声を掛ける前に目の前の光景に赤い華が咲き乱れた。

彼女の腹部から鋭く巨大な黒い塊と言える突起状の物体が生える。微笑は

消えて、桜のような空虚な表情となった彼女の唇から一筋の紅が滴る。

硬直したXの目は、コトネの背後へと移して更に透き通った瞳に驚愕の色が映った。

……至る場所、全てに空色の長い髪の毛——自身の存在を語る上で切り取れない

彼女が自分を囲んでいるのを視認した。

暴走アラート 発生

背後に持っていた鋭いサバイバルナイフと思える凶器を掲げて跳んだ彼女を鶴野

は棒立ちで迎え入れようとしていた。

あと数センチ、力を込めれば自身の心臓を突き立てると言う瞬間の所で鼓膜を

突き破りそうな轟音と共に、壊れた破顔を貼り付けた彼女の額にパチンコ玉サイズの

穴と共に血の小さな霧を噴出させ遠くに吹っ飛ぶのを目にするまで意識は死んでいた。

ようやく我に返り自分に襲い掛かって来た上司を見て、そして助けた人物が誰かを

反射的に頭をそらちに向け認識した人物を知ると、更に混乱に拍車

が掛かる。……ユメカに襲われたと思いきや、そのユメカが厳しい顔つきで銃を構えて自分の

後ろに立っていると言う奇妙な構図が何時の間にか出来上がっている。

「へ？ ……な」

「ツルノ！ ボサツとしてないで早くこつちに来なさい!!」

死にたいんですか！ と怒鳴りつけられ慌てて本物の元へ走る。  
不謹慎ながら

何時もの彼女だと安堵を覚え、そして反転して啞然と自然に口は開いた。

「つんだ、ありや。ピエロか？」

目に映ったのは、そう ピエロだ。オレンジに紫、ライトブルーと  
いった派手な

色合いの髪を生やして、真っ赤な丸い鼻を付けたサーカスに一人は  
見かけそうな

ピエロが壊れたラジオのように笑い声を上げて化粧してない血  
走っている目で

こちらを見つめてくる。胸に未だ塞ぐ事のない弾痕が残ってるの  
を認識して

こんな変挺りんな化け物の変装に一瞬引つかかりそうになった嫌  
悪感と

殺されかけた恐怖が遅れて足元から込み上げて来た。

哄笑を廊下一杯に響き渡らせ、ステップを踏みつつ何処からか取り  
出した

羽毛が耖られた鶏の死骸の首を掴み、それを持っていたナイフで切  
り取り

小さな血の噴水を作り出して更に笑い声を膨らませる。

異様な状況の発生に頭の整理が追いつけない。縋りつくような目  
線を古参の

人物に向けるが、その助け人の顔も依然優れず一筋の汗を流して  
る。

「深紅の黎明？ いや違う。こんなアブノーマリテイ、私は知らない」

「はあ？ 会社内にうじゃうじゃ仕舞われてる奴等じゃなきや

一体全体銃で撃たれても平然と嗤ってるソレは何だって言うんだ

よっ」

鶴野の渾身の思いが詰まった口の挟みを見無視して、彼女は続けざまに

罰鳥フォルムの銃の引き金に指を掛け続けながら後退を続ける。

それでも目前で胴体に幾つもの銃痕のボタンを作り続けるピエロもどきの

化け物が堪えた様子はない。先程よりも少し小さい嫌な笑い声を歯の隙間から

垂れ流しながらギラギラとした眼光を向けてナイフを掲げ前進する。

逃げろと大声で告げて彼女は銃を連射する。立ち尽くす足は動かない。

嗚呼、このままだとこいつ<sup>ユメカ</sup>死ぬなと頭の何処かが他人事のように呟く。

ほら、逃げろよ。何時も見たいに都合の悪い時は我が身が大事だからと言う理由で

逃げてたじゃないか。今回は最初の時に遭遇した赤い靴の女と遭遇したのと違って

都合よく目の前で外に管理人って奴は出してくれないんだ。

目の前の女だって逃げろって言ってくれてるんだ。——黙れ

今回も同じだ。さっさと安全な場所まで駆けるんだ。——黙れっ

お前見たいな甲斐性無しの屑を愛した女を見殺しにした時見たいに、割り切れよ。

「——五月蠅いんだよ！ 好き勝手に言ってるじゃねえよクソが！」  
形振り構わず、構えてる腕を掴んで一直線にピエロと反対方向に走る。

何か言ってる、手を引っ張り続けても耳元に聞こえた内容は生存本能に突き進む

鶴野の頭には入ってこない。ただ、死の因果とは真逆の方角へひたすら走り続ける。

結果的に、その行動は正しかった。会社内のエージェントの誰もが初めて目にする

アブノーマリティ。その現物を視認した管理人すら正しい指示を決めかねていた。

上層から下層にかけて搭載されている、アブノーマリティ収納区画からエージェント

オフィサーの休憩スペースとなる場所に搭載されている防犯カメラの幾つにも二人が

命懸けの逃避行を演出するにあたった元凶がニヤニヤと陣取っている。

彼女は、情報だけではあるものの把握する正体の名前を呟く。

「O—O—l—l—7—H C l o w n S m i l i n g a t m e  
(僕を笑うピエロ) だと……？」

馬鹿な。これは会社内に收容されていた記録は無い」

様々な緊急コールに対し、一先ず各種の抵抗値の高いエージェントを先頭として

チームを割り振りつつ、このL o b o t o m y c o o p の履歴を  
探る。

「かつて■や■が在籍、会社設立時から遡っても遺跡や裏路地  
に出没していたと言う

便利屋達の未確認超常存在の記録を除いても、やはりコレが此処に  
現れた例は無い。

となれば、やはり外界の人物が原因か」

深紅の黎明、そう呼ばれるc o o pで度々起きる深淵下のアブノ  
マリテイの新たな

暴走の可能性はあるものの、起因となっているのはまず間違いなく  
外で今起きている

幻覚による精神攻撃による影響だ。外部から晒される汚染を除去  
しない限り

半永続的に起きた疑似深紅の黎明は断絶しないだろう。

「マルクト、コントロールチームの指揮権利を一時的に預ける」

無線から、宜しいのですか？ とノイズ混じりに確認が唱えられる。

「構わない。前にも告げた通りだが、私は正確には■では無いんだ。

君達には誠意を以て対応するし、信頼も勿論所有している」

伝達事項だけ簡潔に述べてメインルームを空ける。

これ程の恐慌状態となれば、施設のアブノーマリティも過半数近く集まっていると

この前の暴走の比では無い。何人かの犠牲も覚悟せねばならない。

出ていく間際、一つの画面を一瞥する。拡大すれば焦燥一杯に我武者羅に一人の

女性を引つ張り、通路の穴から這い出てくる深紅の黎明から逃げる男女が見える。

「すまないMr. 鶴野 ユメカ。もう暫く持ち堪えてくれ」

管理人の祈りが通じてるのかどうかは定かで無いものの、間桐の家に元々備わってる

スキルと聞こえの良い単語にするか、呪いと呼称すべきか彼等の家は平均的に

運は良くないものの悪運を伴っている。悪事を成しても幾らか栄えている間桐の始祖や

現在進行形で受難を受け続ける子孫達含めて、しぶといと言って良い。

彼は必死にセーフティルームを探して走る。目に掛かった汗を袖で乱暴に拭いながら

強い熱を感じる手の平に繋がる相手へ乱暴に聞く。

「何処だっ!? どの通路を行けばウジャウジャ穴から蟲見たいに出てくる

基地外ピエロ共から逃れられるんだっ」

「こんな時に笑えないジョークですか!? 会社内で暴走が発生した時、それを鎮圧

しない限り安全なんて有り得ないと入社直後に散々説明したでしょう!」



「それじゃあどう鎮圧するんだ！ もう弾も無くなるぞ、ああクソおおお!!」

目に付いたジェスターハットへ出鱈目に拳銃を引く、独特の硬直の後に体全体が

不気味に赤褐色の発光するのを目にすると、吊りそうな足をフル稼働して距離を

開くと同時に背後から爆発音と背中に強い風を受ける。

さつきからずつとこの調子だ。撃って倒れるかと思ったら自爆する厄介な化け物が

そこから湧いては近づいてくる。一番最初に遭遇したのとは種類が少し違う

ようだが、どちらにしろこちらの生命を摘み取ろうとしてるのは間違いない。

この惨劇の元凶、こんな舞台に引きずり込んだ張本人は未だ対処をしないのかと

呪いつつ瞬間転移するエレベータに目を付けて有無言わさず飛び込んだ。

どの階層に行きつくかは知らないが、少なくとも此処より最悪な場所が無い筈。

眩い光は何度受けても慣れずに閉じる瞼。慣性の法則に従って走り込んだままに

予測では別の通路が先にある床へ足を踏み込むと、ズルっと靴底が何かにとられて

強かに転倒する。引つ張った拍子で、道連れの女の体重が背中に一気に掛かり

肺の空気が一気に僅かとなる咳き込みをしつつ、呻きつつ目を開けた時に鼻腔へ

鉄臭い匂いが一気に感じた。

「…………え あ ……………あ」

血だ。廊下全体を大量の血の水たまりが出来上がり、至る所についさつき

出来上がったばあかりだろう死体がある。多くは白衣の研究員達で、見覚えがあり

そんな人物や、余り把握してない者も含め様々。

真つ白になりつつある思考の中、無意識に見た横の死体と目があつた。

……こいつは、確かつい少し前に自分を此処から開放するのを融通してくれと頼んでた。

もう一度、次は逆の方角へ。其処には、ついさつき休憩とばかりに離れた時に

サボるなよと軽い調子で注意していた、あのマネキン指揮者以降で多少仲良くなった

同僚の顔である事を知った……もう、その顔に生氣は無い。

「う あ……あ」

死んだ。

俺の身近にいた奴が、少し知り合っただけだが それでもこんななどうしようもない

自分を気に掛けてくれた奴が、また再び。

「ツルノっ。しっかりしなさい、立ち止まっても仕方がないんですっ

悲しんだり落ち込んでる暇は私達には無いんだから」

血まみれの中で、ギャハハハと金属音混じりに笑う声が沸き起くる。

強く揺さぶられる肩に、無意識の内に立ち上がる者の眼前の光景は絶望が蔓延してる。

様々な刃物や鈍器を持ったピエロの集団が犇いている。その背後には異常なほど

長い首が三つ、これもピエロの頭部を生やした化け物が同じく俺を見下して嗤う、晒う。

この通路に居た全員を手に掛けたと思われる元凶達は、惨めな顔になつてる俺が

愉快とばかりに、馴染み深く忘れる事など不可能に親しい心を抉る



普段通りの笑い声を廊下に響かせつつ、ハンマーと言うよりは人の頭部らしき

棍棒という言い方が正しい武器を振り回し、迫って来るピエロを薙ぎ払いつつ叫ぶ。

「我が友、ツルノよ！ 倒れ伏してる死体の山々は親しき者だったかな？

はははははははははは!! 嗚呼！ 悲しいなっ 辛いだろうな！

自分を責めたくなくなるだろうとも！ だが、それでも だ!! スマイル！ スマイル!!

ツルノ!! 口の端を最後まで引き上げて！ 私のように、こんな感じに！

笑い飛ばすんだ！ 笑い飛ばしてしまえ!!」

ちよつとやそつとの銃撃でもビクともしない廊下が一瞬振動する勢いで、不気味な表情の

マスクが張り付く棍棒を勢いよく振り落とす衝撃波によつて迫るピエロ達の多数が壁に

叩きつけられたり、胴体を潰され動かなくなる。けど、多勢に無勢だ……無理だ、あいつ

一人で勝てる程にこの狂気の軍団の質量は小さくない。

ブラックの奮戦の隙間を掻い潜り、暗い思考に嵌っている鶴野へと小さなピエロ達が

刃物を携えて迫る。動けない彼を守ろうとユメカは射撃し続けるが、自爆寸前のトマト

めいた色に全身染まる爆弾道化が彼と彼女の間合いに踏み込む。

再びの絶体絶命。それを救ったのは彼等の危機に気付き介入するブラックや覚醒した

鶴野でも無い……第三の介入による流星を帯びた弾丸。

「……は？」

新しく職員が助けに来てくれたのか。機械的に振り返った彼は予想だにしない恰好の

存在を認めて呆けた表情を浮かべた。

「――助けに来たわよ！ 怪我は無い!?」

鶴野は自分の壊れかけている頭がついに容量を超えてぶっ壊れたのかと考える。

だってそうだろう？ 行き成り出て来た水色の頭髪で黒とピンクのハートの髪飾りをした

『魔法少女』見たいな恰好した少女だろう人物が登場して、自分が正気だと言えるか？

少女は持つてるステイックらしきものを構え、一回転すると共に舌を突き出して

アニメの登場シーンのような決めポーズと共に声を上げた。

「愛と正義の名のもとに、魔法少女がやってくる！」

「Miss桜……」 此処 此処に入っていて下さいね。絶対に良いと言うまで

開けちゃ駄目ですからね」

パニツクは本来アブノーマリテイが収容違反時に侵入してこないセーフテイルーム

にも及んでいた。それは、この会社に深く関わらない三人の内。一番安全圏に

保護されている桜も同様だった。

たまたま彼女に管理者から時間があれば適度な世話か見守りをするようにと指示された

オフィサー達は深紅の黎明だろう怪物達の出没に狼狽しつつも近くの部屋に退避した。

数人のオフィサーが笑い声を上げてナイフを振りかざす怪物に応戦するものの

彼等は怪物達を鎮圧する為の抽出武器など所持しないし、サーヴァントのような特殊な

力などは持ち合わせておらず普通の人間同様だ。管理人に必死に通信しつつ人柱と

なった者達の断末魔を背に密室の個室に逃げ込むしか手段は残されなかった。

ダクトや抜け穴になるだろう場所に精一杯できる密封を行う。管理人に指示を仰ごうと

するものの通信にノイズが生まれ思うように上手くいかない。

数人のオフィサーの武器は心許ない。あるのは万が一の為の拳銃だが、本来これは

アブノーマリティを倒す名目で使用する事が殆どない事を把握している。残るは部屋に

あつた鉄パイプや、所持している鋭いペンぐらいだ。

唯一の出入り口から巨漢の誰かが体当たりするような震えが走る。

一人のオフィサーは

桜を設置しているロッカーの中へ押し込んだ。

彼女は必死な願いに僅かに順応示す領きを返すのを見て、引き攣るように微笑しつつ

オフィサーはドアを閉めた。数十秒して、バリゲートを破る音と共に哄笑と避難させた

人らしい悲鳴に数発の銃撃と殴打音、その後肉を切り裂いてるような物音がした。

それから暫く暗闇の中で遠ざかる複数の足音がした後は静寂が続いた。体を抱え込ませ

言われた通りジツと動かないでいると一つの歩行音と共に目の前の扉が開き光が射しこむ。

オフィサーでは無い。けど、血に染まった狂気的笑顔に染まった怪物でも無い。

汗を流し、息を切らした顔で見下ろすホドを彼女は直視した。

「Miss……っ Miss桜、怪我は無いですね？ 良かった……！」

「さっきの人は？」

「……………安全な、遠い場所にいます」

さつきまで惨殺死体があつたであろう血まみれの床を一瞥しつつ、ホドの答えに淡々と

そうなの、と彼女は呟く。恐怖も悲哀の色もない態度にホドは怒りも落胆も見せないまま

彼女の手を握り、開け放たれたドアから僅かに顔を出して周囲を伺つてから飛び出した。

廊下の壁や天井に数人分の血のペイントがなされた廊下を駆けていく。遠方で爆音や

銃撃が轟いているのを耳にしながら、彼女は桜へ事態の進行具合を説明する。

「いま現在マルクトがコントロールチームを率いて上層から深紅の黎明の対処を行っています。

イエソド、ティファレト、ネツアク、ケセドも中層 下層に発生してるコントロール暴走を

収束してます。もう直ぐ、もう直ぐで安全になりますから大丈夫ですよ！」

力強い宣言であつたものの、それは安心させるのは他者よりも自身に向けてる感じが強そう

だなど桜はぼんやり思いつつ引かれる方向に走っていく。

あの角を曲がったら、管理人のいるセーフティルームに到着しますよ！ と、桜に一瞬

振り向きつつ体を斜めにしてカーブをかけようとしたホドの体に衝撃が襲つた。

その決して小さくは無いが襲撃とも違う人同士のぶつかり合いだと感じられるものから

謝罪と共に彼女は顔を上げて、そして顔を硬直させた。

ホドが倒れ込んだ拍子で繋がった手が解けた桜も、虚空の瞳を上へ向ける。その瞳には

白衣を着こんで、天井の光で顔に翳りのある女性がホドを見下ろす。少し視線をずらせば

蒼褪めた顔つきで、錆びつくように口元を動かしてセフィラの女性  
は名を唱えた。

「ティ ファニー」

ミシエル

どうして？

貴方さえ居なければ  
みんな死ななかつた

白衣の女が一言の区切りの中に怨恨並みならぬ色合いを見せる眩  
きに、ホドは頭を抱える。

桜は棒立ちになりながら彼女達を見比べた。少しだけ、今の彼女の  
姿が何時も御爺様に

進んで虐められていた変なおじさんに似てるように思えた。

見下ろす女性所持してたのであろうナイフを振り上げる。壊れ  
たように御免なさいと

繰り返すホドは回避も防御も出来ない。セフィラと言う普通の人  
間じゃない存在でも

怪物が所持する刃なら関係なしに傷つけられるのかも知れない。

……また、私の目の前で誰かが傷つく。あの好きになれない女の人  
も私を守る為に

傷だらけの体を更に傷で塗りたくって戦って。あの世話をしてく  
れた年上の人達も

ピエロの恰好した悪魔から私を庇ったように、この人も。

何も変わらない。私の目の前に悲劇は無くなりほしくない。

—— M i s s 桜 今日は何して遊びますか？

——このビデオ、私は好きなんですよ 時間があればご一緒にどう  
ですか。

——イエソドは何時も厳しい顔をしていますけど……それは周りに  
危険が起きないように言う

皆を守る為なんです。だから決して怖い人では無いんですよ。

——ねえ M i s s 桜

ただ それでも。この頭を抱えて泣いている人は私の為に精一杯



しようとしてくれた。

桜は真正面から向き合う訳でなく、殻に閉じこもっている目だけだ。ただ、それでも。

小さな灯は未だ燦っていた、隙間風のような悪の暴風は気紛れに彼女の其の揺らめく小さな

陽炎を一時的にだが昂らせたようだ。

刃が振り落とされる直前、桜は彼女の頭上へ覆いかぶさった。その小さな体軀を盾にしようと。

そんな少女のか細い盾などで刃は防ぎ切れるものではない。然し、その少女が点らせた

自己犠牲とも言える高潔な抵抗を見逃さない紅蓮の戦士は、この社内を幸運にも火山の粉塵

の如く未広がる速度で其の場所にまで辿り着いていた。

黄金の道よ 開け

黄金色の魔法陣が、ティファニーとホドが告げた職員の横へと展開されると共に、何時もの

防護スーツの片腕に豪華な装飾で覆われた二の腕まで覆われるグローブラしき武器を

纏ったゲブラーが出現するや否や問答無用で彼女達を殺害せんとした職員を殴り飛ばした。

骨や肉がひしゃげる音と共に壁へ大型肉食獣並みの一撃を受けたソレは、人の形を

瞬く間に消してピエロへと変わり。体を正面からくの字に折れた状態で数秒笑い声を

上げると共に消えた。残るはE・G・O Weaponを解除した戦士と庇護される二人だけだった。

怪我は？ と簡潔に聞く女戦士に、蒼褪めた顔で桜を抱きしめながら大丈夫と短く告げる。

「そうか……桜、ホドをよく守ってくれたな」

金の籠手が身につけてたのとは逆の手が、藍色の髪をくしゃくしゃと撫でた。

急ぐぞと、反転して先頭を歩く戦士の背を少し見つめてから。乱れた頭部の箇所を

少しだけ触れて、小さな彼女もホドと共に歩き出した。

それ程の距離を歩いた訳ではなかったが、まだ幾つもの場所から阿鼻叫喚がこだま

しているのが聞き取れる。開けられた扉には、何時ものように落ちて着いた様子の

管理人が三人を待ち受けていた。開口一番に訊くのは唯一の武闘派だ。

「おい、何が起きやがった？」

「外部からの精神汚染の攻撃だ。恐らく、君が桜と共に襲撃した者と同一人物」

白い髪に鬚髯を帯びさせた、無邪気な笑みの中に羽音のように黒い邪笑を秘める

女性を二人同時に思い浮かべる。

「それで、この暴走か……で、どうすりや良い？ このままひとつ走り上層から下層に

かけて何時も通りの駆除をやってくるか？」

「そうすると、エージェントも残るオフィサーも全滅しかねない。……これで良い筈だ」

何かしらの精密機械に休む事なく手を滑らせていた管理者は、呟き終えると同時に

一つの穴に金板のようなものを差し込む。

すると、音楽が流れ始めた……オルゴールのような音色。

「――T-09-09（テレジア） 起動」

辺り一面の人々達<sup>アンジェラ</sup>が凝視して固まっている矢先、周囲一帯にオルゴールの

音が生じ始めた。聞き続けるにつれ、現実感を曖昧とする魔力を秘めた自鳴琴だ。

周囲一帯の青い髪をして彫刻のように均整とれた顔が下を向き膝

をつく、景色にノイズが

走ると共に幾多の通行人が頭を抱えてるのが映った。

強硬手段で周囲一帯を沈黙させた張本人が周囲を見渡すと、人の垣根越しに日傘を回し

去つていく少女の後ろ姿が一瞬写った。追いかけたくはあるものの、現状は未だハサン達

の回収も出来ておらず、マスターの彼を置いていく訳にはいかない。

更に、施設内での暴走もテレジアと言うアブノーマリテイを施設内の暴走収束の為に

本来とは異なる使用をした為に、次にどのような副作用が内部で起きるのか予測出来ない。

既にL o b b o t o m y c o o pと言う社内に安全な区画を維持するのも困難になっていた。

作業員として活動する鶴野にはエージェントをサポートさせれば未だ何とかなる部分はある。

然し、あの娘を地獄の坩堝に留まらせる訳にはいかない。

手を翳せば次の瞬間に鮮やかな紫陽花と似た色合いの髪が管理者の腰部分で揺れていた。

内部の制御を行う自分から事前に説明を受けたお陰で、特に周囲の様子へ混乱する事もなく

こちらを何時ものように吸い込まれそうな無を纏った瞳で見上げる。

「今から公園まで急ぐ。Mr. 雁夜とも一緒だが、構わないか？」

管理人の言葉に、彼女は頭を抱え蹲っている少し煤けた背中と白髪頭を少し見つけてから

頷いて手を握った。それに鷹揚に頷きを示すと、マスターとしての立場たる彼の後頭部に

有無言わさない調子でガンドを放ち、軽い悲鳴と共に正気へ返る彼と共に急ぎ足で

目的地を目指して駆けた。

一方その頃……。

剣戟が鳴り響く、白き雪を連想する長髪を揺らして騎士王の勝利を手を組んで祈る

アインツベルンの姫君。上手く握れない腕の腱の損傷を手数と持ち合わせた百戦錬磨の業で

誤魔化しながら二振りの魔槍を捌いているが、雲行きはどうにも思わしくない。

円卓の王たるアルトリアの剣技はフィオナ騎士団随一の騎士であるデイルツトに勝れど

本来劣る事はないものの、前夜にバーサーカーが呼び出した黒鉄の鎧の騎士を含めた襲撃を

掻い潜った消耗を、潤沢なる魔力を有するアイリスフィールと言えど一夜で完全に回復させる

のは難しかった。それが戦場を拮抗させている。

「どうしたっ。息が荒いぞ、セイバー！」

「戯言だなランサー！ 貴公こそ宝具を早々に開帳せねば後々後悔するぞ！」

サーヴァントの正騎士達は思い思いに今持てうる限りの力をぶつけている。死してから

騎士道を重んずる、伝説のアーサー王に全身全霊でぶつかり合える喜びを体感して

黒子の下にある唇は我慢しても笑みの形に自然と綻ぶ。けれど槍と剣がぶつかり

一瞬出来る間の中で垣間見た背後に、今世の忠義を示すマスターが居ない事だけは

少々心残りでないと言えば嘘になり、口の形も一文字に戻る。

ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは堂々とランサーと共にセイバーへ挑む気は無い。

彼は結界を張った場所にフィアンセを待機させると、魔術感知によつて潜んでいる鼠を

炙り出す為に月霊髓液を駆使しながらセイバーの真マスターを捕

捉する最中である。

それと言うのも、日中にてバーサーカーとの談合で仕入れた情報に因るものだ。

『セイバー陣営だが、昨夜に同行していた彼女はマスターでは無い。

私の宝具内のアブノー……怪物が張った結界から連れ出した際に令呪の存在を

感知出来なかった。多分、別のビル内に居た男女のほうだろう』

その言葉によって、ケイネスも真のマスターが衛宮切嗣。アインツベルンが雇った

魔術師殺しの魔術使いである事を遅れて知ったのだった。

（災厄の箱を抱えるパンドラめ。このロードの私とアインツベルンの傭兵を

衝突させ同士討ちにさせる腹だろうが、貴様の思惑には乗らんぞ）  
獣心を飼っているであろうバーサーカーの真意を見抜きつつ、齎している情報の

価値だけは今の所不利益どころか逆だ。アレは狡猾で自分の手を汚さず周りが

自分の優勢になるよう仕組んでいる部分はあるものの、そこに勘付いて無駄に

暴れても結果こちらが害になるだろう事も理解している。

業腹ではあるものの、未だ彼のプライドを逆撫でする程の禁忌を仮想敵なりえる

バーサーカー陣営は行ってない。魔術師同士の闘争なら日常茶飯事の部類に入る

頭脳戦の類だからこそ、感情に任せて同盟を破綻する暴挙には打つて出ない。

今は目先のセイバー陣営の傭兵の捕獲または無力化が先決だった。廃病院の奥へ奥へと

向かうにつれ、魔術師が本来手に付けない殺傷性に富んだ畏が待ち受けている。

魔術礼装の最高結晶と言える、自身最強の魔術たる月霊髓液の前で

はその威力は

小波の飛沫以下に無力である。圧倒的な優位を保持しつつ、堂々と正面から己の力量を

ぶつけずコソコソと近代武器を披露する傭兵に段々と悪感情を募らせて声を張る。

「アインツベルンに雇われし兵士よ！ 貴様も魔術師の端くれならば小細工を弄する

事せずに尋常に立ち合え！」

宣言には無言の何処からかの銃撃しか回答されなかった。その誇り高い名家の凋落

と呼称して過言でない、魔術師の矜持ない卑怯な戦略の数々は、落胆と失望を覚えた。

（間桐に続きアインツベルンもまた違った意味合いで堕ちたものだな。いや……間桐は

魔術回路の衰退はあっても魔術師同士の闘争に沿った謀略で挑んてきている事を

差し引けば更にこちらの方が性質悪い。例え戦闘に特化してない魔術師であろうとも

ここまで野良犬に誇りを喰わせるような振る舞いはせん）  
この戦争に自分の手を一切汚さず、何処かの戦場で活躍した魔術を

齧るだけの兵士に  
聖杯獲得を担わせてると言う現状は誇り高きアーチボルト家の当

主としても目に余る。  
段々とケイネスが正常な理性を崩す中で。冷たいクリアな思考を

依然維持し続ける  
衛宮 切嗣は、地雷原の領域外から狙撃銃の点検しつつ次の行動を

思案していた。  
（予想通り、送り込んだ書状でバーサーカー陣営と亀裂が出来たよう

だ。これで  
あのパンドラの箱であろう宝具を心配せずに済む。

だが、バーサーカー陣営に繋がりある言峰綺麗の飼っている群体の

ハサンが僕や舞弥を

攻撃しない保障は無い。相手が僕が相對してきた典型的な魔術師なら大きな隙は

必ず生まれる。そこを——討つ

衛宮 切嗣の作戦。バーサーカー陣営が協力してるハサン陣営との繋がりを仄めかし

同盟者への危機意識を持たせて行動の幅を狭めさせる。

キャスター陣営の蛮行を防ごうと動いてる以上、ランサー陣営と足踏み揃えて昨日に

ある程度の交友を持ったアイリと非戦を持ちかけてた事を考えれば来るのはケイネス及び

ファイアンセとサーヴァントのランサーだけになるのは極自然な事だった。不安材料たる

アサシン達の動きが依然無いのは不気味だが、それを畏れては何も出来ない。

然し、この陣営が手薄になるのは今限り。千載一遇の機は今を逃せばもう無いだろう。

今日中にでもキャスター陣営を他陣営が叩いたとすれば、バーサーカー陣営が彼等と

和解を行えば、それ以上内側から瓦解させる材料は乏しい。衛宮切嗣にも残された

自分が倒すに限りなく相性の良い陣営を潰すタイミングが後先ない状態なのだ。

サーヴァント同士の激しい攻防戦の裏で、マスター同士の近代兵器と最高魔術礼装の

激突が行われている。ケイネスの妻、ソラウ・ヌアザレ・ソフィアを捕獲するのを

久宇舞弥に命じてるので実質一対一のマスター同士の対決だった。

ケイネスの扱う月霊髓液は、ありとあらゆる形に変化可能となる水銀の矛であり盾。

そして生まれ持った優秀な魔術回路と合わされば長時間、やろうと思えば数日休みなく

稼働し続けられるのが強みである。一方で、用意した兵器は限りがあるし衛宮切嗣の

切り札である固有時制御は身体への負荷を相応に強いるものだ。通常なら彼がケイネスに

現時点で公開している手札だけで勝利を呼び込む事は難しいと第三者なら語るだろう。

——だが衛宮切嗣は『魔術師殺し』である。

ドオン！

「がっ……!?!」

(月霊髓液の防壁を貫いた? ……馬鹿な! まぐれ当たりだ)

『起源弾』相手の魔術回路を『切り』『嗣(つぐ)』接ぎ直すのは殆ど出鱈目で

魔術回路が富んでいる人間であればある程に、その効力は凄まじいものへと変わる。

切嗣が対魔術師用にと開発した魔弾は、水銀の壁を貫きケイネスの肩も穿つ。

だが、それでも未だ浅い。相手の魔術回路が最大限に高まってないと弱い。

トンプソン・コンテNDERで次の銃弾を装填する。だが、その隙を見逃す程に

ロード・ケイネスも甘くはない。生まれて初めてと言って良い他者から受けた

小さくない傷に激昂し、魔術回路を最大限まで高め二節の詠唱を行う。

「——Fervor, mei Sanguis」(滾れ、我が血潮)

「Scalpel!」(斬)

水銀の液体はケイネスの体を取り囲む柱の壁となる。と同時にその柱から一筋の



銀の液体が紐状に高速となって衛宮切嗣の体へと走る。逃れる速度では無い！

だが、それは衛宮切嗣としても願っての無い自分の魔術礼装を發揮する場面。

(これで終わりだ)

トンプソン・コンテナーから放たれた銃弾は水銀の壁へと吸い込まれ　そして……。

青い火花が轟いた。

## カーニバル 後編

……話は数時間前に遡る。冬木ハイアットホテルにてケイネス・エルメロイ・アーチボルトは

その空間に整理整頓と鎮座された、使用用途が只の人には判別し難い品に対し大振りに手を

空いた空間に弧を描く仕草を交えて饒舌にソレ等の独特の気配を放つ物を説明していた。

「君程の名を馳せた英霊ならば逐一詳細を述べるのも愚かしいものだが、私が揃えているのは

時計塔でも選りすぐりの技巧を担う者等が創り上げている。どうだね？ そちらの所有する

箱の中の宝具には及ばずとも、魔術師の中では一流の域とは思わんかな」

栄光の手、レガリアをオマージュした錬金の品、護符や退魔の力を秘めた呪術及び魔道具。

ロード・ケイネスが時計塔講師として華々しい人生を謳歌してきた中で収集してきた品々を

間桐との同盟記念を一環としてコレクション自慢を行っていた。マスターである雁夜には至極どうでも良く、目の上のタンコブとも

言える魔術師への  
嫌悪を濃厚に感ずるランサーのマスターが優越感を隠そうともせず実入りのない話をするのに

辟易としていた。隣で耳傾けるサーヴァントの彼女が自分と同調しておらず、その気に入らぬ

相手の話にも多少関心ある事にも一層と気分が倦厭が増す。

一方で、バーサーカーことXは。アブノーマリテイから抽出された武器や防具ほどの力は

無くも魔術師の力が凝縮された品々の中で、取り立てて騒ぐ程のものじゃない山々から

少々無視するのは難しい物品へと距離を縮めた。ほう、と呟きつつ

コレクターが告げる。

「目が高い、君も気づいたか。その槍は時計塔地下にある通称アルビオンと呼ばれる場所から

発掘され、創造科の君主も手を加えた逸品だ」

手に入れるのに中々労力を強いられたよ。と笑うのを尻目に彼女は上から下まで細部に

透き通った瞳を映して評価を下す。

(これは、この世界のE. G. O Weaponと呼称しても可笑しくない代物。

この世界にも、遺跡や黒い森のような領域は微小ではあるもの存在する事は認知してる。

そして、コレも希少な幻想を根幹とした侵食性を省みず使用可能な優れた品。

この武器は耐久力さえ低いものの、今稼働している大型ツールから派生されている私や

他サーヴァントと呼ばれる存在にも十分効果を発揮出来る)

「無理を承知で伺うが、これを譲渡して頂く事は可能だろうか？」

振り返った言葉の内容を聞くと体調芳しくない様子の男はギョツとし、もう一人の男は

鼻で笑いつつ首を大仰に横へと振りつつ謳うように返事をする。

「馬鹿も休み休み言いたまえ。今さっき語った通り、ソレは数十年前に時計塔君主へ至る前

数々の伝説作り上げた者が半ば命懸けで入手したものだ。私のコレクションの中で有数の

譲れぬ一品なのだよ？ まあ、ソレに見合う物を等価交換とするか。または力尽くで

奪うとでも言うのならば……」

「そうか、わかった」

躊躇う事なく、一つの並べられた輝かしい短剣をXが取り上げる。

その蛮行とも言える行動に

控えていたランサーが顔色変えて前に進み出ようとするも、落ち着

いた様子でケイネスは

片手を上げて制する。セルフギアスで縛られている故に、危害は加えられないからこそその

余裕の対応と、次にとうとうとするバーサーカーの挙動を見逃さぬ為に。

勿論Xにロード・ケイネスを武器で脅そうとする思惑は一切ない。そのまま手に持った武器を

自分のマスターである雁夜へと柄の部分に向けて手渡す。

次に何をするか読めない自分のサーヴァントの挙動に困惑を見せながら危なっかしい手つき

で受け取る彼へと淀みない口調で、それで出来れば軽い自傷をしてくれと更に彼が混乱する

内容を頼んだ。それでも尚、彼女は冷静そのものといった様子で傍目気が違った内容を求める。

「別に深く斬ってくれとは言わない。軽く手の甲に滑らせるぐらいで構わないから」

黒鉄の威圧的な姿形の騎士なら断固として拒否していただろうが、見かけは雁夜より少し年下な

これまで自分の事を気遣ってくれてる女性だ。戸惑い隠せないものの、軽く目を瞑り

肯定と共に言われるがままに短剣に手の甲を当てる。心身に直接的な害ある呪術は無いものの

強化に連なる力を付与されてる事により、思った以上の出血と痛みに小さく呻き目を開けると

既にガンドの構えをXは一步距離を置いた上で執り行った。

「HP―N弾」

エメラルドグリーン色の光と共に小さな閃光が彼を貫く。小さな火傷めいた感触と共に手の甲の

傷が数秒で瞬く間に塞がるのを、コレクションルームに居る全員が目視した。

「REDシールド」

続いて赤い閃光が雁夜を直撃すると共い淡いルビー色の光が体を包む。一見して何も変わららずも

解析を帯びたケイネスの目には彼の体に生半可な魔術師の攻撃では貫けない膜のような防壁が

覆われたのを認識する。了解とらず、そのまま白髪の男から取り上げたナイフで再度同じ部位に

ナイフを滑らす、僅かにルビー色の火花が散るのみで傷は生まれ  
ない。

検証終えた後、白衣の女性が投げ渡した銃弾の形をした魔術礼装を受け取る。

「肉体の再生、魔力回復、幾らかの魔術及び肉体に対する攻撃を防ぐ力がソレには込められている」

「ふむ……形状こそ私の審美眼に相容れぬが、中々どうして」

これは利便性に長けていると呟き洩らす。月髄液の切り札ある故に、物理的攻撃を防ぐ銃弾は

余り必要性感じなかつたが、魔力肉体の回復の銃弾は非常時や妻たるソラウの緊急治療としても

使用出来るだろう。保護の銃弾の幾つかは彼女に渡しておこうと  
考えつつ質問する。

「攻撃用のガンダの弾丸はあるのかね？ また、コレはランサーに  
使用するとすれば

どの程度の回復が期待出来る？」

「申し訳ありませんが、回復と保護の用途の物以外の危害を加える効果の物は流石に。」

サーヴァントに対しては劇的な防壁、回復の作用は余り期待出来ないでしょう」

あくまでも人間、サーヴァントのマスターを守る為ですと説明された後にトレードを再度

提案され、少々の思考を費やした後にロード・ケイネスは首を縦に振った。

——バチン!!

「がぁぁ、っ!!? ……くっ　うう！　魔弾かつ!?　小癩な手を、傭兵めがぁぁ!!」

月霊髓液の堅牢がドロリと溶け、切嗣が放った起源弾によって魔術回路が出鱈目に継ぎ接ぎ

された末路の満身創痍な姿で出てくるであろう未来凶は裏切られた。

堅牢は解除されたものの、並みならぬ怒気と生気を顔に貼り付け歯を食い縛りつつ片腕を

抑えながら睨むケイネス・エルメロイ・アーチボルトの其の姿は未だ戦闘継続可能だ。

P A L E (生命の分割)とB l a c k (浸食)から防護するL o b o t o m y c o o p の弾丸。

時計塔地下魔窟アルビオンの武器と引き替えに貰ったサーヴァントの保有する

魔術礼装をセイバー戦後にでもじっくり解析しようと肌身に離す事なく携行していた事が

ケイネス全身の魔術回路を破壊する運命から脱却した。ただし、月霊髓液を操る為に動かしてた利き腕のほうはシールドの影響よりも

起源弾の威力が勝ってしまい無傷で危機を回避とまではいかなかったが。

(馬鹿な。確かに着弾した筈だ……あの魔術礼装に他魔術を阻害する力が含まれてた?)

然し部分的に起源弾の効力は及んでいる。なら、持ち込んだ礼装に起源弾を阻害する

アイテムを僕の情報外で保有してたか)

やはり、幾らかの人命の犠牲かテロと称されてでも。魔術工房たるホテルを破壊するべき

だったと後悔するに、この局面は遅すぎる。

瞬時に改造銃のトンプソンを戻すと同時に発動した固有時制御と共に横へ跳び

反撃の銀の槍から逃れようと体を捻る。

だが健在の月髄液の捕捉は二倍速となった状態でも避け切れるものでなく、水銀の槍は

狙いたがわず黒コート越しに胸を直撃し、窓を粉碎して傭兵の体は廃ビルの外に

投げ出されるのをケイネスは見た。幾らか溜飲を下げても、未だ引く事のない激痛に

苦悶の声を漏らし治癒を試みる。……駄目だ、どんなに試しても回復しない。

手の指先から二の腕にかけての魔術回路が完全に回復不能になったのを悟ると

残る無傷な手の爪を噛みつつ怒声を上げて暴れたくなる衝動を抑え込み。

（くそ、くそくそっ！ この私がかが傭兵如きに大事な腕を破壊されるなど

この上なく人生最大の屈辱だぞ！ 許さん！ 赦さん！！ 今の月髄液で止めに

なったとしても、その五体がこの世に残ると思うなよっ）

死体を蹂躪、未だ憤怒に染められない思考で令呪が消滅しないなら剥奪する意図で

窓に近づき地に伏してるだろうセイバーのマスターのいる地上に顔を向け目を見開く。

「?!?! いない 何処へ……!?!」

亡骸がある筈の地面には肉片の一つすら無い。確かに心臓部分をロード・ケイネスの

最高結晶である魔術礼装が貫いた筈だと言うのに関わらず。

理解し難い現状に、解答行きつかぬままに念話で新たな急報が飛び込んでくる。

『……主 ソラウ様の身に危険が』

「つセイバーを抑えられなかったと言うのか、ランサーっ」

内容に自分のサーヴァントが敗北し、ソラウを人質にとられたのかと激情含めた唱えを

上げるが、サーヴァントの返答は異なりを見せる。

『いえ、決着つかぬままにキャスター陣営の使い魔が発生しました。然しながら追手として

バーサーカー等が駆け付けたようですので、その救援が』

ソラウ様の保護は整えられようとしています、との言葉に最悪の事態にはならなかったかと

安堵の息をついて地上に視線を走らせてから、舌打ちをしてフィアンセのいる場所へと

踝を返す事にした。陽炎のように忽然と姿を消した傭兵の始末が出来ないのは名残惜しい

ものの、彼にとって最愛の妻の身がセルフギアスで最低限安全の保障が出来ていようとも

仮想敵になり得る同盟相手の側に長居させる程の度量は無いのだから。

▽ ▲ ▽ ▲

剣戟が秒数単位で何度も鳴り響く戦闘の最中、突如として不穏な空気が身に包むのを

交戦していたサーヴァント達は察知し、動きを止めて周りに目を向ける。

ヒトデのような海棲生物を模したグロテスクな魔力で出来た生き物。それが影から

触手を伸ばしセイバーとランサーの体へと巻き付こうとする。

「——フツ」 「——破ア！」

だが伝説に名を遺す歴戦の英雄に不意打ちなど高がしてれている。海魔のウネウネとした

蝕肢に肌を触れさせる事も許さず槍と剣の錆へと変わる。妖気とも称して良い気配に

キャスター陣営である事を一早く察知するセイバー、その眩きにラ



ンサーも少し遅れて

華々しい決闘へと水を差す輩が居る事を理解すると手に携えた槍の向きを変えた。

「セイバー、ここは一時共同といこうか」

鋭気に満ちた目がかち合い、輝く翠の目も逸れる事なく受け止めて力強く応答する。

「ああ、良かろう」

続々と地上の影から深海より這い出てくるかのように次々と数を増やす水棲の魔の光景に

圧巻する事なくとも英霊同士の誇りを伴ったの決闘と言う雰囲気でない事は承知。

セイバーの後ろの安全圏で見守りつつ、出現した海魔を認識してアイリスフィールは

少しだけ仲を深められたと思えたあの白衣の女性を想って呟いた。

「……あの人は、間に合わなかったのね」

先日の宣言通りにキャスターを早期で討つ事が適わなかった事に對し失望はなくとも

欲を言えば、この戦争を悪戯に掻き乱す不穏分子の代表とも言えるキャスターを打倒して

くれれば良いと望んでいた。

自分でも不思議だが、彼女はいずれセイバーと戦うであろう存在であり切嗣が聖杯を

獲得する為に立ち塞がる敵だと理解しつつも、どうしても心からの排除を願えない。

再度合流して無事だった切嗣に安心しつつ、そんな自分の心象を告げた所で愛する人は

君は優しいなどと告げるばかりで真摯に対応はしてくれない。

わかっている。このような戦争で今この優柔不断な気持ちは本来なくて良いもので

正しいのはきつと切嗣のほうだ。

それでも、あの時彼女の宝具の暴発によるものだとしても。闇の中

で手を掴み引き揚げた

あの切嗣と見間違えた事と、自分と同じ存在であると仄めかした彼女の表情。

それがどうしても脳裏にちらついてしまっただけではない。

そう、考えていたのは油断だったのだろうか？ いや、セイバーにランサーも突然密集した

海魔の変則した動きには警戒しつつも一手遅れた。ヒトデの要塞のように化した物の中から

潮と鼻を刺す異臭とも違う気配を感じ取るや刹那、その海魔達を引き裂くように新たな

黒いロープ状のものがセイバーとランサーの元へ駆け抜けた。

二者一様に僅かに目を見開いて新たな奇襲に短いリアクションをすると同時に愛用の武器で

その黒鞭を防ぐ。

『く（ぬ）っ……っ!?!』

だが、その攻撃は海魔達の幾らか規則正しさもあつた猛襲に体が馴染んでいた二人の英霊が

見込んでいたよりも強い衝撃を与える。予想以上の攻撃に足踏みすると共に其の気配が消える。

セイバーの背後に悪寒が走る。振り向く先は自身の守護する姫君の居る背後。

「アイリスフィール 逃げ」

「え？」

緑のエメラルドの目が一層開かれる。先程の海魔の壁に隠れてた異様な正体が何であるが

アイリスフィールの頭上を見て知った。

黒い墓石のような石碑の形、その石碑の中央の左右に黒く紐のように揺れ動く大きな触手が

揺らめいている。そして、その一般にモノリスと言われる物体が次に何をしようとしてるか

否が応にも知れた。アレは彼女自身の石碑と物理的になそうとし

てるのだ。

「おのれ外道め……くっ 邪魔をするなっ」

ランサーも騎士にあるまじき戦えぬ者を抹殺せんとする新たな魔物の不意打ちを阻害しようと

するも海魔が悉く邪魔をする。

宝具……魔力を揮発させ駆けつけ……念話で真のマスター（切嗣）に令呪でアイリスフィールを。

駄目だ、どれも間に合わないと言われないと直感が冷徹に告げていた。間にあ  
わ  
な  
い

止めて 止めてくれ 私は国を救う事が出来ず そして自身が守  
ると今世で心許した彼女すら  
みすみす目の前で守れないと言うのか。止める 止める止める止  
めろ止める

「アイリスフィール!!!」

——ダンッ

「地中の天国」

誰でも良い、誰がアイリスフィールを救ってくれ。

その祈りを届けさせたのは神でも仏でも無い。一本の閃光と化した槍がモノリスを穿ち

姫君の肉体をプレスしようとする寸前に、流星の如き勢いの投げ槍の餌食となつて銀色の

髪の毛に触れるかどうかの距離に墜落した。慌ててセイバーの側に駆け寄る彼女が五体無事

な事に少し放心気味になりつつ緊張を抜けた息を吐き、誰が助けてくれたのかと槍の投げた

方向へと体を返す。共に交戦していたランサーでない事は二槍とも携えてるからして一目瞭然。

其処にいたのはチャリオッツを率いる大柄な粗暴そうな男でも、黄金鎧の神々しい片鱗を見せる

英霊では無い。言うまでもないがハサンでも無い。

それは赤を基調とした独特の装甲服を身に着け、鉄よりも硬そうな兜を身に着ける出で立ちの

謎めいたサーヴァント。こちらへと向ける明確な敵意は無いものの、体全身から発する殺気は

四方八方に散漫しており、新たな救援と素直に喜べる感じでは無い。

一体誰の刺客なのか？　と言う疑問は浮かべる必要は無かった。それに遅れて数秒後に一台の

走行音が遅れて聞こえてくると、その謎の赤い戦士の側へと危なっかしい手取りでバイクへ

ブレーキをかける白衣の女性が目に付いたからだ。

「バーサーカーっ」

「……私だと、この乗り物の操縦は余り上手くないな」

安定した乗り物が一番に限ると、溜息ついて疲弊を背負い地面に降り立った英霊は声をかける

サーヴァント等を堂々と無視しつつ、アイリスフィールへ声をかけた。

「……間に合ったかな」

黒い髪のポニーテイルを揺らし、何故か悲しそうに微笑を浮かべる彼女の言葉に

アイリスフィールも同じく笑みを浮かべて頷いた。

▽▲▽▲▽▲▽

とある親切な御仁からバイクを拝借しランサー　セイバーの交戦地に赴くゲブラーとX達と別に

冬木公園には複数の同じ制服の男女と一人の少女がベンチを中心に佇んでいる。

廃病院から異様な気配がある事を見抜いたゲブラーが、セイバーとランサーの交戦について

キャスター陣営が襲撃に及んでいる事を知ったが故の急行。

L o b o t o m y   c o o p 内 が 荒 れ て る 状 態 で、桜を収容して現

場に駆け付けるのは余りにも危険と

考えた上で、Xは数人のセフィラと共に公園で待機するよう言いつけた。

紫陽花色の髪の毛に、細い手が肩にまばらに付いた部分を梳きつつ、労りを以て告げる。

「Miss桜 大丈夫ですよ。管理人もゲブラーも直ぐに戻ってきますから」

「それと……改めて助けてくれて有難う御座いました」

ホドの礼に、桜の反応は殆ど無だ。

だが、微かにだが。別に気にしなくて良いと言う表現で首を揺らすように見えた。

それは、気の所為じゃないと思いたかった。

今は日中帯でまばらに一般の人達もいる。常識を知っていれば突然襲い掛かって来る

サーヴァントは居ないだろうとXは見込んでいた。

セフィラの彼女、彼等も同様の見解だった。敵対するアサシン達も消耗してる事や

キヤスターを除外するサーヴァントを扱うマスター達を除く外部の異物（フランチェスカ）は

宝具内のテレジアの音色で立ち去った後に、その気配は公園と逆方向へ向かっていった。

……現状での危険性のリスクを回避する為に彼等の判断は確かに正道ではあった。

だが、その道を軽々と踏み越えていく存在がある事をバーサーカー陣営は認知してなかった。

「——はつきり言って 見るに堪えぬ顔ぶればかりよな」  
『な（え）っ……!?!』

服装は現代の出で立ちなもの、その濃密な気配と重圧をモニター越しで認識してる。

たった一人で他サーヴァントを殲滅せんとする力量を担う存在。赤ずきんの傭兵やハサン含め

一撃にて粉碎する実力、多種多様な古代の伝説の武具を無数に保有すべし古代の王。

ハサンの一人から遠坂時臣が触媒としたもの、交戦時の異質な能力とLobotomy coop内にある

資料と技術の結晶からの調査から知れた。それは彼の『ギルガメッシュ叙事詩』の主演

メソポタミア最古の王 ギルガメッシュ。

何故此処に？ 遠坂時臣と言う者の情報は余り入手してなかったが、ハサン達の観察眼に優れた

者達の意見を踏まえると、彼のアーチャーのマスターならば自分のサーヴァントを護衛として

身近に置いておくだろうと管理者から聞いてたのに。

スーツを身に着けたエージェント達の幾人かは桜を背に隠して立つ。

ただ佇んでいるだけでも、木々の揺らめきを起こす程の威圧と覇者の気配に自然と汗浮かぶ。

バーサーカーの配下の彼等は一様に、Lobotomy coopのどのような抽出武器で完全装備で包み

挑んでも数秒時間を稼ぐのか関の山だと感じた。

映像の中での英霊や、Lobotomy coopのアブノーマリテイ達とも異なる絶対強者の気配。

ここまで何もしてないのに畏怖を感じさせるのはセフィラの特例を除きいなかった。

対するギルガメッシュは、その蠅螂の斧と称して良い布陣を鼻で笑う。

彼の目には、その並ぶ人盾が脆弱で自身の宝具を開帳すればたちまち崩れるのが

比喩表現で無い慧眼で理解出来る。多少は、自分を唸らす隠し種は抱えてそうだが大半は

全力の三分の一を出せば簡単に血の海に沈む。

一人だけ、少々人間なのかどうか分らぬものが居た。恐らく、体格

も実力もこの兵士達の中で

一番下なようだがギルガメツシュには解る。この中のリーダーはそいつだ。

「おい、そこの雑……」

雑種と何時ものように自身以外は下の者へ呼びかけようとしたが、思い直した。薄々知れる

その正体を感じれば、雑種は相応しくない。

「――『人形』、貴様に聞こう。あのバーサーカーは何処だ？」

人形と呼ばれた、どうにも気弱な雰囲気は抜けない一見20代前半、十代の後半にも見える

女性はピクリと肩を震わしつつも、目を反らす事なく弓の王へ口を開く。

「管理人は、ランサーとセイバーのほうに。サーヴァントのマスター達がキャスターに

襲われるのを見過ごせない」と

「ふん。暗鬱と狂気に沈んだ怪魚の類の元へか」

漁師の類の真似事をする気色でもあったが、と嘯くアーチャーは手に持った現代の菓子を

放り込みつつ、胡乱気にホドより後ろを見遣る。

庇うように視線の障害となるホドだが、地平線より向こう側を見たギルガメツシュの目は

欺けない。ベンチで置物のように佇む桜を見とめ、口元を嘲りへと変えた。

その小さな変化を見て、斜め下に伸びてた評価を90。直下へとホドは改める。

多少は異なるものの、この目の前の男は自分の幸福であった場所を破滅に陥らせた要因たる

身近な存在の一人と似たような存在だと。

「はっはっは。そして、お前達の主は人形娘の御守りに人形と死人を囲んでると言う訳だな」

御苦労な事だなとアーチャーが響かせる嘲笑をじつとホド達は身

動きせず聞き流す。

このサーヴァントが何処まで自分達の実情を知っているのか、いや知らずに当てずっぽうと

超常的な勘のみで喋っているのか予測はつかない。

それでも情報では最古の王、自身が絶対の存在であると疑ってない以上は軽はずみに

反論や口を挟むのは自殺行為だ。

そんな思惑を関知や配慮する事など全く無いままに、彼は自身の独白を続けていく。

「まあ、あ奴めには今後とも相まみえる機会はある。我は寛大ゆえに、貴様らの主の命が

長引く事も許そう。して……だ まあ今更告げる事でもないと思うがな」

——今の内に死んでおけよ

そう、唇を弧の字に歪めるでもなく。王は目を丸く開ききった女へ告げる。

それは残酷な内容だと言うのに、声色は愉快そうでもなく真摯な音色を含めている。

「——自分で無理だと感ずるならば、我の元に下れ。さすれば直ぐにでもこの手で

救って消してくれようとも。お前も あいつもな」

この世界箱庭を終わらせたく無くばな、と言葉を締めくくる王に震え声  
が上る。

「何を 貴方は何を知って」

「質問を許した覚えはないぞ、人形。 まあ……答えを知りたければ何時でも来い。

ただし、この我の耳を煩わすような場を作るでないぞ」

彼女の求める答えとも違う、遮つての真理を知りたくば一人で来いと言う悪魔の誘惑。

公園内に吹きすさぶ木枯らしが強まる中、言いたい事だけを言い放った後に王は踝を返す。



ただ、その背を彼女達は見送るばかりだったがホドは強く睨みながら囁くように呟く。

「……私は、違う。もう、以前のc o o pの私じゃないんだから」  
その感情込めた呟きは誰にも聞かれず、風だけが流していく。

(余興にもならぬが、暇を潰すに至る程度には飽きない代物か)

ギルガメッシュにとって、こと聖杯戦争の聖杯は何を願うものでもなく、全身全霊賭して

得ようとするものでない。彼は生前にほぼ全ての物を手中に収めた。

聖杯と言う願望機さえも、彼にとっての財宝の一つと言う認識でしかなし。それを

横から搔つ攫おうとするハイエナただけしい盗人崩れな英霊が気に食わないと言うだけ。

黒鳥の見せる暗黒の空間や、吠える黒鉄の狂戦士やゴーレムもどきの斧使いとて彼には

煩わしい以上の何物でも無い。小細工を仕掛けて退却したバーサーカーに関しては

最初こそ自身を侮辱した怒りは残っているし、いずれは雪辱を濯ぐ為にもぶつかる事を

決めているものの、それを除いてこの世界。冬木市に彼を愉しませるものは余りに少ない

事が現状だった。それが、大いに彼の不満を溜らせる要因ともなっている。

正史とも言える、雁夜がセイバーと因縁深い戦士を呼び込んでいれば自ずと言峰 綺礼は

まだ自身の暗黒面と向き合えない懊悩とする求道者であり、その生き様に関心惹かれ

ギルガメッシュは彼の人間観察に重みを置くのだが、この世界は異なる。  
なる。

バーサーカーの中にあるセフィラの一人、歯車であるが決して意図

して回らぬ一つが

自由に世界へと羽ばたき、そして呼び寄せたのが言峰 綺礼。早期の出会いには彼の本性を

取り戻す一端となり、聖職者<sup>邪</sup>は彼の審美眼に逸れた行動を起こしている。

であればどうなるか？ 彼の英雄王は元より愉しむ筈の玩具が側でない事で別の玩具で

暇を潰す為に外出する時間を多く設けている。本来なら入り浸る仮住まいの教会も

胡散臭い存在が陰に潜んでいると知れば好んで足を運ぶ気にもならない。

彼は薄々勘づいている。マスターの時臣を差し置いて、あの傍目は忠臣を演ずる者の

瞳の奥に全てを崩そうとする蛇の目を。

(まあ、それでも構わん。この俺も薙ぎ払う存在が余りに小物過ぎても退屈過ぎる故にな)

それでも彼はそれをあえてマスターの遠坂当主に忠告する気はない。もし偶然に気付き

自分を守れと命ずるなら、呼び出した臣下の頼みを聞かぬ程に狭量でもないからして

蹂躪しよう。だが、彼は頂点に佇む者として小虫が裏で何をしようとも率先して

それを潰そうとする意欲は無い。

彼の関心は今の所バーサーカーの正体。そして、この聖杯戦争と言う盤面の行く末だ。

その鍵を握るのは、恐らく自身が否定しても惹かれているであろう存在だと言う事も。

(アレが我を教会より遠ざけ、何を画策しているように。そして小蠅が情理を歪めた

魔術師と何を成そうとも —— 全ては我の前では無意味)

ギルガメッシュは道を行く。その道が正解なのか？ 愚問だ。

彼が進む道こそが正解となるのだろう。

▽ ▲ ▽ ▲

結果を顧みれば、悪くないものだった。

廃病院から海魔は退かれ、ランサーのマスターは決して小さくない傷を負ったが再起可能。

荒れた様子で、許婚と合流後にセイバー陣営を追撃しようとする構えを見せていたが

まだキャスター陣営の動向が不確かであり、疲弊してる状態を突かれれば自分達の援護が

あっても撃退するのが難しい事を説くと、渋々な様子ではあるが納得を示した。

（海魔を放った痕跡を辿れば、今日の夜にでも拠点を突き止められるだろう……な）

幾つもの思考を巡らしながら冬木市内に戻ると共に、Xの足取りが乱れた。

僅かに体が斜めに倒れかけようとするのを、少し大きな手が体に回ってソレを止めた。

「大丈夫かい？ ……！ 凄く、体が熱いじゃないかっ」

雁夜が慌てて彼女のを引き寄せて、その体温に愕然とする。

顔こそ普段通りに冷たい表情に近いままだが、服越しに肌は真夏の海岸の砂を思わす程

暑く、そして呼吸も乱れている。サーヴァントである、と言う認識こそ頭から抜けて

病人を介抱するように近くの低い塀まで移動させ座らせる。

「宝具の、副作用かな。慣れない使い方をした弊害さ」

既にアイリスフィールを助けた際に同行していたゲブラーは桜の側に戻らせていて居ない。

不調の原因として思い当たる節は幾つもある。T-09-09こ  
とテレジアを本来と異なる用途で

現実の一般人のいる周囲に使用した事、L o b o t o m y c o o

p内での異常な記録外の超常存在が

暴走した事やエージェントにオフィサーに犠牲が出た事。ゲブラーに対し外部の魔術武器を

無理やり馴染ませて行使させた事。どれも本来はないシステムを無理やり正常に起動させ

ようとした反動がここにきて一気に体を風邪に似た症状として発生している。

「大丈夫さ、まだ我慢出来る範疇だから」

「痩せ我慢しないでくれっ。……ケイネスさん」

本当なら頼りになんてしたくない。だが自分の相棒が具合悪いのを見過ごせる程の薄情者に

なりたくない為、反発する感情を押し留めて休憩出来る場所を懇願する。

その様子に対し、体たらくだと揶揄する余裕はケイネスに無い。サーヴァントは基本的に

使い魔と同等の下としか見てない彼だが。自身の窮地を救ったのは、運も絡んでるが

二人の半死半生のサーヴァントと魔術師崩れによってなのだから。もし彼がもう少し傲慢さが少なければ、命の恩人が頭を下げないで

くれと言う寛大な

台詞も言えただろうが、そこまで大人な対応もとれず顔を僅かに背け。

「構わんとも。ソラウ、昼と同じ部屋へ案内を頼むよ」

そう告げるのが精一杯だった。返ってきた答えは了承ではあるものの、その目は自然と

人通りの多い場所に来るまでに同行していたランサーのいるほうへ目が追っているのが

戦闘後の未だ研ぎ澄まされた感覚が嫌でも理解させる。

壊死した腕を摩り、その感覚が全く生きている余地を見せぬ苦渋と共に許婚の心を

取り戻せない腹立ちも混ぜ合わせて顔は大きく歪む。まだ怒鳴り

散らさないのは一重に

自身が偉大なるロードであると言う矜持が残ってる事と、魔術回路が健在だからだ。

(だが、今日の傷は遙かに大きいぞ。あのセイバーを使役してるだろう傭兵はどう言う

仕掛けが、我が月霊髓液から逃れる術を持っている。それに私の腕を壊した魔弾……

バーサーカーの宝具で首の皮一枚繋がったが、アレが未だ幾つも所有してるとなれば

脅威でしか無い……くそっ ランサーがもつと奮戦しセイバーを倒していれば直ぐにでも

アインツベルンの居城に乗り込むものを)

全ての苛立ちは自分のサーヴァントに向けられる。されど、まだ挽回が利くのだと

必死に理性を繋ぎ止め、荒ぶる感情を大きく息をつく事で抑える。

ホテルが目と鼻の先に見える。今日は何も考えず、祖国から持ってきた秘蔵の一品を

開封して飲んで英気を取り戻す事にしようと思エルメロイは考える。だが……。

「アーチボルト様？」

……アーチボルト様は、既にホテルに帰還なさり最上階に居る筈ですが」

『なに？』

ホテルの受付へと足を運ぶと共に、預けた部屋への鍵を貰おうとすると共に異変を知った。

怪訝そうな受付嬢。そして、下に降りて来たエレベーターの扉から昇る人と異なる気配。

目を走らせ、ランサー陣営とバーサーカー陣営は僅かに目を見開いた。

そのエレベーターから、ケイネスとソラウに良く似た容姿と服飾に身を包んだ存在が

出て来たのだから。

受付へと、機械的な微笑を向ける。その気配に、バーサーカーは眩  
いた。

「……やられた アサシン陣営がこう動くとは」

その内容に、聡明な時計塔二人も瞬時に合点がいき眉を顰めた。

アサシン 百貌のハサン。そのハサン達が如何様にしてか、ハイ  
アットホテルの工房を

セイバーとの闘いの隙を狙って乗っ取った事を。

「馬鹿なっ……ホテル内の結界は完璧だった！」

私達以外の霊的な侵入への障害と対策は万全だった筈っ」

「相手はアサシンです。どうやってかは知りませんが、結界を超える  
方法を見出したのでしよう」

一旦、奪還は諦めましょう。そう静かに告げるバーサーカーに構う  
事なく、今度こそ人目を

気にせず、決して声量は大きくないながらも獣のように短くケイネ  
スは唸った。

アサシン陣営による工房の占領。

正史の世界と異なる小さな動きは、着実にだがこの冬木市に不穏な  
空気を更に募らせる。

ある程度の知名度と人が密集する建物に人払いの術をかけて強引  
に戦闘する訳にもいかず。

タクシーを呼んで、名残惜しくホテルを見るケイネスと続く許婚と  
サーヴァントと共に

日が沈む中で、仮の拠点とする海浜の安宿へ車を走らせた時にXは  
ある光景を目にした。

(コトネ……か?)

それは、体調の悪さから来るものか。昼に降りかかった精神攻撃の  
名残の可能性もあるが

確かにコトネだった。学校も終わっている時間帯だし、家族と共に  
買い物しているような

一瞬の光景だったから、本当に両親と一緒に手を繋いで買い物帰り

らしい光景の中にいた

少女の姿はコトネだった可能性は高い。赤い靴を履いて、普段の学生服とは違う秋服に

身を包んでいて愛くるしい笑顔を手を繋ぐ親へと見せていた。

(元氣そうだな 良かった)

一瞬、車を止まらせて貰い声をかけたい欲求が浮かんだ。けど、既に彼女と別れを済ませ

戦争の渦中へと本格的に飛び込む自分が、平穩の日常の中にいる彼女と接触する事が

どれ程に危惧を与えるが十二分に知るからこそ、その望みを黙殺した。

(……何事もなく、私の事など自然と時間が経てば良い思い出の一つとして忘れてくれる筈)

どうか、そうなってくれと祈りつつ。車は日が沈む方角へと進んでいく。

赤い靴 履いた 女の子

異人 さんに 連れられ て

## 神様の愛で満ち溢れる世界の下で※

「くそっ 忌々しい。アサシン風情が私の工房を占領する等っ  
利き腕さえ万全であるならば、今すぐにも奴等の雁首を並び立て  
てやるっ」

ハイアットホテルと異なる薄い壁は、ランサーのマスターである高  
名なロードの

罵り声が隣室を拠点とする元来口数少ない者達のBGMとなつて  
いる。

それに喧しいと返す程の度胸も気力は今の間桐雁夜に無い。スト  
レスを溜息に変え

小声で、椅子に座り考え込んでいる姿勢をとっている自分のサー  
ヴァントに声かける。

「何か気になる事でもあるのかい？」

声掛けに上がった顔はやはり優れた様子を見せない。少し休息を  
とれた事で頭部に身体のと

熱も幾分下がったようだが、懸念を抱いているのが少なくない日数共  
にしているからこそ解る。

少しの沈黙の後に静かに紡がれる声に耳を傾ける。

「キヤスター陣営の行動だ。セイバー陣営とランサー陣営が消耗した  
時を狙って

攻撃を加えた事。それはある程度自然な事に見えるが、あの海魔以  
外にも私の宝具内の

存在が加わっていたのを考えると、齟齬が生じる。

余りにも自身の介入を誇張し過ぎているのは、きつと何か意味があ  
る筈だ」

奴の手口らしくない。遊びを含んでるにしても、想定する内容と大  
きく食い違っていると

言う話に、どう返答して良いか悩みつつも無難な言葉を口にしてみ  
る。

「そいつが、どういった人物かは。話は色々聞かせて貰って、危険性は



十分自分では

把握してるつもりだよ。でも、協力関係なだけで、キャスターは思い込みが激しく

自分の世界に没入してるって話じゃないか」

そいつの指図も聞いてないからの独断じゃないのかな、と言いつつ無難な対応を続ける。

「大丈夫さ。宝具内の他のアサシン達も回復して、迎撃後に去った痕跡を追ってるし

直ぐに居場所だつて掴めるよ」

そう安心させる言葉をかけても、その仮面のように動かない表情が和らぐ事は無い。

途方に暮れ、無意識に窓を見るとポツポツと水滴が張り付いてきた。

数秒もすれば、ザーと激しい音が室内一辺を満たしていく。扉のノックと共に小用にて

外の魔術師に壊死した腕を動かす為に連絡を取りつけるので暫し外へ出ると告げに来た

ケイネスは忌々しそうに片腕を摩りつつ呟いた。

「雨 か」

嫌な天気だと魔術師は考える。逢魔が時　そして雨天となれば魔が活性化しやすい。

聖なる剣の鞘によって致命傷を脱却し、治療を受ける切嗣。マツケンジー夫妻の邸宅に

戻るライダー陣営。至る場所で冬木市に発生する魔術を伴った騒動へ後処理をする時臣。

各々が異なる思惑を胸に秘めつつ、その雨に翳りを帯びた色で見上げている。

ホテルから去るケイネスを窓から見送りつつ、Xは黙考する。このまま何もせず休息だけ

とっておくのは良策なのか、何か重大な事を見落としてないだろうか。

フラツ、と頭が僅かに傾く管理者を慌てて支えながら小声で雁夜は告げる。

「まだ少し横になってた方が良い。通信機はアサシン達に渡してるんだろ？」

何かあれば直ぐに報告する筈だと告げられ、硬い顔つきを崩さぬものの素直にベットに

横になる彼女を見て安堵の溜息をつく、部屋を出てケイネス達のとつた宿と反対の室内を

ノックする。直ぐに開かれた扉から、疵が目立つ大きな火を下に生やしたような女性が

胡乱な気配を隠す事なく自分を出迎えるのを見て、緊張の為に一瞬喉を鳴らした。

このケブラーと呼ばれる、自分のサーヴァントの宝具の中に居る戦士とは未だ数回程度

相対してないが慣れる事はない。赤い頭巾の傭兵のように露骨に殺気を周囲振りまくでも

なく態度は素っ気ないところあるものの自分勝手に暴れ狂う様子は見た事ないが、傍に

いるだけで背筋から燃え立つような今にも噴火しかねない荒々しさを感じてしまう。

臓硯とは違った性質の畏怖を受けての躊躇を知ってか知らずか、ぶつきらぼうに

親指で部屋の奥を示しながら紅蓮の戦乙女は雁夜が尋ねる前に答えを言い放った。

「ガキなら未だ寝てる。心配しなくても何か普段と違った様子があれば私かホドが

直ぐにそつちへ声をかける」  
示した指の方で小さな紫色の髪が寝床から零れ、それを優しく整えている茶髪の女性。

一瞬だけそれが数年前なら遠坂邸で愛娘を寝かせる日常の1ページとしてあつたであろう

風景で、何事もなければ今も異なる場所で目に出来たろうにと胸締め付けられる。

「……ずっと、眠ったままなんだね」

気落ちした声色が隠せない。聖杯戦争なんて言う渦中に晒されて、外部の得体の知れない

魔術師にも襲われて、眠る時間が多くなってる事実を聞かされて間桐の次男は想定以上に

恋慕の女性の子に無理させてるという事に自責の念が募る。

そんな俯いてる自分に、鼻で笑う音が耳に付き反射的に顔を上げると明らかに蔑む眼差しと

暴力的な笑みを見た。何故、そんな顔を向けられるのか分からず呆然とする。

「恰好付けるのだけは一人前だな、お前。だが私から言わせれば今更かって話だ」

ゲブラーは、瞳の中に小さな火を揺らして口開く。決して声は荒れずとも力強さがある。

反論する言葉が浮かび上がる前に、その灯火は焰と化しながら脳に響く。

「本当にてめえの何もかなぐり捨てて守りたいって言うんなら。最初の最初でチンケな

プライドなり捨てて頼み込むべき奴が居るよな？ 隠そうとしたりって無駄だぞ」

威圧的な口調に身を竦める。だが、その言葉の真意が見いだせず狼狽えるばかりの自分を

暫しサバナで獲物を見定めるような目つきで女戦士で眺めた後、鼻息荒く嘯いた。

「無自覚かよ。別に良いけどな……所詮、私は赤の他人だ」

これ以上助言する義理も無いと手をヒラヒラさせ会話を一方的に打ち切られた。

とても有意義な話だったよと心中で皮肉を返しつつ、目を閉じて人形のように

横たわる桜ちゃんを再度見つめる。

寝息もか細く、注意深く見なければ死人のような静けさが恐ろしい。

されど声かける言葉も見いだせず、そのまま扉は閉じられてしまった。

(これから、どうなるんだろうな)

同盟してるランサー陣営のマスターが負傷したとかでなく、町であちこち起きている

異常な人命に関わる程でなくも魔術に関わりある騒動。まだ本格的な動きを見せない

彼女の言う恐ろしいセフィラ。

最初は、色んな恐ろしい怪物や利便性多々ある呪術道具に多くの人材を抱えてる

事を聞いて、これで聖杯戦争で勝利する事が出来ると胸躍っていた気持ちも少々

あつたが、今はそんなもの欠片たりとも残ってない。あるのは仄暗い不安ばかりだ。

窓から空を仰ぐ、冷たい雫ばかりが雁夜の心を代弁していた。

対し目を閉じながら内側に目を向ける管理者。彼女もc o o p内の新たなピエロ達の起こした

惨状の処理。鶴野及び心身的に参っている職員達へのケアを指示しつつ今しがた起きた

問題に対し落ち着いた口調で返答を行っていた。

「そうだ。0-04-08 (赤い靴) の状態は放置しておいて構わない。収納区域のエージェント

職員はツーマンセルでの行動、変調あり次第イエソドへ連絡を徹底するよう」

怪しく鈍いピンクの波動のようなものを規則的に収納部屋へ拡散させるアブノーマリティ。

精神レベルの低い者を魅了させ自我を喰らい尽くす靴は其の特性のオーラを帯びていたが

職員及び待機しているエージェント達に呪いが付加された様子は見受けられない。

新手の未知なる異常事象。それに僅かに眉を上げつつ管理者は観察する。

▽▲▽▽▲▽▲▽

「ちっ 冷えるな」

百貌の一人は、住宅街の影で誰にともなわず一人ごちていた。声は女性のもの

日中ではライダー陣営に接触する事で、以前は仕えていた言峰綺礼の残る同胞との

死闘となる激突を回避した一人。如何なる天候であっても監視・偵察の類は他の

サーヴァントより勝る自負ある為に不満は無いものの、それでも出来ればこんな

陰鬱な雨夜でなく月光でも覗く空の下で任に励みたいと僅かに本音を漏らしても

罰はなかりう。血の頭巾の戦士によって一度は文字通り死んだ身なのだ。

「あの顔は愉快だったな」

ライダー陣営のマスターは年齢より年若い、少し色仕掛けすれば容易に狼狽えていた。

あそこまで解りやすいと冥利に尽きると言うものだ。サーヴァントのほうはまだ日中で

人目も付く場所故に、実は正体を看破してるぞと含みを持った視線を見せてたが結果

動かなかった事も幸いだった。それとなく頭が軽く弱い女の振りして抱き着いた事で

アサシンとしてのスキルの一つ、この体に纏っていた香水を付着させるのに成功した。

現マスターとも言える、あの女はライダー陣営を積極的に潰す気概は無いが

拠点を見つけられる功績を得た自身を宝具内の怪物達の餌にしよ  
うと言う短絡的な

選択を排除してくれれば上々だ。危険は表舞台冬木の夜空下と変  
わりない場所だが

仲間もいる今の家に早めに帰りたいものだと考えながら命令され  
た家を監視する。

何の変哲もない、魔力も何も帯びてない一般の女子と夫婦の家宅。  
他の百貌の話だと

どうやら現界した際にプライベートで交流を得た存在との事。

英霊としては正体不明だが、知人を守ろうと命令するとは中々人間  
臭いと可笑しみを

禁じ得ず、軽く口を弧に描いてると扉を開く音が聞こえた。時刻は  
既に深夜だ。

ふらふらと小さな人影が目立つ赤い靴とペンダント、普段着で雨の  
中を

傘も差さず出てくる。その顔は虚ろで正気とは思えない。

暗示か洗脳の類か、どちらかは解らずも管理者と呼ばれる女が危惧  
した通り

日常生活を送る市民を脅かす異常が起きたと言う事だ。

(何処へ行くこうとしている？ いや、考えても仕方がない)

直ぐに連絡をしようと通信機を取り出す、その刹那で地鳴りを感じ  
咄嗟に顔を上げた。

(柱?)

そう、近くに忽然と産まれていたのは柱。黒い大理石のような質感  
でモノリスと

呼称しても差し支えない。何らかの文字が刻まれてるが、それを解  
読する術は持たず

起きている出来事に対し脳内に自然と今すぐ逃走しろと警鐘が鳴  
り響くのを聞いた。

——さあ 跳べ

聞き慣れぬ声が響いた。それを認識するより早く脇腹に強い衝撃

が起きて、気づいた時

目の前に広がるのは薄汚れた埃の色合いの絨毯だった。

宙を舞ったと気づけども受け身をとる事もままならずアスファルトの地面に打ち付けた。

「ギャツ……！」

な、んだ？ キヤスターの奇襲か。

平衡感覚が溶けて激痛が頭から足を駆け巡る中で必死に考えるが、キヤスターなら

自分が百貌の中では武芸に長けてる訳でなくも感知出来ない理由が無い。

魔力で編まれ、そして解れ砕けた体で必死に回した首に黒いドレスらしき衣装

ブーツらしき下半身を認める中で足先が自分の眼前に近づいてくる。

目の前にいるのは確かに襲撃した事実を帯びた存在であるのに間違いない。

違いないのに、何故こうも希薄で瞬き一つで消え失せそうなのだ??

——ヘンデル作曲『アレックスサンドロ』の言葉を借りるならばだ。

——高慢なるオクシドラカよ、天の瞋りに逆らおうとしても虚しいのだぞ

降りしきる雨が強まる中、その決して大きくなくも耳に良く通る音が耳を通り過ぎる中

軟体のロープのような感触と磯臭さを感じると共に胴体が強く締め付けられる。

「おやおや 招かざる客がぬけぬけと御一人で現れるとは」

聞き覚えは余り無いが、四肢を拘束する生理的嫌悪を前面に出した巨大ヒトデのような

化け物と、魔術師らしい服飾を目の端に認めてキヤスターである事を知る。

重力が薄れ、ミシミシと体が締め付けられる痛みに叫び声を上げた  
くも気管を圧迫され

声を出す事すら禁じられる。自分を地面に沈めた謎のサーヴァントらしき存在は既に

あの雨が一滴地面に接触するかどうかの刹那に存在を消していた。奴は誰だ。どうやって気配遮断し周囲を警戒していた自分の背後をとれた？

激痛を少しでも緩和する為に、か細い抵抗ながら必死に別の事へ頭を働かせようとすることも

体全体を雨が濡らす面積に比例して窒息させる程の緊縛も強まっ  
ていく。

万事休す。このままキャスターの使い魔の餌食なるかと考えた時に新たな笑い声を聞いた。

フランソワ とキャスターが敵意ない眩きを漏らす視線の先に日傘らしきものを回して

雨露を弾かせて、道端で何やら面白いものを見つけた童子のような視線が自身を貫く。

「ねえジル この子を拠点まで連れて帰りましょう？」

龍之介も、出来れば人の形だけど人と異なるものをアートの出来れば欲しいって」

鈴見たいな笑い声と共に、穏やかでない提案が昇った。死ぬまで拷問されれば

霊核が崩れ去り消失するだろう。だが、この不気味な少女の殻を被った何者かの術には

サーヴァントである自分が死んでも保たせる方法を持ち合わせてるのかも知れない。

今なら未だ舌を噛み切り死ぬ事だって可能だ。だが、その意思に関わらず口を満足に

動かす力すら無くなり、儂い抵抗を読み取ったように無理やりぬめぬめとした

吸盤の生えた触手の内の一つが食道に届くまで入り込み自害を防止する。

「やあ 行きましょよう」



鼻歌混じりに拠点へ戻る声を聞きながら必死にどうすれば良いか考える。

無線は手元から無くなった。定期的に連絡するように仰せつかったのだから現マスター

である管理人も少しすれば異変に気付いてくれるだろう。

だが、それ以降は？ この元凶の主たるキャスターと外来の異様な魔術師、自身を

再起不能にまで損傷至らしめた未知数の介入者に察知される事なく死に体の自分が

この状況をどうにかする手段はあるのか？

雨に髪濡らし、ふらふらとした足取りの少女を鼻歌交じりで髑髏を彩る白髪揺らし

魔女が肩を掴んで捕まえたと鬼ごっこを今しがたしてたかのよう  
に眩く。段々と狭まる

意識と希望と言うものが見えなくなっていき全身が雨とは異なる原因で冷えていく。

(た……のむ 気付いて)

そこで急激に圧迫が強まり意識が暗転した。そして目覚めた先は暗雲立ちこむ空でなく

カビと磯の匂いがこびりつく冷たいアスファルトに大の字で縛られた状態だ。

目覚めの切っ掛けは小さな水滴の直撃する額への感触と気の所為と冷たさ。

耳元で鼻歌が聞こえて辛うじて動ける首と視線を曲げる。ある程度明るい赤褐色の

頭部と、細長い金属が擦れて鳴るのがハミングと不気味な調和をマッチしている。

あ、目覚めた？ と振り向いた容貌は20代か十代後半程に若い顔立ちの男だ。

「俺さあ、人の皮とか臓器で楽器を作ったり服飾や家具を作成する時ってどうしても

アート作りの工程途中で全員死んじゃってさ。最初は四苦八苦し  
て何とかぎりぎり

死なない加減って言うのも試行錯誤してみたんだ。

でも、ぜんぜん駄目っ。みんな上半身から綺麗な腸が半分程度出  
るが両腕か足が

削げちゃう時にはもう完全に駄目になっちゃうから甘んじて死ん  
で間もない皮膚で

ランプシェード作ろうとしたりね」

でもまあ、不器用で断念しちゃったんだけど。と、照れくさそうに  
笑う横顔に邪気は

全く存在せず、団体での何処かの宴会のワンシーンで拳がった自分  
の赤裸々な

恥話を明かした時の表情と言われても信じられそうな程剣呑な空  
気を青年は身に着けていない。

極自然体で人体を解剖出来る器具を片手で掲げつつ話は続く。

「けど旦那が来てくれてからはさ。俺の今まで気が可笑しくなるぐら  
い冗長とした毎日が

本当激変してマジクール！ マジハッピーって奴でさあ。

旦那の<sup>殺</sup>アートのセンスも抜群だけど、旦那の姉御もさいつつつこ  
うに！

もうさいつつつこうにクールだ!! 最初はちよつと胡散臭い感じ  
の人だなーって

思っちゃまった自分をぶん殴りたくなっちゃう位に脱帽の感性の持  
ち主と巡り合えたんだからっ」

移動式の手術台のようなものなのだろう。慣れた手つきで自分が  
横たわる台車を押して

景色が変わる。小さな車輪が擦れる音と共に移り変わった視界に  
見える複数の偶像に対し

最初はそれが何なのか解らなかった。いや、脳が拒否していたのだ  
……理解する事に

理科室に置いてある表皮が無い、筋肉だけを露呈された標本がウイ

トルウィウスの人体図を

模すようにして、二人の人間が完全に重なり合って接合されて横たわっている。

顔面の半分が刳り貫かれ、その中に時計らしいものを嵌め込まれた児童。

妊娠してる筈が無いのに関わらず、何かを腹の中で蠢かせ唇の端から涎を垂れ流しつつ

定期的に痙攣して白目を剥く児童もいるし、その目に既に正気の色は無い。

少し先では、身を寄せ合っておしくらまんじゅうでもするように微弱に震えている

未だ何も施されてない無事な子供達が血の気を引きつつ目をギョツと瞑り両手で耳を塞いで

るのが見てとれた。そんな事をしても周囲で行われている地獄が無くなる筈はないけれど

その無意味な抵抗を嘲られる程に人間味は捨てきれていなかった。百貌もとい、ハサン達は自分が時代の軌跡に輝く正英霊と言える程

に輝かしいものを  
残してると思わないし、かと言って反英霊と呼ばれるまで悪道に走っても無い謂わば

命ずられれば悪とも善とも化す存在だ。暗殺者と呼ばれる歴史の中で、残虐非道な手口は

熟知していると百貌の一人たる彼女も自負していた。

だが、この何処ぞと知れぬ地下らしき場所で行われる黒ミサは自身の知識を超えた

狂気で成り立っている。この地獄を創り上げたのが、この極東の島国に居る何の変哲なし

魔力も乏しい人間が起こしたものだど、直視しても未だ現実味を持ち得ない。

生理的に相容れない色合いの地下空間。西洋的なドレスを纏った情報にあつた外見の

特徴と重なる少女が妖し気と嘲りを交えた目で陶器のカップを口に運びこちらを見る。

その近くには深海魚を彷彿とさせる容姿の魔術師の男。確かジル・ドレ

キヤスター陣営の工房に拉致されたと認識し絶望的な状況を認識する中、楽し気です

無邪気な声が耳を打つ。

「すげーだろ、これ？ 全部未だ死んでないんだ。普段のアート作りならとつくの昔に

みんな駄目になっちゃうのに。魔術って奴は本当凄いつて姉御の業を見て実感したよ。

——ワクワクするだろ？ こっから、あんたも未知の世界を探検するんだから」

な にを言ってるんだ こいつ は。

「姉御には何か裏技つてのがあらしくて。あんた達や旦那つて幽霊見たいなもんで

体が完全に崩れちゃったら消えちゃうらしいけど。その裏技つてのを使うと、どうやら

かなーり死に難くなるんだつて。

——俺さ、一度幽霊つて奴で芸術品を作るのが夢だったんだあ」

そこから先は百貌の一人にとっては地獄を超えた所業だった。苦痛を感じ、霊体化も

自決の為に舌を噛み切るのも魔術によって妨害され、そしてキヤスターのマスターであろう

男の発言通り、本来なら英霊として格下の体はどう言う訳が数えるのも億劫な回数切られても

崩壊する予兆が見られない。

「んー♪ 良いねえ 良いねえ!! 調子がのってきたぜ!

……ん? ありやいや、興が乗ってきた時に姉御つてばイケずだな」

彼女にとっては不幸か幸か、外部の魔術師の気紛れによる声によつ

て距離が離れていく

褐色の頭を見つめつつ、漏れるようにか細い空気を既に口と言う器官が辛うじて形成してるか

してないかぎりぎりの中で何とか思考を練る。

此処はキャスターの工房。そして、奴等の根城であり管理者と呼ばれる今の我等のマスターが

危惧していた存在の手引きが見え隠れする場所。ならばアレは必ず来る。

好意等はない、だがあの華奢で非弱な殻の中にある業火のようなサーヴァントに対する駆除の

意志を間接的にも感じ取った事のあるアサシンの一人である彼女は、自分が攫われて隣にも

同じように拘束されている少女が管理人の縁があると言う事実を把握してるからこそ。

遅かれ早かれ彼女は必ず、この暗黒の巣窟を破壊してくれると未だ一抹の希望を宿していた。

(だ……が、私はもう『駄目』だな)

どれ程の時間が過ぎたのか不明だが、サーヴァントにも通ずる奇想天外な術によって五臓六腑の

数割を損失してるのに関わらず未だ現界が可能としてる。然し、例え今駆けつけられたとして

もうこの状態から五体満足に戻る事は不可能だろうと、途切れ途切れな正常さを何とか繕って

結論を下す。それでは、駄目だ……何としても自分がこの場所で受けた出来事、筆舌し難い苦痛

拷問の最中に見聞きした重要な情報を何としても伝達せねばならない。

その時、コシユと空気が何かの筒から抜けるような音に未だ無事な眼球を無理くり動かして

隣の台を見た。自身の状態を比較すれば未だ幾らかマシと言える状態の少女。

首にかけられているペンダント。あの人の形をした得体の知れぬ存在が意図的に無視したのか

無事な装飾品には、知った形の魔力の残滓。本当に微弱な塵程度であるが込められてるのを

認識して唇を開き何とか発声と言う形を作り出す。

「す まない。ソ レを わた しに」

聞こえるかどうか自信は持てなかった。比較的自分より削られてない、と言うだけであつて

何らかの暗示の魔術で今まで自我が押し込められていた少女が覚醒して耐えられるような状態の

肉体では無い。未だ昏迷してるほうが自覚せず発狂しないで済む。

いや、この場合地獄を認識して舌でも切り死んだほうが幸いなのだろうか……。

「コレ は ……だ め。ス ラーの プレゼン ト」

驚いた。声を出すのも駄目かと思いきや、会話が成り立つ事に。それ程少女の心に強く

プレゼントの主の像が深く埋まっていたのかと驚嘆と同時に憐憫も覚えた。

そして、その拒絶に対して絶望するより前に単語から誰の事を指すのかを自分が体験した事

数日の中で百に分れた人格の一人として一生分の濃い体験の中で見聞きした一遍を深く掘り起こし

相応しい回答を絞り出した。その回想の中で、何故か何度もライダー陣営のマスターの青年の

赤らめた顔が浮かび上がってしまい、我ながら滑稽だと場違いに愉快な気持ちになるのは

もはや正気である時間も残り僅かなのだろう。

「……安心 してくれ。X へ とどける かな ら ず」  
スラー エックス

その単語だけで異常な空間の中で、一人の童女と黒ずくめの仮面の主は自分達の点と点に結び合う

線を作り出した。コトネは何者かは不明ながらも、自分と同じように肉体を面白半分弄られる

サーヴァントと言う単語すら知らない普通の少女から見ても不気味な恰好の人物を信じるに足るものへ昇華させる事が出来たのだ。

コトネにとって、今じぶんが何をされて　そしてどう言う結末が待ち受けてるのかも

人の中に埋もれる第六感はともかく頭の中は正確に理解し得てない。

未だ出来の良くないリアルな悪夢を見てるのかと思う程の異常な体験。

ただ自分は赤い靴に執着してたのだと言う認識だけは未だに強く記憶している。そして度重なる

肉体を刻む施術と言う名の責め苦は、以前に雁夜が施した記憶処理の暗示に影響を及ぼした。

激痛の中で途切れ途切れに頭の中に浮かび上がる情景は、隣で自分と同じく囚われてる者と

似た恰好の黒装束の存在が、自分が追い求めていた赤いヒールを履き斧を掲げ黒い涙を流す

スーツ姿の女性と血まみれになりつつ踊るように体をぶつけ合う構図。

周りで武器を振るうスーツ姿の人達。赤い靴を切り取られ倒れた人に涙する男性。

寂しそうな瞳のスラー　指鉄砲　御免ねと言う小さな声。

ああ、そうだ　思い出した。

私は何時もの日常の中でソレと掛け離れた1ページを今も自分に起きている悪夢とも

また違う異常な光景を以前目にしていったんだ。何で　何で今まで忘れていたのだろう。

震えた片腕を必死に伸ばす華奢な体躯で、多分だけど女性であろう人物が拙いやり取りの中で

彼女にとって数日であるけれど放っておけない自分に親愛向けて

くれた両親と違う初めての大人の

友達と面識を持つている事を確信する。

この現実か夢幻か知れぬ悪夢が終わるかどうかが判別はコトネに出  
来ない。だけど、このままいけば

きっと自分がスラーと二度と会えぬ事は何となくだが信憑性高い  
予感を知れた。只の無力な少女の

死が既に足から首まで這い上がったが故の、最後の魂の灯火の輝き  
が得た力だ。

腕の腱を切られ片腕は完全に動かせない。

もう一方はあの青年が他の仲間に呼びかけられた事で処置される  
前だったから

辛うじて動かせる。子供達の啜り泣き声と、変わり果てた自身の未  
来凶となる

子達の呻き声を耳にしつつ。震える手で首のチェーンの留め金を  
外す。

あの時、自販機を睨んでるような半眼の不機嫌な女性をどうして何  
時も凜ちゃんの背中で

縮こまっていた自分が勇気を出し、あんなに手助けをしようと思っ  
たのか。

今でも納得出来る回答が無かった。

だけど痛すぎて痛くない位な体と違い不思議と何でも今なら自分  
より知識の深いスラーや両親

凜ちゃんでも解けない問題を直ぐに答えられそうな頭が答えを導  
きだしていた。

何時も誰かの影で安心していた臆病な自分を、自分自身倦厭として  
いたのだ。そんな自分を

乗り越えたいから、あの時困っていたスラーに手を差し伸べたら、  
ささやかな事だけれど弱さを

変えられる切っ掛けになれると思ったからの小さな勇気だったの  
だ。

(スラー 私……スラーと出会えて幸せだったな)



嗚呼 嗚呼 何故 私は今この時。自分の大好きなお父さんにお母さん、学校で一番の親友の凜ちゃんじゃなくてスラーの少し不器用で哀しそうな笑顔ばかり思い出すのだろうか？

手を伸ばす、伸ばす。それでも届かないから振り子の要領で鎖の先だけ摘まんで遠心力を加え

自分と同じように腕を伸ばす全身黒いお姉さんの手の中目がけて投げる。たった数センチ

それでも気が遠くなるように体の幾つかが抜かれた自分達には長い距離だった。

地面に落ちるでもなく、カチと言う手で金属を受け止める音と同時に短い感謝の声を全身に

遣り遂げた感無量の力が無くなる感覚と共に何処か遠くにいるような錯覚の中で聞いた。

眠くなってきた。もう眠っても良いだろうと体も精神も囁く。

だけど、叶うならば……もう一度だけ。

スラーと 会い た ……。

カチャ

「——コトネ……？」

その同時刻、ロボト<sup>宝</sup>ミーコー<sup>具</sup>ポレー<sup>内</sup>ションに居た管理者の首に掛けられていた

少女と同じ形のペンダントも無機質な床の上に小さくも良く通る音を立てて落下した。



ウェイバー・ベルベット。時計塔の学生でありケイネス・エルメロイ・アーチボルトを

仇敵とし、あのふんぞり返ったいけない顔をこの戦争で踏みつけ魔術世界に勝者として

名を歴史に刻み込まんと意気込み見せていた最初の熱意に溢れて

た面影は曇天と豪雨の中で

消え去り、ビニール傘だけでは完全に濡れるのを避けられない悪天候に子供チツクな雨合羽を

纏って小さく愚痴を漏らし水笠が増し勢いも強まる川沿いを歩いていた。

「本当にツイてないよ、まったく。昼は変な女に絡まれたと思ったら、こんな天気の中で

キャスターの僅かな痕跡から居場所を見つけなくちゃいけないしさ」

「ほう、だが小僧。お前さん、言う割にはあの時は鼻の下を伸ばしてなかったか？」

「は、はあ!?! だ、誰がそんな情けない顔してたって言うんだよ」

照れるな、照れるなと豪快に笑う大柄なサーヴァントに。少し赤味を帯びた頬と鋭くさせた

目つきで抗議を上げるも、直ぐに魔術師のヒヨコは波止場へ辿り着くと共に地図を見比べ

真面目な顔つきへと変えて呟く。

「採取した水からして、ここら辺の近くの地下道だと思っただけど。変だな……何処にも

地下へ通ずる入口なんて無いぞ」

正史であれば、既に彼等はライダーの宝具を駆使し海魔蠢く地下空間を抜けて惨状と化している

キャスターの工房を突き止めていただろう。

だが、フランソワと呼称される異物が彼等の足並みを少し崩していた。宝具にも並ぶ幻影の魔術

キャスターと旧知の存在の手により未だ入口が見つけれない状態に。

天候も最悪。運河の流れも激しさを増しており今日は一旦諦めて日の良い時に改めて此処らを

探索しないかとウェイバーが提案しかけた時、雨音に紛れ羽音が次第に近くなってきた。

何だと思つた瞬間に夥しい普通の虫とは違う形状の物体がウェイバーの眼前を通過、数匹が

彼の体の幾つかに止まった。不気味な虫が引つ付き、自分をギョロツと見るのを目にして

ヒエエと情けない悲鳴と共に地図を投げだし、服をはたいて虫を払いながらライダーつ襲撃だ！

と叫ぶマスターを尻目に。小さな感嘆の声を上げつつ愉快気な表情を顔面に貼り付け

堂々とイスカンドル王は雨に打たれながら両手を掲げ口開いた。

「おお！ バーサーカーに、そのマスターよ。奇遇だな！ お主らもキヤスターを討たんと

やって来た口だな？ うんうんっ！ その心意気、大義である！」

雨合羽を被つた一組の男女。雁夜はライダーの態度を困惑気に見つめ、対しバーサーカーの

女性はライダーの口振りや邂逅にも何の感慨浮かべる事なくマスターへ言葉を口にする。

「蛇香のコードネームを持つ彼女は特有のフェロモンを帯びた香水を身に着けていた。

日中に遭遇したライダーのマスターに付着させたと言う情報は正しかったようだな」

「あ、うん。で、さ、彼等とは敵同士な関係なわけだが」

魔術師全般に嫌悪を持つ雁夜だが、虫に恐怖の声を上げる童顔の恐らく20にもならない

青年が戦争の参加者である事を認めても感情に任せて宝具で攻撃しろと言う気にはならない。

蟲に蝕まれていた頃ならまだしも、頭がまともに働き冷静に色々と物事を見れ一般的な感性を

多く取り戻してる今日日、自分より年若く一見はまともそうな人物に無理してまで殺意を

抱ける程に心の中は未だ淀んでない。

それともう一つ、雁夜がサーヴァントである彼女に命令しようとす

る気が無かったのは

目覚めてから彼女の雰囲気は徐々に冷え、一つの通信機を取り出し何度か応答を確認した後

瞬時に自分を引っ張り、隣に控える従業員達に外出の旨を伝えた後、急ぎ足で外に出た事も

関連していた。何故急に外に出るのか質問すると簡潔に短く彼女はこう告げた。

——コトネが、そして監視に置いていたハサンが連れ去られた。

無線からは異常ない、継続し警戒に望むとハサンの声が返される。試しに別の質疑応答を

投げかけても似た調子の台詞だけなのを聞き、完全に敵の手中にコトネの住宅付近の監視が支配されたのを知った。

早足で段々衣服が濡れていくのに構わず小瓶を発現する。瓶の中には見慣れぬ昆虫が窮屈

そうに蠢いている。雁夜のソレは何だと言う問いに早口で答えを返す。

「コトネの居た監視区域のハサンは、特定のサーヴァントでも関知出来ない程のフェロモンを

帯びる特性の存在だった。この昆虫は、c o o p内でそのフェロモンを追尾させるように

セフィラへ指示して作成させた改造種だ」

雨の中を一筋の軌道と共に羽虫が見えぬ痕跡を追って飛ぶ。それを追跡しがてら冒頭の

ライダーとの邂逅に至った訳だ。サーヴァントもとい、大型ツールのアブノーマリテイから

派生した存在を決して快いと思わない管理者だが、今はそんな事に気を回す程の余裕は無い。

雁夜の、ライダー陣営にどう対応するか短い問いかけを無視する調子で、感情ない声上がる。

「無駄な交渉や奸計は抜きに率直に告げる。キャスター陣営に知人と

部下が攫われた

手を貸して頂きたい」

頭を下げて頼み込む管理者に三者が三様の異なる顔で彼女を注視する。暫し逡巡の天使が通る

時間が出来たが、最初に口開いたのはライダーの肯定の声だった。

彼自身、英雄王に並び立つ程に我が強い部分はあるが善性に寄っており。その独特の鋭い

感性からバーサーカーである彼女の言に虚偽を見出さなかった故だ。

マスターであるウエイバーの小さな反対の声を流しつつ、管理者が飛ばす羽虫が何の変哲もない

水路の壁の中に数匹消えたのを認めて四人はその中へ侵入する。

「虎穴に入らずんば虎子を得ずと言うが、この穴の中で得られる物には何一つとして期待は

出来そうにないのお」

人には只の壁と思える穴の中に入り込んだ瞬間、淀んだ臭気と磯の匂いが四人の鼻腔を襲う。

咳き込むウエイバーの上着を引っ張り、半ば猫を乱暴に箱に入れるようにしてゴッド・ブルに

乗せると共に、雁夜とXへ短く同乗を告げて二頭の牛達は嘶きながら地下空間を猛進し始めた。

「キャスターの奴めの魔術でどうにも入り組んでおるが、お主等の兵の計略は生きている！

このまま突っ切るぞ！ AAA——LaLaLaLaie!!!」

雷の防壁、いや削岩機と称して良いチャリオッツの形した破壊の特色は穴の中から無尽蔵に

這い出す海魔を文字通り木端微塵にしながら突き進んでいく。

管理者は雁夜が注意深く虫の軌道のみを読んで先の進路を把握した情報を簡潔にライダーへ

報せつつ今か今かと変化しない顔の裏ではコトネの無事を願っていた。

(元はと言えば、私が彼女を巻き込んだのだ)

無事でいてくれ。ただ、それだけを祈りつつ一つの暗い開けた空間へ辿り着くと道中湧いてた

海魔達はピタリと止み、不気味な耳が痛くなるような静寂が四人を出迎えた。

イスカandalと管理者は英霊と言う人と異なる素体だ。だから闇夜の中でもしつかりと目前に

何があるのか見る事が出来た。僅かな間の後に、大柄な赤髪の男はマスターの小僧へと魔術で

明りを点そうとするのを普段の陽気さを消した声色で短く制止の声を上げる。

対し、ウエイバーは聞かない。何時も彼にマスターとして認められてない態度に反感を抱いてた

子供染みた嫉妬ゆえに空間に一带に光が満ちる。

「……………」

「ぐっ これは……………」

彼等二人のサーヴァントのマスターは視界に開かれた地獄を直視した。

歯車か何かで構成されたアート染みた人体。家具のような物体になり人としての形状を

保ってないに関わらず、打ち上げられた魚のように未だ呼吸をしている存在。

玩具のプラモデルの接合前のように、人体をほぼバラバラにされながら動いてるものや

頭部が金魚鉢にすけ替わり、特定の地点を痙攣しつつ行き来する児童。

その大半は生きていた 壊れていた 命はあり動いていた 終わっていた

魔術師として非情な側面を座学の中で学んでいたものの、一般人としての感性が死んでない

ウエイバーは耐えきれず少し前に食べた胃の中のもの全てを吐きだし。

雁夜も、ある程度 L o b b o t o m y c o o p 内で精神的な修練は施されたが。付け焼刃で人としての

心を取り戻してる彼もまた、受け入れる事が出来ず吐き気が喉にせりあがる。

ウエイバーと同じ末路をとらなかつたのは、ただ単に顔を背け目にした場所にあるものが

この地獄の中で唯一残された希望を目にしてだ。

「っ！ み 見てくれ。子供達がいる」

縮こまって息を殺しながら密集する小さな塊。近寄る雁夜を認めると、数人は悲鳴を上げたが

残る者達は光ない瞳で機械的に彼を見る。バーサーカーと共に檻を開き、安心させる言葉を

かけるが、子供の心には余りの負荷が掛かり過ぎ、殆どが自分達が助かった事を認識出来ない。

唯一、凄惨な現場を少しでも逃れたく二人と共に子供達の側へ寄つたウエイバーへと

檻が開くと共に浅黒い肌で紫色のワンピースを着た少女のみは彼に抱き着き、無言でその腕に

力を込め離さないようにしてるのが印象的だった。目的の場所まで飛んでいた羽虫達が

檻付近の地面と、その少女の肩に飛来して羽を休ませる。

「うわっ!? 何だよ お前……」

困惑しながらも、気が動転してるのだろうと捉えて突き放す事もせず成すがままにされる

ウエイバーを他所に管理者は子供達の顔を一瞥し、その中に目的の人物が居ない事を認識すると

壊れきつた人の残骸の中心へ進む。その表情は依然変わらず、イスカンドル王から言えば

人心なき振る舞いで全力で殴り飛ばす所作であるが、その態度を見咎める前に彼女は一つの……

——一つのオブジェの前で立ち止まった。

「……ああ コトネ 此処に居たんだね。ご両親も心配してるよ」  
それは既に人の原型を保っていない。微かな蠢きと震えのみを発している。

「さあ 一緒に帰ろう。前は碌に返事出来ていなかったけど。コトネが望むなら」

私は何時でも君が望む時に会いに行くよ」

ソレは既に呼吸はしておらず、生体反応は無い。

「帰ろう、コトネ 私と一緒に帰ろう」

何かの形を模した死肉を優しく管理者は抱擁する。それに対し掛ける言葉を持ち合わせない

雁夜は無言で見つめるしか出来ず、その憐憫誘う光景に一瞬絶句を帯びてからライダーは

厳しい顔で口開いた。

「バーサーカーよ もう、ソレは」

「黙れ アブノーマリテイ。……コトネを殺したのは お前だ」

唐突な発言に、少女を介抱していたウェイバーは流石に黙っておられず、バーサーカーと

語気荒く呼称しつつ訂正を求めた。だが、彼女は止まる事ない。

「コトネを殺したのは貴様も含めた我々だ。この戦争を呼び起こした者達全員が同罪だ。」

お前も 私も……コトネの死を引き起こしたのは」

怒りも自棄な感情の色も籠っていないものの、その言葉にライダー、ウェイバー及び彼女の

マスターである雁夜も訂正の言葉を持ち合わせる事はなかった。

厳粛な祈りを施すように、数秒間彼女はそのオブリジェを抱きしめ続けたものの終わりの時間は

やがて訪れる。少し距離を置くと、指鉄砲の形を片腕に作りオブリジェに照準を定めた。

「――処刑弾」

放たれた艶やかな血の色の閃光は肉で出来た像を突き抜け動きを止まらせ、徐々に肉片は



上から下にかけて塵となり風化した。長くその塵まみれの地面をじつと見つめる管理者を心配し

雁夜は精一杯の優しさを込めて肩に手を当てる。もう一組の戦争参加者等は子供達に異常が

無いかを診ているため邪魔する者は居ない。

そして、振り向いた表情に顔を強張らせた。ふてぶてしい、普段見慣れた顔とは異なる

微笑をこのような場面で浮かばせていたからだ。

「え な……誰だ？」

管理者では無いと彼は感じた。そして、それを否定する事なく手の形を崩さぬままに

他の死にながら微弱に動くモノたちに照準を合わせて嘯いた。

「あの人なら、少しのあいだ休ませてくれってさ。流星に今の出来事は応えたって事さ」

そして、こう名乗った。

——俺はケセド

▽▲▽▲▽▲▽

無機質な白いテーブルに両手を組み合わせ顔を伏す女は、疲労隠せぬ吐息と共に立ち上がった。

そこはc o o p内。雁夜の相手をしているのが『殻』であるなら、この場所は『実』

コトネの死。地下通路を彼等の宝具に同乗してる時から既にコトネの生還の可能性が

絶望的な事は予期していたが、それでも受け入れる事は容易くなかった。主導権を他のセフィラに

任せ彼女はペアとなるペンダントを胸元で強く握りしめる。懺悔の言葉を呟こうにも、そんな

資格は何処にも無い事も既に承知の上ながら規則的に小さな謝罪の言葉と一筋の冷たい液体が

片方の眼球から流れ出ていた。

「作業 しない」と

こうしてる間にも、L o b b o t o m y c o o p のアブノーマリテイ達は暴走する可能性を孕み、エージェント

研究員達は事故死の憂き目に陥る。

何より、自分が倒れれば特例を除けばc o o p内の作業指示を下せる者は何処にも居ない。

倒れる訳には方に一つもあつてはならないのだ。

無線に、控え目な口調で管理人と声掛けられる。普段より無意識に低い声と共に用件を尋ねると

調子を察してか、遠慮がちに新しく収容ルームに出現したアブノーマリテイに早々の異常が

出たと報告がなされた。

「どう言うアブノーマリテイだ」

「O—O1—92（今日は恥ずかしがり屋）です。あの」

無線から独特の間が生じ、どう話して良いものかと言う困惑を多大に含ませ次の音が飛び込む。

「以前からの記録には無い行動をしています。あの、誰かに呼び掛けているようなんです」

「なに？ ……………誰の名だ」

「——」

瞬間、管理人は本来のルールに無い行動を取った。通路へと駆けだし、驚愕する部下達の間を

突き抜けて先程報告受けたアブノーマリテイ番号のある部屋へ辿り着く。

落ち着いてくださいと制止の声を上げて半ば強引に取り押さえようとすする職員に銃の形で手を

突き出して牽制すると、そのままドアを開いた。

人の皮膚で出来た左側に喜び右側に不機嫌な表情を模した顔の列のネット。

その向こう側に地面に血だまりを作った小さな人影を認識する。

その人影は左側へと寄って、小さくながらもはつきりと。

もつとも聞きたくて、そしてもつともその存在には発して貰いたく

ない声を紡いだ。

——ああ

スラー

やっと

会えた

その言葉を聞いた瞬間、管理者は崩れ落ちるように地面へ膝を付いた。

## 崩壊の鐘

桜は目覚めた<sup>微睡む</sup>。起き上がった瞬間に、それが異なる世界である事を認識した。

蟲蔵でも、独りぼつちの私室でも、L o b o t o m y c o o p と呼ばれる場所とも違う誰かの世界。

空は昏く温かみは全く無くて鮮やかな彩は何処にも見当たらず太陽は見えない。

真下を見落とす。踏みしめる感触は冷たいコンクリート床でも畳でもない柔らかだが心地よさを感じさせる事のない柔らかさと一部硬い感触を感じさせている。

正体は死体だ……辺り一面に倒れ伏した死体が積み重なっている。一歩足を進める度に既に乾いた血や何かの液体の付着した衣類越しに死後硬直の肉の

感触が足の裏に伝わる。瞳孔が開ききった横顔は桜が今まで接してきた飴なり菓子

渡したりカードゲームや他の遊戯に付き合ってくれた職員達である事が認識出来た。

大気の半分は死臭で出来ているだろう空間。直ぐに鼻は麻痺して腐りきった肉の匂いを

感じさせなくなり、それ以外を求める嗅覚は敏感に最近では嗅ぎ慣れた一筋の香りを

捉えた。少女はその方角へと足を進めると朧気に死体だらけの山越しに彼は見えた。

「こいつ達は、全員失敗した成れの果てなんだ」

青い髪、達観した目つき。お父さまが良く身に着けるような一見して高級だつて解る

スーツで胸ポケットにハンカチを洒落た感じで入れ込んで。最近見慣れた通りのまま

円形のテーブル、安めの椅子が二脚。その内の一方に座って優雅に

一啜り。

テーブルにはコーヒードリップ、彼が摘まむ茶器とは別に空いた椅子のほうにも

空のカップが鎮座している。近くまで桜は行く事にした。

「飲むか？ ……遠慮しないでいいのにな。子供にはこの味の良さが判らないかな」

半分程飲んだ器を置いて、自分が飲むのとは別にもう一つ空いたカップを差し出されたけど

飲む気分じゃないので首を軽く横に振る。

残念そうな口振りだけど、そんなに残念そうじゃない顔でコーヒを一口。

見渡す限りが死と破滅で埋め尽くされた大地の中で私と、この人だけ。

「切っ掛けは別の奴だったかも知れないけど、俺も原因の一つだったんだ。

俺が言いなりにならず抵抗して無意味に死んだとしても、アレは俺以外の奴を

脅迫するなり死体の脳内からパスワードを引き摺りだすなりして住んでた世界を

地獄に変えたって事は間違いない。だが、俺にもう少し熱意や力があれば時計の砂の

落ちるスピードは多少緩やかになって、少しは違う未来もあったのかなあ」

本当に飲まなくて良いのか？ とカップをもう一度差し出される。私の答えは変わらない。

男の人、ケセドになる人であっただろう彼は肩を竦めてコーヒを一口。また語りだす。

「何千何万何億と言う試行回数の中で、管理人のミスや不注意、膨大な作業の中での不運なミス

元々事故が起きないほうが可笑しいと言うか、犠牲なくして達成出来ないシステムだからな。

管理人が無気力でもつとやる気が無ければ、死体で宇宙を圧縮させて破壊だつて出来るかもな」

ジョークなのか本気なのか分らない言葉と共に彼は笑い声を無音の世界に少しだけ響かせた。

唯一の死者の世界に広がる音源は暫くすると小さくなって再び静寂が訪れた。

暫くどちらとも何も声を発さなかった。すると水滴が額に一つ辺り、コーヒーカップの水面にも

パラパラと水滴が降りかかつて雨音に満ちていく。

「ああ、また涙が零れ落ちて来た。決して止む事のない俺達の涙がな」降り落ちて来た水滴は彼の言う通り止む事がなく、豪雨でも小雨でもない勢いで私達を濡らす。

「俺だつて当初は、こんな理不尽だけの日々に涙ばかりだったよ。けど、何時しか悲しいと

思える事すら無くなった。残酷だよな？ けど、大体そう言うもんなんだろうな。

人間なんてそんなものなのさ。何時しか傍観者である罪の意識を何にも感じる事もなくなつて

こうやつてコーヒーブレイクが出来るようになる。

いや、このコーヒーを飲む事がある種の贖罪行為なのか」

一杯を飲み干すと、ドリップを傾けて新たに黒い液体で満たしていき言葉を続ける。

「俺達の過去は大体見ただろ？ —— ガブリエル エリヤ

最初の崩御……いや、本当に崩壊する起因はもつと前にあつたんだが、あいつ等二人が

会社の正式な職員として壊れ始める切っ掛けに深く関わつての犠牲だからさ」

ま、俺はそこまで苦しい死に様には至らなかつたが、と呟きつつケセドは

コーヒーを一口含む。また再びコーヒーを勧められ、断る流れを繰り返す。

近くに置いてあったのか、何時の間にか取り出した角砂糖の入ったガラスの容器を開けて

一つ、二つ。ポチャンと波立たせ攪拌させ更にもう一口。

喉を鳴らして多少甘くなつたソレを流し込み、僅かに口内に残つたものを静かに味わつて

打たれる雨によつて濡れた顔を少しハンケチで拭つてから初めてちゃんと顔を桜のほうに

しっかりと向けて話しかけた。

「これ以上、見続ける必要は無いですか？　無理に染まる事なんて無いんだから。」

俺自身は出来る限りの事はやった。それでも回避不可能な運命に飲み込まれ、変わり果てて

失意のどん底にも陥つて、それでもまた希望があるかと思いきや、結局何処にも光なんぞ

無いと告げられて……あんまりな目には遭わされたが、それでも割かし気持ちの整理は付いてる。

これ以上懊悩する暇があるなら、この一杯のコーヒーを堪能する時間に全て注ぎこみたいな」

桜は思った。きつと、この人も彼や彼女と同じ程に、桜と同じような理不尽な目に遭わされてる。

でも、何でそれでも彼は彼のままで生きられてるのか。彼女は不思議だった。その疑問に対しカップを掲げ彼は答える。

「――大体人生ってそんなもんだろ？　希望以上に絶望が蔓延してて

それが事故同然のままに襲い掛かつて来るもんなんだよ。」

俺や俺達は降り掛かつて来た災厄が割合常人より刺激的で特殊だった」

ケセドはコーヒーを回す。その飲み物と同じ位、暖かな光ない瞳は彼女を覗き込む。

「願いや祈りだけで天国に至れる筈など無い。血の滲む努力や功績が幸福と結びつかない」

俺は悟ったんだ。何もかもあるがままに受け入れる事にしたんだ。どうしようもない事は、どうしようもないと事実をそのままに。そして、それに対し何もしない事こそが最良と答えを出したのさ」ただ、それだけさとカップを傾けて口付ける。その姿を見て彼女は疑問を氷解させた。

謂わばケセドは桜なのだ。蟲に根こそぎ大切なものを奪われて抜け殻になり果てた者

桜そのものがケセドであり、ケセドもまた桜と同じ。

諦観と言う概念に、ほんの少し昔から嗜好していた慣習を色付けてる事を除けば

彼と私は鏡合わせのようにそっくりだ。

——コーヒーを飲んでいるか、そうでないか。それこそがケセドと私のたった一つ異なるだけ。

子供や大人、色んな死骸が積み重なった世界の中で私も横たわり動か無くなれば生きている人と

何ら見分けが付かないように。ただ立って動いてるか横に動いてないだけの違いなんだ。

ガブリエルも、エリヤも。そして、目の前の彼も 根本は全て私と何一つ変わらない。

桜は真理を知った。私は……ただ立って動いているだけで、この死者達と何ら変わりなど無い。

流されるままに、訪れるものを全て享受し抵抗も逃走もせず襲い掛かる死にも微動だにせず

受け入れるもの等、そこら辺に転がっている置物と何が違わないのか。

大地が僅かに震え呻き声が轟いた。目の端で腐敗された肉片の床が崩れ去り世界が消えていく。

もう、目覚めの時間なのだろう。

「さようなら ダニエル」

きつと、この世界ではもう会わない人に別れを告げた。彼は口の端を吊り上げる。



「さようなら？　可笑しな言葉だ」

今　お前が見てるこの世界には。別れはおろか出会いだって未だ無いって言うのに。

ダニエルの言葉に対して思考や返答する間もなく、桜は意識を覚醒させた。

死者達で形成された腐肉の世界から現実へと。そして瞼を開き、こう思った。

……まだ、私は夢を見ているのかな。

眼前には、赤黒い血肉で敷き詰められた空間。そして自分を離さないように抱え

鋭い目線で彼方を凝視する疵の目立つ赤い戦士の横顔で桜は出迎えられた。

「おどきなさい、神流の果てに聖処女を得る為にも。貴方がたが守るその娘には

贄になって貰うのですから」

通路に響き渡る艶めかしい肉が溶けるか擦り合うような物音

誰だか知らない声に立ちふさがるように、ゲブラーは無言で視界に染まる赤黒さよりも

一際鮮やかな赤い髪を逆立て、髑髏のつく棍棒を片手に生み出した。

冷たい雨が降り注ぐ。何処ぞと知れぬ人払いの結界を施した冬木市の廃屋の一つで

眉間の間に長く残りそうな皺を作りつつ片手の指を慎重に動かす男。

その背後には筋が整う麗人な男女が一人ずつ控えているのが見て取れた。

「よしっ、これで腕は問題ない。稀代の人形師と言われている力量は本物だったな」

ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは片腕の回路を完全に壊死させた事を理解し

荒れ狂う心情を抑えつつ、直ぐに日本国内にいる蒼崎橙子。本物と何ら遜色のない

義肢のスペシャリストに連絡を試み、そして半日も過ぎた頃には届けられた。

これが完全に全身の魔術回路を破壊されたとなれば、意識が回復するまでの時間や

全体のパーツを蒼崎が制作する時間も含め、聖杯戦争では決して短くない浪費が

産まれていたであろうが、バーサーカーの分岐点となる一助により彼は問題なく

聖杯戦争へ立てる状態へと復帰が約束されたのだった。

戦争へ対峙するにあたり、五体の内のどれかが欠けて勝利する等と言う事。

人によつては執念で勝利を掴む姿勢を美しいと評価する事もあるが、エルメロイ家を

背負う彼にとって、そのようなものは無様で醜さしか受け取れない。

ようやく心の均衡を保つ事が成功した彼は、不愉快な顔つきでサーヴァントに振り向く。

「そもそも、だっ。ランサー！

貴様がセイバーとの鬨いに手間取っていたからこそ、工房はアサシン陣営に奪われ

私がこのような失態を被る嵌めになったのだぞっ」

抑え込んでいた不平不満は妻にぶつけるのは以ての外、結果その全ての怒りは召喚時から

黒子の魅了によつて誑かし、聖杯への望みを上辺ですら口にしない心証は全て害としか

映らない忠義の騎士を気取るサーヴァントに向けられる。

「ケイネス、みつともないわ。そもそも、魔術師の流儀として一対一の

決闘を

望んだのは貴方でなくて？」

「ああ、確かに私さっ！ この片腕を壊されたのも一重に判断の誤りだと認めようとも！」

然し、それとこれとは話は別だつ。戦争開始時から御身の為に他の英霊の首級をこの手に

持ち帰ると宣いながら、貴様は私が魔術師として一生物の傷を負うまで何をしていた？

正騎士であるアーサー王とは二度相まみえながら倒す事は叶わず、私の指示に躊躇した故に

パンドラの箱の猪を出され手も足も出せず逃げ帰ってきただけでは無いかっ。」

これならば、あのバーサーカーを使役していたほうが余程マシだと吐き捨てるような

口調にデイルムッドは首を垂れて罵詈雑言の嵐を無言で受け止めるのみだ。

令呪に縛られてる故、愚かな主に叛旗を翻そうと忍耐を敷いているのでは無い。

今世の主の荒げる声と眼光に宿す黒い念の色合い。それと共に自身を弁護する主の伴侶の瞳に

揺れ動く熱情を伴った焦がれた視線に言いようがない既視感を受けてだ。

(俺は、このままで良いのだろうか)

そう葛藤が産まれたのは何時頃からだろう？ あのパンドラが魔猪を召喚した瞬間から

背筋から粟立つような衝撃を受け、今もあの怪物の姿形は脳裏の端にちらついている。

自身の死因でもある存在と思いがけぬ邂逅を果たした事は想定以上だったのか、未だ

この心の中には蟠りのようなシヨリが漂っている。

かつてフィオナ騎士団一の英雄と謳われた自身は、主であり無二の

背中を預けし彼の

姫君を浚った事から全ての齒車は崩れ去ってしまった。

誰も恨んで等いない。魔猪によって瀕死の自分を見殺しに至った彼も、自分を浚えと

誓約を後ろ盾にしつつ我欲のままに命じた彼女にも。

ただ最後に死に際に渴望したのは一つのみ。

騎士として真つ当に生き、死にたかった

だって、そうではないか？ 戦場の中で死するのならば受け入れられる。自身に明確な

咎があり、友や主君を死に追いやったとするならば抗う事なく首を刎ねられよう。

然し、そうではなかった。数々の私欲が入り混じった故に起きた悲

劇。我が主も姫も

容認出来ぬ挙動があつた事は否定出来ぬが、悪人では無かつた。私は姫を愛したし

そして彼以上の主は居ないと永遠の別離の後も口に出出来る自信を備えている。

目の前で繰り広げられる、我が主と伴侶の口論を見据えて葛藤の火は消える事なく

燃え広がる事も無いままに揺れ動いている。

まるで、あの頃の再現のようだ。怒れる主君、この呪いの黒子に囚われ空回つた

熱情の虜となつて取り直す伴侶。否が応にも遠い記憶が呼び起こされてしまう。

けれど自分がどう口にした所で、この現実が良い方向に向かわないだろうとも厳しく

冷たい事実も理解している。何時だってそうだったのだ……このような修羅場では

間男のような立場に至っている自身が口にすれば更に油を注ぎ悪化させてしまう。

—— 醜いものだな

そう、醜い。……？ いや、待て。今の言葉は誰が呟いたものだ。殺気と言うものは無かった。いや、そもそもその言葉に感情は伴っていないかった。

声の方に素早く振り向き、名槍二つを握る腕に力を込める。

廃屋の向こう側の雨が地面を濡らす場所に一人の女性が傘を差し、薄気味悪さすら

感じられる微笑で、人を人とも思わぬように観察した目をこちらに向けている。

それも油断は出来ないのだが、一番注視せねばならなかったのは傘の領域に入らずに

黒い孔雀羽のような襟をした衣服に包まれた中性的な顔立ちの人物のほうだ。

——そして 貴様は謂わば切れ端

—— 深く染まる事も染められぬ事もままならぬ切れ端なのだ

こいつは何だ？ 何を言っている？

ただ、理解出来る事もある。今まで幾度ともなく強大な敵とは戦場と相まみえた。

この戦場でも彼の征服王の威圧を肌で感じ取り、円卓の最優なる騎士王とも剣を交えた。

だが、こいつは何一つとして異なる。恐れすら感じ取れず、今まで感じた事のない

未知に対する不快と危機感のみが四肢を駆け巡っている。

「何だ、ランサーっ。……！ 敵か。その容姿、バーサーカーが告げた第三の介入者か」

警句を発する。振り向いたケイネスはソラウと同タイミングでフランチエスカの姿を認め

何時でも魔術での攻撃及び防御態勢へ移る。

彼と彼女が視線を向ける瞬間には、振り注ぐ雨の勢いが強まったと感じた刹那に

あの不気味な言葉を耳に擦りつけた者は姿を雫の中へ同化させたように消失させた。

何処へ消えたのかとランサーが悩む間もなく、代わりに佇むのはバーサーカーが宝具で

招来させた黒い闇のドームを産み出した例の黒鳥を模するような羽毛に皮を縫い合わせた鎧。

頭部に至っては目元まで酷似させるように黄色いゴーグルで、片手に宿す恐ろし気な

ハンマーもソレの羽根や目を腕いで作り上げたような武器だ。

記憶から拭い去るには早すぎる装飾。そこから連想され忠言された狂戦士の女の発言を

顧みれば、宝具から自立行動で離脱し此度の戦争の裏で暗躍して画策するビナーとか言う

存在が目の前の女と手を組み、宝具の中の魔物を幾つか引つ浚い結託の取引材料なりで

贈った事は間違いない。そんな裏を推察するよりもケイネス・エルメロイ・アーチボルトが

腹立たしいのは、手負いであるとは言え時計塔の名手たる自分が何処の馬の骨とも知らぬ

魔術師が邪悪な玩具箱の人形一体で自分をどうにか出来ると暗に見下されてる事実に対して。

「あのパンドラの箱より引き連り出した暗黒の騎士一体で私を倒すつもりかっ」

「んっんー☒ ただの外郭の戦利品の試運転よ」

ケイネスの荒い口調に対し、何処吹く風と言った調子で傘を軽く回し惚けた返答を

フランチェスカは行う。

軽んじられ、揶揄われている。征服王であるイスカンダルに対し、姿を現さない自身は

ウェイバーより根性なしだと迂遠な言い回しながら告げられた時よりも遙かな屈辱が

彼の腸を煮えくり返る。それでも衝動に任せて虎の子の月霊髓液を振り回すような

愚行を行うつもりも一切なし。唱えるのはランサーへの戦闘の許可。

「行けっランサー！ この私を侮辱する者は誰一人として許してはおけぬ」

御意の言葉と共にデイルツドは駆ける。目前で構える黒鳥の装飾の槌使いの背後で

あどけない少女のようでもあり知性を感じられぬ老婆の気味悪い笑みにも似た魔術師からは

海魔からも感じられた操り主のキャスターに近似した気配を感じられるものの

どのような術を扱うとすれ、今まで戦場を生き延びるにあたって信頼してきた相棒二槍ならば

切り裂く事は可能であると彼は自負している。

鍛えられた駿馬の如き脚力と共に常人ならばどんなに早く走ろうとも十秒は掛かる距離を3歩程

足を踏みしめるのみでランサーは黒い戦士に肉薄すると、その勢いのままに長槍を叩き込む。

戦士はデイルツドの英霊としてのスピードや技量に感嘆や驚愕する素振りを一切見せず

ただ寡黙に僅かに持ち手の位置を変え、そのまともに直撃すれば後ろに押し込まれる威力を

全て柄から先端部分の槌を抜けて宙へと衝撃を捌ききる。

一秒にも満たない遣り取りの最中にランサーは確信する。この戦士の技量は自身と同等に及ぶ

担い手であり、幾多の窮地を超えて来た猛者であると。

姿勢を変え、フェイントを交えつつ槍の連撃を浴びせる。二槍と言う質量ではランサーが

優位に立つ筈だが、その鳥の装飾の兜の向こう側で何を推し量るか知れぬものの

即座に槌の角度を変えつつ防ぐ様は槍騎士と実力遜色ないと理解出来る。

鋭い呼気と共に紅の長槍を引くタイミングに合わせ黄色の短槍を腹部に定め打ち込みを試みる。

黒鳥の槌の担い手は、その打ち筋を前以て理解してたように長い柄の部分の中心で弾き

お返しとばかりに槌をデイルドの頭部目掛け、その武器の大きさと相応するであろう

重量さなど全く以て無いかのような速度で振りぬいて行く。

顎を引き、それでも未だ圏内を抜けられない事を理解している戦士としての勘は肉体を従え

上半身と頭部は後ろの地面に付きかねない程に大きく逸らされ、その刹那に凶器の香りと突風が

鼻先を擦っていく。手首を返し槍の持ち手を地面へ打ち込み、その反動と同時に片足を大きく

降り抜きハンマーの戦士の顎先を蹴り抜こうとする勢いでバク転しつつ蹴りを繰り出す。

サーヴァントであれ、人の姿形であれば顎を鋭く打ち抜けば脳震盪を引き起こすであろう。

人類の力を集結させても未だ足りない程の力を秘めていても生物学的に人類であるならば

その強度が如何に怪物であれ1秒程であれ硬直は逃れられない。それは優れた戦士の死闘の

最中では勝敗を分かたない隙である。

それを理解しているからであろう。ランサーの蹴りに黒鳥の兜を僅かに傾げ、その羽毛が

幾らか飛び散らせつつも直撃を回避する。だが、僅かでも彼？ 彼女？ は正騎士の一人の

一撃が掠めた事に苛立たったのか、彼がその勢いのままに少し距離を開けたと同時に

黒鳥のハンマーを自身と同等に平行へ構え、周囲一帯、ケイネス等にも聞き届く勢いで

棍の部分の地面へ奇しくもランサーがしたように打ち据えた。



(っ！ 危険な気が、あの槌の頂点から満ち溢れようとしている)

判断と同時に飛び退く。柄の部分がアスファルトで覆われた部分に接触すると同時に

黒き鳥を模す戦士を中心として放射するように空気を揺るがし、転がってる幾多の小さな石に

ゴミが消滅していくのが見て取れる。未だ足が宙を搔いている最中、デイルツドは両手の

槍を十字に構え腹に力を込め前面に魔力を込めるのをすかさず行う。

瞬間に槍から両腕に掛けて痺れるような衝撃が通過し、振動が足先から頭を駆け抜けた。

(衝撃波っ 幾らかの距離で防いだ筈なのに、この手に残る痺れ……っ)

戦士の手に届く範囲で受ければ行動不能に繋がりが得ないと、足が地面につくと同時に槍の構えを

変えつつ鋭い視線で次の行動に気を配る。

緊張漂う空気に対し、水を差すように控えている外の魔術師は間延びした声を上げた。

「ねえ、不思議なのよね。——誰も正々堂々一対一なんて告げてないのよね」

その小馬鹿にした口調を聞いた瞬間、嫌な予感が背後にいるマスタアの方面から感じ取れた。

衛宮切嗣に大きな傷を受けて周囲への危機意識が昂っていたケイネスもほぼ同時にこの場で

覚えの無い新たな気配が自分から見て真横から突如出現するのを探知して首を向ける。

ソレは鞆だ。この極東の国や、自身の母国でも会社勤めの者が書類なりを携行する為に

よく見られるビジネスバッグ。それが地面に転がってるならまだしも、宙に浮いていれば

慢心して様子見などする事なく虎の子の月霊髓液を取り出す行動

にケイネスは出た。

銀色の流動体が彼と伴侶を守るように地面を円に描くのと同時に、  
鞆は誰の手を借りる事なく

その留め金部分が開き、質量保存の法則を無視して真下へ向けて開  
ききつた其の入れ物から

成人男性であろう黒い中折れ帽子を被った男性らしき人影が地面  
に降り立った。

(二体目のサーヴァントかつ！)

金色状の鎖をあしらえたブランド品であろう高級感漂う黒で統一  
されたスーツとコートの

両手には、今しがた転移の媒介として使用した旅行鞆を片手に提  
げ、残る手に何やら

ルーン文字らしき魔力感じる刻印の刻まれた拳銃が収められてい  
る。

「――Automatoportum defensio (自立防  
御)」

その銃口が自分に向けられると同時に力ある言葉を行使し、水銀の  
膜は眼前に広がる。

直ぐ後に聞こえた発砲音、と同時に米神を掠った熱と痛み。小さな  
呻きの中で、僅かに見える

水銀の壁を貫いた先から僅かに伺えた、帽子の下から見て取れる不  
敵な微笑を憎悪を込めて睨む。

半ば想定出来たが、サーヴァントである存在、魔術礼装は現代の比  
にするのは愚の骨頂とも言える

現存で最高格の神秘の武器を時計塔最強格の我が月霊髓液であつ  
ても完全には防げない。

だがランサーを令呪で命じ黒鳥の槌使いの殲滅を命じても、あの不  
愉快な小娘の姿形の魔術師が

パンドラの箱から未だどれ程の戦力をバーサーカーから離反した  
魔性の存在から融通

されたのか未知数。自分とソラウの離脱を命ずるのも、戦争開始時

点から華々しくない戦績を

顧みれば、烏澁がましい程に誇り高い彼には其の手札を捲るに指は重すぎる。

(私は 私はケイネス・エルメロイ・アーチボルトだ！ 如何な小細工を弄されようとも

この天才たる己に負け犬の如き敗走等と言う文字は辞書に無いのだっ！)

既に妻は留まっては危険と知り、廃屋の建物の中へと姿を隠した。それで良い。見ておれ誇りも名誉も知らぬ獣め、このアーチボルトの妙技 見せてくれる。

「i r e : s a n c t i o (追跡抹殺) S c a l p (斬)!!」

水銀は如何なる形へも姿を変える。円状の壁は瞬く間に姿を変え、切っ先を鋭くした流動体

となって中折れ帽子の英霊となる存在へ空気を切り裂きながら進む。

防壁が自身に襲い掛かる軌道不規則な水銀槍に対し、数秒先に貫かれる未来を待ち受ける者が

帽子の下から覗かせる不敵な笑みの口元は形変わる事ない。

逃れなどしないと確信を持っていた。鞆を用いての転移、月霊髓液を貫く弾丸あつてでも

最高礼装たる水銀の速さに質量が加わされれば、どちらの選択肢も悪手。そのエーテル体に

大きな傷を負う事は必至であると、頭の中で水銀の軌道を演算しての自信だった。

提げた旅行鞆の方から金属の留め金が外れる音と共に、その中から質量を無視した

エメラルドグリーン状の触手が飛び出るまでは。

「なっ……い！」

一瞬だった。ケイネスの誇る時計塔の歴史に名を遺すだろう一品の月霊髓液と奇しくも

良く似た形を模した新緑色の今まで目にした事のない魔力の触手

がぶつかりあい

競り負けるでもなく、呆気なく月霊髓液が先端部分にかけて切断され自身の魔力操作を

失った部分が元の水銀の液体となり地面に落ちるのと同時に、切り飛ばした触手が

ケイネスの片手の部分を浅からぬ部分まで切り飛ばしたのも。

不幸中の幸いと言えるべきか、切断された部分は丁度人形師の彼女が作成した部分。

既に一般人や二流魔術師には見分けつかぬ程の高度な義肢となっていた為、鞆から

飛び出した宝具であろう触手が何らかの呪いを帯びていたとしても肉体に回って来る

事は無い。それでも幻肢痛とも呼べる痛みは体を駆け巡ったのは、まだ腕が破壊されて

左程日が経っているからとかではなく、明らかに今直撃した毒々しい色合いの

幻想世界の何処かに眠る暗黒の場所に住まう存在異形の腕が原因は言うまでも無し。

(に、似ている……っ。魔術師としての在り方を見失ったアインツベルンが雇った

魔術師殺しの傭兵。奴の弾丸を受けた時に似ている！)

例えば、月霊髓液の防御モードを貫通した瞬間から嫌な予感の芽が自分の心に咲いていた。

またか？ また私はあの時のような拭い難い死するまで残る恥辱を二度も受けると？

眩暈がする程の怒りと共に今まで感じた事のない嫌な震えと嫌悪感が沸いて出た。

順風満帆、これまでの成功を確約された彼の人生で一度たりとも覚えのない感情。

実の両親の死別や、親交の間柄がある者達が内心で自分を蹴落としたい野心で一杯であると

発覚した時でさえも、こんな感情を彼は知らない。

それは『絶望』だった。正史ならばセルフギアスで切嗣に命の保障を取り付け

ランサーを自害させ、そのまま重傷のソラウと命からがら時計塔に帰還出来ると安堵を

覚えた束の間に舞弥の手で致命傷を受けた死に際に強く体感しただろう感情。

肉体が完全に壊死した時でさえ、愛する伴侶の思慕が完全に自分からサーヴァントに以降

してる時であれど彼は自分の感情の真摯に向き合う事はプライドが阻害され出来なかった。

衛宮切嗣を憎悪し、己の栄光の架け橋と呼ぶ渡り綱が未だしつかりと結ばれていると盲信して

挫折を直視する事は無かった。それも運命と言うべきか、彼は間桐雁也がそうであるように

壊れた肉体が精神を引き摺る如く、尋常な精神を破綻していたからこそ心を外道に墮とし

教会の父を殺害する事を何ら厭わない精神に至っていた。終着点となるセイバーに介錯される

寸前に其の感情を享受する時は、最早ただ楽になる事しか念頭に置ける状態ではなかった。

然し、今の時空では彼は狂い始めた運命の余波を受け精神と肉体は健全に寄っている。

その元の在り方のままに芽吹いた負の感情を受け止め困惑していた。

——主ツツ！

風を切るように一つのポリバケツが飛来してくる。一瞬の膨れ上がった感情を思考で処理する

隙をついて、銃の代わりにナイフの武器を構え迫って来た刺客へと飛んでいく。

魔力も何の力も無い飛来物。それでも躲す為の一瞬程度の間は命

を拾うのに十分な時。

熱した鉄に水を掛けるように覚めたケイネスは再び詠唱と共に水銀を動かす。幾らか当たれば

サーヴァントであろう肉体に通ずるらしく、再び距離を取る為に飛び退く。

呆然自失から逃れた彼は、援護したのが自分のサーヴァントである事を確認し。そして目を

走らせて妻が建物の陰から心配そうな目を向け見つめる気配を把握し気を引き締める。

そうだ、ケイネス・エルメロイ・アーチボルト。何を怯える？ 如何なる苦境 試練と

皆が口揃えて呼ぶものを私は躓く事なく乗り越えて来た。

今この身は片腕こそ機能を伴わずも、その他は問題なく動き最高級の礼装と自身の英霊は健在

降り掛かる災厄とて、客観的に考えれば今の戦況を突破する手段は幾らでもある。

「――そうだ 私はケイネス 貴族<sup>ロード</sup>ケイネスだ。荣誉と敬仰に織られた聖戦を

恥を知らぬままにハイエナのように横から現われたお前達を誅罰すべき義務があるのだ！」

宣告と同時に、パスを介し至上なる液体である演算器へとケイネスはあるヴィジョンを描かせる。

粗雑な水たまりのような形で留まっていた水銀は、瞬く間に或る人の形へ至った。

その実像の写し身を見て取り、へえーと特に感心の色は込めない感嘆の真似して外来より訪れた

魔術師フランチェスカは嘯いた。

「魔術師として教本通りの人物像って聞いたけど、やっぱり才は本物のなね」

その姿形はデイルムルドだった。彼にとって最も信頼する存在であるから……では無い。

戦争開始時点より今までの行動の中で、最も観察してきており伴侶の心を半ば以上占領された事も

相まって憎悪を覚える程にずっと其のサーヴァントの動きを目にしてきた。

他のサーヴァントも戦闘による体術や技術も垣間見える機会があった。

だが月霊髓液でサーヴァントを模倣するとなれば一番現物の資料が間近で目にしたランサー

が自然と挙がる。内心の実情が何であれ今は安い嫉妬で駆り立てられて戦法を見誤る程に

ケイネスの眼に曇りは無い。常日頃の魔術師としての冷徹な思考に基づき行動する。

中折れ帽子の英霊もどきの幻想の手からナイフと入れ替わりに構えられた銃口に一片たりとも

焦燥の色を瞳に浮かべる事なく、信用の要たる礼装に詠唱と同時に全身全霊の演算を込めた。

『Fervor, mei, sanguis: aemulatio (滾れ、我が血潮：創造的模倣)』

デイルムルツドの形をした水銀が、英霊と遜色のない身体能力を有した足払いを行うと同時に

銃撃の音と、弾丸が何か硬い遮蔽物に当たり跳弾するような物音が同時に発生した。

敵対する者の帽子の下に浮かべられていた微笑の形が、真一文字の無表情に初めて模られる。

「このロード・エルメロイから直に直接講義を受けられる君は果報者だ。

如何に、英霊と言う存在であり弾丸そのものが神秘の結晶と呼ばれる代物でも……だ。

それが銃と言う形であり、発射される際に生じる物理学の法則を捻じ曲げる事は難しい。

一度直に味わって見たからこそ痛い程に実感したが、弾丸自体は宝

具による逸話も無銘に

等しい、魔力と肉体を併用し破壊する呪力を除いては只の弾丸だ……故に」

連続した発砲の音を重ねるようにして、デイルツドの形をした月霊髓液が全て防ぎ切る

音が空間へ響き、抑揚つけてケイネスは普段通りの高圧さを滲ませた声で宣告する。

「――魔力・質量を同等に有す礼装にて銃弾を逸らすに適した速度を加えれば防ぐのも容易。

ああ、然しだ。これでは、防戦一方 其方が新たな幻想種の増援を加えるか戦法を変えればだ。

また、私を追い詰める事も可能かも知れないな？

――ランサー 汝の宝具を開帳し 我が月<sup>ヴォールメン・ハイドラグラム</sup> 霊髓液の元へっ」

「――御意ッ！」

破魔の紅薔薇・必滅の黄薔薇の旋回の斬撃を直感で危惧を介し下がった

黒鳥の槌使いに意を介す事なく、その長き槍<sup>ゲイ・ジャルグ</sup>は弧を描きつつ

槍騎士を模す水銀人形の手へ。

投げ渡された宝具を受け取った直後に、その疑似ゴレムを軸として旋風が産み出された。

――ビュオオツ

ザシユウウツツ

元々は固体でなく流動の自由自在に変化を形作れる礼装である。物理法則で銃に数舜の時間が形成されるのも事実であれば、予めプログラムされた予備動作を必要としない鞭と

等しい音速の一撃を月霊髓液が放てる事もまた逃れられぬ現実。

更に、その先端には神秘の凝縮された魔を絶つ槍と言う重しのおまけ付きだ。

上半身の衣服が裂け浅からぬ血飛沫と、転移と召喚の機能を有する宝具の亜種であろう

ビジネスバッグの表面にも体の負傷と同程度の傷が走る。



「嘘っ サーヴァントの宝具を、たかが使い魔が振るえる筈なんて」  
「フツ 如何にも見識浅い片田舎から招かれた者の驚嘆だな？」

たかが、では無い。九代に続くアーチボルト家の魔道の結晶であり、時計塔の歴史を塗り替えす価値を持ち合わせる最高級の礼装。

サーヴァントの武具であれ、この私の手に掛ければ盤石を幾らでも反転させうる一手として

チェスのポーンをルークに変えるように戦局を変える事は左程難しくないのでよ」

啞然とした表情を模り、口元に白手袋を当てて狼狽を紡ぐフランチェスカに毅然とした態度で

「正道の魔術師は返す。ゲイ・ジャルグを脳細胞の大部分を活性化させ月霊髓液で使役し、ゲイ・ボウと伝説に至るに謳われたデイルルドの培ったケルトの戦士としての力。

対するフランチェスカが見せる札は、一槍のみになっても優勢に未だ持ち込めない槌使いと

重傷なのが見てわかる中折れ帽子の気障っぽい雰囲気戦士。

「くっ」

口惜しそうな唸り、刹那 周囲から漂う細やかな霧状に広がる魔力の波と共に耳に障る

羽音が全体に広がる。壁なりを黒く偽装していた魔力で編まれた蠅が周囲を飛び交う。

高度な魔術師同士の決闘と言う方式で、このような薄く展開された攪乱及び悪戯に負傷を

相手に与えようと躍起になる方法は正直愚劣と称して良い。

とは心の中で思うものの、ケイネスもこれが自分への躍起になつての

無為な攻撃とは露ほども思つて無い。

薄汚い魔術式で攻撃を加えると見せ掛けての尻尾を巻いて逃走しようと思つているのが

体を反転させ、黒鳥の鎧を覆う戦士を引き連れて退却しようとしてるのを見れば明らか。

初歩の初歩とも言つて過言では無い、自身の属性である風の魔術を扱いか接近を試みる蠅を

あしらいつつ、ランサーへ別方向へ逃げる中折れ帽子の戦士を見据えつつ命ずる。

「追え、ランサー。二兎追うものは一兎をも得ずと言う。何よりもこの私に少なからず傷を

負わせた、彼のパンドラの箱から飛び出した魔の傀儡には貴様の自慢の槍で討伐するのだ」

今代の主君の自身の道に損なわぬ言葉。外来の魔術師はペテンに長けており黒槌の戦士に対し

疲弊以外特筆して相手の力を削るのに至らなかつた事も踏まえれば、主の機転により大きな痛手を

与える事が出来た近代服の戦士に引導を与えるのは定石。デイルツドは家臣としての了承の声を一言だけ発し、黄色い短槍

のみを傍らに一足飛びに死角が多い建物内が隣接する通路に滑り込み、何とか生き延びようとする戦士を追う。

それを見届け、ようやく軽い頭痛まで生まれてきた演算を終了しつつ溜息と疲弊の汗を噴出させ

月霊髓液を人型から単調な丸い形へと戻す。曇天から落ちてくる夥しい雫が基礎的な魔術の

雨避けを解除すると共に彼の火照った頭を濡らす。普段ならば貴族として濡れ鼠になる等と

醜聞だと述べるが、今の疲弊して微熱が続く体には強めの雨は癩だが心地よさもある。

本来のこの礼装はサーヴァントのような人の形に至らせる事は難しく、ましてや機敏に英霊を

模すような攻撃を行使するとなれば膨大な処理と魔力を費やさなければいけない。

この聖杯戦争に参じてる魔術師で、ケイネスの真似を出来る人物がいるとすれば遠坂の当主たる

人の数倍の努力を克己と自律で成し遂げた遠坂 時臣か正当な参加者でないがセイバーを事実上

使役するにあたったアイリスフィールがその技術を埋め込まれた場合のみであろう。

伴侶たるソラウ・ヌアザレ・ソフィアリとの同時パスによるサーヴァントを潤沢な魔力での

操作が可能である事と、ケイネス自身が実際の天才であると言う二つの異才が揃ったの

月霊髓液にサーヴァントの姿と動きを模倣するという荒唐なのだ。普通の魔術師ならば不可能な

芸当で試行しても十数秒で脳がオーバフローを起こし倒れるか最悪脳内出血を及ぼし死亡する。

敵と対峙してる際に、情けなく自身が倒れかねない疲労を宿してる事を悟らせるような真似は

絶対に出来ない彼は、ようやく乱入してきたフランチェスカの姿や使い魔達を退散させ

周囲に人影が無くなった事を自覚すると共に一息ついた。  
(中々危なかったな。平静を表では保っていたが、消耗はやはり想定した通りに激しい。

この戦争中で発動出来るとして、後一度か二度が目安として最適な所か)

体力を回復して万全の状態で取り組んでも、サーヴァントを戦闘させつつ自身も同等の戦力を

取り組むとなれば今回のように事が上手くいく保障は無い。何よ

りも、この戦法だと疑似的なランサーと本当のランサー二体と言う過大戦力だが、今持ち歩く礼

装だけでは防御は薄い。  
正しく、ランサーのように『槍』のような戦闘形式だ。真っ直ぐな

突きと言えらるべき戦法は  
七陣営で上位だが、横を叩かれれば一気に弱まる。連発は禁忌だとケ

イネスは噛み締める。

「ケイネスっ」

小走り、そして背中に触れる小柄な熱と胴体に回されたしなやかな腕と手。

柔らかな二双の膨らみと首にくすぐったい毛先を感じて抱きしめられたと知る。

思わず固い表情が崩れた。このように自分の妻が大胆な行動をとるのは何時以来？

いや、出会った当初から回想しても初めてかも知れない。

「ソ、ソラウ……何だね、この私を心配してくれるのは喜ばしい事だが、随分と君らしくない」

「ええ、ええそうね。確かに今は私、何時もの自分らしく無いって思う。

でも、良かったわ 貴方が無事で……本当に良かった」

腕に込める力が強まり、俄かに抑えていた高揚感が体中に流れていくのが感じて心地よさと

機嫌も上昇する。直ぐにでも帰還するかも知れないランサーに目撃されるかも知れないと

言う警戒が無ければ、更に顔を崩して鼻の下でも伸ばしかねない程に有頂天だ。

この戦争開始してから、思えば初めて自分が劣勢を独力で考案した魔術形式を扱って相手を

敗走させたのであった。その武勇を目にした妻は、ようやく黒子の魅了に沿う浅慮を自覚して

我が姿こそが自他共に認める在りし貴族としての高貴を理解してくれたか。

今、その妻はランサーに向けたものでない。本当に自分のみに注ぐ熱情を帯びた瞳と顔を

向けてくれるのかと、口を弧に描きつつ首を回して……。

「いや、本当に有難し。採取すべき頭に破損が無い事は何よりの事だからな」

……それが、自分の妻などでは無く。今まで目にした事のない虚空

を目に帯びた女の容姿である

事を目にして固まり、そして冷静さが消えた頭の中で遅まきながら鳴り響く危険を囁く勘と共に

この女が、ビナーと言われるパンドラの箱から逃れた肖像と瓜二つの容姿だと知る。

何故、こいつは我が妻であるソラウの姿を象っている？ 彼女はど  
うしたのだ？

俄かに混乱する頭と、直ぐに令呪でランサーを呼び戻すか月霊髓液  
を作動するのだと言う

冷静な囁きが渦巻きあう中で、ふとケイネスは不思議にも前日に行  
われた談合を思い出した。

バーサーカーはこう告げていた。

『そいつと対峙した時は、例え貴方にとって魔術師同士の戦いにおい  
て何一つ実りを得ず撤退

する事が名を傷つける行動だとしても、決して相対する事を無い事  
を強く忠言します』

『アレは……アレは魔術師や英霊、その他の分野の専攻の人間であつ  
ても理解し難い者です。

ただ、一言だけ正しい説明が出来るものがあるとすれば』

―こいつは人間の壊し方を、知り尽くした専門家です。

「!? ……主っ」

あと一歩で、中折れ帽子の戦士の背中に槍を見舞う事が出来ると言  
う瞬間。繋がられたパスに

起きた異様な揺れを感じ取り仕留める事よりもまず先に安否を急  
ぎ確かめるためにランサーは

来た道を逆走する。コンクリートの通路と家屋の壁で出来た軽い  
迷路を抜けて、目的の場所に

彼は辿り着くと同時に目を見開いた。

倒れるケイネス、そしてその横に居るのは白衣を纏う冷やかな顔つきで主君を見下ろす……

「っバーサーカー！　これは……」

良くも主を、と怒鳴りつけ直ぐにでもバーサーカーへ攻撃するのを躊躇ったのは。

デイルルド自体が直情的に客観的な状況のみで薄氷を歩くように危うさは見えるが

同盟相手である存在を理由も聞かず宣告もせずに攻撃をするのは騎士道に背くと言う理由が

多く含んでいたものの、それ以外にも彼女自身が座り込み主君の脈を測る様子をしている事

セルフギアスの内容や、彼女自体の気配が以前感じたものと少々異なりを見せる事など

要因は幾つがあった。槍を構えるのを止め、彼等の居る場所へ歩み寄る。

「……これは、一体何があつて主君は」

「まあ、お前達は見ていて面白い位に上手く相手の穴に嵌ったと言うだけさ。

別にそれに恥を覚える事は無いがな。特に、策略と謀略に長けてるあいつを相手にするのなら」

驚きが思わず顔に浮かぶ。このバーサーカーは、何時でも人であるマスターには会話を臨んでたが

自分や他の英霊に対する姿勢は見ていて分かりやすく拒絶のみ態度で見せていた。

態度が突然柔軟になったと言うよりは、まるで別人の誰かが演じてるような……。

ランサーの困惑を他所に、バーサーカーを演じている『ケセド』はニヒルな微笑で告げる。

「で、だ。このままだと、そちらのマスターに連れ合いの伴侶も衰弱死するだろうが

こつちの宝具の中でなら治療は可能だ。アレに壊される経験を経て、直す為の方法も

こちらは会得している。どうするんだ、お前は？」

やはり、別人に思える。だが、その全身から滲む魔力や内部に秘めてるであろう宝具の

気配は正しく普段のバーサーカーのものである事は否定出来ない。

廃屋の場所から、マスター同様に彼の外来の魔術師達に自身が居ない僅かな間に何か

干渉され弱り切って意識を失っている主の伴侶を抱えるスーツ姿の男性を目の端で捉える。

先程の戦士とは異なる、間桐の長男と連れ合ってた使い魔と同じ制服だ。

視覚情報から、言動や雰囲気は大分異なるものの本物のバーサーカーである事は保証出来た。

後は、己が主君と其の妻をどうしたいのか。

そんな事、考えるまでもない。

「——頼む。だが、後で詳細は頼むぞ」

その言葉に応じ頷く彼女は手を差し出し、そこに手のひらを乗せる。

バーサーカーの体が輝きだし、ソラウを抱える職員や自身も同等の光を帯びて瞬く間に

視界一杯に光が満ち溢れ、一瞬だけ眩しさに瞼を閉じるのを余儀なくされる。

——ようこそ Lobotomy coopへ

そして、次の瞬間に曇天に雨 廃れた病院跡地や家屋以外の景色が人工物で密集した通路と

スーツと白衣の者達が織りなす場所に招かれた。紫や橙、緑に青い頭髮の制服の者達が

異口同音に歓迎の色は乏しくも台詞上は自分の登場を労う声をその不思議な空間に響かせる。

ただ困惑のみがランサーの体を覆う。主は？ 伴侶のソラウ様は

何処へ行つた？

彼の疑問を見透かしたかのように、クラシツクな紳士服を身に着けた髪も服飾も深い群青で

染まる男が前に進み出て口開く。つい先程まで話していたバーサーカーを彷彿させると

思う最中にも、その掛けられた言葉を聞いてランサーはやはり疑問ばかりが産まれた。

「あの二人なら、メディカルルームに直ぐ搬送されたさ。それよりも……だ

——仕事だ。二人分の命を救う対価は、さっそく支払つて貰おうか」

——暴走アラート 発生

建物全体に、警戒音が発生する。聞くだけで自然と体が危機感を覚え構えたくなる電子音を

まるで聞こえてないと言わんばかりに佇んでいる目の前のビジネススーツと独特のドレスを

着ている双子らしき子供達の向こう側で制服と白衣の人の波が慌ただしく動いていく。

「見せて貰おうか。旧世界の人間の信仰によって産まれたアブノーマリテイの実力を」

人智を超えた五感の聴覚で、幾つかの方角から人々の成す物音と異なる物音。

遠い昔 遙か遙かに過ぎ去つた記憶の中の出来事。フィオナ騎士団として幾多の戦場に

外海より訪れた異形の襲撃者達に良く似通つた咆哮を捉えた。

良かろう。ランサーは現況に対する事情や経緯を追求する選択肢を捨て去り、奪い去られ

唯一手元に残る必滅の黄薔薇を握る手に力を籠めなおす。

ただ主の為に、御身の道を築き上げるが為に。この身を刃に変え立



ちはだかる全てを切り払う。

——それが如何なる場所 例え煉獄の中であろうとも

崩壊を告げる鐘の音が奏でられる中、デイルムツド・オデイナは  
o b o t o m y c o o p の中を駆けた。

## 反響の内と外郭

『……でねっ！ その時に私が、この魔法のステッキでババツと呪文を振り翳して

皆を守ったのよ。あの時は本当に危機一髪だったわ！ もうほんの一秒でも遅ければ

あの子が死んでいたのは間違いないんだもの！ でも、大丈夫よ！

この正義の魔法少女である私が居る限り、この世界で貴方達に危険が降りかかる事なんて無いんだからね！』

フツッ！ と軽やかに微笑むのは、少し合成着色料気味な腰まで伸びた水色の長髪で。

霊長類に似つかわしく無い丸い黄色い目をしたピンクで基調されたスカートとジャケットを纏う少女だった。

対し、その英雄譚を気のない調子で、はあ そうですかと言った具合で聞くのは目も表情も死んだ鶴野である。

陽気な笑顔で途切れる事なく武勇伝を一時間近く話していた彼女は、何回目かの彼の相槌に遂にその生氣のない顔つきに意識を向けたのか、可愛らしく頬を膨らませる。

『ねえ、ちゃんと聞いているの?!』

「ああつ、ごめんなさいO—O1—04！ ツルノは貴方に助けられる前に色々と命の危機に晒されたシヨックが抜け切ってないんですよ！」

何せ新人なもので！ と愛想笑い全開に同行していたユメカは悟られないように思いつきり鶴野の背中を抓り意識を覚醒しようとするが、効果は芳しくなく顔を俯かせている。

これは、かなり重症だとアブノーマリテイに接待するベテランの彼女が内心穏やかでないながらも、返答に対して魔法少女の機嫌は幸運にも良くなったようだ。

『あら、そうだったの！ けれど、新人なら尚更早く死んでいった可哀そうな子達の為にも早く元氣にならないとね！ 大丈夫よ！ これからは私が居るんだからっ。』

ユメカも先輩なんだから、ちゃんと彼を指導してあげるのよ！

……ああ、それと！ 私の名前だけど〇―〇1―〇4って言い方は好きじゃないわ！

ちゃんと※※※※※って呼んで欲しいわっ』

「ええ、そうですね！ 本当に有難うっ。貴方がこの場所を守ってくれば直ぐに彼も元気になるわ！

それと、もう他の教育現場に彼を連れていかないといけないから……」

決してアブノーマリテイを規則上の番号以外でユメカは呼ばない。長年の経験が安易に目の前の人型の化け物が好き勝手に名乗る愛称で呼ぶ事が良い方向に繋がらないと熟知してる。

当たり障らない言葉で濁し、場を引き下がる旨を告げると。魔法少女は、あらっ！ 長く引き留めて悪かったわね！ と悪意なく笑いながら告げた。

『それじゃあ、またねっユメカ！ ツルノ！ ピンチになれば何時だって私が駆け付けるわよ！』

収納室の扉が閉め切る前に少女が笑顔で手を振りつつ背中にかけて言葉を無言で受け止めつつ。暫く廊下を歩いていた二人は、感覚的にもう普通の声で会話しても聞き取られる事は恐らくないだろうと言う距離まで進んだ時、ようやく重苦しい溜息と共に死んだ魚の目で鶴野は隣の彼女へ尋ねた。

「……長々とヒーローだって事をくっちゃべってたけどよ。んな都合の良い奴じゃないんだろ？」

「当たり前でしょう」

にべもなく切り捨てられるような調子で、対応していた時のストレスも見え隠れする若干苛立ちを含めた切り捨てる声に、群青色の髪を片手で掻きむしり、だよなど彼は呟く。

あの地獄のカーニバルと仮名する襲撃により、赤の他人ではあるものの見知っていたり自分に懇願して印象強かった研究員が死んだのを目にして彼は再認識していた。

過酷な生と死の境界線が簡単に行き交う現実、ほんの少しだけ淡く

抱いていた誰かの死を直視しないでいられるかもしれないという願望。

そんな事、決してありえる筈がないと言うのに夢想してしまったのは。数日とは言え、この異常な空間で生き甲斐なんて感じてしまった自身の馬鹿さ加減ゆえだ。

重苦しい溜息を隠そうともしない鶴野をユメカは目を吊り上げて腰に手を当てて見る。その如何にも怒りを背負っていると言わんばかりのポーズに辟易とした感じで問いかければ

彼女は自身の捌け口を得る理由をとつたと言わんばかりの立て板に水といった調子で説教の洪水を鶴野へと浴びせ始めた。

「なんだ？　って言うなら答えさせて頂きますけどね。そりや外の世界から行き成りこの仕事に就いたツルノには研究員達の死は幾らかシヨックだったのはわかります。

けど、此処ではそう言う事は日常茶飯事で慣れるしかない事なんです。ツルノだって、事前に仕事を始める前にきちんと説明はされたでしょう？」

それに、今回の被害なら未だ良いほうです。エージェントにや残留していた百貌と呼称された労働要員に死亡はありませんでしたし、との言葉に反論の種火を大きく点した。

「ああ、そりや説明はされたさ！　あの化け物蜘蛛なり蝶なりの世話も生きた心地せずにやって、芋虫共に襲われて、訳の分からねえ彫像の指揮官を撃って大人しくさせて！　この建物がどんだけイカレてんのか身体に叩き込まれたよつ、だけどなあ………だけどなあ！」

あんな風に、大勢見知ってた奴等が死に絶えるのを見て平然と出来るお前らは一体全体なんなんだよ。そう鶴野は嫌悪と畏怖に怒りを混ぜ合わせ力強く吠えた。

彼自身、真つ当な人間とは言い難い。どちらかと言えば、大魔術師に脅されてたとは言え、か弱い少女の蹂躪を手伝うような外道にも保身で手を貸す悪側に位置するだろう。

それでもだ、それでも彼は未だか細い自身の倫理観を捨てきれずにいられなかった。間桐臓硯の支配下から脱却したと言う自覚が芽生

え出したのも、彼の怒りを加速させていた。

自ら蓋をしていた人間性が、皮肉にもその性質がもつとも皆無と言えるこの牢獄の中で彼はその芽を噴出させる程に育てていた。

「お前等全員異常者だ！　なんで自分の同僚が死んでも顔色変えられずに清掃出来るんだよ!?　どうして死亡した大半は研究員だったって事が安堵出来るんだよ！」

てめえ等も妖怪爺いと同類だ！　薄汚くて自分以外の命はカス同然と考えてる魔術師と同じだ！　俺の事だつて管理者つて奴の命令じやなきや野垂れ死にして欲しいって心の中では思ってただろうが！」

指を突きつけて上司であるユメカを詰る。相手が自分に今まで一番気にかけてたであろう存在であろうと関係ない。憤怒のままに彼は声を荒げ続ける。

対して、彼女はその罵声の嵐に対し眉一つ上げず表情を変えない。ただ、真つ直ぐに彼の言葉を微動だにせず受け止め続ける。暫くして息を切らしながら鶴野は告げる。

「……はーっ！　はーっ。何だよ、その目は!?　何も言い返せないって事は凶星つて事なんだろうがっ」

「ええ、そうですね。ツルノ　貴方の言う通り我々全員人でなしです。階級が一番低い人員がどれ程損失しても、業務に差し障りないなら関係ありません」

その言葉に、目尻をこれでもかと言わんばかりに上げ睨みつける眼光に対し怯む様子を一片もなく、淡々と彼女は言葉を、でも、と前置きしつつ告げる。

「私達には、こうして生きるしか術が無いんです。どう感じようとも、私達が此処で生きていく為にはこうするしか」

それと共に、真つ直ぐな眼差しと共に其の声色には彼の耳の中を通り抜ける中には嘘を感じられるままに声は続く。

「それと言いついしか聞こえないと思いますが。ツルノ、貴方に死んで欲しい等とは思っていませんよ」

Mr. ブラック、ギムデリ、アラン、チャン、ミン、ビネア、ペス

カ、イエティ……と職員の名をつらづらと挙げ。彼、彼女達は決してそんな事を望まないと諫める口調を告げても今の鶴野には効果はない、却って胸の中で燦る火が更に力を高まりかけるだけだ。

また再度、口を開いて罵詈雑言を上げかけたのを止めたのは第三者である研究員や職員の声でも無い。一つのトランペットのような警報アラームである。

興奮の中に恐怖の声を入り交ぜて、またかよと呻き声を上げる彼に對し。幾分焦った声で彼女は呟く。

「いけないっ、まだエネルギー回収の目標値が届いてないし私の新しい装備は支給されてないのにつ」

「くそ、本当にこのイカレた場所は一息つかせる暇すら与えてくれねえな」

そのトランペットの音は不幸か幸か喧嘩を収め、各々の持つてる武器を構え通路へと這い出す怪物達の鎮圧作業へ収束させる。

決して仲直りした訳でない。ただ何度も似た警報を体感すれば否応なしに生きる執念は人一倍ある男は最もその場で最適な行動に適應するだけの事。

未だ冷めない、何処に発散して良いのか分からない内包する激情を好都合とばかりに歯を強く噛み締めつつ出現した鉄屑の怪物へ向けて乱射する。

「ツルノっ、落ち着いて周囲を確認して自身の安全を確保しながら撃たないと……」

「うるせえ！ 指図すんじゃねえ!!」

間桐 鶴野は荒れている。生きてきて30年程の間、ここまで感情を露わにする事は今までなかった。いや、開放出来る場所が存在しなかったと言うほうが正しい。

物心ついた時から、自分と同じように陰鬱な顔をした実父の奥では何時も好々爺とした被り物の怪物にずっと観察され、父と同じく家で見立たず生き伸びる処世術。

そんな中で、喜怒哀楽をまともに出す事など出来る筈なかった。癩癩もどきを覗かせた事は子供の頃あっても、直ぐ妖怪の姿を認めれば

意気消沈となっていた。

その憤懣遣る瀬無さを全てぶつけんと言わんばかりに彼は手の痛みなど感じぬ程に何発撃ったかわからぬままに

奥から行進する細長い殺人人人形へ弾丸を浴びせる。

けれども、怒りだけで全ては解決など出来ない。そう言わんばかりに突如、彼の放つ銃撃と異なる連続した破碎音とロボットを巻き込んで肩と片方の足に鈍く重い痛みが流れを変えた。

突然の激痛に拳銃を零れ落として尻もちをつく。何が起きたのかわからず茫然として通路の奥を見遣って、床を小さく振動させながら前身する物体を見て眩く。

「畜生ッ。化け物が 化け物がッ そんなに俺の事を殺してえか」

闇の奥から赤いヘッドライトのような光源が最初に覗かせ、その全貌を明らかにすると今まで撃って機能を停止させていたロボットの群れと形状が異なる物体が

軽い地響きを立ち成らせながら前身してきた。片方は簡単に人間の肉をミンチに引き裂けるであろう丸鋸、もう片方は鶴野の肩と足を貫かせた元凶たるマシンガンアームだ。

「新緑の白昼まで出てくるなんてっ。やっぱり、今までのパターンが通用しなくなっている！ ツルノ、早く起きてっ」

「うる……せえー！」

差し伸べられた手を、大きく柏手の鳴るように叩き払う。駄々をこねた子供のようにでありながらも其の顔は怒りや幾多の悔恨を掻き混ぜた表現出来ぬ顔付だ。

自分の事なんて構わず逃げれば良い。死にたい訳ではない、自己犠牲を望んでいるわけでもない。それでも誰かの手を借りてまで生きたいとも思えない。

ただ、嫌気が差していた。生まれてきた半生が歪で平々凡々とした普通の幸福と言うものが知れず、恐怖に操られ遠坂の娘を拷問した事。それ以前の記憶に蓋にしている忌まわしい全て。

あの研究員達の死は、押し込めていた鬱屈を噴出させる切っ掛けであつたに過ぎない。間桐 鶴野は迫りくる処刑台となる鉄屑の化け

物を睨みながら固まっている。

(もう、うんざりだつ。もういいだろ 俺の人生なんて妖怪爺の傀儡として一生終える以外でまともに死ねる筈が本来存在しねえんだ)

自分自身が臆病者で卑怯者で、現実を直視出来ないろくでなしだと。そんな事は自分自身が一番理解してる。それでも、未だ何を自分は願っていたと言うのか。

本当に自分が真つ当に生きられるとでも? 馬鹿馬鹿しい、そう客観的に自身を冷笑し嘲りを向けてる間にも目前に一定の駆動音と刃を回転させる音が響く。

(疲れた……ああ、疲れた。ひと思いに楽にしてくれ)

目を閉じる。そうすると、より明瞭に今から体を断罪し真つ二つにしようとする丸刃の音色が迫るのを感じた。

——ザシユツ!

そら、肉が切れる音。俺も今まで此処で死んでいった奴等と同様に皮膚から臓物を零れだし……? 何で、痛みが無いんだ?

目を開く、そこには機械の塊の赤い一つ目の化け物は見えなかった。

代わりに見えたのは。背中まで伸びた髪の毛と、片腕が半分程千切れながらも両腕を広げるように自分を庇う……。

「お まえ。なん で」

直視した現実を認識して、喉が引き裂かれんばかりに鶴野は叫んだ。

「何でッ 俺なんかを庇ってんだよ!」

lobotomy cop 職員のユメカ。そう呼称される彼女は間桐 鶴野を守る為にE.G.Oの武器も防具も身に着けず、ほぼ生身の状態で彼が自力で動かぬ

動けずと認識するや否や即決で肉の盾となるように新緑の白昼の前に立ちはたがった。

それが此処での彼女の役割だからと言われればその通りなものの、それ以外の理由も存在していた。

「貴方を、死なせる訳にはいかないんです。命令だから……とかでな



くて」

ピチャピチャと、半分程度蛇口を回したように流血が落ちてくる切断面の上にある血管を抑えながら彼女は激痛による喘鳴を入り混じりつつ告げる。

「オーケストラの時……助けて、くれたでしょう？　ピエロの時　も。貴方は、貴方が思うよりも。きつと　崇高な事が出来る人な　筈です。いえ、きつと　なれる」

フラフラとしつつ残った腕のみで携行してる自前のオートマチック式の拳銃を肉薄した状態で新緑の鉄の処刑人の目と思しき赤いライトの部分へ乱射する。

だが、そんなものは幻想体で形成された存在である怪物には蚊に刺される程度の煩わしさ以外に効果は無い。

大きな丸鋸の付いた人体惨殺特化の腕を勢いよく横一閃に振るう。それだけで脆弱な人の手首は、五指の一部を空中に舞わせながら、弱い肉体は男の方に倒れこんだ。

「ツル　ノ、に……げ」

鶴野　助け　て

目の前で血に濡れつつ壊れた手を突き出して遠くへ自分を行かせようとする其の姿に、かつて忘れようとしていたおぞましい暗雲の中、置き去りにした女性の声が呼び起こされた。

あの時俺は目を背けて背を晒し何も見ようとしなかった。そして、今もこの女は自分をそうしようと呼び促してる。なら、そうすれば良い。そう望んでいるのだ。

貫かれた足や肩は確かに痛く動き辛い、我慢すれば動けない程ではない。そうだ、またあの時のように……。

「嫌だ」

無意識に零れ出た言葉は、自身の中から漏れ出る言葉や彼女の促しに同時に向けた拒絶の言葉だった。

「嫌だ、もう逃げたくない」

目を睨る彼女の、辛うじて無事な二の腕部分を引きつつ自分のほうに体を寄せる。何の意味もない行為であるとは理解してる。そんな

事をしてても現状は改善しない。

「ツルノ、本当に 私の事なんていいからっ」

「うるせえって言っただろ？ へっ……碌な人生じゃないぜ、結局」  
鼻を掠めるぐらい近くで、どう言う動力で動いてるのかも不明な丸鋸が凄まじい音を鳴らして回転している。

死ぬ そうはつきりと認識してるのに関わらず、不思議と恐怖は存在しなかった。ただ、らしくないとは思いつつも、もし神がいるのならば。

(こいつだけでも、助けてやってくれよッ)

そう祈っても、神は手を差し伸べはしない。全知全能たる主は、愚かしく弱く無力な男が流した一筋の涙が床に落ちた所で何も成しはしない。

そう、神は。

—————シュツツツツ　　ガキイ—————

——ンツツ

「……ふう　間一髪の所だな」

無意識に再度閉じていた瞼は、未だやってこない苦痛と共に聞こえてきた鉄を強く叩くのと地を滑る音と共に聞こえた、何処か聞き覚えある深みのある男の声に恐る恐る目を開く。

「え　お　前」

その目に映る先に有り得ない存在が立っていた。

「安心しろ、今世の主の為　そして我が矜持と魂にかけて　以前見た時と違い、短い槍のみを携えてるが見間違えようがない。

「このディルムッド・オディナ　今宵　この館の無辜の魂を守るべく」

ただ背を向け立つ、それだけでも常人と異なり翡翠のような研ぎ澄まされた気配を宿す、その男は。

「一振りの枝となろう」

茫然と呟いた瞳の中に。今の死と生が隣り合わせな異常な空間であれば随分遙か前に思える陣営との面談の際に居合わせた英霊。ラ

ンサーが降り立っていた。

……時刻はほんの少し前へと遡る。

百貌のハサン。この戦争に招来されたアサシンの群体であり半数はバーサーカーの手に堕ちた者達。それは本来のアサシン陣営のサーヴァントと衝突をした。

最初こそ同じ半身たる存在と戦う事に焦燥あれど、元々バーサーカーに狩られた自分達は武闘派。逃げ延びた同族に競り負ける事は無いだろうと慢心は幾らかあった。

だが、結果は散々たるものだった。ステータスの優劣にそこまで差はないと言えど、謀略に長けている鏡合わせの自身の力量は、あろう事か怪力のスキルを備えるハサンすら

一蹴し得る程に力を持っていた。闘った者達は異口同音に、まるで座より劣化をせぬままに降り立ったかのようだと心中に述べる程に、その力量が一人一人漲っている。

全体が均一的に、何かしらの術によりステータスが底上げされてると理解した百貌の者達は速やかに通信で管理者に報告すると共に撤退に至った。

不幸中の幸いだったのは戦闘能力こそ相手が上回っていても敏捷さは依然と左程変化が見えなかった事。そして、追っ手の彼等が公園内で帰還を待ち受けていた

バーサーカーの彼女を視認するや否や、即座に追撃するのを諦めて引き返してくれた事であろう。そうでなければ全滅も容易に有り得た。

撤退した中で、ライダー陣営を隠れ蓑として逃げた一部を除いては満身創痍なものの脱落者なく戻れたのは思えば奇跡に等しい。それ位、別れた短時間で戦力の差が明確。

「そうか、やはりビナーは『アレ』を躊躇なくサーヴァントに使用しているのか」

我等が、未だ健在である言峰の神父を筆頭に残る我等の異常を。宝具内に帰還した中で見たバーサーカーに報告しても眉一つ動かす事なく予想していたと言わんばかりの眩き。

当然ながら疑問の声を我等の幾人かが投げ掛けても反応は無し。溜息を代わりに落とし、宝具内で再び怪物達を鎮める作業に戻ると言う時であった。

「……あ、お帰りなさいアサシンの皆さん」

腕章もスーツも身に着けない、この宝具内で雑処理を任されてるであろう末端達。その中の見知った一人が泣き腫らしてる様子に、何となしにどうしたかと尋ねる。

「暴走が、また発生して。それで うう……あの娘が」

話すにつれ感情が昂ぶり、泣きながら告げられた内容は。何時もほぼ連れ添っていた知り合いが我等が片割れたる我等と衝突しあつた頃に宝具内で起きた暴走。

深紅にピエロ装束の神出鬼没の化け物によって惨殺されたとの事だった。突然の事態により抵抗する間もなく逃げ遅れ、前の我等が鉄屑のカラクリを退散させた時のように

事が上手くいかなかった。内容とすれば、我等の時代で言えば盗賊共によつて襲われた村々の如く、至つてありふれた悲劇と言えばそれまでの事だ。

だが、そうかと無感情に返す気にもなれなかった。これは我等も使い捨てに近い存在だから共感覚えたからだとは思いたくない。慰めの言葉をたどたどしく掛ける。

そうするだけでも、感極まった様子で抱き着かれた。非弱だ、容易に何時でも首をへし折れる華奢で何の変哲もない婦女子だと人の体温を感じつつ改めて感じられる。

……きつと、我等も狂い始めている。そんな、使い捨ての道具に違いない存在に抱擁された自分が、この見つともなく泣きじやくる女を守りたいと思ひ始めている胸の高鳴りは正気とは程遠い。

狂い始めた我等がポツポツと見え始めた最中に、またあの暴走を報せる法螺貝の音が響く。次は、この目の前の女を傷つけさせないし、

涙は見せない。

そんな決意を嘲笑うかのように、この宝具内の怪物達の暴れ具合は日増し強さが上がってきている。

「チー！ 此度の鉄屑共の動きは前と違い数が尋常で無いぞ!」

「泣き言を吠える暇があるなら武具を振るえ！ それでも我等の一人かっ」

そう発破を我等の一人へ掛けつつ、我等の……そう、我は我等の中で徒手空拳の五指の力が我等の中で突出して強く、その暗殺に長ける事から貫指の名を冠する百貌の一人。

その技前にて、何処からともなく錆び付いた音を獣のように鳴り響かせ現れた鉄の異形へと拳打を浴びせる。僅かに青白い火花を舞わせ、動きの切れが悪くなるのが見えたが

完全には動きを止めきれない。突き出した槍を紙一重飛び退くものの、上手く避け損った代償として魔力で出来た血飛沫が胸板から生まれる。

嫌あ！ と悲鳴が真横から聞こえた。

見遣れば、あの娘だった。助け出さねばと、動いた矢先に一陣の黒い風が横を駆け抜ける。その正体を視認して我等の多くが驚きによつて一瞬硬直した。

泣き黒子と、近寄るだけで肌を粟立つ程の強者の気配と姿は偵察の際に垣間見たランサーに他ならない。何故此処に？ と疑問を感じるのを他所に、理由は不明ながら

本来持ち合わせている二双の槍の内、短槍一本のみで危うく奴等の餌食に掛かりかけた彼女を落ち着き払った様子で助けた当の英雄は。我等の心の内など知らぬと言った調子で口開く。

「アサシン達か。幾らか、この鉄と歯車で出来た魑魅魍魎共は潰した。此処の事を良く知ってるなら、他で一番被害が起こり得る場所を教えしてくれ」

どうやら自分達を今すぐ戦争の定めに従い倒そうとは思って無いらしい言葉に。一瞬返答が遅れたものの望む進路を返すと、短い感謝と共に嵐の如く去っていく。

何故、同盟があつたとは言えバーサーカーの宝具内にランサーが招き入れられたのか。思わぬ手助けにより、鉄屑達の多くが機能停止近く追い込まれ、残りは我等でも

鎮圧は容易となった集団に止めを刺す中で、助けられた子女が蕩けるような目つきを浮かべ向けられた先が。ランサーが駆け抜けた方角である事を知ると苦々しいものが胸を占める。

彼奴の黒子の魅了による影響。それ以外で他意はないのだと頭の中では解つても自身の中をゆっくりと血の巡りのように回る黒い感情は収まらない。

鉄の残骸が動かなくなつた事を確認すると、今もまだ英雄が過ぎ去つた方を熱い視線で見つめる彼女を見て。己の偏狭さがありありと実感されていく。

ああ、そうか……。百の貌の内の一は、その女性に声を掛けるでもなく一人ごちた。

「これが、俺自身の悲しみ 妬み、か」



(体が思うように動かん)

涼し気な表情を顔面に貼り付けつつも飛ぶが如く残像も見えぬ程に動かす足は休ませない。されども、今のランサーは十全の力を出せてない。

このlobotomy coopと謳われた場所に来て。訳も分からぬままに主と其の伴侶の治癒の対価として無辜の農夫とも言える者達に襲い掛からんとする初めて目にする

怪物達を、一振りだけ残された宝具。必滅の黄薔薇(ゲイ・ボウ)で払いながら猛進する傍ら体は見えない鎖が地面と同化してるように重みを纏っている。

(これは、恐らくは結界。サーヴァント及び幻想種を縛り付ける為のものか)

一定の霊基を封じ込める結界陣、それがこの城郭と呼称して良いのか自信は無い通路全体に施されている。進む最中に目に付いた、人で

なくも生前は人であったであろう

使い魔達と共に怪物を討伐していたハサン達の動きを見るに、その封じ込めの力はハサン達を超える程度であれば発動する呪いであるだろうとランサーは判断した。

(この宝具内の中では、俺も満足に宝具を発動する事も叶わないだろうが。逆を言えば、此処で暴れまわる怪物達も外界よりは一段弱体化してる為に、この者達でも防げてるのか)

逃げ惑う者達や、襲い掛かる異形に対し苦戦しながらも果敢に応戦するハサンの戦士達。それと共に近代のスーツを着た者々の中には拮抗するでもなく数体の虫や機械の化け物を

たった一人で圧倒出来る者達も居た。その例外となる者達は、自身の宝具のような幻想の色合いが特出された飾りや武具が印象的であった。

(進んでいく度に、驚嘆する光景が多い。俺がケルトの戦士として成り立ての頃ならば危ういであろう群れに対し腕前は動きを見れば素人同然であるに関わらず屠れている。

すれ違っただけで、まだ確信は持てぬが。恐らくは、あの纏い構えてる奇特な鎧に武具が英霊とも並べる程の力を与えてるのだろう)

戦士として、いずれ機会あれば手合わせしたいと思える面の者も居たし。中には、その宝具の装束あつても苦戦する一部にランサーは発見次第律儀に助けに割って入っていた。

「その者、手伝おう」

成人男性程度の芋虫が徘徊するのを、不思議な形の槍や槌らしき武具で払う幾らか疲弊してる男女に割って入る。その男女の内、一人の反応は自分を見た瞬間劇的に変わった。

「へ？ おわ!? すっごいイケメン！ うわ、チョー有り得ない！

白馬の騎士がマジで現れるとか。あ、連絡先教え……」

「ペスカあ!!」

「いやいや待って待ってってばアラン！ だってイケメンだよ!? 多分ガチのプリンスだって！ アブノーマリテイかも知れないけど、ワンチャン玉の輿有り得る！」

声を掛けたのは早計だったかと、その女性は自分の黒子の魅了に掛かっているのか元から素でこうはしゃいでるのか不明ながらも、尤も自分の苦手なタイプであるのを知り

軽く顔が引きつってきそうなのを無理やり精神を費やし真顔を保たせ、続く連戦で相棒たる長槍が無い事実が先にも待ち受ける戦闘の憂いがあり、拒否される覚悟で頼み込む。

「出来れば、この館を暴れ狂う怪物達を鎮める為にも貴殿の武具を借り受け」

「はいっ どうぞー!」

「ペスカッ、貴方って人はあ!!」

付き添っている同僚であろう理知的な男性は、疲労も相まってか形相で一瞬の躊躇もなく自分の槍を差し出した女性を怒鳴る姿が自身のマスターを重ねてしまい眩暈が一瞬襲う。

そんな幻覚を振り払うように、極めて事務的な口調で礼を述べつつ槍を握ると共に体へ流れた異常な力が手の平をかけ全身に流れてきた事に思わず顔を顰めた。

「ぐっ——ッ?!」

その毒々しさも感じられ、今まで見た事ない『宇宙のような色合いの槍』をしつかりと手の平に掴んだと同時にデイルムツドの頭の中に膨大な量の情報が飛び込んできた。

まず最初に過去の幼少期からフィオナ騎士団になってまでの経緯。妖精王オエングス、海神マナナン・マクリルの面影、グラニーニアとの逃避行の中での他愛なきやりとり。

彼はデイルムツド・オディナであるが、本物のデイルムツド・オディナかと言えば語弊がある。聖杯戦争と言う魔術儀式によって降臨された存在は、座より卸した分霊とも

言うべき、極めて本物に近い紛い物と称しても過言でない。その性格、記憶も本物と同等ながら自身の過去には虫食い穴のように抜けてる部分があるのも実情。

然し、その槍を握った途端に思い起こされた。騎士団の中で過ごした何気ない日々のやりとりや、逃避行の中で自身を射貫くように見て



いた主の形相など。

摩耗して留める程でもない有り触れた日常的一幕に、記憶に留めておくのには辛すぎる事まで。その槍に触れただけでデイルムツドの頭の中に過去の日々がありありと。

（魔槍、か……ッ。だが、この子女に関しては戦闘こそ少ししか見なかったが苦痛を帯びてるような様子は一片も見受けられなかった）

それとも個人差があるのか？ と疑問を擡げる中で。それを全て観察していた存在、コトネのような態度に発言が見て取れるO—O1—92こと今日は恥ずかしがり屋の収納室から抜け出た管理者は、ラッサーの身に起こった出来事を冷静に分析し終えていた。

傍らでは、少し居心地悪さを感じさせながら様々な通路及び支部の広間や怪物達の収納している部屋を収める複数の画面と共に、管理人の横顔を見比べつつマスターの雁夜も傍に居る。鼻が麻痺しかけるコーヒーの香りが満ちる空間で、デイルムツトが淡く紫焰の輝きを発する槍を見た上で管理者は口開く。

「この冬木市に存在する大型ツール。英霊は現代の信仰と星の霊脈によって形成された存在、謂わば幻想で形成されてるからこそE・G・O Weaponの影響も直接受ける」

その眩きは振り向く先でコーヒーを啜る男性に体が向くと一段階低い声となった。

「ケセド。君はこうなる事を予期しながら、何故この時代のアブノーマリテイをlobotomy coopの中に招いた？」

委縮しかねない冷たさを感じない口調で、煎られた器に顔を離れた彼の顔は普段通りの平常さだけ覗かせ彼女に朗らかな調子で返す。

「遅かれ早かれ、このcoop内の暴走は今いる職員達じゃ鎮圧も難しくなる。何より、既にアサシン達って言う前例があるじゃないか」  
「アレ等はアブノーマリテイであるが危険レベルはTETH、最高でHEを上回る事はない。それに質問を逸らさないで貰いたい。私が言いたいのは許可もなく未知数の存在を独断で招き入れた事だ。ラッサーのマスターを治療する事はともかく、あのアブノーマリテイは外界で待機を命ずれば済む話だった」

その質問に即答するでもなく、黒い液体を半分ほど喉へと落として一頻り満足感を得た彼は。気さくさと少々読めないポーカーフェイスを交えて管理人に答えの続きを諭す。

「あの槍の英霊って言う存在が、ご主人様はちゃんと見えない場所で治療しています。大人しく鉄仮面な管理人の隣で置物のように待機してくださいね。」

そう言っただけで納得してくれると思うか？ 少なくとも俺はそう思えなかったから此処に招き入れた。アサシンって言う群体よりは順応に制御もしやすそうだったからな」

「余りにも早計だケセド。君らしくない。幾つもの不安定要素が散りばめられてるのを認識しつつ、そんな博打を何時から好むようになった」

会話の調子は早くも遅くもなく、どちらも喜怒哀楽を秘めてるようには思えないのに室内の空気が1℃か2℃下がってきているのは自分の体の調子が悪いからだとは雁夜には思えなかった。唾を少し飲み込み、意を決して二人の会話に割り込む。

「あの、今は通路の職員達を助けるのを優先すべきじゃないのかな」

その提案に二人が過敏に反応する事もないし会話の異物と感ずる様子も見受けられない。ただ自身には、かなり長く感じる間が過ぎた後、サーヴァントの黒髪の彼女は短く了承を唱えた。

「そうだな。なら、この話は次にしよう」

「仰せの通りに。けど、ゆっくりで良いですよ」

浮かべた微かな笑みが、どう言っただけで真意を伴っているのかは不明だ。だがケセドと言う此処のセフィラと言う重要職だろう人物は潔く退室して管理人の彼女は残った。

冷えていた空気が幾らか元の状態に戻ったのをホッと密かに一息つけば、雁夜、と脈絡なく声を掛けられ肩を軽く揺らしつつ僅かに裏返った声で返事をする。

「あの画面が見えるな？ あそこに映る、二人の男女を」

指した方角へ目を向ける。其処には(何故アニメ画調なのか不明ながら)言われた通りの通路に血溜まりらしき所で座り込む顔色悪い青

髪の男と、心配そうな表情が

模られた灰色にも見える長髪の女性が肩を揺さぶるような体勢で映っていた。それが何か？ と無言で指し示した彼女へ顔を向き直す、僅かに眉を片方上げられた。

「君達の事情は、大まかに把握はしてるが。君の兄で唯一の血縁だろう？ 多少は気にかけてあげないのか」

何だそんな事かと、尋ねられた事に呆れや彼女の意外な質問に内心面を食らうものの首を緩やかに振って告げる。

「俺や、鶴野には。普通の兄弟見たいな絆とか、そう言ったものは存在しないんだ。あいつが何で未だに間桐の家に住んでいるのかだって良く知らない」

何故、この今も通路で怪物達が蔓延るのを鎮圧指示する彼女が。既に戸籍上以外は何の繋がりもない兄の事なんて聞いてきているのか全く意図がわからない。

そんな彼に、何らかの手段で職員達に指示を下してるらしく。指が残像見える速度でホログラムのようなSFでしか見た事ない宙に浮かぶディスプレイのようなものに打ち込む動作を駆使しつつ、その打ち込む画面には全く視線をくれる事もなく。何時まで経っても慣れる事のない透き通る視線は自分へと向け続けている。

「私から告げるのは吝かだがね。彼、鶴野も君と会話する意思が無いので代弁するが。間桐 鶴野は君に対し恨みを持ち合わせている。君が、間桐と言う家を出奔して間桐 臓硯の傀儡となる対象が己一人のみになった事。

重圧、責務、執心。そう言ったヘイト感情が分散される事なく自分のみに注がれる原因になったのは君が直接の原因だったと彼は考えられているんだよ」

責任を追及してると言う感じでは無かった。そもそも、このサーヴァントは知り合ってから今に至るまで激昂なり感情を荒げると言った様子は見た事ない。静かな仮面に噴火する前のような荒れ狂う感情が仄かに感じる事もあるが、終始こういった淡々と記録を読み上げるように他人事と言う感じで謡うだけだ。

「それを言われても、俺にどうすればいいって……。今更あいつに謝罪でもしろと？」

「形式上の謝罪をしても逆効果だろうな。ただ、それ以外に交流をすべき等ではと思っただよ。これから先もずっと互いの意思を確認しないまま断絶した関係が続けていけば、最終的に手遅れになる。それなら駄目元かも知れないが、文書なり別のやり方でアプローチをして自身の意識を感じさせるべきだとね」

「なんだが本心からの言い方だね」

その説明は先程までの説明と違い、何だか以前の体験から来るような迫真めいた調子に聞こえた。追及こそしないが、その言葉を頭の中で回し。別にそれをした所で

自分の目的に何か差し障りが無いとも納得し、時間が許されるならば鶴野に対し一筆したためるのも良いのかも知れないと思った。そんな思考の最中でも無意識に

眺めていた通路で快進撃を行い様々な通路であわや怪物に喰われたかけた職員達を助けるランサーを認めて、彼は重要な事を思い出して話を変えて質問する。

「いや、そんな事よりもランサーのマスター達は大丈夫なのかい？」

キャスターの工房、もとい今まで間桐の負の凝縮ともいった地下の蟲蔵が一瞬霞む程のおぞましい場所を脱け出た後もケセドの意思が操る管理人と自身はライダー達の宝具で

殆どの手遅れな子供達の亡骸を彼等の流儀で弔い清めた後に、険しい顔のライダーと沈鬱な歳若いマスター。そして彼にしがみつくように居座る謎の少女。

この惨劇に自己防衛として精神を崩壊させ生き延びていた子供達は、バーサーカーの鎮静弾によって眠りにつかされ、宝具内のメデイカルルームに一時的に据えられた。

後は教会なりに届け出て、彼等の魔術操作によって今回の件は何も知らず家族共々暗示でずっと家で過ごしていたと言う具合になるだろうと言われたのが

この戦争終了後も、思い出すだけで胸糞悪い出来事の中で唯一の朗

報と言っても良い。雨の降りしきる中、唐突に空を駆けていたライダーは頭を強く掻いて眩く。

「ううむ、本当ならば今宵にでも何処ぞの酒店に押しやり。お主たちやセイバー等もひっくりくるめて酒盛りとでもしてパーツと気分を晴らしたかったが」

この雨ではなあ、と至極残念そうにライダーは天を仰ぐ。今夜一杯は、このバケツを引つ繰り返すように激しい雨が途切れる事は無いだろう。

「仕方がない。宴に関しては明日に回す事にしようではないか！  
バーサーカーに、そのマスターよ！ 明日の晩、余はセイバー達の城にて宴を開く！」

是非とも、お主たちも参ぜよ！ そう返答の合否を聞く事もなく、雨に紛れて稲光を宝具の牛の蹄から発しながら去っていった。その破天荒振りとは、急加速した際の

Gに白目を向いてライダーにしがみつくようにして飛び去ったマスターには、仮想敵には違いないのだが。ほんの少しだけ憐憫と共感を雁夜は覚えてしまった。

教会近くに置いてかれたバーサーカーと彼は、少しだけ豪雨の中で雷鳴を発していく方角を無言で見送っていたが、直ぐに管理人は複数の職員を召喚させ

未だ意識を戻さない子供達も続けて出現させ、彼女に抱えさせ教会に向かうように指示を下す。そして雁夜に向き直り眩いた。

「さて、子供達の保護とキャスターの起こした事柄はあいつ達に任せとけば良い。このまま、ランサー陣営のほうに向かおうか」

恐らく、面白い事になってるだろうからな。その意味深な言葉がどういった未来を見据えての発言だったかは、宝具内に戻り少しだけ一休憩を入れようやく理解に至れたのだ。

ずぶ濡れになりつつ、痙攣が微かに見られつつ担架によって運び込まれたケイネスと伴侶のソラウ。同盟相手とは言え嫌悪の対象である魔術師二人の状態を見て。

時臣に対して程では無いが自身と相性合わないと感じるものの、

昏睡し脈は低く生きるか死ぬかと言われれば彼とて多少は心配も抱く。

「魔術回路と言えるものは大丈夫です。ただ、頭部の骨に強い圧迫の痕跡が見られます」

治療にあたる職員の報告を聞き、何故そんな負傷が出来たか聞けば。その職員は難しそうな表情を浮かべ、少し間を置いてから開いた言葉は印象深かった。

「外部から意図的に相手の脳から情報を読み取ろうとした場合に起き得る確率が高いものでした。脳自体に大きな傷が出来た訳でないので、意識は回復するでしょうが……」

続きの内容は不穏であった事を思い返すものの、雁夜には彼等に出来る事はない。その直後に喧しく警報が鳴り響き、今に至る。

管理人は、細かな伝達を全支部の職員達へ送信しながら雁夜の安否の有無に簡潔に返答する。

「少なくとも蘇生に問題は起きない。I o b b o t o m y c o o p の医療技術は他の翼と遜色なく四肢が切断するような重傷でも完治させる事は可能だからな」

「そうか……なら、良いんだが」

君は、大丈夫なのかい？ そう言葉が続ける勇氣は今抱けなかった。

暴走がこの宝具内で起きてから、数分後に司令室であるこの部屋でどう行動しておけばいいのか落ち着きない自分の前に現れた彼女は普段と変わらない真顔ながらも。その全身から最初に邂逅した時に、臓硯と対峙した時にでも感じたのと同等の底冷えする怒りの零度を放射しつつ現れた時は一瞬息を吸うのが難しかった。

今はその気配は無く落ち着いているが、その原因を追究するのは直感が止めておくと囁いている。それに、今は会話する余裕は無さそうだ。状況は秒毎に変化が起きている。

『管理人ツ、メディカルルームでMr. アーチボルトが意識を……ッ』  
『管理人！ T—05—41のクリフトカウンターが減少、脱走しますっ』

「ランサーのマスターが目を覚ましたのは良いとして。次の焦り声の報告って?」

「T-05-41、通称オールアラウンドヘルパー 清掃用ロボット」  
いや、この会社内に関しては人間、怪物特化の清掃ロボットか。と物騒な言葉に、不安気な色を一層と濃くしてランサーが進む先で収容室から飛び出した一体の怪物に目を向けた。

「……ムッ」

幾多の怪物を屠ったか。自身と同じ程度の人を喰らう芋虫に鉄の槍や鋭利な丸鋸に近代の火器を担うゴーレムを自身の宝具たる短槍と。このバーサーカーの宝具で形成された幾多の神秘を閉じ込める牢獄の中で、怪物退治を請け負う使い魔達の一人から譲渡された魔槍と共に突き刺し、薙ぎ払い、時に己の五体を扱って死屍累々としてきた英霊の顔付きに鋭さが増す。

今までと違う。今まで屠って来た魑魅魍魎の類とは一味違う怪物が通路の奥からこちらへと接近しようとしている!

緊張と強敵との相対への昂ぶりで強まる闘気を大きく呼吸を整え体勢低く構えれば、その感じ取った威圧感の正体が姿を現した。僅かに、その姿と形に片眉を吊り上げ呟く。

「ほう、今宵の己の怪物退治はことごとくカラクリ仕掛けと縁があるようだな」

それは見た目白い楕円に、愛嬌を感じさせる赤い目と思えるパーツに笑顔を模したマーク。そして金属製の脚部らしいものが付いていた。

此処が怪物共が蔓延る場所で無ければ、まだ愛らしい自動人形と言われても納得しただろうがランサーの意識に油断は微塵も存在しない。警戒の中、その姿は形を変える。

脚部と思えた金属の飛び出た部分と反対の白い楕円の端からウイーンと言う音が流れながら腕と足を彷彿とした接続部分が蜘蛛の足を連想させ天井と通路両端に届く程に伸びる。

そして完全に伸び切ったと思った矢先、その脚部の先端に取り付け

られたものが怪物の真の姿を露呈させる。先端から折り畳まれていた鋭い刃先が、殺意が姿を見せたのだ。

キィィ——インツッ

四本の金属腕は兆しすら見せぬままに突如上に、下へと回り始めた。その加速は十秒にも満たぬ中で暴風を受ける風車よりも激しく残像を甍し回り始める。アームの先の刃が、自身の槍でも容易に傷付けない床と壁に触れる度に鼓膜へと襲い掛かる金属特有の接触音が鉄で合成された怪物の凶暴性の高さを更に暗示させた。

その勢いのままにランサーへ迫った。無防備に受ければ自身の五体がどうなるかなど明白の理、槍を十字の形に構えつつ、ランサーは疾ツと唱え白い球形の魔物に突進する。

通路の真ん中で交差させた槍と刃の嵐を展開する四本腕が火花を放ちながら衝突し合う。ランサーは打ち合った瞬間には、僅かに足が衝撃で摺り下がったものの両腕の血管を浮き上がらせ、一喝を自分自身に向けて腹に力を込めて押せば。逆にその白い球体の機械がほんの僅かに後ろへと退ける。英霊と白い清掃機械の押し比べだ。

言葉で表せば可愛らしいが、件の当事者には微笑む程の余裕はない。この宝具内が一定の霊各を持つ存在の力を抑え込む術式、連戦と自身の精神を貪ろうとする魔槍。

自身に降りかかる悪条件が、この白い鉄の殺戮人形を優勢としている。自身の宝具か借りた魔の槍が破壊されれば、即座に今も鼓膜を震わす金属の唸りが終止符を打つ。

(それに、この先へこの怪物を進ませるのは……とても不味い！)

助けた者達の職員の一部が、謝罪の言葉と共に齎された情報は重要な事柄だった。今は暴走の為に封鎖されてるがこの通路周辺にはメデイカルルーム直通の扉もある。

つまり、今も生死の間を彷徨ってるであろう今の主が治療受ける部屋に怪物が辿り着ける可能性もあるのだ。それに自身の後ろでも助けられ未だ動けない職員達が数人

佇んでいる事であろう。負傷で満足には動けず、戦いも出来ない者達が殺戮の為だけに産み出されたような目の前の白き化け物に対処



する術などある筈が無い。

(そう、私しか居ないのだ。私が倒れば、あの者達の命運もマスターの命さえもつ)

デイルムツドは英雄だ。正しく、この謀略と我欲が入り混じる戦争の中では1、2を争う正騎士なのだ。無辜なる命、忠誠を誓うマスター。その二つの運命が自身の背にある。

それだけで命を賭ける理由は十二分であった。握りしめる槍に更に自身の力を注ぎこむ、目の前の未知の金属で構成された荒れ狂う合金の刃の魔物を討つ為だけに。

瞬間、槍が啼いた。正確に言えば、毒々しい宇宙の色合いをした槍のほうが今まで耐えていた許容値を超えて己の体に力を逆流させたと言う説明が正しい。

ランサーは堪らず呻き声を一瞬発した。記憶が注ぎ込まれる、古の神代の父母や連なる者達の顔、更には己の死に際に命の水を与えるのを躊躇った主の複雑な眼差し。

それに……この情景は何だ？ 車椅子と言われる座具へとまともでない状態と様子で力なく座る男性、血まみれでその者に抱えられる女性。己がセイバーと尋常に勝負した

廃病院跡の風景と似通った場所で、場面が少し移り変わったかと思えば抱えられた女性は胸に大きく銃創を受けて倒れ、同様に男も椅子から投げ出され、その顔が明瞭になった。

(あ………るじ?)

その顔は、今まで見た主よりも生気を薄れ何処まで苦痛や絶望を受けなければこうなるのかと思える程に凄惨な表情を浮かべていた。口の動きから、殺してくれとの呟きが

無音にも関わらずランサーには直ぐ傍で聞いているように耳に響いた。そして、少しの間の後に煌く白刃が今代の主の首を一閃し、その命を絶った。

何だ、この映像は？ これは、もしかや未来だとも言うのか？

目にしただけでは自身は其の風景にいなかった。されども、魔槍が見せる只の安い揺さぶりと言うには嫌にその光景には安易に否定さ

せない現実味が充満していた。

何故、自身がそんな光景を見せつけられてるのか。疑問を氷解させる間もないままに次に脳へ直接叩き込むように音が響いた。いや、音なんて言う生易しいものでもない。

何かが唄うような、音階が伴っているような重複した悲鳴や破壊音にも聞こえる。それは聞く者にとって幾らでも無限に変化する未知なるモノからの音色だった。

これは聞いてはいけない。この音は 唄に耳を傾けてはいけない。これは人類が、英霊を決して向かつてはいけない場所へと引き摺り込もうとする魔の吠え声だ。

その掻き乱される意識を、呼び覚ましたのは皮肉にも目前で壮絶な金属を振り回し自分を細切れにしようとする怪物の駆動音だった。見えた幻視から目覚めた時間は

一瞬にも満たなかった筈だが、不気味な笑みのマークは先程よりもより近くに迫っている。そして、自身の盾とした槍は、不安な軋みを中央から発していた。

槍が、折れる……このままでは！

二本の槍全てに力を込めても鏑迫り合いなのだ、一本折れればどうなるか。短槍に意識を向ければ、ほんの僅かにだが亀裂が出来てるように見えた。

駄目だ……もうっ。

『Fervor, mei, san

guis (滾れ、我が血潮)』

短くも鋭い矢の如し詠唱が背後から轟いた。それと共に、肩を超えるように一筋の翠色の粒子を纏った光弾が刃の嵐を抜けて、その怪物の頭部の片目へ着弾した。

威力としては英霊を怯ませる程度で深い傷を残すような威力では無い。然しながら意識外の攻撃は怪物も予想外であったらしくランサーは好機とばかりに魔槍を

掛け声と同時に腰を捻り、最大加速と威力を込めて突き放った。

その愛らしい顔と思える部分を魔槍が突き刺さり火花が散る。魔

槍を手放したランサーの首に、その真白から伸びる金属腕の一つに付属された刃が首の皮一枚まで

勢いよく伸びていたものの、ランサーは顔色一つ変えず動く事は無かった。その死の鎌が己の首に振りぬかれる事はないと長年の闘争による培った勘が囁いていたから。

予見通り、その金属腕の刃はデイルムットの首に傷を作る事もなくギリギリの所で停止すると。そのまま緩やかに四本のアームは清掃機械のボディであり頭部の中心に収まった。

微かに破壊寸前の機械のように痙攣していたアブノーマリテイは。その視線をランサーに向けたまま、何も発する事のないままに光となくなって消失し、そして収容室へと

暴走など最初から無かったかのような姿形のままだに再発現する。lobotomy coopの中では特に驚く事もない、何時までも終わらない悪夢のようだが事実である現象。

一瞬ランサーには、誰が援護をしたのかを理解しなかった。召喚され、普段良く耳にする声に関わらずも其の人物が己に対し打算抜きで助けなどしないと直感してたからだろう。

振り返ると、そこには遅ればせながら聞き親しんだ人物が自身を助けてくれたと認める。普段通りの片手の指で側頭部を叩きながら、怪物を誅罰する時に用いたのであろう

妖精の羽のようなものを冠した、今しがた怪物に命中したエメラルドの光を強く放つ杖らしきものを見分するような仕草で自分を胡乱気にも見る姿。

それは正しく我が主たるケイネス・エルメロイ・アーチボルトだ！  
「主ッ……い・良くぞ御無事でしたっ。冷たき地に意識なく横たえてた時は息も止まる心地でしたがバーサーカー達は約定を守り救ってくださいだったのですね。」

それに、我が劣勢を見抜き明敏なる一撃の一助！ このランサーっ、主の想いに恐悦至極の至り……」

駆け付け跪き、今の心境を古くからの慣わしに則って述べる。今の今まで伴侶の妻の魅了なりで起きてた亀裂も解く事がようやく叶え

られたと喜びに浸りつつ。

「——黙れ」

だが、返された声は何処までも召喚時と同じ、いやそれよりも遙かに冷たく。

「貴様のような者など私は知らん。ただ自身と我が妻の危機が迫っていると告げられ、貴族の名のままに降りかかる火の粉を振り払ったに過ぎん——お前は何者だ？」

眼差しは、何処までも疑心と敵愾心。親の仇か、報復する対象を見詰めるような眼差しを知ってデイルムッドは感謝の口上を止め、何も言えなくなつた。

何故、主はこうまで変心……否、以前よりも自身に辛辣な態度をとるのか全く意味が不明な彼に対し。熱も冷たさも持たない声が届く。「彼、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは逆向性健忘……聖杯戦争開始からの記憶が無いのだよ。その妻も同様にな」

通路から定期的に聞こえたアラートが収まると共に、現れたバーサーカーと落ち着かない様子で護衛の職員らしきものと同伴してるソラウ夫人。

一見、怪我なく普段と変わらない様子のマスターの妻の姿に安堵を浮かべる暇もなく。自身を覚えてないと言う言葉にランサーは愕然とする。

「……管理人。ホテルで在留してるゲブラー様にホド様と通信が不能に」

「キャスター陣営か……すぐ向かおう」

バーサーカーと職員の会話を耳に流しながら茫然自失のデイルムットには、忌々しく己と辺りを警戒しているマスターを見詰める以外に術は無かつた。



軽い浮遊感と共に、言峰 綺礼はあの日の事を回想する。

普段と変わりなく礼拝と教会に訪れる者達への悩み、父との他愛ない報連相と師父たる時臣との聖杯開始以前の取り決め。日中は特に己の価値観が一変する予兆など

何一つ在りはしなかった。神の啓示を受けた者達も、私と同じように前触れはなく大いなる存在との出逢いは誰もがそんな突如の出逢いだったのだろう。

ただ一つ変化があるとすれば、この冬木市で聖杯が顕現する兆しの一つとして市井に大きな影響ないとして下級の妖魔が夕暮れ時に差し掛かり結界に多数見咎めた事。

それも変化、と言うには大きな歪では無かった。聖杯戦争と言う大規模な魔術儀式で霊脈が活性化するのならば魔が誘われるのも自然な事。

教会の者として、代行者としての義務として父の命を受け粛々とその日も一振りの黒鍵で機械的に妖魔を駆除する為に闇夜へ出た……そんな折に、あの者と出会ったのだ。

美しい月が照りつける外人墓地に差し掛かり、ようやく不自然さに気づいた。無差別に闇に紛れ人の精気を奪う下等な魔が導かれるように一定の方角へ進む。

それと共に、自分の頭に聞こえてくる……音色、なのだろうか？それより相応しい言語があるとすれば信号。救難信号とも呼べる世界共通の信号に似たノイズが

頭の中へと届く。それは奇しくも妖魔達が集まっていく外人墓地のほうであった。この時点で己には二つの選択肢があった。不吉と感じ撤退するか、究明の為に前身か。

私は後者を選んだ。朧月のような光の下で、その者は墓石を仏罰も知らぬ存ぜぬとばかりに椅子代わりとし春の陽だまりで茶会でもするような穏やかさを身に着けていた。

然し、辺りには陽射しと共に溶けるであろうとも鼻を覆わなければならぬ程の魔の血が絨毯のように茶会の主人を中心に広がる。そして、異質であるにも関わらず

綺礼の目には、とても自然で何て事のない動作で。その者は恐怖と

興奮を入り交せて突撃した妖魔の首にそつと指を添え、物理的に雑巾を捻じるように搾る。

どのような方法で、魔術の力を感じ取らせる事なく少し指を添えただけで宙に僅かに浮かばせ妖魔の体全体を螺旋状に捻じるなどと言った芸当が出来るのか。

今思い返しても見当つかない。長き代行者としての見聞と勉学の中では超能力と言ったものを稀に備えるものもいるが。彼女の力はずっと遥かに異質なものの。

今まで多くの闇のモノを屠つて来た自分でも聞いた事のないような悲鳴を上げる存在から搾った液体を、牛か何かの骨を器として、彼女は其の凝縮した液体を嚙下していた。

「……やあ、良い月夜だな。異なる世と時の同胞よ」

微かに血化粧を唇から頬にかけ付着させ、先程までのおぞましく魔に対する制裁としても人の所業にはあるまじき非道をした事など感じさせぬまま微笑が向けられる。

本当ならば、この時点で。私が聖職者であり代行者であるなら務めを果たすまでに所持していた黒鍵を全て解き放ち全身全霊を以って討つべきが正しい解であった筈だ。

ただ、アレはとても美しかった。祝福を教会で受けてきた者達や、民衆が絶賛する絵画、山頂より見える絶景等と掛け離れたその地獄絵図に私は感嘆していた。

だから、黒鍵を投擲する為に握っていた手が振り上げられる事は無い。否、あの時私は攻撃すると言う意思や意識さえ抱けなかったのだろう。

歩みを進める度に、靴に当たる紫や黒の血の水音を響かせながら。私が同胞？ と鸚鵡返しに尋ねるのを他所に。彼女は微笑を維持させたまま何も言わなかった。

代わりに、その黒い孔雀のような服の襟元より小石すら大きいと思わせる程に細小の粒らしきものを爪で挟み。それを跳ねる音すら無いまま骨の器の液体へ落とす。

一瞬だったかも知れない、もつと永い光景であったかも。時間の経

過は不確定ながら確かに私は、あの時未だ見ぬ聖杯よりも、更に穢れ更に美しい品を見初めたのだ。

黒鍵を持つ方と反対の手を差し出す、女は自然に裾から茶器に使う小さなスプーンのような器具の鋭い柄の先で己の手の甲を軽く突き、気泡のような赤く芽生えた

血を掬い取ると、その器に更に混ぜ合わせる。己の魂を現すかのように、その禍々しい色合いが鮮やかに黒く彩られるのを見た。

彼女は飲め、と促した覚えは無かったが。ただ、静かにその下等な魔の夥しい存在の根幹となる雫の集まりと何かの異物と己の血の混液が波紋を踊らす器を少しこちらへ

寄せたに過ぎなかった。だが自分が何をすべきかは本能のなすがままに膝を地面につけ、約束の地を目指し飢えと渇きに苦しむ力ナンの民がオアシスに辿り着いたが如く

私は何の拒絶や恐れもないままに口を付け、飲み干した。そして、その時からだ。私は私でなくも新たな私へと至ったのだ。

流れ込んだ激しく駆け巡る視界の裏側の光の嵐の中で、昏い深海の中で開かれた潜水艦の窓から吐き出される洪水の如く勢いで其の映像の激流は脳を溺れさせる。

大火災に包まれる冬木市 蕾から華へと育った遠坂 凛 英

雄王 アイんツベルン 小聖杯 クー・フリーーン

アンリマユ 衛宮 士郎

遙か先の出来事から、今より少し先の出来事まで。私は全てを織つた 私が知る限りの全ての先と私自身が成す大いなる悪と、己自身が何処までも善と相対する者たる事を。

嗚呼、何とも滑稽な。自身の歪みに苦しみ、己の悪に懊悩していた頃が。まだ昔と呼称するには早すぎる先程までの心縛る枷が只の緩やかな帯と言える程に愉悦が満ちる。

真理を会得すると言う事が、これ程に嗤えるとは！ これ程までに人と言う者が長き修練と悟りの長く永き道を辿らずとも、私のような悪そのものが答えを得ると言うのか！

飲み干し、全てを理解した私は一変しきつた世界の中で改めて彼女

を見た。悪魔であろう存在も、その雫を喉より通り越した瞬間には天使のように感じ取れた。

「理解したか」

小首を曲げ、その全てを吸い込むような瞳を見詰め返し私は告げる。

「ああ 全てを」

力強い祝詞を、彼女は意味深に瞼を閉じて顎を微かに上下に揺らし。再度開いた目には蠱惑な色を灯らせながら生き物の音が不気味に発せられる程の静寂で、その声は轟いた。

「ならば、始めよう。お前と、私の ——この小さき帳に紡ぐ反逆の脚本を」

チン……ツ。

目を開く。回想から目覚めた先では開ききった自動ドアが自分が下りるのを無機質に待ち受けており、その奥に立つ人影を見て僅かに口の端を弧の形で上向きに吊り上げ

足を踏み出す。ドアが閉まり切った時には、その腕を組んで苛立ったようなポーズをするソラウ・ヌアザレ・ソフィアりと黒鍵が届く間合い程まで距離は縮まっていた。

僅かな沈黙の後、綺礼は耐えきれぬとばかりに喉を鳴らし冷笑の表情で顔を崩した。対し、ケイネスの伴侶を模っていた存在は、表情を苛立ちから無に変え変身を解除する。

「この国風に言えば、千慮の一失か？」

「いや、君にそんな遊び心があると予想外な故にな」

ソラウの模倣に失点があった故の笑いかと尋ねるビナーへと、緩やかに左右へ首を振り綺礼は冷笑の形を苦笑に移り変えて返答する。

そうか、と短く返し。セフィラの背信、いや元よりI o b o t o m y c o o pで最大の敵は彼を促し元ランサー陣営の拠点の一室へと招き入れる。其処には、既に寛いでいる

フランチェスカと、少し積み重なった魔術礼装を影にするように小さな羽と歯を鳴らすような鬨ぎ合う音を立てる無数の蟲と言える塊が綺礼の目に映った。



「集まった諸君等へと、これが収穫だ」

この戦争の暗躍の一団の最後の一人が座るのを見届け、仲間意識は皆無ながらも私利私欲と目的の為に一時共闘を選んだ者達を見据えてビナーは二つの品を取り出す。

ケイネス・エルメロイ・アーチボルトより奪い取った時計塔の未来で名を遺すであろう最高魔術礼装の月ヴォールメン・ハイドラグラム 霊 髓 液

ランサーことデイルムツドの宝具の一振り、魔術・魔力で構成された物を断ち切る破魔ゲイ、ジャルグの紅薔薇である。

「ふんっ……時計塔の学者崩れの玩具と、ランサーの宝具一振りだけか」

「あらっ、キエフってば功業を成せなくて拗ねてるのかしら？ 今の今まで面目躍如はおろか、あのバーサーカーの玩具箱の煤人形にこっ酷く火傷されてから汚名挽回がなーんも出来ないものねー」

あくまで目的が争い合うよりも手を組むほうが得であると言うだけで、本来犬猿よりも仲悪い旧くからの魔術師達は、一人は煽り一人は威嚇の歯軋りを発する。

雁夜が呼び出した狂いし戦士の手に掛かり、核こそ無傷なもの多くの衣を損失した今の臍硯は魂喰いをひっそり行うのもリスクがある為に、人の形を崩した上で

この舞台上で落ち着きなく蠢いている。魔術、サーヴァント等の戦力、どれをとつてもこの中で一番今のところ自身が下である事実は屈辱でしかない。

そんな老獪の魔術師の怒気や殺気を歯牙にかける事もなく、アシンメトリーの短いほうの耳に付けられた骸骨か鍵のような独特の形のイアリングを一度だけ指に這わせつつ卓に置かれた二つの略奪品を滑らせる。

その挙動が、戦利品を獲るのに大きく貢献したのはフランチェスカは自分自身だと思ってるものの、意外にも何も言葉にせず態度のみで好きにそちらで使えと言う仕草に白き髪に髑髏を飾る少女の姿の魔女は僅かに猜疑を込めて言葉を投げた。

「どう言うつもりかしら？ 私も無駄に口論なんて貴方とする気はな

いけれど、好きにランサーの宝具も礼装もこちらで使用させるなんて

永く生きてきた魔術師であり、生存戦略に長けてると自負するからこそ解る。この中で一番得体が知れず危険なのは目の前の落ち着き払った様子はこのビナーと名乗るサーヴァント崩れの女のみ。

聖杯戦争の開催を聞きつけ、キエフに妨害されるのも想定込みで冬木の結界の境界を散策していれば突然その線が崩れ去り。何かの思いがけぬ事故か罠かと考えつつ偵察していれば、それを呼び水の如く自身の影の先より現れたのが目の前の元凶。

その瞬間、自身の得意とする幻影の魔術を放って遁走する手も選べたが、その得意とする手札を切る前にアレを見せられた。魔術師の大半なら目を眩み垂涎として飛びつくであろう根源めいたソレを。

闇と茂みに隠れ、細々と命を啄み襲撃者の目を逃れて潜伏するキエフもどうやってか見つけ。今この戦争の表舞台に登場するのは、本性を曝け出す事も踏まえ終盤まで無い同士四名は工房を乗っ取ったハイアットホテルに居る。

(このホテルを占領した手も中々のペテンであったな)

ロンドンよりわざわざ持参してきたらしいケイネスが秘蔵していたボトルを空け、その芳醇とした香りと液体を口に含みつつフランチェスカとビナーの視線が交錯するのを眺め、口を挟む気は無い事も暗にアピールしつつグラスは下ろさない。

疲弊と負傷で帰還したランサー陣営とバーサーカー陣営がハイアットホテル入り口で見たケイネスとソラウ。あれは確かに綺礼の指示によって変装したハサン達であったものの、あの時は未だケイネスの工房は無事だったのだ。

冷静さを失っていたケイネスと、英霊と言う知識が未だ教本程度しかないバーサーカーであるからこそ通じた手。本当ならハサンがどんなに優れているともケイネスの嚴重に複数の魔術防衛を敷いた工房を乗っ取るとなれば

どれ程に緻密に時間を掛けても、彼が前もって結界の破壊に対しての術式が先に発動して工房が半壊する可能性が高い。だから、あの時

はハサン達を変装させハイアットホテルの高層と一階の中間に位置する場所。

約15階程度。其処から同盟した二つの陣営が帰還したのが入り口を通過するタイミングを見計らい、そしてハサン達が如何にも工房を占領したと言う風に見せ掛けたに過ぎなかったのだ。

後は勝手にバーサーカー達が別の拠点に移るのを見届けた上で、キャスターの凶行と腕の治療で分断したバーサーカー陣営とランサー陣営を確認した後にはランサー陣営を襲撃して、そのマスターの知識を根こそぎ奪い取る。

これによりケイネス・エルメロイ・アーチボルト、ソラウ・ヌアザレ・ソフィアリの記憶に経験と知識を獲得したビナーは。悠々と彼等の力を模倣した後にホテルの工房を今や自身の住処へ変えた……と云うのが事のあらまし。

下手に魔術や異邦から来た彼女の力をひけらかすでもなく、少ない労力で時計塔の天才と知識ならば未来では天才の一人であろう存在を騙したのだ。綺礼にはその事実も悪性に沿って生きる者としては堪らなく愉快だ。

「……小事なのだ」

「なんですって?」

ハイアットホテル占領を思い返し終えた頃に、ビナーは小さくも大きくもないが広い一室に良く通る重圧さを伴った朗々の音を発する。

怪訝な感じで呟くフランチェスカや、多数の疑惑を秘めた蟲の注視も他所に。相棒たる綺礼の目にも合わさる事のない、ととてもとても遠くに目を向け彼女は謳う。

「この奉り事で、100程の影法師達の生き様、騎士の懊悩や怨嗟も、征服の霸道も、英雄達の王の意思。どれ一つ取り上げても小事でしかない。全ては一つの結末へ集約する為の前戯だ」

「異なる七つの音階は、一つの曲を産む。私は再び、あの頃の名のままに『調律』するだけだ……その生業の為には繊細な指でなければならぬ」

理解するには難解な内容。だが否定や追及を避けたくなる説得力

はある。

「ふうん……それじゃあ、貴方が精一杯汗水流して両手で引つ張つて来た棒と瓶は私達に贈って、次は何をするって言うの？」

それに、喜怒哀樂全てが無い仮面のような顔に。少しばかり背筋に悪寒が走るような綻びを口元に貼り付け、彼女は嘯いた。

「——決まっているであろう。美しき音を紡ぐ為には、それ相應の奏者を呼び寄せなければいけぬのだからな」

雨に雷が交じる、電灯をわざと点けぬ室内で調律者の横顔には只一つ、並みならぬ冷たさが浮かぶのを窓の露のみが見ていた。

## 愛の檻

遠い遠い昔の記憶。私が今の私になる前の記憶。

7歳程度の頃。どうして裏路地23区の、臍物なりが辺りに散らばった血まみれの冷たい床に蹲って泣いてたのか何度思い返してもわからない。

それが私の記憶、カーリーと言う名の娘の最初の記憶。

五本指及び連なる組織、何処の馬の骨とも知れぬ事務所に業者、どんなに駆除しても駆除しきれない掃除屋が神出鬼没と夜に蠢く魔境。私の足元を濡らした血が記憶には薄っすらとあるかどうか曖昧な両親か赤の他人のものであったとしても、それを判別するのは今となつては不可能だ。そして、それに未練など無い。

……遠い遠い何処かの、私とは知らぬ誰かの記憶が頭に流れ込む。管理者なら精神汚染だとシャットアウトするのだろうか、その記憶に見える現在の守護をする存在を認めて私は無言で眺める。髪の色が今と異なり瞳に快活さと生気が溢れており、もう一人は姉なのだろう。決してこれから先、不幸など無いと言わんばかりに子犬のように戯れる姉妹の光景。

父と母にも愛されて育つ、都市なら巢の上流階級でしか見られないだろう日常が私の目の前を通り過ぎて行く。血生臭さや暴力に恐怖とは無縁なる情景だ。

それが突如終わりを告げる。私の目の前で、あの幼子は父に怒られてるわけでないが有無言わさぬ調子で少し鼻につく所作と共に別の家の子になる事を告げたのだ。

少女は反抗するには幼過ぎた。今まで温和な父が見せた仄かな冷たい一面が覗いた事を敏感に悟ってただただ芽生えた感情を言葉に出せず口籠るばかり。

父親は、そんな彼女の機敏さを気づかぬままに。自身の価値観の絶対さを疑わぬままに、こう唱えて最愛であつただろう娘との話を終える。

お前の為なのだよ、桜。

場面は移り変わる。一目見るだけで、その存在は駆除すべき都市の伝説か疾病に値する物である事が伺える。だが、何も不思議に思う事なく父親は彼女をソレに引き渡した。

その目は節穴か？　とも思う。然し対面した男とは昵懇の仲らしい。娘の中に秘める苦悩や不安を感じる事のないように、少女には大きい手が置かれた肩に力が籠められ前へと追いやられる。

張り倒してやろうかと手を伸ばしても、それは過去の投影なのは明らかで擦り抜けるばかり。舌打ちと共に、これから起きる事が簡単に想像出来る悲劇に対し無言で腕を組む。

また場面が移り変わった。衣服は全て取り払われ、瞳から光を失くして既に凌辱の限りを尽くし終わったのだろう離れていく異形の蟲達が空いた空間の中心で横たわる六歳程度の娘。

一見すれば死んでるか生きてるか判別出来ず微動だにもしない。近づいて目を凝らし、ようやく微かな口から零れる吐息と上下に動く胸板で未だ生きてる事が証明される。

ただ少なくとも生きてるだけだ。かつての、愛と光で囲まれていた頃の娘には決して戻れない事だけは解る。どう言った魔法や特異点を使おうとも過去の彼女は蘇らない。

——同情などしない。

私の世界では溢れる程、こんな虫唾が走る光景を見てきた。

少なくとも、たかが蟲に体内をまさぐられ破瓜しただけで済んで良かっただろう。命があっただけで十分果報者じゃないかと揶揄する輩とて数ある便利屋は口にする。

もし私がその当事者として。そう馬鹿にするものが居れば感情の動くままに殴り倒すだろうが、それもまた真実ではあると納得はする。

世界が残酷で救いなど無いのだと、物心ついた頃から私は体感していた。いや、私一人でなく裏路地の、裏路地含めて仕切られた壁に住まう大半の人々は悟っていた。

世界そのものが地獄であるからこそ、簡単に人はその手で隣人を傷つける事も殺める事も瞬く間に移ろいゆく時勢の中で汚す事に躊躇

はなかった。

許せなかった。家族と思えた存在が平然と裏切った事も、記憶に残らぬ身内を瞬く間に吐瀉物がまみれる路地の一部へとした存在も。

そんな風に動く事しか出来なくて、それ以外の手段を残さない世界にも。

全て 全て許せず怒りが胸の中にあつた。そして、怒りを秘めて工房の武具を振るって闘い続けても変わらない悲劇に、変えられない無力さに更に怒りは増幅していった。

その感情が一挙に私を満たしたのは、居場所になり得た最後の場所が奴と其の配下によって知り合いも心を許した者も皆殺しにされた時だろう。

幾多の異形と知人の屍が囲む中で、薄ら笑う奴に残った一本の腕の力にあらん限りを込め……それがカーリーの記憶の終着点だ。

私の目の前に光なき虚空を抱き誰とも見る事なく彼方だけを、闇を見詰める娘が見える。

昔、よく食べ物を買って世話してくれて赤の他人であれど信じていた隣人二人に恩を返そうとして金を渡した結果、ハイエナのように豹変した彼等をこの手で殺めたカーリー。

そして魔術師の家の都合と言った理解し難い理由により、最愛の家族と引き離されて怪物同然の存在の手に掛かり身も心も喰いつくされた間桐 桜。

私はこの娘と同じく瞳には虚空が宿っていたのだろうか？ 原初の無力な、血と吐瀉物の大地で蹲っていた時のカーリー。信じてた家族が金によつて人の形をした獣となりかわり、そいつ等を皆殺しにしながらアパートの一室を血で飾り終えた時のカーリーも。

今となつては遠い遠い昔の記憶。心の中にあつた暴虐のような火と共に胸に何を点してたか知る術は無い。

倒れ伏す娘を見つつ、口を開く。

「ずっと、そのままか？」

少女は返事をする事なく、じつと身じろぎする事なく瞳は動かない。

「悔しくないのか。怒らないのか。許さないと思えないのか。お前の家族は、こうなると知っていたかはともかく、お前をその地獄に追いやった者に張本人もだ」

動かず、喋らず、その人形のような目を見下ろし、私はその娘の絶望に構わず言い募る。

「あの化け物に嬲られて諦めてるだけか。仕方がないと思うだけか。お前が立ち上がらなければ、自分の意思で変えようと思わなければ何も変わらない」

「この世界は救いなんて無い。だから——」

・・・ラー、ゲブラーっ。

目が開く、そこには少し心配そうに自分を伺うホドがいた。少し目と閉じて休もうとしてただけだが、どうやら思いの外に意識を深く沈ませてたらしい。

「ホド、どのぐらい私は眠っていた?」

「ほんの数分よ。でも、貴方が警戒態勢の中で転寝するなんて珍しかったから」

何でもなければ良いの、御免なさい起こしちゃって。と気まずそうな同僚に、気にするなと告げつつ視線を奥へ向ければ未だ目を覚ます事のない桜の頭が見える。

管理人が固い顔つきで自身の知り合いである少女と現使い魔となってるアサシン一体が捕獲された事を早々に告げて追跡へ向かってから幾らか時間は経つ。

少なくとも彼女の宝具であり第二の拠点とも言えるcopp内に居る他の同僚とエージェント。内包するアブノーマリテイと言う戦力を考えれば心配はいらない。

数々の劇変により、宝具内のcoppで暴走が起きてるが故に安全な場所は少なくなっている。だからこそ、このラブホテルの一室で自身とホドに数名のエージェントが留守を預かっている。

先程の微睡みの中で見えた景色。あれは只の夢で無い事は明らか



で、この紫の髪の毛の小さな眠り姫の意識が見せた事も理解している。だが、其処からの対応は自分でなく管理人の分野だ。

再度合流した時にでも夢の事を告げるべきだなと、軽く体を解して立ち上がり雨音が未だ激しく叩きつける窓へと近づき……幾らか和らいでいた眉間と口元が引き締まる。

「ホド、今すぐガキを起こせ。それが無理なら直ぐに職員を配置につかせバリゲートが作りやすい室内へと移動しろ」

少し困惑した声が呼びかけた彼女から唱えられる。油断が過ぎると苛立ちは浮かばない、むしろ幾らか彼女の意図しない行動に賞賛の念がある。

「お前が居て助かったよ。らしくない様を見せるって事は、それなりに不吉の前触れだつて事だ」

言いながら自身の片腕を掲げ、その窓縁に向かって殴りつけた。

その思いがけぬ紅蓮の戦士の乱暴に対して、次の瞬間には薄い硝子と格子が砕けるのを予想して反射的にホドは目を瞑るが、何時まで経っても予想の音は耳に入らない。

代わりと言っては何だが、金属同士が打ち鳴らされるような反響音がホテル一室へ響く。英雄の一撃が只のホテルの窓に齎す結果として有り得ない音に彼女が驚く中で。

「これは私の不手際だな。——蠅たかりのペテン師野郎め」

どう言うマジックか知れないが、このラブホテル全体を結界で包囲しやがったと。忌々しい声と共に、フローリングされた床と壁全体が肉々しい色合いへ変わっていった。

ザアアア……。

激しくなっていく雨で視界が曇っていく空の下、白と黒色を基調とした妖美さを兼ね備えるドレスに身を包む少女の姿を模した悪魔は艶やかな唇を上向きに模る。

パラパラと回転する白い日傘に合わせ些細な異なる水音を立たせる音に混じり、その周りでは這いずる蛸にも烏賊にも似た触手で構成された魔物が蠢いている。

「フランソワ、此処に？」

その魔物に入り混じり、一人の男が居た。出目金のように眼球の半分が飛び出るような異相の男はカメレオンのような眼球運動と共に一つの建物を見据える。

「ええ、そうよジル。あそこに、例の聖処女を邪魔する輩が大事に大事に匿っている娘。ついでに守護騎士もね」

フランチェスカ・プレラーティは旧友たる英霊のジル・ドレと共に。間桐桜と其の護衛たるセフィラが居座るホテルを一望出来る一角を見下ろしている。

最初の海浜公園での邂逅。その時から間桐 桜の内に眠る素養が有象無象の魔術師達には無い稀有なるものである事は見抜いていた。

キエフでは手に余り、その色をくすませて塗りつぶし蟲の産み袋の役割のみの用途で終わらすには余りに勿体ない。さてさて、それならば自身の器の一つにしてみるかと一瞬思うものの、あの代行者もどきの英霊には別の使い道として、あの娘を所望との事だ。

（けれど、わ・た・しが。そう素直に指を啜えて放置するなんて思っただけでしよう？）

人として大切な感性が欠けた代行者と、それに良く似通った未来の代行者もどき。同類達がどのように冬木市箱庭を自分達の好きな玩具で揃えようとしているのか知った事ではないが。

自身にも目的がある。とある大迷宮の攻略、その為には願望機と呼称される冬木の聖杯が喉から手が出る程欲しい……とは言わない。有限ではあるものの、無限に近く時を永遠に過ぎす術を保有する彼？彼女？であるフランチェスカには、一般人が出来れば恰好良くて良く長く走れる車が欲しい程度の欲求が願望機に対する価値観である。それに、それとは別に欲しいものが目の前に転がってきた。

（欲しいわねえ、欲しいわ。ア・レ）

倫理が破綻しきっていると断言出来る、あいつが持つてる深き全ての流れより汲み取ったと言われるアレ。視認した瞬間に機能してる魔術回路が煮え立つような興奮に襲われた事など一体今まで捨てた器達の過程で幾つあっただろう？

そう疑問に思う位には衝撃だった。アレの正体を看破出来るもの

であれば、今回の聖杯戦争で幾つ備えていた器が消費される算段抜きに。普段自身の辞書には載せないものの、今回ばかりは半ば真剣に挑む気概がある。

そしてあの未知数思考の女は、私の魂胆を見抜いた上か。あろう事か公園の鳩にパンでも恵む気安さで自身に雀の涙程の量ながらわたした。

ああ、嗚呼！ 本当に愉快で、腹立たしい！ あの口元に薄っすら浮かべていた上向きの歪みを、必ずや私の手で真横一文字にして其の先に臨む願いを否定しきってやろうとも。

（だから、ね？ 私の私の愛しいジル）

「その娘が持ち合わせる力は、謂わば聖処女の信仰を更に輝かせ磨くもの。ジル、貴方の神流の為にも……」

「ええ、そうですともフランソワツ！ 我がジャンヌの眼を覚まさせる為にいッ!!」

（私の為に、奈落の坩堝までの道をしっかりと踊ってね）

黒く濁った気力に満ち溢れる背中に微笑みつつ、目薬よりも少ない雫の入った瓶を光の見えない天に翳しつつ。魔女はこう嘯いた。

「さて 私の作った貴方達の故郷似のおもちゃ」

出来る限り愛してあげてよ？ 守護騎士ちゃん。と邪気感じさせぬ少女めいた笑い声は豪雨の中へ溶け合った。

ザアアツ……!!

「駄目です、何度やっても通信が繋がりません」

直ぐに管理人も異変に気付いて下さると思いますが、と。待機していたエージェント達はホテルの異常を察知するや否や、規則通りにセフィラの元に集う。

E・G・Oの防具を纏い、武器を構えながら人間の体内のように肉々しい色合いと質感に変わり果てた壁と床を警戒しながらの報告に対し、落ち着き払いながらケブラーは呟く。

「当然だな。奴さん共も、こちらの弱点を知った上でか強行突破の手段を封じてやがる」

少し触れただけで、その壁全体が建物全体と繋がりを帯びている事

が解り。無理に壁を人が一人通り抜けられる程に破壊すれば全体が崩落するだろうと予想出来る。

ケブラーや重装備をするエージェント達だけなら支障は無い。然し、間桐 桜は違う。全員で彼女の壁となれば建物の崩落の影響も最小限で済ませるだろうがソレを相手が予期して無い筈もない。必ず対応した二重三重の罠で桜だけを引つ浚う事を可能にする術はあるだろう。

(となれば、地上か屋上に出て行く事が先決。……どっちだ？ あの蠅野郎の事だ、どちらの道であろうとも必ずこちらを陥れる罠が待ち構えてるのは間違いない)

ただ、その罠がどう作用するか。それが問題だとケブラーは自身の普段使用するE・G・O武器の棍棒や槍でも無い、この世界の幻想の残滓が濃い迷宮より掘り起こされた大剣。

それを構えつつ、ホテルの扉を蹴破り階段のある通路まで先頭を執る。高度な幻術か、はたまた性根がタールより濃い邪悪に漬けきった反英霊の術によるものなのか、記憶にある通りに進んでも簡単には辿り着けない。

「時間の流れも可笑しいわ。私達が付けてる時計、動かないもの」「時を止めてるって？ そりゃホクマーの専売特許だろ。それに、あいつは現在療養中だしな」

軽口を叩きながら鋭い視線が赤黒い血管の塊で出来た壁の廊下の突き当りに注がれる。無言で翳された百戦錬磨の戦士の停止の意思を伴う片腕に周囲のエージェント達の緊張が高まる。

「——出て来い、どんなに蠢く壁と床の音に混ぜても私は誤魔化せない」

ケブラーの鋭い口調に呼応するように、強い獣のような複数入り混じってるように聞こえる奇妙な空気音が聞こえた。lobotomy copと言う多種多様な怪物達を世話してきたエージェント達でも余り不慣れな音は俄かに緊張感を膨らませ、そして其の全貌が姿を現すと一人が啞然と動揺を隠さず述べた。

「……な、んだ。あれは……人が、継ぎ合わさっている、のか？」

其の姿を現した怪物は、幾つもの人体で構成された人の集合体だった。不格好に手や足が幾つもの臓器が樽のように拡張された肉壁から生やされ、幾多の胴体か何かが半ば無理やり付けられ巨大な手足にもなっている。そのような不均等で到底人体を動かすのに適してないのに関わらず動いている矛盾のままに怪物はケブラーの覆い隠さぬ闘気と殺気を受けながら歩み寄ってくる。

薄暗い通路でも、未だ肉に隠されない壁に付けられた電灯が其の怪物に生えてる頭部が誰なのかを教えてくれる。アレは、確かこのホテルに少し前に入って来たであろう恋人達だった。飲み物を買う為に通路ですれ違い、生来の不出来な為か小銭を数枚落としたのを拾ってくれた記憶がホドには皮肉ながら鮮明に残っていた。

(私なんかと、出会ってしまったから)

「ホド、迷いがあるなら桜を抱えて下がっている。エージエント共は、私が指示するまで攻撃はするな」

隠そうとしても隠せない心の揺れを機敏に悟ったケブラーは強く言い切り、其の剣を構え地面に伝うパイプ管のようなサイズの血管を割らしつつ突進して切り上げる。

恋人の内の片割れの男性の顔の半分が、その剣によって血飛沫を上げる。だが怪物の動きには何ら影響を及ぼす事なく、振り上げられた岩のような大ききの拳が振り下ろされる。

正にビルから岩石でも落ちたような轟音と地響きが繰り出された。その威力が自身に当たる想像をして身を強張らすエージエントは数名居たが、彼女が其の一撃で敗北するだろうと恐怖する者はこの中に誰一人居ない。その期待通りに女傑は、回避と同時に丸太より太い腕に剣に鋭い一打を喰らわせるものの生じた血の飛沫は思った程には空中に露出しなない。その手応えに眉間の皺が更に深まる。

「ちっ、どんないいけ好かない改造したのが知れんが。随分と私達の世界流の特異点に沿って作ってやがるな」

これがどう言った方法で造られたかは知らない。自分達が居た都市の技術によって産み出された代物に近いと本能は訴えかけている。

構成している外皮は単純な人の表皮だけのようだが。そのぶ厚さ

はゾウのように繊維が異常な密度で英霊の力であろうと簡単に切り裂き、壊す事を困難なものとしている。

まるで何千年、何万年も鍛え練度を高めきったかのようだ。恐らく変異されたのは数時間前だろうに関わらず、こんな奇怪な存在に成り果てる事が可能とすれば……。

永き時の中で、たまたま入った噂の渦中には今の相対する怪物に似た出来事があった気がする。だが今そんな話を悠長に思い出そうと彼女はしない。そして、わざわざそんな事をせずとも幾つもの人の臓器の塊で出来た敵に対しケブラーが一片たりとも怯む事は無い。

左腕を頭上に突き出し、右腕で自分の背丈近い大剣を投手が大振りでボールを投げるような姿勢で持つ。猛獣が今にも襲い掛かるような気配を発しながら駆けだす彼女に合わせるように多数の人の塊の怪物は両手を広げて迎撃の構えへ移る。そして衝突する間合いに近づいた瞬間、ケブラーは深く地面へかがむ。

今にも自分の胸板目掛け大振りの防御度外視の威力のみを重点とした攻撃を本能的に予測して構えてた怪物は彼女の想定外の行動に一瞬動きを止める。と同時に其の二つの頭部が生えた樽のような胸筋へと複数の光と爆炎が産み出された。そう、エージェント達の援護射撃だ。

無駄な動作ともとれた左腕の掲げは、予めエージェント達と仮想敵をシミュレートした時に事前に決めた合図だ。こう動いたら、自分の背後より次のタイミングで躊躇わず自身の頭部のある射線へE・G・Oを放てと。

これが技巧に長けた戦士であれば、その所作に違和感を感じて回避される危険もあるが。生前は人であれば今や己を毀す事だけに支配された肉の怪物に合図を読み解く事は叶わない。裏路地と言う魔境からc o o pの幻想生物にかけて多くの敵から生き延びた彼女の成せる技だ。

爆炎による煙が眼前で立ち込める。僅かに細められた目の中では様子は伺えないものの、背筋に駆け巡る予感に従い戸惑う事なく大剣の背に手を添えて前に突き出す。

と、同時に天井まで昇る煙の壁を突き抜けて大岩のような拳と剣がぶつかる。あえて足に力を抜かせて勢いを利用して後ろへと床に走る血管に沿うように後退した理由は武器破壊を免れようとした事も一つであったが、もう一つの理由が彼女へと追撃をする。

「——嘖ッ！」

その二つ目の理由とは吸盤と小さな棘が生えそろった一本の触手だ。それは彼女の胴へと真っ直ぐ伸ばされていたが、気合一閃の声と共に振るわれた剣で先端を斬り潰される。

不意を突いた一撃が挫けられ、そのまま突き出した時と同等の速度で縮んだ海魔の腕の一つが煙の中へ戻ると同時に爆炎の煙が丁度晴れる。

晴れた先の光景に恐怖や驚愕を浮かべる事はなく、ただ飽き飽きとした侮蔑と不快さだけを込めて吐き捨てるように彼女は呟いた。

「ゾロゾロと団体を引き連れやがって」

忌々しく呟く褐色の瞳には胸筋に生やされた人の顔に焼け焦げが目立つものの未だ五体満足な怪物と共に、キャスターの海魔、そして怪物に良く似た姿を模しつつも虫や二足動物のように人と掛け離れた姿へ改造された人の成れの果て。また、その他にも肉の怪物の手足に海魔が組み合わさった不細工でしかない姿形のものも入り混じっている。共通しているのは、こちらを蹂躪し貪る赤黒い意思。

更に通路全体にも変化が起きていた、肉々しい通路全体が脈動すると共に本来は只の壁であった部分に亀裂が走って通路を造り上げる。その新たな通り道からも、今こちらへと襲い掛かろうとする魔女と堕ちた騎士の合作の化け物と似た呻き声がこだましている事から新たな増援が伺える。

「ケブラーっ この建物全体が殆ど敵の力によって制圧されている。長時間この場所に滞在は出来ないわ！」

それには屋内自体も徐々に生体反応が見え始めてるっ」

「となれば、早々に脱出しなけりゃ。文字通りに袋、いや胃袋の鼠か」軽く空気を切りつつ付着した海魔の液を振り払いながら武器の調子を確かめる。この世界の武具としては、まあまあ良い材質で耐久力

もある方だが、如何せん海魔と肉で構成された怪物を蹂躪するまで保つかと言われれば、自信もって領ける程にはケイネスの保有する武器には無い。

徒手空拳であればケブラーの実力はアサシン程度を蹴散らすのや、下手な英霊でも屠れるが。ビナーとフランチェスカ、そして墮ちた騎士たるキャスターの合作と思しき怪物と持久戦をする為には、己の拳一つでは自分を守るのほともかく、桜を守る事は至難だ。

「方針を変えるべきだな」

「ええ それじゃあ、お願い」

ホド、ケブラーと長年良い意味でも悪い意味でも付き合いは人の一生を超える時間で共に居る者への呼びかけに含む意思を早々に彼女は悟れた。

抱えてた桜を投げ渡すと共に己自身が所有していたE・G・O weaponを構えてエージェントと共に陣形を組むホド。

行って！ と大声で武器を翳し怪物達へ前進する彼女と同時に交差しながら、音もなく片腕で受け止めて小脇に抱えると共に紅い戦士は血液の浸食する別通路を疾走する。

彼女達の第一に優先するのは自分達が生き残る事でなく桜の生存、それが第一。

自分達は以前も今も仮初の命な事は変わらない、いま生きている命を絶対に守り抜く。

「さあ、来てみなさい。言っておくけれど、昔と違って今の私は甘くないから」

その声色は決して虚勢では無い。英雄王の去り際に呟いた声と違った芯の伴ったものが背後で己と共に鋭気の革靴の呼応を受けつつ、ホドは武器を掲げ腐肉の怪物の群れへ駆けた。

薙ぐ

潰す

払う

伐る

打つ



刺す

断つ

斬る

まるで建物の形をした人体の中のように入り組んだ通路の中でケブラーは眠り姫を抱えて脈動する細胞管のような部分から出現する肉の怪物を息一つ乱さず屠り続けた。

ピキツ……ツ

「ちっ」

だが、無尽蔵の体力を内包する鬼神の如き彼女に現代の神話に及ばぬ幻想の武具は並び立てない。何度目かの肉達磨の人の成りそこないに振るった大剣の柄に近い場所から

嫌な罅の生える音が聞こえた。舌打ちと共に一瞬立ち止まり、背後から襲い掛かってきた四足歩行の何かと人の形の内蔵が融合したものを蹴り上げて天井の染みと化す。

其処で、不意にラブホテルと人の肉と海魔の合作通路の襲撃の嵐が静まった。在庫が尽きた訳でない、こう言う時は得てして都市の風情を知るものならネズミを

纏め上げる山犬が出張ってくるまでの合間と称するであろう。そして、時代も世界も場所も異なれど猿山の頭が出張る時の機会とは奇しくも似た感じだ。

先より現れる巨大ヒトデの触手が包み込まんとするように、コープの中で何度か目にした事あるツール型の書籍を抱えつつ誰かが出現したのを見ると同時に彼女は

躊躇も名残惜しさも一片なく清々しい程に抱える桜には一切の重力を感じさせない技巧を用いつつ大剣を投げ槍のように其の存在へ向けて投擲した。

充満した汚染しつつある大気を切りながらアルビオンの大剣は出現した何者か目掛けて大砲の弾丸を思わせる威力で音速に達しかねない空気の悲鳴を靡かせて迫る。

然し、着弾は叶わなかった。その人影に残り数mと言う距離で壁から生えた建物の支柱程度の大きさの肉と骨で構成されたものが蜘蛛

の巢のように一瞬で張り巡らされ

アルビオンの剣は其の防護壁を大きく損傷させる事に成功はしたものの、血が混じった粉塵が晴れた場所から現れた魚眼の大男の体には傷一つ生じてなかった。

「おお、なんとも粗暴な。やはり、フランソワの言う通り。人の形でありながら意思を会話に載せる事もなく、見るや否や喰らいつかんとする其の様は獣同然ですね」

嘲りの口調を滲ませ、血と骨肉の表紙を撫でつつキャスターことジル・ドレの出目金のような焦点は無言で彼を睨む彼女が抱える少女に注がれている。

両手を開き、彼は謡う調子で告げた。

「——おどきなさい、神流の果てに聖処女を得る為にも。貴方がたが守るその娘には贅になって貰うのですから」

フランソワの策の中で踊る彼が聴かされた極々単純な内容であった。

曰く、彼女が譲った彼の宝具と同じものを所有する例のバーサーカーは未来の存在。そして、彼女が庇護する少女こそ、聖処女を復活させるにあたっての逸材である。

決して全て出鱈目と言う訳でない。間桐 桜の属性は滅多に魔術師が発現しない類を見ぬ物であり、やりようによっては聖処女を現世に顕現させる方法の一つとして有効活用可能だろう。

とは言え、フランソワにとってキエフの玩具としてボロ雑巾と化してる娘が如何に珍種の魔術師であっても旧友の願望として犠牲になるか免れるか正直どちらでも良い。

大事なものは、この流れ。キャスターと言う暗黒面に堕ちた騎士がセフィラの……否、終わりゆく最期の時代で決して折れようとも光の為に文字通り剣として生きた存在と交差すると言う事実こそが要。

その衝撃により微かに抱えられた小柄な少女は身じろぎ、瞼を開眼する。その変化を知ってか知らずか、黙してケブラーは周囲の牢獄となす肉が啼く中で懺悔の棍棒を片手へ発現する。状況が少し変わったからと言って何も変わらない。

死肉の装丁を胎児を片手で抱くようにしながら、澱んだ蒼が見える伸ばしに伸ばした鋭い爪を指揮棒のように動かす魚眼の騎士の動きに合わせて彼と彼女が合作した愛の檻の格子が縦横無尽に襲い掛かる。

その執拗に相手の臓器を抉ろうと執拗に迫る腐肉の触手を掻い潜れる実力は顕現しているサーヴァントの冠ではランサー・セイバー。チャリオットや無尽蔵に貯蔵された宝具を駆使すればライダー・アーチャーでも強引に打破出来るだろう。

狂戦士として現世に降り立つケブラーの実力を遺憾なく発揮させれば、この悪趣味な赤黒の裏世界染みた世界を強引に打ち破るのは可能だ。だが再三となるが護るべき存在の脆弱さは彼女が暴れば、その余波を間違ひなく受ける。

自然と動きに制限はかけられ、極力幼児の体に深刻な影響を及ぼない衝撃と負荷に意識を割きつつ屍肉の突拍子のない刺の鞭や破城槌めいた兵器を紙一重の間隔で掻い潜る。

「ははははっ！ 随分とまあ粘りますね！ さながら、その姿。死にかけにも関わらず足を必死で掻くネズミのようだ！」

「はっ、物心ついた頃の生計は『ネズミ』当然だったさ」

軽口を叩く余裕はまだある。だが、次第にじわじわと状況が悪くなっているのは言うまでもない。

キャスターとして現界しているジル・ドレに少しでも間合いに入れば。その首を捕るのに全盛期よりも幾らか力が衰えてる彼女でも数秒は掛からないが、その数秒を作る機会が何とも悩ましい。

如何に精神が汚染されてるとは言え戦略を見据える知見は鋭く、対峙してる己の力量と彼自身の差が大きい事を承知の上で徹底とした援護が入らない長期戦を強制している。

どれ程にタンパク質の塊か何かの暴力的な嵐を掻い潜り迫ろうとしても、間合いに入るか入らないかの直前で憎々しく肉々しい結界の生成者は魔術的な転移の要領で距離を離していく。壁の端に追い詰めようともしてみるが、空間にも作用する魔術が出来ているのだろう。どうやっても、その魚面に一太刀を浴びせる絶好の機会が寸での

所で黙阿弥になつてしまふ。

本領発揮が出来ないよう桜と言う存在を枷とするのは目の前の半漁めいた魔術師の独力での機転か裏で飛び回る蠅を彷彿とする魔女のアイデアかは不明だがジリ貧である。

タンツ……ツ　ズリ……ツ、

「!?　っ」

「おほほほほ!!　予想以上に生き延びたが、これにてファイナーレで御座いまあすっつ!」

数えるのも馬鹿らしい回避行動、慣れすら覚えたのは油断だったか？　不味いと感じた時には抱えてる少女を中心として重力が血管の走る床に働いていく。

ぬかった、と歯噛みするものの地面に形成されていた血のぬかるみに足を滑らせ体勢を崩した間抜けさを見逃す程に甘い相手では無い。懺悔の名の武具を解除し、その片手で嫌な水音を立てながら地面に倒れ込む前に支えて抱えてる桜が勢いのままの自分の胸板と地面に潰される最悪の事態は避けたものの次に起きる不可避の攻撃を躲すのは正直難しい。

(全力で奴に突撃……いや、駄目だ。どんなにシミュレートを浮かべても最低　数手遅れて桜を肉の触手に囚われるか貫かれるヴィジョンしか見えない)

フェル　マータ！　と言う興奮と複雑な感情入り混じった喜悅の叫びと共に頭上付近から降りかかる殺意の本流を知りつつも、光ない瞳で自分の頭越しに見えているだろう幼い子の顔に

その降りかかってくるだろう存在への恐慌、恐怖、そう言った感情すらも無い事が不思議にも紅蓮の戦士には背後から伝わるものより少女の欠落した顔が心底気に食わなかった。

(たくっ　本当……私らしくない感情だ)

その人形のような体に対して両腕が伸ばされるのと。

引き絞って今か今かと弦が切れそうな程に伸ばされた夥しい肉の杭の雨が桜に覆いかぶさるケブラーの背中に振ったのは。

ほぼ、同時……。

「はあ……まったく、何でぼく いや、私がこんな事をしなくちやいけないんだ」

ウエイバー・ベルベットの心境は大いに不平不満であった。普段ならば内に隠す感情を小声で息つくような調子で延々と漏らす程には彼のストレスは人生で三位に入る程度に感じていた。

あの生まれて初めて目撃したサバト。その中で奇跡的に生き残っていた子供たちを保護しライダーとバーサーカーの宝具で教会に一旦預けたまでは良い。キャスター討伐こそ出来ずものの陣地の破壊、及び人命救助をした事は監督役たる璃正神父より褒められ心証良かった。今後、聖杯戦争で勝利は目指すものの脱落するような事があれば保護をすると快諾の言葉を貰ったのは、こんな青二才が此度の戦争で榮譽を獲得出来ないと迂遠に揶揄されてると感じるより誇らしさを感じてしまうのは偏に神父の人徳の成す業なのだろう。

そう、そこまではケチは付かなかったのだ。子供たちの身元も直ぐに割れた……そう、今のところ自分の腰元に決して離れないと服の端を伸びるを構わずしがみつく褐色の子供を除き。

「だあゝゝゝっ もう！ いい加減離れろってばっ、生地が伸びるって！ 時計塔で私が気に入ってる一張羅なんだぞっ」

「はっはっは！ 坊主っ 一々その程度の事で苛立っては我が家臣の振る舞いには到底及ばぬぞお！」

「お前も笑ってないで少しは手を貸せよ、ライダー！」

ライダーの天牛に駆け、暫くして平衡感覚が麻痺すると言う悲しくも慣れてきた感覚に陥りかけた時、戦車の隙間に縮こまるようにして

自分を感情のない顔で見上げる子供の瞳と視線がかち合った瞬間は、ホラー映画さながらに悲鳴を上げて危うく男としてあつてならない粗相をしかけたのは真新しい極東に入つての悪夢のメモリーに追加した一幕。

最初は旋回して教会の神父に身元不明の、キャスターの工房の生き残りの日本人の少女には見えない容姿の娘を引き渡そうとはしたのだ。

だが、駄目だった。どんなに離れさせようとしても梃子でも動かないとウェイバーの腰にしがみつけばかり。

璃正神父が説き伏せても、菓子なり何なりであやそうと色々してみたが効果は無し。最後の頼みの綱のライダーは笑つて眺めるばかりで役には立たず。本当にこいつはウドの大木だとキャスターの工房の通路で海魔を薙ぎ払った勇猛果敢な光景で少しは印象を見直しかけたのも斜め下へと戻っていく。

「たくつ、喋れないし身元を証明するのは何もない。こっちは一人でも手一杯だつて言うのに」

マッケンジー夫妻には何と説明しようか？ ライダーと人種も違うけど、ぎりぎり親戚の子つて事で通じるか？ と自身の暗示が一般人に破られる筈は無いと思つてるものの、流石に大所帯になれば周囲も変に感じて其処から他の、キャスター見たいな危険な輩に目を付けられないかとウェイバーはついさっきまで居た地獄の恐怖を切り替えられる程に心は強くなり、しゃがみこみ頭を掻きむしる。

ポンツ　　サス　　サス

そして、掻きむしつて数秒経過で妙に紅葉のように小さい柔らかなもののが頭の中心を摩るのを感じて両手を止めて頭に乗つてる手の先に首を向ける。

「……………うあ」

そこには件の悩む元凶が片腕を必死に伸ばして自分の頭を撫でつけてた。思わぬ心遣いに一瞬だけ亡き母を思い出してしまうのは、それだけ心が弱くなつてたからか。

「は？　なんだよ、お前。……………慰めてるつもりか？」

「うっ」

赤ん坊のように舌たらずな音だが、彼女なりに助けた自分に恩返ししたいと想ってる事は未熟な彼にも理解出来た。

（まあ、あんな目に遭ったんだ。よく知らない大人の傍は怖いんだろうな……僕だつて、こいつの事なんにも知らない訳だけど、こいつには僕しか居ないんだ）

何も考えてない、吸い込まれるような瞳を見てると先行きに不安を感じてたのも何だか馬鹿らしくなり大きく一度吐息をつけて意識を切り替える事が出来た。

（仕方がないか。最悪、ライダーが倒れたら直ぐ教会で保護を求めて時計塔に帰るまでの間の付き合いだ）

「ちよつといいかい？」

そう声を掛けられ、ウェイバーは無意識に自分の体に引付く少女を体に隠すようにして声の方へ向く。

其処に居るのは独特のスーツで時計塔の教材や文献では見たこともないような幻想の武器を背負い、その武器に全く似合わないオーダーマイドなスーツを着こなす外人。

バーサーカーの宝具から招来された部下。その身のこなしは現代に溶け込んでおり、魔術的な探査はともかく諜報活動などはアサシン以上に期待出来るのではなからうか？

無制限に召喚可能と思える怪物達。更には従順な部下と言う万能な力はウェイバーも少し羨ましく思えたが、次に彼が告げた言葉に、そんな浅ましい感情も消え去った。

「管理者から一報受けていてね。あの方は君の師であるアーチボルト氏の救助に向かつてるが、それと同時にサーヴァントのキャスターと見受けられる存在が別行動してるクライアントの子供の方に向かつてるようなんだ。そちらの援護に向かう為、君たちとは別れる」

「キャスターが、お前達の守ってる子供へ……？」

自然と顔を顰めてしまう。怨敵と言う程では無いが、今回の聖杯戦争に参戦する原因となった講師であり自分の才を否定したケイネスが危機に陥っている。彼とバーサーカー陣営が手を組んでるのは初

耳だが、まあ聖杯戦争の一時同盟は戦略の一つでもあるし、バーサーカーが誰と組むのかは自由なのだ。理屈として理解はあれど感情として納得は出来ないが、まあ其処は置いておく。

問題は、ついさつき悪夢を現実工房の中で形成したキャスターの陣営が彼等の身内を襲つてると言う話。それは魔術師としても人道として見過ごせない話だ。

ライダーも、その言葉を受けて今まで浮かべてた口元の笑みを消し真顔になる。自然とライダー陣営は同時にアイコンタクトをして、続けてイスカンドルが口開いた。

「バーサーカーの家臣よ、案内せい。今宵の征服劇は海魔共だけだけでなく、それを操る魔導士を討伐してこそその終幕と言うものよ。なあ、坊主？」

「ああ！ それに令呪も結局貰い損ねてるんだ、私達が先駆けして貰うんだからな」

大見得を切ると共に、胸を張った彼は自分の服の裾を握る幼女に傳いて少し眉を顰めつつ、此処に残つてていいんだぞ？ と告げるものの、その置いていく提案には瞬時に首を横に振るばかり。

再度大きく吐息を吐いて、小さな手に同じく手の平を載せて握り、宝具のチャリオットへと乗り込む二人の若い男女とライダー、そしてバーサーカーの家臣が教会より天空の雷鳴と呼応して古代戦車の神牛が飛び去る際の雷気が大気に響き渡る余韻が去っていく。

それを影ながら見守る視線があるとは気づかず。

「彼らは間に合うと思うかね？」

「新たになぞらえる譜面の音に従うならばな」

光すら吸い込みそうな無機質な黒色を宿す女の言葉に、神父は首を軽く撫でつつ嘯く。

「君を疑う訳ではないが、その者は今や朽ち果てた名残に近いのだろうか？ 大敗を喫す事はなくとも、浅くはない傷を負う心配もないと？」

言峰にとって話と断片的な視覚情報のみで知識にある終末に近い文明の希少な英雄が中世時代より残る悪声を轟かす魔導士に打ち



勝てるのか定かでない。

その言葉に、孔雀のような外套を撫でて言い切った。

「疵には二種類があるのだよ、言峰。一つは罅と化し、いずれ壊れるもの。もう一つは……」

——その痛みを新たな熱として、やがて宝玉へと至らんとするものだ。

「……………な?」

ジル・ド・レエは目の前で起きている光景を現実だと受け入れる事を一瞬拒絶した。

あり得ない。確かに、この品性下劣な館をフランソワと共に海魔の巢と化し従業員や客の大半を彼女の兵隊の材料と己の海魔の魂喰いで万全の準備、更に時間と共に無機物な建物全体も螺湮城教本の力を駆使して海魔同然の存在へと模様替えし完全に自身の制御下へ陥らせていた。

如何なるサーヴァントでさえ外側から侵入するのは困難であり、一般人であれば吸収。内部に居るものは当然ながら自身を除いて如何なる強固な怪物であれど固有結界と称して良い程の自身に優勢なる空間の中で捌り殺しにされる。それが当然であると疑ってなかった。

バーサーカーの兵隊と、そのリーダーと思しき者。そのリーダーの片割れは分断されフランソワの培った外法で造られた軍勢に窮地に徹され、そして贄となる少女毎、守護騎士たる顔に創を宿す紅蓮の戦士は自身の目の前で天井より産み出した触手の槍で串刺しになった筈だ。

なのに 嗚呼 なのに!!

「何故だ、何故だ何故だ何故だ何故だあゝつ!! 何だ、その姿は!?!」

赤い霧

そう、声が轟いた。少女を抱え棒立ちで武具も何もなく海魔達の夥

しい刺が生えた手の群れに晒され無傷で居られる保証など無い。

なのに関わらず、起き上がったその姿でただ一つ変わった所と云えば、聞こえた通り霧……そう彼女の衣服の上より鎧のように纏われている血よりも鮮やかな色合いの赤を帯びている事だけ。そんな吹けば掻き消えそうな霧によって宝具の海魔の攻撃が阻まれている。ジル・ド・レエの常識からすれば、あり得ない結果としか言いようがなかった。

正規の魔術師では無い、かと言って相手の身に着けるものが魔力を有してどうか看破する力量をジル・ド・レエは備えている。その彼の眼力は、彼女を覆う霧そのものが魔術やソレに連なる力でないとは何度注視しても脳はそう回答を導き出していた。

ゆつくりと、その霧と共に前進される。血が出そうな程に歯を噛み締めつつキャスターは海魔の連撃を続け始めた。だが、先程までと違い状況は一変された。

たかが霧、ただの魔術とは異なる霧の鎧一つ。それなのに関わらず、海魔達の攻撃は歯が立たず自分自身が如何に飛び退いても徐々に、徐々にその距離は縮まっている。

（有り得ぬ、有り得ぬ！ 聖処女には決して一度たりとも彼女の身に訪れなかった奇跡が、目の前の獣同然の女には降って沸いたとでも言うのか！）

ジル・ド・レエには認められない。神の愛、神の御業は決して彼が愛する存在を救おうとはしなかった。なのに絶対の敗北が約束された目の前の戦士に神の祝福が訪れると言うのならば、この目の前の女が彼女よりも神々の寵愛を一心に受ける資格があるとでも言うのか!?

「認めぬ、認めぬぞおおおおおおあああああああ嗚呼ああああああああ!!!」 ジャンヌうううううううううううううううううう!!!」

彼の歪なる精神の起点に触れる事実には、攻撃は苛烈になれはすれど粗は生じる。それを見逃す程に、彼女は甘くない。

——ザンツ!!

「あゝ……」

「ちっ……浅いか」

肉の杭の生えた木々をいつの間にか抜け、桜を抱える手とは別の手より産み出された多くの眼球が生える、この空間に似つかわしさすら感じる大剣が何時の間にか彼の知らぬ間に握られ、その刃は魔導書を持つ片腕を大きく切りつける。ケブラーは不満な声を出すものの、その片腕をぶらんと垂れ下げ、わなわなと口震わせるキャスターは体以上に心に大きなダメージを受ける。

「嘘だ……嘘だ嘘だ嘘だっ。私は、私はジャンヌの為に神流の数々を成した！ 今更、神の御業が現存するなど、有り得ぬ、有り得てはいけないのだあ!!」

お前の存在は……邪魔だあ!!

魚眼から血のような涙を流し怨嗟の声を迸る闇に堕ちた騎士に対し同情も、敵意も、関心も無い。だが、それに反応するように喘鳴が腕に抱える方面から聞こえ舌打ちをする。

この空間は常人にとっては拷問と変わらない毒で出来た大気で形成されている。自身の霧に近いだけあつて影響は微々たるものだけれど、その鎧を形成する前に変貌していた館の気体を意識覚醒前から吸っていた桜には遅れて影響が出始めている。長居は無用、一刻も新鮮な外気が居る。

「二人でそうやって喋ってる」

不幸中の幸いなのは、自身の一撃によって精神が不安定になった彼の意識が結界同然の館にも影響が出たようで天井付近にも亀裂が生じた事。

それを確認すると共に躊躇なくケブラーは身体能力に任せて血管で出来た床を砕け散らせつつ跳び、その亀裂を眼球の生えた大剣で斬りつけ空間を広げ屋上へと着地した。

待て！ 少女を置いていくのです！ と絶叫する魔導士の声が背中を追うが振り向く事は無い。激しく雷鳴と豪雨の降る最悪な天候の下であるものの、先程の肉料理が暫く食べる事が出来なくなるような光景の屋内と比べれば雲泥の差だ。先程まで通信障害のあったが、屋上に到達すると共にノイズ混じりで自分に呼びかける声が耳を打

っ。

『ケブラー！ この空間に突然揺れと共に隙間が出来たわ。いま一階の裏口部分にエージェント含めて全員脱出した！』

そうか、とホドの声に内心安堵を込めて短いやり取りと共に桜の安否を確認する。体に外傷は無い、ただ咳き込みと顔色は余り芳しくない。

逃がしはしません！ と下から咆哮と共に幾つもの枝分かれしている肉の舌が伸びて来る。斬り払うのは造作もないが、屋上の四方の金網であろう部分が錆びて腐肉の匂いと形に変わっていく事からも小癩に包囲網を作り上げようとしていくのが解る。

この身に纏う霧が何処まで持続するかはケブラーにも定かでない。一気に力を込めて最短でホテルを半壊させようと外に突破を考えた時、頭上から稲光と共に雷光が生じて屋上から染み出てこようとした触手を含めて半ば完成していた肉の檻が砕けていく。

— A A A A A L a L a L a L a L a L a i e !

「たくっ、もうちよい静かに登場出来ないのかよ」

頭上より降り立つ雷鳴を化身と化したかのような神々しい牛と、それを引くのに見合った大柄な英雄。そして少し吐きそうな顔で台座より上半身を出す若者。その背中を心配そうに摩る桜と同年代と見受けられ、それでいてc o o p内で何度か組手した存在と近しい気の少女。ライダー陣営は遅ればせながらも英雄の救出の為にはせ参じたのだった。

「控えい、控えい！ 王の御前である！ と、申しても誅罰すべき魔物と使い手には響かぬ言葉だな。おお！ そなたがバーサーカーの家臣たる騎士の長と呼べるものだな！ お主の英雄譚は掛ける最中に案内人から聴いて是非とも我が家臣に引き入れたくなったぞおっ」  
「そう言う話は、生憎だがクライアント（管理人）に話を通してくれ。私はフィクサー（便利屋）なもんなんぞでな」

「フィ フィクサー（黒幕）だった？ お、おいライダー、こいつヤバい奴だよ 勧誘なんて止めるってば」

異なる文化の言語で、ちよつとした喜劇が生じるものの直ぐに二人

の英雄は保護してた少女をチャリオットの安全な場所へ移動させると共に壊した入り口を見遣り、少しでも敵影があれば叩こうと身構えるものの既に其処にあるのは引き潮が如く覆われた血管が消えていくと共に徐々に腐食が見え隠れ、魔術の影響で廃墟化が目立つラブホテルへと戻っていく光景だけだった。

「ふうむ、撤退の速さばかりは、中々どうして余も認めざるを得ん」  
「感心してる暇があるなら、早くガキを管理人の居る場所に連れてやってくれ」

「うわっ、この子だいぶ酷い熱だ。ライダー！」

騒ぎがてら、サーヴァントと言う存在になって高まった視力は遠方よりこちらへ向かう管理人の姿を認めた。待っていても、ものの数分で合流可能だろう。

(……見られていたな)

自分の体を覆っていた霧が解かれ、手に持っていた初期の幻想の武器も同時に消えていく。そこで、ようやく僅かな怠さを覚えると共に何処かより感じる視線も消えた。

その視線に心当たりは、ある。十中八九そいつであろうと確信は持てている。だが、その正体がここまで明け透けに自身に自分をアピールすると言う事が歴戦の闘士である彼女には小骨が引つかかるように、どうにも拭えぬ違和感を抱えていた。

そして、自分自身の変調にも改めて深刻さを感じ始めていた。段々、この少女を護ると共に自分の中に燃え盛る炎が日増しに膨らんでいく事も。

(それでも、だ。私のする事に変わりはない)

管理者がこちらに来るのを少し待つ時間。地面に降り立ち出迎えたホド達に軽い労いの声を掛けると共に少々煩わしさすら感じるライダーの勧誘や職員がウェイバーを子供扱いするような態度で彼がその態度に過敏に反抗的になる微笑ましさも感じる諍いを後目にケブラーは考える。

(例え、あいつが人類を終わらす切っ掛けだったとしても。その目的は決して、穢れた意思に沿ったものでなかったんだから……)

緋色の想念は、歪な愛の檻を打ち破り目出度く帰還した。  
然し、雨の勢いは未だ衰えない。その雫は、冷たき世界は胸に抱え  
る猛炎をも鎮めるのか……。